

「核不拡散体制の成立と安全保障政策の再定義」プロジェクト

沼田 貞昭 オーラル・ヒストリー

(元駐カナダ大使)



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学



沼田貞昭大使



田中総理・ニクソン大統領会談（1973年7月）



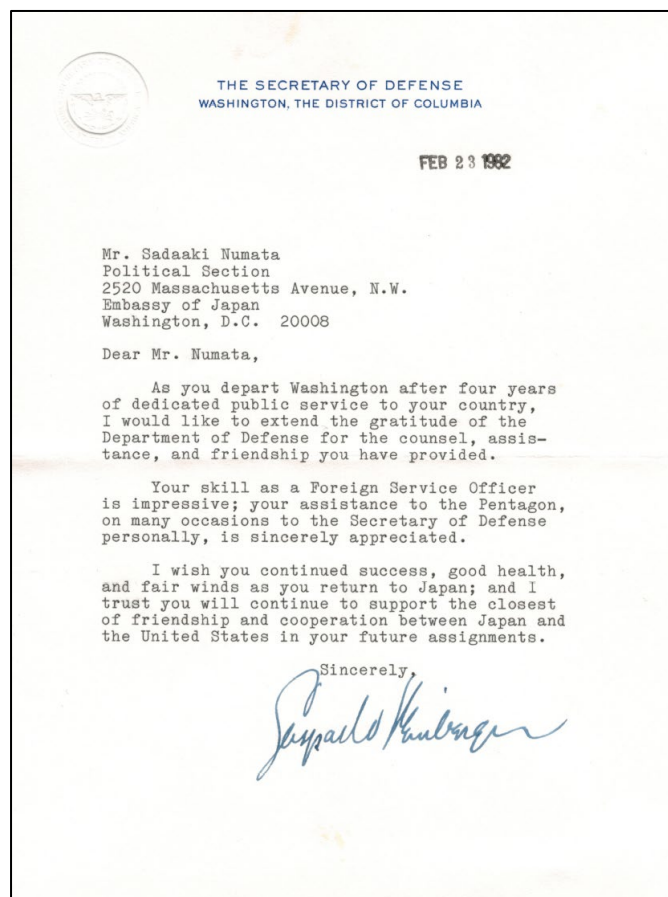
三木総理・フォード大統領会談（1975年8月）



大平総理・カーター大統領会談（1979年5月）



鈴木総理・レーガン大統領会談（1981年5月）



在米大使館離任の際のワインバーガーからの書簡（1982年2月23日）



コベントリー大寺院「和解の儀式」（1997年10月5日）

〔Photo reproduced with the permission of Coventry Cathedral〕



G8 ケルンサミット内外記者会見（1999 年 6 月 20 日）



小渕総理訪中内外記者会見（1999 年 7 月 9 日）



森総理パキスタン訪問時のムシャラフ行政長官との会談（2000年8月21日）



小泉総理訪加・ハーパー首相主催晩餐会（2006年6月29日）



カナダでの河村晴久一座能公演、ミカエル・ジャン総督および夫君（2006年11月13日）
〔写真：在カナダ日本国大使館〕



天皇・皇后両陛下カナダご訪問・総督邸歓迎式（2009年7月6日）

〔Photo credit: GG2009-0315-015.Jpg, 6 July 2009, Rideau Hall, Ottawa, ON, Canada〕

略 歴

- 1943（昭和18）年 兵庫県生まれ
- 1962（昭和37）年 東京大学入学
- 1966（昭和41）年 東京大学法学部第三類卒業後、外務省入省
- 1968（昭和43）年 オックスフォード大学修士
- 1968（昭和43）年 在英大使館三等書記官
- 1970（昭和45）年 経済協力局経済協力第一課
- 1972（昭和47）年 アメリカ局北米第一課
- 1976（昭和51）年 在インドネシア大使館一等書記官
- 1978（昭和53）年 在米大使館一等書記官
- 1982（昭和57）年 経済局国際機関第一課長
- 1984（昭和59）年 北米局安全保障課長
- 1985（昭和60）年 北米局北米第一課長
- 1986（昭和61）年 軍縮会議日本政府代表部参事官
- 1989（平成元）年 在オーストラリア大使館公使
- 1991（平成 3）年 大臣官房報道・広報参事官
- 1992（平成 4）年 大臣官房報道・広報審議官
- 1994（平成 6）年 在英大使館特命全権公使
- 1998（平成10）年 大臣官房外務報道官
- 2000（平成12）年 特命全権大使 パキスタン国駐箚
- 2003（平成15）年 沖縄担当大使
- 2004（平成16）年 特命全権大使 カナダ国駐箚
- 2007（平成19）年 在カナダ特命全権大使より退官

「核不拡散体制の成立と安全保障体制の再定義」プロジェクト

沼田貞昭 オーラルヒストリー

目次

沼田貞昭 略歴

はしがき	1
編集における注記	2
☆ 外務省入省—若手外交官として—	5
生い立ち	9
米国留学	11
東京大学時代	18
外務省入省	23
オックスフォード大学での研修	26
在英大使館での勤務	35
経済協力第一課	37
インドネシア大使館	42
☆ 日米首脳会談—通訳の立場からみえたもの—	49
田中・ニクソン会談（1972年8月、ハワイ会談）	52
田中・ニクソン会談（1973年7・8月）	55
三木・フォード会談（1975年8月）	57
大平・カーター会談（1979年5月、80年5月）	58
鈴木・レーガン会談（1981年5月）	60
田中角栄	64
宮澤喜一、大平正芳、福田赳夫	66
通訳という仕事	68
2つの日米発表文書	69
第1回サミット—ランブイエ・サミット—	72
東京サミット	74
北米第一課の業務	77
昭和天皇訪米	81

1970 年代後半の日米関係……………	83
◇ 在米大使館政務班—1970 年代後半から 80 年代前半の日米関係—……………	91
在米大使館—日米両国の陣営—……………	94
「思いやり予算」の対米説明……………	98
カーター政権での防衛費 GNP1%問題……………	101
レーガン政権での変化……………	104
イラン革命とソ連のアフガン侵攻……………	112
鈴木総理訪米時の「同盟」問題……………	115
日昇丸事故、ライシャワー発言、武器輸出協力……………	118
米中国交正常化、レーガン政権の対中政策……………	130
韓国に関する米国との協議……………	138
東南アジア情勢……………	140
米ソ軍備管理交渉……………	142
◇ 北米局安全保障課長—1980 年代前半の日米関係—……………	153
経済局国際機関第一課長……………	158
安全保障課長着任当時の日米関係……………	163
栗原祐幸防衛庁長官訪米欧随員（84 年 9 月）……………	166
加藤紘一防衛庁長官訪米随員（85 年 6 月）……………	169
防衛費 GNP 比 1%枠問題……………	175
日米防衛協力（共同研究）……………	182
NLP（夜間離着陸訓練）……………	189
武器技術供与……………	194
SDI（戦略防衛構想）……………	197
FSX 問題—経済と安全保障のリンケージ……………	210
◇ 北米局北米第一課長—1980 年代半ばの日米関係—……………	213
安保課長から北米一課長へ……………	218
「ロン・ヤス」関係……………	220
日米首脳会談……………	223
70～80 年代のサミット……………	226
安倍・シュルツ関係、議員交流……………	229
ベルトウェイ内での対日批判の高まり……………	233

米国との歴史認識問題	236
「知的水準」発言問題	237
北米一課の業務	240
マンスフィールド大使	241
北米一課と安保課、在米大使館政務班と防衛班	245
日米航空協定改定交渉	247
対フィリピン戦略援助	250
ニュージーランドの核政策	252
核「密約」	255
日加首脳の相互訪問	259
 ◇ ジュネーブ軍縮代表部参事官―冷戦末期の軍備管理と核軍縮―	265
ジュネーブ軍縮代表部	270
ワシントンでの米国からのブリーフ	278
INF に関する日米協議―ラウニー訪日、レイキャビク―	279
日米軍備管理・軍縮協議	282
ジュネーブでの米国からの INF ブリーフ	290
START	297
防衛・宇宙兵器	301
ジュネーブでの日米協議の意義	303
核実験禁止	309
化学兵器禁止条約	310
在豪州大使館	316
 ◇ 外務副報道官、駐英公使、外務報道官―スポークスマンとして―	325
歴史認識問題への対応―外務副報道官として―	329
駐英特命全権公使着任	334
日英和解	337
メディアトレーニング	345
外務報道官として	349
パブリック・ディプロマシー	363
 ◇ パキスタン大使―同時多発テロ、印パ対立―	369
パキスタン大使着任	373

森総理のパキスタン訪問	376
9・11 同時多発テロ	381
同時多発テロ後の邦人保護	386
印パ関係とムシャラフ訪日	394
印パ対立と邦人保護	398
パキスタンへの援助競争	408
パキスタンでの勤務を振り返って	408
 ◇ 沖縄担当大使—日本政府・米国・沖縄の狭間—	413
沖縄大使着任	417
在沖米軍による事件・事故	423
米軍ヘリ墜落事故	428
ヘリ墜落事故後の沖縄と日本政府の状況	433
米軍基地の整理・縮小・統合	436
防衛政策見直し協議（DPRI）	438
ラムズフェルド国防長官の沖縄訪問	441
「良き隣人」「役に立つ隣人」政策	444
離任に際して	446
 ◇ カナダ大使、退官	451
カナダ大使着任	454
日加首脳の相互訪問	455
カナダ大使としての活動	462
両陛下のカナダ・ハワイ訪問	465
退官—外交官という仕事—	468
退官後	470
日米関係の歴史的展開	475
 ◇ あとがき	485

はしがき

本オーラル・ヒストリーは、政策研究大学院大学において、科学研究費基盤研究（A）「核不拡散体制の成立と安全保障政策の再定義」プロジェクト（平成 29～33 年度）の一環として行われたものである。本シリーズとしては、『数原孝憲オーラル・ヒストリー』に続くものとなる。今回は、沼田貞昭氏という外交官のキャリアを、かなり広く伺うことができた。それは、沼田氏が、長年日本の安全保障政策の様々な面に関わってこられたからに他ならない。このプロジェクトは、まずは日本の NPT（核不拡散条約）への加盟と批准プロセスを理解することから始めた。しかし、我々の研究対象はそこに尽きるわけではなく、非核保有国の道を選んだ日本が、その後どういう外交を展開していったのか、その形成と発展をも対象としている。その過程に深く関わられた沼田氏の外交官人生を、幅広く伺う機会を持つことができたのは幸運であったと思う。外務省屈指の英語の使い手として、歴代総理の通訳を務められた氏にしか接することのできなかった歴史上の場面も、数多く伺うことができた。途中からはコロナという特殊な状況の中、我々もぜひお話を伺いたいと思っていた岡本行夫氏が他界されるという悲しいできごともあり、なおさら、今伺えることは伺い、記録に残しておかねばという気持ちになった。

沼田氏の外交官としてのキャリアは、ほぼ日本が大国となり、新たな外交を展開していく必要に迫られる時期と重なっている。唯一の被爆国であり、国民の中に核兵器に関する強い感情があること、他方で日米同盟が安全保障上不可欠であり、アメリカの核の傘の下にあり、実際に冷戦構造の中で、同盟国としての役割を果たしていくことと、非核保有国として核軍縮を求めていくことは、それぞれに個別の要請があり、同時に追求することは決して容易いことではない。その中で日本の外交官が苦悩しながら、様々な選択を下してきたこと、当時の状況に関する貴重な証言を得ることができたと思っている。

毎回、こちらが用意した質問に対し、大使は関連資料を持参され、さらに自ら詳細なメモを作って来てくださった。沼田氏の熱意により、かなり密度の濃い歴史証言になっていると考える。また、外交史料館にて当時の外交史料が公開されている分に関しては、当時の資料を参照しながらお話を伺った回もある。これも、今までのオーラルではあまりない取り組みであるが、日本の外交史料公開が関係者の努力により、かなり組織的になされるようになったおかげである。これらの関連資料も、政策研究大学院大学レポジトリにて可能な限り公開したいと考えている。これらが公式の外交史料を補い、さらに日本外交の理解が深まり、今後の外交議論につながる如果能够あれば、関係者一同の喜びである。

岩間陽子（政策研究大学院大学）

編集における注記

本書は沼田貞昭元カナダ大使のオーラルヒストリーである。

インタビューは2019年4月から2020年11月までの期間に合計11回にわたって実施した。第1回から第6回（2020年1月）までは政策研究大学院大学において対面でお話をお聞きすることができたが、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、第7回（2020年7月）以降はZoomを利用したオンラインでのインタビューとなった。各回の実施日及び聞き取りテーマは次のとおりである。

第1回	2019年4月18日	生い立ち～経済協力局経済協力第一課
第2回	2019年5月20日	パキスタン大使
第3回	2019年6月14日	副報道官、駐英公使、外務報道官
第4回	2019年11月8日	アメリカ局北米第一課（日米首脳会談の通訳業務）
第5回	2019年12月9日	在米大使館政務班
第6回	2020年1月24日	在米大使館政務班、北米局安全保障課長
第7回	2020年7月31日	北米局安全保障課長
第8回	2020年8月28日	北米局北米第一課長
第9回	2020年9月25日	軍縮会議日本政府代表部参事官
第10回	2020年10月30日	軍縮会議日本政府代表部参事官、沖縄担当大使
第11回	2020年11月27日	在インドネシア大使館、経済局国際機関第一課長、在オーストラリア公使、カナダ大使、退官後

聞き手側の事情もあり、第2回のパキスタン大使時代、第3回のスポークスマン時代のように時系列を離れてお話を伺った回もあるが、本書では読みやすさを重視し、ご経歴にそった章立てとした。また、在米大使館政務班時代、北米局安全保障課長時代、軍縮会議日本政府代表部参事官時代は回をまたいでのインタビューとなったが、編集上、それぞれ一つにまとめなおしてある。そのため、11回のインタビューに対して本書は10章立ての構成となっている。各回本文の冒頭に付してある質問票の順番もそれに合わせて編集しなおしたが、質問内容や参考情報などはインタビュー時から変更を加えていない。

オンラインでのインタビューとなった第7回以降は、大使が作成された詳細なパワーポイントを画面で共有していただきながらお話をお聞きする形となった。本文中でもスライドの内容に言及している箇所があるが、実際にスライドを見ながら本文を読んでいただく方が理解しやすい部分もある。使用したスライドはすべて政策研究大学院大学のリポジトリに保存してあるので、適宜そのデータを参照していただければ幸いである。

また、大使が通訳を務めた日米首脳会談の記録や聞き取りにあたってインタビュアー側で準備した外交文書、大使から提供していただいた資料（首脳会談に関するメモ等）も同じ

くりポジトリに保存してある。このうち、1970～80年代の日米首脳会談・外相会談の記録は「データベース日本外交史」にも掲載されている。

インタビューを行ったのは岩間陽子（政策研究大学院大学）、吉田真吾（近畿大学）、武田悠（広島市立大学）、白鳥潤一郎（放送大学）、合六強（二松学舎大学）、高橋和宏である。パキスタン大使時代の第2回には栗田真広（防衛省防衛研究所）、歴史認識問題を含む副報道官から報道官の第3回には岸俊光（毎日新聞）にも加わっていただき、編集に際しては小南有紀（慶応義塾大学大学院）の助力を得た。

編集において大使にもご高閲いただいたが、誤字や脱字などが残っているとすれば、その責任はすべて編集者にある。

高橋和宏（法政大学）

沼田貞昭オーラルヒストリー ①

外務省入省

ー若手外交官としてー

質問票 1 外務省入省—若手外交官として—

1. 大使は 1943 年にお生まれになり、1966 年に東京大学法学部をご卒業されました。大使がお育ちになった環境、AFS で留学された経緯、米国での経験、その後の学生生活など、外務省入省に至るまでのことをお話しください。
-

■キーワード

- ・ 60 年安保：都立西高校の学生として参加
- ・ AFS 留学中の出来事：安保闘争に対する米国学生の見方（rioting?）、ホワイトハウスでのケネディ演説
- ・ 原水禁世界大会での同時通訳の経験

■参考：大使略歴

- 1943 年 兵庫県生まれ
- 1960 年 アメリカン・フィールド・サービス（AFS）で米コネチカット州ザ・チョート・スクールに留学
- 1966 年 東京大学法学部卒業

■参考：当時の主な出来事

- 1952 年 講和条約・旧日米安全保障条約発効（4 月）
- 1960 年 日米安全保障条約改定（6 月）
池田勇人内閣発足（7 月）
- 1964 年 日本が IMF8 条国に移行、OECD 加盟（4 月）
東京オリンピック開催（10 月）
佐藤栄作内閣発足（11 月）
- 1965 年 日韓国交正常化（6 月）

2. 1966年の大学卒業後、外務省に入省されています。大使が入省された頃の省内の雰囲気など、入省直後のことについてご印象に残っておられることをお話しください。
-

■参考：大使略歴

1966年 東京大学法学部卒業、外務省入省

■参考：当時の主な出来事

1966年 東南アジア開発閣僚会議開催（4月）

3. 入省後の国内研修ののち、大使は英国オックスフォード大学に留学され、1968年からは在英大使館で勤務を開始されます。英国での留學生活、在英大使館での勤務など、英国在勤中のことについてお話しください。
-

■キーワード

- ・ 政務班→大使付プロトコル（湯川盛夫大使、政務班の上司は柳健一→有馬龍夫）
- ・ 「プラハの春」に関する記事の切り抜き（報告のため）

■参考：大使略歴

1968年 オックスフォード大学 哲学・政治・経済修士号取得
在英大使館三等書記官

■参考：当時の主な出来事

1967年 佐藤・ジョンソン会談（11月）。両三年内の沖縄返還時期の決定
英国 EEC 加盟再申請（5月）、EC 発足（7月）、英加盟拒否（11月）

1968年 英国のスエズ以東撤退の発表（1月）
NPT 調印（7月）
プラハの春（8月）

1969年 佐藤・ニクソン会談（11月）。1972年の沖縄返還決定

4. 経済協力局経済協力第一課時代についてお伺いします。

- (1) 英国からの帰国後、大使は有償資金協力を扱う経済協力局経済協力第一課に配属されています。72年7月に北米局第一課に異動になるまでの間、経済協力第一課でのご勤務で強くご印象に残っておられることをお話しください。
 - (2) 少し時期は飛びますが、経済協力に関連してインドネシア在勤中のことをお聞きします。1976年、大使はインドネシア大使館に一等書記官として赴任し、1978年までの約2年間ご勤務されました。この間、福田赳夫総理の東南アジア歴訪時には、「福田ドクトリン」が表明されています。スハルト体制下でのインドネシアについて、ご記憶に残っていることをお聞かせください。
-

■キーワード

- ・ 各省折衝（怒鳴りあい、とくに大蔵省とは喧嘩）
- ・ フィリピン担当：日比友好道路（出張）
- ・ 韓国担当：地下鉄借款
- ・ インドネシア担当：インドネシア債権国会議（IGGI）、石油借款

■参考：大使略歴

1970～72年7月 経済協力局経済協力第一課
1976～1978年 在インドネシア大使館一等書記官

■参考：経済協力局経済協力一課の体制

経済協力局長 沢木正男（70.1～72.1）
大和田渉（72.1～72.6）
御巫清尚（72.6～74.6）

経済協力第一課長 小村康一（69.1～70.12）
矢田部厚彦（70.12～73.？）

■参考：当時の主な出来事

1977年 8月 福田総理、インドネシア訪問

外務省入省―若手外交官として―

■ 生い立ち

―― それでは、「沼田貞昭大使インタビュー第1回」を始めたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

兵庫県の生まれというふうに略歴には書かれてあるのですけれども。

沼田 これはほとんど意味ないです。生まれたときは芦屋で生まれたのですけれども、半年後に東京に来ていますから。父親が住友銀行だったものですからね。当時は芦屋にいたのかな。でも、生まれて半年で東京に来て、その後ずっと東京ですから。

―― そうなんですか。じゃ、もうほぼアイデンティティは全く兵庫にはないと。

沼田 ない、残念ながら。

―― 小学校、中学校、高校時代の――。

沼田 小学校は、小学校6年の2学期まで杉並区にいました。それから父親が札幌に転勤したのだから父親についていって、中学の1年と2年は北海道学芸大学附属札幌中学校に行きました。今の北海道教育大学附属札幌中学校に、中学2年の終わりまで行きました。これはいい学校でね、1クラス100人ぐらいでしたけど。

―― 1学年ですね。

沼田 1学年100人。そのときの僕の仲間、同級生が竹島一彦元公取委員長、その前内閣官房副長官補、国税庁長官。それから近藤駿介元原子力委員長ね。今も原子力発電環境整備機構理事長です。というようなわけで非常にいい学校でした。

―― でも、2年間しかいらっしやらなかった。

沼田 というのが、もともと東京だから、2年たったところで東京に帰りたいと。

―― また転勤じゃなくて？

沼田 いや、父親は札幌にいたんですけど、帰ってきちゃいました。

―― 残してお母様と一緒にですか。

沼田 いや、兄貴と一緒に下宿していました、短期間。そのうち、また父親が帰ってきましたけれども。それは西高に入りたかったから。

—— 受験のために中3になるときに戻ってこられた。その北海道学芸大附属というのも、これは受験してお入りになる学校ですね、多分。

沼田 だから、小学校6年の2学期の最後に行って円山小学校というのに転入して、受験して入りました。

—— 附属は小学校もあるんですか、中学校から？

沼田 小学校、中学校なんですよ。

—— あるんですね。中学で少しくラスがふえたという感じで。お兄様はそのとき何年生でいらしたのですか。

沼田 兄は、あのときはどうだったかな。6つ上だから浪人中だったかな。兄貴も西高なんですけどね。

—— じゃ、お兄さんは東京に残っておられて。

沼田 そう、受験していました。姉も東京にいました。

—— 当時の雰囲気だと割とそういうのがそんなに奇異なことではなかった。

沼田 そんな奇異なことじゃないですね。要するに、国内で単身赴任する人が多かったです。そういうケースがよくありました。

—— それは兄弟だけでお暮しになっていたというか、下宿屋か何かにいらしたんですか。

沼田 そう、しばらくの間。姉は叔父のところにいました。

—— 何かお父様から特に影響を受けたようなこととかはございますか。

沼田 あまりないですね。でも、父親も東大だし兄も浪人して東大に入ったから、何となく西高・東大というのが当然のような感じでした。

—— ああ、そうなんですか。西高にお入りになったのが、そうしますと？

沼田 本来ならば、西高を卒業するのが1961年のはずでした。1961年から逆算すれば58年でしょう。でも、アメリカ留学で1年おくれたから、西高を卒業したのは1962年になったわけ。

—— 私は関西の人間なので、時代も違いますので当時の学生を全くわかってないのですけれども、西高にお入りになりたかったのは。

沼田 というのは、当時東大に一番入ったのが日比谷高校でした。2 番目が西高だった。日比谷は何人ぐらい入っていたかな、百何十人入っていて、西高も浪人をまぜると百何十人入っていましたね。それがいわゆる学校群というのになって、西高も凋落して日比谷も凋落して、最近ちょっと盛り返したけど、そういう時代です。

■ 米国留学

—— そして、高校生の間に日米安保改定の話。

沼田 その前に、なぜ AFS (American Field Service) を受けたと思ったかということになるのですが、中学のときから英語に非常に関心を持ったというのがあるのだけれども、西高でも英語部に入っていました。その間に姉は学習院にいましたが、姉が American Field Service を受けて留学しました。その影響もあって僕も行きたいなと思って AFS を受けたということです。

—— 今でもそんなに知名度高くないと思うんですけども。

沼田 AFS ?

—— はい。

沼田 当時の方が知られていたかもしれない。そういうプログラムはあまりなかったです。当時の AFS というのは僕の同期生が日本から全部で 101 人でした。これ、全額 AFS が負担ですから、旅費も含めて。それで、アメリカの高校に 1 年行くと、アメリカにホストファミリーがいて、ホストファミリーと一緒に 1 年間過ごすということでした。それはアメリカ全土に散らばるわけですよ。姉はミルウォーキーの大変なお金持ちの家に行きました。僕もアメリカのどこか地方のトウモロコシ畑が広がっているところかどこかに行って、『アメリカン・グラフィティ』という映画があったでしょう、ああいう典型的なアメリカのティーンエイジ生活を楽しむのかなと思っていたら、ある日厚い封筒が来ました。アメリカの学校から「We are happy to accept you」という手紙が来てね。大変立派な学校の冊子が同封されていました。それを見ていてすごい学校だなと思って、でも何かおかしいなと思ってもう一回よく見たら、全寮制の男子校だということがわかりました。だから、ちょっと当てが外れました。

—— 近くに仲のいい女子高とかないんですか。

沼田 ありましたけど、それはちょっと別の話。アメリカにプレップスクール (prep school) というのがあります。ハーバードとかイエールなんかの予備軍みたいな、いくつか有名なところがあって、St. Paul's という学校もあるし Groton というのもあるし、たとえばブッシュ親子は Phillips Academy に行きました。ケネディ (John F. Kennedy) は私の学校の出身です。私が日本人で 3 人目だったみたいです。

—— 創立何年ぐらいの学校なんでしょうね。

沼田 いや、創立はちょっと知らないけど、調べればわかるけど。

—— 何という学校ですか。

沼田 チョート (Choate)。

—— 変わった名前ですね。

沼田 これに出てくるかな。所在地は Wallingford。

—— コネチカット州の。

沼田 最初に日本人で行った人は、僕はこれ最近わかったけれど、class of 1908 かな、1908 年に卒業した人が 1 人いて、彼はどういう人かよくわかりません。その後ハーバードに行ったらしいですが、その後のことはわかりません。それから、次に卒業した人は 1921 年卒業。この人は名前がわかっていて、田中元彦さん。藤山愛一郎氏の異母弟で、要するに財閥ですよ。彼はチョートを出てからプリンストンに行って帰ってきて、National Cash Register という会社の副社長を務めていた人です。彼から数えて僕は 40 年後です。だから、学校としては久しぶりに日本人を採ってみるかということになったのかなと思います。

—— それは、でも AFS の中では割とイレギュラーな扱い。

沼田 とてもイレギュラー。

—— とてもなんですか。

沼田 というのは、AFS は全世界から人が集まるわけですから、僕の年は 1800 何人いたわけですが、そういうプレップスクールに行ったのは 10 人ぐらいしかいなかったと思います。日本からは僕だけ。

—— 費用もかかりますしね。チョートスクールは 1896 年にコネチカットのウォリングフォードというところでできて、現在は共学になっております。

沼田 共学になったのは 73 年ぐらいでしょう。ウォリングフォードというのは、ニューヘイブンとイェールの近くですよ。共学になって、実はチョートの卒業生は割合有名な人がいましてね、アドレー・スティーブenson (Adlai Stevenson) がそうですね。それから俳優とかそういう人が結構いて、カーク・ダグラス (Kirk Douglas) の息子のマイケル・ダグラス (Michael Douglas)。マイケル・ダグラスは僕の下級生でした。顎のここがお父さんに似てちょっと割れていてね。全寮制の学校ですからね、メモリアルハウスというところに住んでいました。僕は最上級生 (6th Form) でしたが、上級生の役割は夜 9 時になると下級生に「Get to Bed」と叫んで回る。それを叫ばれた中にマイケル・ダグラスもいた。

—— 1 学年何人ぐらいなんですか、ここは。

沼田 100 人いたかな、そんなものでしょう。それで、僕の同級生の中には要するに白人が多いわけですよ。白人の金持ちが多いのと、あとスカラシップで来ている人ね。学業優秀というのとスポーツが優秀な人がいて、アジア人は韓国人が 1 人いましたね。彼は韓国的外交官の息子だったと思いますけれども、それから香港から来ている人が 1 人いた。それと僕だけだったと思う、アジアは。

あと外国人というのではキューバ。1959 年のキューバ革命のすぐ後でしょう。キューバの砂糖プランテーションのオーナーなどの金持ちが逃げ出してきたわけですよ。その息子たちがいてね。「打倒、カストロ」とか言っていました。そういう時代ですよ。

—— 中国とかインドとかはいなかったですか。

沼田 インドはいなかったですね。それで、黒人は 1 人いました。

—— 入れたんですか。

沼田 その黒人はラルフ・バンチ (Ralph Bunche) って御存知？国連の事務次長をやった人で 1950 年のノーベル平和賞受賞者、彼の息子のラルフ・バンチ・ジュニア (Ralph Bunche, Jr.) ただ 1 人でした。

—— なるほど。どんな感じでしたか。お一人でそういう中に。

沼田 そこに西高から行ったわけです。さっきちょっと安保と言われたけれども。アメリカに行く直前は、60 年の 4 月、5 月、6 月の安保闘争の時で、やはり都立高校だからみんなませているといつかね、西高の中でも「安保反対」との声は強かった。僕はそれほど安保反対ということでもなかったですけれども、何となくシンパシーはありましたから、デモには 1 回だけ行きました。アメリカに行くのだからデモに行っちゃいけないとは思いませんでした。

—— もう決まっていたのに行ったんですか。

沼田 もちろん。でも、僕の AFS の同期生にはそういう人は何人もいたと思う。

—— ちなみに同期生はどんな方がいらっしゃったんですか。

沼田 同期生は、きょう写真持ってきました。これはパワーポイントでもありますけれども、氷川丸に乗って横浜を出発した時の写真です。

—— 氷川丸か。

沼田 氷川丸の最後から 2 番目の航海でした。出発は 1960 年 7 月 23 日。その 50 年後、2010 年 7 月 23 日に reunion をやった時の画像がこれ。

—— おお、すごい。これはどなたがお撮りに？

沼田 誰が撮ったかよくわからないけど、同期生の誰かが持っていた。

—— 出発の光景はすごいですね。大使も御家族みなでこうやってテープを振ってくださった。

沼田 いたんでしょうね。

—— お母さんは来ますよね、やはりね。

沼田 父親もいたと思う。それで、これが氷川丸の船上。「Many were having fun. Some were sea sick!」と。これは僕がどこかでやった講演のパワーポイントです。船の上でダンスの練習とかしていたわけ。だけど、船酔いして全然出てこない人もいました。

—— 食事よかったですか。

沼田 よかったですね。

—— 全部洋食。

沼田 全部洋食。2週間いたのかな。それで、その仲間が奥さんも連れて集まったのが、50年ぶりの reunion をした時がこれで、これは横浜のニューグランドホテルでやりました。氷川丸が隣に泊まっているでしょう。同期生はたとえば大塚清一郎君、元スウェーデン大使。それから、これは僕でしよう。なぜこういう格好をしているかというのはもうすぐわかりますけれども。これは折田昌子さん、折田正樹元駐英大使の奥さん。当時は岡見さん。これは鹿野軍勝君、彼はバチカン大使でした。同期生で外務省が6人いる。ほかにも杉内直敏君はここにいますが、彼はルーマニア大使でした。

これ、誰だかわかりますか？

—— これが茂田（宏）大使ですか。

沼田 茂田元イスラエル大使。というのが同期生。これは僕の家内だけど、AFS とは関係ない。というような人たちがいた。ちなみに AFS の人で外務省に入ったのは、最初に入ったのは僕の1級上で登誠一郎大使。

—— OECD 大使。

沼田 はい。彼は僕の西高の先輩でもあるのですけど。僕の1年上が登さんで、我々の期が6人ぐらいいて、我々の1期下はたとえば国連大使やっていた大島賢三君とかね。それから、2期下は榎田邦彦君（元エジプト大使）もいたな。だから、外務省は我々に近い期というのが多いです。5年下の北島信一君（元ジュネーブ代表部大使）とかね。結構多いです。それから、外務省でなくていえば、通産省に行かれた川口順子さん。川口さんは4期生で、私の姉と同期でした。あとは大蔵省の榊原英資

氏が僕の2年上。それから AFS で僕の2期先輩だけれども、外務省で同期なのは小池寛治オランダ大使。というような人ですね。

—— 彼も AFS なんですか。

沼田 そうです。

—— 行かれる時点で、やはりそういう仕事をしたいなという気持ちは。

沼田 何となく国際関係に進みたいなという気持ちはありました。いざ学校に行ってみてやはり大変なわけですよ、クラスに押し込まれて。英語の会話はある程度できたつもりだったけど。

—— それだけでもすごいんですけど、いきなり行って。

沼田 それで、少人数のクラスでしょう。僕が実はチョートでとったのはイングリッシュとアメリカンヒストリーというのは必須なわけですよ。それから math、数学は日本で受験勉強やっているから、これは楽勝なわけですね。ちなみに僕と同じ数学とっていた、Advanced Mathematics をとっていた仲間でニコラス・ネグロポンテ (Nicolas Negroponte) という人がいたけれども、MIT のメディアラボの創始者。名前聞いたことあるでしょう？彼がいました。

—— 当時、これはいわゆる日本での高校2年生ですか。

沼田 3年。

—— 日本で高2を終わられて1年間入った。

沼田 そうそう。あと僕は、ちょっとこれはずるなんだけど、フランス語をとりました。フランス語は西高でもちょっとやっていたから。

—— ちょっととおっしゃっても。

沼田 本当に。これも楽だった。数学とフランス語が楽だったけれども、問題はアメリカンヒストリーでした。アメリカンヒストリーというのはバックグラウンドがないしね、いろいろ議論しなきゃいけないでしょう。わけわからないし発言はできないし、随分先生ににらまれたけどね。

—— ええっ、そうなんですか。当てられるのですか。

沼田 でもね、ふだんはにらまれたけど、試験になると何となく点数とった。ふだんしゃべらないけど。

—— アメリカンヒストリーというのはどのあたりから始まるのですか。

沼田 いや、最初からですよ。

—— 最初というのは、ピルグリム・ファーザーズですか。

沼田 そう、あのあたり。イングリッシュは、やはり大変でした。それから、大変だったといえば、クラスで発言するのも大変なのに加えて、食事のテーブルでの会話というのはこうやってみんな一緒にランチもディナーも食べるわけで、ティーンエイジャーがそろっているわけで、わあわあとやっているでしょう。そこへ入っていくのが大変だというのがありました。

それから、ここに 500 語作文。これ前に渡しましたっけ、きょう持ってきたのかな。ありますよね。

「500 words essay の悪夢」というのは、これはボーディングスクールだから寮にいるわけでしょう。毎週月曜日の朝の 1 時間目がイングリッシュでした、日本でいう国語ね。

—— そんな強烈に残っているんですね。

沼田 それはなぜ強烈に残っているかという、イングリッシュのクラスのとくに毎週 theme を与えられて、その theme について 500 words essay を書いてこなきゃいけない。

—— 宿題なんですか。

沼田 宿題、毎週ね。日本でもそんな作文書いたことないのに、英語で書くというのは大変でした。いくら書いても 500 語にならない。

—— 当時、数えるのも大変ですよ、きっと今みたいに数えてくれないから。

沼田 四苦八苦しましたけれども、英語の先生が非常にいい人で、僕が一生懸命やっていたらだんだん認めてくれて、成績も最初は C だったけれども、そのうち B とか何とかに上がっていきました。でも、書くのは大変苦労した。オックスフォードでもまた苦労しました。

—— そうですか。

沼田 それで次に安保の話ですけどね。当時はこういう時代でしょう。

—— はい、何か見たことがあります。

沼田 樺美智子とかね。その様子はアメリカでも報道されていたわけですよ。『LIFE』マガジンとか何かでね。僕がアメリカに行ってみたら、やはりコネチカットの割合 wealthy な suburbs の人たちは保守的な人が多いから、何で日本の学生はあんな騒いでいるのと聞かれるわけ。「Why are Japanese students rioting?」と言われて、なぜかということを生懸命説明しようとしたわけよね。その後、安保課長になるなんて思わなかったから。

—— 何か一生の仕事を背負ってしまいましたね、そこで。

沼田 そうなんです。当時は、今の jargon でいえば、「fear of entanglement（アメリカの戦争に巻き込まれる恐れ）」ですよね。「fear of entanglement」「fear of abandonment（アメリカに見捨てられる恐れ）」と言うでしょう。あのときは典型的な「fear of entanglement」だったわけで、それを我々はみんな感じていたから。

—— 60 年で、でもまだそんな、ベトナムはエスカレーションする前ですね。

沼田 前ですけれども、entanglement になるという感じはあった。

—— そうなんですか。

沼田 それで、そういうことを一生懸命説明しようと思いました。クラスの前で説明させられたりして大変だったから、やはりこういうことは誰かがやらなければいけないと思って、そのときに大体外交官になろうかなと思ったという感じですね。

—— すばらしい。

沼田 それでさっきのケネディになるわけです。1 年間終わったときに、当時の 1800 何人かな、AFS の留学生が全部ホワイトハウスに行ったわけですよ。

—— それは世界中から来た。1000 人以上いるわけですね。ホワイトハウスに入るのですか、1000 人。

沼田 ローズガーデンに入りました。みなさんに何をお送りしましたか？

—— 短い画像と音声と両方来ていました。

沼田 画像で 1 分のやつ、送りましたか。

—— はい、YouTube の動画をいただきました (<https://www.youtube.com/watch?v=BPiNb7T5Vdo>)。

沼田 あのとおりです。

—— 人がわさわさして、ここは一体どこですか。

沼田 これはホワイトハウスのローズガーデン。こういう、まさにこうだった。

—— 民族衣装とか着て。何かものすごい歓声上がっていますけど、どんなテンションでした？

沼田 やはり大統領に会うというのは大変な、我々みんな興奮しますよね。この音声で出てくるけれども、「アジアから来た人」と言われて一番声大きいでしょう。我々もいましたから。それで、そのときのケネディのスピーチの中で最後のところ。音声のところに出てきますけれども、彼がいろいろ

言いましたけれども、最後の方で——

We are now occupying a position of responsibility in the most difficult times, all of us, and therefore, once again, it is an honor as President of the United States to welcome you, who will in the coming months and years bear the great burdens of leadership in your country. And I hope it will be possible that a future President of the United States will greet a president or prime minister some years from now who stood in July, 1961 on the lawn of the White House.

と言われた。

—— 出ましたか、prime minister。

沼田 他の国にはいたかもしれない。それで僕は高校生や大学生に今時々レクチャー、講義するときに、僕は prime minister にはならなかったけれども、ホワイトハウスには 5 回ぐらい行きましたと言っています。

—— ケネディには再会できなかったですけどね。

沼田 そうそう。という話。以上が AFS ですわ。

■ 東京大学時代

—— AFS からお帰りになって、もう一度高 3 に。

沼田 高 3、半年一生懸命勉強して。

—— 夏に行って夏に帰ってきて、復学して、半年勉強して東大に入る。何かすごいですね。

沼田 いや、AFS の仲間は何人も入っていますよ。

—— 一生懸命勉強したという記憶ありますか。

沼田 一生懸命勉強しましたよ。当時の西高ですからね、大体入れるか入れないかわかるわけです、行く前の成績とか模擬試験とかでね。

—— 1 学年どれくらいいたんですか。

沼田 400 人。

—— やはりそれくらいいたんですね。

沼田 百何十人入っていたから。

—— そのうちのどの辺にいたら入れるかなみたいなのはわかるわけですね。

沼田 要するに校内の模擬試験があったし、模擬試験で上から 30 番ぐらいまでにいれば入れるわけですね。

沼田 当時の日比谷とか西とか戸山というのは、そういうことだったわけですね。

—— あとは 400 人の 30 番ですからね。やはりトップ 10%ですね。なるほど。でも、下の学年と一緒にになるわけですね。

沼田 そう。だから、下の学年の人はあまりよく知らなかったけど。

—— 帰ってきて、ひたすら勉強していたと。

沼田 まあね、悔しいからね。もう一年下がりたくないから。

それで、大学で ESS (English Speaking Society) に入りました。ただ ESS の活動は駒場のときはあまりやってないです。何をやってたかというのと、2 つあって、1 つはフォークソングに狂い始めてギターを、これに出ていたかな。

—— これも最終的に写真いただけますか。

沼田 これ、大塚君、大塚元スウェーデン大使。

—— 何を歌っていらっしゃるんですか。

沼田 これは「Greenfields」かな、我々のころにはやった。

—— 60 年代ですね。ボブ・ディランとかですかね。

沼田 あるいは「Guantanamera」かもしれない。

—— 帽子までおかぶりになって。

沼田 これに凝り始めたわけですよ。

—— 何かクラブで、同好会か何かで？

沼田 いや、ESS の仲間とちょっとやっていて、ちょうどフォークソングがはやり始めた年です。1962 年でしょう、これ。「Where have all the flowers gone? (邦題：花はどこへ行った)」という歌がはやり始めたのが 1962 年。「Greenfields」がはやり始めたのも 1962 年。僕らよりもっととても歌のうまい人たちでマイク眞木とかいう人たちが歌っていたのもそのとき。彼らはプロになっている。

—— それにしばらく熱中されたと。

沼田 それともう一つは通訳のアルバイト。

—— 広島のこと？

沼田 これはそう、原水爆禁止世界大会。

—— 広島に行く前にも通訳なさっていたんですか。

沼田 いや、始まったのは原水爆禁止世界大会です。

—— これは8月とかですか。

沼田 それはどういうことかという、原水爆禁止世界大会というのは全世界から代表が来ますから同時通訳が必要なわけで、当時同時通訳をやる人はあまりいなかった。しかも、ちゃんと訓練するようにもなっていなかった。唯一国際基督教大学で斎藤美津子さんという助教授がおられて訓練を始めて、私の姉はその弟子でした。サイマル・インターナショナルの村松増美さんがアメリカから帰ってきたのが、私が大学の2年のときでしたが、同時通訳をやる人はあまりいなかった。原水爆禁止世界大会は同時通訳が必要なので、どうしたかという、割合英語のできる、それから反応の速そうな若い人たちを集めて、ちょっとブリーフィングというか訓練というか、あまり訓練にもならないような訓練をやって、それで通訳ブースにぶち込んだ。そういう時代ですよ。そのときに、僕の1年前からそれをやっていたのが秋葉忠利君。

—— 広島市長。

沼田 彼は AFS で僕の1年上で、教育大附属から行った。彼なんかと一緒に始めて、それからいろいろなアルバイトをやっていて、そのうち村松さんがアメリカから帰ってきて、村松さん、小松達也さんが帰ってきてサイマル・インターナショナルというのを細々と始めたので、僕はサイマルに雇われて時々アルバイトをやったと。

—— アポロが月に行くんですね。

沼田 あれはまだやってないけど。西山千さんとかね。

—— でも、同時通訳って私の中ではあれが一番最初の出会いですね。

沼田 そうでしょうね、皆さんにとって。

—— 難しくなかったですか。

沼田 難しかったけど、原水爆禁止世界大会をやっていたときに先輩の通訳の人に言われたのは、

「You have a knack for sounding plausible」と言われた。もっともらしく聞こえると。

—— そういう意味。

沼田 何とかしゃべってもっともらしくしちゃう。

—— sounding plausible ね。

沼田 これは大事なことだったようです。まだ本当に正確にはできなかったけど。

—— どなたにおっしゃられたとおっしゃいましたか。

沼田 それは光延明洋さんという人でした。外語出身の英語学者で、当時はまだ大学院の学生でした。

—— ちょっと横にそれですけども、後に総理通訳とかもいろいろなさるのですけれども、メモとりのコツとか、そういうことは自分で開発なさったのですか。

沼田 自分で開発しました。

—— 今、通訳学校っていろいろなことを教わりますよね。そういうものはなしで。

沼田 それは原水協のときも何となく先輩から聞いて、何か試験された記憶はあります。何を試験されたか、英字新聞、『ジャパントाइムズ』か何かの記事を渡されて、それを sight translation する。見ながらそのまま訳していく。その次に試験官が何か言うのを聞いて、それをそのまま reproduce しろとか、その程度の訓練で実地が始まっちゃうわけ。

それから、consecutive translation のメモとりの訓練なんかは実地でやってきましたね。

—— そうですか。うまい方は本当に芸術的ですからね。

沼田 当時はまだ若かったから反応が速かったということがある。reflex だけは速かったという。

—— それでは、その後、駒場から。

沼田 法学部はもう外交官試験の受験。

—— そういうものですか、行った途端。

沼田 はい。行く前からかな、3年になるころから。

—— ゼミには入られたのですか。

沼田 ゼミは国際私法のゼミでした。国際私法に池原季雄先生という方がおられて、国際私法は何も

覚えてないけれども、外務省の試験は国際私法が入っていました。国際私法のゼミで一緒だったのは、内藤昌平君、のちのベルギー大使。

—— 東大法学部だとそうなるんですね。京大はぱらぱらしかいないので。

沼田 でも、田畑ゼミが多いじゃない。我々の世代は。

—— そうですかね。同期に 10 何人いるという、そういう状況にはならないので、ちょっと不思議な感じがありますけれども、そういう感じなんですね。おまえもか、みたいな。

だから、そうですよね。西高のトップ 10 におり、次に法学部のトップ 10 におりという話。

沼田 法学部のトップ 10 だったかどうかは知らないけど。

—— そうですか。ゼミが国際私法で、そのほかにも何かご記憶に残っている先生とか授業とかございますか。

沼田 京極純一さん。おもしろかった。でも、京極さんは駒場のときですね。あの政治学はすごくおもしろかったな。何か判じものみたいな面もあったけれども、判じものみたいな話で日本の政治の分析をされるのがすごくおもしろかった。

—— どのぐらいから話し始めていたんですかね。

沼田 よく覚えてないけど。何というか、どう言ったらいいかな、皆さんのほうが専門だけど。日本の政治学といっても政治制度論みたいなのが多かったけれど、政治家というのはどういうふうに行動するかとかね。建前と本音とかそういう種類の話。丸山眞男さんの「タコツボ」とかそういうのがあるけれども、京極さんの話というのはボキャブラリーが非常に新鮮でしたね、スパッと切れて。最近読んでないけれども、それがおもしろかったという記憶があります。

—— 本郷の先生方はいかがでしたか。

沼田 駒場のときに、僕は第 2 外国語がフランス語でした。たとえばフランス語の先生で当時まだ若かった芳賀徹さんなんかは紅顔の美青年で。

—— そうなんだ、行ってみたかったですね。

沼田 でも、フランス語の先生として知っていましたが、あんなすごい先生だとは知りませんでした、当時。だって、本当に博覧強記の方ですよ。法学部の先生で印象に残っている人は、と言われると、国際法の寺沢さんはあまり印象に残ってないですね。

—— 司法試験をお受けになるというような感じでは全くなかったんですね。

沼田 司法試験は、法律がそんなに好きじゃなかったから。ただ、公務員試験の経済職は受けました。

なぜ経済職かという、外交官試験と科目が一番共通しているのは経済職。経済学があるしね、経済原論。それから財政学があったかな。要するに外交官試験と一緒に受けるのは経済職のほうが受けやすかった。

—— 外交官試験を受けるお勉強サークルみたいなものは東大にはあるんですか。

沼田 ありましたね。何となく一緒に勉強していたというか、しょっちゅう一緒だったわけじゃないけど、時々一緒にやっていたのが阿南惟茂元中国大使ね。彼は西高の僕の先輩ですが、外務省に入ったのは僕の1年下。それから七尾清彦君って、外務省は途中でやめちゃったけれども、北米二課長、サンフランシスコ総領事になった彼。それからさっき言った内藤君とかなんかと時々一緒にやっていたということですね。

■ 外務省入省

—— 1966年御卒業というのは、これは予定どおり4年で御卒業になったということですね。

沼田 はい。それで、外務研修所に入りました。外務研修所は、4月に入って7月にはもうイギリスに行きましたから、短かったわけですよ。当時は、入所して数カ月ですぐ研修に出たわけですよ。その後、2年本省で働いてから研修に行くようになりました。かわいそうだと思いますけどね。

—— 英語が御希望だったんですね、最初から。

沼田 何語をどこで研修するかという研修地を決めるプロセスがありました。僕は実は最初フランス語で出しました。英語はかなりやっていたから、フランス語をやろうかなと思った。だから、最初、試験に受かった時点ではフランス語で出していた。そうしたら、僕の父親が旧制五高で森治樹元外務次官・駐英大使と一緒に親友でした。森大使は当時どこにおられたかな、ロンドンの公使だったかな。父親が手紙を書いて、息子が外務省に入ったと言ってアドバイスを求めたら、ぜひオックスフォードかケンブリッジに行かせろとの返事が来て、それで変えました。まあ変えてよかったと思います。

—— そうですね。

沼田 変えたんですが、そうしたら、当時的大河原（良雄）人事課長に「なぜ変えたんだ」と。

—— 絞られましたか。

沼田 絞られました。フランス語希望者があまりいなかったらしくて。

—— どれぐらいの時点で変えたんですか。

沼田 入省前に変えなければいけないでしょう。だから、年明けごろかな。だってオックスフォードやケンブリッジにアプライしなければいけないから。

—— そうですね、7月だともう、それでもぎりぎりですよ。

沼田 まあ変えてよかったと思いますけどね。それで、英国へ行くことになった。

—— 一応フランス語もずっと第二外国語としては。

沼田 ジュネーブで個人レッスンはとりましたが、カナダに行くまで実際に仕事ではほとんど使いませんでした。

—— なるほど。研修所は当時、茗荷谷にあったんですよ。

沼田 茗荷谷。研修所というか、これは『週刊文春』の記事で僕の同期の河合正男元ノルウェー大使が去年どこかで見つけてきたものですが、我々同期生で吉田茂さんのところに行きました。週刊文春の記事がそのことを取り上げて、そこに同期生の写真が出てくる。吉田茂さんに会いに行きました。次のページめくると、同期生。

—— 「昭和 41 年 6 月、吉田茂元総理に招かれた昼食会」、これは 24 名。女性ゼロですね、見たところ。

沼田 もちろんと言っちゃあれだけど。

—— もちろんって、全然いなかったですか、当時は上や下にも。

沼田 いない。ただ、一緒に受けていた人の中に最近やめられた保守派の女性。議員をやめた方。ど忘れしちゃった。

—— 自民党ですか。

沼田 自民党じゃなくて。

—— 中山恭子さん？

沼田 そう。よくわかりましたね。元外務省って御存知でしたか。

—— ええ、そうですね。

沼田 彼女と一緒に受けていた。彼女は東大仏文出身で我々より前に中級の試験で入って勤めていました。それで上級の試験を受けていましたが、外務省には受からなくて行政職か何かで公務員試験に受かって大蔵省に行かれて、そこから彼女のキャリアが始まった。

—— 吉田総理は何歳ぐらいですか。

—— もう 80 代後半でしょう。亡くなったのが 67 年なので。

沼田 総理が何言われたか、覚えていませんけれど。

—— 大磯って今でも結構遠いですけど。かなりかかりましたよね。

沼田 これ、我々の期までかな、もう 1 年下までかな、外交官試験受かって入省する人たちは吉田詣をしていました。この記事は『週刊現代』、ことしの 1 月 5 日・12 日合併号に載っていたそうです。

これで同期生の写真が出ているでしょう。24 人いました。誰がいたかという、ここに当時非常にやせていた僕がいて、それからここにさっき出てきた内藤昌平君、これは御巫清尚さん（のちのカナダ大使）です。御巫さんは吉田さんの秘書官をしておられたことがあってここにおられる。それから、官房長をやっていた浦部和好君がどこかにいたな、のちのエジプト大使。これが浦部君ね。これがさっき名前が出た小池君。それから、これが七尾君だな。これ、誰だかわかる？

—— 何か、この口元が。誰だろう。

沼田 ひげ生やしたら誰になる？ひげの野上義二君。

—— 同期なんですか。

沼田 同期。それから、これが大塚君ね。このころは一緒に歌っていました。全部で 24 人ですね。

—— これは 6 月、というのはもう在外に出られる少し前という感じですかね。頑張って勉強してらっしゃいと。

吉田さん自身は外国で勉強したんですかね。

沼田 吉田さんは外国で勉強はしていません。それで思い出した。もし皆さん御関心があれば、ここにこれは僕が書いたものですが、ロンドンのジャパンソサエティが『Biographical Portraits』というのを出しているんですよ。コータッツィ（Hugh Cortazzi）元駐日大使が去年亡くなったけど、彼から頼まれて日本の外務省からイギリスに研修生派遣というのがほぼ 100 年続いてきたのですけれども、それがどう始まってどういう人が行ったかというのを書きました。

—— 大使がお書きになったんですね。吉田さんはこの中にはいないですね。

沼田 吉田さんはいない。それで、これはこれで僕の話とは別になっちゃうけれども、結構おもしろいのはどういうことかという、1919 年のベルサイユ講和会議の時、中国はウェリントン・クー（顧維鈞）なんか非常に雄弁にやっていたが、日本は全くだめだったということを、当時の代表団にいた若い人たち、有田八郎氏（のちの外務大臣）などが非常に感じて、1928 年ごろ、帰国してから外務省を改革しなきゃいけないと言って相当上を突き上げた。その結果、外国で勉強させようという話になって、それで最初にオックスフォードに行ったのが井口貞夫氏（のちの駐米大使・外務次官）でしたが、その前に外務省の人でオックスフォードかケンブリッジに行ったのは陸奥宗光の息子である広

吉氏でした。彼は外務省の試験を受けて入ったわけじゃないけれども。というのが全部ここに書いてありますから。

■ オックスフォード大学での研修

—— そして在外に出られて、66年の夏ですね。オックスフォードは最初からの御希望で。

沼田 そうですね。もっとも最初は研修希望をフランス語と出したけど、やはり森大使の言われるとおりにしました。森大使はアメリカ留学でした。でも、その後ロンドンの公使、駐英大使もやられましたがね。ということでオックスフォードに行って、実はオックスフォードで何を勉強するかという話があつてね。僕は、オックスフォードに着くまでは国際法をやるということになっていました。でも、あまり法律が好きじゃないし、オックスフォードに着いて、カレッジのチューターのところへ行つて、「国際法と出したけど実は政治と経済をやりたい」と言いました。Politics and Economics。その相談したチューターはモリス・ショック（Maurice Shock）という Politics のチューターでしたが、彼は要するに PPE（Philosophy, Politics and Economics）の主みたいな先生でした。彼から、日本の大学の成績はどうだったかとか聞かれて、僕は英語がある程度できるということがわかったようで、それだったら Politics and Economics をやりたいという場合に 2 つチョイスがあると。1 つは一応 post graduate ということになっているけど、diploma in social studies といったかな、これは本来 1 年のコースで、彼が言うには「That's Milk and Water」。

—— 何が「Milk and Water」？

沼田 牛乳と水を飲んでいるようなもので易しい。どうせやるなら Philosophy も一緒にやりなさいと言われました。それで、「Philosophy, Politics and Economics」というのをやることになって。

—— 当初から 2 年の予定ですか。

沼田 それは、undergraduate のコースで普通 3 年かかることになっていた。PPE というのが始まる前にその予備みたいなのを 1 年間やってからやることになっていた。でも僕の場合はそもそも 2 年しかないわけだから、2 年間でやらなきゃいけない。そこでオックスフォードのチュートリアル（tutorial）という話になります。オックスフォードの教育システムで、チュートリアルというのはどこかに写真がありましたね。この写真。

—— 1 対 1 ですか。

沼田 1 対 1 でどういうことかということ、レクチャーを聞いてメモをとってそれで試験を受けるというのではなくて、原則 1 対 1 です。1 週間に 1 回、1 つの科目について 1 人のチューターと、グループのこともあるけれども原則 1 対 1 で議論するという教育です。

—— 何時間ぐらいやるのですか。

沼田 1時間。でも、そのために一定のトピックを与えられて、それについて参考書を10冊ぐらい与えられて、それを読んでエッセイを書いて持って行って、それをチューターの前で読み上げるわけ。

—— エッセイが出てきましたね、すごい。

沼田 このぐらいの量を。

—— これは、日付は書いてないですね。

沼田 日付は入っていないけど、最初の方じゃないかな。これは割合短い方だけどね、このエッセイ。それから、これは哲学の例ね。あるいは **British Political History** の例は。

—— そのほうがまだわかるかもしれない。

沼田 参考文献をたくさん与えられて。でも、何ページから何ページまで読めと言ってはくれません。物によっては読んでもしょうがないのもあるから自分で判断しろというわけ。

—— 一応文献リストは出るのですか。

沼田 出ますよ。

—— 図書館へ行ってそれを。

沼田 それでチュートリアルでしょう。僕は週に2つはチュートリアルがあるわけですよ。3科目一緒にやっているから。そうすると、1つのチュートリアルに使える時間って3日でしょう。その間に与えられる本が10冊ぐらいあった。それになんとか目を通した上でエッセイを書かなきゃいけない。それがつらかった。それが卒業までずっと続きました。

—— 寝られましたか。

沼田 チュートリアルの直前は寝られませんでした。だんだんサボるようになったけど。

—— 高校で一度そういうところを通してなかったら。

沼田 そうね。通っていてもつらかったですけどね。

—— 死にますよね、ちょっとついていけないですね、多分日本の学校だけでは。

沼田 これが **Politics** でしょう。それから、これは国際関係論で、そのときは「**Under what circumstances has neutralism been a positive policy rather than the expression of an emotion?**」というのを与えられて。

—— どこから論ずるわけですか。

沼田 僕は日本の中立主義志向から始めていますね。これは割合書きやすかった、結構長いでしょう。

—— これは当日持っていったいいんですか。

沼田 読み上げます。読み上げると、チューターから、そこはなっちゃないとかなんとか言われて、それをディフェンドしなければいけないのです。だから、自分の意見を持ってなければいけない。それが基本的にオックスフォードのエデュケーション。

それから、試験になると α (アルファ) とか β (ベータ) とかいう点数がつきます。これ何点というのがつかない。たとえば試験の成績も $\beta \cdot \beta \cdot \alpha$ とか、そういう点数がつくわけ。 γ (ガンマ) もある。 β というのはほぼ全体はまあまあだと、良ですね。もう一回読んでもまあまあだけれども、 α というのはほんのちょっと brilliant などところがあるという意味。

それから、オックスフォードの卒業試験というのは結果が『TIMES』紙に出ます。

—— そうなんですか。

沼田 First Class、Second Class、Third Class、Pass とあってね。どのクラスで卒業したかというのが全部出るのですけど。だから、 α が圧倒的であれば First になるわけ、ほぼ β となれば Second になる。

—— それはオックスフォードだけですか、ケンブリッジも出る？

沼田 ケンブリッジも同じ。ケンブリッジも出ますね。

—— そうすると、『タイムズ』のデータベースで「Sadaaki Numata」を検索すると成績が出てくるわけですね。

沼田 私がとったのは Second ですけど。日本人で First をとった人はいるのかな。もういるかもしれないけれども。雑談ですけど、西宮伸一中国大使が赴任しようとして赴任の前に亡くなったでしょう。西宮大使は私と同じ University College でやはり PPE でしたが、彼はもう少しで First でした。すごいと思いますね。もう少しでという意味は、ボーダーラインだと口頭試問がありますが、彼はそこまで行きました。すごいと思う。

ただ1つだけ言うと、僕の場合は Philosophy, Politics and Economics の3つ全部やらなきゃいけなかった、西宮君のときは2つで済んだはずです。

それであともう一つ、Philosophy の話をしたので申し上げますと、Philosophy というのは一番厄介なわけ。要するに Linguistics Philosophy ですからね、言葉の話でしょう、外国語でやるわけね。これは大変だったので、その Philosophy のチューターに、僕は外務省に入っているんだから将来やることはもう決まっている、なのになぜ Philosophy をやらなければいけないのかと聞いたら、彼の答えは、「Just think Mr. Numata, this is an exercise in critical methodology」。

—— 格好いい。

沼田 「This is an exercise in using the wrinkles of your brain」と言っていた。でも、そのとおりでした、考えてみたら。

—— どういう勉強をするのですか、Philosophy ってたとえば。

沼田 試験問題を見たほうが早い。僕は、オックスフォードへ行って最初のチュートリアルは、第 1 週はジョン・ロック (John Locke) の『Of Perception』という 300 ページぐらいある本のほかに論文をいろいろ読まされました。どういう勉強をするかということ、Philosophy の僕の年じゃないけどその前の年、試験の問題。この中で 4 問答えなきゃいけないうちの 1 つで、「How important is it to Descartes that he should be able to prove the existence of God?」。

—— デカルトを全部知っていないといけないじゃないですか。

沼田 いや、知っていなくても書けるのだろうと思うけど。あるいは「Are there such things as abstract ideas?」

—— こういうものはまだ知識なしでも何かこう議論できそうな気がしますけど。

沼田 知っているよりも議論することが大事です。だから、それで何かでっち上げて書いていくと、それをチューターから切り裂かれるわけでしょう。それをディフェンドしなければいけないということだから。僕は Philosophy のチューターに脳のしわを一生懸命延ばして議論すれば将来役に立つよと言われて、後からそう思ったんです。後からやはり役に立つなと思ったのは、たとえば僕がスポーツスマンのときの会見とかインタビューを英語でやらなければいけないときのボキャブラリーに役に立ちました。それから、language of evasion というか、どうやって逃げるかという場合の言葉の使い方。

それから、もっと真面目に言えば、最近 Critical thinking と言うでしょう。Critical thinking そのものです。何か言われたらそのまま鵜呑みにしないで、なぜそうなの、なぜそうなのと問い続けて納得するまでやると同時に自分の考えを持っていきなきゃいけない。それをちゃんと present する、その whole process でしょう。チュートリアルというのはそのプロセス、Philosophy もそのプロセスだから、そういう意味で役に立ちます。

—— ここに東大出身生はいないですけど、日本のトップ校とお比べになって。

沼田 全然違う。なぜかということ、東大法学部の場合には、優の答案というのは楽です。押さえるべき点を押さえれば優になります。でも、オックスフォードでは押さえるべき点を押さえただけでは β にはなるけれども、 α にはならない。

—— そこには何が必要？

沼田 「Flashes of brilliance」。きらりと光る、オリジナリティ。そこが難しいです。だから、がり勉でいっても α がとれるとは限らないわけです。

—— たえばイギリスの政治家でも吉田茂でもいいですけど、これは **brilliance** だなと思われる方ってどなたですかね。

沼田 ケンブリッジで言えばリー・クアンユー (Lee Kuan Yew) が有名です。リー・クアンユーは法律だったけれども。彼は **the brightest Englishman East of Suez** と言われていました。

—— **Englishman** なんだ。

沼田 **Harry Lee** と言われた。 **brilliant** なわけですね。でも、オックスフォードで **First** をとったというのは、ハロルド・ウィルソン (**Harold Wilson**) は **PPE** で **First** ですね。テリーザ・メイ (**Theresa May**) は **First** じゃないと思うな。デイヴィッド・キャメロン (**David Cameron**) も **First** じゃないと思う。ボリス・ジョンソン (**Boris Johnson**) はどうかな。政治家の中にもいますよね、そういうものすごい秀才というのが。要するに **brilliant** なわけですよ。

—— サッチャー (**Margaret Thatcher**) はどうでしょうね。

沼田 サッチャー、彼女は専攻は **Chemistry** です。

—— おもしろいですね。メルケル (**Angela Merkel**) も **Chemistry** ですからね。なぜですかね。

沼田 というわけで、東大の試験とは全く違う。

—— ちなみに、リー・クアンユーに会われたことは。

沼田 会ったことはあります。というのは、田中角栄総理がシンガポールに行かれたときにリー・クアンユーの会談も通訳しましたし。だけど、実はリー・クアンユーよりもリー・クアンユーの奥さんの方が成績はよかったという話。法律で。

ちなみに、家のボール箱の中をひっくり返したら、これが出てきた。僕が受けた年じゃないです、その前のだけど。

—— これは何の **examination** ですか。

沼田 **Philosophy, Politics and Economics** の **BA** の **degree** の卒業試験。僕の受けた年のじゃないのが残念ですが、こういうことを試験されるわけです。

—— なるほど。ジョン・スチュアート・ミル (**John Stuart Mill**) とかを読んでいらしたんですか。

沼田 こう言う問題についてエッセイを書くのが試験です。 **Multiple Choice** なんていうものではなくて。

—— 難しいですね。どのぐらい勉強してこの試験になるんですか。

沼田 これは、僕は2年間。

—— 2年間でおしまい。

沼田 おしまい。3科目やるでしょう。Philosophy, Politics and Economics といって、Philosophy というのは General Philosophy と Moral Philosophy でしょう。Politics というのは Modern British Political History と Political Organisation かな。それから、Economics は Economic Principle と Economic Organisation で、それに加えて選択科目というのがあってね、僕の場合には国際関係。第一次大戦と第二次大戦の間の国際関係とその後の国際関係。だから、全部で8科目。それだけ書かなきゃいけないわけです。

—— 何日間でやるのですか、これ。

沼田 3日間ぐらいだったかな。

—— 難しいですよ、これは。とてもうちの修士学生では答えられないはず。この後は修士号ですか。

沼田 いや、これは学士ですよ。Bachelor、BA。

—— すごいものですよ。

沼田 ただ、このBAをとって5年間、当時、1年に25ポンド払うと5年後にMAになる。

—— 何もしなくても？

沼田 Matured into MA。僕はだからMAです。

—— ワインを寝かせておくみたいな。

沼田 でも、相当しごかれるからね。

—— このぐらいだと十分もう修士はクリアしていると思います。論文は何か書かれるのですか。

沼田 いや、これが試験です。だから、小さな論文をたくさん書くわけですよ。ちょっと話が飛んじやいましたけどね。

オックスフォードは大体以上申し上げたところかな。

—— そのときも寄宿舎生活というか、あれは。

沼田 オックスフォードは、原則はカレッジです。あそこはオックスフォード大学と言うけれども、ユニバーシティというのはユニバーシティとして試験問題をつくるぐらいで、基本は全部カレッジで

す。私が行っていたのは **University College** で、これはオックスフォードで一番古いということになっています。1 年目はカレッジの中に住んでいました。カレッジの中にいろいろな部分があって、僕のいたのは **Helen's Court** で、ここは外国人の学生が住んでいました。ビル・クリントン(**Bill Clinton**) もあそこにいたと思います。クリントンは僕と同じカレッジですから。

—— 個室なんですか。

沼田 個室ですよ。それから、ちゃんとサーバントというかスカウトがいる。

—— 1 人ずつに？

沼田 1 人ずつじゃない。朝寝坊していると足引っ張りに来る。

—— それは、そういう仕事の方がいらっしゃるんですか、執事さんみたいな、カレッジの。

沼田 はい。

—— 朝からみんなで大食堂で？

沼田 それは朝飯食べたければね。それから、ちょっと余談になりますけど、さっきのチュートリアルの話で、徹夜してエッセイを書いて、眠そうな顔をして行くと、朝 11 時からのチュートリアルで、チューターが「何か眠そうだな、まずシェリーを 1 杯」って、そういう…。

—— 映画の世界ですね。

沼田 いいでしょう。

—— よく飲みましたか。

沼田 そうね、飲みましたね。各カレッジにワインセラーとビアセラーというのがあって、行っすぐ新入生歓迎とかいってビアセラーに行ったら、新入生はまだティーンエイジャーですよ、ほとんどは。ビールといっても冷たいラガーはなくて生ぬるいビター、あれを一人 7~8 パイント飲んでましたよ。

—— 飲まされるんですか、それは。

沼田 いや、みんな飲んでいる。それから、カレッジでたとえばディナーがあるでしょう。ディナーの前にビアセラーに寄ってワインとグラスを持ってダイニングの方に行って飲んでいてもいいんです。

—— 大体ビール？

沼田 ビールが安いからね。ウイスキーはなかなか飲めない。ドイツも飲むんじゃない？ドイツの人

も。

—— でも、そういう優雅なカレッジみたいなのはドイツには、ハイデルベルクとか行くとあるのかな。

—— ユニバーシティ・カレッジはおっしゃったとおりクリントンですけど、イギリスだとハロルド・ウィルソンと。

沼田 そうですね。ハロルド・ウィルソン、あと、クレメント・アトリー (Clement Attlee)。

—— アトリーをつるし上げちゃうんですか。

沼田 アトリーはつるし上げてないです。というのは、現代のイギリスで一番 **social revolution** に近かった時期はいつだったかという問いが試験かなにかでありましたが、それは第二次世界大戦だと言われていました。その後をアトリーが処理したということから、割合に評価が高かった。チャーチル (Winston Churchill) を追い出したわけでしょう。その後アトリーがちゃんとやったということで。

—— チャーチルってイギリスのエリートはどう思っているんですかね。

沼田 やはり尊敬はしているでしょう、それは。有名であることは間違いないし。でも、彼はオックスフォードじゃないですね、サンドハースト (Sandhurst)、陸軍士官学校です。

—— 英国におられたときの首相は誰ですか。

沼田 ハロルド・ウィルソン。彼はユニバーシティ・カレッジの先生だったわけですね。Economics の先生だった。

そうそう、オックスフォードのところにアメリカ人の学生もたくさんいました。ローズ・スカラーズ (Rhodes Scholars) がたくさんいました。ローズ・スカラーズもいろいろな人がいて、たとえば僕と一緒にユニバーシティ・カレッジにいたローズ・スカラーは海兵隊に入ってベトナムに行きました。彼とは、その後ずっと会っていませんが、後で聞いたところでは、ベトナム戦争へ行ったら帰ってから **anti-war** になって本を書いたそうです。という例もある。

それから、向こう行っている最中というのはやはり **anti-war** の雰囲気随分あって、イギリス人の学生もよくデモしていました。それから、ひげを生やした反体制の人たちなんかがたくさんいて、「ホー、ホー、ホーチミン」なんて言いながらデモしていました。

—— 67年頃でしょうか？

沼田 66～68年。

—— じゃ、フランスでは5月革命が。

沼田 5月革命、Crise de Mai でしょう。5月革命で、あれはやはり影響あるというか、僕の同期生

の名前出しちゃっていいかな、望月敏夫元ギリシャ大使。彼がフランスで研修していて、クリーズ・ド・メイで何か雰囲気がおかしくなって、一旦イギリスに避難してきました。

—— 混乱期ですよ。

沼田 66、67、68 年というのは混乱期ですよ。

—— イギリスは、やや国としては退潮している時期ですからね。スエズ以東からの撤退も決めた時期で。

沼田 退潮している時期ですね。まさにそう、それが始まる時期。

—— 雰囲気としてはやはり明るくなかったですか。

沼田 そんなに明るくなかった。もう一つそうそう、さっきはチュートリアルの話ばかりしていたけれども、カレッジライフということからいえば、カレッジにダイニング・ソサエティというのがあってね。これにユニバーシティ・カレッジの先生でニュージーランド人、ごく最近 99 歳で亡くなったコークウェル (Robert Cawkwell) という Classics の先生ですごく親切な人がいてね。彼は、いろいろな外国人の留学生も含めてなるべくカレッジに溶け込むようにというので、月に 1 回ディナーをするというソサエティをやっていて、私もその中に入れてくれました。そのディナーは、まずコモン・ルームに行って、シェリーを飲む。それから、ワインでしょう、白・赤と飲んで、終わると passing the port って御存知？ ポートワインの瓶を次々回す。それが終わるとまたコモン・ルームに行って飲むでしょう。

—— まだ食べてないんですか、これは。

沼田 食べた後。

—— どこで食べるのですか。

沼田 ダイニングホール。コモン・ルームに行って、コモン・ルームでシェリーを飲んで、ダイニングホールに行って白も赤も飲んで食べて、デザートも食べて、デザートが終わったところでポートが回って飲んで、それが終わってからまたコモン・ルームに行ってまた飲んで。僕は 2 年目だったから下宿に住んでいたんで、自転車でするよるしながら下宿に帰る。当時、あまり traffic がなかったから。

—— 最後、締めは何を飲むんですか、イギリスでは。

沼田 何だったか、よく覚えてない。安い酒で。ポートもかなり強いといえば強い。

それが 1 つと、オックスフォードの話が終わらないけどもう 1 点言うと、オックスフォードと一緒に PPE をやっていた仲間でウィリアム・ショークロス (William Shawcross) という人がいます。検索すればすぐ出てくると思いますよ。彼はジャーナリストとして米国のカンボジア侵攻などについていろいろ本を書きました。それから、ルパート・マードック (Rupert Murdoch) の伝記も書いたかな。

彼はイートンからユニバーシティ・カレッジに来て、彼のお父さんはニュルンベルク裁判のときのイギリスの検事で、戦後、司法長官（Attorney General）を務めました。僕と一緒に PPE をやっていた仲間が集まっている何かのディナーのときに、それぞれ一人一人将来何をやる、10 年後あなたは何をやっているというふうに聞かれましたが、その時わかっていたのは僕だけでした。みんなまだ決めてない。そういう時代だった。今でもそうかもしれないですが。

■ 在英大使館での勤務

—— それでは、そのまま大使館での御勤務のお話に移らせていただいてよろしいでしょうか。

沼田 オックスフォードが 1968 年 6 月で終わって、7 月にロンドンに移って大使館で勤務を始めて、最初は政務班にいました。

当時は政務班をやって、その後 1 年は大使の秘書をやって、その後また政務班をやりました。最初の政務班のときに、僕のすぐ上のボスは有馬龍夫書記官（のちのドイツ大使）、その上の政務班長は柳健一参事官（のちのオーストラリア大使、韓国大使）。柳さんがオーストラリア大使の時、僕は公使として一緒しました。

有馬さんの経歴御存知？彼はハーバードで教えていて、外務省に。

—— そうなんですか。

沼田 そうです。彼は成蹊高校と St. Paul's というプレップスクールの交換プログラムで St. Paul's へ行って、そこからハーバードに行って、ハーバードで political theory の Ph.D. をとった後、教えておられた。そこで外務省がスカウトして、ロンドンに来られたときはまだその 4～5 年後でした。有馬さんは僕のすぐ上の上司でした。

政務班での経験は、電報をどう書くかというところから始まって、本当に添削。当時は有馬さんも柳さんもよく添削してくれました。最初のうちは、新聞の社説の要旨とか、そういうのから始めて電報を書くわけです。「プラハの春」などについて新聞記事とか社説とかいろいろ出るのをまとめるとかね。少なくとも当時の外務省では電報を書くというのが基本でした。電報というのは短い文章で人を動かさなきゃいけないでしょう。これが結構大変でした。今はもう大分違うけど、インターネットもあるから。だって、短い文章で人を動かして、下手すると戦争になっちゃうわけでしょう。そういう伝統があるからものすごく厳しかったですよ、そういう面は。それで大分鍛えられたというのがありますね。

あと当時何があったかな。チェコスロバキアでの「プラハの春」が 1968 年。ローデシアはイアン・スミス（Ian Smith）の時代でしょう。白人支配についていろいろ騒がれていたというようなことがあって。それから、全体的にまさにイースト・オブ・スエズ、スエズ以東からの撤退というようなことがあって。そういうことについて新聞報道を要約したりというのもあるし、あるいはイギリス外務省の担当官のところに情報とりと称してもっともらしい顔をして話を聞きに行ったり、そういうのを電報にして書いていたというようなことがありますね。それが政務班のときの主な勤務。基本的には徒弟みたいなものです。

当時のロンドンの大使館は、湯川盛夫大使（のちの宮内庁式部官長）。政務班は柳さん、有馬さん、途中から都甲（岳洋）さん（のちのロシア大使）も来られた、それから、当時商務班に遠藤哲夫さん

(のちのニュージーランド大使)がおられましたね。

政務班は大体そんなことですね。最初半年間は政務班にいて訓練を受けて、それから1年間大使の秘書をやって、あとの半年はまた政務班に戻りました。要するに大使の秘書をやるというのは必須でした。

—— それは何の修行なんですか。

沼田 あらゆることの修行。プロトコール(儀典)。やはり大使の秘書をやっていると、大使館がどう動くかというのがわかります。まず毎朝、大使館の玄関で大使が着くのを待っているわけ。来られると大使のブリーフケースを持って一緒に階段上がっていったと、そこから始まるわけです。それから、大使のアポイントメントづくりがあって、大使のお客を案内したりします。接宴をするときに、その接宴のゲストリストをつくり、公邸でディナーがあるときに、僕は当時独身だったから公邸のキッチンで1人で食べてその後ずっと控えているわけです。そういうのは良い訓練になりますよね。

それから、プロトコールで大変なのは席次表をつくらなきゃいけない。これが結構大変でした。これはのちのち役立ちますけど。その訓練をしていないと、いざ自分が大使になったとき困っちゃいますから。というようなことをずっとやっていました。

—— 行かれた途端にプラハの春。

沼田 ドゥプチェク(Alexander Dubček)のプラハの春は68年1月~8月で、真最中ですね。あと、ちょっと話が変わるけれども、ロンドンの中で若いdiplomatの集まりみたいなものがあるのですよ。自分の国の大使館だけじゃなくてほかの国の人ともつき合いたいと思うけれども、ロンドンなんて大きなところだから、たくさん大使館があって偉い人たちが行き来しているけれども、若い人たちはあまりその機会がないわけでしょう。当時、London Diplomatic Associationというのがあって、これは若いdiplomatの集まりだというので行ってみると、当時のソ連大使館とかチェコ大使館とか、ああいうところの人たちがたくさんバスに乗ってやってくるわけ。それで、やたらにこっちに接近してきました。それで何回か話しているとランチに呼ばれるわけ。ランチに呼ばれて、座った途端に「I want information」と言われる。

—— どんなインフォメーションですか。

沼田 その筋らしき人もいた。

—— それはちょっとあまりディプロマティックでないような。

沼田 だから、彼らはあまり上手じゃないから。そういうこともありましたね。

—— 当時は、日英関係自体は比較的安定していたのですか。

沼田 日英関係は安定していたというか、僕がオックスフォードにいたころはそれほど戦争の記憶というのは、まあなかったわけではないな。一部の学生から嫌味を言われたりしたことがあったけれども。ケンブリッジの方が大変でしたね、あそこは元捕虜の人がたくさんいたから。僕がむしろ覚えて

いるのは、その後と比べると日本の地位がまだ低かったですね。だから、大使館のつき合う相手というのも外務次官とかとはそれほど接触することは多くなかった。だから、当時の英外務省日本課長なんかは重要な立場でした。日本課長の上に極東部（Far Eastern Department）というのがありましたが、日本、中国、そして韓国はそれほど聞かなかったけれども、その辺をカバーしていました。その部長を公邸のディナーに呼ぶとなると大使館幹部もかなり緊張していました。今は Head of Far Eastern Department ぐらいだとそうでもないと思いますが。それはやはり今と違いますよね。

ちなみに、1970 年に僕がロンドンを離れたときに、ロンドンには日本レストランが 2 軒しかありませんでした。ちょうど 2 軒目ができたころ。1 軒目は日本クラブというところで、2 軒目は商業的なレストランで「ヒロコ」というレストランが開きました。当時のロンドンにいた日本人の数はたしか 1800 人でした。

それで、これは後で出てきますけれども、その 24 年後に僕は特命全権公使で行ったわけでしょう、ナンバー2 でね。そのときのロンドンにある日本レストランの数は、正確なところはわからない、150～160 と言われていました。でも、中にはかなり怪しげなところがたくさんあった。僕も全部調べていないけれども。

特命全権公使でロンドンに着いて、しばらくたってから大使館のスタッフミーティングで「いやあ、ロンドンも料理がおいしくなった」と言いました。これは EU に入ってから欧州大陸のインフルエンスが料理にもあったからだと思うと言ったら、館員に「公使、三等書記官のときよりも今はいいレストランに行っているでしょう」と言われました。そう言われればその通りでした。

もう一つ、当時のイギリスの食事はまずいので有名でしたが、オックスフォードなんて特にそうでした。味が無いわけです。味が無いから、味があるものを食べようと思うと、オックスフォードでは中華かインドしかないんです。

—— 今でもそうですよね。

沼田 今、少しはいいんじゃないかな。それでインド料理の味を覚えました。

—— その後オックスフォードへは行かれたか。

沼田 オックスフォードは 94 年～98 年まで、ナンバー2 でいたから、そのときは何回か。

—— 食事は変わっていなかったですか。

沼田 あまり食事のために行かなかったから。

—— 興味がありますね。

■ 経済協力第一課

—— 次に行きます。御帰国になられるのが。

沼田 1970 年。1970 年は、6 月の総選挙で労働党から保守党に入れかわりました。その総選挙が終

わったところで僕は帰国しました。ハロルド・ウィルソンからエドワード・ヒース (Edward Heath) にかわりました。帰ってきたら経済協力第一課というところに配属になって、これは今の有償資金協力課です。円借款。当時の経済協力は圧倒的に円借款が多くて、威勢がよかったです。

特に沢木正男局長 (のちのフィリピン、ジュネーブ代表部、インドネシア大使) は強烈な人でした。局長付から電話がかかってくるわけですよ、「局長が呼びです」と。すると、とにかく走っていかなくちゃいけない、走る前に何で呼ばれたのか見当つけてね。一番関係ありそうな書類をパッとつかんで局長室に入ると、すぐ質問か注文が飛んでくる。それにすぐ答えないといけない。そういう時代でした。まあ緊張感がありましたね。

ロンドンではさっきプロトコールとか言ったけれども、アスコットの競馬に行くとか、そういうのがあるでしょう。そういう何というか華やかな部分もありました。この経済協力第一課というのは全然違うところでした。

—— この時代はもう飛行機ですよ。どこ周りで帰られたんですか。

沼田 モスクワへ寄って帰りました。同期の孫崎 (享) 君 (のちのイラン大使) がいたので寄りました。帰国して、経済協力第一課へ行ったら、当時の課長は小村 (康一) さん (のちのブラジル大使) ですね。首席事務官が恩田宗さん。のちの中近東局長、タイ大使です。その後、課長は矢田部厚彦さん (のちのフランス大使) になります。ロンドンではちゃんとスーツを着て当時は三つ揃えなど着てやっていたのが、経協一課に行くとみんな腕まくりしていました。

経協第一課というのは円借款をやっているところだから、各省折衝がすごく激しかったです。外務省は借款を出したいし、通産省も農水省もそれぞれの分野でお金を出したいというのがあるでしょう。大蔵省はそれを渋るでしょう。その熾烈な闘いがあるわけですよ、各省折衝。何か会議があると対処方針というのを書きますが、それが徹夜になるとかね。対処方針の各省折衝をやっていると、声の大きい人が怒鳴っているわけです、電話で。すると、銀行から出向していた割合おとなしい人が机の下に入って静かに電話していた。だから、全然違う世界に来ちゃったなと思いました。

それからもう一つは、僕は経協一課では、フィリピンと韓国は2年間ずっと担当して、インドも担当しました。最後にインドネシアを担当しました。フィリピンについて言うと、これは日本の援助のある意味での転換期でしたけれども、フィリピンに対して有償資金協力という意味では、当初は輸銀の借款を出していました。輸銀の借款というのはあまり条件がよくなかったです。金利も高いし。フィリピンに道路をつくるという借款、日比友好道路借款を出していました。ところが、沢木局長から、僕が着任して程なく、おまえフィリピンに行っちゃちゃんと道路つくっているかどうか見てこい、注文つけてこいと言われました。それで出張して、ルソン島北端からミンダナオ島ダバオまで全部行きました。

—— そうなんですか。

沼田 工事現場に行っただけ。トラックをのぞき込んでマイレージを調べたりした。道路が全然できてない。何でこんなことをやりにロンドンから帰ってきたのかなと思いました。そういう泥臭い仕事でした。でも、田舎の各地に行くとそれぞれ歓迎をしてくれる。レチョンという子豚の丸焼きが出てきたりしました。豚の丸焼きはまだいいんですが、飲み物に気をつけないとおなかを壊しちゃう。そうするとビールを飲むほかないわけですが、ビールがないとブランデーを飲むほかない。だけど、ブランデーを薄める水も氷も危ないと言った状況でした。

ところが、最初は輸銀から出した借款を実施するということがあったのですが、沢木局長のときに借款供与を輸銀から海外経済協力基金に移しました。というのは、海外経済協力基金の方が条件が緩くて、より ODA らしい。その交渉をしたのですが、プロジェクト借款というのが主だったのを基金に移した。そのときの数字をインターネットで調べましたがちょっと出てこない。たしか 4500 万ドルの商品借款と 2500 万ドルのプロジェクト借款かな、何かそんなように分けた。これは輸銀にとっては大変なことだったわけ。借款の主導権が基金に移ったわけですね。輸銀の人から文句言われたけど、日本の ODA が変わりつつある時期でした。

というのでいろいろな経験をしましたけれども、その過程で、経協一課の担当官をやっているおもしろかったのは、この国に幾ら出すというのを担当官が最初に案をつくるわけです。これはおもしろいですね。そのたびに世銀のレポートとかいろいろなものを見て、経済成長率とか国際収支のバランスはどうなっているかというのを見て、それじゃ日本はこれから幾ら出すことにしましょうという原案をつくって、それを各省でたたくわけ。これはおもしろかったですね。それをやっていると、フィリピンの人も、担当官が結構重要なことをやっているというのを知っているものだから、丁重に扱ってくれるわけ。その過程では、当時のフィリピンのビラタ（Cesar Virata）という中央銀行の総裁、その後大蔵大臣になる人がいた。当時若かったけれども。それからパテルノ（Vicente Paterno）という投資委員会の委員長がいて、彼もその後閣僚になった。そういう人たちとかなり仲よくなるというメリットがありましたね。それがフィリピンでした。

それから韓国は、日韓国交正常化が 65 年でしょう。有償 3 億ドル、無償 2 億ドル。それからだんだん変わりつつあるときでした。その後、この有償、無償協力の後をどうするかという問題意識がだんだん出てくる。

当時の韓国の援助については、毎年夏に日韓閣僚会議というのがあって、このコミュニケの交渉が大変でした。大体コミュニケの交渉になると、沢木局長の後ろに控えていると、関係者がわあっとテーブルの周りにいて、たしかウイスキーの瓶が真ん中にあったような気がするけど、粘り強く徹夜でコミュニケの文言を交渉するのが大変でね。そういう時期がありました。

当時、有償 3 億ドル、無償 2 億ドルだけだったのが、新しい援助を出すということになってきたわけです。一つは浦項製鉄所に対する援助。今でも浦項の話が出てきますよね。もう一つは、地下鉄借款というのがありました。ソウルの地下鉄借款というのを出しました。その条件なんか覚えていませんが、そういうトランジションのときだったというのが記憶としてあります。

韓国との援助交渉をやっていると、韓国大使館の人たちとのおつき合いはもちろんあるのですけれども、宴会に呼ばれました。これが大変でした。コリアハウスといったかな、そういうところに呼ばれてね。とにかく皆さんよく飲むわけですよ。飲まされるわけ。そうすると、課長と一緒にいくと課長は早く帰っちゃってね、「沼田さん、まだ帰らないで」とか言われて。それでさんざん飲んで倒れちゃう。そういう記憶があります。

それからインドは、輸銀借款のリスケジューリング（繰延）だったからそれほど大変だったことはなかった。これは割合フォーマットが決まっていた。

インドネシアは、僕は最後の半年だけでした。半年じゃない、3 カ月だったかな。急にインドネシアをやらされました。そのときに、昨日インターネットで調べてもほとんど出てきませんでしたが、2 億ドルの石油借款というのがありました。これを新しく出したわけ。これは政治的にいろいろ騒がれた案件だったみたいで、田中清玄氏が絡んでいたという説もある。そこら辺はどうなっていたのかわからないけれども、この交渉というのがあって、インドネシアの代表団にはインドネシアの当時の援助関係の大御所ウィジョヨ・ニティサストロ（Widjojo Nitisastro）という国家開発企画庁（BAPPENAS、英語：National Development Planning Agency）の大臣がいて、この人はバークレ

ー・スクールというか、University of California Berkeley で勉強した人です。中央銀行総裁のラディウス（Radius Prawiro）という人がいて、彼がコミュニケ作りを担当していて、コミュニケのドラフティングで僕はラディウスと電話で交渉していたという記憶があります。そういう意味で、担当官だけで割合いろいろやったというのがおもしろかったですね。

—— 東南アジアの対日感情とかで何か体験なされたことございましたか。

沼田 それは 1974 年までいかないと。僕は田中角栄総理についていったから。経済協力局当時は、あまりそういうのはなかったですね。

—— 賠償の絡みとかはそんなに。

沼田 賠償の絡みは、日比友好道路というのを話したでしょう。あれは、マルコス（Ferdinand Marcos）政権のもとで相当汚職の温床だったようです。賠償のときのカルチャーがまだあったのだと思います。インドネシアの賠償のときもいろいろあったと思いますが、何となくそういうのが残っているという感じがした。だからこそ日比友好道路をちゃんとつくれというのは、お金をちゃんと使えという話だから大変でした。

—— 援助の戦略性みたいなことは考えたりしたのですか。

沼田 いや、もっと後ですね。ただ、さっき申し上げたように、戦略性というのは出てきているわけです。フィリピンの場合にもプロジェクト借款というのは何かつくると言ったでしょう。商品借款というのはもっと自由に使えるという話で、そのためにフレキシブルにしておかなきゃいけないと。それからグラント・エレメントを高めていかなければいけないというのがあるでしょう。それで商品借款の条件を緩めるわけですね。それから、韓国の場合にも有償・無償から次の時代に備えなければいけないということに入ってきたわけです。インドネシアの石油借款はまた別の意味で資源と結びついた借款。だから、そういう意味で戦略が出てきつつあったわけですね。それで、インドネシアの場合には当時 IGGI（Inter-Governmental Group on Indonesia）というのがあって、僕も 1 回だけ行きましたけれども、これは要するにドナー各国が集まって世銀の分析を基に援助需要のアセスメントをして、対インドネシア援助のプレッジないしコミットメントをしていました。でも、国別援助計画とかをつくるというのはもっと後の話ですね。僕は経協はそれ以来ずっと離れていて、次に手掛けたのはパキスタン大使の時だった。

—— 國廣（道彦）大使の回顧録（『回想「経済大国」時代の日本外交 アメリカ・中国・インドネシア』吉田書店、2016 年）によると、大使がなられるちょっと前までは國廣大使が経協にいたようですが。

沼田 僕は國廣さんとロンドンで一緒でした。國廣さんは広報文化担当でした。どうも僕が経協一課に行ったのは当時首席事務官だった國廣さんのせいらしいです。僕が帰国するのとほぼ同時に國廣さんは他のところに移られました。

—— 國廣大使の回顧録だと、中国との国交正常化のことを見据えて、その前に中華民国のほうに援助をするというようなことを考えていたと書いてあったのですが、そういう、今のうちにここに手厚くやっておこうとか、そういうような国別計画はなかったのですか。

沼田 あったかもしれないですね。僕は自分の担当のことしか知らなかったけれども。そうそう、國廣さんの存在は大きいですよ。その後インドネシアで一緒だったから。國廣さんの話はまた出てきますけど。

—— 援助政策を全体としてパッケージで見ると、そういう考え方はまだなかった。

沼田 あまりなかったんじゃないかな。

—— 共産主義との冷戦ですからね。そういう絡みというのは各国で援助する際にはいろいろあったんですかね。

沼田 韓国を一生懸命助けるというのはありましたよね。フィリピンはマルコス政権だな。インドネシアもそうですね、いろいろな援助体制を固めようとしていた時期ですよ。その後どんどん出していくけれども。

—— 経協一課におられたときに、先ほど少し話が出ていましたけれども、担当しておられた国を考えると、政治家からの介入ですとか口ききですとか、何かあったのかなという感じもするのですが。

沼田 あったと思いますけれども、僕のレベルではあまり感じなかった。ただ、そういうのがいかにもありそうだなと思って何となくみんな緊張しているなと思ったのが、さっき申し上げた 2 億ドルの石油借款の話。日本の石油借款が終わった途端に僕は北米一課に移りました。本当に終わってすぐ。どうしてそうなったのかなと思いました。

何か当時、田中清玄氏が動いているとかの話が耳にも入ってきたしね。それは政治家の人たちの絡みはあっただろうと思います。

—— やはりそういうときは担当官ではなくて、もっと上のレベルで対応するのですか。

沼田 それはそうですね。沢木さんも政治家との付き合いがいろいろあっただろうから。

—— ありがとうございます。

—— 現地で日本企業なんかも出てきはじめたぐらい。

沼田 日本企業との関係は随分ありました。というのは、たとえばインドネシアについて見ればプロジェクト借款というのをやるわけでしょう。プロジェクト借款というのはどういうプロジェクトを取り上げて借款をつけるかという話だから、これは現地企業が、それぞれの企業がいろいろなところで探すわけでしょう。コンサルタントというのが当然出てきますよね。韓国も同じことだし、フィリピンでもそうでしたが、特にインドネシアについて言えば、僕ともう 1 人担当官がいるわけですよ。もう 1 人の担当官は何で忙しいかというと、そういうプロジェクトをやっている企業とかコンサルタントとの付き合いで忙しいわけ。どのプロジェクトがどういうふうになる、今度どういうのを拾ったらいいかと。そういう非常に何というか生々しい話。

—— それは現地の方もいれば日本の総合商社とかも。

沼田 そうそう、そういうところも絡むから、そういう話ですね。インドネシアの木下産商とかデヴィ夫人、そういう時代。

—— どういう感じだったのかなという、今とは全く違うでしょうね。

■ インドネシア大使館

—— 少し時間が飛ぶのですが、インドネシアのお話が出ましたので、インドネシア在勤時のことをお聞きします。

1976年に大使は一等書記官としてインドネシアに赴任されて、1978年までお務めになられました。スハルト（Suharto）体制下のインドネシアについて、ご記憶に残っていることをまずお話しいただけますでしょうか。

沼田 インドネシアは、私が着任した1976年はスハルト体制の10年目で、いつまで続くかというのがみんなの関心だったのですけれども、思いがけず長く続いたというのが結論です。1998年まで続いたわけですから。

その関連で、須之部量三大使が非常に立派な大使だったのですけれども、私が着任して最初の半年以上、須之部大使だったのですが、その須之部大使が離任するときに言われたことは、インドネシア社会というのは振り子の揺れが大きい。インドネシアには、植民地だったこともあって弱者の心理というのがある。対日感情の底にもそれがあることを忘れてはいけない。それと、インドネシアの社会にはかなり汚職が蔓延している。大統領の奥さんがイブ・ティン（Ibu Tien）ですけれども、イブ・ティンの「Tien」にかけて「Madame Ten percent」（10%の賄賂をとる）と言われていました。ということにもみられるように汚職がかなり蔓延していた。

他方、民族主義が非常に強い。それから、国民の現政権に対する倦怠感とか不満というのがだんだんたまってきた。そういう状況において、大使館員としてはなるべく接触のチャネルを広げておく必要があるということを言われて、大使自身、インドネシア政府に限らず非常に広い範囲の人たちと接触しておられて、大使が離任されるときにインドネシアの新聞が大使をたたえていました。

その頃にはインドネシアは軍の二重機能（Dwi Fungsi）が働いていた。軍の指導者がいて、それからテクノクラートがいました。ウィジョヨ国家開発企画庁長官とか有名な人がいますけれども、University of California のバークレー校で勉強したバークレー・マフィアと言われる経済学者たちがいて、テクノクラートとして活躍していました。

それから、イスラムの要素があったわけですね。私がいたときは割合静かでした。ところが、私は1974年1月15、16日の田中総理が行ってデモになったときに、私は通訳として総理一行にいましたから、怖い思いをしたので、そのときに比べると静かでした。

そのマラリ（Malari）のことについて、私の友達でこのちょっと後に出てくるCSISのユスフ・ワナンディ（Jusuf Wanandi）の書いた本を読んだら、当時、ワナンディはスハルトの側近であったアリ・ムルトポ（Ali Moertopo）将軍とかスジョノ・フマルダニ（Soedjono Hoemardani）将軍と一緒に活動していたのですが、あのマラリというのは実はスミトロ（Soemitro）将軍という人が自分の野

心のために学生たちの反日感情を利用したということを 2012 年に出した『Shades of Grey』という本に書いています。

そういう状況で、77 年 5 月の総選挙でゴルカールが圧勝して、かなり神通力が衰えてきているかもしれないけれども、78 年の大統領選挙でスハルトの再選は間違いないだろうとみんな思っていて、そのとおり再選された。ただ、私はそのときにスハルト政権がさらに 20 年生き延びるとは思っていませんでした。かなり長く生き延びたということです。

私の仕事は政務の一等書記官で、私の前任者は後に次官になった柳井俊二さんです。私の引き継いだ仕事の重要な部分が、今名前を出した CSIS のユスフ・ワナンディとソフィアン・ワナンディ (Sofian Wanandi) の兄弟とのリエゾンでした。2 人とも御承知かもしれないけれども、カトリックの華僑で、インドネシア大学時代に学生運動の指導者だった人です。

政務の仕事をやっていて非常に感じたのは、特に内政についてインドネシア語の専門家が果たす役割が非常に重要であるということです。インドネシア語を研修した若い人たちは、気軽な服装をすれば学生の中に紛れ込んでも分からないわけですよね、中国系の学生もたくさんいますから。学生の中に溶け込んでいろいろ取材をしてくるというようなことをやっていました。

当時、アメリカ大使館、それから特にオーストラリア大使館としょっちゅう意見交換していたのですが、アメリカ大使館は軍事協力が非常にあるので軍に近い。オーストラリアも軍事協力があつたので、軍人などからの情報を多く持っていた。要するに、何か騒ぎがあると捕まえる方の情報を彼らは持っていて、それに対して我々は、若いインドネシア語の専門家を通じて、言葉は悪いですけども、捕まえられる方の情報をかなり持っていたので、それを両方合わせると結構全体のピクチャーが分かる、そういう感じがしました。

学生たちの動きは、78 年 1 月に大統領選挙が近づいてくると、バンドンというのは学生運動の盛んなところで、学生の騒ぎが若干ありましたが、これは収められました。あと、77 年 8 月に福田 (赳夫) 総理の訪問があつて、このとき私はいったん日本まで帰って、日本からずっと総理の通訳として同行したわけです。そのときにマニラの演説で、「From heart to heart」というのが、インドネシア語で「Dari hati ke hati」と言うのですが、この演説をされたということです。

ちなみに、当時のインドネシアの在留邦人は全体で 4255 名、日系企業が 220 社、日系人が 227 名、残留者約 100 名というのは、まだこれは戦後 30 年ですから、インドネシアで戦っていた日本兵でそのまま残ってしまった人たちがいるという状況です。

インドネシアは、ごくかいつまんで言えば以上のようなことです。インドネシアでもし御質問があったら。

—— 最初のほうに出てきた、インドネシアには弱者の心理が残っているという部分ですけども、須之部大使は具体的にどういうところを見てそういうふうに感じられたのでしょうか。

沼田 旧宗主国に対する、colonial power に対する感情というのがありますし、それはオランダに対する感情であり、直接にはオランダですけども、イギリスとかアメリカに対する感情というのがある。それから、日本に対しては、弱者の心理というのは、学生運動の指導者なんかと話していると、日本人に対して、あるいは日本のビジネスに対して、皮膚の色は黄色いけれども、やることはだんだん白人の植民地の人たちに似てきたねというようなことを言うことがあります。そういう意味での、かつて我々を押さえつけた人たちに対する反感というのがあった。だから、マラリの場合にはそれを悪用した人がある、ということです。

—— インドネシアに着任されたときは、経済協力局で以前仕事をされていたので、その延長でいけばそれほど不自然ではないというような感じだったのでしょうか。

沼田 経済協力局の最後のほうでインドネシアを担当していたので、インドネシアの援助というのは知っていたし、出張もしたことはあるのですが、実際に在勤してみるとやっぱり違いますよね。途上国は初めての経験だったし、住むのも初めてだったので、そういう意味ではいろいろ面白い経験でしたね。ただ、同じイスラムの国といっても、パキスタンのほうがよっぽどイスラムですけどね。パキスタンに行ったときはまた別のショックでした。

—— 現地での生活とかは外務省内で引き継がれたりして、自然と始められるのでしょうか。

沼田 ジャカルタは住宅事情があまりよくなくて、官費借り上げという住宅に住みました。私は柳井さんの後に住んだけれども、結構館員の住宅を手当てするのが大変でした。大使館で持っている家、それから大使館で借り上げている家がありますが、それを誰にどう割り振るかというのが結構大変で、私も一時それを担当しましたが、結局インドネシア人の不動産屋さんとインドネシア語でやり合わなきゃいけないこともありました。インドネシア語を当時は大分勉強しました。もう忘れちゃったけれども。そういう意味では、土くさい仕事もしました。

—— 大使館の規模感というか、日本人職員は何人とか、そういうのはいかがでしたか。

沼田 よく覚えていないけれども。全部で 30 人ぐらいだったような気がします。ローカルスタッフもそれと同じぐらいいたかもしれない。

—— あまり政策マターの話ではないのですけれども、先ほどインドネシア語を勉強されてという話でしたけれども、こういうのは赴任前の研修の中に入っているのでしょうか。

沼田 ないです。

—— では、もう自分で。

沼田 自分でやるほかありません。ただ、このとき私は新婚後 1 年足らずでした。それで、子供が生まれることになっていて、家内はすぐには来られないということで、結局 1 年近く単身赴任だったので、割合インドネシア語を一生懸命勉強したということがあります。個人レッスンをとって。

—— では、もう赴任されてから、仕事しつつ勉強もという。

沼田 そうです。インドネシア語って割合易しくて、日常会話をしゃべるまでは割合早いです。それからだんだん読むようになって。書くのは難しいけれども。でも、1 年たったら家内と子供が来たからだんだんサボるようになって。だから、たとえばインドネシア語専門の人たちが学生運動の指導者を呼んで日本料理屋に行って天ぷらか何かを食べながら取材するときに一緒に行って、最初の挨拶から 2 分ぐらいはしゃべるけれど、そこから後は英語になります。

—— それは大変ですね。

沼田 でも、面白かったですよ。

—— 質問がいくつかあるのですが、まず日本企業が 220 ってかなり多いなという印象なんです。私の父も商社マンで、しょっちゅうこの頃東南アジアへ行っていた記憶があるのはお土産で覚えているのですが、どういう商売をしていたんですかね、日本はここでは。

沼田 トヨタ、日産自動車でしょう。松下のナショナルがありました、有力なところでは。ほかにもいろいろあったけど、味の素もいたな。すぐ思い浮かぶのはそんなところですね。

—— では、やっぱり日本のものを売りにいていたんですね。

沼田 そういことです。自動車が多いですね。

—— もうそういう時代だったんですね。

沼田 だって、マラリの田中総理が来て騒いだときには、日産の車をひっくり返して火をつけたりしていましたから。そういう時代ですから。

—— 最近、私は倉沢愛子さんが書いた本を 2 冊ほど書評して、それは 65 年～66 年のスカルノからスハルトに移行するときに相当インドネシア全土で大虐殺があったという話ですが、読んでみると相当アメリカがスハルトにコミットしている感じなんです。その後も彼女はやっぱりどっちかという、ここでおっしゃっているようなインドネシア語専門家で、学生運動家とのコネクションがあるようなグループの人になるのだらうと思うのですが、どうもアメリカの CIA にウォッチされている気がするようなことがあるという印象を持ったことがあったみたいなんです。そういうアメリカとスハルト体制の関係とか、あとは学生運動を見ていらして、それに関してアメリカとどういうコミュニケーションをとっていらしたのでしょうか。

沼田 後者のほうは、さっきちょっと触れましたが、アメリカ大使館とは割合定期的に意見交換をしていたわけですね。彼らはやっぱり捕まえる方に詳しいと言いましたが、軍とか情報機関なんかのことをよく知っているわけですよ。それはそれなりに接触があるということだと思う。当時アメリカ大使館との情報交換で時々顔を合わせた人に、その数年後ワシントンに赴任した時に CIA に行く機会があったら再会したということもあります。

—— 大使館としては、そういう専門家を現地とのつながりという意味で大切にしていたという感じでしょうか。

沼田 そうですね。

—— インドネシア側の学生運動とか自由化運動の人ともそこそこお付き合いをしたと。

沼田 そうということです。須之部大使自身も時々そういう人たちと付き合っておられました。だから、須之部大使も接触のチャンネルをなるべく広くしておく必要があると言われていました。

—— 日本の東南アジア外交全体もベトナム戦争が終わってまだまだ難しい時期だったと思うのですが、大使館の中の距離感としてはどういう気持ちでおられたのですかね。

沼田 距離感というと、どう言ったらいいかな。

—— 一方に、アメリカはすごく反共ということを重視してやっているわけじゃないですか。でも、日本自身は、そういうのもあるけれども、やっぱり福田ドクトリンも出てくるように、地道にとにかく社会発展の支援をしていこうという気持ちも持っていたわけで。

沼田 でも、インドネシアではあまりそのジレンマを感じませんでした。1965年のときに共産党を抹殺したわけでしょう。9・30事件ですごい勢いで抹殺して、その生き残りの人たちがまだブル島に囚人としていたわけですから。私がいたときにその一部が釈放されるということがありましたが。そういう意味では、スハルトも反共だったし、あまり違和感はなかったですね。インドネシアの中での共産勢力というのはあまり感じませんでしたね、当時。やっぱり相当抑えていたから。

—— どうなんですかね。

沼田 少なくとも、学生運動を共産党が糸を引いているというような感じはしませんでしたね。

—— 今の質問に関連するのですが、福田ドクトリンの中にASEANとインドシナ3国との橋渡しというようなことが入っていたかと思うのですが、日本が福田ドクトリンで東南アジア全体の安定と繁栄ということで言ったときのインドネシアの受け止め方、大使からはどういうふうに見えていらっやいましたか。

沼田 どうだったかな。インドネシアはやっぱりあの辺の盟主だという気持ちがあったと思いますからね、当時はかなり。でも、日本がインドネシアを含めてASEANに関心を向けること自体は歓迎していた、ということだと思いますね。

—— だからといってインドシナと対話をするとか、そういうことにはならないと。

沼田 そういうことではなかったですね。

—— 少し話は違うのですが、國廣大使の回想録を読んでいるとインドネシアの話が出てくるのですが、大使はインドネシアで國廣大使と御一緒だったのですよね。

沼田 はい、ほぼべったり。國廣大使はロンドンでも一緒でした。最初。インドネシアでもほぼべったり——べったりでもないか、1年以上一緒でしたね。國廣さんには大分使われました。

—— 國廣大使の回想録によると、インドネシア語の歌を歌うサークルというのが。

沼田 ラグラグ会というのがあって、私もファウンディングメンバーの一人です。今でもそのラグラグ会の本を持っていますけれども、インドネシア語の歌、今でも歌えますよ。私はギターを弾くものですから、ギターを弾いてラグラグ会で伴奏していました。

—— 在留邦人との交流みたいなことも大使館の重要な仕事のひとつということですかね。

沼田 今のラグラグ会みたいなこともあるし。でも、在留邦人との仕事というのは政務担当として特に日常業務としてやるということでもないですね。むしろ経済班のでしょうね。経済協力の話というのも必ず進出企業の話も絡んできますから。私の場合には、在留邦人との関係というのは仕事の上ではウエートはあまりなかったですね。

—— 國廣大使は後にインドネシアの大使になられて、インドネシア政府の中に参加意識を感じるほど、日本の大使館というのはインドネシア政府と関係が近かったということをおっしゃられています。大使がおられた 70 年代後半にも、インドネシアの政策に日本大使館が具体的に関与するような場面はあったのでしょうか。

沼田 70 年代のときにはそれほどでもないですね。一等書記官としてそれはあまりなかったということもあるのかもしれない。けれども、むしろ東京にいたときに僕は経済協力をやっていましたから、具体的な案件についてインドネシア側要人からの要請書簡の内容をどうしたら良いかと言った点について、担当官の私からかなり立ち入った示唆をしたことはありました。

—— 今のお話でよく分かります。

沼田 感じは分かるでしょう。

沼田貞昭オーラルヒストリー ②

日米首脳会談

—通訳の立場からみえたもの—

質問票2 日米首脳会談—通訳の立場からみえたもの—

1. 1972 年、大使は経済協力局経済協力第一課からアメリカ局北米第一課に異動され、1976 年に在インドネシア大使館勤務となるまでの約 4 年間、数多くの日米首脳会談で通訳を御担当されました。また、78 年に在米国大使館勤務となった後にも、総理通訳として日米首脳会談の場に立ち会われています。ワシントン時代を含め、総理と各国首脳との会談での印象深い出来事やエピソード、総理や外相の人物像でご印象に残っていることをお聞かせください。
-

■キーワード

- ・ 田中・ニクソン会談（1972 年 8 月、ハワイ）
- ・ 田中・ニクソン会談（1973 年 7 月、ワシントン）
- ・ 三木・フォード会談（1975 年 8 月、ワシントン）
- ・ 大平・カーター会談（1979 年 5 月、ワシントン）
- ・ 大平・カーター会談（1980 年 5 月、ワシントン）
- ・ 鈴木・レーガン会談（1981 年 5 月、ワシントン）

■参考：大使略歴

1972～76 年 アメリカ局北米第一課
1976～78 年 在インドネシア大使館一等書記官
1978～82 年 在米国大使館一等書記官

■参考：当時の主な出来事

1972 年 7 月 佐藤内閣退陣、田中角栄内閣成立
1974 年 8 月 ニクソン大統領辞任、フォード大統領就任
1974 年 11 月 フォード大統領訪日
1974 年 12 月 田中内閣退陣、三木武夫内閣成立
1976 年 12 月 三木内閣退陣、福田赳夫内閣成立
1977 年 1 月 カーター大統領就任
1978 年 12 月 福田内閣退陣、大平正芳内閣成立
1980 年 6 月 大平総理急死、鈴木善幸内閣成立
1981 年 1 月 レーガン大統領就任

2. 北米第一課にご勤務中の 1975 年には、フランスのランブイエで最初の先進国首脳会議（サミット）が開催されています。大使は第 1 回サミットに通訳として参加され、またその後のボン（1978 年）、東京（1979 年）、カナダ・モンテベロ（1981 年）でも通訳を務められました。初期のサミットに関して、ご印象に残っていることをお聞かせください。
-

■キーワード

- ・ サミット（先進国首脳会議）
- ・ 第一次石油危機
- ・ 機関車論

■参考：当時の主な出来事

1975 年 11 月	第 1 回先進国首脳会議（ランブイエ）
1976 年 6 月	第 2 回先進国首脳会議（サンフアン）
1977 年 5 月	第 3 回先進国首脳会議（ロンドン）
1978 年 7 月	第 4 回先進国首脳会議（ボン）
1979 年 6 月	第 5 回先進国首脳会議（東京）
1980 年 6 月	第 6 回先進国首脳会議（ヴェネツィア）
1981 年 7 月	第 7 回先進国首脳会議（モンテベロ）

3. 北米第一課にご勤務中には、頻繁に開催される首脳会談の他にも、

- (1) 返還後の沖縄
- (2) ウォーターゲート事件
- (3) ロッキード事件
- (4) ベトナム和平の実現とサイゴン陥落
- (5) 天皇陛下の訪米

など、日米関係上の重要な外交課題が山積していました。これらの問題に関して、強くご印象に残っていることをお聞かせください。

■キーワード

- ・ 天皇陛下訪米
- ・ ウォーターゲート事件
- ・ 田中・ニクソン会談（ハワイ）とロッキード
- ・ ニクソン辞任
- ・ ベトナム和平協定
- ・ サイゴン陥落
- ・ 第四次中東戦争

■参考：当時の主な出来事

- 1972年 5月 沖縄の施政権返還
- 1972年 9月 田中首相訪中、日中共同声明調印
- 1973年 1月 ベトナム和平協定調印
- 1973年 10月 第四次中東戦争勃発、第一次石油危機の発生
- 1973年 11月 キッシンジャー国務長官来日
- 1974年 11月 フォード大統領訪日
- 1975年 4月 サイゴン陥落
- 1975年 11月 第一回サミット開催（フランス・ランブイエ）
- 1976年 2月 三木、フォード大統領にロッキード事件に関する資料提供要請

日米首脳会談—通訳の立場からみえたもの—

■ 田中・ニクソン会談（1972年8月、ハワイ会談）

—— 1972年、大使は経済協力局経済協力第一課からアメリカ局北米第一課に異動されて、1976年に在インドネシア大使館に勤務となるまでの約4年間、本当に数多くの日米首脳会談の通訳を御担当されています。78年にインドネシアからワシントンに移られた後も、総理通訳としてこれまた数多くの日米首脳会談の場に立ち会われています。

ワシントン時代も含めて、総理と各国首脳——特にアメリカですね——との会談で印象深い出来事やエピソード、もしくは総理や外務大臣の人物像でご印象に残っていることをお聞かせください。

沼田 総理通訳を始めたのは北米一課に行ってからで、今から考えると総理通訳に使おうと思って北米一課に配置されたのだらうという感じがします。誰の意向か知らないけど、それまでやっていなかったの。

北米一課で最初は、僕は外務大臣の正通訳で総理大臣の副通訳ということだったのです。だから1972年8月のハワイ会談が初めてでしたけれども、ハワイ会談は、正通訳は当時の宇川秀幸北米二課長（のちのジュネーブ代表部大使、ブラジル大使）で、副通訳が僕でした。大平正芳外務大臣の通訳は僕がやっていました。結果として大平外務大臣とのお付き合いが非常に長くて、2年ぐらい、毎週数回やっていましたから。それから、総理になられてからも僕はワシントンにいましたけれども、何回もやりました。そういう意味では、大平外務大臣・総理のことが一番よくわかっていたと思います。

それで順番に申し上げますと、まずハワイ会談なのですが、このときは僕も初めてですから相当緊張していました。あまり真面目じゃない話から始めると、ホノルルに着いて「サーフライダー」というホテルに泊まりました。サーフライダーホテルというのは誰が持ち主か御存じですか。——小佐野賢治。

—— ええっ！

沼田 そこからロッキードにつながります。ハワイ島の北の端のクイリマというところで、これもやっぱり小佐野さんが持っているホテルだったかな、そこで首脳会談がありました。サーフライダーホテルから空港に行ってヘリコプターに乗ってクイリマまで飛ぶために、我々の泊まっているホテルから出るときに、僕と同じ車に乗るはずの当時栗山尚一条約課長（のちの次官、駐米大使）と宇川秀幸北米二課長が車に乗る前に何かいろいろ議論していて、乗ったときにはモーターケードは先に出ていました。僕は中で早く乗ってくださいと思っていましたけど。そうして乗って運転手に宇川さんが「Do you know where you are going?」と聞いたら「I don't」と。それで困っちゃってね。必死になって追っかけました。ヘリポートに着いたら、田中角栄さんが扇子をこうやってパタパタさせながらイライラして待っているわけです。その間、ヘリコプターに乗っている秘書官たちの間では「通訳2人とも来なかったら誰が通訳するのだらう」、「君がやれ」とか何とかで議論があったという話を聞きました。というわけで最初の会談が始まりました。

この公開された会談記録を拝見しました。この中に僕のやったのは実は入っていません。僕の通訳したのはディナーでした。でも、2回目の会談、全体会談はやったのかな、僕が記録している部分が

あるから。この筆跡は僕の字です、第2回会談の最初の方。これだ、第1回合同会談、この字が僕です。第1回合同会談は僕が通訳したのかもしれないし、僕が聞いていてそれで記録をとったのかもしれない。いずれにしても、まず私が通訳した初日のディナーということであれば、田中総理とニクソン(Richard Nixon)の後ろに座って僕が総理の通訳をして、向こう側はジム・ウィッケル(Jim Wickel)でした。有名なベテランで、かなり古めかしい日本語をしゃべる人だったけれども、ウィッケルさんと僕とはちょっとテンポが違いました。

ディナーの通訳をしろといってもメモが必ずしもとれないわけです。ぱっぱと訳さなきゃいけないので、特に田中さんはせっかちな人だから。だから行間を読まなきゃいけません。先日のフジテレビのインタビュー(2019年5月26日放送「日曜報道 THE PRIME」)の中で出たあの質問は非常にいい質問です。まさに行間を読まなければいけないわけです。そこはサイマルなどのプロの通訳と違うところだと思います。サイマルなんかの場合には行間を読んじゃいけないわけでしょう。

—— 正確に訳す。

沼田 こっちは、明らかに言っちゃいけないことは言わないわけです。本当に間違いだと思ったら言わないようにしなければいけないし、いろいろ行間を読まなければいけない。

さらに言えば、たとえば「あ、それはわかります」と言ったときにどう訳すか。「I understand」とは限らないでしょう。「I agree」かもしれないし、あるいは恐らく「I understand, but」かなんかですよね。あるいは「I see what you mean」かもしれない。あるいは単純に「I hear you」かもしれない。そこはコンテキストで訳し分けるほかない。だから、中身がわかっていなければいけない。外務省の場合には特に英語とかフランス語、中国語もそうかな。ロシア語、中国語はちょっと場合によって違うかもしれないけれども、英語とかフランス語の場合にはサブスタンスがわかっている人を通訳に使うということになっていて、だから、僕の時代も通訳だけをやる専門官というのはいなかったです。

—— 今度誰を使おうかというのはどういうふうに決まるのですか。

沼田 それは総理の好み。大きな通訳のプールがあるわけじゃないから。僕の前はどうしていたのかというと、島内ヘンリー敏郎さん(ノルウェー大使)がずっと佐藤さんの通訳をやっておられたでしょう。島内さんの後は赤谷源一大使(国連事務次長)ですね。赤谷大使がずっとやっておられて、それで僕の時代になるのかな。その間どうなっていたのかな。僕がやり始めて、僕と1年下の山崎隆一郎君が始めて、それでだんだん山崎君にバトンタッチして。だから、当時はやる人は少なかったですよ。プールが何人もいなかった。その後だんだん養成しなければいけないということで、サイマルに通わせたりして養成するようになりました。だから、今はもうちょっと多いのかな。

先にその話をしちゃうと、さっきのフジテレビの番組で高尾直君に焦点当てたでしょう。高尾君は安倍さんに気に入られているから、ずっとやっているようですね。彼は今39歳か40歳ですよ。僕が通訳を始めたのは29歳のときで、10年間だから39歳でワシントンから帰ってきて課長になるときは、もう勘弁してくださいと言ってやめました。高尾君は今全体に昇格のペースが僕のころより遅くなっているからまだ首席事務官だけど、本来はもう彼も通訳は引退してなければいけないということでしょう。

それは余談なのですが、ディナーの通訳をしたのですが、よくあのときにロッキードの話が出たでしょうと聞かれるのですが、出ていません。なぜかということ、僕は当時はとても真面目に考え

て、帰りの飛行機の中で思い出す限りのことを手書きのメモというか記録にしました。まだ残っていると思います。それが役に立ったことがあります。僕がちょうどワシントンから帰ってくるころに、ロッキードの田中裁判が始まっていて、その中でハワイ会談でどういう話があったのかについて証言を求められたのです。宇川北米二課長はたしか法廷に出て証言したはずですが。僕はまだワシントンにいて、その最中に話が出て、当時の伊達宗起官房長が「沼田君まで法廷に出すのはかわいそうだ」という話になったらしくて、僕は証言録取ということになったようです。奄美群島選挙区選出の保岡興治議員が弁護士として田中弁護団の一員で、彼に証言をとられた記憶があります。僕は自分の記録を見ていたから、非常に自信を持って「ロッキードの話は出ていません」と証言しました。

以上が僕の主な記憶なのですが、この会談記録を拝見して当時何が話されたか必ずしも覚えていなかったけれども、ちょっと気がついたことをいくつか申し上げます。

会談の中身の話になりますけれども、1 つは、ニクソン大統領がバックチャネルが必要ですねという話をしている、あれおもしろいですね。沖縄返還交渉の時にあったでしょう。やっぱりニクソンの頭がそういうことがあったのかなと思いました。

それから、あのときの大きなトピックは、何といっても日中国交回復ですね。田中さんも大平さんも日中国交回復までいかざるを得ないという話をしている。それに対してニクソンもいろいろ言っているけれども、アメリカと日本の中国に対する政策が全く同一である必要はないと言いつつ、やはり一致していたほうがいいという感じがあって、そこでニクソンが言っているのは台湾の問題を気にしていて、台湾の経済的自律性の保持が大事であるということを言っていますよね。

それから、米中関係について友邦の犠牲において接近を図ることはない。牛場信彦大使が心配していつも来ていたという話があるでしょう。その点ですね。

それから、どこかでこの中で出てくるけれども、アメリカの場合には中国との関係を **improve** しようとしているのに対して、日本は **normalize** しなければいけないという違いがある。大平さんが言われたのかな。ちなみに僕は、日中国交正常化が 9 月でしたっけ。そのすぐ後に大平大臣がアメリカへ行って 10 月 18 日にニクソン大統領に説明しました。そのとき僕はやはり一緒に行っています。そのときにもホワイトハウスに入ったという記憶がある。その大平大臣との会談の最後に、みんな握手していたら、ニクソンに「あなた若いね、いくつ？」と言われて「29 歳です」と言ったら、「頑張って」とか言われた。

あと、中身でああそうだったかなと思ったのは、在韓米軍は撤退しないということを言っていますね。それから、ニクソンが言ったのが、日本は今や経済的巨人、**giant** であるということを言っている。だから、中ソもそうやって日本を評価しているから、日本は中国やソ連に対して懇願するようなことをする必要はない、「**not in a position of a supplicant**」と言っていますね。ああ、そういうことがあったかなということを思い出しました。主な点はそんなことかな。

あとは、日中国交正常化のフォーミュラについてロジャーズ (**William Rogers**) 国務長官と大平大臣の間でしばらく議論して、それが終わったところで全体会議に大平大臣がジョインして、それぞれの外務大臣、国務長官から報告するという形をとったのですけれども、そのときの議論の中で台湾についての扱いをどうするか、イギリスは「**acknowledge**」と言ってカナダは「**take note**」で、アメリカは「**not challenge**」だったけど、日本はもうちょっといかざるを得ない、オランダ方式かなという話がありますね。

それからもう一つが、日本は経済的に大きくなっているとのコンテキストの中で、ニクソンが **future free Asia** をどうするかというのは日米の政策、「**Japanese American policy**」として両方の政策、一緒にやる政策であるはずだと。日本は「**Not just Pacific Asian power**」また「**world power, not junior, but full partner**」ということを言っていますね。このテーマがずっと続きます。カーター

(Jimmy Carter) のときにも続きます。後で話します。あと、安保理常任理事国の話が出ていますね。その辺がああ、そうだったかなと思った点でした。

■ 田中・ニクソン会談（1973年7・8月）

沼田 次に飛んで、73年7月31日～8月1日の田中・ニクソン会談ですが、これは大変だったのを覚えています。何が大変だったかって、めちゃくちゃに働かされたという記憶があって。なぜかという、このときは公式訪問だったわけです。だから、ホワイトハウスのディナーとか全部あったし、それからナショナル・プレス・クラブのスピーチというのがあった。ナショナル・プレス・クラブのスピーチの起案が大変もめましてね、官邸との関係で。なかなかセットしなくて。僕はその起案をしていたわけ。首脳会談の通訳もしていました。だから、ワシントンに着いた最初の日はずっと睡眠時間4時間、次の日が3時間になって、その次の日はたしか2時間になって、ふらふらになっていましたけれども。それで通訳して記録つくるのは大変でした。

あと、このときはホワイトハウスの歓迎式ですから、これ緊張しますよね。総理挨拶の通訳もしなければいけないし。

—— このときは、ずっと1人でやられているのですか。

沼田 このときは僕はやっていましたね。山崎君と交代になっていたこともあるけれども。でも、どこか交代しているはずですね、だって記録もつくらなければいけないから。

—— さっき副通訳を最初大使がされていてとおっしゃっていましたが、副通訳というのはまた。

沼田 失礼、このときもやっぱり副通訳かな、ちょっと待って。記録見ればわかるな。

—— 何かこう役割分担みたいなものがあるのですか。

沼田 役割分担というかね。

—— この手書きの記録、これが73年です。

沼田 73年ね、これか。これも会談は宇川さんだけれども、歓迎式とかホワイトハウスのディナーとか、それは僕がずっとやっていたということだと思います。そのぐらい分業しないとたないから。

—— 正通訳の方が正式な会談をやって、そうでないところを副通訳で。

沼田 一応そうなっているんです。宇川さんは北米二課長だから経済問題は通訳することを希望された。当時は安保より経済問題のほうが大きかったですね。中国問題とかいろいろあったけれども。ちなみに課長になってからも通訳を続けたのは宇川さんだけですよ。それがよい先例だったのか悪い先例だったのかというのは、あえて判断を控えますけれども、僕は課長になるときにやめていた。そ

れまで 10 年やっていましたからね。

田中・ニクソン会談は、官邸との関係でなかなかスピーチ起案がうまくいかなくて、官邸に木内昭胤秘書官という強烈な個性の方がおられました。御存じでしょう、駐仏大使をやられた。それで、在米大使館で使っていたアメリカ人のスピーチライターもいましたが、なかなか原稿が固まらないので、僕がディナーの通訳をして記録をつくって、それからスピーチのドラフティングをアメリカ人のスピーチライターと一緒にやってそれをまた官邸に上げてというようなことをずっとやっていたので、大変でした。

このときの会談の中身、食事で何があったかよく覚えていないのだけれども、会談の中身で僕が記録を見てなるほどと思ったのは、ニクソンが田中総理のことを「コンピューターつきブルドーザー・プラスブレイン」と言ったことですね。おもしろい、これ。それからさっきの続きで、日本は economic giant だけど political pygmy と思われちゃいけない。「contrary to the law of nature」という言い方をしている。ニクソンの本音が出ているなと思いました。

ニクソンが中国の aggressive intention について田中さんに聞いたのに対して、田中さんが「中国とソ連が一体とならない限りそれほど脅威ではない」と言ったのがおもしろいですね。それから、ニクソンがソ連は「less foreign adventurism」と、前ほどではなくなっていると、むしろ平和共存を願っているということを言っているのがおもしろいですね。

それから、ニクソンがアメリカのインテリなんかのことをものすごい勢いで批判して soft-headed な連中だと言って、新孤立主義だと。このままやっていくと日米安保もなくなっちゃうし NATO もなくなっちゃうし、在韓米軍も撤退しなきゃいけないかもしれないということを言っているでしょう。日本なくして新大西洋憲章 (New Atlantic Charter) ということはありえないといっていますね。

—— Years of Europe が書いてありますね。

沼田 そうそう。中身が何かよくわからないけどね。

—— 結局うやむやのうちに終わってしまったというか。

沼田 それで、日本なくして新大西洋憲章はありえないと。ちなみにこれ、73 年ですね。73 年というのはウォーターゲートがかなり深刻になっていました。それが大分反映されてきていると思われます。これを見て、ニクソンのフラストレーションが非常に出ていると思いました。その背景にやっぱりウォーターゲートがあったなと今ごろになって思いました。

あと共同声明を見ると、共同声明の 6 項でベトナム、朝鮮半島が出ていますね。それから、共同声明の 8 項で抑止力というのが出ていますね、言葉がね。

韓国の対日感情の話も出ていますね、このとき田中さんと大平さんが。最近はよくなっているというようなことを言っていますね。

この中でおもしろいと思ったのは、ニクソンが言っている周恩来との会話の中で、周恩来が「中国の GNP が日本のレベルに達するのに今世紀いっぱいかかる」という部分がありますね。これはおもしろいですね。

あと、エネルギー問題が出て、それからアメリカの大学に 1000 万ドル基金というのを表明しましたね。

あと、天皇御訪米の話が出ています。これは最後にまとめてやります。いろいろもめましてね、天皇御訪米の話も。

■ 三木・フォード会談（1975年8月）

沼田 次の、74年のフォード（Gerald Ford）訪日のときは、僕は実はあまりかかわっていませんでした。痔の手術で入院していたということがあって、すみません。ただ、たしかフォード訪日のときに、キッシンジャーと木村（俊夫）大臣が核の問題で会談してラロック証言の話が出て、その通訳は僕がしたんです。その記録も公開されています。僕の手書きですが、ラロック（Admiral La Rocque）という変な人がいて困っているということをキッシンジャー（Henry Kissinger）が言っています。將軍といっても変なのがいるよねというようなことを言っています。

—— 密約の調査のときですね。

沼田 そうそう、あのときいろいろな記録が出たでしょう。誰の決裁があったというので、懐かしいなと思って起案書の決裁のサインをずっと見ていたら、見たような筆跡が出てきて、よく見たら自分のでした。

次は、割合記憶にあるのが三木・フォード会談、75年8月6日。これはいろいろなことがありましたけど、このときに Joint Statement（日米共同声明）というのと Joint Announcement to the Press（日米共同新聞発表）と両方出しています。Joint Statement というのは1ページの短いやつ、Joint Announcement to the Press というのは事務的なもの。そこに至るまでが結構大変だったんです。その背景として、三木さんの政務秘書官は國弘正雄さんだった。御存じ？同時通訳で有名な國弘正雄さん。僕は、実は学生時代にアルバイトで同時通訳をやっていたときに彼を知っていました。いつの間にか官邸に入って、その後社会党に行かれたけど、彼がいろいろ三木さんに植えつけていたということがありました。もう1人、平沢和重さんも三木さんのブレーン。あの方々、何となく存在感があった。

まず、Joint Statement の話と Joint Announcement to the Press の話は、訪米が近づいたときに官邸から、当時北村汎秘書官ですけれども、後の駐英大使。総理は非常に格調の高い、短い宣言を出したいと言っておられる、何か考えろというのが来たんです。よくわからなくて、どういう中身なのか。それで平沢さんを囲んで食事をしたりして、いろいろ議論して数行の案をつくれということで、僕が書いたような記憶がありますが、何を書いたかよく覚えていません。要するに我々北米一課で何か書いて、宮澤（喜一）外務大臣まで上げて、中身をいろいろ議論しました。さっき読み返してみましたが、Joint Statement というのはあまり大したことを書いているわけではなく、一般論みたいなことが並んでいますね。

雑談になって恐縮ですけど、当時三木さんの通訳をしていて、三木さんが非常にこだわった表現があります。「governability of democracy」ということをしょっちゅう言っておられた。これは何を意味しておられたのか、いまだによくわかりません。外国の首脳と会ってよく「governability of democracy」と言われましたが、どうもコンテキストに合わないことがありました。僕は違うと思うからほかの言葉を使って訳していると、三木さんが私の膝のあたりをつかんで「governability of democracy」と言われる。だから、パラフレーズした上で「That is governability of democracy」とか言いました。Joint Statement をさっき読み返してみても、要するに一般原則みたいなことをいろいろ書いてあるんですよ。この1ページに。

日本とアメリカ、「share fundamental democratic values and are joined together by ties of mutual

trust and cooperation」etc.というのがあって、次に「A more stable and peaceful world order requires the acceptance by all nations of certain principles of international conduct」。こういうようなことを言いたいわけですね。

それからその中には「respect for the sovereignty of all nations」etc.とあって、日米はこういう principles を support することを pledge すると言って、それで対話を促進しましょう。国際経済・社会関係は全ての人の prosperity をフォローしなきゃいけないとか、そういう一般論がずっと続いていて、最後のほうに「the suffering caused by disease and hunger is a most serious and poignant impediment to a humane international economic and social order」。三木さんは南北問題がお好きだったので、そういうのが出てくる。そういう非常に一般論みたいなものを出したいというので、それに大分エネルギーを使われたということを覚えています。アメリカはあまり関心なかったのではないかと思います。アメリカはもっと実務的にやりたいから Joint Statement to the Press というものを出したというのが僕の記憶です。それが1つ。

2つ目は、このときの報道を見ていただくと、三木さんとフォード大統領の会談の最初にテ・タ・テートの会談があったと。この会談から外務省の通訳は排除されたと書いてあって、その排除されたのは僕でした。通訳をしたのは國弘秘書官。何が話されたかはわからない。フィードバックはなかったです。それが2番目のポイント。

3番目はサブスタンスですけれども、Joint Announcement to the Press の中で日米安保の問題があって、ここで「the United States would continue to abide by its defense commitment to Japan under the Treaty of Mutual Cooperation and Security in the event of armed attack against Japan」、次が大事、「whether by nuclear or conventional forces」、これがよく引用される。これを見るとこの会談にも中身がありました。

■ 大平・カーター会談（1979年5月、80年5月）

沼田 次は、79年5月の大平・カーター会談。これを僕は鮮明に覚えています。なぜ覚えているかというと、武田悠君がこのときの議事録を入手してくれて、大分彼に聞かれたし、武田君は英語の記録も入手してくれました。実は、自分が通訳した会談の記録は自分が書いたものが多いです。このときも僕が書きましたが、それが英語に通訳された記録というのは、僕はこのとき初めて見たわけ、武田君のおかげで。実は見ることにについて内心忸怩たるものがありました。訳が間違っていたらどうしようとか（笑声）。でも、かなり正確に訳していたし、米側の記録も一字一句正確だなと思いました。

このときの会談のことはいまだによく覚えています。僕の印象では、首脳2人のケミストリーが合っていたと思います。非常に和気あいあいとしたというか、ケミストリーが合っていたという感じがしました。それはなぜかという、会談の最初のほうでカーターが大平総理に対して、あなた（大平総理）の書いた自叙伝の英訳を読みましたということを言いました。『Brush stroke』という本ですね。という話をして、カーターは『Why not the best?』、自分の書いた本を渡して、大平さんはそこでニコニコとされて非常にうれしそうな顔をしていた。会談の中ではそれほど直接には出ていなかったけど、僕の受けた感じは2人がクリスチャンであるということが関係したのではないかという印象があります。宗教的に通じるものもあったのではないかなという、そういう感じの雰囲気でしたね。

『Brush strokes』と『Why not the best?』のやりとりの中で割合最初のほうだったと思うけれども、カーターのほうから日米関係ももう相当平等なものになっているのではないですかということを言いました。それに対する大平総理の答えがここに書いてあることで、次第に上下の関係から水平な

関係に移っている、だけど日本人は必ずしも認識していないから、私はそのギャップを埋めるように努力していますと、今でも通用するようなことを言っている。40年前でしょう、だから大変なものだと思いますね。トランプ（Donald Trump）にこのようなことを言っても通用しない。

これをどう訳したかという、私の訳したとおりだと思いますけどね、この記録の訳は。これは通訳するときに総理の発言にちょっといろいろ入れていることがあります。「as I look back over the postwar years, our relationship has gradually but steadily developed from a vertical to a horizontal relationship.」というのはそのまま訳しているでしょう。その次に「しかし、いまだ完全に平等であるとは言えない」と、「In all candor, however」と言ったでしょう。これはその場でつけ加えている。

「our relationship is not fully equal yet」。それで「日本人がまだ自分の力につき十分に認識をしていない嫌いはあり」、これも「I also feel, in candor」とまたつけ加えていますね。総理が言うことだから、ちょっと入れたほうがいいかなと無意識に考えているわけですね、これは。あとは大体言ったとおりに訳しているかな。最後のところ、「必ずしも米国の期待に沿うに至っていない」、「I am trying to make them aware, but the change of perception is not as complete, perhaps, as you desire.」、「perhaps」と入れている。微妙なところにこういうのをやっぱり入れますね。Literal（文字通り）に訳したらこれは入ってこないと思いますが、やっぱりそうしたほうが聞きやすいかなというのを無意識に考えて訳しています。アメリカ側の記録は非常に正確です。

それで、そのときに何の話だったかな、日米経済関係の話になったときに、カーターが突如この『Brush strokes』の中から引用して「総理の父親をだましたサトウキビ商人とは違い、我々は正確にはかりを使っている」というくだりがある。ちゃんと読んでいますよ、というくだりがありますね。

それからこのとき、この記録の中に出てくる、よく読むと、総理は「日本列島はいわば不沈空母の機能を果たしています」とあるでしょう。中曽根さんは何年か後に同じ表現を使って問題になった。このとき大平総理は同じことを言われたが、このときは話題にならなかった。記者にはこの点はブリーフしていないと思います。

在韓米軍撤退の話は、もうめどがついていたのかな、79年のこのとき。これは共同声明の中に入っていますよね。「Its policy toward future ground force withdrawals from Korea will be developed in a manner consistent with the maintenance of peace and stability on the Peninsula.」、もう結論が出た後だからこういう表現になっている。このときに大使館の中のスタッフミーティングで、このときはまだ東郷（文彦）大使ですね。僕のノートを見ていたら、「カーター大統領の話しっぷりがよかった。カーター大統領はコミュニケーションをよく勉強していた。大平総理は議会にも行かれたけど上院が厳しかった」というふうに東郷大使がコメントしています。

次に1980年5月にまた大平総理はカーターに会われていますけれども、このときは昼食を兼ねた会談でしたが、あのとき大平総理は忙しかった。ワシントンに行かれて、それからカナダに行かれました。僕はカナダにもついていきましたが、カナダの議会で演説をされてバンクーバーに行かれて、チトーの葬儀でそのままユーゴスラビアに行かれて、それで帰って亡くなりました。だから、相当大平総理も疲れておられたころだと思います。記録を拝見しましたけれども、この79年～80年というのは非常に微妙な時期ですね。

79年の終わりというのはソ連のアフガニスタン侵攻ですよ。それから、イランの人質事件が始まってずっとまだ続いているときでしょう。その間に大来佐武郎外務大臣がヴァンス（Cyrus Vance）国務長官に「日本は insensitive だ」と言われたとかいろいろありました。そういう時期だからこそ、在米大使館にいる我々としてはアメリカといろいろな国が協力し、防衛面などで圧力も強くなっていたし、やっぱり同盟というのは非常に重要だということを考え始めていました。

それで、その81年の鈴木（善幸）・レーガン（Ronald Reagan）会談の同盟問題になるのですけれ

ども、このときはイラン、アフガニスタン、トルコの問題が出ていますね。それから石油の問題はイランの供給ストップで苦勞しているという話があって、難民問題も出てきていますね。日本に助けてほしいと、アフガン難民の問題が出ています。それから韓国問題があって、防衛問題について中期業務見積りの早期完成という話が出ていますね。これは次の機会があるから、この辺は相当僕が苦勞したことなので詳しくお話しします。ペルシャ湾の問題というのが出てくるでしょう。

防衛費の GNP 比率問題も出ていますね、このときは。それから自動車、電電問題、カンボジア問題。このときのローズガーデンで、これは共同記者会見というか、press occasion というかな。そのときに大平大臣がこのローズガーデンのスピーチで、我々は必要とされる場合に、また危機に当たってお互いが必要とする支援を必ず差し伸べるでしょうと、「A friend in need is a friend indeed」ということを言っておられる。我々日本人は雄弁ではないかもしれませんが、貴国にとって確固たる、そして最も信頼できる友邦の一つであり続けますということを言っておられるということですね。

失礼、重要なことを 1 つ忘れていました。79 年の 5 月の大平総理とカーター大統領の最初の会談のときに、ホワイトハウスでの歓迎式で大平総理が既に「同盟国」という言葉を使っています。「同盟国であるアメリカ合衆国との緊密で実り豊かなパートナーシップを通じて日米両国は、遂行すべき重大な任務を共有しております」。これは僕が書いたような気がしますが、我々の時期からそれはあったわけですね。大平総理の今のローズガーデンのスピーチも非常にその意識があったわけですよ。我々はその延長として 81 年に行く。鈴木総理の頭にはなかったということだと思います。

■ 鈴木・レーガン会談（1981 年 5 月）

沼田 それで 81 年に行きますけれども、81 年の 5 月 7 日、鈴木・レーガン会談。これは我々大使館にとっては非常に大変な時期でして、特に私は安保・防衛を担当していた。何が大変だったかという、「日昇丸事件」って覚えていますか？

—— イランの？

沼田 いやいや、日本の貨物船にジョージ・ワシントンという原子力潜水艦がぶつかった事件。それで貨物船の人が 2 人亡くなりました。それが 81 年 4 月 9 日に起きた。アメリカはけしからんという声が日本国内で上がりましたが、原子力潜水艦ということもあってアメリカはなかなかオペレーション上の理由からどうしてそれが起きたかというようなことを言わないし、今軍事法廷の審理が進んでいるからとか何とか言って、なかなか原因究明とその再発防止策がどうなっているかはっきりしないというので、国内の圧力が非常に高まっていた。その中で鈴木総理が来られたわけです。

コミュニケの話はまた別の機会にしますけれども、このときのコミュニケに「同盟」という言葉が入っているわけですね。第 1 項かな、「総理大臣と大統領は、日米両国間の同盟関係は、民主主義及び自由という両国が共有する価値の上に築かれていることを認め、両国間の連帯、友好及び相互信頼関係を再確認した (The President and Prime Minister, recognizing that the alliance between the United States and Japan is built upon their shared values of democracy and liberty, reaffirmed their solidarity, friendship and mutual trust.)」。それまでに起きたことからいえば、これは我々は当然だと思う。ただ、「同盟」という言葉を入れるか入れないかというコミュニケの交渉を随分やりました。日本にとって抵抗がある言葉でしたが、それをどうしようかというので、我々が一生懸命説得して入れたわけですね。

それで、実はこのときのコミュニケで、重要な部分に皆さんの **attention** があまり向かないので、今ちょっと出します、待ってください。

—— ウェブだと田中明彦先生のホームページが一番。

沼田 そうそう、今田中先生のホームページを見えています。さっきの **alliance** というのは前文の第 2 項ですね。これナンバーが振ってないけれども、**alliance** が出てきて、防衛の話がずっと下のほう、これかなり長いな。ここの中で「**The Prime Minister stated that Japan, on its own initiative and in accordance with its Constitution and basic defense policy, will seek to make even greater efforts**」と書いてあるでしょう、これが大変でした。これは私と有馬参事官がクラーク (William Clark) 日本部長と交渉していて、これをどう表現するかと。日本はもっとやるということを書いてくれと米側から言われて、やるといっても今までやってないみたいで困るという話でした。僕がふと思いついて今までもやってきているがなお一層という意味で「『**even greater efforts**』と言ったらどう？」と言ったら、クラーク部長はしばらく考えて「それでいこう」というのがこれです。あまり気がついていないですね、皆さん。

—— このときの文言の詰めというのは、やっぱり在米大と国務省でやるということですか。

沼田 そうです。

—— これは、たとえば東京で会談をやるとなったら逆になったりするのですか。

沼田 どうか。

—— 在京米大、外務省ということもあるのですか。

沼田 両方じゃないかな。かなり大使館が絡みますね。このときは、有馬さんと僕と組んでやっていました。これは実は、アーミテージ (Richard Armitage) がこの会談が終わってしばらくたってから日本で同盟問題というのがわっと騒がれたでしょう。鈴木さんが「あの同盟というのは軍事的意味がありません」と言ったというので大騒ぎになったときに、アメリカは割合静かにしていました。そのときにアーミテージが「何でこの『**even greater efforts**』のところが皆さん気がつかないのだろう」と言った。こっちの方が意味があるわけ。

—— やっぱり同盟発言が注目を浴びたことによってこちらはあまり注目されなかった。

沼田 そうですよ。本当に意味があるのはこっちでしたけど。だって、「**even greater efforts for improving its defense capabilities in Japanese territories and in its surrounding sea and air space**」でしょう。「**and for further alleviating the financial burden of U. S. forces in Japan**」だから、全部入っているわけです、ここに。このセンテンスのすぐ前で、「**they acknowledged the desirability of an appropriate division of roles between Japan and the United States.**」と言っていて「**roles and missions**」という考えが入っている。「**roles and missions**」というのは、あるいは「**burden sharing**」と言われるけど、このときにワインバーガー (Caspar Weinberger) 国防長官が鈴木総理に会って、

「roles and missions」という言葉を言っているわけ。そのときにいわゆる 1000 海里のシーレーン防衛という話も出ている。その辺が非常に具体的に出たのです。「even」というだけで大分意味が違いますが、幸か不幸かあまり騒がれませんでした。

—— この表現について国内から、たとえば防衛庁から何か意見があったとかございましたか。

沼田 防衛庁はそこまで絡んでいなかったと思います。なぜ鈴木総理がああいうことを言われたのかというのは、いろいろ不思議な点があるのですけれども、会談の記録をもう一回読み直してみて、鈴木総理は要するにコミュニケというのは事前にこうやって詰めるものだという認識があまりなかったのだと思います。自分がやったことがそのまま反映するものだと思っておられたようです。会談の中身を見ると、確かに鈴木総理は国民の世論、財政、近隣諸国の意向、憲法の枠内の自主的自衛力整備、第二次大戦の過ちがあって国民の意識を大事に育てて着実に防衛力をつけるなど相当に言っておられましたね。自分があれほど言ったのに何で「同盟」なんて言ったのかだという認識があったということではないかと思います。

なぜそうなったか僕はよくわかりません。総理と事務当局との意思疎通に齟齬があったのではないかというような話はいろいろありますけれども。我々としては非常に不幸な状況になったのですが、でも「even greater efforts」のほうに目が向かなかったからまだ。

—— 総理自体は、その「同盟」が入っているというのは、もちろんその前からわかっていたのですか。

沼田 わかっていなかったのかもしれない。

—— もう入っていること自体がわかってなくて……。

沼田 コミュニケみたいなのに何で入っているのだという感じだった。

—— 出した後ということですか。

沼田 出した後に。

—— もちろん事前に勉強会とかされますよね。

沼田 このときは、僕自身は、総理がワシントンに入ってこられる 2 日前ぐらいにニューヨークに行っていた。なぜニューヨークに行ったか？

マンズフィールド (Michael Mansfield) 大使が日昇丸事故についての中間報告というのを外務大臣に出しました、ニューヨークで。僕は安保防衛担当だから、その場に行きました。その報告の中身を当時の安保課と電話つなぎっ放しで 4 時間ぐらいかけて説明して、それを受けていたのが後の次官で今上皇侍従長の河相周夫氏です。丹波實安保課長 (のちのロシア大使) のときでした。そういう大変なときでした。最後の、総理がワシントン入りされてからの勉強会には僕はあまり入っていませんでした。有馬さんも入っておられなかったかもしれない。

—— 普通、勉強会をするときは、たとえば共同宣言のところまでやられるのですか。つまり会談を受けて。

沼田 重要な案件はやりますよ、もちろん。これは割合重要だからね。ただ、本省からついてきた人たちの説明に問題があったのではないかという感じもします。あまりそういうことを言うと、微妙な問題ですが。

会談の中身を見ると、鈴木総理がさっきの国民の世論云々と言われたのに対してレーガン大統領は「We do not want to appear to be in a position to pressure you」と言っています。それから、日本の防衛努力がどういう効果を持つかということについてレーガンが「I suggest where it might fit into what we are doing to make it possible for us to more rapidly expand our capabilities」と、随分持って回った言い方だけでも、要するに日本にもっとやってもらいたいと、ペルシャ湾なんかについても日本には海上哨戒能力向上とかをやってもらいたいと、1000 海里の話を頭に置いて言っています。だから、首脳会談でも出ていますね。ワインバーガーはワインバーガーで、「roles and missions」という言葉を使って、このコミュニケの中では「roles and missions」という言葉は使いませんでしたが、「役割の分担」という言葉が先ほど申し上げたように入っていますね。

—— 「appropriate division of roles between Japan and the United States」。

沼田 そうそう、あるでしょう。「appropriate division」というのは初めてですね。まさに我々はずっとその話をしていたので。ところが、ワインバーガーは、たしかこの中に記録がありましたね。総理に対して「roles and missions」ということを言って、日本の防衛力増強によってアメリカのインド洋・アラビア海等、石油の面での重要な地域を防衛する能力を増大することができると。フィリピン以北グアム以西の海上交通防衛のための強力で効果的なパートナーシップが必要であると。ここでシーレーンの話が出てくるわけですね。それに対して伊東（正義）外務大臣が防衛計画の大綱のもとでは、周辺海域は数百海里、航路帯 1000 海里程度で、これを超えると困難な政治問題になりますと。これ、僕はこういうやりとりがあったことを忘れていましたけれども。ただ、不思議なのは、なぜ鈴木総理がナショナル・プレス・クラブで 1000 海里と言ったかというのがいまだにわかりません。防衛庁の誰かからインプットがあったとしか思えませんが。

—— 防衛庁もわからないという人ばかりなんですよ。

沼田 調べた？

—— はい。

沼田 不思議ですね、あれね。誰か個人が言ったのかな。

—— 中村悌次元海上幕僚長という話も。ただ、もう引退されています、その時期は。

沼田 不思議ですよ。やっぱり調べたいですね。

—— 塩田章さんが防衛局長だったのですけれども、どこから入ったのかわからない、けれども、ど

こかで聞いたことをそのまま言ったんだろうという予測はされていますね。

沼田 あれはナショナルプレスクラブでの質疑で出てきたのでしたっけ。それがミステリアスです。

■ 田中角栄

沼田 以上が僕のかかわった主な首脳会談についてですけれども、そのほかに何か思い出すことがあるかという、たとえばこの中に出てきますね。キッシンジャーが第4次中東戦争のすぐ後に日本に来た時の会談。

—— 中東戦争のときですか。73年の11月。

沼田 73年11月は日本が官房長官談話を出したときですね、二階堂進官房長官談話。

—— その直前の1週間ぐらい前ですね。

沼田 そう、あれは大変だった。何が大変だったのかな。僕は総理の通訳をしたし、キッシンジャー長官と外務大臣のも通訳しましたが、要するに日本の中東政策を転換しなければいけなかったわけですよね。それをどうするかというので、これもいろいろ揉めましたが、僕が覚えているのは、キッシンジャーと田中総理の会談というのがすごくとげとげしかった、雰囲気が非常に悪かったのをよく覚えています。

—— どっちに原因があったのでしょうか。

沼田 両方かな。

—— そのときは、アメリカが自分たちに石油を提供してくれるのかとか、そういうことをそのままぶつけているので。

沼田 あれ、記録残っていますか？

—— ありますね。ただ、日本側に関しては私は持ってなくて、英語であればすぐお送りできると思うのですが。

沼田 もしよろしかったら、後でいいですけど。

—— はい、お送りします。

沼田 僕もどういう通訳したか覚えていないのだけど、雰囲気が悪かったことはよく覚えています。石油が来なくなったらもうやっていけないというようなことを総理が言ったというのをどこかで見ました。それに比べて大平外務大臣との会談は雰囲気がよかった。大平大臣はより穏やかで、思慮深い

反応だったということをどこかで言っていますね。これ、やはり大平大臣のほうが思慮深いのでしょうか。さっきのカーターとのやりとりとかね。ちょっと一步離れて、long term で見ておられるということがあると思います。それに対してキッシンジャーも敬意を払っていたという感じがしますね。

—— このとき、キッシンジャーの回顧録でもこの訪日のことに触れられていて、印象に残ったのは大平のところで、彼は石油をめぐるであろうとか中東政策をどうするというようなことで何か要望するようなことは言わないのだけれども、私にも彼が何を必要としているのかはわかったと言って、その1週間後に官房長官談話が出た後も、部下からはもっと厳しい談話を出すことになっていたのだけれども、それはやめるようにという形にしたというふうに言っていて、ニュアンスとしては大平大臣との会談が効いている。

沼田 田中さんだけだったらどうなったかわからないという意味では僕の印象に残っています。

—— そのあたり、資料をまとめてまたお送りします。

沼田 お願いします。関心があるので。

それから田中総理について、最初に言えばよかったのですが、彼の通訳というのは難しかったです。なぜ難しいかというと、発想が普通の人と全く違う。水平思考というのかな、水平思考がどこから始まるかわからないというのが問題でね。普通の役人がここから始めて次はこれこれというのを、頭の回転が速いからぽんぽんと言うわけですね。僕はよく外国人に説明するときに、普通の人が1、2、3、4、5とロジカルステップを踏んで言うべきところを1、3、5しか言わない。しかも、さっさささと言うので、訳すときに間を入れなきゃいけない。だから行間を読む、2と4を入れて。しかもせっかちな人だから、自分の話していることがうまく通じないと思うと、扇子をこうパタパタさせて忙しいんですよ。という意味でなかなか大変でした。でも、ものすごく勘の鋭い人だから、自分の言っていることが通じているか通じていないかということがすぐわかる。大変な人ですね。

—— 英語は全くわからないのに。

沼田 全くわからない。あと、ほかの国の首脳との関係では結構ウマが合ったと思うのはイギリスのヒース首相。これは1つ理由が考えられます。ヒース首相はオックスフォード出身ですけども、彼は大工の息子という humble background（庶民の出）で、オックスフォードの Balliol College では Organ Scholar としてオルガンを弾いて奨学金を貰っていました。それで保守党政治家として大成した。

—— 音楽家ですよ。

沼田 だから、ある意味ではサッチャーに似ていますね。庶民の出でオックスフォードへ行った。だから、やっぱり田中さんみたいに中学しか出ていない人がどうやって偉くなったのかとすごく関心があったみたい。それを僕が感じたのは、1973年だったか、田中総理がイギリスに行って、アメリカのキャンプ・デイヴィッドみたいなイギリスの首相の公式の別荘であるチェッカーズで会談があったときです。

それから、田中さんについてもう一つ言えば、彼は1974年の9月にカナダに行って、トロント大

学で名誉博士号をもらいました。私はそのときの acceptance speech を書いてかつ現場で通訳しましたが、このときにオタワに行ってトルドー（Pierre Trudeau）首相と会って、トルドー首相の歓迎夕食会というのがありました。そのときその辺をちょろちょろしている小さい子がいて、2 歳だったそうですが、それが今やジャスティン・トルドー（Justin Trudeau）首相。ちなみに、ジャスティン・トルドーと次に会ったのは僕がカナダにいた 2006 年の 12 月で、Liberal Party（自由党）の大会があって、そこにトルドーが来ていました。それで紹介されたときに「I've met you, but perhaps you don't remember.」と説明した。

—— そういう人がいっぱいいて大変でしょうね。エリザベス（Elizabeth II）女王にも何か言われたみたいですね。

沼田 それからもう一つ田中総理について覚えているのは、インドネシアのマラリ事件。1974 年の 1 月だったかな。田中総理がタイ、インドネシア、東南アジア諸国を訪問したでしょう。あのときに僕はジャカルタの大使館にいたのですけれども、東京からずっとついて回りました。タイに着いたら何か学生が騒いでいるというので雲行きが怪しくてね。国立墓地に献花に行くというので、いざ車に乗ろうと思って、総理が後ろに座って僕が運転手の隣に座って、それからボディガードが乗った。そうしたら学生たちにボンネットをボンボンたたかれた。そこから始まった。それからジャカルタに行ったら、よく御存じの暴動が起きて、トヨタの工場に火がついたりとかね。それを経験しましたけれども、それが 74 年でしょう。2 年後にジャカルタに赴任するとは思っていませんでしたが、その時の話、英（正道）さんのこの本（『回想の外交官生活』グッドタイム社、2019 年）によく書いてあります。

■ 宮澤喜一、大平正芳、福田赳夫

沼田 それから大臣とか総理の記憶ということで、宮澤外務大臣。大平外務大臣のあと、木村俊夫外務大臣を挟んで宮澤外務大臣。宮澤大臣は基本的には通訳は要らないのですが、時々有馬秘書官から通訳してくれと急に電話がかかってくることもありました。なぜ急にかかってくるかというのと、2 種類の occasion があって、1 つは中東関係。第 4 次中東戦争とかそういうのがあった後で、非常に微妙でしょう。微妙なときに宮澤さんは「沼田君、口上書（Note Verbale）みたいに話さなきゃいけないときは君頼むよ」と。もう一つは全くブリーフィング資料を読む時間がなかったとき。

—— 75 年の 4 月に宮澤大臣が訪米されてということがありましたね。

沼田 それはまさにサイゴン陥落の時期でしょう。あのとき僕は行っていません。なぜかという、75 年の 4 月何日でしたっけ、宮澤大臣が行かれたのは。

—— 11 と 12 です。

沼田 僕は 4 月 15 日に自分の結婚式だったものですから。そのときは行けませんでした。

—— まさにこのときの報道で核問題でしたっけ、微妙な問題があるので、宮澤さんは見て読み上げ

ていたという話が新聞記事に載っていて。

沼田 珍しいですね。

—— そういう事情があったんですね。

沼田 こればかりはやむを得ず。僕は、大平大臣が外務大臣時代、ずっと週に3回ぐらい通訳していた。それから大平大臣が大蔵大臣になられてからも、通訳してくれと言われて時々呼ばれることがありました。これは娘婿の森田一政務秘書官から頼まれて、たとえば在京外国人特派員と食事をしながら日本の内政の話をするとか、そういうときに呼ばれることがありました。それから僕は覚えていませんでしたが、1974年の10月27日にキッシンジャーが日本に来て、大平大蔵大臣と会っている。そのときに同席していたのは、大平大蔵大臣の秘書官とどういうわけか外務省の沼田事務官だったという記録がどこかにあるらしくてね。これはなぜなのか、恐らく内政の話だったと思うけど全然覚えていませんでしたけど、大平大臣との関係ではそういうことがありました。だから余談ですが大平大蔵大臣には私の結婚式には出ていただきました。

それから、福田総理。福田総理とはあまり関係がなかったのですが、僕がジャカルタにいたときに2つあったな。1つはサミット、これは後で話します。もう1つは1977年の8月に福田総理がASEAN諸国を訪問されましたね。あのときに有名なスピーチ、インドネシア語で「dari hati ke hati」って何て言ったらいいかな。

—— 心と心。

沼田 あのスピーチのときですけども、あのときに最初がマレーシアだったかな、フセイン・オン（Hussein Onn）首相と会談されました。そのときにマレーシアとの懸案というのは、マレーシアに対する借款を毎年出していたのですが、円借款を幾ら出すかというのが懸案になっていました。僕はそのときにジャカルタに在勤していましたが、一旦日本に帰って一緒に回ったわけです。マレーシアで円借款が問題になりましたが、いつもそういうときは各省幹部たちがついていくでしょう。このときは、幾ら出すかというのがもめにもめて、各省折衝が成立していませんでした。外務省は積極的に出すというし、大蔵省は渋るし、通産省は自分のプロジェクトには出すと言うし、農林省は自分のプロジェクトをやらせろと言うし、経済企画庁は海外経済協力基金を主管しているけれども、そんなに発言力がないという構図の下に、みんな外遊についていったわけです。

それで皆さん、フセイン・オン首相がこの話を始めたらどうしようといって戦々恐々としていました。案の定、会談が始まってしばらくしたら、フセイン・オン首相が「前からお願いしている円借款のことです」と言いました。そうしたら福田総理が僕のほうを向いてニタッと笑って、「それは以心伝心です」と言われた。

—— どう訳すか。

沼田 そう。僕はなぜ総理がニタッと笑ったのかな、沼田これ訳せるかという意味だなと思ってね。それで、こっちも2〜3秒考えて「We have a Japanese version of telepathy」と言いました（笑声）。

皆さん笑われた、やっぱり。フセイン・オンがそれを聞いて2〜3秒考えて、ニコッと笑って「thank you」と言った。この話は当時新聞に出ましたけどね。「以心伝心」というのは今和英辞典で引くとた

しか「telepathy」と出てくる。僕の版權とられたような気がします。でも、これは要するに定訳がないから、まさに業界用語がないわけでしょう、何と言うかね。

—— 福田さんも意地悪ですよ。

沼田 そう、おちゃめなところがあるしね。ただ、やっぱりコンテキストでいくほかないですよ。助けてやりたいけど、という気持ちはあるよということを伝えるほかないので。この話は当時かかわっていた人は覚えている話です。もう 42 年前か。

首脳会談関係、通訳関係は以上です。

■ 通訳という仕事

—— 一般的な質問になってしまうかもしれないのですが、通訳をする際に話の中身を知らないといけないということを最初におっしゃっていたと思うのですが、そうすると、秘だったり極秘に当たるようなところもある程度把握をしていないといけないのかなというふうに思うのですが。

沼田 もちろん、もちろん。

—— その場合はどういう形で。北米局のものであれば問題ないのかもしれないのですが、その他の案件についてはどういうふうに。

沼田 さすがに通訳には見せます、資料は。だって、訳してもらわなきゃ困るから。報道官のときは違うもの。

—— 日常的に来るというよりは、その会談の前に。

沼田 会談の前に。だから、行く前に山ほど来るから大変です。特別機の中で一生懸命勉強しなきゃいけないから。それは大変ですけどね。だから、ある程度一般的な知識を持っていないと。

ただ、今公開されている記録でも、北方領土の関係というのは全部ブラックアウトされるでしょう。あの辺は教えてくれなかったですね、当時の欧亜局は。だから、通訳にも極秘の問題もありますけどね。

—— 情報が来なくて困るというようなことは基本的にはないと。

沼田 ありますけどね。でも、報道官と通訳には来ます。どういうわけか、報道官に話すのとプレスに話すのがほとんど同じだと思っている人が多いのは困るのですけどね。

—— 先ほど、木村大臣のときのキッシンジャーとの会談の話があって、ラロック証言のことが出ていますけど、そのころ大使は密約というか、そのことは……。

沼田 あまり知らない。まだ北米一課のときですから。

—— 「討議の記録」とかということも特に。

沼田 どうだったかな。

—— 北米一課におられても、やはりあれは課長とかそういう方でないと。

沼田 全然。安保課というのは自分も課長やっていましたが、非常に秘密の保持に厳しい。

—— 執務室は近くなんですか。

沼田 一応隣です。

—— でも、別の部屋。

沼田 当時の北米一課は、局議やると北米一課と安保課と北米二課と一緒になんですけど、北米一課、北米二課はかなり共通する部分があります。だけど、安保課は局議ではあまり中身には入らないで、課長が1人で、あるいは首席が1人で局長のところに飛び込む、そういう種類の話が多いです。今度、安保課長の話をするとときに説明します。

■ 2つの日米発表文書

—— 三木・フォード共同新聞発表の「whether by nuclear or conventional forces」のところが印象に残っていらっしゃるということですが、あそこは結構アメリカ側と詰めたのでしょうか。

沼田 僕自身はそこの詰めには関わっていませんでした。

—— 「nuclear」と明示されたのは首脳会談では初めてですよ。

沼田 そうそう。

—— 何か理由とか。

沼田 いや、当時僕はコミュニケの交渉はしていないから。

—— あと、ここのコミュニケは防衛協力も一緒に。

沼田 そうそう、そうだ、防衛協力の話を忘れていた。ちょうどそういう時期ですよ。

—— 75年には大使は特にタッチはされていらっしゃいませんか。

沼田 75 年はまだタッチしていない、まだ北米一課のときですから。

—— こういうところも北米一課と安保課で完全に分かれているのですね。

沼田 完全に分かれていました。

—— 先ほど、「even greater efforts」のところで、有馬参事官と沼田書記官が交渉に行かれているところだったのですが、そのときに在米大使館の防衛班とかとは関知していないのですか。

沼田 全く関係ないです。コミュニケの交渉では。そういう時代でした。今は違うかもしれないけど。

—— 防衛班には陸海空から自衛官が来ていて。

沼田 政務班に内局からも来ていましたよ。だけど、こういうのには関係ない。

—— 政策にはタッチしないということですね。

沼田 今はどうかな、大分違うかもしれないけど。コミュニケの交渉には関係なかったですね。

—— 81 年のコミュニケのファイルが外交史料館にありました、ファイルそのものが。恐らく沼田大使がやりとりされているのだと思うのですが、先ほどおっしゃった「even greater efforts」のやりとりも残っていますね。

沼田 ちゃんと見ている。

—— すごく分厚いです。

沼田 それ、もう公開されているの？

—— 公開されていました。

沼田 電報のやりとりがずうっとあるでしょう？

—— はい。アメリカのほうも国務省がホワイトハウスだとかと調整して、日本側も調整して、すごく時間がかかっているなという印象です。

沼田 交渉は大変でした、おもしろかったけど。このコミュニケは非常に思い入れがあるだけにショックが大きかった。ちなみにあのときは伊東正義大臣がやめられたでしょう。丹波安保課長から電話がかかってきて「伊東大臣がやめた」と言ってぽつんと切られました。すごいショックでしたよ。

—— 全然関係ないですけど、夏目晴雄さんが後に防大の校長になって学生にいろいろな講話とかしているのですが、そのときにこの「even greater efforts」の話を学生にしているのです。こういう

言葉が入ったんだというのを。

沼田 誰が考えたか言っておられますか？

—— それはおっしゃっていませんでした。

—— あれは、もとの出どころはやっぱりアメリカということでしょうか。アメリカが「even greater efforts」という言葉を持ってきて。

沼田 いや、「even greater efforts」は僕が考えました。アメリカが最初言ってきたのは、日本語では「日本として自衛力向上の努力を加速し、在日米軍に対する支援を強化し、日本周辺海域の海上交通路を保全する能力を強化する」という強い表現でした。アメリカ側は「alliance」も入れたがっていたし、いろいろな議論をしていました。「alliance」というのは日英同盟もあるけれども、日独伊三国軍事同盟とかいろいろな前例があるからという議論は大分しましたけどね。

—— やっぱりここで初めて使うという意識は。

沼田 でも、我々は初めてというか、さっきの大平総理だって 79 年に使っているしね。コミュニケに入れるのは初めてだということはありませんけどね。

—— むしろ 79 年のときは意識されたんですかね、「同盟」という言葉を使うということ。

沼田 恐らく僕が起案したものです。当時だってブラウン（Harold Brown）国防長官なんかからいろいろな圧力があつたときだから、割合自然に書きましたけど。

—— あのときは、大きくは報道されなかったですね。

沼田 そう、だからみんな関心持たなかった。

—— 当時の記事を見たら、ちゃんと入っているのですけど。

沼田 入っているでしょう。誰が来たと。

—— 文言としてこういう挨拶した、「同盟」とちゃんと入っているのですけど、それに関する報道は全く見られなくて不思議というか、なぜだったのでしょうか。

—— やっぱり総理大臣が「同盟に軍事的意味はない」と言っちゃったら、それは大ニュースですよ。

沼田 それは大ニュースですよ、冗談じゃない。

それで、今になって考えると、いろいろな総理を比較するようなことを申し上げて恐縮ですけどね。福田さんには僕はそれほど親しみを感じなかったけど、田中さんは即物的な人ですよ。要するに目に

見えるということ。

—— 抽象的なことを考えない。

沼田 お金とかそういうことで考える人。

それから、三木さんは何か高邁なことをおっしゃっているようで意味がわからない（笑声）。あまり意味が通じない。彼は南カリフォルニア大学にいらっしゃっていたはずだけれども、英語はしゃべれるとは思えなかったし。

福田さんは経済のことをよくわかっておられたという感じがするけれども、通訳を困らせることはさっき話したとおり。もう一つ福田さんについては、僕がまだ総理通訳を始める前に福田さんの通訳をどこかでやらされました。今から考えると、当時沼田とかいうのがいるらしいけど、どのぐらい通訳ができるか見てやろうと思って誰かが手配したのではないかと思います。そのとき福田さんが中東の話をしていてナツメヤシの話をしましたが、当時、**date** という単語を知りませんでした、アラブとの関係があまりなかったから。そういう植物の名前とかが大変でした。

田中さんがこれも大変だね。あの人、もともと工務関係だから木に詳しいでしょう。木を見て「あれ何だ」と。それから、ワシントンの大使館に行ったときに国会議員が来るでしょう。ワシントンの **Rock Creek Highway** というところに花が咲いているでしょう。僕はどうもみんなヒヤシンスにしちゃった（笑声）。後で家内に怒られた。花の名前って難しいですね。

—— 通訳というのは、教養じゃないですけども、結構幅広く知識が求められると。

沼田 いろいろ知識は必要ですが、苦手分野というのはあるんです。

■ 第1回サミットーランブイエ・サミットー

—— 北米第一課にご勤務中の 1975 年には、フランスのランブイエで最初の先進国首脳会議（サミット）が開催されています。大使は第1回サミットにも通訳として参加され、またその後のボン、東京、カナダ・モンテベロでも通訳を務められました。初期のサミットのことで、ご印象に残っていることをお聞かせください。

沼田 サミットの関係はメモに残っていないし非常に雑駁ですけど、まずランブイエ、75年11月。

これは初めてのサミットだから、当時の関係者の記録なんかを見ていると、総理が舞い上がっていたし、事務方が大変だったというのがまず第1点ですね。三木総理が非常に喜んでおられたということはある。

これは、サミットの会議自体はサイマルの同時通訳ですから、僕は食事のときに後ろに座って通訳とか、あるいはレセプションなんかでの会話。

ランブイエは小さなお城で、そこにぎゅうぎゅう詰め込まれたわけです。そもそも首脳だけが集まるという趣旨でやっていたから。当時の記録を見るといろいろなことがありましたね。首脳だけで集まって気楽にやるのだからノート・テイカーは要らないだろうと思っていたら、どんどん議論があるので慌てて、手島（冷志）OECD 公使がお留守番していたら突如呼び出されて駆り出された。首脳の発言は英語とフランス語と両方ありますから、両方わからなきゃいけない。その前に北原（秀雄）駐

仏大使がノート・テイカーやらされて、もう嫌だと言っていて手島さんが呼び出された。手島さんも疲れたので、岡本行夫事務官が行くようになったとかいろいろあるんですけどね、まあそれは置いておいて。

僕の役割は、ランブイエのお城の中にいて三木さんについて、食事のときの通訳とかあるいはブレイクの間の会話の通訳とかいうことをやっていた。このときにバイラテラルのちゃんと座っての会談というのはどうもシュミット (Helmut Schmidt) 西独首相だけだったみたいですね、三木・シュミット会談。これは英語でやったので僕が通訳したはずです。経済の話ばかりだったという記憶ですね。

—— シュミット自身が英語でしゃべったということですか。

沼田 彼は英語うまいですよ。

—— 本会議のときはサイマルが通訳をして。本会議は、でもどうだったのでしょうか。英語でもしかして行われたのか。

沼田 いや、どうだろう。ドイツ語、どうだったかな。わからない。

そのときに、これは当時の人の受け売りですけど、たとえば岡本行夫君が言っているのは、サミット自体はジスカル・デスタン (Valéry Giscard d'Estaing) が言い出した話ですけども、シュミットが大きな顔をしていたと、やっぱり。それから、岡本君はノート・テイカーか何かで入っていました。彼は牛場さんの補佐官をやっていたから。このときは牛場さんがシェルパみたいなことをやっておられました。岡本君によると、シュミットとジスカルとハロルド・ウィルソン英国首相が大きな顔をしていたそうです。ちなみに首脳たちの話というのは、3人並べると相当に知的レベルが高そうですね。シュミットでしょう、ジスカルでしょう。ハロルド・ウィルソンというのはオックスフォードの僕の行ったカレッジの経済学の先生をしていましたからね。

—— ユニバーシティ・カレッジ。

沼田 岡本君の書いたメモによると、ウィルソンが話しているときに「イグニス・ファトエス」という言葉を使った。これは僕も知りませんでしたが、「ignis fatuus」。キツネ火。ラテン語ね。というふうな調子で、三木さん、これは気おくれしただろうなということが印象に残っています。

それから、僕もこれ覚えていませんでしたが、三木さんが新たな国際協力の姿勢を打ち出した。さっきのフォードとの会談のときの **Joint Statement** みたいな話だと思いますが、ランブイエ精神というのを出したとか言って一文を提示されたというのをどこかで読みましたが、当時はそれを見たことないから國弘秘書官が書いたのかな。ちなみに、三木・フォード会談というのはなかったと思います。僕が通訳していないことは確か。國弘さんが通訳した可能性はなきにしもあらず。

それで、あまり中身がなくて恐縮ですけども、とにかくロジスティクスが大変だね。当時、ロジスティクスを仕切っていたのは川島裕前侍従長、元外務次官。彼は北米二課の首席事務官でした。何が大変かって、初めてでしょう。ランブイエは周りにホテルがなかった。だから、日本の代表団は民家に入り込んだわけ。

—— どれくらい離れているのですか。

沼田 パリからそんな離れていない、1時間かかったかな、もうちょっと近かったかな。小さな町で、その民家を借り上げて、そこに日本代表団、といっても全員じゃなくて、牛場さんとか各省局長とかがいる。このときは大蔵大臣、通産大臣はまだいなかったと思います。寝るところがないから屋根裏みたいなところにベッドを置いて仮眠をとるわけですね。僕も戻って仮眠とろうと思って寝ようとしたら、「ううん」とか言って起き上がった人がいて、牛場さんだった。

—— みんな雑魚寝だったということですか。

沼田 ほぼね。それから、問題は食事です。インスタントラーメンを沢山持ち込んで食べていたら、その民家のマダムが「あっ、これおいしい」とか言っていた。我々は食事の恨みがずうっと募っていて、帰りに日航の特別機に乗り込んだら、川島さんが「飯！」と叫んだ。僕自身もお城の中で狭い階段を上がったり下がったりしなきゃいけなかったんで、足にまめができちゃった。それがランブイエでした。

それから次に、ボン・サミットはあまり記憶に残っていませんが 78 年 7 月、これは福田さんが首相ですね。僕は、ワシントンから飛んでいきました。ワシントンに着任して 4 カ月ぐらい後か。このときの思い出は、安全保障がかなり議論されるようになったことです。中距離核戦力（Intermediate Nuclear Forces）。シュミットなんかはディナーの席でもどんどんやるわけでしょう。そうすると、日本の首脳はあまり御存じない話で、目を閉じたままお休みになりそうになるわけ。僕は指でつつくわけにもいかないから、突如声を大きくしたりして。そういう意味で苦労しました。

—— やっぱり、福田さんもこういう問題には疎かったですか。

沼田 ですね。経済は非常にくわしかったけど。それがボンですね。それでこのときかな、福田総理は EC 委員会に行かれました。当時ジェンキンス（Roy Jenkins）委員長。とにかく歓迎のスピーチがあって、福田さんがそれに答礼のスピーチに立たれて、10 分間区切らないでしゃべられた。

—— それはわざと？

沼田 わざとかどうかかわからないけど。僕も途中で区切ってくれというのはしゃくだから、10 分間ずっとメモとって 10 分間やりましたけど。全部きちっと訳したかどうかあまり自信がない。まあほぼ訳したと思う。当時はまだ若かったですから。そういう意味では福田さんはかなり通訳泣かせだったな。

■ 東京サミット

沼田 次が東京サミット。

—— 79 年。この写真はどこですか。

沼田 これは大磯にある吉田茂邸。

—— カーターを案内したときですかね。

—— 確かに、この温室みたいなところがありますよね。

沼田 そうそう。このときのことは、白鳥さんが書いておられますね。

—— 勝手に紀要に出してしまいました。

沼田 いやいや、僕はあれで非常に助かりました。白鳥さんが『立教法学』で書いておられる。なぜ僕は見つけたのかな、一生懸命探した。白鳥さんが書いておられるとおり、議長国としての責務と国内の声の両立に苦悶しながら、大平総理が正式な結論として石油輸入量へのコミットメントを提示する様子は鬼気迫るものがあった。これはサミットの中の本会議ですね。本会議の記録を僕は見ていませんが、まさにそうだったなと思います。僕は本会議はやっていないけれども、首脳のパネルとかやっていたわけです。あのときは、大平さんは相当苦労しておられた。

1 日目が終わって 2 日目に入る前かな、大平さんが「おなか壊しちゃったよ」とつぶやかれたのを覚えています。あまり神経を使っておなか壊されたみたい。それを覚えているというのが一つですね。それから、カーターが大分主張して石油の輸入目標を出せとって、日本は国内のいろいろな事情はあるけれども、それを出さなければいけないということで苦労された。

サミットが終わったときの大平さんの記者会見の記録を見ていて、ああそうだったかなと思ったのは、今回のサミットには 3 人の新人が参加したという部分です。「最初の婦人宰相」は誰？

—— サッチャー。

沼田 サッチャー。「最も若い青年宰相」、これはカナダのクラーク (Joe Clark) 首相です。2 人とも、その英知と魅力により会議の成功に貢献していただいた。サッチャーの方の貢献が大きかったと思います。「3 人目の新人は若干年をとっている自分であるが、紹介は省略させていただく」と。これ、いいですね。大平さんらしい。それで大平さん自身が、日本の首相として 1985 年までにわたる長期の努力目標を具体的に掲げることは相当勇気の要ることであったが、石油不安という地球社会の問題に有効に対応しながら我が国経済の安定的な基盤をつくらなければいけないと考えた上での決断であったと。この記録というのはいつから公開されていますか。

—— サミットは 5 年ぐらい前から本格的に始まっていて。

沼田 大分時間たっていますね。

—— 東京サミットは？

—— もう出ています。

—— 出たのはもう結構前ですよね。

—— 4 年ぐらい前ですね。一番最初に議事録本体だけが 2015 年に出て、その後少しおくれて周辺

の資料もファイル 20 冊分ぐらいあるのですけれども、全部で。

沼田 随分出ていますね。

—— 東京サミットはほかのサミットに比べて多いですね。ロジ関係のファイルも残してありますし。

沼田 こんなにあるでしょう、大量に。

—— 大量にあります。

沼田 東京サミットについては僕の記憶は以上です。

それで、あとモンテベロ、81 年 7 月、カナダ。モンテベロというのはオタワからモントリオールに行く途中にある街で、一応ケベックの中です。このときの中身は全く覚えていませんが、何を覚えているかというと、このときにトルドー首相の補佐をしていたのがデレック・バーニー (Derek Burney) という後にカナダの駐米大使になる人で、60 年代に在京大使館にいたことがあって、その息子イアン・バーニー (Ian Burney) が今の駐日大使です。そのデレックが『Getting it done』という回想録の中で日本との関係をいろいろ書いていて、その最後のところでモンテベロ・サミットのときに事務方の責任者としてトルドーとプロトコールの話をいろいろした。そして日本の代表団が来る前にトルドーに対して、カナダ側の通訳は女性で、その女性がちゃんと通訳できるようにすることが大事だと言った。というのは、日本側は男性の通訳だから、恐らく日本側の通訳の方が **override** する可能性があるんで、そうしないようにすることが大事であると言った。トルドーが「Does she speak French?」と聞いたので、「Yes, she does.」と答えた。「And so Trudeau greeted prime minster Suzuki in French and spoke to him entirely in French during the arrival ceremony. Suzuki's interpreter was visibly perturbed. Score one for Canada」と書いてあるのですが、僕がカナダ大使として着任してデレック・バーニーをもちろん招いたわけです。公邸のディナーに招いて、歓迎のスピーチの中で彼の回想録のこのくだりを、日本側の通訳は僕だったことは言わずに紹介した上で、「I don't remember being perturbed」と言いましたら、彼もそこで気づいて笑っていました。

—— 覚えておられますか、その女性通訳は。

沼田 近藤さんという日本人の方で、ずっとカナダ側の通訳を務めています。さっきの田中総理のときもそうだったかな。僕がカナダ大使になって行ったときに小泉純一郎総理が来られたら、また彼女がいました。サミットはそんなことですね。すみません、あまり中身がなくて。

—— 福田総理というのは英語どれぐらいわかったのですか。

沼田 あまりおわかりにならなかったでしょうね、昔、ロンドンにおられたけどね。英語をおしゃべりになっているところは見たことないですね。

—— 大平さんは。

沼田 大平さんは、あまりおしゃべりにはならないけど、理解はかなりされます。

そうそう、大平さんの通訳をしているときに、その話をしませんでしたね。田中さんはなかなか大変だったという話をしましたね。三木さんは何言っておられるのかよくわからない、「governability of democracy」でしょう。福田さんは、通訳いじめはあるけれども、おっしゃることは明快でしたね。鈴木さんは必ずしも明快ではない。宮澤さんはかなり英語がおできになるから、口上書みたいなときは頼むと、それから時間がないときに発言要領を見ながらというのはありますけれども、キッシンジャーとでもちゃんと議論できる。

大平さんは「アー」とか「ウー」とか言うので知られていますけれども、とても論旨明快な人です。これ、大平さんをよく知っている人はそのとおりだと言われます。大体あまりそういう印象ないでしょう。でも、さっきお話ししたカーターとのやりとりも論旨明快でしょう、あの部分だけ切り取っても。あんな感じです。だからすごく訳しやすい。当時は、この記録を見ていただければわかるけれども、手書きでしょう。これは、僕は字が大きいからあれだけでも、大平さんの発言は大体このぐらいの位置までにきちっとおさめます。これは大変なものですよ、相当整理されていなければそういうふうにならないから。田中総理の言っているのをそういうふうを書くのは大変難しい。

それでもう一つは、大平総理は、僕が通訳すると、1 センテンスごとに僕の通訳を聞いてうなずかれるわけ。うなずくのがとまったら困るなど。とまることはなかったけど。大学（東京商科大学、現在の一橋大学）でも英語をかなり勉強されていたと思うし、理解力はかなりあったというふうに思います。

—— 毎朝英字紙を音読していたというのを御家族の方が書かれていましたね。それを国会でやるのが宮澤さんで、自宅でやるのが大平だという話があるみたいです。

■ 北米第一課の業務

—— 次に北米第一課の業務についてお聞きします。

沼田 北米一課に勤務中いくつかやったのは、沖縄、ウォーターゲート、ロッキード、天皇陛下、ベトナムをちょっと。石油危機というのはさっき申し上げたことに尽きます。田中さんと大平さんの比較で。

まず沖縄ですが、僕が北米一課に赴任したのは 72 年の 7 月ですから、沖縄返還の 2 カ月後ですね、返還式典の 2 カ月後。それまでの北米一課というのは、本当に沖縄返還交渉をずっとやっていました。千葉一夫さん（のちの駐英大使）が 4 年間課長をやっておられて。私が行く前は千葉課長、佐藤嘉恭首席事務官（のちの中国大使）、法眼健作次席事務官（のちのカナダ大使）、加藤良三三席事務官（のちの駐米大使）。法眼さんは沖縄をやっていなくて、ブルドーザーのごとき千葉さんと共に、佐藤さん、加藤さんが沖縄をやっていた。僕は加藤良三さんの後任で行ったときには課長が入れかわって深田宏北米一課長（のちの OECD 大使、オーストラリア大使。オーストラリア大使のとき私は公使を務めました。）でした。首席事務官は松浦晃一郎さん（のちの駐仏大使、ユネスコ事務局長）。法眼さんが次席で、私が三席でした。沖縄は一応僕が引き継いだのですけれども、もう返還になっていましたから、あまりやることはなかったです。ただ、沖縄返還交渉の間、北米一課がいかに大変であったかという話は随分いろいろ聞きました。千葉課長は本当にすごい人だと僕も思います。もともととは外交官の息子で、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語全部やられる。

条約局も巻き込んだ返還交渉のエピソードはいろいろ聞きましたが、沖縄との関係で返還協定が

終わって何が残ったかという、請求権の問題がいろいろあって、それを処理するときに、沖縄で米軍との関係でいろいろ損害を受けたという個人の人がいて、そういう人が陳情に来ていました。1人、御老人がいて、よくいらっしゃいました。

—— 東京に？

沼田 当時は東京に住んでいてね。来られるたびに2時間ぐらい相手をしていました。そのうち嫁さんを世話してやるとか言われたのを覚えています。

それから、沖縄にも出張しましたが、僕が最初に沖縄に行ったとき、これは返還後ですけども、最初に思ったのは町の感じがフィリピンに似ているなということでした。基地の町というのは独特の雰囲気があるでしょう。タコスとかハンバーガーの看板とか。

たとえば、これは請求権の問題じゃなくて、問題が何だったか忘れたけど、あそこに退役軍人の会がありました。**Veterans of Foreign Wars (VFW)** の土地をどうするかとかいう問題があって、そこを訪ねていきましたが、やっぱりそこでアメリカの退役軍人たちに会って、こういう人たちと交渉するのは大変だなと思ったという記憶があります。知性はあまり感じられませんでした。

もう一つ戦後処理で僕はミクロネシアも担当していました。日本とミクロネシアの間に、1969年のミクロネシア協定というのがあります。これは日本とアメリカが500万ドルずつ自発的に拠出して、それでいろいろな請求権を処理するという話です。この関連で僕はサイパンにも出張した。このときの記憶といえば、日航機でグアム経由で行きましたが、いざ飛行機に乗ろうと思ったら、ほとんどが新婚等のカップルで男性の一人客は僕以外にあと3~4人しかいない。スーツを着ているのは僕だけでした。

—— 何年ですか。

沼田 これは73年ごろですよ。その印象が強烈だった。もう一つは、サイパンまで行って感じたけど、やっぱりアメリカのアドミニストレーションですね。ああいうところで統治業務をしているアメリカ人は決して優秀ではないというか、独特のカルチャーの人たちだなと感じました。

それともう一つは、ミクロネシア協定で本来救われるべきだったけど救われていないという人たちがいました。ポナペ島というのがありますが、島民の10数人か、兵補というのがあったのかな、日本軍に従軍させられてソロモン島か何かで戦死しました。その息子のドサルア(Daniel Lopez Dosalua)という人が来てね。彼は陳情というのか、外務省の正門の前でいつも立っていて、この人も僕のところに来ると3時間ぐらいずっといる。応対に苦労したという記憶があります。

その後、僕が在米大使館にいたときに、前やっていたこともあって78年~82年までまたミクロネシアを担当しました。これはもうちょっとポジティブな話で、ミクロネシアがアメリカとの関係を薄めて、独立ではないけれども、**autonomy** に近くなるという過程で日本から漁業関係の無償援助をもらうようになりました。その無償援助の交渉を僕はワシントンで、ミクロネシア連邦を代理するワシントンの弁護士、マーシャル諸島を代表する弁護士とやった記憶があります。というわけで、ミクロネシアとのつき合いはかなりあったということですね。それが戦後処理問題とのおつき合いの始まりで、それから副報道官やロンドンの時の話とつながるのですけれども、後で。

次にウォーターゲート。ウォーターゲートもいろいろなことがありましたが、まず思い出すのはロッキード事件の捜査にあたった堀田力検事。御存じ？

彼は在米大使館におられました。72年~75年だったかな、在米大使館の一等書記官で、彼はウォ

一ターゲート事件について克明な報告を送ってられました。それで、我々もフォローしていました。72年8月の田中・ニクソン・ハワイ会談のときはまだそんなに騒がれていませんでした。あれが『Washington Post』に出たのはいつだったかな。72年の11月にニクソンが圧勝で再選し、大統領に就任して、それからだんだんおかしくなっていくって、73年の5月にリチャードソン（Elliott Richardson）司法長官が特別検察官にコックス（Archibald Cox）を任命した。その7月に田中訪米。それで、さっきの soft-headed 批判とかというニクソンのフラストレーションなんかにも大分影響しているのではないかな、と今になって思います。彼はさんざん攻撃されていたわけでしょう。

ということになって 73 年の 10 月、コックス特別検察官を解任するいわゆる「Saturday Night Massacre」。それから 73 年 10 月、アグニュー（Spiro Agnew）副大統領がスキャンダルで辞任。73 年 11 月、録音テープのうち 18 分半が誤って消去されていたとホワイトハウスがさらに伝える。誤ってじゃなくてちゃんと消したみたいだったけど。73 年 12 月、フォードが副大統領に就任。74 年 7 月、下院司法委員会が弾劾決議を可決。74 年 8 月、ニクソンが辞任、フォードが昇格。ウォーターゲートというのは、さっきちょっと申し上げたように、今から考えるとニクソンに大分影響していたのかなという感じがします。

次、ロッキード。ロッキードは本当に大変だったという記憶がありますが、今から考えると僕がかかわっていたのはたった 2 カ月ですね、2 月、3 月。76 年 2 月 4 日、チャーチ（Frank Church）上院議員が委員長を務めるチャーチ委員会（上院外交委員会多国籍企業小委員会）公聴会でロッキードがいろいろな政府の関係者に賄賂を贈っていたというのが出て大騒ぎになって、2 月 16 日に衆議院予算委員会。これで小佐野賢治とか全日空の若狭得治社長、丸紅の檜山広会長、大久保利春専務、伊藤宏専務なんかが呼ばれて証人喚問。それで外務省も呼ばれるわけですね。山崎敏夫北米局長とか、藤井宏昭北米一課長が答弁に行っていたかな。このとき覚えているのは、法務省は刑事局の伊藤（榮樹）刑事課長が 1 人で誰も補佐を連れずに答弁していました。1 人で自信ありげに答える。なぜだかわかりますか。議員は選挙違反を摘発できる検事を怒らせたくないでしょう。本当に法務省は強い。外務省と全く違う。それはすごく感じました。

それで、2 月 19 日に政府がロッキード問題閣僚協議会を設置して、三木首相が記者会見の席で改めて事件の真相解明の意欲を強調した上で、政府高官を含めた事件の全資料公開を原則とすること、そして政府高官逮捕において指揮権発動を行わない方針であることを明らかにした。そこで、次にアメリカとの捜査協力という話になるのですけれども、これ「探検コム」というのに「ロッキード事件の真実」というのがあって、それを見るとこういう文書をどうやって抜いたのか知らないけど載せている。公開されていないですよ、これ。公開されているの？

—— でも、ここに「秘密指定解除」と書いてあるので、情報公開請求で。

沼田 公開しているのか。

—— だと思いますね。

沼田 これは 2 月 20 日でしょう。このころ北米一課も条約局も大変でした。捜査協力という話になったときにどうするか。どうやって協力してもらって、どうやって資料をとるかという話になったでしょう。それで、2 月 23 日に衆参両院の決議、事件に関する資料の提供を要請する決議を全会一致で衆参両院が可決した。その決議可決を受けて三木総理はフォード大統領宛てに、日本の民主政治は事件の真相解明と試練に耐え得る力を持っており、日本の民主政治の発展のために全ての資料の提供

を求めるとの内容のいわゆる三木親書を送ることを明らかとしたということがどこかに書いてあって、その次に、なお親書発送については自民党執行部も外務省も事前の相談を全く受けていなかったと書いてあるのですが、実は、この親書の少なくとも英語は私が書いた記憶があります。その親書の中身もさっさと同じように、日本語は「探検コム」というのに載っていますね。

—— 何でしょう、それ。

沼田 どこからだったかな。これ、親書は公開しているのかな。とは思えないのですけどね。要するに、国会の両院の決議も出て国会は真相究明を重視していると。我が国政府関係者がロッキード社から支払いを受けたという告発は政界に大きな衝撃を与えた。関係者の氏名を含む全ての関係資料を公表することは我が国の政治だけでなく日米友好に貢献するものでありますという趣意の書簡が送られたと。大体そんな内容だったかなという感じがしますが、この親書を出したことは間違いなし、この親書の決裁というのは、英語の決裁も含めて僕が宮澤大臣のところに1人でとりにいった記憶があります。大臣おひとりのときにとりにいったとか、そういうことだと思います。宮澤大臣が何かちょっと手を入れられたような記憶もあるけれども。

ということで、出したでしょう。そのときにこの資料で、これは2月20日か、この衆参両院の決議の前に北米一課と条約局法規課で「ロッキード社問題、米国への捜査協力等の要請についての考察」という紙があります。これをつくっていたのは当時の山崎北米局長、藤井北米一課長、沼田首席事務官、それから中島敏次郎条約局長、渡邊允法規課長（後の侍従長）、それから竹内行夫法規課事務官（後の次官）あたりが法務省と一緒にやってつくった。法務省はいつも刑事課長が1人で来られた。これ、北米局で相談すると目立ちちゃうでしょう。北米局は記者がみんなウォッチしているから。ロッキードは北米一課がやっているのを誰でも知っていますから。しょうがないから、夜に条約局に行ってこっそり議論していたという記憶があります。

それで、その後は司法共助取り決めというのをつくるわけですね。司法共助取り決めで何をつくったか、三木さんが資料を出してくださいとアメリカ側に言ったけれども、要するに司法の問題であって外交の問題じゃないから、誰が受け取りましたとかいう資料を我々が見ちゃ困るわけですね。だから、そのメカニズムをどうつくるかという話で、当時の中島条約局長が言っておられたのは、要するに土管の中を流れてくると。我々外からは見えない、その土管をどうつくるかという話、それが司法共助だというふうになったというような話がありました。

その取り決めの準備をしていましたが、この「ロッキード事件の真実」によると、三木総理が平沢和重さんを密使として送って、3月5日にヘンリー・キッシンジャー国務長官と会談させて、アメリカ側の資料提供を求めたと。アメリカ政府は3月23日、日本の検察資料を渡すことを合意したと書いてありますが、これは僕の記憶にはありません。

—— 平沢さんというのは、三木政権のときはそういう使われ方というか、そういう動き方をされていたということですか。外務省とは別に総理の密使としてという。

沼田 そうですね。彼は外務省の先輩です。外務省はわりと早くやめたけど、不思議な方でした。

日米司法共助の取り決めというのができたのがもうちょっと後かな。それでいざ取り決めができて、ここで堀田さんがまた東京地検の検事として登場しますね。いわゆる嘱託尋問という手続に行かれて資料が渡ってきて、それを受け取ったのが在米大使館の原田明夫参事官、後の検事総長。私が在米大使館にいたとき、まだおられました。ということで、このときは検事さんと大分仲よくなりました。

ただ、僕は3月までしかやっていなくて4月にインドネシアに行っちゃったので、そこからのことはよく知らないのだけれども。

■ 昭和天皇訪米

—— 次に1975年の昭和天皇訪米のお話をお聞きます。

沼田 これも皆さんいろいろ調べられているから、私よりもよほど詳しいのかもしれないけれども、僕が北米一課にいたとき、特に三席、次席、首席としていて、御訪米の話というのはしょっちゅうかかわっていたわけじゃないけど、時々話が降ってきて忙しくなったと。何かいきなり官邸から言われて、総理が天皇陛下に上奏されるから言上ぶりを1時間で書けとか、何で天皇陛下に言うことを1時間で書かなきゃいけないのかと思いましたけど、そういう種類の話もありました。

これは経緯をたどると、72年8月。これはちなみに『外交』（2019年、29号、30号）に舟橋（正真）さんという方が書かれているな。御存じ？

—— 船橋洋一さん？

沼田 彼じゃなくて、ちょっと待って。

—— 日大の大学院を出て立教の助教をやっている方でしょうか。多分来月ぐらいに吉田書店から本が出ると思うのですが。天皇訪米について、天皇外交みたいになっているものです（『皇室外交』と象徴天皇制 1960~1975年：昭和天皇訪欧から訪米へ』吉田書店、2019年）。

沼田 かなりよく調べていますね、彼。

—— そうですね。

沼田 彼の本にもよりますと、72年8月ハワイ。その前に天皇陛下がヨーロッパに行かれたときに途中でニクソンが会いたいと言ってアラスカで会っていたというのがあるのですけれども、72年8月のハワイ会談で大統領から天皇訪米の招待があった。

これは舟橋さんの記事によりますけれど、73年の1月16日にジョンソン（U. Alexis Johnson）国務次官から牛場大使に対して10月にお招きしたいという招待があった。3月に宇佐美毅宮内庁長官と法眼晋作外務次官が会ったときに、宇佐美さんが10月は皇室行事があり都合が悪い、国内でも反対意見もある、検討し直してほしいという話をされた。4月ごろに共産党とか社会党などが反対して「これは天皇の政治利用である」と国会で反対されて、田中総理が、これはあくまで皇室の関係であるという話をした。今の常識でいうと、あくまでも皇室の関係という答弁は、ややピンとこない気がしますけど。宇佐美長官は、国会で政治利用はいけませんという話をして、5月の24日に大平外務大臣が年内の訪米は中止するとアメリカに通告したと。

次に73年8月の日米首脳会談で、田中総理が陛下は74年に訪米されるということを確認したと会談記録に出てきますね。天皇の御意向として、昨年御招待を受けながら、宮中行事の関係で訪米できなくて遺憾であるというメッセージを伝えたということになりますね。近い将来都合のよい時期に実

現ということで対外的に説明するという話だったわけですね。74年ということを一応確認したのだけれども、対外的には近い将来都合のよい時期に実現ということだったと。それに対して宇佐美長官が「政治家同士の共同声明に載っけるのはけしからん」と言ったとか言わないとかいう話があった。

次に74年2月、安川壯大使の錯覚発言というのがありましたね。僕も何か錯覚発言があったことは知っていましたが中身をよく覚えていませんでしたが、74年2月に安川大使が「年内には訪米が実現されるだろう」と発言した。本当はそうだったのですが、それは言っちゃいけないということだった。それが錯覚発言ということで騒ぎになって、安川さんは自分の発言を錯覚として取り消して、法眼晋作さんが責任として次官をやめたということですね。74年2月20日、大平外務大臣が白紙撤回ということで衆議院外務委員会。その後74年8月ニクソンがやめて、74年11月19日、フォード大統領が日本に来て天皇を正式招待したと。ところが、11月28日、田中さんが退陣しちゃった。それで三木さんが総理になって、75年2月28日に三木内閣が天皇訪米を決定したということで、天皇が9月に御訪米になった。

そのときに、ああそうだったかなと僕も思い出したのだけれども、天皇陛下はアメリカ人のプレスと6回会見されています。それでいろいろ説明されている。これは今から考えると非常に珍しいですね、6回も会見されたことは。やっぱりアメリカの世論が大事だということで、これは誰の発想だったのかな。

それで、いざ天皇陛下が訪米されて。ホワイトハウスでのお言葉の中で「私が深く悲しみとするあの不幸な戦争（That unfortunate war which I deeply deplore）」という。「which I deeply deplore」というのは僕が考えた英訳だった。そのときから「deplore」というのを何となく使うようになりましてね。後世まで伝えるつもりはありませんでしたが、「sad」とか何とか言うだけでは足りないという認識ですね。それでは何だろうということ「deplore」ということで、それが定着したということです。

ただ、天皇陛下が帰ってこられた後の記者会見で、この発言に関連して「戦争責任を感じているか」という質問に対して陛下は「そういう言葉のあやについては、私はそういう文学方面はあまり研究もしていないので」と本当に正直な答えをされましたね。半藤一利さんは、それについて、その場の即興で答えられるテーマではなく、ああいう言葉でしか言えないつらさがあったというふうにおっしゃっていますが、当時の昭和天皇としてはそうだったのでしょね。だから、それから今までを考えるといろいろな意味で随分変わったなという感じがしますね。

—— 何が変わったのでしょうか。

沼田 何が変わったかということ、2つの意味でね。1つは、昭和天皇ご自身は当事者として言えなかったということがあるでしょう。それが1つ。それから2つ目は、昭和天皇が亡くなってからこの過去の問題がわーっと出てきたでしょう。それはやっぱり重しがとれたということがあると思います。慰安婦の問題にしても何にしてもね。それから95年のイギリスの捕虜の話にしても。それは、「深く悲しみとする」とか「深い反省」、「お詫び」とか言えるようになってきたというのがあって、一番大きな点は今の上皇御自身がそれに近いことを発言されるようになった、それを今の天皇が引き継いだこと、そこが随分変わったと思います。それを国民が割合自然に受けるようになった。一応それがaccepted wisdomになったということで変わったと思う。あの当時は大変だったなという感を深くしますね。

天皇がアメリカに行かれたのは北米局にとっては大変なことで、藤井北米一課長がついていきました。彼の最大の仕事でしたが、僕は留守部隊をやっていました。ちょうど新婚数カ月のときでしたが、留守部隊をやっていると、電話で夜中に何回も起こされました。たとえば、「今、アンカレッジ空港に

お着きになりました」というのがアンカレッジから電話が来て、東京の本部からも電話が来て、「今から御出発になります」というのがまた 2 回来て。大変でした。

それともう一つは、ああいうときっていろいろな **occasion** で本当にお言葉というのをいくつもつくらなければいけなくて。天皇陛下の言われることをこんなに書かなければいけないのかなと思いました。あまりたくさんあるから、外務省に入省したばかりの官補さんが手伝いに来ているでしょう、その官補さんに書かせたらすごい名文が出てきて、そのまま宮内庁に送りました。江川明夫君ですけど、のちのスロバキア大使。というようなことを覚えています。以上です。

—— 天皇陛下の御訪米のときにはディズニールランドとかにも行かれたと思うのですけれども、あの行程は北米一課でつくるのですか。

沼田 宮内庁と相談しながらいろいろと。

—— このときの御訪米について藤井大使にいろいろお聞きをしていたのですが、そうだったのかと思ったことの一つが、北米局全体なのかと思ったら、これに関して北米一課はかかわっていたのだけれども、むしろ内田宏儀典長とあと宮内庁が担当していたという言い方をされていて。

沼田 そうなんですよ。

—— 局というよりは課でということ。

沼田 そんな感じね、確かにそうですね。

—— あとは英語に、全体を整える真崎秀樹さんがいて。

沼田 真崎大使がアメリカでの御通訳もやっておられました。

—— 意外な気がしたのですが、やはり。

沼田 昭和天皇については真崎さんがずっとやっておられて。ただ、このスピーチのさっきの部分の英訳は僕が考えました。

■ 1970 年代後半の日米関係

—— すごく特殊な感じがするのですが、藤井大使に聞くと自分の課長時代は 8 割が天皇訪米だったみたいにおっしゃっていて、逆に言えば 75 年というのは北米一課を煩わせるような課題はそんなになかったということなんですか。

沼田 75 年？

—— サイゴン陥落はもちろんあるわけですけども。

沼田 ちなみにサイゴン陥落の話はこの英さんの本がおもしろいですよ。要するに英さんは東京で見えてサイゴンは陥落するに違いないと思ったけれども、サイゴンの大使館のほうがもっと楽観的だったという話を書いているでしょう。僕が一番覚えているのは、直接北米一課に関係ないけれども、サイゴンが陥落したときに林暘書記官（のちのイタリア大使、インド大使）がアメリカの大使館に行っていて、そのままみんなアメリカに避難したでしょう。屋上からヘリコプターで避難して、はたと気がついたら空母の上にあった。その話御存知？

—— いいえ、初めて聞きました。

沼田 だから、彼は難民と一緒に空母に乗りました。

—— あのと時大使館の方は渡邊幸治さん（のちのイタリア、ロシア大使）が。

沼田 そのまま残っていた。林暘さんは大使館に戻れなくなったから、一緒にいた人と同時にヘリコプターに。それで空母に行ったので、まさにボートピープルになったわけ。それで、家族は日本に帰っていたのかな。要するに残した家財とかなんかはみんななくなっちゃったという話を聞きました。その話は強烈に覚えていて、パキスタンにいたときにその話を思い出して、本当に危なくなったらどうしようと思っていました。

そうか、藤井さんから聞かれたのですね。藤井さんにとってはまさに天皇訪米が仕事の中心だったですね。

—— このころ、日米間の経済摩擦はちょっと一段落というか一休みしている時期という感じでしょうか。

沼田 まあ、その後に比べればそうなのかな。

—— 繊維がとりあえず一段落して。

沼田 そうね、後で考えるとそうですね。

—— 自動車とか牛肉・オレンジがカーターのときに出てきますけど、その前という感じですかね。

沼田 自主規制の話が出てきたのはどこだったっけ。自動車の自主規制——失礼、これ言い忘れましたね。1981年5月の鈴木・レーガン会談のときに、これ記録ありますけれども、かなり長いテ・タ・テート会談がありました。そのときに自動車の自主規制の話と対ソ穀物禁輸解除の話が出た。レーガンがブレジネフに個人的な書簡を送って自分の気持ちを説明したが、このことはくれぐれも外部に出ることのないようご配慮願いたいと言われて、鈴木総理より、禁輸解除の報に接して当惑した（puzzled）次第だが、いまのお話を聞いて貴大統領のお考えはよくわかったというやりとりがあった。それから原潜事故の中間報告という話がある。ここに自動車輸出自主規制の話が出てきますね。そのぐらいかな。

あと電電公社。80年2月の大平・カーター会談。このときに自動車と電電の話がやはり出ています

ね。あと、エネルギーの問題が出ていたということがあって、日米経済摩擦自体はハワイ会談のときに田中総理が「両 3 年で経常収支黒字を合理的規模に縮小し、その過程で不均衡を改善する」と。翌年会ったときに「そのとおりやりました」と数字をずっと並べて話しました。その程度かな。もちろん問題はあったのですけれども。その後、僕がワシントンにいた 78 年～82 年の後半は経済も相当厳しくなって、それと防衛の問題が link するかしらないかという話で、レーガンが入ってきてなるべく delink しようと思いました。カーターのときは大分 link が進んで、レーガンのときに delink しようとしたけれども、その後に FSX で link してしまったということですよ。

—— この後カーター政権以降は、ひっきりなしにもう問題が次から次に出ているという感じですかね。

沼田 本当ですね。

—— 質問票にはないのですけれども、北米一課は日米政策企画協議に絡んだりはするのですか。

沼田 時々絡んでいましたけど。覚えているのは、北米一課に着任してすぐのときに深田課長から、日米政策企画協議でプレゼンテーションしたいから何かペーパー書いてくれと言われて英語で書いた記憶があります。

—— そのペーパーはもしかしたら日米安保条約に関するものですか。

沼田 じゃないです。

—— ではないですか。いや、実は記録が公開されていて。

沼田 どんなペーパー？

—— 72 年 6 月、大使が着任される直前なんです、その政策企画協議で深田課長が随分話していらっしゃるんですよ。その内容は、極東条項をやめたいという。

沼田 深田さん、そんなことを言ったの？

—— はい。

沼田 へえー。

—— ペーパーを書かれたということは、北米一課の方も出席されることがあったのでしょうか。

沼田 いやいや、深田さんが出るから書いてくれと言ったのは、僕の英語力を見たかったみたいでした。それを栗山さんに見せたと言われていましたから。試したかったのかもしれない。

—— その栗山さんも同じように極東条項を廃止したいというのを出されているのですけど、当時外

務省の中でそういう雰囲気があったのですか。

沼田 外務省全体としてはなかったでしょう。政策企画協議はいろいろなことを自由に言える場でした。極東条項を廃止したいというのは、具体的にそれ以上何と言いましたか、彼は。

—— デタントが進んでいて、日本国内から安保条約に対する批判が強いから、もう少し対等性を高めるためにも、在日米軍基地に対する制約をもう少し高めておきたいということだと思います。あまり議論には出ていなかったですか。

沼田 僕の知る限りでは出ていません。

—— そのデタントとかに少し絡むかもしれないですけども、アンカレッジに陛下が立ち寄られたときに、ニクソンと短時間でバイの会談をされていると思うのですが、そのときにどういう話があったのかというのは聞かれていましたか。

沼田 知らない。あれは 71 年でしょう。僕は、そのときはまだ経済協力一課だから、知らないですね。どんな話だったのかな。

—— すみません、手前みそな質問ばかりなんですけど、73 年 1 月に SCG という新しい安保協議が始まって。

沼田 Security Consultation Group。

—— はい。そのメインは安保課ですか。

沼田 安保課ですけど、僕が通訳はしていると思います。

—— 通訳としては。

沼田 大臣が出ていればやっています。

—— これは事務レベルなので、もしかしたら。

沼田 SCG のような事務レベルは出ていないな。大臣が出ているのが何でしょう。

—— SCC ですね。

沼田 SCC はやったと思います。

—— 通訳時代なのですが、防衛庁長官の通訳も何回かされていると思うのですが。

沼田 在米大使館のときにやっています。それは今度在米大使館の話のときにします。栗原祐幸さん、

加藤紘一さんの通訳をしました。金丸信さんもやりました。

—— 山下元利長官は。

沼田 山下長官はよく覚えてないけど、やったと思います。大村襄治長官も通訳したはずですよ。

—— 少し戻ってしまうのですが、75年の陛下の御訪米のときは、「which I deeply deplore」のところが大使が考えられて、その後いろいろ各方面と協議があったと思うのですが、どのような……。

沼田 僕は英訳を考えたことは覚えていますが、皆さん、それでいいと思ってくれたと思います。その後特にどこかと協議したとの記憶はありません。

—— 「私の深く悲しみとするあの戦争」という言葉は。

沼田 その言葉をつくるときには僕はいなかったと思います。直接にはつくってないですね。つくったのをどういう英語にするかという話でした。

—— この言葉を受けてアメリカ側の反応というのは何かあったのでしょうか。

沼田 あれは割合よかったんじゃないですか。確かですよ。その前に、舟橋さんが書いているけれども、『ニューズウィーク』のバーナード・クリッシャー（Bernard Krisher）には単独でインタビューされているし。それがかなり好感されたということを天皇訪米にスポークスマンとしてついていかれた藤山榊一元駐英大使も言われているでしょう、確か。だから、そういう効果があったと思います。それをサムアップするような形で「which I deeply deplore」という言葉が受け入れられたのではないですか。

—— アメリカに対する印象なんですけれども、ニクソン政権はホワイトハウスと国務省でてんでんばらばらなことをやっていて、ホワイトハウスが主導権を握っていたということがよく言われるのですが、アメリカとやりとりする際にホワイトハウスと国務省のあつれきのようなものを感じることはありましたか。

沼田 ハワイ会談の頃からもうキッシンジャーは NSC の補佐官でしたよね。国務長官になるとその話は変わってきましたが、あつれきはあったでしょうね。ロジャーズ国務長官がそんなに実権を握っているという感じはしませんでしたから。

—— それは端から見ても。

沼田 何となくそういう感じがありましたね。でも、国務省もジョンソン次官でしょう。日本に詳しいし、当時は彼の発言権がかなりあったと思います。在米大使館はウィンストン・ロード（Winston Lord）とかそういう人たちとのお付き合いというのが多かったですね、キッシンジャーの部下たちとの。

—— そのころは外務省としてもホワイトハウスとのパイプをどうするかというのを重視していたと。

沼田 と思いますよ。

—— 議会対策はこのころはやられていたのですか。

沼田 僕が北米一課にいたときに、議会対策という形ではあまり意識していなかったですけどね。佐藤行雄さんがワシントンにいたのは 1970 年から 1973 年でしたね。彼はかなり議会対策をやっておられたと思います。僕がワシントンにいたとき議会対策は大分やりました。

—— 大使が行かれたころは、大使館には議会班があったころですか。

沼田 いや、私が去ってから。

—— その前は随時という感じですか。

沼田 いやいや、その前は、今度ワシントンの話をするときに申し上げますけれども、僕はワシントンに 4 年間いて、前半と後半で随分違いました。後半は、時間の半分ぐらいは議会を歩いていたという感じですね。僕が安保関係で歩いて、田中均君（のちの外務審議官）が経済班で、最後のほうは、別々だけでも歩いていたという感じで。そういうことをずっとやっているうちに議会班ができた。最初の議会担当参事官は今井正君（のちのイスラエル、マレーシア大使）だけど、北米一課で一緒だった。彼が赴任したのは僕が帰ってから 2 年後じゃないかな。その次の議会担当参事官は西田恒夫君（のちのカナダ、国連大使）でしょう。

僕がまだワシントンにいたときに覚えているのは、防衛関係ですよ。コストシェアリングとか、あるいは防衛費の GNP 比率とか。そういうのが非常に話題になったときに、僕はいろいろなスタッフのところを歩いていたら在米韓国大使館の議会担当参事官という人が僕のところへやってきて、議会どうやっていきますかと聞いてきました。彼は議会対策をやれと言われるけれども、Congressional Record をとって「I look for capital K」と言っていましたよ。capital K でまず「Korean」というのを探してということをやっていた。こちらからは、たとえば議会のいろいろな委員会のスタッフがいるけど、そういう人たちのところに会いにいたりして食事したりして会っているよという話をしました。

やはり安保、防衛の関係では議会は大事でしたね、軍事委員会とかね。

—— ちょうどこのころ、大使が在米大使館へ行かれたころから、訪米された外務大臣とか総理が議会の方と会うようになるのかなと思うのですけど。

沼田 そうですね。

—— あのところから日米関係でも重要になってくるという。

沼田 そうですね、議会との関係が重要になって。その前は行っていなかったかな。田中さんは行っ

ていないかな、考えてみたら。

—— 記録を見る限りではという感じですけど、恐らく 70 年代前半は行かれていない。というのは、70 年代後半になって行かれたときにすごく議会の方が喜んでいるんですよ。これまでこういうことはなかったということですね。上院の外交委員会とかの委員長が主催するディナーとかに外相が行かれたりすると大変歓迎されてとか。

沼田 行政府を相手にするだけで手いっぱいだったという感じがしないでもないですね。

沼田貞昭オーラルヒストリー ③

在米大使館政務班

—1970 年代後半から 80 年代前半の日米関係—

質問票3 在米大使館政務班—1970年代後半から80年代前半の日米関係—

1. 1978年、大使は在インドネシア大使館から在米大使館勤務に異動され、1982年に本省に戻るまでの4年間、ワシントンDCにお勤めになられています。まずは、この間の大使館員の陣容・体制や米国側でカウンターパートとなった方々のことについてお聞かせください。

■参考：大使略歴

1978～82年 在米大使館一等書記官

■参考：当時の大使館・米国政府（日本関係）の陣容

【大使】1975～80年 東郷文彦

1980～85年 大河原良雄

【公使以下、別紙参照】

【国務次官補】Richard Holbrooke (1977～81) → John Holdridge (1981～82)

【国務次官補代理】Roger Sullivan → Michael Armacost → Thomas Shoesmith

【国務省日本部長】Nicholas Platt → Alan Romberg → William Clark → Albert Seligmann

【国防副長官】（レーガン政権）Frank Carlucci

【国防次官（政策担当）】Robert “Blowtorch” Komer (Despite my reputation, I try to be statesmanlike.)

【国防次官補】David McGiffert (1977～81) → Bing West (1981～83)

【国防次官補代理】Michael Armacost → Nicholas Platt → Richard Armitage

【国防省アジア太平洋部長】Brigadier General Thomas Pinckney

【国防省日本課長】Captain Nepier Smith → Commander James Auer

【NSC 部員（日本担当）】Michael Armacost → Nicholas Platt → Don Gregg

■参考：当時の主な出来事

1978年12月 福田内閣退陣、大平正芳内閣成立

1980年6月 大平総理急死、鈴木善幸内閣成立

1980年11月 米大統領選挙で現職・カーターにレーガンが勝利

1981年1月 レーガン大統領就任

2. 大使が在米大使館にご勤務された期間、国際情勢は「新冷戦」へと向かい、日米関係においても安全保障問題が大きな比重を占めました。日米ガイドラインの策定やいわゆる「思いやり」の開始、イラン人質事件、ソ連のアフガニスタン侵攻をめぐる緊張、鈴木首相訪米時の日米「同盟」問題、GNP1%に象徴される日本の防衛努力に関する議論などが発生したのがこの時期です。これら日米安保問題に関して、在米大使館は本省と米国政府との間でどのように対応されていたのでしょうか。

■キーワード

- ・ 新冷戦
- ・ 「スウィング」理論
- ・ 「思いやり予算」(cost-sharing)
- ・ 中期業務見積もり
- ・ 日米装備・技術定期協議 (S&TF)
- ・ 日米「同盟」問題
- ・ シーレーン防衛
- ・ GNP 比 1%問題 (日本の防衛努力)
- ・ 対米武器輸出供与問題
- ・ リムパック (環太平洋合同演習)

■参考：当時の主な出来事

- 1978 年 6 月 金丸信防衛庁長官、在日米軍基地勤務の日本人従業員給与の一部を日本側が負担することを決定（「思いやり」予算）
- 1978 年 11 月 日米防衛協力の指針（ガイドライン）策定
- 1980 年 2 月 海上自衛隊、リムパック参加
- 1980 年 3 月 大来外相訪米と中業前倒し達成の要請
- 1980 年 9 月 第 1 回日米装備・技術定期協議の開催
- 1981 年 3 月 伊東外相訪米とシーレーン防衛
- 1981 年 4 月 貨物船日昇丸が米原潜に衝突され沈没
- 1981 年 5 月 鈴木訪米と日米「同盟」問題
- 1981 年 6 月 第 13 回 SSC・大村防衛庁長官訪米とシーレーン防衛
- 1983 年 1 月 対米武器技術供与に関する内閣官房長官談話

3. 在米大使館にご勤務中には、日米安保に関する問題の他にも、

- (1) 米中国交正常化
- (2) 在韓米軍の撤退問題
- (3) ベトナムのカンボディア侵攻、中越戦争
- (4) 米ソ軍備管理

といった、国際問題が次々に発生しました。これらの問題に関して、大使はどのように対応されたのでしょうか。ご印象に残っていることをお聞かせください。

■キーワード

- ・ 米中国交正常化
- ・ 在韓米軍撤退問題
- ・ ベトナムのカンボディア侵攻
- ・ 中越戦争
- ・ イラン革命
- ・ ソ連のアフガニスタン侵攻
- ・ モスクワ五輪ボイコット
- ・ 米ソ間の軍備管理（TNF 削減問題）

■参考：当時の主な出来事

- 1978 年 8 月 日中平和友好条約締結
 - 1979 年 1 月 米中国交正常化
 - 1979 年 2 月 中越戦争（～3 月）
 - 1979 年 6 月 米ソ、SALT II に調印
 - 1979 年 7 月 カーター大統領、在韓米軍撤退計画の延長を表明
 - 1979 年 12 月 ソ連、アフガニスタンへの侵攻開始
 - 1980 年 5 月 JOC、モスクワ五輪ボイコットを決定
 - 1981 年 9 月 米国、ソ連に対し「ゼロ・オプション」提案
-

在米大使館政務班—1970 年代後半から 80 年代前半の日米関係—

■ 在米大使館—日米両国の陣営—

—— ワシントン時代の 4 年間（1978～1982 年）のお話を伺いたいと思います。まず最初に大使館の陣営・体制もしくはアメリカのカウンターパートについてお聞かせください。

沼田 大使館の陣営は、私は丹波實さんの後任で赴任しました。丹波さんが政務班の一等書記官で安保・防衛を担当しておられたのですけれども、その後任ということで、私が行ったときの政務班長は有馬龍夫参事官。後の内閣外政審議室長、駐オランダ、ドイツ大使でおられた。有馬さんは私が最初にロンドンで勤務を始めたときの直属の上司です。それでまたワシントンで一緒になって。それから、有馬さんは宮澤喜一外務大臣の秘書官をしておられた時に、私は宮澤大臣の通訳。宮澤外務大臣は本来通訳は必要ないのですけれども、時々通訳を頼まれたということもあって、かなり存じ上げていました。有馬さんは何とんでも St. Paul's School、ハーバード時代以来の豊富な人脈を持っておられる。後で名前の出てくるニコラス・プラット (Nicholas Platt) とか、当時の友達がたくさんおられた。

それから、次席は角谷清特命全権公使ですね。後に儀典長、式部官長をやられた。それから、経済公使は深田宏公使。深田公使は、私が北米一課の事務官のときの課長です。

総務の参事官が藤井宏昭参事官。藤井さんは、僕が北米一課の首席事務官のときの北米一課長でした。その後も僕が北米一課長のときの北米局長、在英大使館特命全権公使のときの大使。経済の参事官は松浦晃一郎参事官。後のユネスコ事務局長の松浦さんも北米一課長をやっておられました。

それからもう一つ、都甲岳洋参事官が藤井さんの後任で総務に来られたのかな。後のロシア大使です。都甲さんは僕の西高と東大の ESS の先輩で、かつロンドンでも一緒だった。というわけで、人間関係は良く知っている人ばかりだったという感じです。

東郷文彦大使の下で 1 年ぐらいですかね。その後は大河原良雄大使。

東郷大使という方は大変にシャープな頭脳の方ですけれども、大変にはにかみ屋で、チャーミングな方です。いろいろ逸話があるのですけれど。でも、大変厳しい方で、何か電報を書くと、特に大使が誰かと会ったときの電報なんかを書くと、まず有馬さんが僕の書いたのを短くして、それを東郷さんに持っていくとさらに短くなる (笑声)。外務省というのは電報の書き方にすごくうるさかったのです。というのは、間違えると戦争になってしまう。本当に人を動かす道具ですからね。だから、ものすごくその辺は厳しかったです。電報文化とも呼ばれるけれども、その伝統がまだ残っていて、今は e メールもあるのでそんなに一生懸命厳しくやらなくてもいいのかもしれないけれども。

あと、東郷大使について申し上げますと、犬が大変お好きな方です。それから、東郷夫人、東郷いせさんは、東郷茂徳外務大臣のお嬢さんで母様はドイツ人でしたが、大変西洋的なセンスを持っておられた方で、それなりに楽しい大使館でした。

1 年ぐらいたつと大河原大使になったのですが、実は大河原大使は私が北米一課に 4 年間いたときの最初の局長です。ワシントンの公使をやっておられて、北米局長で戻ってこられて、それから官房長をやって、オーストラリア大使をやられて、大使で来られたのです。北米局長のときからよく存じ上げていたのですけれども、大河原大使は大変にバランスのとれた人格者です。

大河原大使について思い出すのは、北米局長時代なのですけれども、よく国会で攻められるわけです。安保問題なんかで。そうすると、あの方は長身でしょう。6 尺ぐらい。それで長い体を折り曲げて訥々と話されると野党のほうも攻撃が鈍るみたいで (笑声)。国会答弁をするときってあまり声が

響くといけないのです。

—— そうなんですか。

沼田 僕はそれで嫌みを言われたことがある。安保課長時代に共産党の議員にもっとしおらしく答弁しろと言われたことがあります。それは余談です。

それで、川島裕さん。外務次官の後侍従長を務めた川島さんが、僕が赴任して数カ月で来られて政務班の次席になりました。1981年のイランの人質が解放になった、ちょうどあのころに離任された。

—— 大統領の就任前日とか、それぐらいだと思います。

沼田 でしょう。そのころに川島さんは離任しました。その間は川島さんが政務班の次席だった。

それから、後の次官の竹内行夫君、彼が赴任したのが鈴木訪米のちょっと前ですね。81年の4月に来たのかな。彼は実はロンドンでというか、オックスフォードで僕の1年下で、ロンドンの大使館で僕の後任で、それからインドネシアで僕の後任で、ワシントンでまた僕の後任（笑声）。彼と前任、後任の関係だったのはそこまでですけどね。

有馬さんが、私の4年目の81年の夏だったかな、人事課長になって帰られたのです。その後に政務班長で来られたのが渡邊允さん。のちの侍従長。渡邊允さんは御承知のとおり、やさしい貴公子ですね。

ということで、後で話の中にも出てきますけれども、僕は安保・防衛と中国、韓国なんかを担当していたのですが、圧倒的に安保・防衛の仕事が多くて、防衛班とも協力していました。協力していましたが、こんなことを言うと差し障りがあるかもしれないけれども、政策面は全部うちがやっていたという感じです。ただし問題が出てくるのが装備協力の話でした。情報が外務省に共有されていないということが起きるわけです。

—— 大使館の中の防衛班というのは防衛駐在官の方々ですか。

沼田 防衛駐在官です。ただ、私が在任している間にシビリアンの太田洋次さんという人が政務班に来ましてね。途中から。

—— 防衛庁のですね。

沼田 のちの運用局長です。その後もずっと政務班にシビリアンがいますよね。だから、私がいた前半は防衛班は……。

—— 最初は制服の人しかいなかった。

沼田 はい。

—— 2人か3人ですか。

沼田 いや、もっといますよ。陸海空それぞれいて、副官がいたから、6名いましたね。

—— それで班長がいるんですよね。

沼田 6名のうち1名が班長です。

—— それは向こうで決めるのですか。

沼田 班長は陸海空で回していましたね。私のときは、最初は空で、その次が海ですね。

—— 政務班の中というのは何人ぐらいいるものですか。

沼田 大分いたな。

—— 名簿がありますけれども。

沼田 これは78年でしょう。

—— 78年ですね。その裏に80年があります。

沼田 政務班長が有馬さんでしょう。これでいくと政務の次席が川島さんでしょう。その次は僕で、それから一等書記官は浅見真君（のちのケニア大使）。ここに農水の熊澤英昭さんの名前が出ていますね。のちの農水次官。

—— 私はアメリカ大使館を知らないのですけれども、各省はどういう班に分かれているのですか。

沼田 それは経済班と言ったり、農水は農水で仕事をしていたり。

—— それぞれ。

沼田 はい。

あと、これで言うと、浅見君がいて、もつといたな。たとえば政務班で言うと、この中で渡辺尚さん。この人は法務省の検事ですね。それから先ほど話した太田洋次君、彼が防衛庁のシベリアン。大島正太郎君（のちのジュネーブ代表部大使、韓国大使）は総務と政務の兼務でした。堀村隆彦君（のちのブラジル大使）がスペイン語、ラテンアメリカ担当。金重凱之さんは警察庁（のちの警備局長）。

—— 田中均さんは何をやっていたのですか。

沼田 田中均君は経済班。

あとはいるかな。山下勝男さん（のちのパプアニューギニア大使）は総務班だったね。もうちょっといたような気がするけれども、大体そんなところですよ。

—— 10人いるかいらないか。

沼田 10 人はいたと思います。

それで、本省のほうは安保課との仕事が一番多かったのですが、安保課長は、最初の 3 年間、78 年から 81 年までは丹波さん、その後に加藤良三さんになります。ちなみに、加藤良三さんは北米一課で僕の前任者でした。

アメリカの方は、僕は質問票の「当時の大使館・米国政府（日本関係）の陣営」を直したのを送りしましたが、これを見ていただくとわかります。上の方からいくと、東アジア・太平洋担当の Assistant Secretary of State がリチャード・ホルブルック（Richard Holbrook）からジョン・ホルドリッジ（John Holdridge）に代わったということですね。

それから、その下の国務次官補代理はロジャー・サリバン（Roger Sullivan）からマイケル・アマコスト（Michael Armacost）になって、最後はトマス・シュースマス（Thomas Shoosmith）。たしかシュースマスの時期は短かったですね。

日本部長はニコラス・プラットからアラン・ロンバーグ（Alan Romberg）、ウィリアム・クラーク、アルバート・セリグマン（Albert Seligmann）。

プラットは有馬さんとセント・ポールズとハーバードで一緒だったのかな。それであの 2 人は非常に仲がよかったですね。

アラン・ロンバーグは中国の専門家ですが、Policy Planning から来て、国務省にはいつまでいたかな、途中からスティムソン・センターにかわりましたね。

ちなみに、プラットの専門は中国語でした。アラン・ロンバーグも中国語。ウィリアム・クラークは日本語で、彼は日本部長経験者としては出世しましたね。その後、たしか Assistant Secretary をやって、インド大使をやって、エジプト大使をやっています。アルバート・セリグマンも日本語の人でした。

それから、国防副長官は、カーター政権のときは大使も含めて副長官とのやりとりはあまりなかったのですが、レーガン政権になってからフランク・カールッチ（Frank Carlucci）と大河原大使が何回か会っています。

国防総省では、我々との関係を主にやっていたのは、マイク・アマコストが国防次官補代理、それがニコラス・プラットにかわったわけです。だから、アマコスト、プラットが行ったり来たりして、ぐるぐる回っているわけ。

—— ここにホワイトハウスも入れると、本当にここですと、前任はアマコストさんで、その次はプラットさんになる。

沼田 だからやりやすかったです。そういう意味ではすごくやりやすかった。

それで、国防次官補代理は、アマコスト、プラット、そしてリチャード・アーミテージになるのですが、実質的にはこの人たちと我々はずっとやっていたわけです。国防総省の話はね。副長官が出てくることはほとんどなかったのだけれども、カーター政権の最後の 1 年ぐらいのときにロバート・「ブロートーチ」・コウマー（Robert “Blowtorch” Komer）という政策担当次官が出てきた。ブロートーチというのは、あまりに迫力があつたのでついたあだ名のように（笑声）。

—— 何でそんなあだ名になったのですかね。

沼田 ブロートーチだから、バーナーみたいに焼いちゃうよという感じで。

もう一つのあだ名は「Darth Vader」(笑声)。彼が何かのときに、大使と話したときかな、実際に「Despite my reputation, I try to be statesmanlike」と言っていました。僕のノートに書いてある。

国防次官補は、マクギファート (David McGiffert) という人がまさにアマコストなんかの上にはいたのですが、最初に行ったところ、78 年はマクギファートも大分出てきましたね。その後にビング・ウェスト (Bing West) という人がカーター政権になってから来たようですけれども、僕は全然覚えていない。ビング・ウェストという人は。竹内君に聞いたら、カーク・ダグラスを小さくしたみたいな人ですよと言っていたから、彼は会ったことがあるらしいけれど (笑声)。

僕が行ったときの国防総省は、マイク・アマコストの下にトマス・ピンクニー准将 (Brigadier General Thomas Pinckney) という人がいました。空軍の軍人です。実際には、仕事の上では、ジム・アワー中佐 (Commander Jim Auer) は名前を聞いたことがあるでしょう。ジム・アワーとの関係が一番深かったのですが、その前にネピア・スミス大佐 (Capt. Nepier Smith) という人がいて、この人もなかなかいい人でした。僕と一番関係があったのはこの 2 人ですね。

NSC は、マイク・アマコスト、ニコラス・プラットが國務省、国防総省を入れかわって、レーガン政権になって、僕の最後の 1 年か半年ぐらひはドン・グレッグ (Don Gregg) が NSC にいましたね。彼はもともと CIA だったのは御存知でしょう。のちの韓国大使です。

あとは、ここには書かなかったけれども、81 年、アメリカの政権が交代して共和党政権になったときに、ナショナル・セキュリティ・アドバイザー (国家安全保障担当補佐官) がブレジンスキー (Zbigniew Brzezinski) からリチャード・アレン (Richard Allen) になりました。リチャード・アレンは 1 年ぐらひでやめました。

國務長官は、ヴァンスから——ヴァンスはイランの人質事件の奪還作戦が失敗したときにプロテストしてやめたのですね。それでマスキー (Edmund Muskie) になった。その後、レーガン政権になってヘイグ (Alexander Haig) になった。

国防総省は、ハロルド・ブラウンがずっと国防長官で、その下にマクギファートがいたり、ボブ・コウマーが出てきたりと。そしてレーガン政権になってキャスパー・ワインバーガーになって、カールッチが時々出てきた。そんな感じですね。

そうすると、私が覚えている主なアクターというのは、アマコストであり、プラットであり、クラークであり、アーミテージであり、ジム・アワーである、そんな感じになります。國務省、国防総省、NSC、これは人が同じところを musical chair のように互いに入れかわっているということもあって、彼らとの緊密な連絡は保たれました。

あと、後で実際の中身をお話ししていくとおわかりいただけると思うけれども、議会との関係というのが随分ふえたのです。議会のスタッフとの関係は、私の感じでは、最初赴任したころは私の時間の 4 分の 1 ぐらひだったのが、離任するころは半分ぐらひになりました。議会のスタッフのところを駆け回るといふのは。それはなぜかというのとは後でお話しします。

大体人の関係は以上です。

■ 「思いやり予算」の対米説明

—— はい。次にコストシェアリング、思いやり予算のことをお願いします。

沼田 最初に「思いやり予算」という言葉が出てきたのは、78 年 6 月に金丸信防衛庁長官が来られたときに僕が空港に迎えに行ったら、当時防衛庁の岡崎久彦参事官 (のちのタイ大使) が、飛行機を降

りてくるなり、「沼田君、あした長官が『思いやり予算』と言うから、ちゃんと訳してくれよな」と（笑声）。日本語で言えば「思いやり」なのでしょうね。**Sympathy budget** ではないということはピンときたのです。ではどう訳すかというのが難しくてね。「思いやり予算」というのが難しいのは、言葉自体が上から目線なんです。だから、どう訳したらいいかなと思ったのだけれども、結局僕はパラフレーズして訳した覚えがあります。「思いやり」自体は何と訳したかよく覚えていないけれども、要するに、英語で **to put myself in your shoes** という言い方をするでしょう。相手の身になって考えるという。それを使った覚えがあります。

—— **Host nation support** という言葉自体はあったのですか。

沼田 もっと後になってからです。コストシェアリング、あるいはホストネイション・サポート。「思いやり」は今から考えれば **empathy** なのでしょうね。恐らく。一番ぴったりの言葉は。当時はそこまでは考えなかった。

—— でも、相手にしたらあまりピンとこないと思いますけれどね。**Empathy budget** と言われても（笑声）。

沼田 だから、一番中身をあらわしているのはホストネイション・サポートですよ。

それはそれとして、78年の4月私が着任した直後に福田総理訪米がありました。僕はこのときは赴任直後だったから通訳しなかったですね。その当時、在日米軍経費負担というのは年に5億3000万ドルで、財政負担の関係もあってそれがどんどんふえてきているということがあって、アメリカからの要求がいろいろ出てきていた。それに対して我々は、我が国の自主的決意に基づき静かに進めていく場合にのみ実を結び得るのだということを言って、実際問題として、丹波課長が非常に奮闘された。大平答弁というのをお送りしたと思いますけれども、これは大分古いですね。昭和48年3月13日の衆議院予算委員会の外務大臣答弁というので、これは労務費ではなくて施設について、「この際政府としては、……原則として代替の範囲を越える新築を含むことのないよう措置する所存であります」と述べていて、それで上がかぶせられているのですけれども、これを何とか打破しようとして丹波さんがいろいろ知恵を出した。それがだんだん労務費にも広がってくるのです。

それで、78年6月に金丸さんが在日米軍基地勤務の日本人従業員給与の一部を日本側が負担するということを決定して、思いやり予算を僕はさっきのように訳して、その後、8月になって下院で火がつくんです。下院での **Defense Appropriations Bill** の議論です。これもサラリーのことを言っているのだけれども、これは日本だけではなくて **allies**（同盟）全体について言っているわけです。要するに現地で払っている賃金水準よりも高いものは払わないぞということを法案に書き込もうとしたわけです。**House Committee on Appropriations** の **Defense Subcommittee** でそういうのが出てきました。——失礼、その前に **General Accounting Office** のレポートというのが出たのです。何月だったかな、5月ぐらいだったかな、そのテキストは見つかりませんでしたが、これは日本だけじゃなくて同盟国全体のバーデンシェアリングを問題にしたのです。**General Accounting Office** というのは議会の一部ですから政府自体ではないのですけれども、日本の新聞だと全くその区別がつかなくて、大騒ぎになりました。

そのあたりからみんな注目するようになって、8月になると下院の **Appropriations Bill** の附帯条項みたいな感じでこれが出てきて、そこから我々、これは大変だということで走り回り始めたのです。下院のスタッフと議員を対象にいろいろ走り回ったのですが、上院は割合冷静でした。下院は随分いろ

いゝな議員に働きかけて、下院と上院両方の議員に働きかけましたけれども、ここに書いてあるのはみんな議員自体に働きかけるよりもスタッフに働きかけた例が多いのです。上院はイーグルトン (Thomas Eagleton)、プロクシマイヤー (William Proxmire)、マサイアス (Charles Mathias)、マグヌソン (Warren Magnuson)、イノウエ (Daniel Inouye)、ステニス (John Stennis)、ヤング (Milton Young) 議員のスタッフ。この辺から僕は主に下院スタッフに働きかけるというのが始まったわけ。スタッフに働きかけるといっても結構大変で、彼らも忙しいので、まず時間がなかなかとれないわけですね。せつかく時間をとると 15 分しかないとかいうので、3 分ぐらいで説明しなければいけない (笑声)。彼らは彼らで忙しい議員に説明しなければいけない。

—— 何でも 5 分で説明しなければいけないと言いますよね。

沼田 そうなんです。その材料をどうやって提供するかという話だから、結構訓練にはなりますけれども、その辺から始まったわけですね。

上院はそんなに騒いでいなかった。それで、両院協議会というのが 10 月初めにあったのです。上院と下院の意見が異なれば両院協議会をやりますから。そのときに下院が強硬で、それに対して我々は、この条項が入ると我々が一生懸命やっている施設関係の思いやり予算がだめになってしまうぞと言っていろいろ頑張って、その条項は撤回されましたが、その次の年に向かって労務費に焦点が当たってしまったわけです。それはずっと残ります。労務費に焦点が当たる。その間に丹波課長が必死になって苦勞して、地位協定をアクロバティックに解釈して労務費も最大限手当てしているということをいろいろ説明して回りました。

1 年たって、大平総理訪米のとき、79 年 5 月のころには在日米軍経費はその前年に比べて 1 億ドル以上ふえているということです。それから、80 年の 3 月の時点で F-15 の格納庫強化 (hardening of the shelter) のために 3 億ドルを出した。

というようなことがあって、その後はずっと議会の話になりますけれども、80 年の 7 月にレビン (Carl Levin) 上院議員が Sense of Congress Resolution というのを出した。その中味は、同盟国全体に対して SOFA (地位協定) の再交渉をしよう、そのことによって同盟国の負担がふえるように地位協定の再交渉をすべしというのを出した。Sense of Congress Resolution 自体は拘束力がないので、デモンストレーションみたいなものですが、そういう動きが出てきた。

それから、そのころは大使も議会のいろいろ回られて、そのときには大河原大使になっていますけれども、下院のプライス (David Price) 軍事委員長に対して、我々はコストシェアリングを一生懸命やっているのだ、陸上の経費だけで 2 億ドルぐらいもやっていて、SOFA を改定するというのは非常に危険でプラクティカルではないという話をした。

それから、81 年の 11 月には、大河原大使がカールッチ副長官に対して、コストシェアリングは対象が広がっていて格納庫なんかも手当てするようになってきているという話をして、82 年 1 月 29 日かな、大河原大使がグレン (John Glenn) 上院議員に——宇宙飛行士だったグレン上院議員、彼もなかなか関心が強かったです——施設関係の経費が 27% 増加している、その内容は格納庫とか米軍の隊員の宿舎とかそういうことまでやっている。地位協定上の制約がある中で労務費はぎりぎりまで出している、だからといって地位協定を改定しようとするのはパンドラの箱を開けることになるというようなことを説明しました。コストシェアリング関係は以上です。

—— 金丸長官がいらしたときにそういう話が出るよというのは、言われるまで御存じなかったのですか。

沼田 知らなかったです。「思いやり」を訳してくれというところから始まりました。ただ、それが問題だということはわかっていた。GAO のレポートがその前に出ていたから。

—— 矛先が向かうとしたら日本か西ドイツだと思うのですけれども。

沼田 西ドイツにも向かっていたと思うのです。西ドイツがやり出しているでしょう。

—— 西ドイツはもっと昔からやっていますけれども、最終的には日本のほうがずっとたくさん払ったんですよね。

沼田 ずっと多いですよ。

—— この問題をドイツの駐米大使館員とかとやりとりするということはないですか。

沼田 それはないですね。ただ、後で出てきますけれども、防衛費自体はドイツの方が上ですからね。次はその話になります。

■ カーター政権での防衛費 GNP 1%問題

沼田 その次は防衛努力、GNP1%関係の話ですけれども、これはどういうわけか、僕のノートで見ると 80 年 1 月から始まるのです。というのは、それまではコストシェアリングが主な題材だったのです。ところが、考えてみると、79 年の 11 月 4 日にイランの米国大使館の人質事件が起きて、それから 79 年の 12 月 14 日にソ連のアフガニスタン侵攻で、その辺から大分そちらに関心が行ったでしょう。同盟国が防衛自体に何をやっているかということに非常に関心が寄せられたということが背景になっていると思うのですけれども、この防衛努力の対 GNP 比の話が僕のノートで最初に出てくるのが 80 年の 1 月、当時は東郷大使ですね。

—— 80 年の何月に大使は交代されたのですか。大体夏ですかね。

—— 80 年の 4 月ですかね。

沼田 とにかく東郷大使が、年末に決まった我が国の予算の防衛費が対 GNP 比 0.9%ということについて、米側の反応が極めて厳しい、失望感が議会に反映して経済・貿易問題に波及していくのではないかと言われているのです。

このころのことについて、僕のノートによると、Library of Congress のニクシュ (Larry Niksch) というアジアの専門家がいるのですけれども、彼と僕が話したときに、カーター政権のアプローチは非常に急に変わった、日本や同盟国にダイレクトプレッシャーをかけるようになった、その主体が国務省から国防総省に移ったと。まさにそのとおりです。直接プレッシャーが来るようになったということです。

そういうプレッシャーがかかってくるようになって、80 年の 2 月から 3 月ぐらいいにかけて、有馬

さんと有馬さんの前任者で当時北米局の参事官だった栗山さんもワシントンに出張してこられて、いろいろ国防総省とか国務省に働きかけた。それは要するに、日本の財政上の制約、特に国債依存度が高いことにともなう制約と政治的制約、世論の制約とか、そういうこととアメリカ側の期待とのギャップがどんどん広がってきているという話をしたわけです。それに対してアメリカ側から、このとき言い始めたのはプラットだな。プラットはこのときは国防総省にいました。要するに、中期業務見積り、**Mid-term Service Estimate** という変な名前なのだけれども、それを1年前倒ししたらどうかという話が始まったわけです。このとき、80年の2月か3月ごろにプラットが言ったこととして僕のメモにあるのが、その次の年の防衛予算の実質増が西ドイツよりも少ないと問題になると言ってきたのです。西ドイツは3.5%の増加率だ、それよりも少ないと問題になる。この辺から西ドイツが出てくるのです。

それから、その年の4月29日にブラウン国防長官に着任早々の大河原大使が会ったときに、アメリカは南西アジア——彼らが南西アジアと言う場合はアフガニスタンもパキスタンもイランも入るのですけれども——及びインド洋に向ける軍事力を高めなければいけないと言っていました。その間に、大来佐武郎さん、このときは大来外務大臣か。

—— そうですね。80年3月。

沼田 大来大臣がブラウン国防長官に会ったのかな。大来さんにも中業を1年早くしろということを言ったということをブラウンが言って、それに対して大河原大使が、アメリカからのプレッシャーのもとに日本はアクションするのではなくて、日本が自身で決めることが非常に重要であるということを言っています。

そのころからだんだんコウマー次官、先ほどのブロートーチが登場してくるのです。彼は、80年8月1日、大河原大使と会ったときにエネルギー問題から説き起こしたのです。エネルギーの状況が厳しくなって、石油価格も上がっている、アメリカはアメリカのオイルアクセスよりも日本のオイルアクセスを守っているのだ、ソ連の軍事力が増大してきたということはイランとかアフガニスタンに象徴されている、そういう意味ではコンフリクトが起きるリスクは80年代のほうが70年代よりも高まっている、そこで各国が連携して努力することが必要であり、アメリカは**rearmament** に注力しているけれども、日本も安全保障上、**security insurance policy** についてちゃんとやれということでコウマーが登場してくるわけです。

それから、そのころに上院議員で、レビン議員、パーシー（Charles Percy）議員、ハッチ（Orrin Hatch）議員の3人が、日米の貿易問題と防衛費の問題をリンクして、たとえばデトロイトの失業者にあなた方は日本のために戦えと言うのは非常に皮肉なことであるということで、日本の防衛費に対する明らかな不満が出てきているということを国務省が言っているのです。

それから、その年の10月、コウマー国防次官が日本に行って、そのときに大村襄治防衛庁長官とも会って、これは細かい数字がいろいろ出てきて、僕もノートを見ていてよくわからなくなってくるのだけれども、要するに概算要求の時点で9.7%増という数字が出たみたいです。9.7%という概算要求の数字は出たのだけれども、大村長官が国際情勢によって状況に変化が生じればこれを見直してもいいということを言ったと解釈したのです。だから、9.7%がフロア（最低限）だと思ったというわけ。ところが、どうもそれが違うようなので、国防総省が言ってきたのは、これはブラウン長官自身が日本に一回圧力をかけなければいけないという話になって、その間に丹波さんもワシントンに一度やってきていますね。それで9.7%の話をして、国防会議の場で安倍外務大臣が渡辺美智雄大蔵大臣に何とか考えろということを言ったというようなことを丹波さんが説明しています。プラットが国防次官補

代理で、2.5%という数字があるけれども、人事院勧告の分だと思いますが、これが 9.7%の内訳に入るのか外に出るのかというのが問題になりました。

—— 給与の引き上げが 2.5%前後とか何とか。

沼田 それですよ。だから、人事院勧告。

—— 自衛官の給与。

沼田 自衛官。だから、人事院勧告で 2.5%増。ちゃんと同じことを調べているのね。すごい。

—— 最終は 7.何%というのがまた出てきて。

沼田 だから、国防総省は $9.7 + 2.5$ じゃなきゃ困るというわけですよ。それで、12 月 24 日にブラウン国防長官と大河原大使が会ったときに、日本はたしか $9.7 + 2.5$ と言っていたね、それで中業を 84 年までにやるものを 83 年に達成するということだったはずだけれども、どうもそうじゃないみたいだね、だとするとこれは非常に強い反応があり得るだろう、日本は東アジアに何ら軍事的問題がないと考えているのかとか、これだと実質 0%ゾーンに近い、GNP 比も上がらないと、そういうことになると、我々は今までずっと抑えてきたけれども、もっと **abrasive approach**——すみません、全部英語で——トゲのあるアプローチが出てくるということを言っているわけです。

—— 経済も成長しているわけですからね。この時期は。

沼田 だけど、これは政権交代を控えていますから。もう大統領選挙の結果はわかっているわけでしょう。共和党が出てくるのはわかっているわけです。だから、カーター政権は最後に何か残したいと思っているわけだから、そういう厳しさが非常に出ているのです。

—— カーター政権って具体的な数字を出すのが好きな政権でしたね。

沼田 これはものすごい。それで、80 年の 12 月 30 日にニューサム (David Newsom) 国務次官——彼は国務長官代行だったような気がするのですが——に大河原大使が会ったときに、大河原大使から、防衛予算は 7.614%増で、対 GNP 比は 0.906%である、デフレーターが何%という話をされて、中業についても、**significant groundwork prepared**、その間にガイドラインにおいても **significant progress** があったし、国会でも社会福祉予算と防衛予算のバランスをどうとるかといういろいろ厳しい状況の中にあって最大限やっているのだという趣旨の話をされたら、ニューサム国務次官が「**very disappointing decision to Administration and Congress**」と言ったのです。ここはずっと読んでしまいますね。**Western defense response to recent events** が重要であって、そういう意識は **new administration** においてももっと強く持たれるだろうと。だからレーガン共和党政権は 9.7%というのは、人事院勧告の分を入れなくて 9.7%だと思っていたと。アメリカのほうは **very substantial new defense burden in Persian Gulf**、GNP 比 5.7%の国防費を出している。中業については前の約束が果たされていないと。これはアマコストが言っていたのかな、**complacency with international situation**。国際情勢の見方が甘いのではないかと。国防費の **real growth rate** はアメリカよりも少ないと。随分

言われているでしょう。大河原大使は、あまり急ぐとせっかく防衛努力をふやそうとしているつぼみが途絶えてしまう、「nip in the bud」と。というようなやりとりをしたのです。今から見ても相当厳しいですね、このやりとりは。

—— そうですね。

沼田 これは日本でも報道されていたんじゃないですか？

—— そうですね。カーター政権の圧力みたいな言葉がやはり新聞に出てきますね。

■ レーガン政権での変化

沼田 さて、それではレーガン政権に行きます。

レーガン政権は、僕の感じとしてはアプローチが大分変わりました。行政府との関係ではかなりやりやすくなった。他方、議会の方はだんだん圧力が高まってくるという図式があるのです。だから、行政府と議会と分けて話します。

行政府の方は、81年2月20日、ワインバーガー・大河原会談、これはワインバーガー長官と大使との最初の会談ですね。ワインバーガーが言っているのは、strategic balance を維持するためにアメリカは rearm する必要があると。「Strong and resolute America is a much more dependable ally for Europe. Mutual efforts should be made for peace in the Pacific and other areas」。それで大河原大使のほうから、日本側では世論、public feeling の問題があり、financial constraints の問題があるということを行ったのに対してワインバーガーのほうが、「time is now to start strengthening defense」。双方が最善を尽くしているという perception が必要であると。「Perception that both are doing the utmost necessary」という言い方をしていますね。

81年3月9日、これは小渕恵三議員、柳澤伯夫議員、横路孝弘議員、小杉隆議員——与野党両方ですね——が、何でもみんな一緒に来たのかな、アーミテージと会っていますね。アーミテージはこの時点ではまだ国防次官補代理ですけれども、そのときにアーミテージが、Soviet adventurism, global domination というのがある、rational division of labor が必要であると言ったのです。Rational division of labor が必要であり、日本は日本で、Japan and surrounding areas を守ると。Persian Gulf と Southwest Asia——Persian Gulf and Southwest Asia という言い方を彼はいつもするのですけれども——その辺が今や荒らされる焦点、fulcrum of contention となっている。アメリカの国防予算は 15%増やしている、問題は何%というよりも effectiveness and capability、お金の額よりも effectiveness and capability が必要であって、たとえば anti-submarine warfare というようなものについて話し合っていく必要があるということを議員に対して言っていますね。

—— 随分具体的ですね。

沼田 具体的ですよ。大変具体的ですよ。

—— この anti-submarine warfare の話はそれ以前にも出たことがあるのですか。

沼田 出ていると思いますよ。

—— でしょうね。

沼田 7月2日、これは丹波さんがやってきたのかな。それでアマコストと話して、そのときにアマコストが、Mid-term Service Estimate、中業との関係で今回は防衛予算 7.5%増よりも少ないことはないでしょうね、7.5%より少なくて実質増が 2~3%にとどまると議会から非常に強い反応があるだろうということを言っていますね。

これは 7月2日だから、鈴木訪米の後ですね。だから、1000 海里の話が出た後。1000 海里のシーレーンを防衛するというのは sensible であると。Mid-term Service Estimate、中業の中では「patrol, surveillance, point air defense, hardening」を取り上げるべきであると。hardening はシェルターですね。それで 76 年度大綱からはもう脱却すべきであると。76 年からの大綱というのは久保卓也元防衛次官がつくったものだから、要するに、小規模な攻撃は日本で対処するけれども、あとはアメリカに頼むよという話でしょう。

—— 「限定的かつ小規模な侵略について……」という。

沼田 そうそう。あの時代はあれで済んだけどということを言っているわけです。

11月20日、大河原・カールッチ副長官。カールッチは結構出てくるのです。略歴を見ると、彼はもともと国務省なのです。ほかのいろいろなことをやっているけれども。カールッチは、この辺は英語をそのまま読んだほうがいいか。「No reason to move from roles and missions approach」。Roles and mission approach というのは、鈴木・レーガンコミュニケで出てきた話ですから、シーレーン防衛を続けるべきだと。「Congress frustration coming from domestic cuts」、国内の予算削減で kongress のフラストレーションが高まっていると。大河原大使からは、あまり表向きのプレッシャーをかけると日本側からのリアクションは favorable でないだろう、我々の国防予算の中で capability to resist、たとえば frontline equipment（正面装備）、それから stockpile などについて、抵抗能力を高めるべく一生懸命やっていますという話をした。

81年12月16日~18日、このときはもう加藤良三安保課長ですね。加藤安保課長が来て、防衛予算は結局 6.5%増ぐらいになるのではないかと聞いたのです。そのときにアーミテージが、給与の分、さっきの人事院勧告の分を含めて 7.5%ということであると——そのまま彼が言っていることを言います—— 「not significant in military terms, but significant in psychological terms」ということを言って、いろいろ議会なんかうるさいので彼らを黙らせる材料が必要だ、「need ammunition to beat down the howling wolves」と言っています（笑声）。この英語のサマリーを見ると感じがわかるでしょう。たとえば host nation support のもとで hardening of shelters。

—— これはどこのシェルターの話なんですかね。

—— 三沢とかじゃないですか。

沼田 三沢とか。そうそう。そういうことで話したのです。

それから、ドン・グレッグがこのときは NSC にいたのだけれども、彼が trade and defense converging、貿易と防衛の話が重なりつつあると。これが僕のノートにあるとおりで、だんだん

tougher line towards Suzuki という感じが出てきている。

—— 今のが何年何月ですか。

沼田 81 年の 12 月。

—— 訪米した後ですよ。

沼田 そう。「No Prime Minister can survive, who is perceived not able to manage US relationship」と書いてある。

—— 向こうが言っているのですか。

沼田 ドン・グレッグが言っています（笑声）。問題だよ、これは。

—— 笑うしかないですね、それは。

沼田 だから、同盟問題は後でやりますけれども、やはり尾を引いていますよね。

—— すごいですね、それは。

沼田 すごいでしょ。

—— ちょっと考えられないですね。そういう言い方をするってね。

沼田 トランプは何をやるかわからないけれど（笑声）。

—— それはちょっと別次元の問題。

沼田 だから、結局 6.5%ぐらいになりました。6.46 かな。

それで、12 月 28 日、大河原大使とストーセル（Walter Stoessel）国務副長官との会談で、結局給与分を含めて 7.754%になったと僕のメモには書いてある。

—— 7.75 ですね。閣議決定で。

沼田 そうそう。すごいね。全部調べてある。

—— 途中で断念しています。

沼田 すごい。

大河原大使は、福祉予算が 2.8%増、教育予算が 2.6%増という中でこれだけやったのはまさにコミュニケに書いた even greater efforts であるということを言われて、それに対してストーセルが、そ

れは welcome news である、給与が含まれなければもっとよかったけどということを言っています。

82 年 2 月 18 日、これがアーミテージ、アワー、渡邊允参事官、私。これは私の離任のときですね。そのときにアーミテージが言っていたこと、これは今読み返してみると当時の感じをあらわしていると思うので、そのまま読みますと、防衛予算について、Fiscal Year 82 Budget については「satisfied in a symbolic sense but doesn't buy much hardware」、まさにそのとおりですね。

—— 買えと言っているんですか。

沼田 そう。中味をちゃんとしろと。

それから、「Mid-term Plan 83-87 should be speeded up」。それから、その次が「last year DOD was a bit ahead」、要するにカーター政権の最後のほうで国防総省がちょっと焦った感じがあるけれども、「now we agreed Japan is an important ally」とワインバーガーが。そして、「we will keep quiet diplomacy. We will emphasize the reasons for roles and missions」。これが私のメモの最後です。私の感じたとおりですね。

次に議会。議会の方は、だんだん動きが出てくるのですけれども、私が一番親しくしていた議会のスタッフは上院の軍事委員会のスタッフで、ジム・ロッカー (Jim Locher)。彼と非常に親しくなっていて、いろいろ話していたのですが、81 年の 6 月 1 日、これは上院の軍事委員会がレポートをまとめたのかな、各国の防衛努力を比較するレポートをまとめつつあって、これによると、NATO 諸国の国防費の対 GNP 比の平均を 1 とすると、日本は 0.25 だと。

—— NATO 諸国というのはアメリカも入っているのですか。

沼田 そうそう。だから 15 番目になっている。

それから、防衛費自体日本は 14 番目だ。ルクセンブルクと同じ。

—— それは比率の問題ですね。

沼田 いや、今度は絶対額で 14 番目。

—— 絶対額でルクセンブルクと同じ？本当ですか。

—— 今でこそ 10 番以内に入っていますけれども、当時はそうだったのですね。

沼田 「Japan ranked next-to-last on all the ratio-measure surveys」、絶対額ではなくて比率で見るとビリから 2 番目ぐらいだったと。彼と僕は親しくしていたから別に嫌味で言っているわけじゃない。

それで、11 月になると、ザブロツキ (Clement Zablocki) 下院議員の決議案で日本の国防費を GNP の 1% にしろという決議を考えているというような話があって、これに対して國務省のシュースミスなんかは、1% なんて言うのとそれをやれば済むような感じを与えてしまうかもしれないということをたしか言っていたけれども、11 月 10 日、アーミテージと渡邊参事官の話で、当時、ヘルムズ (Jesse Helms) 上院議員あたりがまた決議を出そうとしていたのです。それに比べればザブロツキのほうがよほど sensible だ。ただ、上院の決議案といっても年末までに何か出てくることはないだろう。

このときに日本の割合右寄りの人が裏で工作していました。誰だったかな。加瀬英明氏じゃないかと思います。

—— この時期はアメリカの文書を見ているとよく名前が出てきます。

沼田 加瀬英明氏が出てくるでしょう。

—— カーターのころから。

沼田 あまり助けていただいても邪魔（笑声）。

—— 大体政治家の推薦状が書いてあって、これは対応をどうしようかみたいなのが残っている。

沼田 おもしろい。

—— アメリカ側もかなり怪しく思っていたみたいですね。

沼田 でしょうね。

—— また来たみたいなのが残っているの。

沼田 そうそう。

そこでアーミテージが言っているのは、アメリカは **social programs** も **sacrifice** してやっているけれども、こういう状況で **ammunition** として——ここで **technology transfer** の話が出てきます——**two-way technology transfer** で何か進めるとか、それから、ここでガイドラインの話が出てくるのだけれども、日本以外のいわゆる 6 条事態協議（**Article 6 consultation**）が進めば **ammunition** になるねというような話をしています。それからアーミテージが言っているのは、「**we do not connect economy and defense**」ということです。

その次に、12 月 8 日、これはジム・ロッカー上院軍事委員会スタッフが私に言っているのは、ヨーロッパでは **TNF modernization** と **INF talks** というのが焦点になって、**burden sharing** の焦点は今や日本であると。それでレビン議員の決議というのが出てきたのですが、これはまだ **reasonable** ではないか、アメリカは **GNP** の 6%、日本は 1%にも満たない、アメリカが **defense** について日本の 16 倍使っている状況を見ると、その決議は **sensible** ではないかと。ここで「**many in the United States view the Ministry of Finance cynically**」と書いてある。

—— 外務省・国務省とか外務省・国防総省で話されているのですけれども、その話した内容というのはそのまま防衛庁にも伝わるのですか。

沼田 今のなんかはどうやって東京で話しているのか。ただ、これは公開していると思いますけどね。

—— それは本省に任せる感じなのですか。

沼田 そうですね。

—— 防衛駐在官の人とこういう話をしたりというのはあまりないわけですか。

沼田 本省への報告は回覧していたと思いますが、それ以上にはあまり話していません。これは専ら我々がやっています。防衛駐在官には話しにくいでしょう。

—— その辺の感覚はよくわからないですが。

沼田 それは話しにくいんじゃない。

—— 内局から来ている人にも話さないわけですか。

沼田 非常にデリケートな質問で。アメリカ側とその後もやりとりできるかどうかという問題があるので。

—— なるほど。

沼田 今の話を聞いておられて、かなり機微なやりとりだということがおわかりになったでしょう。こっちもどこまで話すかという問題があるから。

—— 当然、大蔵省の駐在官もいらっしゃるわけですね。

沼田 財務には全く話しません。

—— 関係ない？

沼田 関係ない。信頼関係で話しているわけだね。そうでなければ向こうだって「view Ministry of Finance cynically」とは（笑声）。

—— でも、何を言うかわからない人もいますよね。

—— 大蔵省から来ている人たちに対するプレッシャーというのはあり得たのでしょうか。

沼田 防衛予算についてはどうかな。あつたのかもしれない。でも、財務班から我々に何か言ってきたということはないですね。

—— ただ、これは貿易摩擦と表裏一体なわけですね。

沼田 そうなんです。

—— それで経済班は経済班でバシバシやられているわけですね。

沼田 これは、ちょっとつけ加えますと、この時期、さかんに我々が議会とやっているわけでしょう。今の上院軍事委員会のスタッフにしても。それから大使も公使もやっているわけでしょう。大使と公使、田中均君と一緒に、僕は離任の前でしたけれども、防衛の観点から関心を持っている議員は誰がいて、そのスタッフは誰がいて、それから貿易のほうで日米経済摩擦の面で関心を持っている議員は誰がいて、そのスタッフは誰がいてというリストを全部つくって、それに、大使には誰に会ってもら、公使——公使という場合、このときは溝口（道郎）公使になっています。特命全権公使。公使には誰に会ってもらい、それから政務班長の渡邊允さんには誰に会ってもらい、経済公使には誰に会ってもらいというリストを全部つくったのです。それで絨毯爆撃していったわけ。

—— そのリストは交錯はしないわけですか。

沼田 一応突き合わせて。

—— どっちかに入るのですか。

沼田 どっちかに入る。たとえば溝口さんなんかは経済問題に非常に強い人ですから、両方やる。

—— いや、アメリカ側が、貿易摩擦派と防衛問題派というのも人的にはあまり重ならない？

沼田 それは重なりますよ。たとえばミシガン出身のレビン上院議員なんて完全に重なってしまう。ただ、一般論として言えば、後でライセンス生産の話が出てくるけれども、下院議員というのは基本的に選挙区のことを頭にあるわけ。自分の選挙区の雇用がどうなるかということに関心があるから、非常にパロキアルな問題に集中するわけ。経済についてもね。上院議員はもうちょっと視野が広いかもしれない。

—— ドイツだと 60 年代後半ぐらいはずっとオフセット問題といって、貿易の不均衡を駐留費負担で埋め合わせるとか、そういう話にすごいねじれているんですよね。そういうふうにはなっていないのですね。

沼田 はい。

—— それぞれの領域の話として一応進んでいると。

沼田 その話を続けますと、12 月 18 日、加藤安保課長が来られて、僕は自分の知っている議会スタッフに紹介していったときに、例のレビン上院議員のスタッフだったかが、たとえば日本ができることはこういうことがあるんじゃないかと。彼の言っているのは、日本は、いろいろ国内的制約があるからあれはできません、これはできませんということばかり言っているけれども、何ができるかということを使ったほうがいい。そういう意味でやってほしいことと言えば「air defense」「surface to air missiles」「mine countermeasures」「mine-laying」「stocks of mines」「basic ammunition」。随分具体的に言っていますね。

—— 議会がそんなに具体的に？

沼田 議会のスタッフがそういうふうに。軍事委員会のスタッフがそういうことを考えているわけ。

—— Mine というのは？

沼田 機雷。

—— 陸の？

沼田 いや、これは海ですね。

それから、82年の1月13日、ドール（Bob Dole）上院議員。これも大河原大使から細かく数字を全部説明して、「frontline equipment」、前方装備に重点を置いています、それから「sustainability」「stockpiling of munitions」などに重点を置いていますと。それに対して、ドールは共和党の人だから、レビン上院議員の言っていることにあまりインパクトはない、ただ貿易問題についての熱は高まっていますと言っているわけです。

それから、82年1月29日、グレン上院議員。アメリカもそう悪いわけじゃない。アメリカの国防費が 200 billion dollars に対して、日本は 12 billion、アメリカと日本の GNP は 2 対 1 であるから、アメリカはそんなに悪いわけじゃないと言っている。

それから、レビン上院議員は上院軍事委員会のうるさい人で、ミシガン州ですから、自動車問題についても非常にうるさい。レビン上院議員が、日本は国内的には防衛予算で progress があつたと思っているかもしれないけれども、external に見れば「so slow that it is frustrating」。アメリカ人として「very critical on NATO allies and we do not single out Japan」と、NATO についても非常に批判的である。「We expected greater increase than fractional 7.75-7.65%. From US domestic perspective, it is inconsequential」。ミシガンでは失業率が 15%あつて、僕のメモには「they don't understand 0.9% vs. 5.5%」と。だから、相当議会が厳しくなっているという感じが出てきていますね。

それで、12月17日、これが僕のこの関係のメモの最後ですけれども、バーンズ（William Barnds）という人、これは上院軍事委員会のスタッフだったかな、よく覚えていないのだけれども、加藤安保課長にこう言ったのです。「Real danger point will come in 2-3-4 years」と言ったのです。それから、このときに、これはどういう記事だったか、見つからないのだけれども、ルトワック（Edward Luttwak）という人がいるでしょう。彼が何か記事を書いたのですね。

—— 85年危機説とかですね。

沼田 その前に鈴木総理が sincere ではないという記事を書いたようです。「Congressmen struck by the Luttwak article, particularly the idea that Suzuki is not sincere」と。

—— どういう意味で sincere じゃないのですか。

沼田 だからあれですよ。

—— お金？

沼田 いや、同盟とか言っているけれども、実際には。

—— 軍事的に。

沼田 軍事的にあまりやっていないのではないかというパーセプションが出てきているということでしょうね。

それで、「shift of mood in the last couple of months」と言っていますね。いかにムードが変わってきたかと。そして「hearings starting in January」でだんだん怪しくなっているというので僕のメモは終わっています。

だから、行政府のほうはカーター政権末期でかなり苦勞して、レーガン政権になって、さっきのコミュニケの話に出てきます「roles and missions」と言って、一応軌道修正があつて、アーミテージなんかとも仲よくやっていて、それからアーミテージたちは貿易と防衛はリンクしないということをずっと言っていて、それで何とか済んでいたのだけれども、だんだん議会のほうが厳しくなっているという状況ですね。

■ イラン革命とソ連のアフガン侵攻

—— 防衛費に関してアメリカから圧力を受けたときに日本側の抵抗の理由がいくつかあるじゃないですか。財政的な余裕がないとか、あるいは業務の問題とか。それはどこまで本音なのですか。一定程度アメリカへのエクスキューズのためのエクスキューズというのがあるのかな、なんて思っていたのですが。

沼田 本音は本音なのでしょうね。というのは、鈴木・レーガン会談のときにも——これは同盟のときに話します。その前にイラン、アフガンの話をちょっとします。

その前に **Swing Strategy** の御質問があつたのですが、**Swing Strategy** のことが議論になったという記憶はあまりなくて、79年10月8日に「The Secret “Swing Strategy”」というのが **Evans and Novak** の記事で出て、「Consolidated Guidance Study No.8」というので、「Swing substantial US naval force from the Western Pacific to Europe if the Soviets attacked NATO」という記事が出た。それに対して国防総省は——国防総省の反応は僕のメモにあったな——これはスタッフ・スタディで、空海軍の機動性について言ったものであつて、アジア・太平洋のコミットメントは不変であるというコメントがあつたというのが僕のメモに出ています。

イラン、アフガンあるいは **Southwest Asia** とか **Persian Gulf** なんかが前面に出てきたということについて、これはいつなのかな、日にちが僕のメモに書いていないのだけれども、79年の秋ですかね。国務省の東アジア担当局というのがもちろん一番中心なのですが、**Politico-Military Bureau** というのが結構重要です。軍備管理の話もやっているし、こういう全体のストラテジーみたいな話で結構いろいろ話していて、その中で **Politico-Military Bureau** のジョン・マクナマラ (**John McNamara**) という人が、これは僕に話していたのかな、こういうことを言っています。50年代にはアイゼンハワー・ドクトリンのもとで **Middle East** とか **Gulf** とか **South Asia** を重視していたけれども、その後ベトナムに関心が移って、ニクソン・ドクトリンになった。ニクソン・ドクトリンは、イランが **strong and**

viable である間は valid だったけれども、イランがこういうことになって——だから、これはイラン革命の後かな——そういう状況になって、redefining or refocusing of priorities が必要になった。Greater military presence が必要であり、「increase of defense budget, unshackling of CIA」とここに書いてある。increase of mobile force。それで、Gulf、イラン、アラビア半島の small states、それからパキスタンなどが重要になって、facilities in the area が必要になり、rapid deployment も必要になってきた。One and a half wars というのもアジャストする必要がある。1 と 2 分の 1 ではもう足りなくなってきたということですね。そういう方面にアメリカが力を入れることは benefits to Europe and Japan になる。Indian Ocean は難しいだろう。「Shift longer-range air assets, logistic supplies in the Pacific」というようなことを言っている。

というのが 1 つの背景としてあるわけです。

それで、イラン人質事件が 79 年 11 月 4 日で、解放されたのが 81 年 1 月 20 日、大統領の就任式の前の日だったかな。その間、ワシントンの町の木の周りに黄色いリボンがつけられていましたよね。

そのとき、79 年 12 月 10 日、ヴァンス長官が大来大臣に「insensitive」と言ったという話がありますよね。日本がイラン石油の買い付けの長期契約をしようとしていたという話だったかな。

「insensitive」と言われて我々も随分慌てたのですけれども、議会の決議も出てきました。

それから、Soviet invasion of Afghanistan は、79 年 12 月 24 日に invade して、89 年 2 月 15 日まで続くのですが、ソ連のアフガン侵攻のとき、12 月 29 日に外務大臣談話で、これは国際正義にもとる、国際の平和と安定を損なう、直ちに撤兵すべし、オリンピックについてはしばらく見守ると言った。そして米国が対ソ穀物輸出制限というのをやった。

その後、2 月に栗山尚一北米局参事官が来られてマクギファート国防次官補に話している中で、栗山さんがこう言ったのです。アフガニスタンの問題というのはグローバルな問題だけれども、日本のビューロクラシーの中でこういう種のグローバルな問題になかなか対応する体制になっていない。栗山さんがおっしゃるように、まさにそのとおりですね。我々は geo-political significance of Soviet invasion は理解する、だから地域の関係国、パキスタンなんかを支援する必要もあると思うと。それで、オリンピックについては、JOC は平和的環境が保たれば日本は行くようなことを言っていました。その時点では。後で行かないことにするけれども。

それから、2 月に第 7 艦隊の両用即応グループ (Amphibious Ready Groups) が海兵隊の Amphibious Unit とともに Indian Ocean に展開されるという話があった。海兵隊は沖縄ですから、その話が出てきて、想定問答の調整をジム・アワーとやったという記憶がある。この種のことはよくありました。国会で騒がれる。特に 2 月でしょう。予算委員会をやっているときにいきなり出てくると、その日のうちに想定問答をつくって返さなければいけない。でも、ジム・アワーもなれているから、最初から想定問答をつくるわけです (笑声)。大体調査して回答するでしょう。調査して回答するというときは、そのまま読み上げて、想定のお答えになるようなお答えを返さなければいけないが、彼もなれていますから、そういうのをつくったような記憶があります。それは余談です。

それで、その間に大来さんがブラウン国防長官に会っている。4 月 28 日。その間にイランの人質を救い出そうと思ってヘリコプターが行って、落ちてしまった。Operation Eagle Claw というのが失敗してしまったわけですね。それが 4 月 24 日だった。これについて、日本は、人道的見地から理解し得る、非難されるべきではない、アメリカによるイランの領空侵犯があったかどうかということについては、米国の法益侵害、違法性阻却、軍事行動 (海上封鎖)、人質の生命等に与える不測の影響などを考える必要があるが、自制を求めざるを得ないという趣旨のコメントを出しました。

それはそれとして、4 月 29 日、ヴァンスがやめた次の日にブラウン——このときはブラウンはまだ国防長官ですね——が大河原大使に会って、このときにブラウンがこう言ったのですね。「The United

States is coming out of the Vietnam syndrome」。さっき言った politico-military bureau の人と同じようなことを言っているわけですね。それで、「appreciate Japan's support in the Middle East and Southeast Asia」。そのときに周辺国の援助の問題が出てきて、「aid to Turkey, Egypt and Pakistan」。Defense については、アメリカは「devote her strength to Southwest Asia and Indian Ocean」と。ちなみに、Iran hostage rescue operation については、ブラウン国防長官は「had to do this」だったけれども、気候上、climatic な状況を考えるとあれはミステイクだった。「Helicopter can't carry as much as before」と言っていましたけれどね。

そういう状況が続いているところで大平総理の訪米が 5 月 9 日にあったわけです。80 年 5 月 9 日。そのとき、昼食会を兼ねた会談の後に、ローズガーデンだったかな、スピーチというか記者会見みたいなことをやったのです。そのときに大平さんが言ったのは、我々は、必要とされる場合に、また危機に当たって、お互いが必要とする支援を必ず差し伸べるでしょう、我々日本人は、最も雄弁ではないかもしれませんが、貴国にとって確固たる、そして最も信頼できる友邦の一つであり続けます、要するに「a friend in need is a friend indeed」というスピーチだったのですね。これは僕が書いたのかどうかよく覚えていないのだけれども、本省で起草したような気がします。

だから、イラン、アフガニスタン、トルコなんかに非常に焦点が当たって、我々は行政府と議会にまた働きかけて、特にトルコに対する 1 億ドルの援助。それまでは西ドイツが大分やっていたと思います。それからパキスタンに対する 1 億 2500 万ドルの援助、タイに対する 2 億 5000 万ドルの援助、あとエジプト、ケニア、イラク、スーダン、オマーンなど。この辺の宣伝活動は溝口公使も随分、田中均君と 2 人でやっておられた。

それから、80 年 5 月 13 日、これは Politico-Military Bureau のゴンパート (David Gompert) という次長が言っているのは、「access agreements for facilities in Kenya, Somalia, Oman and Diego Garcia」。それから、one and a half wars というのがもう viable でなくなったと言っていました。

そして、5 月 29 日にモスクワオリンピック不参加を決めました。

—— これは特に米大の対応という話ではなかった？

沼田 ではなかったけれども。

それで、80 年の 11 月 10 日、NSC のグレッグが栗山さんがまた来られた時にこういうことを言っていますね。前の政権との比較で、ブレジンスキー大統領補佐官は Middle East とかポーランドとかカリブ諸国とか中国という crisis spots に関心を払っていた。何でこれはブッシュ (George H. W. Bush) が出てくるのかな。「Bush has a clear sense of what the Japanese really mean. The Reagan people are coming in with concerns about American credibility and staying power」と言っていますね。「Carter people had residual hang-ups with Vietnam」、これはそうかもしれない。「Carter people had residual hang-ups with Vietnam, about exercising American power」。それで栗山さんが、今や日本とアメリカは「process of mutual consultations on global problems like Afghanistan」と言いつつ、大平総理は「deserves a great credit」ということを言いました。

その次の年、81 年の 5 月に Politico-Military Bureau のロバート・ブラックウィル (Robert Blackwill) 次長、その後インド大使になった人ですが、彼がこういうことを言っていますね。「Middle East, Persian Gulf, Southwest Asia」について、70 年代は政治・経済の支援が必要だったけれども、今や「important to have a military component」。カーターはレトリックをいろいろ言ったけれども「not spending money」。Military assistance がパキスタンとかトルコ、エジプト サウジに必要。サウジに早期警戒管制機 (AWACS) を売るかどうかというので議会でも大変だった、オマーンの facilities

とかソマリアとかケニアとか、そういうのが必要になっている。それから、このときにアメリカは、CENTCOM というのかな、「New CINC for Southwest Asia」と言っていたのですけれども、軍事面が必要になってきたと。それが主な点かな。

あともう一つは、アラファト(Yasser Arafat)が日本に行くことについて、ウォルフォウィッツ(Paul Wolfowitz)、彼はそのときはポリシー・プランニングにいたのだけれども、相当文句を言っていますね。

—— そうか。まあそうですね。

沼田 それはちょっと外れるけれども、そんな話をした。

■ 鈴木総理訪米時の「同盟」問題

沼田 それで、次に同盟問題。

さっきもちょっと触れましたけれども、79年の大平・カーター会談のときの歓迎式で、これは前にも申し上げたかもしれないけれども、大平総理は、「同盟国であるアメリカ合衆国との緊密で実り豊かなパートナーシップを通じて日米両国が遂行すべき重大な任務を共有しております」と言ったのです。それから、80年の大平・カーター会談のときのローズガーデンでの「a friend in need is a friend indeed」の趣旨の話をされたということが我々の頭にずっとあったわけです。在米大使館で。

それで、鈴木・レーガン会談のときに御承知のとおりのコミュニケをつくった。そうだ。対照表がありありがとうございました。これを見ていて、これは懐かしいなと思いました。同盟の話は、要するに、我々は当たり障りのない日米両国関係と相互信頼ということを書いて、アメリカ側は両国同盟関係の重要性を認識し確認したと言っているわけでしょう。

—— これはアメリカ側からも同じことを言っているのですか。

鈴木・レーガン共同声明（1981年5月）対照表（同盟に関する部分）

	日本側一次案	米国側一次対案	日本側一次対案	最終版
同盟	会談は、緊密な日米友好関係と両国間の深い相互信頼を反映し、友好的な雰囲気の中で行われた。両者の忌憚なき意見交換を通じ、両国が協議している主要な問題に関し、日米両国の基本的協議が一致していることが確認された。	両首脳は、両国間の関係は、日米相互安全保障条約のみならず両国が共有する民主主義及び自由という価値の上にも築かれていることに留意しつつ、両国同盟関係の重要性を認識し確認した。	総理大臣と大統領は、日米両国間の関係は、両国が共有する民主主義及び自由という価値の上に築かれており、また、相互協力及び安全保障条約によって緊密に結ばれていることに留意しつつ、深い相互信頼に基づく両国の連帯及び友好同盟関係が国際社会において極めて重要な意味を持つことを認識し、これを再確認した。	総理大臣と大統領は、日米両国間の同盟関係は、民主主義及び自由という両国が共有する価値の上に築かれていることを認め、両国間の連帯、友好及び相互信頼を再確認した。

沼田 そうですね。それに対して我々は価値観というのを入れましたね。価値の上で、「両国の連帯及び友好・同盟関係」をここに「同盟」と入れた、この時点で。それがもっと簡略になって「同盟」ということで落ち着いたという経緯ですね。

それから、もう一つの方が——こんなに長い案を出したのかな。

—— 防衛関係の話。

鈴木・レーガン共同声明（1981年5月）対照表（防衛に関する部分）

	日本側一次案	米国側一次対案	日本側一次対案	最終版
防衛	<p>総理大臣と大統領は、日米両国間の安全保障関係に近年間覚ましい進展がみられることに満足の意を表明した。</p> <p>大統領は、米国として、力の均衡を維持するために、軍事力の強化に真摯な努力を行う必要があるとの認識を表明した。</p> <p>総理大臣は、日本の防衛に関し、日本の憲法に立脚した考え方を含め、その基本的考え方を説明するとともに、この枠内において防衛装備の質的改善を中心に、今後とも着実に防衛努力を行う考えである旨述べた。この点に関連して、総理大臣は、日本の自衛力の整備については、日本が自主的に決定する事柄であるが、日本の安全保障は、日米安保体制を基調としていることにかんがみ、両政府間で今後とも随時意見交換を行ってゆくこととしたい旨述べた。</p> <p>大統領は、総理大臣のこれらの発言に理解を示すとともに、その決意を歓迎した。</p>	<p>大統領と総理大臣は、日本と米国との間の相互協力及び安全保障条約は、極東の平和と安定の基礎であるとの双方の信念を再確認した。日本及び極東地域の安全を確保するにあたり、両首脳は夫々の国防軍に相応しい任務に基づき、当然の役割分担が存在することを認識し、これらについては、6月10日から12日までホノルルにて開催される安全保障事務レベル協議において、詳細にわたり協議することで意見の一致を見た。この共通の安全保障の責任を分担するために、総理大臣は、日本として自衛力向上の努力を加速化し、在日米軍に対する支援を強化し、日本周辺海域の海上交通路を保全する能力を強化するとの意向を示した。大統領は日本が自国の防衛努力向上に一層の努力を払うとの意図を評価し、この共通の事業に対する今後の日本の協力を歓迎した。</p>	<p>総理大臣と大統領は、日本と米国との間の相互協力及び安全保障条約は、日本を含む極東の平和と安定の基礎であるとの信念を再確認した。両首脳は、日本を含む極東の平和と安全の確保のための日米夫々に相応しい役割の分担が存在するとの認識で一致をみた。総理大臣は、日本の防衛に関し、日本の憲法に立脚した考え方を含め日本としては、日本本土及び周辺の自衛力向上に今後とも着実な努力を行い、また、在日米軍経費の分担についても今後とも努力する考えである旨述べた。この点に関連して、総理大臣は、日本の自衛力の整備については、日本が自主的に決定する事柄であるが、日本の安全保障は、日米安保体制を基調としていることに鑑み、両政府間で今後とも随時意見交換を行ってゆくこととしたい旨述べた。大統領は、総理大臣のこれらの発言に理解を示すとともに、その決意を歓迎した。</p>	<p>総理大臣と大統領は、日米相互協力及び安全保障条約は、日本の防衛並びに極東における平和及び安定の基礎であるとの信念を再確認した。両者は、日本の防衛並びに極東の平和及び安定を確保するに当たり、日米両国間において適切な役割の分担が望ましいことを認めた。総理大臣は、日本は、自主的にかつその憲法及び基本的な防衛政策に従って、日本の領域及び周辺海・空域における防衛力を改善し、並びに在日米軍の財政的負担をさらに軽減するため、なお一層の努力を行うよう努める旨述べた。大統領は、総理大臣の発言に理解を示した。両者は、日本の防衛に寄与することに対する共通の利益を認識し、安全保障問題に関するなお一層実り多い両国間の対話に対する期待を表明した。この関連で、両者は、6月に予定されている大臣レベル及び事務レベル双方での日米両国政府の代表者による安全保障問題に関する会合に期待した。</p>

沼田 防衛関係のはね。これは、日本側一次案は、総理大臣は、日本の憲法及びその基本的考え方の枠内において防衛整備の質的改善を中心に着実に防衛努力を行う、自主的に決定する事柄であるが云々ということを行った。アメリカ側の案が、両首脳がそれぞれの国防軍に相ふさわしい任務に基づく当然の「役割分担」が出てくるのです。日本として自衛力向上の「努力を加速化し」というキーワードが出てきますね。「在日米軍に対する支援を強化」し、「周辺海域の海上交通路を保全する能力を強化」するとの意向を示したと、かなり具体的に出ている。それに対して我々が次に返したのが、日米それぞれに相ふさわしい役割分担というのは受け入れた。日本も周辺の着実なる努力、在日米軍、日本は自主的に云々というのが残っていて、それでもめていた。「適切な役割の分担」、これは受け入れた。それで、「なお一層の努力」。これです。これは僕が考えたのです。「even greater efforts」と。それを見てクラーク日本部長が一瞬考えて、それでいこうと言いました。

—— アメリカ側と日本側、そして最終版を比べてみると、アメリカ側が海上交通路とか周辺海域とかそういうことを言おうとしているのに対して、日本側はそれを薄めたいという感じなのですか。

沼田 それはそうですね。

—— やはりそれは薄めたいという考え方なのですか。

沼田 そこまで書き込むのは大変だという感じはあったと思います。

—— 書き込みたくない理由というのはどういうところにあったのですか。

沼田 まだ中身がはっきりしていないし、そもそも鈴木さんが 1000 海里と言うこと自体、この前お話ししましたが、誰が首相に言ったのかと問題になったくらいだった。

—— この段階ではまだ。

沼田 ということですね。

—— 形としては、これは最終的にアメリカの要求を受け入れる形。

沼田 コンセプトとしては「適切な役割」、roles and missions なのです。キーワードとしては、それで、防衛力を改善し、財政的負担のなお一層の努力でしょう。その後はまさに大臣より事務レベルの協議でやるべきじゃないですかというスタンスです。コンセプトとしては受け入れたし、それがかなり重要な意味を持つわけですよ。

—— クラーク日本部長の名前が出ましたけれども、このやりとりはクラークさんと。

沼田 有馬さん、私と、向こうはクラークですね。コミュニケの交渉は。

—— 直接国防総省側とやられることは。

沼田 それはやりません。

それで、同盟問題は、コミュニケの交渉ということから言えば、4月の初めに日本部と始めて、ジョイント・コミュニケの交渉はワシントンでやろうということをして、安全保障については責任分担の話、今の **roles and missions** が重要ですねと。それから、このときに向こう側から総理とワインバーガー国防長官とのセパレート・ミーティングをやりたいという話がありました。それは実現したのですけれどね。それから、NSC のグレッグからは、「**concise and lofty communiqué**」にしたいと。なるべく短い。そう短くないけれども。そういうことを言っていたわけです。

そうしたら、4月9日に日昇丸事件が起きたわけですよ。これが大変でした。日昇丸の話はまた後でします。

その時点でアマコストまで上がりました。4月13日にアマコスト、クラークと話して、ジョイント・コミュニケは「**lofty and concise**」という話になって、4月何日かな、これはちょっとわからないのだけれども、4月の末かな、有馬さんとクラーク、それと僕で話をして、5月2日に「同盟」を入れるか入れないかという話をして、5月8日に「同盟」は入れようということで、そこで「**even greater efforts**」というのも決まったということです。

総理が軍事的意味はないと言った云々の話ですけれども、アメリカ側の反応はどうだったかといと、5月17日に伊東大臣がやめられて、園田直大臣が就任した。アメリカ側は大臣がやめたとかいうことについては何も言わなかったのです。静かだった。淡々と見ている。それで、6月4日にイクレ (Fred Iklé) 国防副長官に大河原大使が会ったときに、日米の関係は「**moved forward on the basis of the President and Prime Minister's agreement in terms of long-range security relationship**」、要するにさっきのコンセプトの問題として、同盟維持の問題についての合意ができたのでそれぞれ進んでいきましょうと。それで大河原大使が、伊東大臣の辞任とか、その間に米軍の艦船が日本の漁船の **fishing nets** を引っ掛けて切ったという話があったり、それから核に関するライシャワー (Edwin Reischauer) 発言が報道されたりして **public feeling** が **agitate** されている、**opposition** は空母ミッドウェーが帰ってくることにしても反対のデモをしているというようなことを言われたのですが、それに対してアーミテージが、日本の国会の議論は同盟の問題ばかりやっていて、**even greater efforts** のことは議論していない (笑声)。そう言いました、実際。ただ、そのときに大河原大使が、鈴木総理はレーガン大統領との会談の中で日本の世論の問題や予算上の制約の問題、アジアの隣国の心配とか、あまり急いでやるとカウンター・プロダクティブであるから慎重に堅実に進めるべきであるというようなことをかなり言われていたことを指摘しました。それが反映されていないというお気持ちだったのだろうというのが我々の解釈なのですけれども、それはそれとして、アメリカは落ち着いて見ていたということですね。

■ 日昇丸事故、ライシャワー発言、武器輸出協力

沼田 これはやってしましましょう。あとは事故の問題。

日昇丸の話は、81年4月13日。これは大変な事故でした。あの事件が4月9日だったのですね。4月13日かな、国防総省のアマコストに対して有馬さんとか私なんかから、これは処理を誤ると、アメリカ側の日本の防衛努力に対する圧力について日本側でいろいろ感情が鬱積していることもあって逆効果になりかねないということをして、それから、その次の日ぐらいに大河原大使がワインバーガー国防長官に会ったときに、日昇丸事件について国内で **emotionally excited** である、日本側にこの事故のことを米海軍が通報するまでに 35 時間もかかっていたということが問題になっている、それ

からアメリカの潜水艦はこの貨物船のクルーを救出する努力もせずに立ち去った、それからミサイルを載せているのではないかという話もある、だから **thorough investigation** が必要であり、**precautionary measures** が必要であり、**liability and compensation** の問題もある、だからこれは処理を誤ると安保条約自体についての反対を高めるために使われるおそれがあると。それに対してワインバーガーが「**regret**」とは言ったのですが、中間的な報告を出すのはミスリーディングではないかと言ったのですね。それは後で中間報告が出てきますけれどね。マンズフィールド大使が頑張ったのだと思う。「**Not in the position to explain SSN or SSBN or location**」。それから、「**wheels of justice grind slowly**」と。これは非常に保守的な答えでした。ワインバーガーの最初の時点の反応は。

それから我々も随分いろいろ言って、その次にアマコストとかクラークとかが、「**Commander of US Navy in Japan has been authorized to process death and injury claims under the Foreign Claims Commission which can pay meritorious claims without legal liability**」。だから、在日米海軍司令官がクレームの話は処理できますと。「**We respect due process of law**」。それから、大統領から総理にもメッセージを出したし、マンズフィールド大使から外務大臣にも「**we hope the Government of Japan take care not to fuel suspicion about the United States**」、要するにアメリカに対する批判を高めないように配慮してほしい、「**we will keep pressure to expedite the investigation**」という内容のメッセージを出した。

このときに、僕は記事自体が見つからなかったのですけれども、『**New York Times**』のリチャード・ハローラン（**Richard Halloran**）が記事を出したのです（**New York Times**, 23 April 1981, “**Submarine Said to Have Left Crash Area Because Skipper Saw Nothing Amiss**”）。どういう内容だったのかな。有馬さんがこれでびっくりしたと言って、こういう記事が出た、反米感情がますます高まるじゃないかということを書いて、そのときに向こうが言っていたのは、このことについて「**7 apologies** がなされたけれども、これは **unprecedented** である」と。「**7 apologies**」、大統領、国務長官、国防長官、海軍長官までは数えましたが、あと 2 人か 3 人いたみたいですけどね。そのときに有馬さんが、アメリカ側の記者の中で日本の世論について必ずしも十分理解しないで発言している人がいて、せっかく火が鎮まりかけているときにまた刺激しているじゃないかということを書いていました。誰が何を発言したというのはよくわからないけれども。それに対してアーミテージが、海軍がちゃんと質問に答えるようにすると言って、7 月 26 日に **detailed and forthright** な報告があったのですね。

ただ、中間報告はその間にありました。というのは、鈴木総理が訪米されたのが 5 月 8 日か。この 2 日か 3 日前にニューヨークでマンズフィールド大使が中間報告を伊東外務大臣に出したのです。なぜ覚えているかというと、僕はそのときに通訳するためにニューヨークに飛んでいったから。だから、僕はこの時の日米首脳会談のコミュニケ交渉の最後はやっていません。竹内君がやっていた。最後のところはね。そのときに、当時はファクスなんかないから、日昇丸事件の中間報告の内容を僕は電話で当時の安保課の河相周夫事務官（のちの次官）に電話で 3 時間半ぐらいかけて送りました。

あとは、核の問題は、一番問題になったのは、81 年 5 月 18 日のライシャワー発言。日米間の了解のもとでアメリカ海軍の艦船が核兵器を積んだまま日本の基地に寄港していたとの発言。これを毎日の古森（義久）記者が書いて、アマコスト・有馬の間で「**as there has been no prior consultation, there has been no mochikomi**」というラインで打ち合わせた。

それで、ライセンス生産、武器輸出協力の話ですけども、ライセンス生産は、私がワシントンにいてやった最後の仕事なのです。というのはどういうことかということ、**M110 self-propelled howitzer**、自走榴弾砲——大きいやつですよ、マシンガンじゃなくてタンクみたいな大きいやつ——をそのままライセンス生産する、**co-production** するのはだめだというアmendメントが議会で出てきました。そ

れはなぜかという、co-production をすると技術がある程度日本に渡って、競争相手をつくることになるから、finished products を売るべきである、第三国に移転されるおそれがあるというようなことでアmendメントが出てきたのです。

それに対して我々は、これは正面装備の非常に重要な一部であって、これに水を差すと我々の国防努力自体に水をかけることになる、military technology の reciprocal flow というのは一生懸命両方がやっている。それから、日本側の武器体系の capability を高めるためにも必要である。「Non-export to third countries」という形では非常に厳格な政策をとっていることなどを指摘しました。このときに一番中心になったのは、下院の軍事委員長のストラットン (Samuel Stratton) です。ストラットン議員の立場からすればニューヨーク州の自分の選挙区でこれをつくっている、「これは我々の選挙区の工場に注文すれば 43 両できる」「tube と breech の両方買える」とかいう話を大使に対して言っていましたね。それからミシガン州出身の議員も反対していて、オハイオ州クリーブランド出身の議員は、「why can't you just buy that?」、13 両か 14 両は我々の選挙区のアセンブリラインにあると言っていました。それでアーミテージが、この問題は co-production in general についての policy issue となりつつある、だから co-production の一つ一つの案件について benefits とか needs について MOU で厳格な条件をつけて厳しく調べていくことになるということを言っている。この時点で AIM-9-L サイドワインダー短距離対空ミサイルについても同じような問題が生じていて、これはアーミテージが incredibly difficult と言っていますね。彼らにとっては国内の政治の問題でもあるから非常に難しい。M110 は基本的には国内の政治問題、選挙区単位の政治問題で、これは雇用がかかわるからややこしいと。AIM-9-L のほうは technology transfer の問題であって、行政府の中ではそういう technology transfer は withhold すべきであるという意見もあるということでした。

—— では、サイドワインダーについては、行政府としても co-production は嫌だということですか。

沼田 サイドワインダーはそういう意見もあるということです。

それで、武器輸出協力自体については、防衛庁の装備局長が行って話していたということを我々は後から知って、安保課から厳しい電報が来ているでしょう。何の話があったのか報告しろと言って。そういうことが時々ありますが。でも、その後は、あの電報を受けて僕が防衛班と一緒に打った電報も出ていますね。

その後どういうアクションがあったかというのは、僕の記憶する限りでは、80 年の 9 月 17 日に和田裕防衛庁装備局長——ちなみに、防衛庁の歴代装備局長は通産省の人です。このときは和田さんが装備局長で、大使と話していますね。大河原大使からは、これはさっきからちょっと出てきていますけれども、防衛予算について非常に焦点が当たっているときに技術交流の面で積極的に動いているということの印象、何かしら協力的な動きがあるとの意味で、そういう技術交流で進むことが望ましいということ。和田さんからは、武器輸出 3 原則は対米武器輸出の関連で妨げにならないように各省で検討しているというような話がありました。

これは和田さんがアマコストと会ったときに、「ペリー (William Perry) 国防次官が日本に行ったときに forum meetings をやろうということになったけれども、そろそろ two-way flow を始めるべき時期ではないか」と。それでアマコストから、「議会から日本の防衛努力自体についての圧力が強まっている状況に鑑み defense budget 以外のエリアで何らかの進展があることが望ましい」と。それで和田さんから、「日本の国内では export of arms and ammunitions について世論調査をすると 80% が反対している、だから日本の関連企業にも特にまだ聞いていない」という話をして、僕が安保課長のときもこの話は続きます。大体以上ですね。

—— ちょっと戻りますけれども、日昇丸の事故に関しては、すぐ調べられるのは『朝日新聞』のデータベースだったので、それで調べると『New York Times』で社説が4月18日付で出ていて、まず原潜、アメリカ側に全面的な責任があるのだという話と、日米両政府の対応、今回の事故後の日本の抗議、米側の陳謝も意識的なジェスチャーであるとも述べているというようなのが『New York Times』の社説に出たというのが、これは『朝日新聞』に転載されている形ですけれども、恐らくこれのことですね。

沼田 でも、ハローランのは社説じゃないですね。何でしょうか。

—— これだけではなくて、ほかにもいろいろ出ているのかもしれないですけどね。

沼田 原潜の所在を日本に知らせないことによる、この部分でしょうね。これも後である。

—— この最後のところですか。

沼田 いや。

—— 原潜の艦長はというところ。

沼田 そう。

—— でも、これは中間報告後のことですかね。これは困難というお話ですね。

沼田 でも、これは4月18日でしょう。

—— 4月18日です。

沼田 実際にはその2週間ぐらい後には中間報告があったわけですから。その前に大分ギシギシやっていたという話で。

—— 武器輸出交流の話なのですが、78年に安保課から問い合わせがあって、沼田大使が対応されたと。一緒に対応されたタムラさんというのは武官の方ですよ。

沼田 田村豊さんは海上自衛隊の方で防衛班長。

—— 防衛班長の方と国防総省に行って。

沼田 そうそう。それで、これは向こうの名前が消してあるでしょう。

—— ランクがそんなに高くなかったからということなのかもしれませんね。この段階で大使館の政務班と防衛班ですり合わせがあって。

沼田 いや、訓令が来たので防衛班と一緒に執行したということです。

—— ふだんから、こういう形で一緒に仕事をされることはあまりないのですか。

沼田 問題によりますね。この種の技術的な事項というのは当然にはそうならないのですけれども、さっきのライセンス生産の話は例外的なのです。これは本来技術的に防衛班でやっている話でしょう。それが突如政治的な話になってしまって、そうすると我々も動かざるを得なくなる。議会のスタッフには随分行ったけれども、防衛アタッシュと一緒にいった記憶はあまりないですね。

—— 議会には行かなかった。

沼田 ええ。それは、こういうことを言っちゃ悪いかもしれないけれども、今は防衛省もそういうことをやっておられるかもしれないけれども、議会のスタッフに会いに行つて3分間で話をするというのは当時は彼らにはかなり難しい。

—— 技術的なことも入ってきますしね。

沼田 だから、議員にあなたからこう説明してくれというようなことを忙しいスタッフに言って聞かせるというのは結構難しいので。議会担当参事官を実際につくったのは、私が1982年に帰国したしばらく後でした。だから、何か火がつくと、政務班と防衛班と一緒にやらなければいけない状況でした。

—— 78年の後に80年に和田裕防衛庁装備局長がワシントンに来る。それが定期協議化して今も続いているみたいですね。

沼田 続いているでしょうね。

—— 定期化には、外務省はどういう形で関与されたのですか。

沼田 いや、知らない。

—— 当時、協議はどういう形で運営されたのですか。

沼田 当時は東京でもやりましたよ。それは今度、安保課長としての話をするときに何回か。あまり物事が進んだという記憶はない。

—— こういう協議を始めること自体に対しては、大使あるいは政務班、在米大使館はどういう考えでしたか。

沼田 別にそれは、そんなのをやっておかしいということはないですよ。今から考えると、当時のペリー国防次官があれだけ偉い人だとわかっていればもっとやったでしょうね（笑声）。彼の本は読ま

れました？

—— 最近出たやつ？

沼田 うん。あれはすごいいい本ですよ。『My Journey at the Nuclear Brink』。

—— 核の話ですね。盛りだくさんですよ。

沼田 そうそう。

—— 武器技術の話なのですが、最初のころは防衛庁から外務省に情報共有されていなくて、外務省がアメリカ側に聞いて内容を把握していたという話が資料から出てきたことがあるのですけれども、大使館には当然通産とか、あるいは先ほど防衛庁の内局から来られていたとおっしゃっていましたが、そのあたり、つながりですとか話し合いみたいなのは大使館の中ではあまりなかったのでしょうか。

沼田 なかったですね。記憶にはないですね。残念ながら。なぜなかったのかな。

アメリカ側から情報を得たというのは、僕自身はアメリカ側からとったという記憶はあまりないのだけれども、東京でやっていたのかな。

—— たしか在米大から報告が来ていますね。大分前に見た文書なので記憶が曖昧なのですが、

沼田 じゃあ僕が書いていたやつなのかな（笑声）。忘れてしまったかもしれないけれども。

—— こういう技術の問題って、それこそテクニカルな細かい話が多くなりそうなイメージなのですが、

沼田 そうなんです。

それから、これは安保課長のときの記録をまた読み返さなければいけないのだけれども、日本の企業が実際に何に関心を持つのかという問題があるのです。企業を動かさなければいけないわけでしょう。SDI も同じ話があるけれどね。似たような話なので。

—— その辺はやはり通産省が動いているのですか。

沼田 SDI の話になると通産省が入ってきましたね。装備協議に入っていたような気がしますけれども。

—— 装備局長はそもそも通産省ですよ。

沼田 実際にフォーラムをやったときに入っていたかな。恐らく入っていたような気がするけれども。今度安保課長のお話をするときにその辺のお話はできると思います。僕は安保課長を1年しかやっていないから、あまりたくさんやっていない。

—— もう一つよろしいですか。雑ばくな質問なのですがけれども、議会からの不満が特にレーガン政権に入ってから急激に高まったというお話でしたけれども、何か直接のきっかけみたいなものはあったのでしょうか。

沼田 防衛努力自体については、行政府が「roles and missions」ということに集中することで細かい数字の議論で言い合うことを避けるというのがある程度成功したのですが、やはり経済の問題がどんどん深刻になってきたということじゃないですかね。それがはね返ってきたということだと思いますけれどね。実際に FSX の問題というのはまさに燃えてしまうわけでしょう。私はその前の段階までしかやっていないけれども。

—— 先ほど伺った榴弾砲とかサイドワインダーの話は FSX より先ですよ。

沼田 だから、まさにそれなんです。ずっと火種があったわけよ。それがわーっと出てきた。

—— 全然知らなかったのですがけれども、同じ構図だなと。

沼田 そうなんです。それは確かに火種があった。僕は離任直前で大変でしたけれど。

—— サイドワインダーの話は、たしか F-15 を買うときに一緒に買おうとしたら国防総省が反対したみたいな話だったと思うのですがけれども。

沼田 そこまでは僕は。

—— 反対というのはかなり強かったですか。

沼田 いや、僕はそのときのことは知らない。F-15 を買うことにしたのはいつだったっけ。

—— 77 年に決定でした。

沼田 じゃあそのときにあったのかな。

—— 入ってくるのが大使がちょうど大使館に来られたころですね。

沼田 さっきちょっと申し上げたサイドワインダーをライセンス生産することに対して消極的な議論があるというのは、その AIM-9-L が問題になる前からあった問題が顕在化したということじゃないかと思いますけれどね。

—— アメリカ側の防衛力増強とか防衛費増額に関する圧力に対し、日本側が世論や財政的な制約、あるいは海外からの反応を挙げるわけですが、鈴木総理としては本音だったと思われますか。

沼田 本音だっただろうと思いますよ。だから「同盟」ということにあれだけ拒否反応を示されたの

だと思う。

もう一つは、コミュニケというのはみんな事前に交渉してやるでしょう。それにあまりなれておられなかったと思う。それ以上言うと事務局からのブリーフぶりがどうだったのかという話になって、誰がどうブリーフしたのかという話になってしまうからちょっと言いにくいですね。

—— 大統領に日本の制約を強く言うというのは総理自身の御意向だったのですか。

沼田 でしょうね。それはそうでしょう。あの電報を見ると、かなり言われていますよね。鈴木総理のお考えももともととはそうだったのでしょうかね。でも、中曽根さんになるとウィリアムズバーグ・サミットの「西側同盟は不可分である」というような話が出てくる、ちゃんと頭の中に入っているわけだけど。

それから、もう一つは、大平総理はよくわかっておられたと思いますね。その差は随分出てきているなという感じはしますね。大平総理は大局的な観点から考えていたのかなという気がします。

—— 時系列を少しさかのぼってしまうのですが、レーガン政権ができ上がった直後にレーガン政権への申し入れという文書を外務省が作成して、大河原大使が米国側に伝えています。

沼田 僕が出ているじゃない。

—— はい。大使のお名前も入っています。

沼田 忘れていました。

—— こういうことは通例としてあるのですか。

—— 都甲、有馬、沼田同席と書いてあるペーパーですね。

沼田 ということは僕が電報を書いたようですね。

—— その辺はご記憶には残っておられましたか。

沼田 ニカラグア、ジャマイカ。そうそう、これは言っていましたね。

—— 80年の12月ぐらいに、本省で申し入れ用の文書をつくったので、それをしかるべくレーガン政権の要所に伝えよという訓令が来て、それでヘイグとか補佐官のアレンとかに伝えたという電報のやりとりがなされています。

沼田 ここにありますね。これはペーパーか。

—— その下のほうに日本語のものもあります。

沼田 そうだ。何かこんなものを作ったのですね。

—— 中国も担当しておられた？

沼田 ちょっと待って。中国は最初からやっていますね。78年8月には話が出ているから、やっていますね。

これは河野雅治君（のちのロシア大使、イタリア大使）の字ですね。

—— 文字でわかるのですか。

沼田 河野君は字でわかる。

—— 起案者ですね。

沼田 何で河野君が書いたのかな。ああ、河野君は北米一課で書いたのか。

—— 北米一課ですかね。

—— 河野さんの字は読みやすい字ですね（笑声）。いや、事務官の方の字もやはりそれぞれ。

—— 次のところに入ってしまうかもしれないのですが、この中で米中の軍事協力についてかなり警戒感を示している。

沼田 そうでしたね。

—— ちなみに、シーレーン防衛の話は？

沼田 具体的にはあまりなかったですね。鈴木総理のプレスクラブのあれが出ているでしょう。それをやるといい話だねというところまで、僕が安保課長のときにもある程度その話はあったけれども。

—— 大使館時代にはそこまで。

沼田 そんな感じですね。

—— コミュニケにもちょっと出ていたのですが、その後、ハワイで SSC が開催されています。

沼田 SSC には僕は行っていません。後で議論があったかもしれないけれども。

—— その後に大村防衛庁長官が来て、また同じようなことを話されています。印象には残っていませんか？

沼田 記憶にないですね。

—— もう一点だけ。カーター政権の末期からアメリカの戦略が 1 と 2 分の 1 から変わって軍拡の方向に動いていくと思うのですけれども、沼田大使からごらんになって、アメリカの頼りがいというか力強さというのは変わりましたか。

沼田 カーター政権のときに比べて大分変わりましたね。

—— レーガン政権になってから？

沼田 はい。レーガン政権になって頼りになるという感じはしましたね。

—— それ以前のフォード、ニクソンとかと比べるといかがですか。

沼田 安保についてはどうかな。僕は安保関係は北米一課のときはあまりやっていなかったから。でも、カーターからレーガンになって大分変わった。何というかな、ギスギスしないで割合難しい話ができるという感じになったということはあると思いますね。さっきの話でも、ブラウンとのやりとりにしても相当きついでしょう。プラットとかアマコストが *by nature* できつい人たちというわけではないし、我々も仲よくしていたのだけれども、話の中身はかなりきつかったわけです。レーガン政権では、たとえばアーミテージなんかは非常にそれを気にしていたということはあるし、なるべく上から押しつけるような形じゃなくて。アーミテージと初めて会ったときは、すごい胸板が厚くて逞しい力もちという感じで（笑声）。すごいでしょう。アーミテージは結構そういう人です。

—— 見た目が。

沼田 見た目が。

—— スタイルはずっと不変ですよ。しゃべり方も。

沼田 そうそう。

—— きょう話が出たなかだと、ホワイトハウスと国務省の対立が特に実務に影響した例はあまりないという印象です。

沼田 ないですね。我々のころはね。ただ申し忘れていたのですが、NSC のプラットとかアマコストは東京の大使館にいたのです。僕が北米一課のときにプラットは東京の大使館にいて、そのときから知っていますし、アマコストも東京大使館にいましたからね。ICU の先生だったのだけれども、それから東京大使館でアカデミック・アドバイザー。そのころから知っていたので、みんなお友達みたいな感じでやりやすかったということがあります。アーミテージは当初はどんな人かなと思ったけれども、話してみると紳士的でまともな人。

—— カーター大統領図書館でちょっと文書を見ていたのですけれども、先ほどのヴァンス国務長官ですね、彼の例の *insensitive* という発言が出て、その後、多分ルートのにはホワイトハウスのブレ

ジンスキーから東京の大使館というかマンスフィールド大使に宛てて、ヴァンスはあんなことを言っているけれども政権の真意は違うからみたいに電報に書いています。そこでも何か足並みが乱れているなと思ったことがあります、そういう対立が在米大を巻き込んでとかいうことはそんなに。

沼田 あまりなかったような気がしますけれどね。

—— 実務レベルはつながっていた。

沼田 安保課長時代、北米一課長時代、特に北米一課長のときを見ると、マンスフィールド大使の役割が非常に大きいですね。あの影響力というのは大変なものだったと思います。

—— 以前プラットにインタビューしたことがありまして、そのときに彼が言っていたのが、プラット自身とかアマコストは意図的に短い間隔で国防総省、国務省、NSC と回っていて、上は対立しているのだけれども自分たちが何とかするという意識で働いていたとおっしゃられていました。当時大使が接触されたのは、やはりプラットとかアマコストといった実務レベル。

沼田 そうですね。それが一番多いですね。有馬さんもそうだったでしょうね。だから、彼らの役割は大きかったと思いますね。

ホルブルックのことはあまり言わなかったのですけれども、彼はある意味で個性が強いというか、優秀なのでしょうけれども、まあ生意気ですよ（笑声）。年は僕と同じぐらいでしょう。相当生意気で、キッシンジャーのところで働いていたこともあるけれども。そう考えると、我々が日米安保の問題をやっているときにホルブルックの顔はあまり見えませんでしたね。それはプラットとかアマコストとかがマネージしていたということだと思うのです。

—— 実務担当者が同盟のマネージをしていたということですか。

沼田 そうそう。そういうことですね。

ホルブルックの後に来たホルドリッジという人は半分軍人みたいな感じで、たしかもともと軍にいた人ですね。アーミテージもいたけれども、彼よりももう少しかたい感じの人ですね。

—— きょうはあまり名前が出なかったのですけれども、スミスさんという国防総省の。

沼田 ネピア・スミス？

—— はい。この方はいつぐらいから？

沼田 僕が着いたころにはもういたかな。

—— 国防総省の日本課という部署は昔からあったのですか。

沼田 日本課長は、我々は日本課と言っていますけれども、日本担当であることは間違いのないのです。ジェネラル・ピンクニーの後任はいなかったと思いますが、国防総省日本課と言っていますけれども、

要するに 1 人か 2 人です。しばらくはネピア・スミスとジム・アワーが重なっていた時期がありました。

ネピア・スミスというのは非常にいい人でしたよ。彼はアナポリスとか大学卒ではなくて、海軍に志願して入った **enlisted man** で、最初はコックとして始めたと言っていたかな、それで大佐まで行ったわけです。温厚で立派な人でしたよ。

—— この方も日本勤務はあったのですか。

沼田 日本勤務はなかったと思います。

—— では、偶然。

沼田 ええ。でも、とてもいい人でしたね。ジム・アワーのほうは、要するに日本の専門家。

—— そうですね。博士論文で日本海軍を。

沼田 彼は中佐でした。何か船に副長として乗っているときに事故かなんか起きたらしい。よく聞いていないけれども。それで大佐になれなかったみたいです。

—— 彼らの具体的な役割はどんなものだったとお考えになりますか。たとえば議会の工作とかも実は国防総省の人たちも一緒になって行うとかいうことはなかったですか。

沼田 いや、別々にやっていました。むしろジム・アワーの貢献が大きかったのは、我々の国会答弁。

—— ああ、そっちをやっていましたか。

沼田 本当にたくさんやりました。要するに、東京で予算委員会をやっている最中、冬、1 月、2 月、3 月ごろ、出勤するのが嫌なんです。出勤するとこんなに分厚い電報が届いているわけ。訓令がね。日昇丸事件とかいろいろな事件があって、すぐ調査して折り返し回電ありたいと。そうすると、国会でどんな質問が出るかを考えながら答えていかなければいけない。

—— 実際的には昼間に来るんですかね。

沼田 だから、予算委員会の質問が出るのが真夜中だと、それから 13 時間戻ると。

—— 昼前ぐらいですか。

—— 午前中に届いて。

沼田 そう、午前中に届いて、それで夜までには出さなければいけない。

—— それを出すと東京の朝には間に合うと。

沼田 そうそう。そういうことが何回も続いてね。

たとえば、日昇丸の事件だったかな、海軍の中での懲罰のシステムはどうなっているのか、そういう話も取材しなければいけないわけです。Judge Advocate Office とかいうのがあって、court martial はどういうふうに行われているとか、そういう話も聞かなければいけないでしょう。それで、それを外に説明できる形で言わなければいけないから。ジム・アワーはその辺を心得ているから、どうやったら外に説明できる形になるかということを考えた上で答えを返してくれる。場合によってはこっちが先に答えを書いて、これでいいとか（笑声）。

—— ライシャワーの発言のときも大変でしたね。

沼田 大変でしたね。大変だったけれども、大変といっても答えようははっきりしているのですね。バタバタするという意味では大変でしたけれどね。

—— その辺のことは東郷大使から聞かされていたりとかいうことはあったのですか。

沼田 ないですね。実は何があったんだという話は聞いていないですね。その後いろいろなことが出てきましたけれどね。

■ 米中国交正常化、レーガン政権の対中政策

—— 続いて、日米安保に関すること以外、グローバルな話題についてお話ししたいと思います。順番は、米中のところからでよろしいでしょうか。

沼田 米中というか、まず中国から始めます。

中国は、カーター政権のときの米中国交正常化、それにともなう台湾問題、それから軍事面をどうするかという話、台湾をどうするかという話と中国をどうするかという話があった。それから、レーガン政権になってからは台湾の扱い、軍事問題、FSX の問題が主なポイントだと思います。

米中国交正常化については、カーター政権時代、78 年 5 月中旬にブレジンスキーが中国を訪問したぐらいから拍車がかかり始めたということですね。それで交渉がその辺から始まっている。それから、78 年 8 月 12 日に日中平和友好条約ができて、反覇権条項が入りましたよね。当時の国務省のトム・レストン（Tom Reston）報道官がこれを welcome していますね。それから、その当時国務省のサリバン次官補代理とかロンバーク日本部長が反覇権条項に中国側が合意したということで surprise だと言っていました。それから、当時国務省の彼らは「Deng Xiao Ping（鄧小平）は日本を使って米中国交正常化のペースをうまく加速させようとしている」ということを言っていました。

それで 78 年 12 月 15 日でしたか、米中国交正常化となるのですが、オクセンバーグ（Michael Oksenberg）ミシガン大学教授が NSC に来ていました。彼のところに行ったら、今でも覚えているのは、NSC の彼の部屋の隅にスリーピングバッグが置いてありました。あれで仮眠をとりながら徹夜を続けて一生懸命働いたとすごくうれしそうな、誇らしげな顔をしていました。そのときに僕が一番印象に残っているのは、「We no longer have to choose between China and Japan」と彼が言ったことです。これ、ホルブルックも同じこと言っていました。

こっちはそれを聞いて、そうなのかなという感じで、あまりしっくりきませんでした。そのときに先方が言っていたのは、ブレジンスキーの訪中ぐらいからずっとやってきた、中ソ両方との関係を改善しようと思ってやってきたけれども、もし SALT を先にやっちゃうと中ソ関係が悪化するだろうということもあった。それで中国を一生懸命やった。Chinese personality が decisive だったと言いましたね。鄧小平のことを言っていたのだと思いますけど。一番難しかったのは arms sales の問題だったということを言っていました。

それから、79 年 1 月 29 日以降かな、鄧小平がアメリカを訪問した。2 月になってデイヴィッド・ディーン (David Dean) という人がいて、American Institute in Taiwan のアメリカでのチェアマンですね。日本の交流協会みたいのをつくったでしょう。そのヘッドの人に会ったときに non-federal、non-government、private な機関をつくったということを言っていて、台湾側には Coordination Council for North American Affairs というのができましたね。それがいつから変わったのかな。今は Taiwan Council for U.S. Affairs となっているようです。

オクセンバーグが、鄧小平の訪米について言っていました。この鄧小平訪米のときのコミュニケの中に、台湾についてはこう書いてあります。「The Government of the United States of America acknowledges the Chinese position that there is but one China and Taiwan is part of China」という表現です。これは上海コミュニケより簡単ですよ。同じようなことを言っていますけど、上海コミュニケはもっとずっと長いです。これは上海コミュニケと同じようなことを言っているけど、もうちょっと ambiguous だと言っていました。上海コミュニケを申し上げますと、長いですね。

The U.S. side declared : The United States acknowledges that all Chinese on either side of the Taiwan Strait maintain there is but one China and that Taiwan is a part of China. The United States Government does not challenge that position. It reaffirms its interest in a peaceful settlement of the Taiwan question by the Chinese themselves. With this prospect in mind, it affirms the ultimate objective of the withdrawal of all U.S. forces and military installations from Taiwan. In the meantime, it will progressively reduce its forces and military installations on Taiwan as the tension in the area diminishes.

と随分長いでしょう。これに比べれば確かに ambiguous と言えるかもしれない。それから、鄧小平が来たときに、「チャイナは SALT に反対しない」と言ったと。また、どうもベトナムのカンボジア侵攻がもうすぐあるのではないかというような話が出ていたようですね。

それからあと、モンデール (Walter Mondale) 副大統領が 7 月に訪中して、9 月に柳谷謙介アジア局長 (のちの次官) がワシントンに来られて、キャッツ (Julius Katz) 経済担当国務次官と日本の対中円借款の話をされました。これはアメリカとか西欧と歩調を合わせていると。ASEAN との関係も頭に置きながら、軍事面には援助しませんということを言って、10 月 3 日にこのときは中島外務審議官が来られて、デイヴィッド・アーロン (David Aaron) Deputy National Security Adviser と話して、そのときにブラウン国防長官が「訪中する」と言ったのかな、「した」と言ったのかな、それで安全保障問題についての中国との協力関係の枠組みをつくるというような話をしていました。

10 月半ばに梁井新一経済協力局長 (のちの韓国大使) がワシントンに来て援助協議をしたのですが、そのときに日本の対中円借款の話をした。円借款の話は日本の方がアメリカよりも先に出ているわけですね。それに対してホルブルックが「これは dangerous test case だ。congressional reaction が心配だ。これは紐つきか」と。アメリカはアンタイにできないのに紐つきかと言ったわけですね。当時、僕のメモにどういうわけか「失敬千万」と書いてあった。僕が言ったのか誰が言ったのか、「失

敬千万、援助素人」と書いてある。2 つともそのとおりだけど。いや、僕のコメントだったのか誰かほかの人のコメントだったのか忘れたけど。

5 月にフリーマン (Charles W. Freeman Jr.) 中国部長と会ったときに、僕のメモによればホルブルックは、「United States doesn't have to choose between Japan and China, Japan does not have to choose between U.S.A. and China」と言っていると書いてある。これは今のことを考えるとどうなのかなと思うけどね。

—— 当時、どういう意味で言っているのですか。

沼田 日本もアメリカも中国の扱いをめぐるって苦労したということと言いたかったのじゃないかな。今は、答ははっきりしていると思うけれども、そういう意識だったということね。

—— アメリカ側がですよ。

沼田 そうそう。

—— 日本側はどうなんですか。

沼田 日本はだけど。

—— 選ぶも何もね。

沼田 ないでしょう。78 年末の米中正常化のときに、僕はアメリカがさっきのオクセンバーグの話じゃないけれども、浮かれているなという感じがしました。「Euphoria」ね。80 年の 5 月には国防総省の担当官が「Euphoria is dissipating」と言っていますね。僕は時々当時の米中関係というのはローラーコースターだと言っていました。上がったたり下がったりする。正常化で一気に盛り上がったでしょう。それがだんだんまた、まあ安定するというか。そのころに国防総省の人が米中関係は「Euphoria is dissipating」「maturing」と言っていたかな。

80 年の 6 月に、耿飜 (Geng Biao) 党中央軍事委員会常務委員兼秘書長、要するに軍のトップ、Secretary General and member of standing committee of CPC's Central Military Commission の訪米というのがあって、このときに国務省中国部の人が「今や米中は equal な関係にあって、アメリカが big brother というわけでもないし中国が small brother というわけでもない」という言い方をしていますね。

それで軍事関係の話があって、当時はペリー国防次官ですね。彼は技術関係のトップだったですね。10 月の初めに訪中して、そのときにニコラス・プラットが、当時彼は国防総省に移って Deputy Assistant Secretary でしたが、彼が言ったのは、中国の軍事関係の研究所というのはアメリカより 10 年から 20 年おくれている。文革のときの重荷というか、傷跡が残っている。それからソ連の欠点をみんな引き継いでいる。デザインが 25 年から 30 年古く、生産と市場との関係のコーディネーションが欠けている。だけど、中国は thinking in terms of undoable things、もっと野心高く考えている。その中で米国防総省としてはやっぱり technical transfer が大事だと考えている。license in dual use technology とか、そういう technical transfer が大事だと思っているということを僕のノートでは言っていました。でもこの時点では 80 年か。

民主党政権ではそこまでですね。レーガン政権になって、レーガンの *inauguration* に台湾は一応呼ばれましたが、*No official status*、*No access to the diplomatic seating area* で、外交団のところには座れなかった。それから、ワインバーガー国防長官が就任して 81 年 2 月 20 日に大河原大使が表敬に行かれたときには、「*No plan now to furnish lethal weapons to China*」と言いましたね。「殺傷兵器を中国に供与するつもりはない」と。

それから、新政権がどうやっていったかという話です。次にジョン・ホルドリッジ、彼は新国務次官補（東アジア担当）ですが、中国に行ったのが 3 月で「*Encourage close cooperation with China without causing deterioration in Taiwan*」ということを言っていますね。台湾関係を傷つけることなく *close cooperation* をやっていくと。

それから 4 月になってアマコストは、この時点では国務次官補代理かな、*Taiwan Relations Act* と米中国交正常化コミュニケというのはお互いに相いれないものではないと言いつつ、台湾に対する武器供与問題というのは気にしていると言っていました。

それで、5 月になると国務省の台湾担当者が、台湾について 2 つの問題がある。1 つは、「*degree of officiality*」という言葉はずっと使っていました。どこまで公式な関係にするかということ。もうひとつは *arms sales* ということを言っていて、そのときに FX の供与を年末までにするかどうかというのがかなり問題になっているのです。

それで、6 月にヘイグ国務長官が中国に行っただけですけども、そのときに *Weapons* についてはケース・バイ・ケースに考えていく、「*China is looking more toward technical transfer*」、さっき言った一斉に買うとか何とかよりも *technical transfer* というのを考えるようになってきたということを行っていますね。台湾については FX 供与の決定はまだしていないということを言いながら、これは国務省の誰が言っていたのかな、台湾を見捨てるわけにはいかないということを言っています。カーター政権については「*The Carter administration handled normalization badly*」、例えばホルブルックは CCNAA の台湾代表に 2 年間で 2 回しか会わなかったと言っています。だから、共和党はもうちょっと台湾のことを考えるだろうということを言っている。

それから、当時アマコスト国務次官補代理は、有馬参事官に武器供与については「*No sense in treating China as a leper*」と言っている。中国を、差別的な用語ですが「らい患者」のように扱うというわけにはいかない。日本が気にするのだったら「*You need to develop a clear idea of your concerns. Speak very frankly*」と、日本が心配するのならはっきり言ってくれということを言っています。これには FX の問題なんか全部絡んでいます。

それでその次に、そのころかな、6 月ぐらいにフリーマン（Charles Freeman）中国部長が私に言っていたのは、さっきの耿飈中央軍事委員会常務委員長が来たときから中国を「*a friendly non allied nation*」として扱う。「*Liberalize technical export. Drop arms embargo case by case*」と言っていますね。下院はそういう軍事協力というのを *cautious* に *endorse* しているが、上院のほうは「*Almost universally positive except Helms*」、ヘルムズ上院議員以外は皆賛成だ。

FX の問題が後ろに控えていましたが、木内昭胤アジア局長がやはり 6 月に、ワシントンに来られて、ソラーズ（Stephen Solarz）下院外交委員会東アジア小委員長に対して「*A big mistake to sell FX to Taiwan*」と言われました。そうしたらソラーズが「国務省も *It's a mistake* と思っている。ただ、大統領は *instinctively sympathetic* である。*We urge you to make your view known*」、日本の考えをはっきり言ってくれと言いました。木内さんはホルドリッジ国務次官補、アマコスト国務次官補代理などに対して「*FX should be ruled out*」と言って、もし FX 問題でアメリカが問題を起こすと日中関係まで影響が及ぶと、木内さんらしく相当はっきり言いました。

それから、木内さんからアーミテージ国防次官補代理に対して、「*If PLA is getting all right, it*

means stability in China」。PLA（People's Liberation Army、人民解放軍）がしっかりしていれば stability in China と。だから「very cautious approach in providing military assistance to Taiwan」、台湾に対するミリタリー・アシスタンスは慎重にやってくれということを言われています。中国については以上ですね。何かありますか、中国について。

—— 先ほど、オクセンバークが日中を選ばなくなってよかったという言葉を残したということだったのですが、それに対して大使は必ずしもそうではないのではないかと。

沼田 きょとんとしていました。

—— これはどういう文脈で、きょとんとされたのですか。

沼田 だって、何でそんなに喜んでいるのかという感じがしました。やったやったと喜んでいるという感じでね。オクセンバークの地位を考えると、ホルブルックもそうでしたが、非常に偉大なことを成し遂げた感じでね。

—— その高揚感で。

沼田 そうそう。Euphoria に対する、何でそんなに喜んでいるのかという思いがあって。

—— 逆に警戒感みたいなのはなかったのですか。プラットの中国に対する arms transfer、technical transfer が必要だという考えに対して。

沼田 それもありますよね。どこまでやるのかなという。

—— 外務省としてはそういう立場だったんですか。

沼田 だからこそ木内さんが言っているわけでしょう。台湾に FX、戦闘機をあげるなんていうことはだめよと言っているわけでしょう。外務省としてはそこを考えていたということだと思う。そこまで進むのはおかしいのではないかとということをソラーズからもはっきり言ってくれと言われて言っている。そういうことですよ。

—— 私、勘違いしたかもしれないですけど、プラットは中国の軍事産業が遅れているから中国にも一定程度援助をする必要が。

沼田 いや、いきなり武器をばんと出すのではなくて。

—— ではないということですね。

沼田 technical transfer だと言っているわけですよ。中国の技術自体が相当遅れているので、中国がそれをちゃんと認識して、まずテクノロジーをきちっとするところから始めるべきだと。

—— そっちにまず援助をして。今の感覚からすると中国にそこまでするかというのもあるんですけど、当時そういう考えだったのですね。

沼田 当時はそういう。だって当時は中国が遅れている、遅れていると言っていた。

—— まだまだ。

沼田 まだまだ遅れている。

—— ソ連をにらんでというのは、アメリカにはあるんですか。

沼田 あるのでしょうね。

—— 技術が遅れ続けることによってバランスがますます……。

沼田 そうでしょう。それはあるのだと思うけどね。

—— このとき、具体的に何の **technical transfer** を行うのかは念頭にあったんですかね。

沼田 具体的に何だったのかな。

—— その後何か、アメリカが中国に **technical transfer** ってやっているんですかね。

沼田 これが 82 年まででしょう。そこから後だと。

—— レーガン政権期に **arms transfer** に関する決定が上がるのだけど、そこに中国がどれぐらい含まれているのか、ちょっと確認は……。

—— ただ、飛行機とかそういうのは。非殺傷性の装備ということで議論されていたようです。

—— 飛行機を売る。

沼田 中国に対して「**non lethal**」「**case by case**」と言って何が出たか。

—— 飛行機のエンジンというのは聞いたような気がしますね。

沼田 なるほど、それはあるかもしれないですね。

—— 先ほどの、日本と中国を選ぶ必要がなくなったというのは、米中交渉の過程で、日本に対してはこう接してほしいという要望が中国から出たということなんですかね。

沼田 どうなのかな。正直言っていまだによくわからない、何でそんなに喜んでたのかというのが

ね。そういうことを言えば日本は喜ぶと思ったのかねという感じがしなくもないですが。何となく違和感を持ったまま今日に至っています。

—— 日本としては。

沼田 今の世の中から考えたら「何言ってんのよ」という感じでしょう。

—— そうですね。

沼田 だから、さっき僕がローラーコースターと言いましたけど、まさにそういうことだと思います。

—— 台湾から全面的に撤退するということなのですけど、在日米軍基地についても何らかの話し合いがあったのですかね。

沼田 その形跡はあまりないですね。少なくとも話は聞いていないな。

—— でも、少なくとも台湾は中国とてんびんにかけて落としたという意識なのでしょうね。日本はちゃんと置いておいてあげたよという感じなのですかね。

沼田 それを共和党政権になってからもうちょっと台湾のことも考える必要があるから、レーガンはFX もと言った。台湾に対するシンパシーというのがあって。

—— 大統領選が展開していく影響とかは今の話にはあまり関係はしなかったのでしょうか。

沼田 79 年でしょう、80 年の大統領選、あまりそんな感じはしないですね。

—— そんなにこの問題をめぐって別にこう論戦もなく、共和党にとって重要性はなかったと。

沼田 大統領選挙のイシューになったという感じもないですね。

—— その台湾への FX の援助なのですけども、外務省としては、基本的にはこれは日中関係を悪化させるから必ずしも賛成できないというスタンスですか。

沼田 ということだと思います。

—— これは外務省全体の……。

沼田 でしょう。木内さんが言っているから、そうだと思いますけど。

—— 代表しておっしゃったと。

沼田 アジア局長がこれだけはっきり言っているのですね。

—— アジア局的な観点で日中を大事にしたいからというわけではないのですね。

沼田 いやいや、それはアジア局だけという話でもないでしょう。

—— ではないですか。

沼田 じゃないかな。

—— 外務省の中に台湾派はいたのですか。

沼田 よくわかりません。どうだろうな。

—— 聞こえてくるような雑音はなかった？

沼田 まあ、自民党の中はあったかもしれないけど。藤尾（正行）さんとか。

—— そうですね。

—— 対中 ODA の話で **dangerous test case** という話があったのですけれども、大平三原則というのが対中 ODA を始めるときにあって。

沼田 何でしたっけ。

—— 軍事援助はしないとか。その 3 番目に排他的な関係にしない、日本として中国に接近し過ぎはしないというのが入っているのですけれども。そういうことについてアメリカは懸念していた、日本と中国がアメリカを排除する形で接近し過ぎてしまっているということは。

沼田 よくわかりませんね、そこは。僕はホルブルックの嫌みが出たと当時は思いましたけど。これ、援助協議の場ですよ、ホルブルックが言ったのは。援助協議の場にホルブルックがいてね。援助協議というのは大体 AID（国際開発庁）の仕事でしょう。AID の幹部が並んでいる中にホルブルックがいて、何か偉そうな顔して言っていたという感じでした。

—— ホルブルックが **dangerous test case** だと言った理由は、議会との関係だと。

沼田 まあ、それはあるかもしれないけどね。

—— それはどういうつながりだったのですかね。

沼田 わからない。だって、諄々と説いているわけでもないから。

—— ほんとこの言葉を出したということですね。

—— 日本として中国に対する ODA を開始するというタイミングでアメリカとの間に協議があったりとか、アメリカ側にこういう方針でいくんだということを伝えたりとかは。

沼田 だから、これがまさにそうでしょう。

—— そこでちょっと嫌みを言われた。

沼田 そうそう。早々に嫌みを言われた。

—— でも、嫌みを言われたけれども、それ自体、制約されるということではなかったと。

沼田 ということはないということですよね。

—— 議会の中にはある程度台湾へのシンパシーがあつてということですかね。

沼田 さっきヘルムズの名前が出たけれども。

—— そうか、あまり反対しないと。

■ 韓国に関する米国との協議

沼田 次は韓国ですが、在韓米軍の話は、実は僕は韓国を担当し始めたのが 79 年からです。それまでは浅見書記官がやっていて、政務班の中で入れかわったので、僕は 79 年の春ぐらいから担当したのかな。79 年～82 年まで何があったかという、要するにカーターはもう在韓米軍撤退の方針は諦めるわけです。

カーターが韓国に行ったのは、79 年の 7 月かな。このあたりでもう在韓米軍撤退しないというのははっきりしたわけでしょう。それで、リッチ (Robert G. Rich, Jr.) 韓国部長に会ったときに、「We will not make a decision on force deployment before discussing with the government of Japan, the government of Korea and military commanders」ということを言っていますね。「And we will not make a decision on force deployment, we will not make a decision before the next presidential election」と言っていると。だから、もう在韓米軍云々というのはしばらくいじらない。

カーターの韓国訪問がやはり 79 年の 7 月です。その次に何が起きたかという、朴正熙が殺された。79 年 10 月 26 日。これで全斗煥が出てくるでしょう。で、戒厳令をしわけですね。全斗煥の同期生かな、「11th class generals」というのかな、彼が軍政をしいたと。そこで、アメリカの第一の関心は broader based politics でした。

ちなみにちょっと戻ると、カーター政権のときに人権問題を非常に重視したわけです。Human Rights and Humanitarian Affairs Bureau というのが国務省にあって、パット・デリアン (Pat Derian) という女性人権活動家が次官補でした。その Human Rights Bureau が、日本の中で在日韓国人・朝鮮人が差別を受けているという認識を受け入れていろいろぶつぶつ言っていたということがあります。人権問題に関心を持っていたゆえに。でも、あまりそれで大きな議論をしたという記憶はないけれど

も。僕のメモには書いてあるな。

次に韓国で起きた大きな事件は光州事件。80年5月13日。そこで問題になってきたのが **martial law** がいつまで続くか、政治犯の釈放がどうなるか。光州事件のときに政党、学生リーダーの検挙、金鍾泌、李厚洛、金大中、金泳三などがみんな逮捕され、戒厳令がしかれた。このときにアメリカのプライオリティは「**determine whether there would be any prospect of political evolution**」。だから政治的ベースを広げるとか、そういう見通しがあるのかどうかということに関心があった。

光州事件のときに、ホワイトハウスの中で、マスキー国務長官、ブラウン国防長官、ジョーンズ（David Jones）統合参謀本部議長、CIAのターナー（Stansfield Turner）長官、ブレジンスキー国家安全保障問題担当大統領補佐官、ホルブルック国務次官補なんかが集まって決めた方針というのが **maintaining stability**、要するに **law and order** を維持して安定を維持することに重点を置くということ。軍事的には AWACS を送る。それから、もし状況が悪化したら空母機動部隊（**carrier battle groups**）を2つ送る。他方、韓国に対しては「**Advise South Korea to move toward broader political base**」。さっきと同じですけども。もし北朝鮮がこの状況に乗じて何か挑発するようなことがあると韓国軍が大反撃を考えるのではないかというような可能性については、「**counseled moderation and restraint**」となっていますね。とにかく韓国政府が **law and order** を回復する努力というのを支援すると。全羅南道でこれ騒いでいたのかな。それをストップすること。そのころ、リッチ韓国部長が私に言ったのは、「アメリカの **overriding interest** は北東アジアにおける **strategic stability** であって、韓国の **political stability** というのはその中の重要な要素である」と。とにかく **political stability first** ということを行っていますね。

9月17日かな、金大中に対する死刑判決が出て、このときにアマコスト次官補代理は「**We will not interfere with the maintenance of basic security relationship and basic economic relationship**」とを行っていますね。金大中の死刑判決というのでも **intensive interest and deep concern** をもってフォローするけれども、韓国政府は我々の **concern** をよく知っている、韓国の国内世論を煽る言い方は避けるべし、その後、実際に処刑されるかどうかということで **grave concern** を持っている。これはだから80年でしょう。韓国側は共和党政権になればもっとやりやすくなると思っているかもしれないと言っている。もう11月ごろだから。それで、韓国のナショナリスティックな反応を刺激しないように注意して処理していかなければいけないと言っています。

81年2月、もうレーガン政権になってから全斗煥が訪米したのですが、そのときに金大中について最終的な処理が決まるまでアメリカは公の場でコメントすることはしないという立場をとった。2月20日、ワインバーガー国防長官が大河原大使に「**No plan for withdrawal, The President feels firm commitment strongly**」と言っているというのが朝鮮半島、韓国です。このときは在韓米軍の問題というよりも、韓国の国内の問題。アマコストは国務次官補代理だったのかな、なぜか僕に、今光州で大変なことが起きているという電話が来たのを覚えていますけどね。

—— アメリカではかなり報道されていましたか。

沼田 報道されていたと思いますよ。

—— 金大中の処刑に **grave concerns** とアメリカが伝えたのはカーター政権の最後の方ということですね。

沼田 カーター政権の最後だけでも、政権交代が決まっている。

—— 決まっているとき。このとき、grave concerns しつつも stability を重視するみたいなことを言っていましたっけ。

沼田 stability を重視すると言っていたのはまだカーター政権のとき。

—— ですよね。最後は、人権でやりきれない感じだったんですよね。

沼田 そうですね。

—— ワシントンで在米韓国大使館との間でいろいろやりとりをするというのもあるのですか。

沼田 あまりなかったですね。前にお話ししたかもしれないけど、韓国大使館とは僕が担当官のときはあまりやっていなかったな。でも、ただ一つ覚えているのは、前にも話したかもしれないけれども、在ワシントン韓国大使館の議会担当参事官という人がやってきて、彼は議会班長でしたが、日本大使館は議会対策をどうやっておられますかと聞きにきたのを覚えている。そのぐらいですね。

—— 韓国の内政について云々ということはないですね。

沼田 ないですね。韓国はそんなところですが、よろしいですか。

■ 東南アジア情勢

沼田 次、ベトナム・カンボジアは、東南アジアは特に直接担当していたわけでもないのですが、あまりないのですが、1つ覚えているのはベトナムのカンボジア侵攻。1979年1月7日。これはワシントンが大雪の日でした。あまり雪が降っちゃって我々は大使館に出勤できなかった。そうしたら、有馬参事官のところに東京からどんどん電話がかかってきて「情報が来ないけどどうなっている？」と。そうしたら有馬さんが「僕、今2階で電話とっているけど、屋根まで雪が来ているよ」と言われたとか。まあ、それは余談ですけど。

—— それは、有馬参事官の御自宅に電話が。

沼田 そうそう、東京がよく電話してきたから。

—— 国務省はどうだったのでしょうかね。

沼田 国務省はどうやって行ったのかな。あの日だったかな、通産省から来ている公使がスキーで出勤したという話がある（笑声）。登山をやられる公使でした。

このときにアメリカ側、これは誰だったかな、「asking the Chinese to be restrained」と言っていた。ベトナムはカンボジアに10万人ぐらいの兵力がいるとの話でした。

79年2月の China's invasion of Vietnam のときに、オークリー（Robert Oakley）次官補代理が

言っていたのは、「heavy but limited penetration」であると、要するに国境紛争であって、日米、韓国、ASEAN などはこれにあまり巻き込まれないほうがいいということを言っていますね。だから、ソ連のベトナムに対するサポートがあって、中国の侵攻というのも「as much a lesson to Soviets as to Vietnam」。ソ連に対するシグナルということもあるのではないかと。オークリーはソ連の軍艦がカムラン湾にいるが、ソ連の役割は非常に murky（はっきりしない）だと言っていました。

それから、この年の6月末、東京サミットですよ。そのときにベトナム難民の話が出ていますね。かなり出ていた。東郷大使に対してホルブルック次官補から日本に2番目の難民のプロセシングセンターを置けないかというような話が出ていたという記憶がある。僕は東京サミットのときは大平総理の通訳として一時帰国していました。

それから、9月19日ぐらいに、柳谷アジア局長がワシントンに来られて、ホルブルックとかインドシナ担当のオークリー次官補代理、北東アジア担当のサリバン国務次官補代理、それからアマコスト、ロンバーク日本部長等と会われた。カンボジアについてオークリーが日本と parallel course、同じような方針をとっていると思うということを言っていました。ポルポト（Pol Pot）をサポートするというわけではない。ベトナムもソ連もカンボジアからの撤退を serious に考えてはいないようだ。また1〜2カ月たつと戦闘があるのではないかと。タイ国境に3万人〜4万人の難民が集まっていてタイが苦労しているので、「trying to reinforce the Thais」と言っていますね。柳谷局長からは、ヘン・サムリン（Heng Samrin）とベトナムがポルポト勢力を wipe out しようとして大攻撃をする危険が高まっていると言いました。

中国はまたベトナムに second lesson を与えようとしているかどうかという話になって、これはホルブルックかな、モンデールが中国に行ったときに「The Vice President told China that United States opposed the second lesson」と言ったけれども、アメリカのレバレッジは限られているという話をしていますね。柳谷アジア局長は、日本はポルポトと法的関係は維持している。しかし、ポルポトを支持するというポジティブな役割を果たすつもりはない。カンボジアに対する緊急援助はやっている。ホルブルックの方から、シアヌークはとりあえずしばらく back seat role を演じることになるだろうという話をしていますね。

このときに難民の問題が出ていますね。難民がフィリピンに集まっていて、マルコス夫人との間で問題がある。日本も何とかしてくれという話がありました。12月の初めにアマコストの話で、「Vietnam is on the threshold of a major attack on Cambodia, but not without Soviet support」と。

大体そんなところですかね。あまり特にどうというのはないのだけど、インドシナはそんなところですよ。

—— 少し俗っぽい話になってしまうのですが、ポルポト政権下で人権的な弾圧がある、虐殺があるというニュースは当時からある程度は知られていたのではないかと思います。そのことについてアメリカが議論するとか。

沼田 あまりその記憶がないですよ。どこだったのかな、その後に随分出てきますけどね。

—— あまりポルポト政権を人権問題で批判しちゃいけない、窮地に追い込んでしまっただけという認識が。

沼田 あったかどうかはちょっとわからない。インドシナはそれほどフォローしていなかったの、ちょっとよくわからないですね。

—— インドシナ関係は、韓国のように途中から担当するとか、そういうことではなくて。

沼田 いや、途中からですよ、これも。

—— 同じ時期から。

沼田 同じ時期だったかな、79年。そうですね。インドシナは誰がやっていたのかな。浅見書記官かな、彼が韓国とインドシナをやっていたのかな。

—— 大使館の中で。

沼田 政務班の中で。

—— 政務班の中で役割分担を決めると。

沼田 そうです。僕がずっとやっていたのは安保防衛。韓国は途中からやって、中国はずっとやっていたのかな、78年からやっていましたね。ちょっとラ米を半年ぐらいやっていたこともありますけど、あまり覚えていません。

■ 米ソ軍備管理交渉

—— 次に米ソ軍備管理交渉についてお聞きします。在米大では米ソ交渉をどのようにフォローされていたのでしょうか。

沼田 軍備管理は話が複雑なので、どうしたらいいかな。主な点は、SALTやTNF (Theater Nuclear Force) についてカーター政権のときに定期的にブリーフィングがあったということです。その中身はある程度触れることができますけれども、その前置きとしてちょっと申し上げておくのは——。

僕のときにはブラウン国防長官でしたけれども、その前のシュレジンジャー (James Schlesinger) のときに、*countervailing strategy* というのがありました。「相殺戦略」。これが何を意味するかという問題があって、相互確証破壊戦略 (Mutual Assured Destruction, MAD) だけでなくフレキシブルな対応が必要であるということで、これは誰が言ったのかわからないけれども、「*well-orchestrated highly controlled nuclear exchange*」というのを言っていた。その場合にグレーエリアになるのがTNFであるという話。

それから、何かばらばらな話で恐縮ですけど、もう一つ。国務省でアーノルド・カンター (Arnold Kanter) という学者で、後にブッシュ (父) 政権下の国務次官 (政務担当) になった人が、*Politico-Military Bureau* の部長を務めていて、ときどき僕に米国の戦略などをわかりやすく説明してくれました。彼が僕に *countervailing and counter force* の説明としてTNFについて言ったのは、MADと*counter-value* だけでは不十分だ。*Counter-value* というのは *wipe out industrial cities* ということでしょう。「*Open option of military targets*」、*military targets* をICBMなどで叩くオプションを残しておく必要がある。それから「*No public policy of launch under attack*」と言いましたね。launch

under attack というのは公式には認めていない。ブラウン国防長官がこれについて疑問を差し挟んでいると言っていた。

もう 1 人、Politico-Military Bureau の次長で後に TNF なんかのブリーフィングをしてくれるゴンパートという人がいたのですけれども、彼は countervailing strategy の説明として「Not allow the Soviets to have advantage in hard target counter-military kill」「improving war fighting capabilities」、すなわち「soft and hard military targets に対する war fighting capabilities を improve する」と。ソ連はアメリカの潜水艦を破壊する能力は弱い、しかし、アメリカの方が land-based ICBMs について weakness があるので、ソ連は残存性 (survivability) で優位に立っており、米はたとえば MX で補完することを考えていると言っていました。

というような話があって 79 年 10 月に、中島敏次郎外務審議官が来られたときに、マクギファート国防次官補が、SALT をバード上院院内総務が強くサポートしていて、11 月の末ぐらいには SALT の交渉を再開するかもしれないという話があった。そのときにキューバにソ連の Soviet brigade があるという報道がありました。キューバに Soviet brigade がずっとあったという話。これは小さな話だけど、過大に報じられてちょっとそれが障害になったというようなことがありました。

僕のメモでは 79 年 12 月 27 日と書いてあるな。アマコストはこの時は NSC にいましたね。有馬さんが、日本にも SALTⅢについてブリーフィングをしてほしいということを彼に頼みました。そこから SALTⅢ及び TNF について、79 年 12 月の末に Politico-Military Bureau のバーソロミュー (Reginald Bartholomew) 局長他から我々に対してブリーフィングが始まった。SS-20 Saber (射程 5500 km) は 3 分の 1 はヨーロッパ、3 分の 1 が真ん中で西にも東にも機動できるようになっていて、3 分の 1 が Far East にあるということで我々も関心を持っているということをこちらからも言いました。

その他細かい数字をいろいろ聞いて、バックファイヤー、Tupolev Tu-22、戦闘行動半径が 1850 km、これに早く対処しなきゃいけない。戦略爆撃機 (strategic bomber) であるバックファイヤーは SALTⅡのもとで strategic bomber として扱うか、あるいはそれはそれとして独自のカテゴリーとして扱うかということを考えなければいけない。

それから、theater nuclear aircraft をどうするかということがあっても、これはそれを対象にするとアメリカの航空機も対象にしなければいけないし、forward based systems in the West and in the East が問題になってくるといことで、あまり議論の俎上に載つけないという話があった。ほかの TNF については LRTNF (long range theater nuclear force) というのは ballistic and cruise missiles だけでも、これを扱っていく。

アメリカ側の関心というのは、さっきの航空機の問題。だから SALT の対象を short ranger aircraft まで及ぼしたくない、forward based systems にも及ぼしたくない、British and French submarines にも及ぼしたくないということがあって、それをどうするか。このときに global and regional sub ceilings の話が出てきて、日米、欧州の shared interest である。Far East について regional sub ceiling が必要だろう。ソ連はアジアにおいてソ連を叩ける兵力 (日本、中国、米国) について要求してくるので (Soviet demands on forces in Asia (Japan, China, US) that can strike USSR)、これに対してパーシングを配備することなくどう対処していくかを話し合う必要があるというような話がまずあったというのが 79 年 12 月の末。

その次が 80 年 3 月 18 日になっていますね。バーソロミュー、それから Politico-Military Bureau の次長のゴンパートほか。ちなみに、バーソロミューはその後レバノンの大使になりました。たしかレバノンの米国大使館が襲われたでしょう。あのときに大使だった。2 回目のブリーフィングのときは TNF ですね、80 年 3 月。このときは随分いろいろな話がありました。SS-4 のレンジとか SS-5 の

レンジ、warhead の数、SS-20 の warhead というような細かい説明があつて、バックファイヤーはバックファイヤー自体を独自のカテゴリーで扱っていく方向に向かいつつあるという話でした。TNF のバランスでは、1000 km 超のロング・レンジ・ミサイルについて NATO は GLCM (ground launch cruise missiles、射程 2000 海里超) があり、それにパーシング II (Pershing II) (射程 1000 海里超) を加える必要がある。SS-20 は Far East に deploy されているという問題がある。SALT III については、ソ連は交渉を拒否していると言っている。

その次、3 番目のブリーフィングが 10 月 30 日。これはゴンパートですね。TNF について、79 年 12 月の段階で、アメリカがとっていたポジションというのが出てくる。79 年 12 月の段階で「willing to limit Pershing and GLCM forces if they put limits on SS-20, SS-4 and SS-5」と。SS-20、SS-4、SS-5 を制限するのであれば、パーシングなどを制限する用意があるということを言った。さっき言った 12 月のことです。グローバル・アプローチを強調した。ミサイル、特にロング・レンジ・ミサイルに焦点を置いておく必要があることを強調した。ミドル・レンジについては、ソ連の最大の関心事は欧州における西側 TNF の近代化を阻止することであり、このため、ソ連のミサイルとアメリカの forward based systems がちょうどバランスをとっていると主張している。だから、そもそもミサイルの不均衡は存在しないし、交渉の必要もないという主張ですね。

ソ連は、ソ連のミサイルはモデストな能力しか持たないのに米国の航空機は自由と言っている。しかし、アメリカの forward based systems はコンベンショナルも含めて能力に限りがあるし、ミサイルもない。だからミサイルの均衡を図る必要があるということです。ソ連はそもそも GLCM とパーシングは話題として取り上げもしなかった。「U.S. has no intention of allowing forward based systems to break in」、forward based systems をいじってもらいたくない。米国は「global limits with special limits on those within striking range of Europe」。アメリカはアジアの多数の SS-20 等は日本への脅威にもなるので、アジアも対象にしようと言っているのに対して、ソ連は「European limitations only」ということを言っている。要するにシーリングの話はずっとして、カーター政権はそこまでと。

レーガン政権になって、1981 年 2 月 20 日、ワインバーガーが大河原大使に対して、SALT process should go on だけでも、今すぐやる気はない、「more likely to prevail if you enter from a position of strength」、強い立場から臨んだほうがいいと。やる以上は「Something better than SALT II」と言っていますね。

81 年 2 月 24 日、ブレジネフ演説というのがあって、「prepared to continue without delay arms limitation talks preserving all the positive elements achieved so far」、まあ軍備管理交渉を始めよう。SALT II のことをそれほど強調しないで、アメリカが批准していないことを批判はしていない。Strategic arms については話をするとやっている。他方、TNF はインバランスをそのまま freeze (凍結) ということなので、米国としては明らかに受け入れられない。これがブレジネフ演説に対するコメント。

81 年 10 月に Politico-Military Bureau のディーン (Jonathan Dean)、同局の次長だったと思いますが、彼からのブリーフィングで、TNF については「global limitations hopefully low enough to exclude the need for regional sub-ceilings」、グローバル・シーリングを非常に低くすればリージョナル・サブシーリングをつくらなくてもいいはずだと。リージョナルをつくる場合には「lower than what Soviets need to cover targets in Europe」。たとえばヨーロッパには 600 のターゲット、200 のシステムを狙うとすれば、lower than two hundred、それほど低いものにする必要があるということを書いていました。

それから、TNF の交渉は 3 つのフェイズでやっていく必要がある。最初が Land-based missile、

SS-20、SS-4、SS-5、equal and global ceilings が必要。例の forward based systems の話でも航空機は対象にしない。stringent verification が必要であると。

2 番目が remaining problems と SALT と TNF のリンケージ。3 番目がバックファイヤー (Backfire)、これは後回しになるかもしれない。以上が TNF。

strategic については、launch under attack というドクトリンに変更はない。それから MX ミサイルは、「survivability of land-based missile is impossible?」と僕のノートに書いてある。要するに land-based missile はどうやっても守りようがないということを言っているような感じですね。

「Weinberger is moving toward air mobile missiles」。Road mobiles というのは大き過ぎて submarines に載つけようとしたら小さな MX が必要だけど、それは難しいとか、何かそういうことを言っていますね。

それから、SLCM (Sea-launched cruise missiles) については 2500~2800 km ぐらいのレンジのもの。これは verification が難しく、first strike に使うには速度が遅すぎる。B-1 爆撃機については、the greater the number, the better だけど、予算の手当てが難しい。ABM (弾道弾迎撃ミサイル (Anti-Ballistic Missile)) というのはなかなか実効が上がらず、「nobody has designed something that works」と書いてある。

—— 81 年ですよ。

沼田 そこで、81 年 11 月 14 日にレーガン大統領のゼロ・オプション提案、「Not to proceed with the development of Pershing II and cruise missiles - previously announced on 12 December 1979 and due to begin in 1983 - If the Soviet Union would remove its SS-4, SS-5 and SS20 missiles targeted on Western Europe」がありました。これがいわゆるゼロ・オプションです。手元に記録があるのはそこまでですね、レーガン大統領のゼロ・オプションまで。どこで何があったかって、細かくて僕もよくわからなくなっているのですけれども、要するにブリーフはしてくれたと。SS-20 とかバックファイヤーの話もあるから、日本が関心を持っているということが米当局の中にも通じて、それはかなりきっちとブリーフしてくれるようになったということです。

—— そのブリーフをしてくれるようになったきっかけというのはなんでしょうか。

—— 79 年からですよ。ブリーフが始まったのは、カーター政権の下で 79 年の末からです。ただ、1 つ言い忘れた。SALT は川島さんがやっていました。川島さんと僕とダブっていた時点がある。川島さんが日本に帰ったのがイランの人質がちょうど解放されたときだから、81 年初めか。だけど川島さんは——。

—— 今のブリーフで出てきたのはほとんどが NATO の話ですよ。

—— SALT III と多分 NATO の二重決定の時期が重なる時期。ただ、連関するけど別のブリーフィングがあってもおかしくない。多分そういう意味で SALT は川島さんが担当されたと。

沼田 そうですね。何で僕がやっていたのかな、よくわからない。

—— このころ、大使館側でアメリカ側のブリーフを聞きに行く際には、大体単独で行かれていたの

ですか。

沼田 有馬さんと僕。もう1人いたような気がする。防衛班は関係ない。

—— 78年にアメリカ勤務を始めて、その当初は特にそういう話はなかったのですか。

沼田 78年中は川島さんが SALT をフォローしていて、川島さんが自分で聞きに行っていたのですけどね。そのうち TNF の話が絡んできて、この SALT と TNF、TNF のほうに重点があるのだけでも、それについてのブリーフに割合定期的な形で僕が出るようになって、そのときに行っていたのは有馬さんと僕ともう1人、大島正太郎君（のちの韓国大使）がいたかな。大使館の中の構造が複雑でね。SALT というのが総務班でした。どういうわけか。何でそうなったのかわからないけど。川島さんが SALT をやっていたことは間違いない。

—— 先ほどのお話を伺うと、かなり専門的な話も出てきていると思ったのですが、そういう話について大使はどうやって知識を得ておられたのか。アメリカ側の専門家とかに話を聞いたりされたのでしょうか。

沼田 まあそうですね、かなり専門的でこれ苦労するのですけどね。そういうときに、たとえばさっきアーノルド・カンターの話をしたでしょう。彼の話なんかは非常に参考になりました。本を読んだりとかいろいろあるけれども、この種の話は難しいですね。結局、実際にブリーフィングを受けて中身を一生懸命理解しようとして、それでやっていくしかないのです。核戦略の一から勉強しようとしたんですが。

余談になりますけどね。当時国防総省の「国防報告」というのが毎年出るのですよね。あれの中身を報告するというのが結構大変な作業でね。それは実は僕がやっていたのですよ、防衛班じゃなくて。

—— ええっ。防衛班は何をしていたのですか。

沼田 防衛班は防衛班としても苦労していたと思いますけれども、要するに戦略上何が問題かとか安保との関係で何が問題なのかとかね、そういう大づかみの話はどうしても早く処理しなければいけないでしょう。ぱっと出てきたら 200～300 ページのものを一日で処理して報告するとかね。そういうのがどうしても政務に来るのです。

—— 当時の国防報告でしたら、『防衛アンテナ』という防衛庁の、なんというのでしょうか。

—— 広報誌？

—— 広報誌。今の『MAMOR』ですけど、これの前身が当時あって、あれに載っていますよね。防衛庁の調査課かどこかの方が訳されているのが載っていて、それとは別に大使がやられていたということですか。

沼田 全然別です。それがどのぐらいのタイミングで出たのか知らないけれども。僕の場合には、たとえば国防報告が出てくると少なくとも2～3日のうちには報告しなければいけない。

—— 雑誌なので数カ月遅れでした。

沼田 僕が電報を打たなければいけないからね。何が問題か、日本の新聞にも生半可に出るでしょう。それを補完しないといけないから。

—— 大使がつくられた電報は防衛庁とかに参考配布されるのですか。

沼田 それは配布しているでしょう、していると思います。

—— それがその広報誌に載ったかもしれない。

—— 多分そんな感じが。

沼田 そうかもしれない。

—— 以前、大使がおっしゃっていたのは、政治レベルだと中曽根さんが来た 83 年以降に関心が高まったということだったと思うのですが、それまでは、こういうブリーフィングを受けて、外務省全体としての関心は高まっていたのでしょうか。在米大使館からの報告を受けてという流れのなかで。

沼田 省全体の関心は、一部の人は持っていたということでしょうね。というのは、僕が日本に帰って 2 年たって安保課長になったときも来ていたかな。佐藤さんの『差し掛けられた傘』（時事通信社、2017 年）に出てくるような例の話ね、ゼロ・シーリングの話で日本からコメントしたという。あのようコメントするための下地というのは、ずっとやってきた蓄積がないとできないわけですよ。だから、それが活かされたということだと思います。でも、それは一部の人しかわかっていなくて。

—— この時点で本省から、日本の大使館はこういうふうに伝えてほしいという訓令のようなものが出ていたりはしましたか？

沼田 訓令があったかどうかはともかく、フォローしろという訓令はあったはずです。

—— 大使としては、米ソ間の軍備管理、軍備交渉をどういうふうにごらんになったのですか、日本にどういう影響があるとか。

沼田 まあ、欧州とアジアのシーリングの話なんかを聞いているとこれは影響があるなという感じは持っていました。むしろ僕は、前にお話ししたかもしれないけど、サミットの通訳なんかをしていてディナーのテーブルでも TNF の話なんか盛んに議論になるでしょう。その時に日本の首脳が寝ちゃうような状況だったからね。これじゃいけないなと思っていて、こういうブリーフィングを受けていて、ますますもっと皆さん勉強してもらわなければいけないなと思っていました。

—— ドイツ国内はここから反核運動がすごく盛り上がってくるのですが、アメリカ国内ってそんなに一般の人の関心は。

沼田 ないですね。

—— ないですかね。やっぱり自分にそんな関係ないですものね。

沼田 そう。

—— 1970年代の前半時点で日本はFBS（Forward Based Systems）をSALTに入れないでくれということをアメリカに伝えたのですよね。

—— SALT Iからそうですよね。問題の構造は、SALT IでもSALT IIでも同じで、SALT IIがうまくいかなかったら、80年の交渉でも言っていたでしょうね。

沼田 言い忘れたけれども、日本で米ソ軍備管理交渉の主管というのは軍縮課。軍縮室ないし軍縮課。それと安保課とのやりとりはあまりなかったな。だから、我々の一生懸命書いた電報を誰が一生懸命読んでいたのかなという感じがしないでもない。

—— 送り先はどこになるのですか。

沼田 両方に送っていますけどね。

—— 必ず両方に送るのですか。

沼田 必ず両方に送る。

—— 見たことありますか。

—— 一部は。ただ、安保課のファイルは見たことがないです。公開されているのは、軍縮課に保管されていたファイルです。

沼田 余談ですけど、軍縮代表部に行ったときに、そのときにもINFのフォローについて米側交渉団からブリーフを受けましたが、軍縮代表部の通常業務である軍縮会議と全く関係ないですよね。米ソの核の交渉は何やっているか知らない、という感じ。

—— 国連の中の委員会で、次元がちょっと違うという感じなんですか。

沼田 次元が違う、全然違います。

—— そうですね、もっと地味な話はやっているけれども。

沼田 すごく地味かもしれない。

—— INF、TNF が問題になってきたとき、ヨーロッパのドイツとかイギリスが問題にしていた「米欧離間（デカップリング）」の話があったと思いますが、日本の立場でそういった問題はあまり出てこなかったのですか。

沼田 このときはあまりなかったね。

—— まだ出てきていないですね。

沼田 ウィリアムズバーグ・サミットですよ。中曽根さんが「Western security is indivisible」と言われましたね。彼は問題が頭に入っていましたね。

—— 在米大使館としてヨーロッパ側とコンタクトするということはないのですよね。

沼田 なかったですね。

—— ワシントンの欧州の大使館など。

沼田 それはなかったな。

—— 逆に NATO 本部とかドイツの電報というのは見た記憶はあまりないですか。

沼田 ないです。まあフォローしていたのだと思うのですけどね。

—— ワシントンに中国大使館ができて、中国大使館と日本大使館がやりとりしたことはあったのですか。

沼田 なかったですね。

—— 大使の後に次いで、大使が帰られた後この問題を大使館でフォローしていた方は。

沼田 竹内君でしょう。

—— 岡本さんはいない？

沼田 ちょっと待って、竹内行夫君と岡本君は一緒にいたかな。待ってください。僕と竹内君はダブっていました。1 年ぐらいね。そこに岡本君が来たから。でも、安保を僕から引き継いだのは竹内君で、竹内君から引き継いだのが岡本君ということになると思います。

—— 大使は米側からどのようにブリーフィングを受けていたのでしょうか。

沼田 どうだったかな。Politico-Military Bureau のときはスライドはあまり使ってなかったけれども、たとえば後で出てくる加藤長官とか栗原長官がいて、それでペンタゴンからブリーフがあるとい

うとたくさんスライドが出てきました。

—— 沼田大使が行かれたのはほとんど国務省ですか。

沼田 そうですね。軍備管理の話は国務省です。国務省の Politico-Military Bureau。

—— マクギファートは NATO 側で二重決定の前に、NATO 内の NPG（核計画グループ）内につくった HLG（ハイレベルグループ・高級部会）の議長をずっとやっているんですよね。だから、彼がアメリカ政府の中でも事実上、仕切っていて、NATO 諸国にブリーフをしたり、政策を決めていたと思います。

—— そのブリーフィングに関してなのですけど、Politico-Military Bureau と在米大使館の間の公式協議が、72 年の牛場大使の提案で始まっているのですが、そういった枠組みはもうこの時点ではなかったですか。

沼田 いや、でも続いていたのではないかな。Politico-Military Bureau との。

—— 戦略協議、定期協議……。

沼田 特に「戦略協議」とか名前つけてはいなかったと。

—— 名前はついてなかったけれども。

沼田 PM bureau とは行き来していましたよ。

—— あったんですね。

沼田 あれはおもしろい存在ですよ、Politico-Military Bureau。

—— あの部署の文書はおもしろい。

沼田 えらく頭のよさそうな人がそろっていました。

—— ブリーフィングのときは、大使側から 2～3 人の方が行かれて、向こうは何人ぐらいいらっしゃるのですか。そう多くはないですか。

沼田 向こうも同じぐらいの人数がいました。結構いましたよ。

—— 結構いるんですね。

—— そこに ACDA の人っているのですか。

沼田 ACDA はいなかったような気がするけど、いたのかな。あまり記憶にないな。

沼田貞昭オーラルヒストリー ④

北米局安全保障課長

—1980 年代前半の日米関係—

質問票 4 北米局安全保障課長—1980 年代前半の日米関係—

1. 1982 年、大使は米国勤務を終えて帰朝し、経済局調査官、経済局国際機関第一課長となられています。当時は米国との経済摩擦が過熱し始めており、また東京ラウンド後の GATT 体制の再確認や新ラウンドに向けた動きがありました。この経済局時代のことで強くご印象に残っていることをお聞かせください。

■大使略歴

1982 年 4 月 経済局調査官
1982 年 7 月 経済局国際機関第一課長

■キーワード

- ・ GATT（東京ラウンドからウルグアイ・ラウンドへ）

■参考：当時の主な出来事

1982 年 11 月 GATT 閣僚会議、米国が新ラウンド開始を主張

2. 経済局でのご勤務を経て、1984年に北米局安全保障課長、翌85年に北米第一課長に着任されています。安保課長になられた時、米国との関係や日本を取り巻く安全保障環境について、大使はどのような認識をお持ちでしたか。
-

■参考：大使略歴

1982年 4月 経済局調査官
1982年 7月 経済局国際機関第一課長
1984年 7月 北米局安全保障課長
1985年 8月 北米局北米第一課長

■参考：北米局の体制

北米局長	1982年8月～1984年7月	北村汎
	1984年7月～1985年11月	栗山尚一
	1985年11月～1988年1月	藤井宏昭
安保課長	1981年8月～1984年7月	加藤良三
	1984年7月～1985年8月	沼田貞昭
	1985年8月～1988年7月	岡本行夫
北米一課長	1983年1月～1985年8月	川島裕
	1985年8月～1986年11月	沼田貞昭
	1986年11月～1988年7月	山崎隆一郎

3. 安保課長在任中には、日米防衛首脳定期協議の開催や日米共同作戦計画の策定など、防衛庁・自衛隊と国防総省・在日米軍との間での直接交渉も行われています。安保課長は防衛庁長官の訪米に同行することが多かったと思いますが、外務省はこうした動きをどうフォローされていたのでしょうか。また、外務省と防衛庁の連繫関係は、どのようになっていたのでしょうか。
-

■キーワード

- ・ 日米防衛首脳定期協議
- ・ 日米共同作戦計画

■参考：当時の主な出来事

- 1984年 9月 栗原祐幸防衛庁長官訪米・訪欧、ワインバーガー国防長官やキャリントン NATO 事務総長と会談
- 1984年 12月 自衛隊と在日米軍による「日米共同作戦計画案」署名
- 1985年 5月 ケーシーCIA 長官来日
- 1985年 6月 加藤紘一防衛庁長官訪米、ワインバーガー国防長官などと会談

4. 当時、日米間では日本の防衛力整備をめぐる協議が継続していました。米国政府がシーレーン防衛能力（OTH レーダーの導入を含む）や継戦能力などの向上を要請し、対 GNP 比 1% 枠の突破に関心を示す中、米国議会が防衛力増強を日本に求める決議を採択するなどの動きもありました。この時期には、空母艦載機離着陸訓練（NLP）問題も浮上しています。こうした日米間での防衛問題について、安保課はどのように対応されていたのでしょうか。またその際、安保課と北米一課はどのように調整していたのでしょうか。
-

■キーワード

- ・ シーレーン防衛
- ・ NLP 問題

■参考：当時の主な出来事

- 1984 年 6 月 シーレーン防衛に関する日米共同研究開始の合意（第 14 回 SSC）
- 1984 年 9 月 栗原祐幸防衛庁長官訪米、ワインバーガー国防長官などとの会談
- 1985 年 5 月 ケーシーCIA 長官来日
- 1985 年 6 月 加藤紘一防衛庁長官訪米、ワインバーガー国防長官などとの会談
- 1985 年 6 月 米上院、日本に 1000 海里シーレーン防衛の防衛努力要求決議
- 1985 年 8 月 レーガン大統領、日本の防衛努力監視法案に署名

5. 安保課長在任中には、武器技術提供やインターオペラビリティの向上、SDI（戦略防衛構想）への研究参加といった問題も議論されていました。外務省は、こうした日米共同開発問題に対し、どのように対応していたのでしょうか。また、次期支援戦闘機（FSX）の国内開発が問題になったのもこのころからです。1985年にはMOSS（市場志向型個別）協議がスタートするなど、日米間では経済摩擦が激しさを増しています。徐々に問題化してくる貿易摩擦と防衛問題とのリンケージについて、大使は当時どのようにお考えになっていたのでしょうか。
-

■キーワード

- ・ SDI（戦略防衛構想）
- ・ 対米武器技術供与
- ・ MOSS 協議
- ・ 次期支援戦闘機（FSX）

■参考：当時の主な出来事

- 1984年 9月 栗原祐幸防衛庁長官訪米、ワインバーガー国防長官と会談
- 1984年 11月 日米武器技術共同委員会（JMTC）初会合
- 1984年 12月 防衛庁、FSXとして国産機を正式候補とする決定
- 1985年 1月 中曽根康弘首相、安倍晋太郎外相訪米
(中曽根、米ソ軍縮交渉への完全支持とSDIへの「理解」を表明)
- 1985年 3月 ワインバーガー国防長官、西側各国にSDI研究開発に参加要請
- 1985年 4月 安倍外相訪米、ブッシュ副大統領らと会談（SDI参加迫る）
- 1985年 1月 日米首脳会談を受けて、4分野でのMOSS協議の開始に合意
(以後、各分野について次官級協議を実施)
- 1985年 6月 加藤紘一防衛庁長官訪米、ワインバーガー国防長官などと会談

北米局安全保障課長—1980年代前半の日米関係—

■ 経済局国際機関第一課長

—— 本日は北米局安保課長のことを中心にお話をお伺いしますが、その前にまず経済局時代についてお聞きします。大使は 1982 年にワシントンから戻られて、最初、経済局の調査官、その後、経済局国際機関第一課長になられています。当時はアメリカとの経済摩擦が過熱し始めていましたし、東京ラウンド後の GATT 体制についても新ラウンドに向けた動きなどもあったかと思います。この経済局時代のことで強くご印象に残っていることをお話しください。

沼田 これはかなりはしょって申し上げます。

まず、GATT 体制については、1982 年 11 月、私が着任してから数か月後に GATT 閣僚会議というのがあった。ところが、そこで先進国と途上国の利害対立というのがかなりあらわに出てきて、結局これは共同文書がまとまらなかった。宣言というのがまとまりませんでした。それから、東京ラウンドに次ぐ、いわゆる新ラウンドのテーマに向けても具体的な進展は見られなかったということです。

何が問題だったかという、いろいろな問題があるのですが、GATT 屋さんがよく使う言葉というか、GATT に規定があるのですが、「セーフガード (Safeguard)」というのがあります。GATT19 条の下で海外からの特定品目の輸入が急増した際に、国内産業を保護する目的で政府が発動する緊急輸入制限措置とかそういう種類の規定があるのですが、これは実は私が国際機関一課長だったときまでに一度も発動されたことがなかった。このセーフガードというのは伝家の宝刀みたいなもので、これをいつ、どういうときに発動するのかというのをいつも議論していたわけです。

私はワシントンで Politico-Military をやっていたものだから、このセーフガードの議論というのは核戦略みたいだと言っていたのです。まだ一度も実際発動されるのを見たことがない。もっとも、その後何回か発動されていますけれども、当時は「consensual application」と言ったかな、セーフガードの対象となる国の同意の下で選択的に発動するということを認めるべきだと EC が言っていたんです。これに途上国が反発した。途上国から繊維なんかがどんどん入っていくことに対して EC が懸念を感じて、このセーフガードを使おうと思っていたのに対して、途上国が反抗したというようなことで問題になっていました。

それから、GATT というのはそれまでモノの貿易ばかりやっていたのですが、それにサービス貿易を含めるべきだとか、Trade-Related Investment (貿易関連投資) とか。これは何だったかよく覚えていないけれども。先端技術についても取り上げていくべきだということをアメリカなど先進国が主張して、それに対してやっぱり途上国が抵抗した。それから、自由化の行動計画を閣僚会議のときにつくろうと言って、それもうまくいかなかった。それから、いろいろな国がいろいろな保護主義措置をとっているけれども、それをしばらく ceasefire peace plan をつくろうというような話があったのですが、要するにまとまらなかったという話です。

それが GATT についての話です。

他方、国内ではいろいろな市場開放問題がある中で中曽根内閣が発足したわけです。そのときいろいろな市場開放の措置が発表されたのですが、その中に基準・認証制度の改善というのがあります。83 年 3 月 26 日に基準・認証制度等連絡調整本部、これは各省の大臣が名前を連ねているところですが、そこで発表した措置として基準・認証制度の改善というのがある。

これは何かというと、「金属バット問題」というのが当時あったのです。要するにアメリカが作った

金属バットが日本で売れない。日本の消費生活用製品安全法に基づいて、金属バットの仕様というか細かい中身についていろいろ決めていて、それが非関税障壁になって日本で売れないというのを USTR が取り上げていました。私が国際機関一課に行って最初のほうの仕事として、この金属バットについて USTR の担当官と激しい交渉というか議論をした。金属バットで殴り合うような議論だったという記憶があるのです。実は、これは GATT のスタンダード協定というのがあって、いろいろな業界に共通する問題です。たとえば、今の新型コロナウイルス感染症のワクチンの問題をどうするか。外国の医薬品を持ってきてそのまま日本で売ろうとしても、厚生省とかが大変でしょう。あの種類の問題はいろいろなところにあったわけです。

それで、金属バットでアメリカからギャアギャア言われるのはしゃくだなと思っていたら、当時、通産省の GATT 室長で香田忠維さんという人がいて、後にオマーン大使になりましたけれども、彼といろいろ相談しているときに、これは金属バットだけに限らなくて同じような問題が各省にあるので、中曽根内閣の市場開放政策の一環として各省を全部まとめて動かす手はないだろうかと、実は 2 人でひそかに画策して内閣審議室に持ち込んだんです。外務と通産だけではほかの省が動かないから、これは内閣の虎の威を借りるではないけれども、内閣にまとめてもらおうということで。それで 83 年 1 月～3 月まで週に 3 回ぐらい、本当に各省と缶詰になって作業して。各省のほうは何でいきなりこの話が降ってきたのかときよんとしていましたけれども。今だからここでしゃべってもいいと思います。

それで、GATT・スタンダード協定上の要請とか諸外国からの要望を踏まえて、この基準・認証制度の改善という決定で以下の措置をとると。そのときの発表文を事前にお送りしたと思います。中身を見られてもきょとんとされたかもしれないけれども、認証手続における内外無差別の法制度的確保とって、要するに 17 本の法律を改正したわけです。厚生省の薬事法関係、農水省の農薬とか肥料とかの関係、通産省はバットとか何だったか、通産省は多いですね、ヘルメット、ガス、電気用品、化学物質等々。運輸省は道路交通法、自動車ですね。労働省は労働安全衛生法というようなことで、法律を全部改正する。

その他の基準・認証制度の改善というのは、どういうふうにして規格とか基準をつくっているかという透明性が非常に大事です、この世界では。それをどうやって確保するか。それから、規格・基準の国際化の推進。医薬品なら医薬品の世界で国際化の動きがある。それから、外国検査データの受け入れ。これはまさに今ワクチンでいろいろやっていますでしょう。アメリカのデータがどれだけ信用できるか云々という。それから、最近でも二国間の通商交渉でも検査データの相互承認ということをよく言いますが、その種類の話。その他の制度の簡素化、手続の迅速化ということで 1 月から 3 月まで作業して、4 月から 5 月に衆議院・参議院の商工委員会で審議をして、一括法として成立しました。ちなみに、この国会審議のときは、各省はそれぞれ局長が出てこられました。原局の局長が出てくるわけです。私だけ課長で出ていったものですから、各省の局長の中でも通産省の福川伸次貿易局長（後の事務次官）などが気にかけてくださって、おかげで国会はそんなにもめないで済みました。

この結果は、当時の村田良平経済局長が、「これは諸外国からも合格点をもらって、国民から見ても 75 点～80 点ぐらいの点数はとれたと思う」ということを言っておられました。

もう一つ、市場開放の問題で NTT の資材調達問題というのがあった。これは実は 70 年代の後半に当時の牛場信彦対外経済大臣とストラウス（Robert Strauss）、その後に来たアスキュー（Reubin Askew）両 USTR との間で非常に難しい交渉があったのです。日米農産物交渉、自動車自主規制交渉と並んで NTT、電電公社の資材調達をどうするかというような非常に激しい交渉がありました。

その結果、NTT 調達協定というのができて、81 年 1 月以来、GATT 政府調達協定及び日米政府間

取り決めに基づき内外無差別の開放的な調達手続を採用したのですが、それが私の着任した頃にはそろそろ3年の期限が切れてくる。ところが、最初の18か月ぐらいの間にモトローラなどが日本市場での実績が全然上がらないといって不満がたまってきて、調達協定の更新をしなければいけないということで調達協定の更新交渉、これは非常に地味な交渉ですけれども、半年ぐらいやりました。そのときに、私の USTR のカウンターパートだったニューカーク (Douglas Newkirk) という GATT 担当の Assistant USTR がいた。郵政省のカウンターパートは五十嵐三津夫電気通信局管理課長、後の事務次官、電電公社は加田五千雄さんという国際調達室長だったのですが、このときに USTR との交渉も大変といえば大変でしたけれども、もっと大変だったのは郵政省との交渉でした。

そのときにつくづく分かったのですが、郵政省の方々というのは労働組合との交渉で鍛えているわけですね。交渉のアプローチが全く違うのです。私の場合には、やっぱり交渉が始まる時にはインシヤルなそれぞれの立場があって、その妥協点はどこかと常に考えるわけです、落ちを。だから、対処方針の協議というのをするのですけれども、そのときも、最初これを言って、駄目だったら次にこういうことを考えるということを案としてつくって郵政省にぶつけると、五十嵐課長が「駄目だったらというのは書いちゃいけない。当初の方針でがんばれ」と言うわけですよ。これは大変でした。でも、だんだんやっているうちに分かって。郵政省も最後までそれを言い続けるわけではないですから、最初にこれでとにかく頑張ると出して、米側が拒否すると間髪を入れず次の案を出すというふうに慣れてきましたけれども、国内的な交渉スタイルとの違いをつくづく感じました。以上です。

—— 最後の郵政省の交渉スタイルは大変興味深いお話だったのですが、この頃はやはり郵政省も対外交渉というか、外国との交渉には慣れていなかったということなのでしょうか。

沼田 それは非常にありますね。

—— この後は、NTT をはじめとしていろいろな国内の改革の問題にのっとして日米交渉が多岐にわたるわけですが、その後は多少慣れてくるけれども、この頃はまさに黎明期でという。

沼田 そういうことだと思いますね。既に私が行く前の、もともとの NTT の調達交渉の協定の基をつくったときからですけれども、やっぱり慣れていなかったということがあると思います。その後、米国から衛星を買えという話もありました。これも大分、郵政省も科技厅も絡んで三つ巴で大変でした。それから、電電の話になると、通産省と郵政省の対立というのがあるでしょう。非常に大変でしたけれども、私はその一端をのぞいたような話です。

—— こういうとき、調整というのはどういうふうに行われるのでしょうか。たとえば沼田大使から案を出してとか。つまり、外務省がとりまとめ役になるという感じなのでしょうか。

沼田 この交渉についてはそうでした。電電の資材調達交渉についてはそういう形でした。さらに非常に問題になれば、ずっと上に上げてということでしたけれども、そこまでやらなくて済みました。それは、そもそもできている取り決めを更新するという話ですから。

—— 今の質問とも関連すると思うのですが、外務省の GATT 課長の役割というのは、特に他省庁との関係においては、案件ごとにももちろん違うのかなとは想像できますし、通産省の方の名前なんかも出てきましたけれども、沼田大使の GATT 課長時代というのはどういうイメージでしたか。

沼田 私のカウンターパートというのは通産省の課長だと国際経済課長ですけども、これは南学政明さんという私より 5 年先輩の方です。GATT 自体はこの香田さん、年次は僕の 1 年下の方が GATT 室長です。それから、たとえば経済企画庁の国際経済課長だったかな、田中努さん。後に彼は次官になりましたね。農水省は後に次官になった上野博史さんですね。上野さんは私の西高の先輩でしたけども。大蔵省は関税局の吉川共治国際第一課長でした。私より年次が何年か上の人たちでした。それから、今の NTT みたいな話になると郵政省が入ってくるし、基準・認証制度だとほかのいろいろな省が入ってくる。国際機関一課長というのは GATT の話と市場開放と両方やっていたから、各省との付き合いとなると市場開放の面でかなり厳しいやりとりが出てくる、そういう状況でした。

—— 対外交渉の際には国際機関一課長がとりまとめ役に。

沼田 NTT の調達の問題については、ニューカークが来て各省会議をやると。交渉するのは私ですけどね。郵政省の課長たちも同席していますけれども、郵政省の課長がその場で発言するということはあまりなかったような気がしますね。

—— その対外交渉に行く前の国内の調整のほうに苦労されたと。

沼田 そうなんです。大分勉強になりました。

—— ちなみに、このポストに就くまでは GATT の担当とかはされたことはない？

沼田 全くありません。いきなりやらされました。外務省というのはそういうところですよ。

—— アメリカから帰ってきて少し経済局で勉強して。

沼田 ベルサイユ・サミットの調査官というのをやったけれども、それが終わってすぐですから。ガットの「ガ」の字も知らないまま。別に外務省では珍しいことではありません。

—— 先ほど、「GATT 屋さん」という言い方をされたと思うのですがけれども、外務省の中には GATT 専門というふうに目される方がいらっしゃる。

沼田 たくさんいます。「GATT 屋さん」という言い方もするし、「ガッチャマン」という言い方もする。ガッチャマンにはどういう人がいるかというと、次官をやって駐英大使をやられた、ロンドンで僕のボスだった林貞行さんが GATT の大変な専門家。僕の同期の野上義二君もガッチャマンだな。それから、ガッチャマンでもあり安保マンでもあるのは梅本和義君。イタリア大使から今度国際交流基金の理事長になった。GATT をやった人というのはいろいろな人がいます。経済局の仕事をするに当たって、やっぱり GATT の経験というのが必要だということでしょう。私の場合には経済局を 2 年しかやっていませんから、このときだけです。

—— ガッチャマンというのはですか。GATT 屋さんというのは、外務省の中の言い方なんですか。それとも、通産省の GATT 室長なども含めた捉え方になるんですか。

沼田 どうだろうな。大体外務省の中だったと思うけれども。

—— 外務省というのは、国内で材料を持っていなくて、アメリカもしくは国際社会の要請を国内官庁に伝えて、国内官庁から反発を受けてという、板挟みのようなポストなのかなと感じているのですけれども、大使の認識はいかがですか。

沼田 まさにそのとおりです。特に経済局はその色が濃いですね。だから、板挟みになったときにどうするかと、さっきの金属バットの問題について言えばね。外務省から言ってもまとまらないから、やっぱりほかの人の力を借りるという意味で、内閣の力を借りるというようなことはあるわけですね。今はどうなっているのかな。今は官邸の力が大変強くなって、内閣の力が非常に強くなっているというのは、その裏返しみたいな面もあるかもしれないけれども。外圧利用といっても、いつも外圧、外圧と言っていたらそっぽを向かれてしまいますから、いろいろ国内調整に苦勞する立場にはあるということですね。

—— この基準・認証制度の部分というのは、金属バットのことを契機として、その対策を包括的なパッケージにすることを大使と香田さんで考えられて、全省庁を巻き込んでそれをつくられたと。それは単純に外圧反応型でやったというよりも、外務省、通産省のイニシアティブでつくったということですか。

沼田 最初は外圧だったのですが、やっぱり外務省、通産省のイニシアティブでそれを内閣に持って行って、各省を巻き込んでやったということです。

—— その外圧の中身なのですが、具体的にアメリカ USTR は金属バットについてどういう形で交渉しようとしてきたのでしょうか。金属バットで殴り合うような激しいやりとりがあったということでしたが。

沼田 金属バットは、中身は忘れましたが、どういう成分のもの、どのぐらいの長さのものならよろしいとかいうような話を、それをええろという話です。そういうのはやっぱり通産省の原局なんかは非常に業界と結びついていますから、ものすごい抵抗があるわけですよ。

それから、抵抗があるといえば、自動車の話というのは今でも問題がある。自動車の型式承認を、一台一台検査するのではなくて、サンプルで通れば同じものはいいようにしろとか。それから、薬の話も大変ですよ。

ちなみに私がこの基準・認証制度の仕事をしたときに私を手伝ってくれたのは、厚生省から国際機関第一課に出向してきていた薬学の技官石井甲一さんです。そういう人がいないとなかなかこういう話はできません。専門的な話がすごく多いから。

—— アメリカ側も USTR に一本化して交渉に臨んでくるのですか。

沼田 いや、陰にはたくさんいるでしょう、いろいろな業界に。それをまとめてやって来る。

—— 国務省が出てきたりということは。

沼田 国務省は出てこないですね。商務省は大分絡んでいたと思います。商務省とか農務省とか FDA (Food and Drug Administration) とか、ああいうところが絡んでくる。

—— 一括法が成立したということだったのですけれども、中曽根首相はどういった形で関与されたのでしょうか。

沼田 こういうアイデアを上げたら、それはいいからやれという形です。聞こえがいいでしょう、17 本一括。聞こえがいいと言っては悪いけど、17 本まとめて改正しますというのは何となくインパクトがあるということを我々も狙ったわけです。

—— では、特に反対もなく、むしろ……。

沼田 むしろやれということです。それが我々の狙いだったわけですよ。

—— 見事に的中したということですね。

沼田 そうということです。官房長官にも支持していただきました。

■ 安全保障課長着任当時の日米関係

—— GATT 課長の後、北米局安全保障課長になられました。最初に、そのときのアメリカとの関係や日本を取り巻く安全保障関係についてお聞かせください。

沼田 まず、安保課に移ったのが 84 年 7 月だったでしょう。そのときの局議のメモというのが残っていて、何を議論していたのかな。日米関係全般についてこういうことを議論していましたね。

1982 年、鈴木内閣。鈴木内閣というのは「immobilism」と僕のノートに書いてある、何もなかったと。その後中曽根さんになって、中曽根さんがアメリカから見てヤスがどこまで実績を上げたのか「stock taking」と書いてある。中曽根さんのお手並みがどのぐらいかということアメリカが見ていた。グローバルには INF の問題が出てきて欧州との関係。ウィリアムズバーグ・サミットですよ。アジアが西側の一員というのが定着して、防衛についてはどれだけ日本が実行できるかということに関心が高まっていると。その関連で、安保政策におけるソ連の位置づけをどうするか、西太平洋の重要性が増大していると。それから、大西洋と太平洋の落差が縮まってきたというようなことが当時のメモに書いてあります。

それから、そのころに栗山さんが。

—— 北米局長。

沼田 北米局長ですね、栗山さんがワシントンに出張されたのかな。そのときの話で、日本が実際に物事を進めているペースとアメリカの期待との間のギャップというのが問題になっている。その中で「quiet diplomacy が効果を持つ」、「Open debate or pressure produces diminishing returns」とい

うことを栗山さんが言っています。向こうの議会の人なんかに。

それで、この防衛の議論も防衛予算が前年比何%増加したとか、対 GNP 比が何%とか数字ばかり、日本のプレスなんかもそこばかり関心があって議論するけれども、それは「futile」であると。

「We should focus on the actual needs」ということ。それとともに「Concern on the impact of economic issues on defense」が出てきており、「Two-way cooperation」と「rational strategy」が必要であるというようなことを栗山さんがアメリカに対して言っておられる。

それでちょっと飛ぶのですけれども、翌年の 3 月 20 日、大河原大使の帰国報告の中で「アメリカ人の感情の波がまた高まっている、アメリカの余裕がなくなっている」と。そのときに松永さんがまだ赴任される前ですが、「国内には尊王攘夷論が出てきている」と言われています。

以上で大体日米関係の感じがわかりますか。そんな中で安保課の仕事がありました。

防衛庁長官の話に入っちゃっていいですか。

—— 前任の加藤課長からの引き継ぎはありましたか。

沼田 ありました。たくさんあった。

安保課というのは細かいことがいろいろものすごくあるんです。基地問題とか、訓練をどうするか、何月何日から何月何日までどうするとか、どういう事件が起きたらどうやって処理するかとかね。それから、コストシェアリングの話も在日米軍基地の日本人職員の労務なんかがいろいろあってね。そういう引き継ぎも随分ありました。

—— ちなみに、課長になられたとき首席はどなただったのですか。

沼田 僕が課長になったときは鹿取克章君でした。のちのインドネシア大使。鹿取君の次が西田恒夫君ですね。

—— カナダ大使、国連大使ですね。

—— 先ほど、局議の中で、安保政策の中でソ連の位置づけをどうするかということが上がったということですが、具体的にどういうことなのですか。

沼田 後で出てきますけど、まさにバックファイヤーとか何とかいう話もあるし、シーレーンの話にしても結局ソ連の話だとかね。そういうようなことを考えたときに、要するに何か有事があって日米で共同対処するということに、ソ連の脅威にどう対処するか、アメリカがどれぐらいしてくれるのかとか、そのようなことをきちっと考えていかなければいけないというのを防衛庁は本当に考えているのかなというようなことです。

—— 防衛庁が考えているかどうか若干不安なところがあったと。

沼田 その話は後で出てきます。

—— あと、西太平洋の重要性が高まっているということだったのですけれども、後で出てくる栗原長官の訪米・訪欧のときに、NATO の事務総長が欧州の一部で太平洋の重要性が高まっていて大西洋

が軽視され始めたということを懸念している声が上がっていると話しているのですが、この太平洋の重要性が高まるというのは具体的にどういうふうに。

沼田 その話は栗原さんのときでしょう。NATO の事務総長の話だったかな。

—— はい、たしか。

沼田 キャリントン (6th Baron Carrington) の話。

—— はい。

沼田 ありましたね、その話はね。確かにありますね、それはね。

—— 当時の感覚としては。

沼田 キャリントンは、アメリカにとって「Europe less important, Pacific more important. Europe blames the U.S. for concentrating on Pacific」と書いてあるな、僕のメモに。キャリントンはまだ着任したばかりだったと思います。最近米国はペルシャ湾について苛立ちを深めており、「Western Europe and Japan opting out of the problem」と考えているようだが、「We have to keep U.S. interested」と言っていました、説教調に聞こえました。

—— そういう雰囲気があったということですか。

沼田 向こうはそう思っていたと思う。

—— 局議でもそういう話は出たということですよ。

沼田 さっきの西太平洋といったときにそこまでは議論していない。ちなみに、この僕の訪米・訪欧随行報告、よく公開しましたね、これ。

—— そうですね。随分実質的な内容のある。

沼田 こんなこと書いたかなと。結構書いていたのですね。これで大分思い出しました。

—— アメリカの余裕の低下というのが大河原大使から提示されたということですが、レーガン政権が出てきてまた強いアメリカが帰ってきたという雰囲気がある一方で、アメリカの余裕がなくなったり、あるいはキャリントンが言うように孤立主義が復活していったりという雰囲気もあったのですか。

沼田 カーターのときは *malaise* とか言って相当しょぼづけていたわけでしょう。それでイラン人質事件もあったし、アフガニスタンも起きたし。レーガンは非常にオプティミスティックにやってきて、日本に対してもいろいろ配慮するということでやってきたのだけれども、実はだんだん国内の議会なんかから圧力が高まってきて、だんだん *patience* がなくなっている。だから、貿易と防衛の

リンケージとかいうのがだんだん出てくるということです。

—— 直接的にアメリカがたとえば太平洋とか全般的に関与を縮小するのではないかという見通しが出てくるレベルではまだないと。

沼田 まだないですね、それはね。

■ 栗原祐幸防衛庁長官訪米欧随行動（84年9月）

沼田 それでは栗原長官ですが、栗原長官が訪米したのは84年9月ですね。訪米の前に栗山局長が栗原長官にブリーフに行って、アメリカ人はかつてのベトナム戦争とかウォーターゲートでかなり自信をなくしたけれども、それを回復しつつある。アメリカの国防予算の増加には超党派的コンセンサスがある。日本に対するアプローチは民主党のほうがかつい。ナン修正案（NATO加盟国が国防支出年3%増の目標を達成しない場合には在欧米軍を1987年～89年に年間30,000人ずつ削減するとのSamuel Nunn上院議員修正案）自体は、NATO、Western Europeを対象にしているけれども、孤立主義とかネオ・モンロー・ドクトリンとか言われるような動きも民主党の中であった。ペルシャ湾というのは日欧の問題だという感じが出てきているというようなことをブリーフされた。

栗原長官は、訪米の途次、まずホノルルに行ってクラウ(William Crowe)太平洋軍司令官(CINCPAC)に会いました。それで、NLP (Night Landing Practice) についてみずからのイニシアティブで解決する腹であるということと言われた。どこに動かすとか、そういう固有名詞は出さなかった。それから、59中業では継戦能力に格段の注意を払っている。クラウからインターオペラビリティの話があったのに対して、これは「専守防衛の質を高めるためだ」と栗原さんは言われた。インターオペラビリティというのはなかなか日本の国内で理解されないということがあるので、専守防衛の質を高めるためという説明をしている。インターオペラビリティについて、クラウが「Command and control, communications equipment, spare parts, ammunitions」などというようなことをこのとき挙げています。

それから、ワインバーガー・栗原会談。これが84年9月24日。このとき、レーガン大統領がちょうどこの日に「平和と軍縮」という演説を国連総会でしたのです。これは、ソ連といろいろな意味で対話をしていくということを言って、栗原さんはこれを引用して、ソ連と話し合いをするという意味だと理解している。ワインバーガーからは「Soviet monopoly of INF」、ソ連はINFをmonopolizeしているので、それを「reduce to zero or very low number」と言っていますね。ICBMについてはSTARTで取り上げていく。「essential to keep negotiating until agreement」、交渉していかなければいけないと。「enter talks from position of strength」、さっきも出てきたけど、ワインバーガーは強い立場からのぞまなければいけないと言っています。

SDIについては一言触れましたね。SDIの構想自体は83年3月23日ですね、レーガンのスターウオーズと言われた演説。SDIについて、ワインバーガーは「thoroughly designed to prevent incoming Soviet missiles」ということを言いましたが、このときはそれ以上あまり言いませんでした。日本の防衛予算についてワインバーガーは「pleased at additional funding」、このときは84年、対GNP比0.991%になっていたからですね。

栗原さんから「自分で守るのが原則、しかし憲法などの制約がある」。アメリカの支援を得て日米安保でやっていくけれども、これ栗原さんが何回も繰り返したことですが、「背負えるものは精いっぱい

背負う」と言われました。1976 年の大綱は早く達成したい。昭和 59 年（1984 年）中業達成を期すと。60 年度概算要求は 7%増。これは 9 月ですからね。これは、僕は何故か英語で「firmly determined to exert its best efforts to obtain 7%」、7%になるようしっかり努力する決意と言ったとメモしている。

シーレーンについて栗原長官は進めていきたいと言われた。ワインバーガーから OTH（over the horizon radar）の話が出て、OTH は遠方まで早期警戒、遠くの海で SLOC（Sea Lines of Communication）防衛にも応用できる、日米双方に有用である。栗原さん、「シーレーン関係者に早く結論を出すように言っている」。それから、ワインバーガーが「武器技術移転については総理の勇氣ある決断が喜ばしい」、これは 83 年 11 月 8 日のアメリカを武器輸出三原則の例外として認めるという官房長官談話の話ですね。

それから、栗原さんはインターオペラビリティについて、「国会でなじんでいないけれども、専守防衛の質を高めるという意味で必要なものは取り入れるべし」と。ワインバーガーから「サステナビリティが最大のプライオリティ」。栗原さんから「継戦能力というのは 59 中業の大きな目玉であり、たとえば弾薬については契約ベースで 57%増加した」。そして、この継戦能力のときに、僕のメモの中に出てきますけれども、ウィッカム（John Wickham）陸軍参謀長が北海道では弾薬が必要だ、「someday prepositioning of stocks」、いつか事前集積が必要になると自衛隊の人が言っていたと発言し、これを聞いて防衛庁関係者が慌てていたようでした。

それからワインバーガーのほうから「burden sharing」と言って、議会では Nunn Amendment をはじめいろいろ修正が出てきている。日本については、米軍の施設について日本が助けている、これ思いやり予算ですね、それが続くことを望むと。これに対して、栗原長官は防衛庁として最大限の努力をすると答えました。

それから NLP についてワインバーガーが、「努力に感謝するが、近く何らかの解決が見られることを希望していると」と言って、栗原さんは「最重要視して、私も心を痛めている。総合的きめの細かい配慮のもとに誠意をもって対処」と言われたのですね。これは当時の矢崎新二防衛局長によると、栗原さんはかなり踏み込んで自分の気持ちを言った決意の表明だった。

このときのワインバーガーと栗原さんとテ・タ・テート会談のときの話、メモに書いてありますけど、中身がわかりません。ここに書いてある？これはだけど、テ・タ・テートじゃないのかな？

—— 違いますか、4 ページにあるのは。大使とアーミテージと通訳、ワインバーガー、栗原。

沼田 だけど僕は通訳していませんね。僕はもう課長になっていたから。大使しかいなかったですね。この通訳は誰だろう。

—— このメモの書き方は、大使はその場にいらっしゃらなかったということですね。

沼田 アメリカの通訳から聞いたのだと思うな。

—— 何で通訳の名前消しているのだろう。

沼田 それで、「親友は静かに話をする」という話をされたな、栗原さんは。

それから、このとき国務長官は空席で、ダム（Kenneth Dam）国務副長官に会ったときにダム副長官から「全斗煥の訪日がうまくいったようですね」という話があつて、このときに日韓防衛協力を示

唆する話がありました。これは記録に出ているかどうかよくわからないけど。この会談後、旧知のデュセイ・アンダーソン (Desaix Anderson) 国務省日本部長に僕が会ったときに、彼は「We are trying to squash some crazy ideas of generals」と言いました。ダム副長官が日韓の防衛協力の可能性を示唆することを言ったことについてデュセイ・アンダーソンが、国務省は日韓の防衛協力なんていうのはまだ時期尚早だと思っているから、一生懸命つぶしていると言っていました。それから、日韓防衛協力の話はマクファーレン (Robert McFarlane) 国家安全保障担当大統領補佐官のところでも出ました。直接的には言っていなかったと思うけれども。これに対して栗原さんは「話は外交チャネルでやってくれ」と言われた。それがここで黒く消した部分ではないかと思います。

—— 後ろのほうで、9 ページのところだと思います。

沼田 これがそうじゃないかと思うのだけど、よくわからない。

—— ここが多分デュセイ・アンダーソンの 3 ページの消えているところ。

—— 日韓の話が。

沼田 マクファーレン補佐官との会談は急遽アレンジしたとなっていますね、僕のメモを見ると。

「The president asked me to express support to the prime minister's efforts. We will continue to do everything possible to help your program」。だから、栗原さんは結構一生懸命やってくれているなと思って、その感謝の意を表するという形で、引き続きよく頼むよというメッセージを伝えたかったということだと思いますね。

それで議会の方なのですが、9 月 25 日に会ったタワー (John Tower) 上院軍事委員長は、栗原長官の質問に答えて、「You have to do more」、日本は「big country」である。「One thousand mile perimeter」について「you must ultimately take responsibility」と。「some U.S. naval resources draw down from Indian Ocean」、Indian Ocean から米海軍の一部を引き上げつつあるが、石油が重要なので、「We rely on more on you, particularly because of Russians」。栗原長官から「戦争アレルギーが続いている、よいことではないが、一遍に直せない」。タワー上院議員「1000 マイルの話は前進している、自由世界全体に貢献する」。栗原長官「シーレーン等は日米共同対処、アメリカが日本に求めるのと日本が考えているのと大きなギャップ、perception gap を埋めるべく努力している」。栗原さんの訪米自体は以上ですね。

ドイツ、ベルギー、フランスはついでに話しましょうか。ドイツのヴェルナー (Manfred Hermann Wörner) 国防大臣——僕は何で会談についていったのかな。

—— そうですね。

沼田 ついてきてくれと言うので行ったら、おもしろかったです。ヴェルナー国防大臣「日本は最重要の自由民主主義国として不可欠な共同体である」と。西ドイツ軍ブリーフィング「欧州の抑止と防衛のために戦術核導入を考えている。flexible response というのは潜在的攻撃者に対し利益より損害が大きいことをわからせる」、ドイツ外務省「SDI について not enthusiastic. coverage はどこまでやるのか。コストの問題がある」ということを言っていた。

ベルギーではロジャーズ (Bernard Rogers) NATO 軍司令官、これは結構はっきり言っていて、

このメモに書いてあると思うけれども、「ワルシャワ条約軍は strategic nuclear、theater nuclear、それから conventional の 3 つの面で全て NATO を凌駕している」と。「そういう状況のもとでパーシング II、GLCM を抑止のギャップを埋めるために展開する必要がある」、conventional capability について「NATO has not done what is necessary」とはっきり言っている。

キャリントンはさっきの話なのですけれども、米欧間で「No real problem between governments but lack of understanding between legislative bodies」、議会同士の間で理解不足があって、その example がナン修正であると。

—— 在欧米軍ですか。

沼田 在欧米軍を 3 分の 1 削減しろ、NATO 各国が military contributions を増加しなければ 1990 年までに 3 分の 1 削減しろという話ですね。

それで次に出てくるのが、アメリカにとってヨーロッパが less important になって、Pacific のほうが重要になっているのではないか、ヨーロッパはアメリカが Pacific に集中し過ぎると非難している云々と、先ほどお話ししたことで、「We have to keep U.S. interested」。ただ、僕のこのメモによると、キャリントンは最初説教調だったのが、栗原さんがいろいろ反論したら説教調ではなくなった。ただ、キャリントンもそんなに日本人と話すということに慣れてなかったと思うのですね。英国で研修、勤務した僕から見てもキャリントンは世襲貴族でイートン、サンドハースト（陸軍士官学校）出身、エスタブリッシュメントそのものの人ですからね。やっぱりそういう口調になったのだと思う。

あと、フランスは防衛庁長官が初めて行ったのですね。エルニュ（Charles Hernu）国防大臣、フランスはみずからの FAR（Force d'Action Rapide、緊急展開部隊）というのがあります。ベルダンにある緊急展開部隊の基地でガゼルというヘリコプターに長官も私もそれぞれ乗せられて飛んで、怖かった。

—— そうなんですか。

■ 加藤紘一防衛庁長官訪米随員（85 年 6 月）

沼田 怖かったという話、ついでに話しすると、加藤長官についていったときに、最初はバンゴールに行って SSBN を見ました。弾道ミサイル搭載潜水艦。

—— 見せてもらえるんですね。

沼田 それから加藤長官と一緒に NORAD（北米防空司令部）に行きました。コロラドスプリングズの空港に着いて、それから NORAD のところまでヘリコプターで飛んでいったのですが、乗せられたヘリコプターというのが窓のないヘリコプターで、外に開いているやつ。

—— 映画で見るやつ。

沼田 ベトナム戦争の映画に出てくるあれに乗せられました。僕は重いかばん抱えてシートベルトだけが頼りで怖かった。そうしたら、加藤長官もヘリコプターの一番先のほうで同じ状態だったらしく

て、降りた途端に「おい沼田君、怖かったな」と。直接外気にさらされていて、頼みはシートベルトだけでした。

アメリカとのデカップリングは非常に危険だと言っていましたね。駐独仏軍が5万人いると言ったかな。どうでしょう、加藤長官の外遊の話もしますか、ついでに。

—— そうですね、その流れでお願いします。

沼田 加藤長官は、バンゴールに行って SSBN を見て NORAD に行って、ワシントンに行って、松永大使からまず加藤長官にブリーフィングがあって、ワインバーガーは議会との関係で調子が悪くなっていると。シュルツ (George Shultz) は外交に自信をつけていると。それから、貿易と防衛の問題について行政府はリンクさせないようにしているが、議会はリンクさせようとしているという意味で警戒を要する。F-15 も貿易摩擦が続くとライセンス生産をやめる方向だ。この辺からずっと FSX の話につながっていくわけですね。

6月10日、加藤・ワインバーガー会談。最初に「Welcome another Harvard man」(加藤長官は外務省入省後、ハーバードで中国語を研修した)と言いました。加藤長官から「経済問題が防衛に及ばないようにするためのワインバーガー長官の努力に感謝する。大綱達成はなるべく早く 59 中業でやっていく」と。これは日本自身のため。「圧力をかけるより静かに見守っていることを多とする」と。「59 中業のもとで防空、1000 マイル・シーレーンなど日本独自に採用した目標に向けてかなり進展するであろう。インターオペラビリティ、それからサステナビリティ、たとえば弾薬とカリザープなどについてやっていく」。「中業は夏までに策定を終えたい。後方と正面のバランス、地理的特性、防空 (Patriot 中心、F-15 継続購入) など、シーレーン、機動力、抗堪性、継戦能力、即応性 (readiness) などをやっていきたい」。加藤さんから OTH の話を出しました。警戒監視情報収集、シーレーン、洋上防空手段に役立つので、技術データが欲しい。59 中業の中心で 61 年度中に採否を決め、62 年以降、調査に入る。これに対して、ワインバーガーは、OTH は「tied together with the need for technical transfer in the program」と。これは僕のメモの中に書いてありますが、それはソフトウェアとか費用分担、joint operation というようなことを意味していたようです。さらにワインバーガーは「Glad to support. An important item for joint meeting between staffs」。これね、国防会議なんかでも後で出てくるけれども、OTH の話が相当出ているのですよね。防衛省は非常に熱心だという感じがあるのだけれども、でも結局実現していないでしょう。

—— していないです。

沼田 していないでしょう。それは、まさにソフトウェア、共同運用というところでひっかかったのでしょう。

—— 日本側の集団的自衛権の問題ということですか。

沼田 だけではなくて、どうなんだろうな。そう、それもあるのだろうけれども。でも、そんなにこれが重点置かれていたかな、記録を見ていて何回も出てくるから。

—— 私が調べた限りでは、栗原長官がアメリカに行く直前にアーミテージが矢崎局長に随分これを入れろというふうに言っただけなんです。

沼田 栗原長官が行く前に。加藤さんじゃなくて？

—— 栗原長官のときです。84年ぐらいからアーミテージがどうも動いていたようです。

沼田 そうなの、知らなかったな。

—— 海上自衛隊の人もそれは知らなかったというふうに言っていました。アーミテージ・矢崎ラインだというふうに言っていました。

沼田 そういうことですか。なるほど。

続けますと、加藤長官「日米防衛協力が進んでいることを評価、共同作戦計画もセカンドフェーズに入ってシーレーンなどを取り上げる、インターオペラビリティの話、統合訓練、technical transferの枠組みができてつつある、在日米軍経費については枠組み内でできる限りやっていく、こういう意味で、模索の時代から定着の時代に入りつつある」。

その次に、シビリアンコントロールで、防衛当局間協議の話が出てきます。加藤長官が、長官同士、ポリシーレベルのシビリアンの往来を深めることをシビリアンコントロールの見地からも提言する。これは向こうからは何かあったかな。松永大使は、日本側部内で加藤長官に対して、既存の枠内を前提として、従来から行われている政府間協議に加えての防衛当局間協議ということで、要するに外務省ときちっと協議してやって欲しいということを言われていました。他方、このとき西廣整輝防衛局長も一緒でしたね。別途、長官は松永大使に西廣さんは制服を押さえるという意識が強いようだと言われたようです。

それから、ここで POMCUS の話が出てきます。POMCUS もこれ、加藤長官から言われました。POMCUS というのは事前集積ですね。「prepositioning overseas of material configured in the United States」か。これについてはワインバーガーが「only with GOJ approval」、日本政府の同意があつてのみやりますと言って、ただ、ヨーロッパでは4個師団についてやっている。議会の承認も必要だと言ったら、アーミテージが慌ててというか、ポリシー・レベル・ディスカッションを先にやるが必要で、「No plan to preposition in Japan for Southwest Asia contingency」、まだ南西アジア（ペルシャ湾等）の有事のために日本に事前集積する計画があるわけではないと付言。ケリー（Paul Kelly）海兵隊総司令官が、日本には海兵隊2万人がプリポジションされているので、弾薬など密な（dense）ものは緊急展開のために事前集積する必要があるかもしれないと発言。加藤長官が、国内の政治的な意見がもっとポジティブにならないと無理だと言うと、ワインバーガーは「Not an immediate issue」と言って引き取った。これは要するに僕のメモによると、防衛庁の中で制服組の熱を冷ます考慮があつたのではないかと思います。

それから、加藤長官から沖縄米軍の事故が最近多いという話があつた。NLP については加藤長官「最大の懸案、総理も全力を挙げろと言っている。具体的な形は見えないが、状況はよくなりつつある。政府全体として全力を挙げる」。ワインバーガー「Vital priority を置いている。私が日本に行くとき（9月）には、progress があることを期待する」。

SDI について、ワインバーガーは「lasers, x rays, command, control, communication and intelligence などの研究をしているが、ケネディ（Ted Kennedy）上院議員は star wars と言って批判している」。加藤長官が、ソ連は SDI の発想を非難しているが、defense weapons の開発はよいということになる可能性もあるのではないかと聞いたところ、ワインバーガーは「ソ連は strategic defense

というコンセプトは 17 年間やってきて、laser など研究している。ソ連の first strike の可能性を減らすことが目的であって、ソ連はこのコンセプトの価値を認めるかもしれない。ソ連と話し合う用意はあるが、彼らに拒否権を与えるつもりはない」と。加藤長官からフランスの態度はと聞いたら、ワインバーガーから「ミッテランは、政府は participate しないと言っているけれども、民間企業については明らかでない」。

それから、マクファーレン補佐官と加藤長官の会談。マクファーレン補佐官とシグール (Gaston J. Sigur Jr.) 国務次官補、それとケリー国防次官補代理が出席していたと思います。マクファーレンから「SDI について総理や JDA の positive response に感謝している。日本の knowledge が入れば成功する可能性がある」。加藤長官「defensive であることを確認したい。民間企業の進んだ技術を利用したい」と。これまたソ連が将来理解する可能性がありますかと聞いて、マクファーレンは「not likely to agree to decrease offense」と。

次、これはマクファーレンの報告電報に入っているかしら。foreign military sales の話、装備調達。

—— マクファーレンの電報は用意した記録の中にはないですね。

沼田 マクファーレン・加藤会談の電報ないですか。なるほど。マクファーレンはこういうことを言いました。論理的かつ経済的に見てセンシブルな決定であっても political implications を持つことはある (「Logically, economically sensible decisions have political implications」)。それから、「Crossing the threshold of procuring at home what has been procured here, the sector in which the U.S. competes effectively may be lost」。アメリカが競争に勝ってきた分野で、それを日本で生産することになると、アメリカの競争機会が失われるということがある。タンクとか airplanes とか、と言いました。タンクというのは M110 自走砲、この前お話ししましたよね。

—— ライセンス生産の。

沼田 ライセンスの話ね。その話ですよ、明らかに。加藤長官が「装備調達について純粋に軍事的有効性、インターオペラビリティを考え公正さを大切にしたい。決定に数年かかる」と言ったのですが、このとき同席していたにケリー (James Kelly) 国防次官補代理が、ルーガー (Richard Lugar) 上院議員が FSX について、「Definitely encourage Japan to purchase the next fighter from United States. Extremely difficult, if more costly and less effective than competing aircraft. The prospect of bringing trade and defense closer」と言っていると。僕の記憶では、ここで FSX が初めて出てきますね。ここしか出ていない。

—— じゃ、マクファーレンとの会談は。

沼田 でも、ケリーが言っていますね。だから話が出てはいます。でも FSX が本当に問題になるのはもうちょっと後で、相当問題になりましたね。

あとシュルツ国務長官との会談。シュルツ、ウォルフォウィッツ国務次官補などが出席。貿易問題でいろいろ苦勞しているという話があって、defense については「Conscious of distance between objective set and capacity to fulfill them. Impressed by genuine progress」。INF については、「Assure you that we will continue to emphasize global ceiling, not simply European ceiling」と言っていますね。

議会との関係では 6 月 11 日にバード修正というのが出てきたのですね。State Department Authorization bill についての sense of congress resolution。バード (Robert Byrd)、レビン、ベンツェン (Lloyd Bentsen)、サーモンド (Strom Thurmond) 議員の共同提案。この中で大綱を再検討しろ、この 10 年間に 1000 海里のシーレーンを含む能力達成の 59 中業をやれ、59 中業中に防衛費を年 20%増加させろ、コストシェアリングに労務費を含めて増加させろ。バード議員がこのときのフロアスピーチで、この修正はちょうど防衛庁長官が来られているときに particularly appropriate であると。ワインバーガーはこれについて、ああいう修正案は日米防衛協力の役には立たないと言っていました。加藤長官は、最初相当無然としていたけど、中身を聞いてちょっと冷静になったと書いてある。

ワインバーガーと防衛庁長官の会談自体は以上ですね。

—— 大使が安保課長在任中に訪米されたのは、この二度ですか。

沼田 はい。1 年ちょっとしかいないから。栗原さんは防衛庁長官をもう一回やられていますね。FSX の一番大変なときは栗原さんがまたやられたわけでしょう。栗原さんはなかなかチャーミングな方でしたよね。変わった経歴を持っておられるでしょう。農協か何かをずっとやっておられて、それから政治家になられて。だから、このメモにはアメリカ側は割合栗原さんに好感を持っていたのではないかと書いていますね。

—— ワインバーガー国防長官は回顧録にわざわざ名前を載せて書かれていますよね。ワインバーガーあるいはアメリカ側にはどういうところが気に入られたとか、どういうところでウマがあったんですかね。

沼田 役人的でないというのもあるのでしょうかね。割合はつきり言われるとか正直に言われるとか、そこだったのではないのかな。でも、NLP が自分のうちにできなかったというのは相当気になさっていた。でもその後ずっと続いて今まだやっているわけでしょう。

—— 栗原長官の訪米だったか加藤長官の訪米だったか、大使のメモの中に西廣、矢崎の間の若干の齟齬みたいなことが書かれていたのですが、これは具体的にどういうふうに感じられたのですか。

沼田 たとえば矢崎さんは、これは後で出てくるのだけど、5 条事態の研究が一応終わって、その報告はちゃんと外務省にしているかどうかと言ったことを真面目に受け取られていたという感じがするけど、西廣さんは必ずしもそうではなかったというような感じもします。さっきのシベリアンコントロールの観点からの防衛当局間の協議という話も西廣さんの方が何か強硬な感じがした。それから、矢崎さんが西廣さんに遠慮しておられた感じがしました。矢崎さんは大蔵省から来られたでしょう。西廣さんは防衛庁生え抜きの希望の星。夏目さんもそうだったのかな。

—— 外務省と防衛庁の間の連絡連携というのはどういう形で行われるのですか。たとえば、長官の訪米の前にすり合わせはかなり行われるのですか。

沼田 あまり記憶にないですね、それはね。栗原長官のときに北米局長がブリーフィングに行ったり、それから欧亜局長がブリーフィングに行ったり。栗原長官だけだったかな、外務省の局長が何人かブ

リーフィングに行っていました。加藤さんのときにはそれはあまりなかったと思います。でも、対処方針の打ち合わせという感じではなかったですね。

ただ、外務省と防衛庁との関係ということでは、たとえば防衛白書を出すときにどういう協議があったかという、僕が安保課長をやって1年たったときかな、情報調査局に安保政策室というのができたのですよ。その初代の室長が藤崎君だった。

—— 藤崎萬里さん？

—— の息子さん。

沼田 のちの駐米大使の藤崎一郎君。そのしばらく後、森本敏元防衛大臣もその室長やっていたね。防衛白書の調整なんかはどういうわけか情報調査局でやっていたのかな。藤崎君のところでやっていて、安保課は直接にはやっていなかった。あとは、たとえば米軍の訓練の話というのは、これは当時訓練課長というのかな、防衛局の訓練課長に、オーストラリア大使になった私の1年下の上田秀明君が当時出向していたから、相談に来ていました。そういう形で個別の問題についての協議はあった。次の項目で大分出てきます。特に栗山さんと西廣さんとのやりとりとかいうのは次の防衛予算GNP1%問題なんかで大分出てきます。

—— 先ほど、栗原長官の印象は何だったのですけれども、加藤長官の印象はどうでしょうか。

沼田 加藤長官は我々の先輩だから。どう言ったらいいかな。彼は外務省出身だけれども、防衛庁長官としてやっておられるときにはあまり外務省の方だけ向くわけにもいかないという感じは持っておられたのではないかな。そういう感じがしますね。

—— 安保課と防衛庁との連携はそれなりにあると思うのですが、安保課と官邸との関係というのはどうなのでしょう。

沼田 官邸とあまり直接やった記憶はないですね、僕ときはね。その前の段階ではあったかもしれないけれども。むしろ北米一課はあるけれども、安保課と官邸と直接というのはあまりないですね。

—— シビリアンコントロールという話が出てくるのですけれども、このことについて制服組を好きにさせないというか、そういう観点がこの時代まだ残っていたと。

沼田 防衛庁はそうだった。それは非常に強かったのではないかな。

—— 防衛庁の中でも矢崎さんとかと西廣さんとの間では少し違いがありましたか。

沼田 誰と誰？

—— 西廣さんと矢崎さん。

沼田 それはあったのではないかなという感じがしますね。

—— 大使の目から見て、そういう状況というのはどういうふうに観察されていたのですか。

沼田 矢崎さんが「実はね」という話を時々してくれたという感じがしますが、僕のメモの中にも時々出てくるけれども、そういう話を割合してくださったという感じがします。

—— 防衛庁の中の文官と制服と背広の関係というのは、外から見ても独特なところがありますね。

沼田 そうですね。よくわからないですね。今は大分違うと思いますが。

■ 防衛費 GNP 比 1% 枠問題

—— 次に、防衛予算の GNP 比 1% 枠の問題をお話いただけますでしょうか。

沼田 それでは、防衛予算それから GNP 比 1%、日本の防衛力自体についてどういうことがあったかということをお話しします。

まず、私が安保課長になった 1984 年は、夏に 85 年度の概算要求から始まって、防衛庁が概算要求を 8% 増とし、それに人事院勧告が加わるとどうなるかということだったのですが、人事院勧告は 3.4% 以内ぐらいだろうということが言われていた。GNP の成長率が何%になるかというのが一つのポイントになるわけですね、対 GNP 比率の問題があるわけですから。

そのときに栗原防衛庁長官が 9 月に訪米されて、この前も話しましたがけれども、そのときのワインバーガーとのやりとりでは、ワインバーガー長官は 84 年度予算について「Pleased at additional funding」ということを言っていました。栗原長官は、ここで自分の持論を言われたのですね。自分のことは自分で守るのが原則である、しかし、憲法やほかの制約があるので、アメリカの支援を得て日米安保の体制をとっていると。栗原長官独自の表現ですけれども「背負えるものは自分で背負う、精いっぱい背負う」。しかし、それができないときはアメリカに頼むという意味です。それで、1976 年の大綱というのは早く達成したということかな。昭和 59 年（1984 年）の中業の達成を期して 60 年度概算要求は 7% 増ということにした。

それから国内でいろいろな動きがありましたけれども、12 月になってアメリカから言ってきた。在米大使館から来た電報で、アメリカ側は人事院勧告ベースアップ分を除いて 58 年度予算の増加分、要するに 6.5% 増を下回らないようにしてほしいと、それから後年度負担が概算要求額を下回らないようにしてほしいということ言ってきました。

12 月 13 日、同じ日付でレーガン大統領から中曽根総理宛ての手紙が来て、日本政府の決定が日本の領土・周辺海空域及び SLOC (Sea Lines of Communication)、シーレーン防衛の目的に supportive であることを期待する、静かな対話を続けるつもりであると。こういうレーガンの手紙を受けている予算折衝があって、外務省も防衛庁をサポートしていろいろやった結果、防衛予算はプラス 6.9% ということで、対 GNP 比は 0.997% ということで収まりました。まだ 1% までは行かない。1% 枠までの隙間というのは 98 億円ということになっていました。その成果を踏まえて中曽根総理はレーガン大統領に 1 月 2 日にロサンゼルスで会われたのですが、このとき、日本は NATO よりはるかに大きな努力をしているということ言われました。

他方、国防総省のアーミテージ。当時、彼は次官補でした。1 月 17 日、アーミテージは日本に来了

ようですね。その 6.9%ということについて国防総省はパブリックにはコメントしなかった、その政治的意味は分かるけれども、軍事的にはあまり意義が高くないということを言いました。これが国防総省の立場です。だから、表向きには言わないということですね。

それから次に、加藤長官が 6 月に訪米されて、そのときのワインバーガー長官との会談で次のように言っています。経済問題が防衛に及ばないようにするためのワインバーガーの努力に感謝する、我々も最善の努力をして大綱達成をなるべく早くしようとして 59 中業を進めようとしている。それは日本自身のためである。アメリカが圧力をかけるよりも静かに見守ってくれていることを多とする。中業の策定は夏までに終えたい。後方と正面のバランスをとり、地理的特性を考えて、防空は Patriot を中心にして F-15 の継続購入をする。それから、シーレーンとか機動力、抗堪性、継戦能力、即応態勢 (readiness) について配慮していく。

このような結果を踏まえて、外務省の中でも大分議論があったのです。こういうことで一応決着したのだけれども、そのうち人事院勧告分を上乗せすると対 GNP 比 1% を突破する可能性がかなり出てきた、総理はどう考えておられるだろう。それはいつ総選挙になるかということも影響してくる。1% を突破するということになると歯止めをどうするかという議論が生じるし、その場合に非論理的な歯止め、恣意的なものでも困るというような議論をしていました。

1% 枠を突破する場合の裏づけとしてどういう要素が考えられるかということ、米ソ関係が不安定であるということ、日本周辺の軍事情勢が厳しくなっていること、それからアメリカの要求があります。カーター政権とは違ってレーガン政権は表立って圧力はかけないけれども、自衛力の増強を求めている。それから、日本の力もだんだん上がってきていて、ただ乗りはもう許されないだろう。日本周辺を含めてソ連の軍事力が相当強化されてきているし、アメリカの行動は制約されてきている。アメリカ自身の財政困難がある。こういうようなことを理由として 1% を突破するということを justify する必要があるだろうということです。

この頃議論していたのは、これは夏にかけてですけれども、7 月中ぐらいには 1% に関する外務省としての考え方をまとめておく必要があるという議論をしていました。この間に、7 月 5 日に西廣整輝防衛局長と栗山北米局長とが会談したときに、栗山局長のほうからいわゆる中業の結果として 1% を超えたんだと言うと、天気予報の結果としてそうなっちゃったというようなことになるのだけれども、それではなくて政府の意思として 1% を超えるということを言うと、それは毎年踏み絵となってアメリカとの関係でも相当問題になるだろう、だから、それをどのように扱うか外務省によく相談してほしいということを言われました。

他方、外務省内で夏中に 1% 見直しについての方針を表に出すことが対米関係上必要ではないかということを議論していたのですが、このときに省内いろいろな場でやっていましたけれども、次官を初めとして地域局とかあるいは情報調査局なんかも絡んで何回か議論していたわけです。その中で栗山局長が主張しておられたのは次のようなことでした。これくらいやるべきだとの質量の判断は共同作戦計画研究などを通じてあらゆるシナリオ、likely scenario がどういうものかと、そのシナリオの下でリーズナブルな期間内にアメリカからどの程度の来援能力を期待し得るかなどを考えて、継戦能力、抗堪性なども勘案して算定する必要がある。防衛庁もそこまでやっていないのではないか。ここで非常に重要なのは、日米の共同対処が前提になるが、大綱ではその視点が欠けていることで、これは防衛庁に指摘する必要がある、ということでした。大綱というのは御存じのとおり、攻めてきた場合に自衛隊はどうするかという話で、あまり日米共同対処ということは考えてなかったわけですから、その視点が欠けているということを指摘していく必要があるのだということを栗山局長が主張していました。

この問題が大きく議論されたのが 8 月 7 日の国防会議です。国防会議で加藤長官は、59 中業の下

で大綱を達成することが急務で、そのために極力努力するけれども、GNP1%の枠内に収めることはなかなか難しくなっているということを言われました。それに対して竹下登大蔵大臣が、大綱の実施方式としての中業というのは防衛庁と大蔵省で決めているのだけれども、それはいわば政府の部内資料というようなことなのではないか。そういうもので決めちゃっていいのか。中期的整備目標を定めるほうがシビリアンコントロール上も望ましいのではないかということを言われた。総理がそれに対して、政府できちんとオーソライズした5カ年計画ということであればそういうものがあつた方がいいかもしれない。いわば、柔らかく言えば中期防衛力整備計画——これは大蔵大臣の発言だつたと思いますけれども——というようなものをやる必要があるのではないかということを言われた。加藤防衛庁長官がベースアップによって60年度は1%を超える可能性がある。ただ、GNPの計算の基準をどうするかという問題があつて、その改定で避けられるかもしれないけれども、いずれにしても59年中業の実施を1%以内で収めるのはかなり難しくなっているので、コンセンサスを得るために問題点をはっきり指摘して国民に議論してもらいたいということを言いました。

このときに安倍外務大臣が何点か、かなりきちんと発言された。1つはシビリアンコントロール、専守防衛、非核三原則を守り安保体制を安定化させることで、大綱の早期実現は急務である。次は、米国の議会などは日本の自助努力を要請している。米ソ首脳会談などによつても事態の本質は変わっていない。現下の日本の責任は一日も早く大綱を実現することである。5カ年計画をつくるというのはよいことだと思う。対米関係の目標がはっきりする。アジアの危惧ということもあるけれども、これはこれなりに配慮していく必要があるだろう。GNPの計算基礎が変わるとどうなるのだろう。今の基礎なら1%を超えるとはっきり言える。仮にGNPは5~6兆円増えると1%との関係がどうなるのだろうと言われました。

防衛庁長官は新しい歯止めが必要ではないかと述べています。定性的な歯止めにするのか、あるいは1%程度というようなことで数字を早急に俎上にのせてほしい。それに対し安倍外務大臣と藤波孝生官房長官が、今すぐに決める話ではないだろうと言われました。総理がここでどう言われるかなとみんな注目していたのですけれども、1%については正式に改定されるまでは、今までの数字を基礎に議論しよう。59中業はきつい財政事情の下で地理的特性、科学技術の進歩を勘案した、より効率的なものにしていく必要があるだろうということを言われました。

以上がGNP比1%についての議論です。防衛協力、続けちゃっていいですか。今まででちょっと切りますか。

—— 一回ここで切らせていただいて、GNP比1%問題について追加の質問などあれば皆さん、よろしく願いいたします。

—— 大使がおっしゃられていた中で、この問題では防衛庁がところどころで出てきたと思うのですが、当時安保課から見て防衛庁の存在感というか重要性というか、そういうものはどのように感じていらっしゃいましたか。

沼田 防衛庁の存在感はありましたよ。というのは、何しろ防衛庁が決められる予算は幾らになるかという話ですから。彼らが決めるわけですから。ただ、そこで問題なのは、その中でどれだけ我々が考えるような意味での国際情勢、特に日米の安保体制の意味、特に共同対処を防衛庁がどのくらい考えているのか、どうも心もとないということです。一言で言ってしまえば。

先ほど何回か紹介した栗山局長の発言にそれは非常に現れてくると思うのですね。これは後の防衛協力の話にもつながるのですが、本当にいざ戦争が始まったら日米一緒にやるのでしょうか。

そのときアメリカはどのくらい助けてくれて、何が必要なのかということも考えた上での防衛力であるべきだ。それを詰めてないではないですかという話ですね。そこまで考慮に入れた政策を考えているか否かということから言えば、我々から見て防衛庁の存在感は不十分だったということだと思います。

—— 当時も今もかもしれないのですが、防衛庁では防衛力整備という分野と日米の共同対処のオペレーションの分野を完全に切り離して、別個で進めているということが言われています。だからこそ、防衛力整備が共同対処と切り離されてしまうという奇妙な状況が生まれると思うのです。こういう両者が切り離されてしまうという奇妙な状況について、大使は外務省から見ていて、防衛庁の進め方に何か問題があるなというふうに感じておられたのでしょうか。

沼田 いや、僕も最近のことはよくフォローしていませんけれども、2点申し上げます。

栗山大使が生きておられたら相当悲しがるだろうなという感じがします。要するに栗山局長が言われていたことはなかなかまだ実現していない。日米が共同対処してやっていくに当たってどのぐらいの防衛力が必要なのかという議論が本当に行われているかどうか、まだ心もとないなという意味でがっかりされるのではないかというのが第1点。

他方、次の防衛協力の話に入りますけれども、日米防衛協力のガイドラインというのは随分私なんかのいたときから比べると進んできたわけですよ。その議論が随分進んできたので、そういう意味では大雑把に言えば我々の思っていたような方向に進んできたのではないかという感じがします。私は最近もう10何年かフォローしていないのであまり自信をもって言えませんが、大筋の方向としては随分変わってきたなという感じはします。

—— この当時は、日米の共同対処と防衛力整備が切り離されているという印象が強かったですか。

沼田 はい、そうですね。

—— 今おっしゃられていた栗山大使の発言でちょっとわかりにくかったのが、7月5日ですか。大使の資料に出てくる、1%程度を天気予報ではなく政府の意思として言うと言ったのは栗山さんですか、西廣さんですか。

沼田 栗山さんです、これは。西廣さんに対して外務省によく相談してくれと。

—— ああ、なるほど。

沼田 要するに中業と言ってがむしゃらにやったら1%を超えちゃいましたというだけでは済みませんということですね。

それから、加藤長官の国防会議での発言というのは、やはり1%程度というのを引き出そうとしていたようですね。新しい歯止め、1%程度、数字を早急に俎上にのせてほしいというのは、防衛庁、西廣さんなんかはどうもこれを出そうとしていたのではないかと思います。

—— 外務省ラインとしては出したくなかった。

沼田 1%というのは数字だけで言っても、本当にその根拠がどうなっているのだということがはっきりしないということですよ。

—— 今、似たような話で NATO が 2%でもめておりますけれども。

沼田 それから、これは僕が安保課長も北米一課長もやめた後なんだけれども、実際に 1%を超えたときの安保課長は私の後任の岡本行夫君ですよ。あのときに 1%は超えたのだけれども、何となく 1%程度にしましょうというような決定がありましたでしょう。あのときは、それはもう詳細には見ていないのだけれども、何となくそういう感じはあったのですよね。1%を超えたからこれで終わりだという感じではなくて、何となく 1%程度ということ。実際そうになっているわけでしょう、今でも。

—— 誰も今そういう議論をしていないですけども、ここで日米間、外務省と国務省でやりとりなさって、かなり向こうから圧力はあったという話なのですね、これは。

沼田 まあ、でもカーター政権のときに比べれば随分、そんなに強くはない。カーター政権の最後のときというのは相当な圧力でしたから。

—— 増やしてくれという。

沼田 そうそう。レーガン政権はアーミテージが中心ですけども、一番端的なのはアーミテージのさっきの発言で、軍事的にそれほど意味はないけれども、パブリックにはコメントしていないと。これなんですよ。こういうスタンスがこのときまでは続いていたということですね。

—— political significance というのは、日本人にとってのことを言っているのですか、それともアメリカ。

沼田 両方でしょう。

—— 両方なんですか。

—— 個人的にはそんなに軍事的に意義があるとは思わないけれども。

沼田 そんなに有頂天にならないですよという意味ですよ。実質的な意味というものをよく考えてよということ。

—— アメリカとして見ていたのは、その全体の額という感じで、別に自衛隊の装備の中身についてどうこうという話はこの頃は全くなかったという。

沼田 いや、それもあると思いますよ。

—— ありますか。

沼田 だって、アメリカが重視しているのは何かという話はいろいろあるわけでしょう。継戦能力とかいろいろ出ていますよね。その話は別途しているわけだから。

—— 日本はまだこの頃は基盤的防衛力と言っていて、基本的にはアメリカとそんなに関係ないという看板でやっているわけですよね、自分たちが。

沼田 大綱の思想ですからね、そうです。その発想を転換しなければいけないということになっている。

—— 他方で、この辺はうちの道下徳茂教授が今一生懸命やっているのですけれども、海上自衛隊の特に対潜水艦能力がアメリカの海軍とすごくインテグレートされていったのが 80 年代だと言っているのですが、そういう印象が。

沼田 80 年代で既にそうだったのかな。

—— その辺がちょっと。

沼田 方向は出てきていたのだと思いますけれども。

—— はい。ただ、P3C とかやたら買ったのはその頃ですよ。あれを日本がただ持っていてあまり意味がないので、一番先に海上自衛隊が日米間でインテグレートされていったけれども、それがオープンなディスカッションは全然なしに進んだということを道下さんはいろいろ調べていらっしたのです。その辺は外務省ルートでも全然出てこない話ですか。

沼田 ここら辺は結構難しい話で、次にお話しする防衛協力（共同研究）の話にかなり関連するのですけれども、どこまで外務省が絡んでいたかというのはかなり悩ましい話なのです。

—— 先ほどのアーミテージの発言で、「Military significance low」とありますが、逆にどれほど日本が頑張ればアーミテージとか国防総省は満足していたと思われませんか。

沼田 数字的にはそれはないですよ。

—— やはりないですか。

沼田 数字としては言わない。彼らは言うようなばかはいない。言った途端にすごい圧力をかけると言われちゃうでしょう。ばあっと大騒ぎになっちゃうでしょう。だから、そこはうまいんです。そういう状況がしばらくは続きました。

—— 今度は日本側なのですが、今のアーミテージの発言のすぐ下に、経済が防衛に及ばないようにすること、そうしてくれていることに感謝すると加藤長官が話しています。当時は日本側が防衛費を増額させてアメリカ製の兵器を結構買っている時代だと思うのですが、米製兵器の購入によって経済的にアメリカを満足させるというような考えはあったのですか。

沼田 満足してもらえればいいなということはありますけれども、経済問題というのはそれでは全く収まらないですからね。日米の貿易不均衡問題になるとどんどん彼らはきつくなっているし。私は安保課長の前に国際機関第一課長をやっていて、唯一2年間だけ経済局にいたけれども、そのときは日米摩擦の問題でさんざん苦労しました。経済の方は対立がどんどん厳しくなっていて、後でFSXの話が出てきますけれども、防衛の面で小細工やっても収まるような話ではなかったということですね。

—— では、防衛費を少し米製兵器の購入に充てたところで経済問題が多少緩和するなんていうことも考えにくかったと。

沼田 それは、そうはいかないでしょうね。

—— 構造的にもっと大きな問題になっていたということですか。

沼田 はい。

—— 外務省内の話なんですけれども、藤井大使の回想録（『国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ 藤井宏昭外交回想録』吉田書店、2020年）を読んでいくと、85年の予算折衝のときに大分御苦労されたということが書いてあって、その際に安倍外務大臣に呼ばれて、開発援助の伸びよりも防衛費の伸びが大きくなるのは外務省としては困るんだよねということをおっしゃられたと書いてあります。外務省の中には防衛費よりも開発援助を増やすべきだというような議論があったということでしょうか。

沼田 私がやっていたときは、あまりその議論はなかったような気がしますけれどもね。でも、潜在意識としてはあったのではないですか。藤井大使の本を読みましたが、そういうくだりがあったかな。1%程度という話は皆さんの頭にはあったし、防衛費の伸びとODAの伸びとの比較というようなことも、潜在意識としては皆さんの頭にあったと思います。

—— 1点だけ。思いやり予算が急増していくのはこのあたりが境なのですかけれども、それは何か記憶していらっしゃることはありますか。

沼田 私が安保課長のときには、労務費の問題がいろいろあったけど、ちょっと待って。

—— 87年に在日米軍駐留経費負担特別協定を締結。

沼田 87年、僕るときではないですね。労務費というか、駐留軍労務者の年金の問題でもものすごくもめたことを覚えています、駐留軍経費。

—— それはアメリカ人のですか。

沼田 日本人の労務者のベースアップをアメリカ側が認めないとか何とかいう細かい話があってね。私、安保課長は1年やったのだけれども、その期間随分長い間もめていたという記憶がある。細かい

話は忘れちゃいましたけれども。

—— それを経て、多分そこも日本が払うという方向になっていったのでしょうね。

■ 日米防衛協力（共同研究）

—— では 2 番目のポイントに。日米間での防衛協力についてお聞かせください。

沼田 防衛協力（共同研究）。これは、実は正直申し上げると私はあまりよく知らないのです。というのは、まだ外務省があまり教えてもらっていない時期なので、よく分からないまま 1 年間過ぎちゃったというのが私の正直な感想です。

いわゆる防衛協力は、日本有事の場合の 5 条事態と日本周辺の有事という 6 条事態とあって、5 条事態については、78 年の閣議報告で防衛庁長官の責任において行うということで防衛庁と米軍との間でやっていたのですが、その説明が我々にはあまりなかったわけですね。それはずっと問題になっていた。

84 年の 11 月に当時外務省の古川清さん（のちのアイルランド大使、東宮大夫）が防衛庁の参事官で出向していて、彼が栗山北米局長に話したことのメモがあります。夏目次官の話かな。5051 というのは日米間の共同作戦計画かな、日本の単独有事の場合、アメリカの支援部隊が来て空母はどう動くかというような話をやっていると。5052 というのは、周辺有事が日本にどう波及するかという話。これはほとんど手がついていない。アメリカの支援部隊の規模とか、そういうのもあまりはっきりしていない。こういう話があって、栗山さんがシーレーンも本来 5 条事態じゃないのかと言っています。

ここでさっき僕が言おうとした答えが出てきますね。大綱というのは、小規模限定の侵略に対しては独力で対処すると。足りない場合はアメリカに助けをもらうという static な概念である。現実には何か起きたら共同対処するほかない。そうすると、日米の防衛当局者がどういう日米協力を conceptual に考えて、日米それぞれにどういう問題があるかを見る必要がある。安保条約が実際に発動されるときにどうなるのか、外務省としてどうやって防衛庁を助けるのかということを考えるに当たってその材料が必要である。たとえばアメリカの支援は何週間たったら来るのか、海と空だけなのか、1 個師団来るのか。そういうようなことも必要なので、きちんと説明してくれということを言ったわけです。これは先ほど来の話にも通じる底流なのですからね。

その後 12 月 21 日に一応の説明はあったのかな。ただ、それは一番デリケートな兵力見積りとか侵攻兵力とか来援兵力の話は勘弁してくれという話。その後の 1 月に次官、外審、北米局長にきちっと説明するという話があるようなのだけれども、それがどうなったか、ちょっと僕の記憶にないのですよね。僕がそこにいなかったという感じもあるし、すみませんがそこははっきりしません。

国会なんかでも聞かれていたのですけれども、外務省はちゃんと聞いているのかという質問があったのに対して、概略の説明は聞いたが言えないと答えています。国会では井上一成という社会党のうるさい議員から共同作戦計画について聞いているのかと聞かれて、事前にある程度の説明があったと言っています。事務当局と大臣で十分相談して共同作戦計画署名後に大臣に報告して——これは防衛庁の中の話ですね。そのような過程で外務省に対する説明が十分あったと。

他方、6 条事態、周辺有事の場合には共同使用のみ例示。医療、evacuation、艦船、鉄道、周波数割り当て、傭船など。シナリオの説明は、朝鮮半島の有事の場合、輸送とか staging area だとか自衛隊基地の共同使用とかいうようなことについての説明はあったと。これ以上あまり細かいことは私ど

もも知らなかった。この辺は、その後の日米防衛協力ガイドラインの作業が進むにつれて大分変わってきたということだと思います。

それからシーレーンの問題ですけれども、さっき岩間さんが言っておられたように、道下教授がやっておられる話にも関連するのだと思います。これは鈴木総理が訪米されたときにナショナル・プレス・クラブで 1000 海里のシーレーンの防衛となぜ言われたのかというのが不思議だという話はこの前もしたと思いますけれども、シーレーン、シーレーンと言っていたのですが、本質は違う。オホーツク海というのがソ連の原潜にとって非常に重要なところであって、それを bottle out、ソ連の原潜を締め出すために何が必要かというのが本質なのだけれども、外に対する答弁上は海上交通路の話になる。海上交通路の安全を確保するために通峡阻止とか洋上阻止とか港湾防備ということが必要であると言ってきたということですね。

これも 85 年 7 月の西廣防衛局長と栗山北米局長とのやりとりの中で、栗山局長の方から、たとえば洋上の艦船が攻撃されたとして、それをもとに対日航空攻撃とか着上陸侵攻とかがある、その場合にも安保条約は発動されないということで考えているようだけれども、共同対処を想定すべきではないかということを言われて、西廣さんが「分かりました」と言ったというのが僕のメモにありますね。かなり意識のずれがあったということだと思います。

それから、シーレーンの話については 9 月 24 日、栗原祐幸防衛庁長官が訪米されてワインバーガーに会ったときに、栗原長官がシーレーンの研究を進めていきたいと言って、ワインバーガーのほうから Sea lane and air defense については「Help as much as possible」、なるべく支援したいし、「Help us as well」我々も助けてくれということを行いました。

それから、この関連で OTH-R、これは R と F、後方と前方か。OTH-R の話をこのときはワインバーガーが出しました。これは遠方まで早期警戒して、遠くの海で Sea lane of Communication の防衛にも役に立つので、日米双方に有用であるということを行った。これに対して栗原さんがシーレーンについては関係者に早く結論を出すように言っているというやりとりがありました。

その前に、4 月 23 日の国防会議ですか。総理がシーレーンとか ASW はどうなっているという質問をされて、かなり細かい説明がありました。ASW、潜水艦の探知、航空機による P3C による哨戒・監視、位置の局限、護衛艦、ヘリコプター搭載艦、魚雷・爆雷による掃討、訓練。それから洋上防空、艦艇ソナー、P3C、対バックファイヤーというような話があって、ここでも OTH レーダーについて防衛庁から説明がありました。1000 数百マイル先の動静をキャッチして陸海空の情報収集能力を高める 1 つの分野として真剣に検討しているという話でした。

それから、6 月、加藤長官が訪米してワインバーガーに会ったときに、加藤長官のほうから OTH の話を出して警戒監視情報、シーレーン、洋上防空の手段として重要であり、技術データが欲しいと。59 中業の中心として 61 年度中に採否を決め、62 年度以降用地等の調査に入る、こんなことを言われました。それに対してワインバーガーから OTH は、彼の表現をそのまま言いますと「Tied together with the need for tech transfers in the program」、「technology in the program」かな、ということを書いて、これは何を言っているのだろうと思いましたが、誰の説明だったかな、ソフトウェアとか費用分担とか joint operation ということを書いていたようです。それを言った上で「Glad to support. An important item for joint meeting between staffs」と言いました。ただこれ、先ほども話題になりましたね、OTH。結局実現には至らなかったわけです。それはなぜかということ、アメリカは共同運用を考えていて日本は自主運用を考えていて、それは結局折り合いがつかなかったということのようです。私もその後フォローしていないから分かりませんが、どなたかよく御存じの方がおられるかもしれない。

共同研究は以上ですね。あまり中身がなくてすみません。その後、防衛協力ガイドラインが進んで

かなり進展を見ましたけれども。私が課長をしていたときの10年以上後ですね。

—— ありがとうございます。この点について追加で御質問いただける方、お願いします。

—— いくつかあるのですが、時系列の上のほうから順にさせていただきます。

まず1点目ですが、84年11月に古川参事官と栗山局長の話し合いで、日本有事の計画に関する説明があったということですが、アメリカの支援部隊がどれくらい来るというところまで教えてくれたのですか。

沼田 いやいや、これは古川さんが教えたわけではないのですよ。そういう話をしているという話で、その中身は話していない。それが問題でした。

—— たとえば、外務省として空母を中心とする CVBG (carrier battle group) が何個来るという話は聞いていないのですか。

沼田 全く聞いたことないです。

—— これは防衛庁がもう中で整えているのか、あるいは……。

沼田 そういうことです。

—— その理由は、どう推測されますか。

沼田 彼らに聞いてください。出したくなかったのでしょうかね。

—— 軍事組織が軍と軍の話し合いを重視して、政治的な組織が入ってくるのを嫌がるということですかね。

沼田 わかりませんよ、防衛局長が知っていたのだと思うから。でも、防衛局長は西廣さんでしょう、このとき。—— じゃない。

—— 矢崎さん。

沼田 矢崎さんだけでも、矢崎さんも、こういう情報が外務省にあまり行っていないというのを結構気にしていました。矢崎さんはその後次官になりましたけど、矢崎さんの考え方と西廣さんの考えの間にも大分ギャップがあったみたい。

—— 角度が変わりますが、外務省がアメリカの国務省とこういう話をすることは。

沼田 外務省は国務省とはこの話はしなかったですね。

—— しないですか。

沼田 国防省もジム・アワーが時々教えてくれましたけどね、ちょこちょこっと。そんな感じでした。

—— ジム・アワーが大使のほうにたまに教えに来てくれるということですか。

沼田 いやいや、彼とはしょっちゅうやりとりしていたから、そのときにちょこっと言うことがあった。ただ、防衛庁との関係を気にしているからディテールは言わない。

—— なるほど、分かりました。

沼田 だから、相当中身が分かりませんでした。

—— 防衛庁も知らなかったということはないですか。

沼田 分からないな。西廣さんはある程度知っていたのではないかな。

—— 全然話してなかったのではないかなという感じを私は持っていますけれども。

沼田 そうなの。よく分からない、そこは。

—— でも、冷戦後に大分話さなきゃという感じになってきたから。

沼田 そうね、このときはまだ冷戦中だからね。

—— 日本単独有事なんていうことが果たしてアメリカのシナリオにあったのかなという気がするのですけれどもね。

沼田 そうですね、確かに。

—— ソ連が上陸するにしろ、何かもう少し大きな作戦の一部ですよ、それはきっと。

沼田 だから、栗山さんが言っておられる大綱云々というのはまさにそのとおりですよ、今から考えると。

—— 今度は6条事態のほうで伺いたいのですが、外務省としては5条事態よりも6条事態を優先して研究すべきだという見解だったということを知るので、沼田大使としてはいかがでしたか。

沼田 朝鮮半島を考えればそうですね。朝鮮半島で何が起こるか分からない。その場合、よく non-combatant evacuation という話があるでしょう。朝鮮半島、たとえば韓国にたくさん日本人がいるわけで、いざ有事のときにどうするのという話がずうっとありますよね。そういう事例の話というのは現実の問題として早く考えるべきだというような観点から6条事態は大事ですということは言ってい

たと思います。ただ、私のときにそれを言っていたわけではない。もっと後ですね。

—— 後ですか。

沼田 はい。90年代の前半というのは北朝鮮の問題が相当深刻になってきてね。それから、日米防衛協力ガイドラインの改定というのが98年でしたか、97年だったかな。

—— 97年です。

沼田 あの辺は北朝鮮の問題というのが相当頭にあるから、だんだんそっちに焦点が当てられてきた、ということだと思います。私は、80年代の半ばに安保課長をやっていたところから見ると、随分世の中進んだなと思いました、当時。

—— 当時は、ひとまずは5条事態を研究するところが重要だという。

沼田 6条事態も大事だけど、なかなか防衛庁が教えてくれないと、そういう感じですね。

—— その防衛庁がなかなか教えてくれないことと関連するかもしれないですが、先ほどシーレーン防衛の本質に関する話が出ましたが、これは外務省内で比較的広まっていた、共有されていた考えだったのですか。

沼田 もうちょっと後のような気がしますね。そもそもこの前も、81年の鈴木訪米の時の話でお話ししたけれども、なぜ1000海里の話が出てきたのだろうというのがミステリーだったわけですね。誰が鈴木総理に入れ知恵したのだろうというようなことでしょんとしていて、鈴木総理はナショナル・プレス・クラブであの話はされていたけれども、他方コミュニケの中に我々が入れた「同盟」という言葉には軍事的意味はないとも捉えたわけでしょう。だから、よく分からないのですよ。誰かが入れ知恵したのだろうと思うけれども。

—— 日本がシーレーン防衛能力を高めると、オホーツク海にソ連の原子力潜水艦を封じ込める、ないしはそこで撃滅する能力が高まるという考えは、大使が安保課長になったときにはどなたかから伝え聞いていらっしやったのですか。

沼田 いや、必ずしも聞いていないですね。

—— そういうわけではなかったですか。

沼田 後から考えた部分がかなりあります。

—— なるほど。ちなみに当時は、大使としてはこのシーレーン防衛の目的とか内容はどのようなものだと御理解されていたのでしょうか。

沼田 割合素直に、日本は長いシーレーンを、守っておかなきゃいけないからという種類の話かなと

思っていましたけれどもね。

—— 国防会議の話が何度か出てきましたが、大使御自身が国防会議に陪席されていたのですか。

沼田 私は国防会議参事官です。安保課長ですから。陪席していました。だから、これは私がとったメモです。

—— そうなんですね。これは貴重ですね。国防会議の議事録はほとんど見られないので。この中で結構中曽根総理が具体的な話をしているんですが、毎回これだけ防衛の中身まで踏み込んだコメントをされているのですか。

沼田 かなり詳しいですよ。防衛庁長官をやっておられただけではなくて、相当関心を持っておられたから。防衛問題に関心が高かったことは間違いないですよ。ウィリアムズバーグ・サミットのときの「The security of our countries is indivisible」というのもあるし、TNFの話なんかもある程度わかっておられたし、相当関心を持っておられたことは確かですよ。

—— 歴代の総理と比べられて、やはり。

沼田 一番関心があられたんじゃないですか。歴代というと難しいね。ほかに私が接触した限りでは、同じように関心を持って理解している方はあまりおられなかったのではないかな、防衛問題そのものにね。

—— 「洋上防空」という言葉が出てきているのですが、外務省内で洋上防空の具体的中身が何か話し合われたということはあったのですか。

沼田 それはないですね。

—— 防衛庁が話し合っている内容が入ってきて、それをアメリカと調整するという。

沼田 そう。ここで言っているのは国防会議の中の議論だから。

—— イージス艦の話は、そんなに外務省内には入ってくることはなかったですか。

沼田 僕のときにはなかったですね。ただ安保課長を1年しかやっていないから、全部を議論しているわけではないけれども。

—— あとそれとも関連して、ちょうどこの頃、海上自衛隊が洋上防空に関連して空母を持ちたいと主張していたという事実があるのですが、そういったことはお耳に入っていたりはしましたか。

沼田 入っていないですね、空母を持ちたいと言ったの？ヘリ空母？

—— いえ、ヘリではないです。戦闘機を乗せるという。護衛艦に垂直離着陸できるようなものを乗

つけるということを考えていたようなのですけれども。

沼田 それは初耳です。

—— そうですか。全然外務省には届いてはいないということですね。

—— 何年ぐらいの話ですか、それは。

—— これは 80 年代前半で、ちょうど 85 年ぐらいに結構真剣に検討をしていたみたいなんですよ
ね。

—— 外に出ていたら、当時の雰囲気では大騒ぎですよ、多分。

沼田 まあしかし、そういうこともあったからかな。西廣さんはシビリアンコントロールというのは、
要するに内局はきちんと制服を押さえることだということを非常に強く信じていたと言われるのは、
そういうことがあったからかな。今その話を伺うと、そういうふうにも思えますね。

—— そうですね。今の空母構想は内局が大反対をして潰れていますので。

沼田 そうですね。

—— 大使は、西廣さんとは結構接点が。

沼田 あまりないです。要するに栗山さんのところに話に来られたとき。それから具体的な接点とし
ては、加藤防衛庁長官のときには西廣さんは防衛局長でついてこられたわけですから、それはずっと
御一緒しましたけれども、そのぐらいですね。

—— 何か印象に残っておられますか。西廣さんというとミスター防衛庁なので、あちこちで話は聞
くのですけれども。

沼田 この人がミスター防衛庁なのかなと思って見ていました。

—— 防衛課長とのやりとりなんかはあまりないのですか。

沼田 私の時の防衛課長は、藤井一夫さん、それから宝珠山昇さん。途中で替わりました。藤井さん
は最初の短い期間で、それから宝珠山さんですけども、あまりやり合ったという記憶はない。国防
会議なんかでももちろん一緒になりますけれどもね。防衛課長も国防会議参事官だから。

—— 国防会議の前に外務省と防衛庁の課長同士で何か調整したりは。

沼田 記憶はないですね。

—— あまりないですか。

沼田 それぞれという感じで。

—— シーレーンに関連して、ちょうどこの頃シーレーン防衛に関する日米共同研究の中間報告が出たあたりだと思うのですが、外務省はこれもあまり深くは関与していなかったのですか。

沼田 少なくとも私のときにはないですね。ただ、さっき栗原さんのとき、シーレーンの報告を早くまとめさせるとかいうのがあった。

—— はい、そうですね。これがシーレーン共同研究ですね。

沼田 加藤・ワインバーガー会談じゃないな。

—— 栗原長官。

沼田 そうそう、栗原長官のときですね。

—— この研究自体には外務省は全くタッチしていないのですか。

沼田 していないと思いますね。今から考えると信じられないかもしれないけれども、随分離れていたんです、この頃は。ばらばらだったという感じがしますね。

—— 先ほどのところで追加の質問、いいですか。シーレーン防衛の話なのですが、中曽根さんは個人的に自衛隊の幹部と会ったりとか、そういうルートは結構持っていたという印象をお持ちですか。

沼田 そうだろうと思いますね。国防会議のさっきの ASW の話なんかも随分細かい話をしておられたなという感じがするので、そうだったのではないかと思いますよ。

—— やはり海の人脈だという印象を受けますよね、聞いていますと。

沼田 そうね、海軍経理学校だからね。

—— 相当詳しい人がいたのだろうなと思いますけれども。

沼田 そうですね。誰かがブリーフしていたのだろうと思いますよ。

■ NLP（夜間離着陸訓練）

—— では、NLP（Night Landing Practice）の問題ですね。夜間離着陸訓練。

沼田 次が NLP ですが、これは本当に難しい問題ですね。今でも尾を引いていますね。

個人的な話になりますけれども、私の家内の兄が厚木の近く、大和市に住んでいて、厚木の基地で、私も見にいきましたけれども NLP の騒音が大変でした。義兄から文句を言われたということもあるし、安保課にも抗議の電話がすごい勢いでかかってくるわけですよ、また飛んでいる、1 分おきにすごい騒音だという話で。なぜかという、ここにちょっと書きましたけれども、空母の甲板は 90 フィート、マージンは 10 フィートしかないところに F-4 が 170~175mph で飛んできて、速度を落としちゃいけないわけですからね。ロープに引っかけて止まると。引っかからなければそのまま飛んでいくということをやっていますから、それはうるさい。それをずっとやってきたので大変な苦情もあって、防衛施設庁は周辺の住民に防音措置を施していた。

それでは、それを代替するところは見つからないのかと。当時は、たとえば横須賀起点 100 海里の中でやる必要がある。本来滑走路が 2 本必要だけれども、100 海里内に 1 本必要だと。緊急用は厚木で、短期的には厚木と三沢と岩国に分散すると。あと百里とか浜松、木更津、静浜という案があったかな。長期的には三宅島が考えられないか、あるいはメガフロートみたいなことは考えられないかというような話がありました。

私が安保課長になる前にも、82 年の伊藤宗一郎長官とワインバーガー、その前の谷川和穂長官とワインバーガーの間でも取り上げていた。三宅島村議会で議論されて、訓練受け入れに関心を示したけれども、私が行く前に三宅島村議会が白紙撤回。三宅島村議会代表が厚木とか百里を視察しに行った。

84 年の 9 月には、栗原長官がホノルルで太平洋軍司令官（CINCPAC）に会った時に、クラウ司令官は日米間で唯一のシリアスな問題であると言って、ワシントンではワインバーガーから非常に重要、ぜひよろしくお願いします、努力に感謝するけれども、早く解決してほしいと言われた。栗原長官の方から「Utmost importance」をもってやっているけれども、私も心を痛めていると言っている。そのときの発言に「総合的にきめの細かい配慮の下に誠意をもって対処する」というのがあった。これを矢崎局長は私に、大臣としてはかなり踏み込んだ決意表明をされたということをおっしゃられた。でも、このときはテ・タ・テートの会談だった。だから私は同席していなかった。

その年、84 年の 11 月に三宅島村長選で反対派同士の戦いになって、訓練受け入れの姿勢はちょっと後退した。他方、浮体工法で浮かべてやるということになると、アメリカの人たちは横須賀の基地あたりから遠くに行かなきゃいけない、Family separation ということになるから、アメリカは消極的。

次に、加藤長官が翌年の 6 月に訪米したときにまだ解決していなくて、加藤長官から NLP は最大の懸案であり、総理から全力を挙げろと言われていると。具体的形は見えないが状況はよくなりつつある、政府全体として全力を挙げると言ったのに対して、ワインバーガーが「Vital priority であるから、9 月に私が行くときには進歩が見られることを期待する」というところまでが私が安保課長をやっていた頃です。佐々淳行防衛施設庁長官が時々栗山局長のところに来て、こうこうこういうことを今やっていますということを話しておられましたけれども、結局具体的進展には至らなかったというのが私のやっていた時期の経緯です。

それからついでに 4 番目の質問で、日米防衛問題について安保課と北米一課の間にどんな調整があったのでしょうかという質問に対して、サブスタンスについてはなかったというのが簡単な答えです。サブスタンスも関わる日程上の調整なんかはありますけれども。

局議のときも、この前もお話したかもしれないけれども、北米局の局議に出るのは北米一課と北米二課と安保課です。北米二課は経済で実質的には経済局長の指揮下。安保課は北米局ですけれども、北米局の仕事のやり方というのは、ほかの人も混ぜてわいわいやるというよりは、またこういう議員からこういううるさいことと言ってきていますというようなことについて、北米一課長とか

安保課長とか首席事務官が局長のところに飛び込んでいってひそひそと話をするということが多かったということです。

—— 最後に、局議で国会のうるさ方の先生方にどう対処するかということを話し合われたということですが、NLP でも国会から何か圧力のようなものがかかってくることはあったのですか。

沼田 国会議員からはありますね。やはり神奈川県出身の議員なんかは相当うるさいですよ。それはいろいろな意味でありますよね。

—— 保革問わずですか。

沼田 保革問わずです。

—— この頃はまだ硫黄島の話は全然出ていなかった。

沼田 まだ出ていなかったですね。

—— すごく遠くになりましたよね。Family separation どころではない。

沼田 空母に乗ったことある人、いますか。乗ったことある人とは言わない、着艦したことある人。

—— あります。インディペンデンスに乗りました。硫黄島に行ってきました。

沼田 硫黄島まで行かれた。そうするとキャリアランディング（空母着艦）をやられたわけ？

—— はい。

沼田 怖いでしょう。

—— いやもう、これは駄目だわと思いました。米軍が研究者とジャーナリストのグループを連れていってくれたのですけれども、30 分か 1 時間ぐらい NLP をがんがんやっているところを滑走路のすぐ横で見せてくれて、サービスのつもりなのだろうけど、「これはもう絶対日本ではできないわ」と確信を持って帰ってきてしまっ。

沼田 そのとおりですよ。すごいでしょう。

—— ええ。それで、硫黄島だと emergency の際にもう 1 個近くに基地が必要なんだけど、ないということをしきりに言っていて、それじゃ駄目なんだと、最終解決になっていないんだということたくさん言われました。けれどもこれは本当に本土では無理だわとつくづく思いましたね。

沼田 それから、あれよくあんなところへ着艦しますよね。あのパイロットはすごいよね。

—— 自衛隊が空母を持つってバカじゃないかと思っているのですけれども。空母なんて一瞬にして沈んでしまうわけじゃないですか。そのためにあんな大変な練習をしなきゃいけないの、何であんなもの欲しいのという感じなので。

沼田 あれをやるファイターパイロットは『トップガン (Top Gun)』という映画があるけれども、ものすごく誇りに思っていますよね。

—— すごい技術ではあると思いますけれども。

沼田 あの空母着艦か離艦か、あれは1回やれば十分ですね。僕もカール・ビンソン (Carl Vinson) に降りたことがあります。

—— ちょっとディズニーランドっぽくて楽しかったですけれども。

沼田 じゃ、どうぞもう一回。

—— いやいや (笑声)。当時、大使は厚木に行かれたりしたのですか。

沼田 厚木は NLP を見にいきました。それから、空母自体はカール・ビンソンが横須賀に来たときに、厚木から海軍の輸送機で飛んで行って名古屋沖で着艦して、それで帰ってきました。だから、着艦と離艦と両方やりました。

—— 洋上にいないとできないですね。私も厚木から。

沼田 それで、離艦のときに甲板を飛び立つときに一度沈むでしょう。あれが怖いですよ。

—— 沈むというか、ものすごく G かかりますよね、あれは。何か世界がこうゆがんだ感じがしましたけれどもね、私。

沼田 皆様にぜひお勧めします (笑声)。

—— 北米一課、二課の話が出たのですけれども、地位協定は外務省内では主にどこでやるのですか。

沼田 安保課ですよ。今は地位協定室が別にできているけれども、僕るときは一緒だった。地位協定室は、一番大変なのは沖縄です。沖縄の話を専らやるわけ。

地位協定について話せば、今は割合生産的な話をずっとしていますけれども、安保課長を僕がやっていた間は国会の沖縄、沖縄特別委員会、沖縄北方領土特別委員会とかいろいろなところに呼ばれて、細かい米軍の兵士の事故の問題とか事件の問題とかについて聞かれることが多かったですね。だから、日本の安保、防衛政策という大きな次元の話よりも本当の nitty-gritty というか、泥くさい話をやらされていた時間が長かったですね。大変でしたね、そういう意味では。その後、地位協定班というのを地位協定室にしました。一応安保課の中にありますけれども、仕事を別にしたわけです。僕は後に沖縄大使をやることになりますが、安保課長の頃からそのような種類の話、そういう汗かくような話

ばかり多かったわけです。

—— 地位協定の運用見直しとか、そういう話はこの期間ではなかったのですか。

沼田 なかったですね。沖縄にいたときは大分あったけど。問題としては提起されましたけどね。沖縄大使のときは、政策面で非常に大きな影響のあったものはないのだけれども、今申し上げたような日米の安保関係の **nitty-gritty** としてどのような問題があるかが問題でした。一番端的な例は、僕が沖縄大使のときに沖縄国際大学にヘリコプターが落ちた事件で、相当苦勞しましたから、あのときの話なんかもいずれしたいと思います。

—— それはぜひお願いします。

—— ちょっと失礼な表現に聞こえるかもしれないのですがけれども、ずっと外から見ていて、私、外務省の「憲法」というのは日米安保ありき、日米安保第一なんだよなと思って見ていて、その中でも地位協定は不可侵であるという第 1 条 1 項みたいなものがあるような気がしているのですがけれども、実際、中にいらしてその辺りはどういう感覚をお持ちでしょうか。

沼田 安保課にいたときと沖縄に行ったときはそう思いましたけれども、今はそうでもないですね、正直にお答えすれば。まあ時代も変わってきている部分はありますけれどもね。

何と言ったらいいな。たとえば私が沖縄にいたときに、地位協定自体の改定というのは難しいけれども、運用の面で何か改善できないかということで随分いろいろ本省にも意見を言ったし、実際にもいろいろ苦勞したりしましたから、そういう意味で地位協定ありき、あれはバイブルであり絶対だというふうには僕は必ずしも思っていません。

ただ、これは実際に毎日やっていると、とてもほかのオプションを考える余裕がないということはあると思います。

—— 地位協定のことにに関して少しだけ。在日米軍の運用については、日米合同委員会で協議されていると思います。安保課は合同委員会でどういう役割を果たしていたのでしょうか。

沼田 合同委員会の日本側の事務局をやっているのが安保課で、しばしば合同委員会合意をつくっていました。沖縄にいたときも合同委員会合意というのは非常に重要な意味を持ちますね。というのは、地位協定があるけれども、実際にはいろいろな問題が起きるわけですから、その問題がある程度集積したところでどうしようかという運用の面での知恵を合同委員会合意で出していくということですから。

—— 沖縄と地位協定の話はまた改めて。

—— 合同委員会の話もそのときのほうがよろしいですかね。あまり中身を見たことがないし、読んだこともあまりないのですが、これがどういうふうに進んでいるのかとか。

沼田 じゃ、そのときにしましょう。

■ 武器技術供与

—— では、次の項目に進みたいと思います。武器技術供与についてお願いします。

沼田 武器供与。これは私のときはあまり進展しませんでした。そもそも、武器輸出三原則をアメリカに対してどう適用するかというのは、いわゆる同盟国としての協力の踏み絵になりました。三原則で紛争当事国には武器も技術も出さないということになっているけれども、それと同盟の矛盾関係をどうするかということで議論が行われて、僕はまだ安保課に行く前ですけれども、アメリカを三原則の輸出先から除くと言う場合、原則の枠内だけでも柔軟に運用していくのか、枠外ということで原則を修正していくのかといった話がありました。

汎用技術の対米輸出の扱いについて、当時通産省は規制はできない、だけど推進する立場にはない、ということを書いてきた。その背景としてはアメリカを例外とするとということが 83 年の 1 月に官房長官談話が出されて、83 年の 11 月に Joint Military Technology Commission (JMTC) というのをつくるといって Exchange of Notes、交換公文があった。それから約 1 年たって 84 年の 11 月 6 日、私が課長のときに、その JMTC の最初のミーティングがあった。そこで防衛庁は、アメリカからいろいろ武器技術が来ているので、reciprocate することが大事だと思っているという趣旨の発言をしました。通産省は「Japanese commercial entities' agreement is important」、日本の企業の合意が重要であるといった。それから、この武器技術供与の細目をどうやって決めていくかということについて、この形式というのがいろいろ問題になったのですけれども、我々はどのような detail arrangement をつくるかを議論していこうということだった。

この細目取り決め、Memorandum of Understanding (MOU) について、アメリカは包括的方式、アンブレラ方式というのを希望した。防衛庁は、実はいろいろなやりとりを Mutual Defense Assistance Office と言ったかな、大使館の中にあった組織と平素からやっていたので、そこでの包括的合意ということができないかと言っていた。これに対して、外務省はいつもそうですけれども、特に条約局が、対外的な合意をする場合にどういう権限を持ってどこが合意をするのかということに非常に神経質だった。記録にある Question of legal authority というのはそのことですが、ずっと議論していくことになった。

それから、最近も話題になっていますが、GSOMIA、秘密保護協定との関係。アメリカとの間でできたのは 2005 年ですね。我が国の法令、公務員法や自衛隊法の範囲内で、Mutual Defense Assistance に基づく秘密保護をどうやって確保していくかという問題があった。アメリカはいずれにしても reciprocity、continuity それから no bureaucratic red tape ということを重視していた。

85 年の 5 月、通産省の伊佐山建志さんが協議に参加しています。当時航空機武器課長でした。その後、彼は通商政策局長をやっていますね。国防総省は関連企業にどんどん宣伝したいと言ったのに対して、通産省は「我が方は必ずしも火種をつくりたくない」という。それから、この武器技術供与の目的をどうするかと。取り決め上は「DOD Military Purpose」という言い方をしていたのですが、これが何を意味するかというような議論があった。それから、第三者移転というのはある程度制限しなければいけない。変なところに流れちゃいけない。それから Flow-back、向こうから返ってくる技術や知識といった秘密を MDA 秘密保護法で保護できるのか。

それから、さっきの汎用技術の話で、民間に義務づけるという話でもないだろうというようなことをずっとやっていて、85 年の 5 月にまたアメリカ側と協議。この種の話がやりにくかったのは、ペンタゴンでもそれまでと全く別の種類の人たちが出てきました。技術の話をやっている人たち。いつも

安保の関係をやっている、基地の問題なんかをやっている人とは別のメンタリティの人が出てくるので扱いにくかったという感じがします。85年の5月の時点では、MOUの署名権者をどこにするのか。通産省なのか防衛庁なのか外務省なのか、あるいは交換公文で委任するのかというような議論があった。それから、用途については制限をなるべく少なくして「only for DOD military purpose」ということでやると。それから Third-country transfer について考えて、さらに秘密保持について考えていく。まだ inconclusive な段階で、私のときは途中まででした。

このときの具体的な話は携行 SAM、surface-to-air missile の関係の武器技術供与ということが頭にあったということぐらいですね。それ以上細かいことはあまりよく覚えていないのですが、実際に MOU ができたのは私が去って1年後ぐらいだと思います。

以上です。あまり細かいことは覚えていないのですが。

—— 先ほど大使がおっしゃられていた、こういう話になるとちょっとまた違う人が出てきてやりにくかったというのが非常に面白かったです。私、この問題で論文を1回書いたことがあるのですが、それまでほかの問題で聞いたことがない方がどんどん出てきて。

沼田 そうでしょう。

—— 面白かったんですけど、具体的にどの辺りがやりづらいと大使はお考えになったのですか。

沼田 技術者ですかね。Dr. Piper とかいう人がいたけど。

—— ああ、あの人ですか。

沼田 知っている？

—— はい。理工系のバックグラウンドの方だと。

沼田 みんな理工系でしょう。だから、一番トップの副長官にはペリーさんがいて、核兵器の話にしてもペリーさんはすごく立派な人ですけどね。本当に理工系の人たちですよ。その話で本当に苦労したのが SDI のほうですけどね。理工系の極みみたいな人が出てきて議論するというのは結構大変だった。何ていうのかな、あまり政治的な議論が得意じゃない感じの人たちですね。同じ経験されたわけ？

—— いや、読んでいて急に話がわかりづらくなることがありまして、大変だろうなと思いました。

沼田 そうでしょう。僕は、大変なのは SDI でやりましたけれども、対米武器技術供与では途中までしかやっていませんね。

—— たとえば大使がアメリカの大使館におられたときですか、北米一課長をやられたときに何かほかの問題でそういう御経験はありましたか。

沼田 アメリカの大使館にいたときは、防衛庁の和田裕装備局長が来られて、これの前哨戦みたいな

ものをやりましたけれども、そのぐらいですね。

—— 全く違う問題でふだん付き合っている人とは別の人が出てきてやりづらくなるみたいな、そういう御経験はほかの問題ではございましたか。

沼田 私の経験では SDI ですね、次に話すけど。

—— じゃ、SDI のときにまた。

—— 日本側から出ていくときに、防衛庁から制服を着た自衛官が出てくるということはあったのですか。

沼田 なかったです。この種の問題には通産省が非常に絡んでいるわけですよ。それから、僕の記憶では防衛庁の課長もたしか通産省からの出向者だったと思います。装備局長が大体通産省出身の方ですよ。そういう時代です。今もそうなのかな、ちょっと分からないけど。

—— どうでもいいことですが、携行 SAM って、これ多分アフガニスタンとかに流していたものですよ、きっとこの時代は。

沼田 そうでしょうね、80 年代だからね。タリバンがわあっと撃っていたやつですよ。当時は自分がその後パキスタンに行くとは思わなかったから。

—— どんな技術が生きてはいたんですかね。

沼田 何だろうな、センサーとかそういうのかな。

—— この問題は、安保課と通産省のどこがカウンターパートですか。

沼田 航空機武器課でした。

—— なるほど。大体防衛庁は装備局が出てくるという感じですか。

沼田 はい。

—— 何か定期的に会議とか集まりがあったのですか。

沼田 いや、防衛施設庁とはあったけれども、防衛庁とこの問題についてあったというわけではなかった。ただ、JMTC というのを開かなければいけないし、その宿題として MOU をつくらなければいけない。アメリカからはパイパーとかが来ますからね。それで時々集まって議論したということです。

—— その集まりの中で印象に残っているやりとりなんかありますか。

沼田 覚えていないですね。

—— やっぱ細かい話が多いと。

沼田 細かい話が多かった。

—— ということは、逆に政治があまり入ってくる余地はなかったということですかね。政治家とかその上の長官がこの問題に。

沼田 長官が入ってくるということはなかったですね。ただ、要するに legal authority の問題とかいうと外務省の中でも条約局とよく詰めなければいけないとか。

—— なるほど、ありがとうございます。

沼田 アメリカ側はなかなか分からないわけですよね、そういう議論になると。

—— 内閣法制局は。

沼田 僕の時代ではまだなかった。

■ SDI（戦略防衛構想）

—— では、次の SDI のほうに進んでよろしいでしょうか。

沼田 SDI は、これは話が大変です。どこから始めるかな。

SDI の話が出てきたのが、83 年のレーガンのスピーチ。この前お話ししたときに、軍備管理の関係で我々が国務省の Politico-Military Bureau によく行っていたという話をしたと思うのですが、ここが重要です。なぜここに行ったかという、たとえばアメリカの戦略は大筋どうなっているのか、核戦略がどうなっているかというような話をまず大掴みに理解するというのはなかなか難しかった。専門用語も MAD から始まっているいろいろあるし。それを何とか理解しなければいけないなと思いました。その後 INF とか START のフォローでもずっとついてくる問題なのですが、そのときに国務省の Politico-Military Bureau の人たちというのは我々にとって、僕にとって非常に助かったわけです。これ「Pol-Mil」と言いますが、でも「Political」じゃなくて「Politico」ですね。Politico-Military Bureau。

そこに、僕がワシントンにいたときに仲よくしていたアーノルド・カンターという人がいて、当時 Politico-Military Bureau の部長だったと思いますけれどもね。私がワシントンにいたときは、今度の国防報告の大きなテーマはこういうことだということを説明してくれた。その彼に、84 年の 9 月、ということは栗原長官に随行したときに、私が会いに行った。この SDI というのは、レーガン大統領はいろいろ言っているけれども、A comprehensive shield というのは not available、できない。more limited defense のことを考えている、MAD を complement して guarantee ability for both sides to retaliate と。両方が反撃できるような能力を確保しようとするものだ。ソビエト側は、rapidly

deployable ABM system を進めているという兆候がある、それからヨーロッパの反応は割合 suspicion を持っていて negative である、というような話がありましたね。

そもそも SDI は「スターウォーズ計画」と言われた。スターウォーズというのはケネディ上院議員が言っただけですけども、この構想が出たときに本当にこういう話ってできるのかしらと恐らくみんな思ったでしょう。映画の『Dr. Strangelove』の世界みたいだなと思って。我々はどう反応したらいいかというのはなかなか難しく、そうしているうちに 85 年の 1 月に中曽根総理がロサンゼルスでレーガン大統領と会談することになった。このときに何か言わなければいけない。レーガンの方から、核兵器廃絶を最終目標としている、これは防衛、defensive な手段であると言われて、中曽根総理は、核廃絶のために一つの要点として検討する、我が国の憲法、国是の範囲内で対応を考えるという当たり障りのない答えをした。これは国内でもいろいろな議論がありましたが、それは十分予想されていたので、この段階では我々は割合慎重な対応をする必要があるということで、基本的には「理解」という言葉にしたわけです。

国内で非常に問題になったのは、宇宙の平和利用との関係で、衛星を利用というのは要するに殺傷、破壊するわけだから、科学技術庁の立場からは何人も殺傷力も破壊力も持ちっちゃ駄目というのが原子力基本法にある。民間がアメリカの殺傷力、破壊力に協力するのも駄目だという立場をとっている。それに対して外務省、防衛庁というか、条約、国際法の大家である栗山北米局長が言っておられたのは、憲法を含め国内法で禁止されていないことや国際法で禁止されていないことでも国会決議の解釈を通じて国の政策が制限されることは大問題で、宇宙の平和利用についての国会決議の解釈をどうするかが問題であるということでした。

外務省としては、宇宙の平和利用、平和目的という場合に、非軍事は原則論、一般論であって、安全保障上、外交政策上どうしても必要なときは例外あるべしという立場をとった。自衛隊が殺傷、破壊のために使わないというのは政策であって、将来安全保障上修正することはあり得るだろう。いわんや、米国のやっていること、SDI、武器技術供与等にも適用するとなると外務省としてそうした政策には反対せざるを得ないという立場をとったわけです。そういうことを国内で議論していました。

85 年の 3 月末に NATO の Nuclear Planning Group でワインバーガー国防長官が SDI について話したときに、ワインバーガーが NATO 諸国、フランス、日本、イスラエル及びオーストラリアに書簡を送って SDI に参加を招請し、60 日以内に回答してくれということになった。60 日以内というのは随分急いだ話だったけれども、このとき、当時欧州担当国務次官補だったパール (Richard Perle) あたりが独走していたのではないかということが言われていました。

省内でも外務大臣以下で議論していて、論点がいくつかありました。1 つは研究 (research)、開発 (development) および配備 (deployment) です。その流れと、それを理解 (understand) するか、支援 (support) するか、協力 (cooperate) するかというマトリクスを考えたときに研究のみについての理解と限定はしない。しかし、開発、配備までについての最終的評価を与えるという意味での「支持」との言葉は避けた方がいいだろうということを書いていたわけです。それはなぜかというと、アメリカ自身これはどうなるかは分からない。膨大な予算になるし、そもそも核戦略に非常に大きな影響を及ぼすことになる。それから欧州のかなり懐疑的な動きがある。ジュネーブでの米ソの交渉がどうなるかということも分からないということもあるので、今のマトリクスは「理解」ということで、「支持」との言葉はしばらく避けていきたい、ということになった。

総理に対しては、NATO はサポートと言っているが、条件をつけていると説明しました。技術格差とか相互確証破壊戦略 (MAD) の有効性が維持されるのかどうかということやフランスなんかは心配している。だから、研究には基本的に協力するとしても技術移転はものすごく難しい。技術移転といっても、何か出してもその果実をシェアできるのかどうかということも分からない。だから、まず中

問的回答をしたほうがいいということで、総理が、それじゃ、フランスは「No, but」と言っているようにだけれども、日本は「Yes, but」でしぶとくいったらどうかということ言われていた。

他方、国会においては大分問題、議論になって、たとえば公明党の神崎武法議員なんかは随分いろいろなことを聞いてきた。アメリカの協力要請について極東、日本との関わり、在日米軍基地の配備への影響はあるのか、日本版 SDI というのは考えられないのか、協力する場合にそれを検討する基準は何か、専守防衛（集団的自衛権、共同研究）との関係は、仮想敵国はソ連か、非核三原則、国会決議、手続等はどうするのか。アメリカに専門家を派遣するのかというような議論がありました。

これはおかげさまでというか、SDI があったものだから、予算委員会というのは大体 1 月から 3 月までであるでしょう。ほぼ毎晩午前 3 時ごろまで作業していました。一番大変だった時期です。その間にアメリカの専門家に早く来てもらって話を聞こうということになって、当時はもう政府を離れていましたけれども、スコウクロフト（Brent Scowcroft）元大統領補佐官が日本に来る機会があった。4 月の初めですね。そのときにスコウクロフトさんがいろいろ言っていた中で、レーガン大統領は、この SDI は nuclear weapons を「obsolete」、時代遅れのものにすると言っているけれども、だからといって「can't disinvent nuclear weapons（核兵器を無かったことにするわけにはいかない）」、practical なことを考えたわけではないだろう。それから、「同盟国全体にかぶせる umbrella みたいなものはなかなか難しい。現実的に考えると ICBM のあるところを protect して survivability（残存性）を確保するということではないか。そのほうが practical だろう。ニッツェ（Paul Nitze）大統領特別顧問はどうも局地的な防衛というのを考えているようだ」というようなことを言っていました。それからスコウクロフトさんの分析として、欧州の心配というのは「Fortress America」ができるのではないかということで、「US adventurism」というものに対する懸念もあった。「Decrease of European nuclear deterrent」という、ヨーロッパの核抑止力の価値が下がってしまうということも懸念しているのではないかという話がありました。

それで次に、アメリカのチームが 4 月 20 日～23 日まで日本に来て、これを我々が迎えたのです。我々がというのは、外務省、防衛庁、通産省、科学技術庁、ほかにどこかいたかな、そんなチームでみんな迎えたのですけれども、アメリカ側は先ほど来話になっている、ふだん付き合っていないような人たちですね。Dr. Strangelove みたいな人たちが来るんじゃないかと思っていたら、実際にかなりそういう感じもしました。

ヨナナス（Dr. Gerold Yonas）という人が国防総省 SDI 局次長代理（Acting Deputy Director、Office of the Secretary of Defense）、あと国務省の政治軍事局（Politico-Military Bureau）、国防情報局（Defense Intelligence Agency）の人がいましたね。そこで、このチームのブリーフに対して我々は渡邊允北米局参事官だったかな、それから私、防衛庁、通産省など各省の人が迎えてやりましたけれども、そのとき日本の立場として説明したのが次のようなことでした。これは総理から大統領、外務大臣からシュルツ国務長官に言っていることだけれども、これが非核防衛システム（non-nuclear defensive system）であって、その究極的な目的（ultimate objective）が核兵器の撤廃（elimination of nuclear weapons）であるということ、それから今は研究にとどまっているということから基本的には同感（basic sympathy）しており、理解（understand）する。ちなみに ABM 条約の下では研究（research）は禁止していませんが、開発（development）は禁止しています。

日本はどういう立場をとっているか。その背景をどこまでアメリカ側に言ったのか、よく覚えていませんが、次のような点を部分的には言ったと思います。

- ・ ソ連が相当程度研究しているだろうということ。
- ・ アメリカがこの分野で遅れることは西側の安全保障としても好ましくないということ。
- ・ 仮に配備（deploy）にまで進む場合にも、戦略的安定（strategic stability）のために「同盟国と

の協議およびソ連との交渉を経て」(subject to allied consultation and negotiation with Soviets) ということをアメリカがはっきり言っていることに留意している。

- **Technology participation** についてはオープンである、今コミットする立場にはないけれども我々の立場はオープンである。
- 日本の中で相当政治的に問題になるので、プレスに対する発言には気をつけて欲しい。今回の協議というのは今後の対話の第一歩であって、協議・聞き取り (consultation and exploration) と言うべきものである。
- 汎用技術が問題になるようだけれども、汎用技術を出すことについて原則は自由であるが、政府として決めることはない。出せと言って決めることはない。出てきたときには止めないという、さっきの技術協力のときに出てきた話です。

そういう立場を説明しました。

そこからが大変なんです、これを説明するのは。まさに **Dr. Strangelove** みたいな人たちが入れ替わり立ち替わり代わりブリーフィングをしましたが、それをどうやってかいつまんで説明しようかと思っちょって四苦八苦したのですが、図を作ることにしました。

この内容は、アメリカ側のチームが4月に来たときの説明と、加藤長官が6月に訪米されたときにこのヨナナスという人が長官に対してした説明の両方を含んでいます。そのときにアメリカ側は、これは **Technology Program** であると説明した。1972年に **ABM** 条約ができてからソ連の **land-based ICBM** の **precision**(精度) というのは3~4倍に上がってきていて、それに対して **survivable**、**robust**、かつ **cost-effective** な **defense** をつくろうとしている。その **defense** の中身はどうかということです。このスライドでおわかりいただけるかな。

「**multi-layered defense**」。要するに **boost phase**、**terminal phase**、それから **mid-course** のそれぞれに対して対処する **defense** を、システムをつくる。**boost phase** というのは非常に時間が短い、それから最後の **terminal** も時間が短い。**mid-course** は時間が長い。それに対して **defense** する、**defense** の相手の数というのは **boost**、打ち上げた直後は少ないわけですね。**terminal** は落ちてくるときだからこの方がやりやすくなる。**mid-course** というのはどこを飛んでいるかによりますが目標の数がたくさんある。それをやっていこうと。ただ、**re-entry vehicle** を7つ、9つぐらい持っているミサイルというのは、どれが来るかというのは不確実なので、これを見つける **surveillance** のための **eyes**、**sensors** and **computers** が必要になる。それから、それを撃ち落とすためには、後で出てきますけれども、**Direct Energy Weapons** とか **Kinetic Energy Weapons** (**smart projectile**)、つまり弾(タマ)みたいなものが必要になる。それから、それをいざ撃ち落とそうとするときに **battle management** をするための **communication system** が必要である。

それにとまなう **major technical issues** として **midcourse discrimination**、飛んでいるやつをどうやって見つけるかという問題がある。「**cheap intercept in all places**」、なるべく安価にどうやって止めるか、**Kinetic Energy Weapons** の廉価なものをどうやってつくるか、そのために **sensor**、**computer** が必要で、**lateral thrust 10km/sec**、それぐらいのスピードでぶつけないと落ちないということです。それから **boost-phase** では「**good enough to prevent tactics to overcome it**」、迎撃を乗り越えるための手段に勝る **intercept** をしなければいけない。「**lethality against responsive threat, survivability, battle management software**」。

これは聞いているだけで頭が痛くなってくるような説明がずっとあって、図の右側ですけれども、このようなものの総合的な環境を考えていかなければいけない。そのための **technology** というのは、**mature technology**、これは最初の **initial robust defense**、最初の段階での **robust defense** のために必要な **technology**、それからさらに **advanced technology** には **countermeasure-resistant and highly**

米側説明（85年6月加藤長官訪米時の説明も含む）

Technology Program: 1972 ABM Treaty. Sov land-based ICBMs precision up 3-4 times.

Requirements: Survivable, Robust, cost-effective.

Multi-layered defense:

		Time	Number of objects
1.	Boost	short	small
2.	Terminal	short	small
3.	Mid-course	long	many

Interrelationships

Technologies

- Mature : "initial robust defense" near term
- Advanced : "countermeasure-resistant and highly cost-effective"
- Innovative: "Negate threat"

Uncertainty of attackers 9 RVs

Surveillance: eyes, sensors, computers

DEWs, KEWs (smart projectiles)

<Direct Energy Weapon/Kinetic Energy Wea>

Battle-management-communication system

Major emphasis on advanced technologies in investment strategy – FY86

Major technical issues:

Midcourse discrimination, Cheap intercept in all places (partic. Low cost KEW) – Boost-phase intercept (good enough to prevent tactics to overcome it), Lethality against responsive threat, Survivability, Battle management software

sensor, computer, lateral thrust 10 km/sec.,

* Deterrence based on defense.(cf. Soviets massive anti-aircraft deployment. BMD: Network of 6 large array radars, Krasnoyarsk clear violation of ABM Treaty.)

1) Requirements: Survivability, Effectiveness, Cost-effectiveness.

2) Technologies (\$ 26 billion over 5 years)

Sensors: Eyes and brains. 50%

Interceptors: Kinetic Energy Technology (smart projectile)

Most important problem – Source of power 1,000 MW (required for a large city.)

Direct Energy Weapons (Speed of light weapon, beam, laser)– 20%. Soviets ahead in some areas.

Innovative Science and Technology – 5% of the fund. Small businesses and universities.

3)Funding: Senate \$ 3billion. House \$ 2.5 billion. → \$ 2.75 billion?

4)Focused Research and Technologies →Informed decisions in the early 90s

→Thoroughly reliable defense of US and allies

* Sequence of transition from offensive-dominant to defensive dominant:

(i) Next decade or so – Progressive and real reduction of offensive strategic weapons

(ii) Transition – Less offensive weapons and more stability. Cooperative efforts with Soviets tricky. Offensive-defensive mix possible if one designs a proper mixture.

(iii)Ultimate – Nuclear-free world is a goal. SDI research offers a realistic opportunity. ("impotent and obsolete", a perfect defense is not technically possible.)

cost-effective が求められる。もっと innovative なものとしては脅威自体を negate するようなものが必要になる。いずれにしても、investment strategy の中で advanced technology に major emphasis を置いていくというのが FY86 のプログラムであるということを言っています。

このコンセプトとして出てくるのが deterrence based on defense。なぜかという、ソ連が massive anti-aircraft deployment をやっている。Ballistic Missile Defense で 6 つの large array radars のネットワークをつないでいて、Krasnoyarsk に置いているのは明らかに ABM 条約違反である。この defense system の requirements は survivability と effectiveness と cost-effectiveness であると。

ここから本題で、そのための必要な technology を develop するために 5 年間で 260 億ドルが必要だと考えている。そのうち半分は、この eyes and brains となる sensors である。それから interceptors という撃ち落とす道具のほうは Kinetic Energy Technology (smart projectile)、要するに弾ですね、強力な弾を撃つという。その場合に most important problem は source of power、どうやってその power を得るかが問題で、1000MW ぐらいの電力が必要であると。Direct Energy Weapons というのは、laser beam みたいなものですね。これに全体予算の 20% ぐらいが必要で、ソ連はある分野においてはアメリカよりも進んでいると。

それから、innovative science and technology というのに 5% ぐらいの資金が必要で、これは中小企業とか大学なんかにあるものも見つけていく必要がある。この funding については上院 30 億ドル、下院 25 億ドルとメモにあります、これはどういう意味だったか、要求しているということだったかな、ちょっとそこは覚えていません。いずれにしても、こういうことに焦点を置いた research and technologies development を進めていって、「informed decisions in the early 90s」、90 年代の初めぐらいにはある程度の決定に達して、thoroughly reliable defense of US and allies に持っていきたい。今の攻撃兵器主体の体制から防御兵器主体の体制に移っていくのを、これから 10 年ぐらいかけてやっていきたいと思っている。その間に progressive and real reduction of offensive strategic weapons をやっていくというのが一つ。それから、transition の段階において less offensive weapons and more stability、攻撃兵器のほうをだんだん減らしていってより安定させていく。cooperative efforts with Soviets、ソ連とも協調してやっていきたいけれども、これはなかなか難しい。offensive-defensive mix possible if one designs a proper mixture、攻撃兵器と防御兵器の mix というのは適当な mixture を考えなければいけない。ultimate には nuclear-free world というのが目的であって、そのために SDI research offers a realistic opportunity と思っている。ただし、核兵器を impotent and obsolete にするというのは理想であって、a perfect defense is not technically possible ということです。

この説明を 2 日間ぐらい聞いて、もう相当頭痛くなりました。これ、まだまだあるんですよ。どうやって要点を説明しようかと思って四苦八苦してこれだけまとめたので、もっともっといろいろあったのですけれども、正直言って「ううん」という感じでした。

ちょっとそのまま続けちゃいますと、この説明を聞いた上で 85 年 5 月 1 日からボン・サミットになったわけですね。

そこで、ドイツのコール (Helmut Kohl) 首相が議長をしていたわけですが、中曽根さんとの間で、SDI は一応正当なものと認めようという話になった。ただ日本側が部内で議論しているときに安倍外務大臣が「正当と言って国内的に大丈夫なのか、道義的正当性ということがいいかもしれない」、prudent and justified かな、そうおっしゃった。では、妥当、reasonable というような意味に解釈しようか、ということで。

そして中曽根・レーガン会談で、どうやって出てきたのか僕も必ずしも記憶が定かではないのですが、5 原則というのを出した。要するに一方的優位の否定、西側全体の抑止力維持、ABM 条約

の枠内、配備につきソ連と事前協議、攻撃的核兵器を削減するという 5 原則、これがサミットの政治宣言に出ました。ただ、サミットの政治宣言ではアメリカの **positive proposals** とだけ言っていて、「SDI」とは確かに言っていないです。それはヨーロッパのいろいろなレザベーションもあったからということになると思います。

柳谷次官と総理が話したときに、いずれにしても西欧 4 か国の態度を調べるために情報調査局長を派遣する必要があるという話になった。その 7 月には通産省の伊佐山課長が、このために新たな枠組みをつくるのは困る、将来武器に使えるものについて用途規制は避けたい、宇宙平和利用の国会決議については技術移転の問題はすり抜けられても、我が国における開発ということになると引っかっちゃう、科技庁長官は非軍事ということを行っているし、政府の研究機関の参加の問題は残っている。

当時の私のノートを見ても分からないところがいろいろあって大分苦労したのですけれども、あえてまとめるとこういうことです。

—— ありがとうございます。分かりにくいことが大分分かってきたかなという感じがします。

大使は、このお話を聞かれたときに実際にこれは実現すると思われましたか。

沼田 僕は現実性はあまりないと思った、直感的に。これは無理だろうなと思いましたね。

最初、我々が理解するという反応を出そうというので上げたときに松永次官が、私に「何で「支持」と言わないのだ」と言われたんで、苦労しましたが、ちょっと夢みたいな話ですからと言った。あの当時私は「理解」でよかったと思っていました。

要するに、核抑止の常識を全部覆すような話ですからね。後で軍備管理のところで触れますけれども、こういう構想が出されたこと自体に意味があったと思うのです。ただ、このまま実現するとはとても思えませんでした。

—— 現実性に関して質問です。そもそもレーガンは軍縮論者で、結構真剣に核兵器ゼロということ saying していた部分があると思うのです。そういう中でこの話が出てきたと思うのですけれども、大使のカウンターパートとなっている人たちも同じように真剣にこれが実現できるという雰囲気、ブリーフィングしている感じだったのですか。

沼田 技術的にはこうやれば可能なはずだという意味では一生懸命やっていたという感じですね。これから **START** とか **INF** とか **defense of space** とか、いろいろな交渉の話が出てくるのだけれども、その段階でどうやってこれが実現すると思っていたかはよく分からない。担当課長としてはこれは是が非でも実現させようという気にはなれなかったなので、やりにくかったですね。

—— あともう 1 点、先ほどのスコウクロフトの **Fortress America** などの発言について、これはヨーロッパの見方としてスコウクロフトが日本側に言ったということですね。

沼田 そうそう。

—— そして 3 番目の「**Decrease of European nuclear deterrent**」は恐らくイギリスとフランスの核の意味がなくなるということですね。

沼田　そうです。

—— 3 番目に関しては、日本の場合は当てはまらないということですね。そこでたとえば日本の外務省内の議論の中で、SDI が実現していく中で、それこそ Fortress America になったアメリカが、自分たちは守られているので、日米が切り離されていくのではないかという、それこそ Politico-Military 的な議論というのはあったのですか。

沼田　そういう形であったかどうかは別として、何かよく考えなければいけないよねという気持ちは随分ありましたね。まずは、ぽんと宿題を突きつけられて。ワインバーガーから 6 か月以内に返事をしろと言われたというときに、スコウクロフトも必ずしもそんな 6 か月にきちんと返事しなくてもいいのだということは言っていたし、そういう感じのことは後にも出てくるのですけどね。すぐ「はい」と返事しなければいけない話でもないということでしたが、あまりに問題が大きいからどうやって答えたらいいのかなと思いました。

—— 60 日以内ですよ、これ。

沼田　失礼しました。60 日以内。

—— 2 か月ですか。

—— 参加するかを決めると。

沼田　参加というのは研究に参加するということですよ。だから、研究に参加して、そのうちそれが development まで行くのかという話はありませんけれども、とりあえずは参加する関心を示すかどうか、interest を示すかどうかという感じだったですね、最初の段階は。

ただ、これは私が去った後、藤井局長のときには大分一生懸命やられて、結局参加までは行っているわけですね。

—— これ、レーガンはゴルバチョフにも言っているんですよ、参加しないかと。

沼田　だって、そもそも両方でやろうという話だから。

—— そもそもレーガンという人物について、最初持っていた印象と、何年も付き合った後で今振り返ってこういう人だったなと思うときの印象をふまえると、どういう人物だったとされていますか。

沼田　軍備管理の話を別にしてというか、レーガン大統領自身について一般的な印象として申し上げると、レーガンが大統領に就任したときの演説か、共和党の候補に指名されたときのスピーチか何かを僕はワシントンにいてテレビで見えていて、あの人は俳優が突如大統領候補になっちゃったなという感じで見ていた。しかし、レーガンのしゃべっている言葉を聞いて何かおかしいことを言っていると僕がぶつぶつ言っていたら、家内に「でも、とっても分かりやすいわよ」と言われました。ああそうかと思いました。

それからずうっと見ていると、すごく安定感がありますよね。彼の言っていることに賛成するけど

うかは別として非常に安定感があるし、アメリカの国民に訴える力というのがものすごくあった。それから実際にレーガンの下で僕が関係していた政策ということで安保防衛について言えば、レーガンの下で働いていたワインバーガーとかアーミテージは僕がやっていたときは割合やりやすかったということもあって、そういう意味では彼をかなり評価するようになったということですね。ただ、SDIについては本当にこんなことできるのという半信半疑な気持ちがずっとあったということです。

—— 先ほどの質問に関してですけれども、こういった SDI に関する問題が議論されるときというのは、省内ではどこが担当することになるのでしょうか。

沼田 安保課が担当しました。これはしようがなかったです。僕のところでやるほかない。

—— ほかにいないという感じですか、これは。

沼田 軍縮課でもないしね。もちろん省内で随分議論しましたけどね。

—— こういう問題というのは情報調査局という感じでもないのですか。

沼田 情報調査局はアメリカと実際にやりとりするわけにはいかないから。

—— なるほど。あくまでアメリカから提案があったので安保課で引き受けてという感じですか。

沼田 そうです。だから、ふだんの仕事と随分違ったわけです。ただ、最後申し上げたボン・サミットの後、情報調査局長を派遣して西欧 4 か国の態度を調べるかという話が出たのは、北米局長はなかなか行けないからでした。

—— サミットの政治問題は情報調査局がこの頃はやっていたのですか。

沼田 それもありますね、確かに。

—— そういう分担があったということでしょうか。

沼田 それもあるけど。

—— これは大丈夫なののでしょうか、ふだんタッチされていない結構専門的な問題ですけれども。

沼田 省内の議論なんかはもちろん渡邊幸治情報調査局長。

—— ええ、当時、渡邊局長でした。

沼田 省内で議論するときには参加されていますから。

—— なるほど。

沼田 これは北米局だけでやるのはなかなか難しいです。だから、そういう意味では省内では北米局の我々がやっていたけれども、それに参加していたのはもちろんヨーロッパを主管している欧亜局、情報調査局、それから国連局は軍縮課の主管です。みんな議論にはほとんど参加しているわけですよ。

—— こういう問題を専門として扱う安全保障局みたいな構想が何度か外務省では検討されていたけれども。

沼田 安全保障。

—— 安全保障局のような構想が何度か。

沼田 いや、藤崎一郎君が室長になった安全保障政策室だったかな。防衛庁との連絡のためにできた室が情報調査局にありましたけれども、そのときはまだ規模が小さくてこういう問題を本格的に議論するというわけでもなかったですね。今の総合外交政策局の下での体制とは随分違います。

—— 情報調査局安全保障政策室長と。

沼田 そうです。その後、森本氏も室長になりましたよね。防衛大臣だった彼。

—— そもそもに戻ってしまうのですが、大使はこの SDI をレーガンが発表したときに、彼ないしはアメリカの狙いはどういうところにあるとお考えになりましたか。

沼田 わからなかったですね、正直言って。何を考えているのだろうという感じでした。だからカンターに聞いたわけですよ、これ本当なのという感じ。

—— そのカンターの説明だと何というか、必ずしもレーガンが持っていたような理想主義的な考えではなくて、むしろ MAD の補強、補足だということだったのですね。人によって説明の内容が変わっているようなイメージを受けるのですが。

沼田 そうですよ。それは随分いろいろな解釈があつたけれども、でもスコウクロフトさんのものも割合現実的な解釈だった。それはテクノロジーがどこまで進むかによるけれどもということが最初に入るわけですよ。でも、本当に現実的にテクノロジーがあり得るかということから考えると、practical に考えてあり得るのはこうこうこういうことじゃないかと。そこまで聞くと、ああそうか、そういうこともあり得るかなということを我々も何となく感じ始めたと、そんな感じです。

—— カンターさんとかスコウクロフトさんの説明に基づくと、どちらかというと SDI は攻撃兵器の補完になるから、今度は国内的な説明が難しくなりそうだなというふうに聞いていたのですが、その点、頭を悩まされたりされましたか。

沼田 攻撃兵器の？

—— 補完。ICBM を守るとなると、SDI というのは実は MAD の補強ということになりますよね。そうすると、日本国内でこれは防御的兵器だから理解を示すのだということを言いにくいような気がしたのですが。

沼田 それはそうかもしれない。そこまでは考えなかったけど。何と言ったらいいな。これは後で軍備管理のところで出てきますけれども、アメリカの ICBM というのは非常に脆弱になっているというのが大前提にありました。そうすると MAD も成立しないのではないかと。それは成立しないようだと日本は困っちゃうわけでしょう。

defensive というのが、defensive をどう解釈するかだけれども、大統領が defensive と言っている以上、これは defensive なものなのですから、そんなに怖がらなくてもいいのですという説明がしやすかったということはあると思います、単純に言えばね。

—— でも普通に考えると MAD を guarantee、complement するというより MAD をひっくり返す方向とも解釈できて、むしろフランスなんかはその点を突いているわけですよね。

沼田 そうそう。最初からそういう解釈を考えているわけでしょう。

—— もちろん、恐らく当時のアメリカの政権内、あるいは政権外の戦略論議を多分広く調べていくいろいろな意見があったと思われるのですが、カンターさんはこの complement というところで押していたんですかね。

沼田 彼はそれで一生懸命押していたのかどうか、よく分からないけどね。

—— 多分、そのラインに乗らざるを得ないという部分は政府の中だとあり得ると思うのですけど。

沼田 そうだと思います。

—— そうすると、今までの、ABM 条約下の MAD は何だったんだという話になってきますからね。

沼田 そうそう。だから、誰がレーガンにこのアイデアを植えたのか、よく分からない。

—— この辺りって多分、そもそも SDI というのがどこから浮上してきたかよく分かっていないですよ。

沼田 よく分からないですね、本当。

—— 大体演説が 83 年の春ごろにいきなりされたみたいのところからストーリーが始まるんですが、誰がその仕掛人で、技術の専門家あるいは戦略家たちが違うルートで行き着いた先が一緒だったのか否かということも、いまいまだよく分かっていない部分ですね。

沼田 そのとおりです。我々も非常に苦労しましたがけれども。

—— アメリカの政権内の人も苦労したんだなという印象を受けますけれども。

沼田 確かにそうですね。

—— 大使のスライドの 13 ページの真ん中辺、4 番のところに **Focused Research**、お金をかけて **Research** と **Technology** をやると 90 年代初頭に **informed decisions** と書いてあるのですけれども、これはこの時点で何を決めようというのですかね。

沼田 何か方向が決まるでしょうという意味でしょう。実際何をやるかという。

—— 実際にどの程度のものなのか。

沼田 はい。そういうことでしょう。

—— 技術屋さんたちはやればできるんだという感じでしゃべっていたわけですかね。

沼田 そうですね、はい。

—— 完全なる防衛が。

沼田 でも、先方の説明も、「**Ultimate objective - Nuclear-free world is a goal. SDI research offers a realistic opportunity**」とは言っているけれども、核兵器を「**impotent and obsolete**」にするための「**a perfect defense is not technically possible**」と言っているわけですから、**Ultimate objective** は本当にできるかどうか分からないと言っているわけですよ。

—— **impotent and obsolete** というのは何ですか。

沼田 **Nuclear weapons** を **impotent** にするとレーガンが言いましたね、最初。

—— では、レーガン以外に **SDI** の可能性を信じていた人はいるのかという感じですね。

沼田 いるのでしょうけど。

—— でも、ある意味ゴルバチョフも信じていたということですよ、すごく嫌がっていたということとは。

沼田 それは、次の米ソ首脳会談のところで出てきますけど。

—— 中曽根さんはどうだったのですかね。ロン・ヤス関係ってすごくマスコミ的にプレイアップされましたけれども、実際何で馬が合ったのでしょうか。どういう点で響き合ったのですかね、あの二人は。

沼田 レーガン大統領も本当に SDI みたいなことをテクノロジーも含めて理解していたかどうか、核戦略なんかを理解していたかどうかということは疑問ですけれども、非常に大掴みに生まれつきの勘みたいなもので世界をどう動かしていったらいいかというようなことについての信念を持っていた。中曽根さんは中曽根さんでもものすごい勉強家で、日本をどう動かしていったらいいか、世界をどう動かしていったらいいかということについての信念を持っておられて、それが共鳴したということなのではないですかね。中曽根さんの書かれた本なんかを見るとそういう感じがしますけどね。

—— ゴルバチョフとレーガンは、やっぱり Nuclear-free world という理想自体では完全に一致したのだと思うんですね。

沼田 そうですね。

—— 中曽根さんにはそういうところはなかったですね。

沼田 中曽根さんはもうちょっと現実的だったと思います。

—— 先ほどの日本の心配と関連するのですが、SDI がアメリカの ICBM サイトとかを守るのか、それとも都市を守るのか。同盟国まで含むのか。これによって日本としては恐らくそのインプリケーションが大きく変わってくると思いました。具体的に言うと、この問題が、ヨーロッパが心配していたような Fortress America になるのか、それとも MAD が強化されて核の傘の信頼性が上がるのかという話にもつながるだろうと思ったのですけれども、そういった議論が省内でなされることはありませんでしたか。

沼田 そこまで詰めてはないですね。いろいろな議論があるよねということは話してはいましたけどね。それが日本に対してどういう影響があるのかということまでは僕のときには詰めていなかったけれども、僕の後には藤井宏昭局長、岡本行夫課長のときには詰めたのかな。

—— 大使は直感的にどう思われましたか。

沼田 本当に役に立つのかなと思いましたけど。

—— そこですね。実現するのかと。

沼田 あまりそう言っては僕の後の方たちに申し訳ないから。

—— 当時のメディアの反応もそういう感じでしたよね。スターウォーズという言葉を示している当時、何を夢みたいなこと言っているという印象が一般的な反応ではありましたよね。だから、どこでやめたのか忘れちゃったけれども、やめたときにはそれ見たことかと思いましたけどね。

レーガンほど、現役時代と後からいろいろな文章を読んでのイメージにギャップがある人はいないですね。

沼田 ギャップというのはどういう意味で？

—— 一貫性もあったし、ある意味理論的な人ですよ。そこはトランプとは違うところで、彼なりに世界をよくしたいという理想に最初からずっと燃えていて、その使命感たるやすごいものだなというのと、やはり勉強家ですよ、実は。それは彼のノートとかが出版されていますけれども、こんなに本読んでいたと。本なんか全然読んでないだろうというイメージを抱いていたのですが。

沼田 だから、SDI は本当に何を目指していたのかということです。レーガンの意図のとおりにはいかないだろうと。それではどういうインプリケーションがあるのか、いろいろな議論があったけれども、その後の米ソの軍備管理交渉の展開を見てみると、あそこでああいうことを言い始めたことのインパクトというのはそれなりにあったということだと思うのです。SDI 自体は消えてしまったけれども、ああいう構想を打ち出したことのインパクトというのはその後の米ソの軍備管理の協定にも影響していると。

—— レーガンは別に交渉のためにでかく打ち上げたわけではなくて、私は 100%本気だったと思いますけれどもね。

沼田 そうでしょうね。

—— もう 1 点だけ。松永次官が「何で支持しないのだ」とおっしゃったということ。

沼田 一番最初のときね。

—— これはどういうお考えがあったと推測されますか。

沼田 それは詳しく聞いてないですけどね。基本的に日米を大事にするということだったのかもしれない。

■ FSX 問題—経済と安全保障のリンケージ—

—— 次に FSX 問題です。

沼田 FSX ですが、これはほとんど僕のとときには出てきていません。ただ、FSX と言われていろいろ調べてみて、これはインターネットで見つけたんだけど、経産省の今野秀洋さん（元経済産業審議官）が 2011 年 10 月に当時を振り返って講演しているのがありましてね。RIETI——というのは経産省の研究所ですよ——の特別セミナーで彼が言っているのは、FSX の第 1 フェイズというのは機種決定のフェイズで、1985 年 10 月～87 年 11 月までだった。1985 年 10 月に防衛庁が F1 の後継機の総合検討作業を開始したと。国内開発、現有機転用、外国機導入という検討を開始したと。

今野さんは、86 年の 4 月にワインバーガー・加藤会談でアメリカ側から FSX 選定作業への協力申し出があったと書いてあるのだけれども、これはどうも僕の記憶と違う。加藤長官がアメリカに行ったのは 6 月だったでしょう。時期が違うのと、それから、僕の知っている限り、そのときにアメリカ側から FSX 選定作業への協力の申し出があったという事実はないのです。何が起きたかということ、同

じ話をしますけれども、6 月に加藤長官が訪米をして、そのときにワインバーガーではなくてマクファーレン大統領補佐官に会った。僕も何を言い出すのかなと思いながら聞いていたので、言ったとおりにメモに書いてありますけれども、マクファーレンが「Logically economically sensible decisions have political implications. Crossing the threshold of procuring at home what has been procured here, the sector in which US competes effectively may be lost」と言って、「for example tanks, airplanes, etc.」と言いました。何を言うのかなと思って。ただ、そのときに同席していたケリー国防次官補代理が、ルーガー上院議員は FSX について日本がアメリカの持っている機種よりも劣っているものをあえて選んだりするとそれは問題になる（difficult if more costly and less effective than competing aircraft. The prospect of bringing trade and defense closer）ということをやっていると言っていました。そのときに FSX というのが初めて出てきた。

ただ、マクファーレンの発言を聞いて私がピンときたのは、「the sector in which US competes effectively may be lost」というところです。M110 自走榴弾砲というのがあって、そのライセンス生産の話があった。それはタンクですね。Aircraft というのは恐らく戦闘機の話だろうということで、そういう問題が出てきているなという感じはしました。そのときに加藤さんは、装備調達は純粋に軍事的有効性とインターオペラビリティ（相互運用性）を考え公正さを大切にしたい、決定に数年かかると言った。だから、FSX の問題もあるということは頭に置いておられたのだと思うのですけれども、私が覚えている限り、この問題が出てきたのは、私が関係したところではこれが唯一の例なのです。

それから、日米の防衛と経済のリンケージというのは、議会では私がワシントンを離れる前後頃からある程度は出てきていました。要するに、議員に会いにいくと日本の防衛努力が足りないという話と、それにしても貿易不均衡を何とかしてくれという話が両方出てくるわけですね、どうしても。だから、私もワシントンを去る最後の半年ぐらいかな、自分でもいろいろな議員のところに行っていましたし、経済班の田中均書記官は経済関係でいろいろな議員のところに行っていて、それで田中君と僕とで安保防衛関係で関心のある人と経済関係で関心のある議員のリストを作った。僕や田中君が行くのは議員のスタッフですけども、その議員たちに当時は有馬龍夫政務参事官、後任の渡邊允参事官、それから溝口道郎特命全権公使に行ってもらおうとか、あるいは大使に上院議員に会いにってもらおうとか、一斉にやっていました。そういう意味では議員の問題意識としてはリンケージが相当出てきていたわけですよ。

ただ、行政府のほうは、少なくとも安保防衛関係の人は、ずっと申し上げているように、レーガン政権になってから頭から圧力をかけるということを控えていましたから、割合やりやすかった。しかし、そういう状況の下で 85 年の 6 月ぐらいになると、加藤長官が行かれたときに松永大使が言われたのは、ワインバーガーは議会との関係で調子が悪くなっている、シュルツは外交に自信をつけているということでした。

貿易と防衛について松永大使が言われたのは、行政府はリンクさせない、議会はリンクする、だから厳戒を要するということです。F-15 も貿易摩擦が続くとライセンス生産を止める方向になるのではないかというような話があります。それから、明示的な発言としては、加藤長官が訪米のときにワインバーガーに対して、経済摩擦が防衛に及ばないようにするためのワインバーガーの努力に感謝している。大綱達成をなるべく早く、59 中業をやろうとしている、日本自身のため、圧力より静かに見守っていることを多とする、という話がありました。

以上が、経済と防衛のリンケージと FSX です。

—— ワシントンの日本大使館でも議員の方々に会いに行ったり、説明に行ったりということでしたけれども、こういうのはいつ頃から始まったことなのでしょうか。大使がおられた頃にはもう既にい

ろいろな問題に関してされていたことなのでしょうか。

沼田 私はワシントンに着任して４年間いましたけれども、私が着任した頃は私の時間のうち２割ぐらいは議会に行って、議員のスタッフに会って話をしていた。私がワシントンを離れる頃はその時間が５割でした。田中均書記官も経済で回るようになって、それから私が離任する前は、東郷大使のときはそうでもないですけども、大河原大使には随分いろいろな人に会ってもらった。大河原大使は経済と安全保障の両方とも話せますからね。それから、私のワシントンの最後の方は溝口特命全権公使が来られて、溝口公使は経済局にもずっとおられて経済に非常に詳しくかったですから、いろいろ回ってもらいました。そういう意味では議会との関係というのは随分やっていた。僕より前に、たとえば佐藤行雄さん(のちの国連大使)なんかも随分議会の人と親しくしておられたようですけれどもね。

—— こういうとき、誰に説明にいくとか誰が誰に行くかというのは、結構戦略を立てるのが大変だと思うのですけれども、そういうのは現地の大使館で立てるものなののでしょうか。

沼田 はい。大使館で立てる。本省はそこまで分からないですよ、なかなか。隣国のカナダじゃないからそんなにきめ細かくない。カナダはアメリカのことを熟知しているから別だけれども。

それからもう一つは、総領事館を使えないかという話がいつもあるのですけどね。これは今はやっているかもしれないけれども、なかなか難しいのですよね。議員が選挙区に帰ったときにつかまえるということですけど。まあこれは必要だと思いますけどね。でも、我々は議員に直接会うというのは難しいから、まずスタッフから攻めるわけですよ。そういう意味では、僕は下院と上院の軍事委員会、それから外交委員会なんかの有力議員のスタッフのところに行って、そのスタッフとは大分仲よくなったりしましたね。ただ、スタッフに会いにいてもなかなか大変でしてね。彼らは忙しいから、３分ぐらいで話をしないといけないとか、メモは１枚に限るとかね。エレベータートークというのは御存じですか。エレベーターに乗っている間にブリーフしちゃうとか、それほどでもないけれども、何かそういうような感じのことが多かったですね。経験としては非常に役に立ちました。

—— ということは、大使が着任される以前というか、議会担当の方を置かれる以前というのは、そういう議会との接触というのは必ずしも当たり前のことではなかったという感じですか。

沼田 必ずしも当たり前のことではなかったのではないですかね。でも、丹波さんなんかは議会のスタッフを何人か知っておられたようですけれども。それは個人の人脉と言っては悪いけれども。

沼田貞昭オーラルヒストリー ⑤

北米局北米第一課長

—1980 年代半ばの日米関係—

質問票 5 北米局北米第一課長—1980年代半ばの日米関係—

1. 1985年8月、大使は安保課長から北米第一課長にスライドして異動され、翌86年11月までご勤務されました。
 - (1) 後任の岡本行夫課長への引継ぎ、前任の川島裕課長からの引継ぎに関して、強くご記憶に残っていることはございますか。
 - (2) 当時、世界的には冷戦終結に向かうこととなる米ソ首脳会談が開催されるなど、国際関係が大きな転換を迎えていました。こうした世界的な動向を北米第一課ではどのように分析されていたのでしょうか。米ソ首脳会談やチェルノブイリ原発事故のようなソ連国内の状況について、米国との間ではどのように情報共有がなされていたのでしょうか。

■参考：外務省・北米局の体制

外務大臣	1982年11月～1986年7月	安倍晋太郎
	1986年7月～1987年11月	倉成正
外務事務次官	1985年1月～1987年6月	柳谷謙介
北米局長	1984年7月～1985年11月	栗山尚一
	1985年11月～1988年1月	藤井宏昭
安保課長	1984年7月～1985年8月	沼田貞昭
	1985年8月～1988年7月	岡本行夫
北米一課長	1983年1月～1985年8月	川島裕
	1985年8月～1986年11月	沼田貞昭
	1986年11月～1988年7月	山崎隆一郎

■参考：当時の主な出来事

1985年11月	米ソ首脳会談（ジュネーブ）
1986年4月	チェルノブイリ原発事故発生
1986年10月	米ソ首脳会談（レイキャビク）

2. まず、日米関係全般に関することをお聞きします。

- (1) 北米第一課長のご在任中、中曽根首相は2度訪米し、レーガン大統領と会談しています。まず日米両首脳の影響からお尋ねします。数多くの首脳会談に立ち会われてきた大使から見ても、中曽根・レーガンの「ロン・ヤス関係」は特別なものでしたか。
- (2) この時期の日米首脳会談では、主要議題が安全保障から経済へと移っていたように思います。中曽根・レーガン首脳会談について、北米第一課として重視していたことやご苦労したことをお聞かせください。
- (3) 当時は日米首脳会談に加えて、安倍外相とシュルツ国務長官との外相会談やワインバーガー国防長官の来日など、ハイレベルの会合が続きました。また、米国議会指導者の訪日、二階堂自民党副総裁、野党リーダーの訪米など議員交流もありました。これらの会談・交流の中でご印象に残っていることをお聞かせください。
- (4) 当該期には米国議会での対日非難が強まり、『Foreign Affairs』にカレル・ヴァン・ウォルフレンの“The Japan Problem”が掲載されるなど、いわゆる「日本異質論」が浮上していました。大使はこうした米国の「ジャパン・バッシング」の風潮を当時どのように捉えておられましたか。

■参考：当時の主な出来事

- 1985年 10月 中曽根首相、国連記念総会出席のため訪米
(中曽根・レーガン会談で保護貿易阻止に合意)
- 1986年 1月 安倍外相、米国・カナダ訪問
(MOSS 協議を評価、半導体は継続協議)
- 1986年 3月 日米政務担当次官級協議 (ワシントン)
- 1986年 4月 ワインバーガー国防長官来日
(中曽根首相らと会談。FSX での対日圧力を否定)
- 1986年 4月 中曽根首相、安倍外相訪米
(中曽根、輸入志向型経済を目指すと表明)
- 1986年 5月 東京サミット (第12回先進国首脳会議)
- 1986年 冬 『フォーリン・アフェアーズ』にウォルフレンの記事「ジャパン・プロブレム」掲載

3. 次に日米間での個別の問題についてお尋ねします。

- (1) 1985年8月の中曽根首相による靖国神社の公式参拝は中国・韓国との間で外交問題に発展しましたが、米国との間には何かやり取りはございましたか。
- (2) 翌年9月の中曽根首相のいわゆる「知的水準」発言をめぐって米国とはどのような交渉があったのでしょうか。
- (3) 当時、日米間ではMOSS協議や半導体などの貿易摩擦、プラザ合意とその後の急激な円高局面といった為替問題、内需主導の経済構造転換を求めた「前川レポート」の提出のように、さまざまな経済問題が懸案となっていました。これらの問題に北米第一課はどのように対処されていたのでしょうか。
- (4) 半導体などの経済摩擦交渉と並行して、SDI研究への参加問題も継続していました。SDIのような安保問題について安保課と北米第一課との間ではどのようなやりとりがあったのでしょうか。
- (5) 大使の北米第一課長在任中には、日米航空協定改定も交渉が進んでいましたが、この交渉について強くご記憶に残っている点はございますか。
- (6) 1986年5月に、シュルツ国务長官が日本にフィリピンへの援助拡大を希望しています。対比援助をめぐって日米間ではどのような議論があったのでしょうか。
- (7) 大使が北米第一課長からジュネーブに転出される直前、倉成外相が戦艦ニュージャージーの日本寄港に際して非核三原則の厳守を申し入れています。この問題についてどう関わられたのでしょうか。また、当時ニュージーランドのロンギ政権がとった核搭載米艦船寄港を受け入れない政策はどのような影響があったのでしょうか。
- (8) 非核三原則の質問に関連してお尋ねします。大使は安保課長・北米第一課長の在任中、「核持ち込み」に関するいわゆる「密約」問題について、どのようにご認識されておりましたか。「討議の記録 (Record of Discussion)」や日米間での認識の齟齬を記した「東郷メモ」のことはご存知でしたか。

■キーワード

- ・ 中曽根首相の靖国神社公式参拝
- ・ 中曽根首相の「知的水準」発言
- ・ 日米経済摩擦（半導体など）
- ・ MOSS 協議
- ・ プラザ合意（1985年9月）
- ・ 中期防衛力整備計画の閣議決定（1985年9月）

- ・ 前川レポート（1986年4月）
- ・ SDI研究

■参考：当時の主な出来事

- 1985年 8月 中曽根康弘首相、靖国神社を公式参拝
- 1985年 8月 ブッシュ副大統領、対日戦勝40周年記念式典で日本などに対し責任分担を呼びかけ
- 1985年 8月 ヤイター米通商代表来日
- 1985年 9月 G5蔵相・中央銀行総裁会議で「プラザ合意」
- 1985年 9月 日米高級事務レベル協議
- 1986年 1月 「アクション・プログラム」実施（1849品目の関税引き下げ）
- 1986年 2月 日米高級事務レベル協議
- 1986年 5月 シュルツ、日本によるフィリピン援助拡大に希望表明
- 1986年 7月 ボールドリッジ米商務長官来日
- 1986年 7月 第13回日米文化教育交流会議
- 1986年 7月 日米半導体協定締結（サイド・レター手交）
- 1986年 8月 第1回日米MOSS協議（東京）
- 1986年 8月 倉成外相、戦艦ニュージャージー寄港で非核三原則の厳守申入れ
- 1986年 9月 日本政府、SDI研究参加方針を決定
- 1986年 9月 中曽根首相、自民党全国研修会で「知的水準」発言

4. 最後に日加関係についてお聞きします。1986年には中曽根首相がカナダを単独で訪問されています。米国に立ち寄らない形での首相のカナダ訪問はあまり例がないと思いますが、この間の経緯や当時の日加関係についてお話しください。
-

■参考：当時の主な出来事

- 1986年 1月 中曽根首相、カナダ訪問
- 1986年 3月 日加軍備管理・軍縮協議開催
- 1986年 5月 マルルーニ・カナダ首相訪日

北米局北米第一課長—1980年代半ばの日米関係—

■ 安保課長から北米一課長へ

—— 1985年8月、大使は安保課長から北米第一課長にスライドして異動され、翌86年11月までご勤務されました。まず、前任・後任者への引継ぎに関して、強くご記憶に残っていることはございますか。

沼田 まず加藤安保課長から私への引継ぎがあった。加藤さんと僕は北米一課に首席事務官で行ったときにも引き継いだのですけれども、このとき加藤さんは北米一課で沖縄返還のことをずっとやっておられて、その後任として僕が行って沖縄のことを引き継ぎましたけれども、返還交渉は終わっていましたから別にあまり何もなかったです。

それから、安保課長を終わって岡本君に引き継いだときは、岡本君はワシントンで僕の後任が竹内行夫君で、竹内君の後任で安保をやっていたのが岡本君ですから、彼は仕事の内容を知っているわけですね。僕が栗原長官についていったときも加藤長官についていったときも、岡本君が現地で担当官でしたし、会談の通訳もたしかしていましたから、そういう意味ではよく知っていた。

ですので、あまり時間をかけて引き継いだという記憶はないのですけれども、どんな問題を引き継いだかという、ずっとお話してきたような防衛予算、防衛計画、日米共同研究、シーレーン防衛研究、トマホーク搭載艦船寄港、OTH-B、母港。ニュージーランドの核搭載艦船の寄港拒否の話もありますが、これは軍備管理の話をするときにもやりましょう。それから日米共同訓練、武器技術交流、沖縄、SDI等々ですね。

あと、安保防衛をやっていると防衛族の議員の人たちがたくさんいるわけですね。与党にも野党にもいるわけで、与党では元防衛庁長官の先生方。当時三原朝雄さん、大村襄治さんとか坂田道太さんとかね。それから、非常に我々助けていただいたのは椎名素夫さんですね。椎名さんはいわゆる防衛族ではなくて、非常に知的な方ですから、よく物を考えておられて、我々は困るとよく相談にっていました。それから、民社党、公明党、社会党。民社党、公明党はそんなに問題があったわけではないのですけれども、社会党はなかなか難しいですね。難しい議員の人たちにも付き合わなければいけない、ということでやっていました。

それから岡本君の名前が出てきたのでお話ししますが、この前お送りした、僕が『FOREIGN POLICY』に書いた obituary。あの中に書いたとおりですけれども、彼は特に沖縄との関係でも非常に活発に動いた。偉いですね、あそこまでやるのは。

もう一つ、米ソ関係を北米一課でフォローするに当たって私のときに重要な役割を果たしたのが、北米一課の調査班。これはアメリカの内政をフォローする人と外交をフォローする人と2人いるのですけれども、関場（旧姓水谷）誓子さんという女性がいて、僕が北米一課の首席事務官のときにも彼女がいて、それから課長のときにもいたのですが、水谷さんはずっと米ソ関係をフォローしていました。彼女は米ソの軍備管理交渉をずっとフォローして調書をずっと書いていたのですが、私が北米一課を終わってジュネーブに赴任する前に、彼女が米ソ関係、特に軍備管理について調べてきたことを出版してもらえないかと言って、サイマル出版会の田村勝夫社長のところに連れて行って本を出してくださいと頼みました。そうしたら2人でかなり厳しい口頭試問を受けまして、田村社長はなかなか個性の強い人でした。その口頭試問に受かったので、彼女の書いた『超大国の回転木馬』という本がサイマル出版会から1988年に出版されて、サントリー学芸賞をとっています。彼女は外務省に20年

間勤めたのかな。20 年務めたところで聖心女子大の教授になって、去年引退して名誉教授になっています。そういう人に支えられていたということです。

—— 川島北米一課長との引継ぎのところで、スライドに「訓令潰し」というのがあるのですけれども、これは。

沼田 そうそう、川島さんの引継ぎをまだ言っていない。

私は北米一課が長くて、事務官として 72 年～76 年まで 4 年いて、その後課長をやっています。それでつくづく感じたのは、要するに雑務課です。だから、何に時間を使っているかといういろいろなことがあるのだけれども、一番大きいのが首脳会談とか外務大臣会談のアレンジ。アレンジという場合には物理的なアレンジもあるし発言要領を作るのもあるし、私の場合は通訳をずっとやっていたから、それがあるでしょう。それから、日米関係のいろいろな問題について議論し合うというのがあるのですけれども、それ自体のサブスタンスはほかの課でやっていることが多いので、それをどうやって調整するかということが多い。それから、いろいろな地域局で、どこかの課が、そこが抱えている国の問題について調査訓令を出そうとするのですね。えらい細かい調査訓令を出したりすると大使館が大変なわけですよ。あまり細かい専門的なものはいいかげんにしろとか、こんな分かり切ったことを聞くなとかいうのが「訓令潰し」という意味です。

あと北米一課で川島さんはうまくやっておられたと思うけれども、政治家との付き合いというのが大変ですね。たとえば二階堂進さんや愛知和男さん、平泉渉さんが訪米するとかいうときのアレンジというのがなかなか悩ましいものがありました。民社党の訪米というのも結構ありましたね。そういうような仕事で、要するに雑務が多いわけです。だから、常に高尚に日米関係を論じているというのとはかなり程遠い仕事が多かったですね。

—— 安保課長から北米一課長にという打診というのでしょうか、内示があったときにはどういうふうにお感じになったのですか。

沼田 やっぱり古巣に戻るのかと思いました。というのは、僕が北米一課に行ったのは 72 年で、それからインドネシアに行ったのは 76 年でしょう。ちょうどそれから 9 年たったときだったかな。また北米一課かなと思いました。あまり違和感を感じなかったけれども。

ただ、その前、ワシントンから帰ってから国際機関一課長（これは要するに GATT 課長です）というのをやっていて、日米貿易摩擦の処理など結構大変だった。安保課がまた SDI なんかもあってかなり大変で、かなり疲れていました。僕は北米一課長のときに網膜剥離の大手術をして、2 か月ぐらい休みました。そこでさすがに疲れが出たかなと思っています。

—— 安保課長を離れるときは逆にどういう感想を抱かれたのかなというのを伺いたいなと。

沼田 ちょっとほっとしました。正直言ってほっとしました。地位協定関係の雑事、小さい細かい、しかも頭の痛い問題がいろいろあるわけですよ。その処理というのに神経使うし、地方自治体との関係なんかも随分ありますね。それに加えて SDI という大きな話がぼーんと来たものだから、1 年間でしたけれども、大変だったことは大変だったですね。だから、それから解放されたということはちょっとほっとしましたね。

■「ロン・ヤス」関係

—— では、北米第一課についてお話を伺いたいと思います。まず、日米関係全般に関することをお聞きします。

北米第一課長のご在任中、中曽根首相は2度訪米し、レーガン大統領と会談しています。まず日米両首脳の影響からお尋ねします。数多くの首脳会談に立ち会われてきた大使から見ても、中曽根・レーガンの「ロン・ヤス関係」は特別なものでしたか。

沼田 まず、日米関係全般と各論に分けてお話ししたいのですが、最初の御質問で、中曽根・レーガン両首脳はどういう人だったかという御質問があって、考えてみたら僕は中曽根政権になってしばらくたってから北米一課長になったので、その前の経済局にいたときはもう中曽根首相だったので、実は首脳としての中曽根首相との接点というのは、僕はあまりありませんでした。私が見ていた限りで申し上げると、人の言葉を借りて恐縮ですが、藤崎一郎大使が『三田評論』に書いた追悼文を我が日本英語交流連盟のウェブサイトに乗せたものをお送りしたと思いますが、藤崎大使は「セルフメイドマン」と言っていますよね。若いときから総理になるべくずっと準備してこられたと。大学ノートに何冊もそれが書いてあったという話もありますけれども、常に総理になるためにはどうするか、なつてからもどうするかということで、戦略・戦術の両方を考えておられたと。そういう感じ、ものすごくよく勉強しておられるし、よく考えておられたという感じがします。

私の記憶に残っているのは、これはまだ私が国際機関第一課長のときですが、1983年にウィリアムズバーグ・サミットがあったのですね。このとき、僕は国際機関一課長として行っていたのですが、そのときに首脳の写真を撮る場面が出てきた。それをウィリアムズバーグの日本代表団の控室にある場内テレビで、息子さんでのちに外務大臣をやられた中曽根弘文氏と一緒に見ていたのです。そしたら、中曽根さんがずっと前に出てくるわけですよ。息子さんも「あつ、出てきちゃった」と言っておられた。平然とレーガンの横に並んで、そのままずっと写真のところまで行って、ニコニコとしながら真ん中に写ったわけですね。ああ、これはすごい人だなと思いました。その印象が非常に強く残っています。たしか藤崎君もこのことを書いているけれども。

—— 写真の立ち位置というのは本来振りつけるのですか。

沼田 首脳になった順で一応序列は決まっているはずなのですが、でも、写真の立ち位置までは決めてないのではないかな。日本のそれまでの首相というのは割合遠慮がちだったのだけれども、もう全然遠慮なさないで真横に行かれたというのはすごいなと思って見ていました。

それに関連するのですが、駐英公使時代、たしかロンドンに着任してすぐ、BBCのいろいろな人たちに会いに行きました。そのときにBBCのニュース番組の責任者から、BBCの日本についての報道についてどう思うかと聞かれたときに、いや何かいろいろまちまちで、必ずしも十分日本のことを把握しているとは思えないというようなことを言った。そのときにBBCの人が言っていたことをいまだに覚えています。彼ら報道する、特にニュースを追う人たちから見れば、「We need a recognizable set of characters」と言いました。「recognizable set of characters」というのはたとえばどういう人か。メルケルみたいな人がそうですね。それから、トランプも今の時代であれば、よしあしは別としてrecognizable。

僕がロンドンにいたとき、そのBBCの人と話していたときにrecognizableだったのは、ドイツの

コールですね。それからマーガレット・サッチャーとかレーガンとかいうのが **recognizable** だったと。BBC の人は「日本の首脳でそういう意味で思い出すのは、中曽根さんだ」と言いました。ほかの人のことは思い出さない。それだけのインパクトがあったのだということだと思います。

それから、もう一つ私の記憶にあるのは、藤崎大使も書いていたかな、ウィリアムズバーグ・サミットのときのステートメント。サミットの宣言は経済問題だったけれども、そのほかに政治宣言みたいなのがあって、INF の話だったかな。その中に「**The security of our countries is indivisible**」という表現が出てきますね。我々は「**Western security is indivisible**」と初めて中曽根さんが言ったというふうに説明していますけれども、そのことにも表されるように同盟関係を重視しておられたし、日米の同盟関係だけでなく、世界の中での同盟関係のネットワークみたいなものを大事にしておられた。そういう意味では日米の同盟についても非常に理解しておられたということが言えると思います。防衛庁長官をやっておられたから、その素養があったということもあると思うのですけれども、恐らくこれも総理となろうと思うに当たって、いろいろ心の準備をすることの一環としてそういうことも考えておられたのだらうと思います。

それに対してレーガン大統領はどういう印象かということ、俳優としての経験というのが非常に役に立っているということがあると思います。鈴木総理のときに僕が感じたのは、鈴木総理が 1981 年の 5 月でしたか訪米されたときに、同盟問題があったときですけれども、あのときにホワイトハウスでの歓迎式がありました。ホワイトハウスの歓迎式でレーガン大統領がまずしゃべって、それをアメリカ側の通訳が日本語に訳しているわけですね。レーガンが割合長くしゃべったものですから、アメリカ側の通訳のコーネリアス・イイダ (**Cornelius Iida**) という人だったと思いますけれども、彼が 10 分ぐらいずっと訳しました。レーガンにとっては自分がしゃべったことだから何をしゃべったか分かっているし、日本語を聞いていて退屈なのだろうと思うのだけれども、その間レーガンはちょっと首をかしげてニコッと笑った表情を全く崩さずに 10 分間、ずっと総理のほうを見ていた。あれはすごいと思いましたね。普通の人だったら途中でくしゃみしたかもしれない、表情も崩れてしまうと思うけれども、そういうのができる人だということがあります。

それからもう一つは、レーガンについて私の記憶にあるのは、『**Reagan Speaks**』という本があります。私が北米一課長の頃の 1985 年に出た、エリクソン (**Paul D. Erickson**) という文芸評論家がレーガンの演説を分析した本です。これは非常に面白い本で、この人が言っているのは、レーガンの演説というのは聴衆を巻き込んだドラマであると。要するにレーガンも主役だけれども、時々聴衆も主役にしてしまうドラマと考えればいいと。その中で非常に分かりやすいメッセージを出すわけですね。レーガンの好むメッセージというのはどういうことかということ、たとえば **mother** がよく出てくる、それから **sons** (息子)。だから、このドラマをファミリーで捉えているわけですね。息子という中で **sons of America** といえばアメリカ人の兵隊さんになるわけですね。その犠牲者というのが戦死した人たち。その中から **American hero** も出てくる。それから **American dream** というものもよく出てくる。そういう分かりやすいテーマを取り上げて、聞いている人たち自身が主役という感じを持つような話をする。そうやって引き込んでいるということでした。

それから、中曽根総理御自身の『自省録』という本がありますが、面白い本ですね、これ。かなり思い切ったことを書かれていますけど。この中で中曽根さんが言っておられるのは、レーガンは大局観と眼力と説得力に富んだ人だったということ。レーガンは大統領以外ではほかに何もできない人だったろうと書いてありますね。非常に大雑把だったと言われたけれども、非常に人間性に富んだ人だったということだと思います。

それから、ここに「**avuncular**」と書いたのは、**avuncular** というのは英語でおじさんみたいなという意味ですけれども、さっき申し上げた日本語のちんぷんかんぷんの訳がずっと続いている間表情を

崩さずニコニコと温かいまなざしを鈴木総理に対して 10 分間ずっと続けて投げかけられるというのは優しいおじさんという感じを非常に与えていたと思うし、優しいおじさんという感じはアメリカ人もみんな思っていたのだと思います。

もう一つ付け加えれば、レーガン大統領のスピーチを聞いた家内から「でも、分かりやすいわよ」と言われた話をしましたが、分かりやすいと思ったのは、うちの家内だけではなかったのだと思います。トランプは別の意味で分かりやすいかもしれないけれども、大分説得力が違うと思います。

ロン・ヤス関係はどうかというと、これは特別だったと思いますね。レーガン大統領の今申し上げたような俳優としての資質とか分かりやすさというのと *avuncular* な温かさみたいなものがあり、さらに中曽根さんがそれをうまく演出されたのだと思います。中曽根さんも *sense of drama* があったのだと思います。それで非常に温かい感じを与える関係を築き上げたということだと思います。

ロン・ヤス関係と言われますけれども、それでは、ほかの私が見た首脳間の誰かの関係を思い出すかと言われると、私は強いて言えば大平・カーターだと思います。だいぶ違う意味ですけどね。これもこの前申し上げたと思いますけれども、1979 年の大平・カーター会談というのは非常に温かい雰囲気のものだった。私が思うには 2 人ともクリスチャンということもあったのではないかとこのことを申し上げましたけれども、そのときはかなりいい雰囲気だったなという感じがします。でも、「大平・カーター」とは言いますけれども、「正芳・ジミー」とは言いませんね。だから、それはその人柄にもよるのだと思います。カーターもあまりそういうジミーという感じじゃないですからね。

以上が 2 人についての印象です。

その次に、首脳会談なのですが、いいですか、御質問あったらどうぞ、今までのところで。

—— 中曽根総理は非常に勉強家で準備をされていた、安全保障の問題に特にお詳しかったと思うのですが、大使から御覧になってこの分野は少し苦手だったのではないかというのをお感じになったことはありますか。

沼田 あまり僕も接触はなかったから、特にそれは感じなかったですね。よく勉強されていたという感じですね。

—— 経済の問題とかはどうでしたか。

沼田 経済って、このときは市場開放問題ですからね。私もその前に経済局に 2 年いて、この問題をずっとやっていたときも、中曽根さんは当時かなりリーダーシップをとられているわけですよ。藤崎大使の先ほど申し上げた『三田評論』の記事の中でもそれが出てきますけれども、そういう意味でのリーダーシップはとられていたと思います。福田総理と比べて金融についての知識はどうだったとか、各論を見ればそれはいろいろ違う面があったと思いますが、特に経済が苦手という感じはしなかったですね。通産大臣をやっておられるでしょう。だから、常識は持っておられたのだと思いますね。

—— 北米一課長として中曽根総理とはそこまで接触がなかったとおっしゃっていましたが、日々の実務はどういう形で処理されていたのでしょうか。局長に上げて局長が総理に会うことが多かったのですか。

沼田 総理に会う機会が多いのは次官でした。次官が定例で総理にブリーフに行っていましたね。今

の次官だって頻繁に総理にブリーフしているでしょう。だから、総理との実際の接点が多いのは次官なのです。北米局長が行くこともありますけれども。

課長としての私の接点は秘書官ですね。長谷川和年秘書官（のちのオーストラリア大使）が長かったけれども。それは、たとえば総理訪米の日程をどうするかというような話からスピーチの原稿を作ることまで、秘書官と打ち合わせることはしょっちゅうありました。

私の中曽根総理との接点がそれほどなかったというのは、私の場合に特殊事情があつて、総理の通訳を 10 年間やっていたものですから、たとえば大平総理とか三木総理とか、宮澤さんは外務大臣のときだけれども、実際の首脳会談の場なんかも含めて、かなりその接触が多かったです。中曽根さんのときはもう課長になっていましたから、そういうことはあまりない。かなり離れたところから見ているということなので、その違いがあります。

—— そうすると、直属の上司に当たる局長とも相談されたり、次官とも相談されたりするけれども、詰めの段階では省内というよりは秘書官とやりとりすることが多かったということですか。

沼田 そうでもないですね。秘書官とのやりとりというのは、僕の思い出すのは、後でカナダのところで出てきますけれども、スピーチをやられる場合の原稿をどうするかとか、それからロジスティクスの問題が多いですよ。日程をどうするかとかね。北米一課長というのはものすごく雑務が多いのです、庶務課長みたいなもので。庶務課長と言うとあまり偉くなさそうだけれども。「The devil is in the details」というか、それを間違えるとひどい目に遭いますから、そういう意味で気を遣うことは多かったのですけれども。あまり大所高所の話ではなかったですね。

—— 今日のお話の本筋とはずれてしまうのですが、大使もウィリアムズバーグ・サミットには参加というか、同行されていた。ここではどんな業務を担われていたのですか。

沼田 これは要するに GATT の関係ですよ。市場開放で私がやっていた部分もあるし、GATT 閣僚会議をどうするか、GATT の新ラウンドをどうするかというようなことがコミュニケにどう書かれるとか、そういう種類のことで、私にとってウィリアムズバーグ・サミットは割合暇なサミットでした。サミットは全部で 10 何回行きましたが。

—— この写真の件はやはりかなり印象に残られましたか。

沼田 それはオブザーバーとして見ていて非常に印象に残っています。中曽根総理の息子さんが「あっ、出てきちゃった」と言っておられたのを非常によく覚えています。

—— 写真のときは、見ている方々全体がざわつとしたような、そういった感じ。

沼田 おおっという感じでしたね、確かに。周りが何となくそういう感じだった。

■ 日米首脳会談

—— では、次の質問に。この時期の日米首脳会談では、主要議題が安全保障から経済へと移ってい

たように思います。中曽根・レーガン首脳会談について、北米第一課として重視していたことやご苦労したことをお聞かせください。

沼田 この時期、日米首脳会談で僕が関わったのはここに書いてある 3 回ですね。

焦点が安全保障から経済に移ったというのはまさにそのとおりなのです。僕は北米一課長になったのが 8 月で、最初に経験したのが 10 月の 24 日か 25 日か特定できないのだけれども、ニューヨークの国連総会で会われたのです。このときはたしか Waldorf Astoria Hotel のレーガン大統領が泊まっているところに中曽根総理が行かれて会談されたというのが僕の記憶です。このときは、ほとんどが貿易・経済問題だった。この準備の段階で、それこそ長谷川秘書官と北米局でいろいろ話しているときに、日米経済問題がいろいろもめていて、ぎりぎり頼れるのはレーガンだなというような感じがありました。

このときは SDI の問題も既があり、米ソ関係とかいろいろ我々の頭にはあったのですが、結果的にはほとんどが経済問題でした。いろいろな話がありましたけれども、要するにレーガンは保護主義と断固闘うということを言って、中曽根総理は石炭の問題とか AP、Action Program です、市場開放のアクションプログラムというのを出されていたから、それを具体化する法案をつくっているとか、非ドル通貨の上昇傾向を歓迎するといったことに触れた。シュルツ国務長官が、日本の貯蓄投資バランスの是正努力を多とするとか、G5 のフォローアップが必要であるとか、日本の援助分野での貢献を評価すると言っている。シュルツは国務長官だけど随分経済問題をやっていますよね。あの人は経済に強いから。

中曽根さんが、日本経済の体質改善、構造面での調整につき検討する研究会（Advisory Group）を発足させて 3 月までに報告させると言っているのは、いわゆる「前川レポート」の話ですよ。アメリカには、財政赤字、貿易赤字への取り組み、輸出努力を期待する。それから、いわゆる MOSS という、これは後のほうに出てくるけれども、「Market-Oriented Sector-Selective Discussions」だったかな、電気通信、エレクトロニクス、医薬品・医療機器、林産物などについて協議をしていると。これは、シュルツ国務長官と安倍外務大臣が相当絡んでいたということで、特に木材の関税ということが問題になっていた。それから、いわゆる 301 条との関係で皮革の問題があった。皮は日本の国内で大変ですよ。それから、テレコミなんか問題になっていた。中曽根総理のほうから東京サミットⅡ、第 2 回の東京サミットの話がされた。

安全保障については、中曽根総理のほうから防衛問題について中期防衛 5 年計画の話がされて、NLP（夜間着艦訓練）は一生懸命やっていると言っている。あと朝鮮半島の話が出た。そのようなことですね。安全保障というのは結局この最後の部分だけですから、ほとんどが経済問題だったという感じになります。

次に会われるのは 86 年 4 月 14 日のキャンプ・デイヴィッドですけれども、その前の 3 月 25 日に松永信雄大使が東京に帰っておられたのかな。それで、中曽根総理にブリーフをされたときの話がここにあります。松永大使のほうから 4 月いっぱいグラム・ラドマンの財政均衡法（Grumm-Rudman Balanced Budget Act）とか税制改革というので議会は忙しいが、5 月になると貿易問題に焦点が移ってくる。これは中間選挙の争点になるだろう。何が問題かという農産物の問題、石油の問題、為替差益の問題。シュルツは、石油価格下落で最大の利益を享受するのは日本だと言っていると。そこで、内需振興とか貯蓄とかいう問題が出てきて、前川レポートに大きな関心が寄せられると。そこで、貿易不均衡是正のための国家目標をどうするのかとか内需振興の具体策はどうするのかとか、石油とか為替差益についてはどうするのかというようなことに関心が寄せられるだろうというブリーフィングがされたのです。

86年4月14日、これはキャンプ・デイヴィッドに行かれて会談をされて、中曽根総理が前川報告というのはあらゆる努力を集中して実行していく。これはいわば100年ぶりの整形外科手術であって、エベレスト以上の苦しい登山であるということを言われました。航空の問題も総理はちょっと出されました。これは後で触れますけれども、日本貨物航空の話も、もう日本はカードを全部出してしまったのでアメリカも何か出してくださいという話をされた。

あと、米ソの問題がちょっと出て、米ソの第2回会談がぜひ成功することを願っていると。ここにワインバーガーが同席していて、NLPの話と池子の住宅の話を出して、このとき、確かワインバーガーだったと思うのですけれども、韓国、日本、フィリピン、タイ、オーストラリアとの関係は互いに結びつきが強い（interlocked）と言った。安全保障の面でということですね。その関連でフィリピンの援助の話が、これは誰が出したのか、僕のメモでははっきりしませんが、出てきた。フィリピン援助の話はまた後で触れます。

それから、シュルツがニュージーランドのロンギ（David Lange）首相のことを気にしていると。これも後で触れます。実は、核問題について難しい質問をいただいたのですが、私がこの時期に核問題に関わったのはニュージーランドの関連だけなのです。それから、ベイカー（Jim Baker）財務長官が、保護主義が「back in full force in Congress」、議会に保護主義が戻ってきてしまったと。中間選挙の大きな争点になるだろうということを言っています。

私が経験した3回目の首脳会談は、1986年5月3日の東京サミットのときのレーガンとの会談で、このときには中曽根総理から構造改革については閣僚会議で正式実行プログラムをつくった、political determinationをもってやっていく、円・ドルのレートを見るとこの6カ月で40%アップしている、市場に任せていくと。

それからMOSSですね、さっきのMarket-Oriented Sector-Selective Discussionsについては、通産省、それから運輸省が関係していて、自動車の部品を何とかしろということを言っている。これは中小企業に影響するので、それがセンシティブであると。それから、G7の蔵相会議を創設しようと。でも、G5は事実上続けていくということを言っていますね。ベイカーが為替介入についてはregular meetingをやっていこうと言いました。

あと、このときにサミットで問題になっていたのはリビアのテロの話ですね。アキレ・ラウロ号（Achille Lauro）だったかな、いろいろなテロ事件があって、それをリビア政府が裏で応援しているのではないかという話があって、ついにアメリカが86年4月にリビアを爆撃したのです。そのときのリビアに対しての非難みたいなのをサミットの宣言でどうするかというのが非常に問題になっていて、そのときに中曽根総理は、アメリカが爆撃したという行動については十分理解しており、同情すると言っている。このときのサミット宣言をどうするかというのはいろいろ問題になっていて、たしかサッチャーが案を出したのですが、その案の中身は調べただけけれども、ちょっと出てきていないです。サッチャーのことだから相当強硬なことを入れようとしたのだと思います。

宣言自体を見ると、リビアとは書いていますね。首脳が宣言をどうするともめていたときですから、微妙なバランスの下に成り立っているので宣言のドラフトはそのままにしよう、他方、アメリカが措置をとらざるを得ないこと、さっきの爆撃については同情の念をもって受け止めているということを総理が言われました。

それからチェルノブイリ（Chernobyl）の事故は時期は86年だったかな（86年4月26日）。これは、IAEAの制度の欠陥を露呈しており、緊急時の通報、事後報告、情報公開、国際協調などが必要であるということを総理が言われた。

首脳会談で私が経験したのは、以上3つです。そこまで何か御質問ありますか。

—— こういうふうに経済の問題がたくさん議題に入ってくる場合には、大蔵省とか通産省の人も会談に入るといえることですか。

沼田 入っていますね。このときに個別会談と全体会談と両方あったと思うのですね。当時の記憶が定かでないのだけれども、個別会談をキャンプ・デイヴィッドでやって、その後ワシントンに戻ってきて全体会談をやったのではないかな。僕はこのときキャンプ・デイヴィッドに行った記憶がないのです。でも、会談のメモがあるから全体会談だったのかな。少数で個別会談をやったのではないかなと思うのですけれども。全体会談のときには各省が入ります。だから、当時でいえば大蔵省、通産省、農水省なんかも入っているのではないかな。援助の問題もあるから経企庁も入っているのかな。そろい踏みするわけです。

■ 70～80 年代のサミット

—— サミットに随分たくさん出られたと思うのですけれども、肥大化していったのはいつごろからという印象をお持ちでしょうか。私は、ドイツへの専門調査員として 99 年のケルンサミットで、端っこのほうで何かこう、こそこそしていたのですけれども、もうホテルを借り切って何百人と東京から乗り込んでくるのです。

沼田 サミットの話は、僕はランブイエから始まったわけです。ランブイエは 75 年か 74 年かどっちだったか。

—— 75 年です。

沼田 あのときは、本当にランブイエの小さなお城の中でやって、お城のらせん階段みたいのを上がったたり下がったりしていたら足にまめができたのと御飯が食べられなかったという記憶で、当時は代表団の人数が少なかったですよ。ランブイエが 75 年でしょう。76 年は。

—— サンファンですね、プエルトリコ。

沼田 それは行ってない。それから、ロンドンはいつだったっけ。

—— 77 年。ロンドン、ボン、東京。

沼田 ロンドンのときは、僕はコミュニケの翻訳班長だった。だから、一生懸命翻訳していました。78 年がボンですね。このあたりから代表団の人数もかなり多くなっていたな。それから、79 年が東京。これはこの前お話ししたと思うけれども、東京に一時帰国して出ていますね。80 年がモンテベロ？

—— ベニスです。

沼田 ベニスは行ってない。

—— ベニス、オタワ。

沼田 ベニスの次の 80 年はオタワというかケベックにあるモンテベロ、これに私は行っています。

—— ベルサイユでしたか、82 年は。

沼田 82 年ベルサイユは、私はサミットの担当官でした。サミット担当調査官というのをやっていて、要するにサブサブシェルパだった。やたらに徹夜した覚えがあります。

—— その頃からサブサブシェルパはあったんですか。

沼田 ありました。僕の前の年は、イスラエル大使をやった茂田宏さんがやったのかな。その前は誰だったかな。サブサブシェルパというのはありましたよ。僕の頃からありました。

—— イギリスとかアメリカの文書を見ていると「スーシェルパ」(sou-sherpa)と書いてあるのですが。

沼田 フランス語でいえば僕はスースーシェルパ (sou-sou-sherpa) ですね。当時のサブシェルパは経済局の遠藤実参事官 (のちのジュネーブ代表部大使) です。その下に調査官とかいう名目で、課長級だけれども、一番こき使われるのが僕の役割。僕は 82 年については、82 年の 3 月にワシントンから帰って、それでベルサイユ・サミットまでサミット担当調査官というのをやってこき使われて、それで国際機関第一課長になりました。やたらに忙しかったという記憶はあるけれども、中身はあまり覚えていない。とにかく徹夜が続きました。

—— 86 年東京サミットのときにリビアの問題が出てきたというお話で、ちょうど私がこの前見ていた史料がこのあたりのことだったんです。大使がおっしゃるとおり、リビアの問題でかなりもめていたのですけれども、こういうときというのは外務省ではどういった方がこの問題の担当になったのでしょうか。

沼田 リビアは誰だったかな。中近東局だけではなくってしまうのですよね。

—— 中近東局がこのリビアのことに声明で触れるのに、ものすごく強硬に反対して、恐らくそれを押し切って日本が。

沼田 そうそう。「リビア」と入っていますよね。サッチャーが何を言ったか、調べられましたか。サッチャー案というのが何だったかというのを。

—— 記憶頼りなんですけれども、サッチャー案はかなりアメリカ寄りだったような。

沼田 アメリカよりも強硬だったのではないかな。

—— 空爆して当然みたいな感じの案で。

沼田 うん、そうだろうと思う、サッチャーのことだから。

—— フランスが激怒して、それはそれでえらいことになっていた。

沼田 えらくもめていたことは確かなのですけどね。そういうときの調整というのが難しいですね。似たような話というか、またサッチャーが出てくるけど、フォークランドのときの調整も大変だったですね。中南米局と欧亜局というかね。そういう局の間に落ちちゃうような話というのはなかなか省内の調整が大変で、そうすると誰がやるのかと。今は調整をするのは総政局（総合外交政策局）ですよ。そういうこともあって調整する局ができたと考えたほうがいいのかもしいけれど。

—— 当時からもう、政務局長会議はサミットの中にはあったのですか。

沼田 あって、政務局長会議は政務担当外審でしょう、政務局長というのは。

—— ですかね。ただ、下で手足になる人が。

沼田 それが誰かというのが、当時は情報調査局だったのではないかな。そうすると、やはりちょっと違うのですよね。

—— 問題ごとに関係する方々が替わってくるので、日本にとってはサミットで扱う核ですとかテロですとか、そういう問題は結構大変だったのかなという印象が。

沼田 大変だったですよ。だからこそ、総政局がそのうちできたと考えたほうがいいのではないかな。でも、総政局ができたのが、最初が柳井（俊二）さんだから、90年代でしょう。

—— 92年でしたっけ。

—— 93年ですね。

沼田 そういういろいろ苦い経験を経て政務局みたいのができたということだと思いますけどね。

—— チェルノブイリの事故は4月26日ですから。

沼田 割合直前ですね。

—— どのくらいこの事態の大きさの認識があったのですかね。

沼田 どうだったかな。

—— これは省内ではどこが。

沼田 これは原子力課になりますけどね。

—— 数年前に外交記録公開でまとめて出まして、そのときに僕は NHK に出て解説させられたことが。

沼田 あったんですか。

—— もう 3 年くらい前、年末にある外交記録公開ですね。出てすぐに見られる文書の中に、まさに 86 年のサミットで直前にチェルノブイリが起きてどうしようかということで、いろいろ文書が飛び交っている様子はもう既に出てはいました。確かにおっしゃるとおり、原子力課とソ連課と、という感じで、なかなかいろいろ難しかったみたいです。

沼田 そうですよね、調整難しいですね。

—— ただ、一部日本がイニシアティブをとって声明で触れることができたという結論にはなっています。

沼田 だから、サミットの声明問題というのは確かに、当時は情報調査局になっていましたね。でも、オペレーショナルな話だから、企画というかポリシープランニングをやっている情報調査局の仕事でもないのです。サミットの政治宣言自体を担当していたのはたしか情報調査局企画課でした。それで政務担当外審に上げてやっていたのだけれども、政務担当外審も大変だったと思いますよ。

■ 安倍・シュルツ関係、議員交流

—— では、次の質問に進んでよろしいですか。当時は日米首脳会談に加えて、安倍外相とシュルツ国務長官との外相会談やワインバーガー国防長官の来日など、ハイレベルの会合が続きました。また、米国議会指導者の訪日など議員交流もありました。これらの会談・交流の中でご印象に残っていることをお聞かせください。

沼田 安倍・シュルツの出会いは、あと 1 回か 2 回あったかもしれませんが、85 年 9 月 26 日。これは国連総会のときですね、ニューヨークで安倍・シュルツ会談があった。私はこのときは行っていない、局長が行っておられたのかな。85 年だとまだ栗山局長かな。中身は僕のノートにもあまり書いてないけれど、防衛力の 5 か年計画、ODA7 年で倍増計画、日米の援助協力、国連の効率化、米ソ外相会談について今後とも密接に連絡をとっていこうという話があったということですね。

それから 86 年 5 月 3 日、これは東京サミットの一環で安倍・シュルツ会談。まさにテロリズム、リビアの問題についてシュルツのほうから「Important to see what can be done. Not to talk about it」というのは、あまり大っぴらに言わないほうがいいよねという話ですね。ここで安倍さんが「Thatcher amendment」と言ったのは、サッチャーが強硬なことを言っているけれども、どうやって収めようか、頭痛いよという種類の話だったと思います。

それから航空、これは後で触れますけれども、航空の問題は安倍・シュルツで何回も出てきている

のですよね。2 人とも大分それに一生懸命やっておられたので、もう日本は譲るところないよという話をされた。それから、構造対話。構造対話というのは、いわゆる **Structural Impediment Initiative** かな。これは 6 月の選挙の後になるだろうと。

さっき **MOSS** という話がありましたね。**MOSS** というのはセクター・セレクトティブ、セクターごとにやっていく。これは、当時私が見ていた感じで、アメリカがだんだん日本経済の中身自体を問題にできて、最初は個々の分野についてやっていたけれども、そのうち人の懷に手を突っ込んでくるようなことをやってきたという感じがした。それがまさに構造対話ですよね。それを 6 月の選挙の後にやっていこうと。円高については、安倍さんが実勢に従うというのが基本だけれども、同時に安定が重要であると言って、シュルツが同感だったということです。

実は元の質問になかったのですけれども、議員交流というのは北米一課にとって大変頭の痛い問題なのです。特に日本の議員については。

まず、1985 年 8 月 20 日、僕が北米一課長になって 1 週間ぐらい後ですね。このときにドール上院内総務一行が訪日しました。いろいろな議員が来たのですが、このときに安倍大臣との会談でドールがかなりきついことを言っています。僕のノートに「有言不実行は匂いのない花」と書いてあったので、何と言ったのだろうなと思って調べてみたら、「**To utter pleasant words without practicing them is like a pretty flower without fragrance**」というのをドールは実際に言っているのですよね。さらに「**Pressure to decrease US defense spending. Pressure on Japan to increase defense spending considerably beyond what it's spending**」と。だから、議会でそういう圧力が非常に高まっているという話をして、ウィルソン (Charlie Wilson) 議員とかマクフル (James A. McLure) 議員が「**Allies no contribution to the security burden in the Middle East**」、同盟国は中東の安全保障の負担について何ら貢献をしていないということを言っていますね。それから木材関税の引下げの話とか航空機の売り込みの話とかコンピューター・チップスの話などをいろいろな議員がやっていると。

それに対して安倍大臣から、「防衛と経済摩擦は分けて考えるべし。ODA は日本は世界 2 番目である」と。それから、「イラン・イラク戦争についても日本のいわゆる役割があるのではないか」というような話をされています。

それから、このドール議員一行と中曽根総理との会談で、ウィルソン議員が「**Bureaucracy is an impediment**」、経済問題については日本の **bureaucracy** が邪魔になっている。コーエン (William Cohen) 上院議員、軍事委員会ですね、「**Time is running out. Deeds not words**」、言葉じゃなくて実行で示せ。ドールは「**Lots of political pressure**」がかかっている。エヴァンス (Daniel Evans) 議員、ワシントン州だったかな、合板の話。それから **Auto workers**、自動車産業の労働者は非常に今きついで転職を考えている。モイニハン (Daniel Moynihan) 議員も「**We need your help**」というようなことを言っている。だから、かなり厳しく言っていますね。

それに対して総理が、日本は基準認証制度の抜本的な改革をやったり、輸入手続を改善したりしている。木材。チョコレートは何だったか覚えていないけれども、ハイテクなども **pressure groups** からいろいろあって選挙もあって大変だ。でも、自民党より日米関係が大事との精神でやっている。この「基準認証」は私が国際機関一課長のときの話で触れたテーマです。

総理からはドル高の是正の話があった。ドール議員からマンスフィールド大使は「**A national treasure. Keep him as long as he wishes**」と。マンスフィールドさんは民主党ですよね。共和党院内総務のドールがこれを言っているというところに意味があるのです。それから、「**Prime Minister's leadership as demonstrated in the Action Program**」を評価するということを言って総理を持ち上げている。

総理のほうから、これはロシアの問題で、ゴルバチョフはプラグマティストで **strategic** な考えを

持っていると思う、彼らは革命を知らない新世代だ、いわば **New Communist** だ。これは、総理がロシアに行かれたときかな、ゴルバチョフに会おうと思ったけどグロムイコ (**Andrei Gromyko**) が妨害したという話をする。結局会えたのだと思うのですが。核実験禁止などで平和的ジェスチャーもっているみたいだ。あと、ニュージーランドの問題について、安全保障は世界的スケールで考えるべしというやりとりがあった。要するにこのドール一行というのはかなり重要な問題を取り上げていますし、生々しい問題を取り上げているという感じがおわかりいただけるかと思います。

日本からの議員の訪米では二階堂進、このときは自民党副総裁ですね、前の官房長官。85年10月に一行が訪米されて、政府特使ではなく党で行かれたのですけれども、これは私にとっては非常に大変でした。なぜかというと、グレイ社というワシントンにあるPR会社が自民党に話を持って行って、自民党のためのロビイストみたいなことをやるという契約したんです。二階堂議員一行が行かれるに当たってこのグレイ社を使えという話があって、でもこれは大使館の仕事と競合しちゃうわけですね。在米大使館はそれに抵抗していたということもあって、実はグレイ社とどうやっているかという話を僕が自民党本部に行って誰かに説明していたら、突如自民党本部の中で「沼田北米一課長、藤尾政調会長が呼びです」というアナウンスがあって、藤尾正行議員の部屋へ行ってドアを開けたら「辞表を持ってこい」といきなりどなられた(笑声)。グレイ社の邪魔をしたのはけしからんと言われて消耗しましたけどね。それで、飛んで帰って栗山局長に相談して、椎名素夫議員に局長から相談して何とかそこは収めていただきました。そういうロビイストをどうやって使うかというのは難しいですよ。それがもろに出てきちゃいました。

実際にこの議員一行が行かれてどうだったかという、これは誰が言われていたのかよく覚えてないのだけれども、彼らが行って、偉い議員がたくさんいて、米議会で話したけれども、議会の反応がちゃんぽらなんだ。行政府ではブッシュ副大統領、シュルツ國務長官の反応はどうということもなかった。ボルドリッジ (**Malcolm Baldridge**) 商務長官は「あんたたち、何しに来た」という感じだった。USTRのヤイター (**Clayton Yeutter**) は議員たちに憤懣をぶちまけた。要するにあまりうまくいかなかったということです。

その次に書いてある「JETRO 関東軍」というのは、機微にわたる話ですが、JETROの人たちがこの訪問のときにいろいろ暗躍していて、大使館から見て不愉快だったという話です。ちなみにJETROはニューヨークにオフィスがあって、その人が通産省のためによくワシントンでいろいろ動いていたようです。

あとは、民社党の訪米団が85年9月に行って、竹入委員長以下の公明党の訪米団が86年2月～3月。2回ともこれは北米局長が行って、よくブリーフしていますね。訪米の結果についてはあまり僕のメモには出てこないのですけれども。そういう意味で、議員交流というのはありました。どれだけ効果があったかというのはわかりませんが、さっきのドール一行の例から見ていただければわかるように、やっぱり米議会の雰囲気は直接我々が知るという意味では意味があったのだと思うのです。逆の日本からの訪米はどうだったかという、まだ議員交流というのはそれほど熟していないという感じですね。でも、日本の政治家はワシントンに行きたがりますから、大使館はいつも非常に苦労する。

以上です。差し障りのあることを大分言いましたけれども。

—— 今の点で、椎名素夫議員の名前が出てきましたが、外務省から見たときに頼りになる議員というと、やはり椎名議員がこのときから圧倒的だったというようなイメージですか。

沼田 そのとおりです。

—— 逆に、椎名議員以外にこういった件で何か相談ができる方々はいらしたのでしょうか。

沼田 椎名議員のほかは、私自身の頭に名前が出てくるのは、意外に思われるかもしれないけれども、公明党の市川議員ですね。

—— 市川雄一さんですか。

沼田 はい。安保問題について随分理解のある方だった。公明党の議員団は私がワシントンにいたときに来られました。そのとき市川議員が来られていて、有馬参事官なんかとも親しくしておられて、僕は日本に帰ってから何回かお会いしましたがけれども、非常にバランスがとれた方なので助かったということがあります。

あと議員の話をすると、平泉渉先生の話も出てきます。私は退官後も鹿島の顧問としておつきあいがありましたけれども。平泉さんは我々の先輩なのですが、ものすごく頭のいい人で、われわれの現役時代はいろいろ注文をうけたまわりました。

椎名議員はもともと物理専攻、名古屋大学の物理出身で、大変頭の切れる方で、たしか岡崎久彦さんと旧制府立高校で一緒だったのかな。バランスがとれて物事をよく見ておられたし、安保防衛問題について非常によく分かっておられたということで我々が頼りにしていたことは確かです。

議員交流という意味ではここに出てこないですけども、日米の議員の行き来というのを盛んに支援しておられたのが日本国際交流センターの山本正さんです。彼は議員交流を一生懸命やっておられた。彼とも随分協力しました。

—— 安倍外相とのお付き合いというか、印象というのはいかがですか。

沼田 何というか存在感のある方ですよ。よく物も分かっておられたし、シュルツなんかも相当尊敬していたのではないかな。総理候補の一人だったということもありますしね。そういう意味で、政策面の影響力も含めて存在感のある方だったという感じがします。

この前だったかな。僕が安保課長のときの話で、国防会議での大臣の発言についていろいろ話をしたと思いますけれども、ああいうときもかなり影響力のある話をされていましたから。その安倍大臣の次の大臣は、僕が北米一課長の後半に就任された倉成正大臣。大分影響力が違ったのではないかという気がします。

—— 安倍外相は、英語能力はそれなりに。

沼田 あまり英語が得意という感じはしなかったですね。

—— 当時、もう晋三さんが秘書としてついていたと思うのですけれども。

沼田 そうですね。それから、外務省からの秘書官は高野紀元君ね、後の韓国、ドイツ大使。彼は私の1年下ですけども。

—— 安倍・シュルツ会談で日米援助協力の話し合いが出てきたということですけども、これはフ

フィリピンのところでまた出てくると。

沼田 フィリピンはフィリピンでやりますけれども、86年でしょう。日米援助協力の具体的中身は何だったかな。既にもう僕がワシントンにいた頃から中東とかあっちのほうが大事だという話が出てきて、トルコとかパキスタン、そういう話が出てくるでしょう。あの関連で出てきている話だと思えますね。だから、対象はいろいろあったのだろーと思います。

—— パキスタンとかタイとか、そういうところですかね。いわゆる戦略援助と言われるような。

沼田 いろいろな名前がありますけどね。

—— ここで大使が直接日米援助協力の政策立案に関わったということはあまりないですか。

沼田 ないです。北米一課はそこがつらいんです。みんな人の話でしょう。人の話でやらなければいけないからね。アジェンダ・セッティングをして何をやっているかという、次の首脳会談で問題になりそうなこれとこれはというのをまず考えて、それを各局に投げて発言要領を書いてもらって、それをまたエディットして云々という種類の話が多くて、中身に実際絡んでいる話というのはあまりないのですね。援助協力もそういう話です。

—— 援助協力の場合は各地域局、たとえば中近東局なら中近東局のところに話を。

沼田 それもあるけど、経協局ですね、経済協力局政策課とかね。

■ ベルトウェイ内での対日批判の高まり

—— 次の質問で、今、ドール議員の話があったのですけれども、当時の対日非難についてお伺いします。

沼田 対日批判で、実は日本異質論自体については、米議会で経済問題を中心として日本に対して厳しい雰囲気が強まりつつあったのは事実です。さっきのドール一行の発言などを見ていただいても分かるのですけれども。ただ、それがいわゆるジャパンバッシングとして言われるようになったかという、それはもうちょっと後のときだと思うのですね。僕はもうそのときはジュネーブにいたのかな。

これはまたお話しする機会があると思うのですけれども、この前お送りした『Whither Japan-U.S. Alliance』という、僕が2012年にハーバードと東大の学生に英語で講演したものがあつたのですけれども、これで僕がどう思っていたかなと思って年表を見てみたら、僕はずっと日米間の推移を見ていて、「ジャパンバッシング」と書いているのは1988年から1990年ぐらいですね。それがちょうどバブルエコノミーがわあっとはじける前だから、いろいろ異質論が目立っていて、日米間ではStructural Impediment Initiative、構造協議があつた。その中でパパ・ブッシュのときですけれども、カレル・ヴァン・ウォルフレン（Karel van Wolferen）の『The Enigma of Japanese Power』（邦題『日本 権力構造の謎』）というのが89年です。そういう形で、ジャパンバッシングが取り上げられるようになったのは、私がやっていたよりもちょっと後だと思います。

ただ、経済問題について議会を中心として批判が高まっていたということは事実です。それが答えなのですけれども、86年5月に、ワシントンの大使館でコンサルタントみたいにして話をしていたビル・ワッツ（Bill Watts）という人がいます。Potomac Associates というコンサルタント会社代表で元国務省の人でした。彼と僕が話したときの要点をここに書いてあるのですが、彼がやったアメリカの対日世論についての調査ですね。

ポジティブな面というのは、アメリカ人が好印象を持っている国のリストの中に日本が **first non-Anglo-Saxon country** として出てきた。「After Canada and Australia」ということを言っていますね。どういう人の間で評判がいいかというと、「**Businessman, college-educated and the young**」ということ言っている。それから、日本のイメージがソフトになってきたと。**Softening of the image**。それは日本食とかファッション、要するにクールジャパンですね。ロン・ヤスの影響。アジアのリーダーというのを見ると、ほかはマルコスであり全斗煥であり、鄧小平であり、スハルトである。それに比べて中曽根さんはロン、ロナルド・レーガンとも仲よくやっているしということでイメージが大分固定しているのではないかといい言っていましたね。

それから、このときに『東京新聞』が全米の知事を対象に世論調査をしたみたいですが、その中で40州の知事が日本についてポジティブで、日本からの投資をウェルカムすると言っていたというのがポジティブな話。ネガティブな話というのは、「**Breakdown between Executive and Legislative Branches**」。行政府について見れば中曽根さんはいろいろ努力しているとか輸入を増やそうとしているとかいう意識があるけれども、一方、議会のほうは「**Very real skepticism**」がある。前川レポートというのもコミットメントではないと見られている。

それから、「**Beltway syndrome**」という言葉は御存じですか。ベルトウェイというのはワシントン市を一周する環状道路があるのですよね。東京でいうと…、東京ベルトウェイは全部回っていないか。環状何とか線。その中にいる人たちというのはどういう人たちかというと、要するに議員であり大学教授であり官僚。そういう人たちは自分たちが全米の中心だと思っているからいろいろ発言するし、ベルトウェイの中にいる人たちの考えというのは、「**More skeptical than the nation at large**」。アメリカ全土に比べてももっと懐疑的になりがちであると。だから、「**The squeaky wheel gets the grease**」というのは、騒いでいる人がどうしても注目を浴びるから、ベルトウェイ内でたとえば議員の人なんか騒ぐと、あるいはマスコミが騒ぐと、それにみんな関心が向くことになっちゃうということ言っています。

それから、保護貿易法案については **Conferences**、両院協議会をずっとやっていく。「**Perception that every administration has been weak on trade policy and suckered by persuasive foreigners**」。今までのアメリカの政府というのは外国にいいようにやられちゃっている、外国人の餌になっているというのがまさに今トランプが言っていることですけれども、こういう意識というのがあるのだということ。何が大事かというと、「**Do everything you can to feed the American press corps**」、アメリカのメディアにきちっとアプローチしていくことが大事だということ言っていました。だから、日本に対する批判はかなりあったということは確かだし、議会の中心、ベルトウェイの中ではそういうのがあったけれども、全米、アメリカ本土でもそういうわけでもなかったということですが、それが何年かたつとジャパンバッシングと言われるようなことになってきたというのがこの時代の状況だと思います。

今のところ、御質問ありますか。

—— エズラ・ヴォーゲル（Ezra Vogel）が『Japan as Number One』を書いたのが79年で、82年に通産省のことを書いたチャルマーズ・ジョンソン（Chalmers Johnson）の『MITI and the Japanese

Miracle』が出ていますよね。多分彼らはポジティブな意味で書いているのですけれども、日本に注目が……。

沼田 チャルマーズ・ジョンソンはそうでもない？

—— そうですね。

沼田 エズラ・ヴォーゲルはそうだけど。

—— カレル・ヴァン・ウォルフレンが『FOREIGN AFFAIRS』に「Japan problem」という論文を書いているのも 86 年ですね。

沼田 86 年ですね。『Enigma of Japanese Power』というのが 89 年です。

—— 89 年までいくと、かなり激しい感じだったような気がしますね。それがちょっと前からだんだんと何かあるという感じがあって。

1 点お伺いしたいのは、今から振り返って大きな流れとしてレーガニズムとかサッチャーリズムの新自由主義みたいな、市場に任せるのがいいのだという、グローバリゼーションと重なっている流れがあったと思うのです。当時のアメリカの日本への攻撃というか、ものすごく日本を変えようとする圧力が加わったわけじゃないですか。たとえば日米構造協議で大店法を改正することになって、今あるような郊外型のモールとかががんがん建ち始めるという前提をつくったのはあの時代だったと思うんですよね。それまでは、パパママショップは守らなければいけないという議員さんたちがいっぱいいたと思うのですけれども、このあたりで吹き飛んでしまったなという記憶を私は持っているのです。

ただ、日本では、これはむしろ貿易不均衡を是正するためという理屈で受けていたのですけれども、日米の間に入られていて、世界的な流れとどの程度つながっている感じがしていましたでしょうか。

沼田 そこまで考えていたわけではないけれども、私は北米局で課長をやる前にちょっと、2 年間だけ経済局にいたものですから、あのときは相当プレッシャーを感じていました。金属バットの話はしましたけれども、いわゆる市場開放圧力というのが出てきて、そのときは貿易不均衡是正の話だったわけですよね。それがだんだんそれだけではなくて、もっと各セクターごとにあれやれ、これやれと言ってどんどん注文つけてきて、さらには日本経済の構造自体を何とか変えろとなってきた。要するに人の家に入ってきて家具の置き方を変えろというような話ですよね。僕はどこかで「They ask us to rearrange our furniture」と言いましたけれども、だんだんそういう感じになってきた。それが世界の趨勢とどう絡まっていたのかな。

その中で、大統領のリーダーシップというのはどういうことかということ、レーガン大統領のときは、前から言っていたことの繰り返しになりますけれども、貿易と経済がリンクするのをなるべく避けようとしていた。ブッシュ（父）になってからその辺が危なくなっちゃった。それは日本でバブルがわあっと盛んになって、あまりに傲慢になったのかな、ということもあると思うのですけどね。

—— ただし、それはどっちがどっちか、私の中ではよく分かってなくて、ものすごく開放圧力と内需拡大圧力がかった結果がバブルだったのではないかという気もしているのですけれども。

沼田 そうかな、どうだろう。

—— どうなのでしょう。

—— 大使は、ワシントンにおられた頃に議会にずっと足しげく通われて、いろいろな情報を入手したり請求したりされたと思うのです。日本に戻ってきて北米一課の課長になられて、先ほどのドール議員一行の話もありますが、議員の日本に対する見方が厳しくなっているなというのは肌にも感じられましたか。

沼田 はい。でも、僕がワシントンにいる頃からその前兆はかなりありましたけどね。

—— それがどんどん大きくなっているなというような。

沼田 そういう感じがしましたね。

—— 議会の情報というのは、電報とかで北米一課には伝わってきていたものなのでしょうか。

沼田 来ていますよ。もうこのときには議会担当参事官は、今井参事官が赴任したのが 86 年かな。だから、それは来ていますよね、その頃には。

—— 北米一課の課長としてはどんどん歯止めが利かなくなっているなとお感じになられていたと。

沼田 北米一課としては必ずしもコントロールできない。経済の問題として来るものだから、そこはなかなか難しいですよ。

■ 米国との歴史認識問題

—— 米国との個別問題についてですが、最初に中曽根総理による靖国の公式参拝が 1985 年 8 月でした。それが中国と韓国との関係で外交問題に発展しましたがけれども、この問題をめぐって米国との間では何かやりとりはございましたか。

沼田 いや、僕の記憶にないですね。これはちょうど北米一課長になったときだけど、ないな。特にアメリカとの間で何かあったかな。何かやっていたら記憶にあるはずなのですけどね。ノートにもないしメモにもないから、なかったのだと思います。

—— 歴史認識に関するような問題でアメリカとの間で何かやりとりがあったという記憶はございますか。

沼田 歴史認識については何かあったかな。ないですね。僕が北米一課長をやっていた 1 年間についてはないな。特に思い出せないから。

—— この時期、第二次大戦のことについてアメリカ側といろいろ話したり、何か問題になったりするようなことは。

沼田 その頃はないですね。遡れば 75 年の昭和天皇の御訪米のときのホワイトハウスのスピーチも「私が深く悲しみとするあの戦争」というお言葉の英語を僕は考えた。あれはある意味では歴史問題で、あのときにちょっと話題になったということはあるのですが、80 年代のこの時期、その後、僕がワシントンにいたときも特にはないですね。

この前この話しましたか。なぜそうなのかということを考えると、いわゆる歴史認識の問題が中国、韓国を中心に大きく出てきたわけですが、それが日本政府の立場として深く反省するとかお詫びとかいう方向に物事が進んでいったのは、90 年代の初めから 90 年代の半ばまでなのですね、それ以降ずっと続いていますけれども。なぜそうなったのかなということを考えると、私自身は、まだ昭和天皇が生きておられたということが随分大きいのではないかと思います。昭和天皇が亡くなったことを一つのきっかけとして、いろいろ皆さんが物を言うようになったということがあるのではないかな。それは、私が 91 年に海部総理について東南アジアを回ったときに、「contrition」という言葉を使いましたが、あのあたりですね。それから、慰安婦問題がわあっと出てきたでしょう。それから、教科書問題というのが 80 年代にもあったけど、アメリカとの間であまり問題になった記憶はない。教科書問題は 80 年代にたしかありましたよね。

—— 82 年と 86 年に。

沼田 そうですね。でも、それがアメリカとの間で問題になったという記憶はない。それがその後、中国、韓国だけではなくて、捕虜の問題を契機としてイギリスでも大きく問題になってきた。僕はオーストラリアに 89 年～91 年いましたが、あのときも、オーストラリアも捕虜はもちろんだだけども、あまり問題になったという記憶はないですね。

岩間さんはカウラ（Cowra）を御存知？カウラに日本人の捕虜の収容所があった。

—— 聞いたことないです。

沼田 ニューサウスウェールズですけどね、キャンベラから 2 時間ぐらい行ったところ。捕虜の脱走事件があって、そこに僕は行ったことがあります、あまり問題になったことはない、やはりこれは 90 年代の問題だと思います。

それは何でそういう流れになったかというと、繰り返しになりますけれども、2 つあるかな。1 つは、自民党の一党支配というのがおかしくなってきたということがあるし、それで日本の政治の左右の対立という構図が崩れて来たということがある。現に 94 年には社会党の村山富市さんが首相になったわけでしょう。その間に細川護熙さんが出てきたりしてね。日本の政治自体が大分変わって、昔からの保守・革新、左右の対立というのが大分変わってきた。さらにもう 1 つ、89 年に昭和天皇が亡くなったことによって、もっとずっと前に考えておかなければいけなかった問題を考えるようになったということがあるのではないかと思います。

■ 「知的水準」発言問題

—— では、続いて 2 番の質問に進みたいと思います。

86 年 9 月のいわゆる「知的水準」発言について米国との間でどのようなやりとりがありましたか。

沼田 これ、申しわけないのだけど、スライドに書いてあるでしょう、「沼田入院・治療、9 月 9 日～10 月 28 日」。このとき、僕は実は網膜剥離の大手術を受けました。それで 2 カ月間本当にずっと、大手術して入院してその後リハビリをやっていたものですから休んでいました。ちょうどその時期に当たっちゃったものだから、当時入院していても当時の荒木喜代志首席事務官（のちのトルコ大使）が時々報告に来てくれて、そのときにこの話は聞いていたと思うけれども、直接にはやっていなかったの。

ここにももとの中曽根さんの発言がある。「日本は高学歴社会になってインテリジェンス・ソサエティーになっているが、アメリカは平均点から見たら黒人とかプエルトリコとかメキシカンとか、そういうのが相当おって非常にまだ低い」というような発言。それがわあっと騒ぎになって、9 月 24 日に、これは真意ではない、*out of context* に取り上げられたという種類のことを言われて、さらにまだ騒がれたので「心からおわびします」ということを言われたというところまでは僕は入院していた。

僕自身が直接聞いていたのは、その次に出てくる 11 月 5 日、ガストン・シグール国務次官補の話ですね。彼はジョージ・ワシントン大学の教授をやっていて、レーガン政権のこの時期には国務次官補をやっていたのですが、シグール次官補が日本にやってきて藤井北米局長と話しているときに、藤井北米局長が、中曽根さんの知的水準発言というのは *out of context* で取り上げられて問題になったけれども、すぐそれは訂正したということを言って、その上で「*Counterproductive to connect demands of black community to PM's statement*」、それをやると「*incites antipathy*」、反感を煽ることになるから、黒人社会の *demands* というのと結びつけてほしくないということを言ったわけですね。

それに対してシグール国務次官補は、「*It's not a national stir*」、全国的に騒いでいるわけじゃない。

「*Minorities leaders put the worst possible interpretation*」、マイノリティーズのリーダー、黒人社会のリーダーなんかが最悪の解釈をしている。「*Get responsible Japanese to speak out in positive terms*」、責任ある日本人からもっと積極的に発言してほしい。「*At some point for Prime Minister to give a positive assessment of American society*」、どこかで総理がアメリカ社会についての積極的な評価を発言してもらうといいのではないか。「*Work through some of the recognized leaders (Ex. Andy Young) of the black community*」、ブラックコミュニティのリーダーとして評判が確立している Andy Young なんかに話してもらうといいのではないか。でも、難しい問題なので慎重に、「*Very tricky. Careful (Ex. Jesse Jackson)*」。ジェシー・ジャクソン (Jesse Jackson) は何を言うか分からないから気をつけろということですよ。それから、「*Missions to Japan counterproductive*」、要するに藤井局長から黒人のリーダーのミッションを日本に派遣したらどうかというような話もあったので、「それは *counterproductive* だと思う」というやりとり。これだけです、私が直接関わったのは。

ただ、報道官のとき、あるいは副報道官のときの経験で、日本の政治家にしてもビジネスマンにしても、いわゆる内輪の集まりで心を許してしゃべっちゃったことがすぐ世界を駆け巡るという意識がない人が非常に多いのですね。これはむしろメディアとの関係の話ですけれども、外国のプレスがいるときには何がオン・ザ・レコードで、何がオフ・ザ・レコードで、何がバックグラウンドということを本当にきちんと仕分けしてしゃべらないと、とにかくニュースは瞬く間に回ります。そこから何が起こるか分からないということで、やけどする人はたくさんいるのですね。今はもっと難しいですよ、だって IC レコーダーとかスマホがあるからね。音源をみんなとっちゃうわけでしょう。逃げ

ようがないわけ。だから、ますます皆さん気をつけてほしいなということを感じています。さすがの中曽根さんもこれは不用意だったなと感じます。

宮澤総理のときに僕は副報道官だったけど、アメリカ人の *work ethic* の話を発言されて問題になったということがあった。これは英正道報道官が就任されたばかりで、2人で一生懸命訂正の *statement* を作って、アメリカのニュースに載る前にそれを間に合わせようとして苦労したということがありませんけれども、こういう問題というのは時々起きますよ。

—— この知的水準発言問題ではないのですけれども、大使が相当長期間の入院になったわけですね。こういう場合は、執務はどういう形になるのでしょうか。首席事務官の方が代わりにやるとか。

沼田 そうです。これは首席事務官にやってもらいました。荒木大使、彼はスリランカ大使、それからトルコ大使をやったのですけれども、非常にしっかりと支えてもらって何とか乗り切ったのです。

—— そういう場合は、中二階の方がある程度手伝ったりというわけではなくて、基本的にはもう課内で完結させるというのが通常なんですね。

沼田 はい、そうです。これ、考えてみると、北米一課の前が安保課ですよ。安保課の前が国際機関一課長でしょう、GATT 課長。だから、めちゃくちゃに忙しいポストを2つやって、それから北米一課に来たから相当くたびれていたのだろーと思います。

—— それは結構急にというか、網膜剥離であればある程度予兆とがあるのではないかと。

沼田 いやいや、予兆は1週間。網膜剥離の話をしていいですか。

網膜剥離というのは、目の中に蚊が飛び始めます。飛蚊症と言って、目の中に蚊が飛び始めて何かおかしいなと思って、それで片目つぶってみたら片方の目、右目ですけれども、半分しか見えていないことが分かった。それで、外務省の医務室に行って診てもらったら、何か薬をもらった。1週間診てもらったけれども全然よくならないので、これはもう入院しなければいけないということで、慌てて入院しました。そうしたら、すぐ手術しろと言われて、頭を固定してベッドに寝て待機。そうしたら、そのお医者さんが頼りない人でね。たまたま父親がそれを聞いていたのかな。心配になって、手術の予定があったのを、病院を乗り換えました。それですぐ手術して、それで2か月ぐらい入院していた、そういう話です。皆さん、目には気をつけてください。目の前に蚊が飛び始めたら、これは非常に危険なサインですから（笑声）。

—— 働き盛りで忙しいポストを歴任されているときの御病気だったので大変だったのかなと思います。

沼田 そうですね、今から考えるとね。当時、Eメールはまだなかったし、コピーもはっきりしたコピーではなくて青焼きみたいなコピーで見ていると、見にくいのがずうっとたくさん来るわけでしょう。あれを見たりしていると目によくないのですね。

—— 当時は、一応毎日お家には帰っておられたのですか。

沼田 帰っていましたけど。安保課のときは SDI なんかがあったから、予算委員会のときだと午前 3 時頃まで答弁を作っていて、それで家に帰って 3 時間ぐらい寝て、息子を幼稚園に送って、それから出勤すると。大変でした。あれは国際機関一課か。あの頃は土曜日がたしか休みではなかった。

—— 出張も多かったですか。

沼田 出張は国際機関一課では結構ありましたね。安保課はそんなになかったな。北米一課は総理の訪米とかね。国際機関一課、安保課、北米一課という、かなり痺痛度の高いポストが 3 つ続いたの。

—— 当時 E メールがなかったということで、電報は送るのでしょうか、直接電話でも大使館とやりとりするわけですか。

沼田 時々やりましたけれども、基本的には電報ですね。電報でできないような話は電話でやります。さっきのたとえば二階堂ミッションで藤尾さんにどなられたけどどうしようとか、そういうような話は電報にできないから電話でやりますけれども。

—— アメリカ東海岸の時差は結構大変ですよ。

沼田 そうですね。

—— ヨーロッパだと何とかなるのですが、あそこまで真逆だとどうしようもないですよ。

沼田 そうです。

■ 北米一課の業務

—— 次の質問に進ませていただきます。もう既に少し話が出ていたところでもあるのですが、経済問題についてです。

当時は、MOSS 協議や半導体、あとは為替の問題でプラザ合意、その後に円高局面、さらには内需主導の前川レポート提出など、さまざまな経済問題が懸案になっていたわけですが、この問題に北米一課としてはどのように関わっていらっやったのですか。

沼田 現に首脳会談でこういう問題がずっと取り上げられてきたというのはさっき申し上げたとおりで、そういう首脳会談のところに我々がいたことは確かなのですが、そのサブスタンスは経済局なのですね。これは必ずしも皆さん御存じないのですが、北米局というのは北米一課と北米二課と安保課です。安保課と北米一課は必ずしも一緒にやっているわけではないという話は今日も出てきましたけれども、北米二課は北米局にあって、北米局長にもリポートしますけれども、そのサブスタンスは経済局長の指揮下です。そのサブスタンスが非常に多い。当時の経済局長は國廣道彦さんです。北米二課長は田中均君だけれども、そのサブスタンスについてたとえば北米一課が各省とやり合うとか発言要領を作るとか、そういうことはないわけです。

では北米一課の任務は何かというと、日米二国間の問題は何かというのは考えますけれども、日米

の首脳会談とか外務大臣と国務長官との会談、あるいは議員団との話し合いとかいうときに、何が話題になりそうかという、まず決して日米だけに限られないわけですね。ほかの問題がすごく多いわけですよ。それをどの程度取り上げるかということを考えてアジェンダを設定する。そのとき、もちろんアメリカ側の関心が何であるかということも聞きつつアジェンダを設定して、外務省の中で各局にこの問題について発言要領を書いてくれということを依頼して、出てきた発言要領をとりまとめる。これもただホチキスで留めて間に合えばいいのですけれども、そうもいかない場合があるから、いろいろ注文つけたりするということがある。その上で、発言要領ができればそれで総理なり外務大臣のための勉強会というのをアレンジしていく。

総理の場合には、勉強会というのは各省の幹部が必ずいますから、そういうのをアレンジもするというような雑務が非常に多いですね。だから、今回の首脳会談は経済が中心になるだとか安保が中心になるだとか、あるいは米ソの問題がかなり出てきそうだとかいうことを考えるのですけれども、その場合、突発的なことがいろいろ出てきますよね。リビアの問題が出てきたとか、チェルノブイリを議論しようという提案はアメリカからだったわけけれども、あるいはアフガニスタンが出てくるかもしれないし、フィリピンが出てくるかもしれないし、その時々によって何が出てきそうかということでアンテナを張っておいて、それを処理していくというようなことが多いですね。だから、今も同じことをやっているのではないかな。サブスタンスの面での調整は総政局の役割が随分増えていると思いますけどね。

■ マンスフィールド大使

沼田 それでもう一つここで言いたかったのは、さっきドール上院院内総務の発言の中でマンスフィールド大使のことを「national treasure」と言っていたという話をしましたがけれども、私の北米一課長時代のノートなんかを見ると、マンスフィールド大使が非常によく出てきますね。大使は次官と月に1回お昼を一緒に食べながら懇談していたのですね。かなり具体的な問題を取り上げています。これは日米関係だけに限りませんが、その果たす役割はかなり大きかったと思います。

1つは85年9月19日、国連総会の直前の安倍大臣とマンスフィールド大使の会談ですね。安倍大臣がニューヨークに行かれる直前だからシュルツとの会談を頭に置いてのことだと思うのですが、このときにマンスフィールド大使が言っているのが、MOSSの協議がスピードアップすることを期待すると。それから何が問題かという、「Telecom, Electronics, Pharmaceuticals, Medical devices, Lumber and wood products. Congress hell-bent on protectionist legislation」、議会は何とかして保護主義的な立法をしようとしていると。それはダンフォース（John Danforth）議員がそういうのをやろうとしていて、「President and Shultz determined to stop it, but his position weakening」、大統領も国務長官もこれを何とか止めようとしているけれども、だんだんそのポジションも弱くなっている。Textiles billで拒否権を使ったけれども、このダンフォース案についてはなかなか雲行きがよくないというような話をされていますね。

マンスフィールド大使は上院の院内総務をやっていたから議会のことをよく知っておられるわけで、議会の動きというのをこうやって大臣にもフィードしておられたし、柳谷謙介次官を通じて我々にもフィードしておられたということです。

それから、その次の85年12月23日。これは柳谷・マンスフィールド、月例懇談の一つですがけれども、このときにかなり具体的な問題を話していますね。たとえば、さっき出てきましたけれども、皮の問題というのは一応合意が見られたのですけれども、合意が見られたにもかかわらずアメリカ側

で、どういう措置だったか、よく覚えていないのですけれども、報復措置を定めた法案が通っちゃった。柳谷次官がこれは「large scar」、かなり大きな傷痕を残しちゃったと。同じようなことがタバコとか農産品について起こることが心配だと。先例にしてほしくないと。皮の問題、皆さんも御存じですよ、なぜデリケートかというのは。

それから、マンスフィールド大使は「Textiles bill overridden」、さっきの Veto をしたということを説明して、それから、MOSS 協議については「Telecom は一応終わった。Electronics except semiconductors、半導体がまだ残っている。木材の問題がまだある」。それで、「MOSS は 1 月に安倍・シュルツの間でファイナライズしたい」と。ダンフォース上院議員は Telecom を問題にしており、エヴァンス上院議員、ゴートン (Slade Gorton) 上院議員は「tariffs on lumber and wood products」。パックウッド (Bob Packwood) 上院議員もどうするか。「Congress の中は unease と frustration で confusion だ」と言う。マンスフィールド大使のお話を伺っていると、議会のムードみたいなことについての非常に的確な分析だとかアドバイスが多いですね。それだけ彼のところにきちんとワシントンの議会の人なんかフィードしていたということだと思います。

経済懸案と北米一課ということについては以上です。

—— 直接今の点に関係するわけではないのですけれども、大使と次官の定例の懇談というのは比較的外交史研究者にも知られていると思うのですけれども、この時期の北米一課長の大使館におけるカウンターパートとか、主にやりとりする相手というのはどなたになるのですか。

沼田 これは政務参事官だから誰になるか、ブリア (Bill Breer) ですね。在京大使館は人がたくさんいたので、僕が非常に親しかった人というのはビル・ブリアとかデュセイ・アンダーソンとかね。それから、安保課長のときはプリシラ・クラップ (Priscilla Clapp) という女性がいたけれども、基本的には政務参事官ですね。国務省の日本部長は、フィリピン大使になったトム・ハバード (Tom Hubbard) でした。

—— 外交史料館にマンスフィールドさんと次官の定例の食事会の記録が移ってしまっていて、それだとブリアさんと沼田課長と渡邊参事官。アンダーソンが公使参事官ですね。

沼田 でも、デュセイ・アンダーソンよりはビル・ブリアのほうが。

—— ジュニアです。

沼田 ジュニアですね。じゃ、デュセイ・アンダーソンが次席ですね。

—— そうですね。多分公使参事官。

沼田 Minster-Counselor というのは DCM ですね。デュセイ・アンダーソンが DCM で、ビル・ブリアが政務参事官ですね。

—— 案件があるときとないときによると思うのですけれども、大使館とはどれぐらいの頻度でやりとりしているとか。

沼田 いや、しょっちゅうやっていましたよ。それは、実際に会いにくるかどうかということは別として、電話なんかではしょっちゅうやっていますね。頻度といっても。ただ、そう言いながら、大使館とのやりとりは安保課長のほうが多かったような気がするな。安保課というのは具体的な案件があるでしょう。この訓練をどうするとか、いま、沖縄でこういう問題が起きたらどうするとか、そういう種類の問題が多いのですね。そういう意味ではしょっちゅうやっていた。

それからもう一つは、北米関係というのは外務省の中で船頭がやたらに多いです。関心を持っている人がたくさんいるでしょう。大臣、次官、外審、それから各局の局長とやたらに船頭が多いですからね。その間の調整をしているということもあるから。その中でもたとえば経済問題ということになると北米二課に行くし、防衛問題であれば安保課に行くし、政治問題であれば北米一課というときもありますが、じゃどこまでが北米一課がやるのかという話になる。たとえば米ソ関係というのは今度軍備管理のところで取り上げるけれども、レイキャビクとかの会議というと、これは当初のソ連課ではなくて北米一課に来ますけれども、米ソ軍備管理の中身になると軍縮課に行くとか、方々に散らばっているわけですね。それは悩ましいところでもあるのです。どこまで細かくやるかというのはなかなか難しいから。

—— そこは結構、課長の個性というか、そういうものが出てくるのでしょうか。

沼田 いや、それはインペリアリスティックな課長だといろいろでしょうけれども。個性も出るかもしれないですね。

—— 自動車が入っていないのは、それも属人的なあれなのですか。

沼田 自動車問題。

—— はい。

沼田 さっきどこかにありましたよね。部品があったかな。

—— これも一体として。

沼田 オートモービルはどこかに出てきたな。自動車の自主規制。

—— アメリカの議員の訪日ですかね。

沼田 このときは、自動車はどういう状況だったっけ。

—— この時期は自主規制をしている時期なのですから。

沼田 しているでしょう、もう既に。

—— 年ごとに。

沼田 そうですね。だから、それで自主規制しているということで、首脳レベルでは出てきていないのではないかな。そんな感じですね。

—— 次官と大使の月 1 回のミーティングというのは意見交換という形なのでしょうか。それとも、議題が各局各課から上がってきてこれを話してくださいというような形なのでしょうか。

沼田 いや、それはレギュラーにやっている会合ですから、これでぜひお願いしますということで、もちろん各局から上がってきます。それをもとに次官はやられるわけですから、かなり細かい話をしておられるでしょう。たとえば皮の問題とか MOSS の Telecom の話とか何とか、これはきちんとブリーフしないと次官も大変ですから。SDI の話なんかもやっておられたけど、次官のブリーフはきちっとやる。

次官の総理ブリーフについても全く同じことが言えますね。次官の総理ブリーフというのは、これも毎月だったかな。当時は官房の総務課長がついていったのかな。まだ総政局がない時代ですからね。官房の総務課長がついて行って記録を作って、省内にばらまくと。そんな感じでしたね。今みたいに次官がしょっちゅう行っているとどうしているのかな。記録つくるのが大変でしょうね。

—— あとプラザ合意とかもあったと思うのですけれども、大蔵省の動き、たとえば竹下蔵相がアメリカに行くという情報は外務省に入ってくるのでしょうか。

沼田 入ってきていましたけれども、北米二課の方かな。竹下さんが行かれたのは、航空問題のときに竹下訪米と安倍訪米が重なりました。竹下さんは 86 年の 1 月だったかな。安倍大臣訪米が 86 年 1 月 23 日とある。このとき、たしか竹下さんもこの前後に行っておられますね。竹下さんは航空問題か何か絡んだのかな。あまり記憶が定かじゃないけれども。

ただ、竹下さんの訪米ということになると北米二課になりますよね。それはどこまで大蔵省と北米二課で中身を調整できたかという、これはまたなかなか大変な問題だったと思います。要するに大蔵大臣と財務長官の会談に大使が同席できるか否かという問題がずっとあるわけです。できていない場合が多い。

—— はい。湾岸戦争のときとかですね。

沼田 そうそう。

—— ささいなことかもしれないですけども、竹下蔵相が秘密裏にアメリカに行くときに公用パスポートを出すとかいうことになる、北米一課は通るのでしょうか。

沼田 いや、僕ときはその記憶ないけど。

—— プラザ合意のときには竹下蔵相は、成田でゴルフをしていて、そこから直接秘密裏に空港に…。

沼田 やるかもしれないですね、大蔵省。前の記録を読んで僕は思い出したのは、大平大臣が外務大臣から大蔵大臣になられたでしょう。そのときに大平大蔵大臣が東京にいる外国のプレスとの懇

談をされたときに、私が頼まれて通訳をしていたことがあります。それは大蔵省の通訳は使いたくなかったのか何か知らないけど。何かのサミットのときにも大平大臣の誰かとの会談で僕が入っていたという記録があるみたいだけれども、全然記憶になかったです。

—— そういうのは大蔵省からするとちょっと嫌だなという感じになるのでしょうか。

沼田 それは森田一政務秘書官、大平さんの娘婿の森田さんから直接僕に来ていた話です。

■ 北米一課と安保課、在米大使館政務班と防衛班

—— 経済の問題と並行して、SDI の参加問題も続いていたのですけれども、安保問題について北米局の中で安保課と北米一課との間でどのようなやりとりがあったのでしょうか。

沼田 正直に言ってほとんどないです。それぞれ独立してやっていた、というか、安保課が独立してやっていたということですね。どういうわけかそうなっているのですね。

安保課の問題というのは秘密のことが多いしね。北米一課に話したからばれるというわけではないのだけれども、課の体質としてずっとそうですね。僕の時もそうでしたから。

—— 大使も北米一課長になられたときにはそういうものだというふうに思われて。

沼田 そういうふうに思っていました。

—— これは、でも大使館のほうでは政務班で受けるわけですね。

沼田 そうですね。

—— 何かちょっとおかしいことを聞きますけれども、大使館の中に駐在武官の人もいて、政務班はこの SDI の問題を直接受けているのだと思うのですけれども、そこはラインとしては、混乱は特にないのですか。

沼田 SDI が問題になったときは、僕はもう東京に帰っていたから大使館でどうなっていたかというのはよく分からないのだけれども、防衛班の関与というのはほとんど記憶にないですね。電報としてもあまりなかったのではないかな。今は違うかもしれないですけどね。

—— 違うといっても、並行なわけですね、防衛班と政務班とね。

沼田 そうなのだけれども、並行の中身が随分違うのではないかしら。70 年代の後半から 80 年代の初め、それから 80 年代の半ば頃にかけて日米安保に関する安全保障政策というのは外務省の仕事であり、大使館でいえば政務班の仕事ということが確立していたわけですね。それが、この前も話題になったけれども、防衛技術協力みたいな話になるとかなりテクニカルな話も入ってきて、そこに防衛班というのが出てきて。一方でこの前話した国防報告が出てくると、読んで要点を書くというのは僕

がやらざるを得ない。日米について何を書いてあるかということもあるし、アメリカの核戦略とか何とか、そういう意味からいって何が新しいのとかそういう話になると、それは僕が国防総省に行くのではなくて、国務省の Politico-Military Bureau に行って話を聞いて書いていたから。

—— 国防総省には行かないものなのですか。

沼田 国防総省には直接行きませんでした。国防総省ってあまり大き過ぎて、全体を話せる人がいないでしょう。国防総省が大き過ぎて、「今回の国防報告の要点、何？」なんて言って、全体をしゃべれるのは長官ぐらいしかいないかもしれない。だから、それを一步離れて見ていて話せる人が我々大使館の人間にとって必要なのです。防衛班も必ずしもそういう見方はしていませんからね、全体として。

—— 当時は制服の人は多分 3 人そろっていたと思うのですけれども、内局の方もいらしたのですか。

沼田 いましたよ。内局の方もいましたし、自衛隊から外務省に移籍した森本君も——「君」なんて言っちゃ悪いな、森本大臣ですからね。当時は「君」だけど、彼も来ました。ただ何が問題かという言葉の問題です。処理能力の問題。英語でやらなければいけないわけでしょう。

—— そういうレベルですか。

沼田 だって、アメリカの戦略の話を英語で議論してちゃんと分かるというのは結構大変ですよ。それを時間が限られている中、国防報告でどういう戦略の変化が見られたかというような話をかいつまんでしゃべってもらって理解するというのは、結構これは訓練を要します。防衛班の方々はそういう訓練は受けていないし、防衛省の内局の人も、最近は大分違うと思うけれども、必ずしもそういう訓練を受けていない。ただ、防衛省もだんだんそういう人を育てていますからね。ちょっと話がずれますけれども、防衛次官をやっていた西正典君は僕の東大 ESS の後輩。彼はオックスフォードに留学していたし英語も非常に上手ですから、彼なんかだったらそういう議論をできるだろうけれども、防衛庁にはまだそういう人が育っていなかったわけですよ。もう 30 何年前の話ですから。

—— でも、当時はそういうものだったんですね。

—— 90 年代に入ると、いわゆる安保再定義のプロセスのときに結構、高見沢将林さんの名前が出てきたり。

沼田 彼なんかも留学していますよね。

—— 当時防衛庁ですけども、防衛庁が大分見えてくるというか、そういう印象があるのですけれども。

沼田 高見沢さんは何年ぐらい、年次は？

—— 多分 80 年ぐらいの入省だと思います（78 年入省）。

沼田 僕と 10 何年違うでしょう。彼だって軍縮大使をやっていたのは割合最近まででしょう。西君は何年ぐらい？

—— 西さんは……、高見沢さんの同期なので 78 年ですね。

沼田 78 年、僕の 12 年後でしょう。やはりその差があるのですよね。西さんは東大 ESS の僕の後輩なものだから、オックスフォードの後輩でもあるけれども、よく知っています。だから、そういう人材が何年かたって防衛省でも育ってきたわけですね。僕の時代はまだその前だから、さっき申し上げたようなことになるわけです。

■ 日米航空協定改定交渉

—— では、次の質問 5 番のほうに進めさせていただきます。航空はいくつか話が出ているのですが、日米航空協定改定交渉について強くご記憶に残っている点はございますか。

沼田 航空は、最初にお答えしておきますけど、私は直接にはやっていませんでした。絡んではいたのですけどね。北米一課の主管だけれども、航空が一番直接には北米局の中二階、参事官がやっておられたわけ。だから、私が北米一課のときはのちに侍従長をやられた渡邊允さんです。彼のカウンターパートは、航空局の次長だったと思うのですけど。それとアメリカの運輸省の次官補ぐらいが協議をする体制になっていて、それを僕が時々フォローしていたという感じなので、当事者的な記憶があまりないので不十分かもしれませんが。それから、非常にこれは生身の利害が絡む話で、航空と漁業というのは交渉が本当に大変でした。

という意味で非常に説明しにくいのですが、その中で私が昔のノートを自分でめくってみて理解できる範囲のことをスライドに凝縮しましたので、そういう前提で聞いていただきたい。

私の頃に何が起きたかという、United Airlines (UA) が Pan Am (PA) を買収したということがあります。ユナイテッドが PA を買収したことによって、日米双方の権益拡大、代償をどうするかという話があった。

そもそも日米の航空というのはどうなっていたかという、指定航空企業というのがアメリカに複数あって、それが無制限だった。ルートによって北太平洋はノースウェスト (Northwest)、PA だった。それをユナイテッドが買収したわけです。ルート 2、南太平洋はノースウェストと限定的にコンチネンタル・エアライン (Continental Airline)。ミクロネシアなんかに行くコンチネンタル・エアラインというのもあった。それからシアトル、ポートランドは限定的にユナイテッド。それから、僕のとくに一番問題になったのは貨物専用便。FT というのはフライング・タイガー (Flying Tiger) です。フライング・タイガーというのはもともと軍の輸送をやっていたのかな。ちなみに私は AFS でアメリカに 1960 年に行ったときは氷川丸で、61 年に帰ってきたときはフライング・タイガーで飛んで帰ってきました。フライング・タイガーはずっと貨物専用をやっていて、ものすごく政治的プレッシャーをかけるところなのでね。

日本の方はいろいろ制限がかかっている、Nippon Cargo Airline (日本貨物航空) という会社がニューヨークとサンフランシスコの週 6 往復便だけ持っていた。これが非常に不満だったわけですね。日米の航空について、ずっと言われてきたのが日米の不均衡ということ。アメリカは無制限の以遠権を持っている。アメリカは日本の収益の 2 倍を上げていると。その中に、日航が香港から客を乗せて

成田へ運んでいる分もカウントされちゃっている。アメリカは成田＝香港間はカウントしていない。戦後の日本で航空産業がだんだん育っていくに当たって、それだけの不均衡がずっとあったということで、日本航空の人なんかは、これはけしからんとずっと思ってきたわけですね。そのうち全日空が出てきた。

アメリカが日本の中で飛んでくる地点というのが9つ持っているのに、日本がアメリカに飛んでいく地点というのは4つしか持っていなかった。航空の場合「第5の自由」というのがあって、細かいことは僕も忘れちゃったけれども、第1が **overflight**、第2の自由が **technical landing**、第3が自国から相手国地点へ飛ぶもの、第4が相手国地点から自国へ飛ぶもの、第5の自由というのは相手国地点で客を積みさらに第三国へ飛んでいく運輸権付き以遠権 (**beyond with traffic right**) というので、これはアメリカが行使しているけれども日本は行使していないというような不均衡があった。

その中で日本貨物航空の話になるのですけれども、82年にUAがPAを買収して参入してきたので、その代償としてNCAに関してニューヨーク、サンフランシスコにさっき申し上げた週6便の往復というのが認められたけれども、これにフライング・タイガーが大反対していたというところから始まるわけです。

UAは世界最大の **computer reservation system** を持っているので、PAの太平洋路線を買い取った。そもそも日米の航空協定に指定差し替えの規定はないので、これは認めるとか認められないとかいうことがあったのだけれども、結局PAの指定を撤回してUAの指定を認めた。不平等の是正とか代償をつけるとかいう条件付でやったけれども、そこから先、特にこの貨物便の話をめぐってずっと交渉が続いた。

85年11月13日には、アメリカの運輸省のジェフリー・シェーン (**Jeffrey Shane**) という人ですね、このとき次官補ぐらいだったのかな。運輸省の塩田澄夫さんは航空局の次長だったと思いますが、そのときにNCAが **extra-section**、もっと飛ばしたいということをやったのに対してアメリカ側はこの6回というのは **critical** である、これは譲れないと。なぜかという、マーカウスキー (**Frank Murkowski**) という上院議員のヒアリングの中で「**Why give Japan an opportunity when Japan is doing much better economically?**」という、日本は経済が非常に盛んなのになぜサービスしなければいけないのだというような議論があったからと米側は主張した。

そういう状況の下に、これは安倍大臣が大分絡んでおられるのですけれども、安倍大臣が86年の1月に訪米された。何で訪米されたのかな、航空が主だったのかな。そのときに、MOSSの話もあって行かれたのだけれども、MOSSの話とか林産物についてはうまく交渉がいったのだけれども、このとき、UAがPAの承継をしたということに着目してUAの乗り入れは認めた、だからNCAの増便はちゃんとやれということを書いて引き続き努力していこうということになったと。

その間に、**Doing business talks** というのは輸入手続の簡素化みたいな話。貨物便で運んできたものをどうやって通関手続するかとか、そういうようなこと、それから **CIQ** の執務時間とか、そういうのをもっと時間がかからないようにしろとか、そういう種類の **Doing business talks** というのがあって、これは運輸省だけではなくて大蔵省の関税局が絡んでくる。その話を僕が平野忠邦さん（当時の運輸省航空局の課長）と一緒にやっていました。ワシントンの大使館でも僕は彼と一緒にいたけれども、そういうような話をやっていた。

この航空問題というのは、2月27日には柳谷次官とマンスフィールド大使の間でも取り上げていて、柳谷次官からマンスフィールドに対して、NCAの増便というのは「**important for Prime Minister, Finance Minister, Foreign Minister, and Minister of Transport**」。これは処理を誤ると「**Politically risky and unpopular**」ということを書いておられる。政治的に非常に難しい問題なのだとことを言われた。

86年の4月14日のキャンプ・デイヴィッドの会談において、中曽根総理が経済問題の個別問題で取り上げられた問題だったと藤井局長のブリーフで言っています。先ほどこっちと出てきましたが、中曽根さんは「我々はカードを全部出したんだ」と言った。そのときに安倍・シュルツ会談が別途あって、それには私は出ていないけれども、藤井局長は出ておられたのかな。その会談の50分のうち20分は航空の話をしたということです。外務大臣も国務長官も随分頭を突っ込んでいた。日本が何も持ってこなかったのに3便与えたということではもたないという話で、これはにっちもさっちもいかないねという話。誰も当事者能力ないねというような話があったと。

東京サミットのときには、安倍・シュルツ会談で、安倍さんから「日本は譲るところがなくなった、何とか話が進むことを願う」と言って、その数日後に三塚博運輸大臣が松永大使と話していて、松永さんが「アメリカが100%とるのに対してこちらが25%もらって形をつけたい、アメリカがUAで借りを持っている間に片づける要がある」ということを言われて、6月18日にフライング・タイガーのマーフィーという人が北米局の渡邊参事官のところに来て、渡邊参事官のほうからこれは随分politicizeされてしまったと指摘。フライング・タイガーはNCAを何が何でもブロックしようとしているのか、これは外務大臣も非常に関心を持っている、「Foreign minister is feeling bitter」と渡邊参事官が言いました。このときに渡邊参事官はフライング・タイガーの人に「Foreign Ministerは将来のPrime Minister候補でもある」とも言っています。

というようなことを経て、7月15日にトップ会談というのが、これは三塚さんと向こうの運輸大臣かな、一応落ち着いてNCAが8月15日から2便、10月1日から3便、Doing businessの話はそのまま云々ということで一応話が片づいたということです。僕の記録もあまり定かでないのですけれども、要するに日米間の不均衡というような話があって、貨物便についてフライング・タイガーというのは非常にうるさく言っていて、それに対してNCAが何とか飛ばせろという話を苦労してやって、やっとここまで来たというのがあって、それに日本側では安倍大臣も、アメリカ側ではシュルツ国務長官も相当絡んでいたという話です。

以上です。これ以上あまり覚えていないのですけどね。

—— ありがとうございます。非常に生々しくもあり。

沼田 生々しい話です、本当に。だから、僕が当時とったメモを見えても、あまり生々しくて何が何だか分からなくなって。交渉の中でも、航空交渉と漁業交渉というのはものすごく生々しい。目に見える利害が絡んでいますからね。

でも、生々しい話に安倍大臣もシュルツ国務長官も相当関心を持っていた。国内でも相当もめていたという感じだけ分かっていただければ。

—— 大使は、この問題がそれほど日米関係で大きな 이슈 になってきていたということを当時どういうふうに。

沼田 何でこんな時間使ったのだろう（笑声）。厄介だなと思った。僕は自分のノートを一生懸命探したのだけど、見つからなかったのですけどね。安倍大臣か三塚さんがワシントンへ行って帰ってきたときか何かに、突如夕方に官邸で会議が招集されまして、後藤田（正晴）官房長官が主催して、外務大臣がいて運輸大臣がいて、各省協議みたいなのがあって、中身が何だったのか忘れたけれども、とにかく覚えているのは後藤田さんというのはすごい人だなと思いました。航空は決して専門家ではないと思うけれども、要点をズバッとつかんで、ビシッと仕切っておられた。すごい人だなというのは

覚えているんですけど、中身が何だったのか覚えていない（笑声）。

—— NCA が外務大臣にも首相にも極めて重要だということを申し入れられています、そもそも何で外務大臣とか首相といった中枢までが重視せざるを得ない問題になっているのですか。

沼田 これは、僕もそこまで、NCA というのがどういう会社かというのを必ずしもよく調べてないけれども、大きな政治力を持っていたことは確かですよね。それは NCA の役員が誰だったかということまで調べればいろいろ出てくるのだろうと思うのですけれども、運輸業界、航空業界はいろいろ政治的コネがあるでしょうし、そういう意味ではすごい *political pressure* が両方であったということだと思いますね。

—— フライング・タイガーだけでなく NCA もかなり。

沼田 こっちも。そうなんです。それでなきゃ外務大臣もこんなにしない。

—— ここまで動かない。

沼田 貨物便の問題じゃないけど、日航も相当不満があったし。日航は悲願みたいなものがあるわけですよ、不均衡がきつかったから。アメリカにやられてきたという感じがあるから、何とか取り返したいという感じもあったしね。

—— 本当に生々しいところですね。

沼田 生々しかったということが分かっていただければ。

■ 対フィリピン戦略援助

—— では、次の質問に進みたいと思います。これも既にお話が出てきたところではあるのですけれども、フィリピンへの援助です。86年にシュルツから日本にフィリピン援助拡大の希望というのが出されているのですけれども、この対フィリピン援助をめぐる日米間ではどのような議論があったのでしょうか。

沼田 これはシュルツもそうなのだけれども、私が記憶で一番鮮明なのはシグール次官補です。シグール次官補というのはどういう人か、御存じですか。ジョージ・ワシントン大学の教授から次官補になりました。私がワシントンにいた頃はジョージ・ワシントン大学の教授でした。彼はもともと Asia Foundation の人ですね。Asia Foundation の前身は CIA 系統の組織だったようです。だからと言うわけではありませんが、僕には、若干生臭い感じの学者さんだったなという感じもしました。日本にも大分長い間いたようです。

それからもう一つ、シグール次官補のときに NSC の人はあまり出てこなかった。たしかどこかでシグール次官補が「NSC はどうなっているのですか」と聞かれて「私がそれを兼任していると思ってください」というくだりがあったけれども、相当自己主張の強い人だったのだろうと思います。

シグール次官補は、日本だけでなくアジア全体を見ていたわけでしょう。それで、彼が86年2月にやってきて、このときは中曽根総理にも安倍外務大臣にも会った。そのときにフィリピンが大騒ぎになっていて、「マルコスの統治能力がない。マルコス及び家族の治療ないし平穏な生活のためにアメリカに来る場合には歓迎する。フィリピンを効果的に統治し、共産主義の脅威に抵抗すること、米国基地の存在意義につき正しい認識を有することが必要である。日本の対比援助に期待する」と、対比援助のことをここ言っているわけです。

中曽根総理から、「フィリピンの平穏回復と米軍基地の確保が必要だ。内戦にならないことが必要で、日本の財政は厳しいが援助協力はします」と言われて、安倍大臣は「フィリピン経済が悪化していて国民の生活が苦しくなっている。日本の援助を拡大したい」と言われて、86年4月14日のキャンプ・デイヴィッドのときにレーガン・中曽根会談の中で、キャンプ・デイヴィッドが小人数会談とかテ・タ・テートだったかな。その後に全体会談があったのですけれども、全体会談のときにレーガンが「Good talk with Prime Minister on the Philippines」と言いました。フィリピンについて「Good talk」があったと。「We agree on the importance of working together on economic assistance at this critical time」というやりとりがあったというのが、僕が把握している範囲でのやりとりです。その間にシュルツからもあったのだと思うのですけれども、大筋は大体申し上げた。どのぐらいの金額を議論していたのかと一生懸命調べただけで、ちょっと出てこないのです。どこかで僕はその金額を見たような気もするけれど金額はちょっと分からない。

—— ありがとうございます。フィリピンへの援助という問題について外務省の中で検討するときには、先ほどおっしゃったように経協局が中心になるのでしょうか。

沼田 なりますけれども、こういう形で出てくると北米局からも圧力がかかることになるわけですよ。シグールからも言っているし、首脳会談で話題になることは確かだから。そういうときに北米局はいろいろな地域局に頼むというか、何かやってくれということはよくある話です。

—— フィリピンへの援助のことにに関して、省内で何か議論したことでご記憶になっていることは。

沼田 特に記憶はないけれども、僕は実はフィリピンというのは経協局で援助をやっていました。それは70～72年でマルコス全盛時代でした。その頃に比べると、随分援助の規模も大きくなっていますよね。私は経協局にいた2年間ずっとフィリピン援助をやっていました。そのときは輸銀借款で日比友好道路というのを、あれは条件が割合厳しいのですけれども、借款を出して、それが幾らだったか。2500万ドルだったかな。私の担当しているときに、対比借款総額を7000万ドルぐらいにしたのかな。1986年の時点ではもう既に1億5000万ドルとか何か、そういう単位ですよ。それをさらに増やしたのだと思うのですけどね。ちょっと数字はすみません、出てこない。それだけの規模ですから、省内でもいろいろ議論したことは間違いないけど。

—— フィリピンにおける米軍基地の機能ということも当然北米局で考えていらっしやっただと。

沼田 まさに米軍基地の確保とかそういうことは考えます。ただ僕は安保課長のときにそれを考えていた記憶はあまりない。この後ですね。

米軍基地、アメリカが去ってしまったのはいつだっけ。ピナツボ火山の噴火の後でしょう。噴火がいつでしたっけ。

—— 91 年 4 月ですね。

沼田 だから、しばらく後ですね。まだその前だな。

—— それでクラーク海軍基地がまず放棄されて、スービックが 91 年 11 月に返還。当時、私はあまりこれが日本で報道されていた記憶がないのですけれども、これは沖縄が大変だぞとか、そういう話は出なかったのですか。

沼田 あまりなかったですよ。

—— あまり何も危機感なかったですよ。

沼田 マルコスがどうなるというのは騒いでいたと思います。

—— その頃マルコス政権は大分評判が悪かったと思いますし、フィリピンへの賠償もいろいろと黒い噂などが流れていたと思うのですけれども、フィリピンへの援助を増やすということについて大使はどういうふうにお考えでしたか。

沼田 それは、私が 70 年代にやっていたときのほうが、まさに賠償の黒い噂とか、その影は相当あったわけですよ。マルコス政権というのはやっぱり corrupt な政権だったということは間違いのないから。

フィリピンの話に戻すと、前にも話しましたが、僕がロンドンから帰ってきて、日比友好道路というのが全然できてないので、沢木正男経済協力局長という怖い人に「沼田、おまえ行って見てこい」と言われて、北から南まで全部道路工事をやっているところを見に行きました。当時のフィリピンのアキノ道路局長という人は汚職の権化みたいな人だから、どこにお金が行っているか分からないというような状況で。だけど、賠償があって、それから今の輸銀借款というのを出して、フィリピンの経済発展ということを考えると出さなければいけないということになって、輸銀から海外経済協力基金に乗り換えて借款をたくさん出すところまでは私がやったわけです、何とかね。そのときにいろいろ黒い噂もあって、「いいのかしら」という気持ちはしたけれども、他方、フィリピンの中に大変優秀なテクノクラートが何人かいたのです。すごく優秀な人たちで、真面目にやっています。だから、マルコス政権ではあるけれども、テクノクラートが一生懸命やっているということは間違いないし、道路局長は corrupt だけれども、そういう優秀な人もいたということだったので、それは援助のしがいがあるなという感じはしていました。

私が担当したのは 72 年までですから、それから 14 年、マルコス政権はずっとそのままやっていたわけです。もう限界に来たということでしょうね。

■ ニュージーランドの核政策

—— ありがとうございます。では、次の質問に進みたいと思います。ニュージーランドの寄港についてです。大使がジュネーブに転出される直前に倉成外務大臣が戦艦ニュージーランドの日本寄港に

対して非核 3 原則の厳守を申し入れました。大使はこの問題にどういうふうに関わられていたのでしょうか。

沼田 その時点では、僕は全然関わっていません。ただし、安保課長のときに、ここに書いたけれども、トマホークを積んでいるということであれば問題だということで、84 年 7 月 4 日の参議院外交総合安保調査委員会でニュージャージーのことを質問されて、安倍外務大臣が非核 3 原則をアメリカは尊重している、日本国民の感情、政策は理解している、それは 1969 年佐藤・ニクソン共同声明にあるとおりだ、事前協議、信頼関係があって、事前協議なくしては絶対に持ち込まれないということと言われた。それから、当時の棧熊獅佐世保市長に対して大臣が「もやもやしている事実はあるので、随時協議は必要ならばやってもよい」と、一般論を確認し合うということと言われたというのがあったのですけれども、北米一課長のときは、僕はこの問題に絡んでなくて、倉成大臣のニュージャージーに関する申し入れのときは、僕は入院していたこともあるけれども、それには関わっていません。でも、申し入れたということはそうせざるを得なくなったのだらうということは分かります。

むしろ申し上げたかったのは、質問にはないけれどもニュージーランドの話なのです。これにはかなり僕は時間を使ったものですからね。

ニュージーランドのロンギ首相の話。「Lange」と書いて「ロンギ」と読むのだけれども。彼が「Prime Minister Lange barred nuclear-powered or nuclear-armed ships from using New Zealand ports or entering New Zealand waters」。要するに核搭載の船あるいは原子力推進艦船はニュージーランドの港に入れないということと言ったわけですね。それと日本のフォーミュラとの対比ということが問題になって、日本側のフォーミュラというのは安保条約のシステムの下で核の introduction には prior consultation（事前協議）が必要となっている。「Port calls は introduction に含む」というのが日本の立場であって、「and the United States knows」、アメリカ側も知っているということを書いてきた。他方、日本は deterrence（抑止）の意味から「neither confirm nor deny」というアメリカの政策を尊重して事前の確認はやっていない、それが信頼関係だということやってきたわけですね。

そのラインで、大臣がニューヨークで言ったというのが 85 年の 9 月、国連総会のときですね。ニュージーランドのロンギ首相に会ったときに今のようなことを安倍外務大臣が説明された。それを僕がブリア在京米大使館政務参事官及びプリシラ・クラップ書記官に説明した。彼女は politico-military 担当でした。私が安保課長になったときの在京米大のカウンターパートですね。ちなみにプリシラ・クラップの前任者のクリストファー・ラフルアー（Christopher Lafleur）って御存じ？最近宮澤総理の孫というタレントがいるでしょう、女性。御存じ？

—— 分かります。

沼田 そのお父さんです、クリストファー・ラフルアー。

—— はい、宮澤さんの娘婿ということですね。

沼田 そうそう。今、在日米国商工会議所（American Chamber of Commerce in Japan）の幹部ですね。

私のときはプリシラ・クラップですけれども、彼女が私のところに来て「We appreciate the Foreign minister's line to New Zealand Prime Minister in New York」と。「アメリカは neither confirm nor deny という方針をずっととっている。アメリカにとって normal port access というのは

非常に重要である、これから行くということはニュージーランドには言っている」と。仮にニュージーランドの言うような一般的情報・知識に基づき核兵器を持っている可能性があるゆえに艦船の入港を認めないとの政策を日本がとった場合には、現実的問題として米艦船の日本への寄港を大幅に制限することとなって米国の到底受け入れるところではなく、ひいては安保条約が成り立たなくなる、というのがアメリカの立場だと言いました。

84年12月21日、これは僕が安保課長のときですね。クラーク公使（のちのインド大使、エジプト大使）から栗山局長に話があって、さらにクラップが私に次のように言ってきました。

ニュージーランドに対して「Request for blanket approval」、寄港の blanket approval を出すようにと言っているが、それをニュージーランドは拒否している、「NZ - Restatement of no nuclear-powered ships and no nuclear-armed ships (on the basis of NZ judgement, unilateral assertion)」、ニュージーランドが判断して入港を認めないということを繰り返している。だけど、「Public opinion shifting in favor of not putting ANZUS at risk and not denying access」、ニュージーランドがそういう態度をとるとアンザスが危なくなる、「米、豪、ニュージーランド」の枠組みがおかしくなるという議論が出てきている。「United States will stick to neither confirm nor deny. Restoration of normal port access is a sine-qua-non for continued effective functioning of the New Zealand leg of ANZAS」、アンザスを存続させるためにはニュージーランドの部分がきちっと function しなければいけないのだけれども、そのためには normal port access が回復されることが不可欠の条件であるということを言ってきました。

その頃にアーミテージ国防次官補が日本にやってきたのかな、1月17日に言っているのが「Prime Minister Lange didn't understand the Japanese solution」、日本の解決法というのをロンギは理解していないようだ。これは何が問題になったかということ、ちょうど総理がこの頃、この1月の下旬にニュージーランドを訪問されました。その時出てくるのではないかとということで、私も発言要領を用意したりしていたのですけれども、そのときにロンギ首相は総理に対して「ニュージーランドの政策を押しつけるものではない」と言った。中曽根総理は「現実的処理が賢明ではないか、日本ではそうしている」と。ロンギは「Japan has the advantage of the terms of its treaty」と言ったのだけれども、これはロンギが本当に分かっていたかどうかは分からないですね。皆さんも御承知のとおり条約自体に書いてあるわけではないから。

2月2日に大臣ブリーフがあって、そのときの我々からの説明は、ニュージーランドは「白、黒、グレーで分けて黒と白は駄目」と言っていると。日本はグレーというのはなくて白か黒か、黒は事前協議。事前協議がなければ核搭載艦戦の寄港はないというふうに解釈しているという説明をしたわけです。

その次に、ミドルトン (Bruce Middleton) 在京ニュージーランド公使、ニュージーランド大使館の次席ですが、彼とは僕は実はロンドンで大変仲良かった。彼がよく僕のところに来て話していたのですが、一生懸命我々の政策の説明をしたら、ミドルトンが僕に、ロンギ首相は「reaffirmed commitment to Five Power Arrangement」、アンザスの協力関係にはコミットしていると言っていました。

米海軍の CINCPAC、ロング (Admiral Robert Long) 太平洋軍司令官が、これは日付書いてなくてすみません、「Lange not his own man」と。ロンギも自分で判断下せなくなっているよということを使った。実は僕が核の問題で一番時間をとられたのはこれなんです。でも、北米一課長のときではなくて安保課長のときです。

国会では社会党の矢田部 (理) 議員という人がうるさい人の中において、「核持込みの中に寄港、通過が入ることを明確にすべく交渉せよ」ということを言われたのに対して、安倍さんが「藤山・マッカーサー口頭了解、岸・ハーター交換公文の約束事で明らかな。約束を守っていくことをしばしば話して

いる。自分からマンスフィールド大使にも言っている。アメリカも日本の国内世論、公式見解を知悉している」と言ったというのが、私がやっていた頃のやりとりです。

■ 核「密約」

—— 関連する質問です。大使は、安保課長、米一課長在任中に核持込みに関するいわゆる「密約」についてどのように認識されていたのでしょうか。「討議の記録」や当時の東郷大使が書かれた「東郷メモ」のことは御存じでしたでしょうか。

沼田 これ、かなり機微な質問なのですが、正直にお答えすると、そのようなものがあるということはワシントンのときに知りました。安保担当官だったのでね。ライシャワー発言なんかが出てきますから一応知っている必要があるわけですね。「Record of Discussions」とかで東郷メモとかはその後しばらくしてから見ました。

ただ、私の安保課、北米一課在任中に実際に仕事としてやったのは今のニュージーランドの問題だけです。だから、その「Record of Discussions」とか東郷メモについて実際に何か私がやったということはないです。その後随分いろいろ出てきた。

—— ワシントンのときに御存知になられたということですから、でも、「討議の記録」などをどなたかから見せられたということでしょうか。

沼田 いやいや、大使館の中でおおよその内容をごく内々聞きました。ライシャワー発言の記事が出た頃でした。

—— 秘密了解があるという話。

沼田 藤山・マッカーサー口頭了解というのが出てくるでしょう。これがまた東郷メモのところにも別添でついているでしょう。これ、GRIPS で整理されたのでしたっけ。いろいろどういう経緯だったかなと見ていたら GRIPS のサイトが出てきますよね。このときの密約がどういうのがあったかという資料。

—— 田中明彦先生のホームページに。

沼田 そうか、随分いろいろ出てきましたよね。この密約関係の文書で唯一僕が関わっていたのは、木村・キッシンジャー会談のラロック証言について、キッシンジャーが言っている会談。あれは私が通訳して記録を作ったので。公開されたのを見て、どこかで見たような字だなと思って、よく見たら自分の字だった。

—— そうすると、こういうのがあるとお聞きになったときに、日米で認識にずれがあるということも同時にお聞きになったわけですか。

沼田 ずれはあるのだけれども、東郷さんもそれはしばらく問題にしないことにしておいた方がいい

ということで、それでアメリカ側もそれに異議を挟んでいなかったわけでしょう。だから、問題としては表面化しなかったわけです。ライシャワーのときも持ち込んでないということですから、ずっと通していくことにしたわけですから、日ごろのオペレーションという意味ではその時点では影響しなかったということですね。

これは何と言ったらいいかな。安保というのはかなり密教の世界があります。顕教・密教の。密教の世界があつて、**theology** もあるわけで、その **theology** を頭に置いて処理しなければいけないということが随分あつて、僕の時代なんかはまだ大分あつたのでね。それは随分表に出てきていますけどね。非核 3 原則というのはいつまで固持していくのだろうかとか、**introduction** というのは 2.5 でいいのではないかというような議論も時々出ますよね。だから、それは顕教と密教のバランスをどこかでとらなければいけないという意識は時々出てくるのだけれども、御承知のと通りの経過をたどってきているということだと思います。

白鳥さんは藤井大使と、この話された？

—— 一応話はしたのですけれども、大使自体はあまり踏み込んでお話をされないという感じでした。藤井大使自身の感じだと、話は重いだけれども、自分のときにはほかの方々、前任者たちと比べて大きくやったわけではないという。

沼田 そうなんです。藤井大使とダブっているのは僕が北米一課長のときだけれども、安保課長のときは栗山さんだから。栗山局長のときは、僕がやっていたのはニュージーランドの問題ですよね。栗山さん御自身はこの問題に非常に深く関わっておられる。霞関会の会報に栗山さんが書かれたのを御覧になった方はいますか。密約問題について書かれているのがあつて、参考になると思う。今、手元にないけれども。

—— ニュージーランドの場合、たしかしばらくアメリカの船は行かなくなりましたよね。

沼田 そうでしょうね、行けないもの。

—— 何年か寄港しない。ニュージーランドの場合、横にオーストラリアがあるのでいいですけども、何年ぐらいですかね、これは。ロンギ首相がやっていたのが。

沼田 何年までいたのかな。

—— 32 代首相、84 年～89 年で、もう 2005 年にお亡くなりになっています。

沼田 5 年もやっていたのね。じゃ、89 年まではいなかったのかな。

—— そうですね。政策の表明は 87 年でしたかね。

沼田 いや、もっと前ですよ。僕が安保課長のときですから。84 年だ。首相になってすぐ言いましたよね。それでなきゃ、僕があんなに振り回されていないもの。

—— 密約と言ったときに、どの部分を意味するか、人によってかなり違うと思うのですけれども。

沼田 随分ありますね。

—— 初めてワシントンでこの話を耳にされた時に核心の部分というのはどこだと当時受け取っておられましたか。

沼田 その後に公開された文書について言えば、英語の方でいいですか。「Record of Discussions」の2項のC、藤山・マッカーサーの「Record of Discussions」があるでしょう。

その中で「“Prior consultation” will not be interpreted as affecting present procedures regarding the deployment of United States armed forces and their equipment into Japan and those for the entry of United States military aircraft and the entry into Japanese waters and ports by United States naval vessels, except in the case of major changes in the deployment into Japan of United States armed forces」、今まで艦船や航空機を日本に入れていた手続きは affect されないという部分。

—— だから、それだと艦船及び航空機に通常の装備として載っているものは事前協議の対象ではないということですね。

沼田 対象ではないということに読めるでしょう。

—— はい。ということです。当時、外交官はそういう認識でお仕事していたと。

—— そのあたり、どの範囲で密約を共有するかというのは属人的な側面というのもあるのですか。

沼田 北米局長は引継ぎで話が出るでしょう、金庫に入っていると。僕は金庫の中を見たことはないけれども。

—— 藤井大使は、前任の栗山局長からの引継ぎとして金庫の方の開け方を教わって、それで実際の確認をして、それで自分の口からは条約局の一部と、北米局内では安保課長ですかね。それは表にも出すというようなことで、回顧録のほうにもそういうふうに書いてあります。

沼田 書いてありますね。

—— はい。安保課長と自分より上の次官、外務大臣、総理に関してはもちろんですけども、自分から安保課長と条約局関係者にしか伝えなかったという。

沼田 そうでしょう。

—— 今度、国際政治学会でも私、コメンテーターでこの問題のセッションをやらないといけないのですけれども、それまでに勉強しておきます。これは結局、外交じゃなくて内政なんですよ。

沼田 そうですね。

—— 外交だから外務省が間に挟まってとてもねじれた存在であり続けるのですけれども、米軍の側からするとどこに核兵器があるかなんて一々言うわけがない。それで終わりなんですよ。持っているかもしれないし、ないかもしれないし、ミサイルがあっても弾頭がいくつあるかとか、そんなことを言えるわけもないし、そもそも船がどこにあるかも軍事機密ですから。

沼田 そうですね。船がどこにあるかも言うわけにはいかないというのは、それが問題になったのは、この前お話しした潜水艦が貨物船にぶつかっちゃったときです。あれは原子力潜水艦でしょう。それで、そもそもどこにいたかなんて言えないというわけです。でも、貨物船で人が亡くなったのだからそれを何も言えないのかというので、えらくもめたでしょう。それは僕がワシントンにいたときだけでも、そういうところに時々きますね。

—— 話が戦艦ニュージャージーのほうにずれてしまうのですけれども、大使は安保課長時代のニュージャージー寄港問題——このときは結局寄港しなかったんですよ。

沼田 していません。

—— ですよ。恐らくニュージャージーが復帰して、そこにトマホークを積むというのは米海軍としては相当戦略的に練った対応だと思うのですが、日本側でアメリカの軍事戦略上のインプリケーションを話し合われたことはありませんか。

沼田 ニュージャージーについては、僕はメモのどこかに書いてあったのだけど、誰が言ったのか書いてないものだから。「この 1 年間ニュージャージーが動くことはないから安心なさいということ」をアメリカ側の人が出した」というのがあるんですよ。それは僕が安保課長のときね。誰が言ったのか、ちょっと確かめられないので、今日のスライドには入れませんでした。そういう形で話が出てきたことはある。

—— 動くことはないということは、まだ準備が整わないと。

沼田 そうそう、今すぐというわけではないからということ。そういうメモがどこかに残っていました。誰が言ったのか、議会の人のような気もしますが。

—— それが結局 86 年に実現することになったと。

沼田 そうですね。

—— この SLCM、トマホークは通常も核も両方あるけれども、これは恐らく対ソ戦略上重要だったし、あとはもしかすると軍備管理の関係でも一種、対ソのてこ入れという役割も担っていたのかと思うのですが、そういった話はあまり出てきませんでしたか。

沼田 出てきませんでしたね。

—— あくまでも国内政治上どう対処するかという。

沼田 この時点ではね。

■ 日加首脳の相互訪問

—— 次に、カナダの話に移りたいと思います。86年に中曽根総理がカナダをアメリカに寄らず単独で訪問しました。異例な形だと思うのですけれども、この間の経緯や当時の日本とカナダとの関係についてお話しください。

沼田 異例といえば異例なのだけれども、やっぱり東京サミットでしょう、最大の理由は。東京サミットの前にちゃんと会っておきたいということだったと思います。

どういう話があったかという、僕が北米一課長になってすぐのとき、柳谷次官の総理へのブリーフィングのときに話が出ました。85年8月。柳谷さんから、10月下旬にカナダに行っていただくという話は不可能とあって、その話はその前からあったが、来年の1月頃にしましょうと。総理は「可能ならば行く」と言われた。当時、総理はカナダの1月がどのぐらい寒いかはあまり頭になかったですね。柳谷次官から、マルルーニ（Brian Mulroney）首相はバミューダの英連邦会議の後、10月23日に国連総会に行くので30分でも会っていただくといいということで、ぜひということでニューヨークの国連総会のときに会談が実現しました。

中曽根・マルルーニ会談で、このときは米加FTAの話が主でした。米加FTAというのは、マルルーニから、「not inconsistent with GATT nor completely consistent. Death blow to protectionism」、米加FTAは保護主義に反するので非常に効果があるという話で、中曽根さんはそれは「わかった」、マルルーニに「東京サミットの後に来てください」と言って、マルルーニはそれを受けたというやりとりですね。

その前、中曽根さんがカナダに行くことは決まっていたのですが、その日程が86年の1月12日～16日になった。寒かったですね。このときはやはりサミットの話が多かったです。日加間でこのとき共同声明を出すのは議長国として困るというのは日本が言ったのかな。米加FTAの話は、マルルーニが、米加が「comprehensive bilateral trade agreement completely consistent with GATT」なので、それに成功したら「Japan should be in Canada in a much larger way」と言って、米加合わせると3億人の世界最大の市場、北米全体にカナダ経由で届くと。これはマルルーニの言うとおりですね、元カナダ大使と言えば。それから、中曽根さんが「GATTに反しない、パートナーを害しない、Exclusiveでない」との条件で原則的支持をすると。あとは中身が出てきたときに考えましょうということですね。マルルーニとの間で、中曽根総理は「ジャパンバッシング」のことに触れて、なぜカナダバッシングはないのだろうと言われていましたね。それから、ワーキングホリデーの話もありました。

このときに『白き処女地』という映画の話がありました。中曽根さんは、旧制静岡高校のときにフランス語を第2外国語でとっていたんですね。その頃に、岩波文庫で『白き処女地』という本が出ていて、それが映画になった。『Maria Chapdaine』というのが原名ですが、映画の題名は『白き処女地』。これはジュリアン・デュヴィヴィエ（Julien Duvivier）というフランスの監督でジャン・ギャバン（Jean Gabin）が出ている映画ですが、この映画を昔見た記憶があるということでした。「Maria Chapdaine」というのは、ルイ・エモン（Louis Hémon）というフランス人の小説家で、たまたまケベックにしばらく住んでいたことのある人の小説を原作とする映画で、ケベックを開拓した人々の話

です。ケベックというのは寒いし、大変なところですよ。自然とどのように闘いつつ開拓を進めていったかという映画なのですが、その話をされたのですね。

このときに中曽根総理は下院で演説をされたのです。下院で演説をするときに、実は僕がその演説を書いたのですけれども、長谷川秘書官を通じて私のところにこの『白き処女地』の話が出てきて、総理が「そういう映画を見たという記憶がある。それを何かスピーチに使えないか」と言われて。要するに総理がスピーチの一部を旧制高校でやられたフランス語でやろうかと思い、フランス語で引用できるものが何かないかということで出てきた話です。共同通信の OB で当時総理のスピーチライターを時折務めていた福島さんという方と私と 2 人で総理のスピーチ案を書いていたのですが、これは何の話だろうということになった。実はケベックの映画で総理が旧制高校の頃に見たということしか分からなくて、一生懸命調べたらわかったのです。その小説をまず岩波文庫で見つけて、僕がオタワの大使館に電話して一生懸命調べてもらって、原書をコピーして送ってもらいましたが、結論としては引用をやめたのです。なぜかという、いかにケベックの人が苦勞したかという話で、それをカナダとかケベックの人が今聞いてうれしくないだろうという話になって。実は、日本の中のカナダの専門家の学者の先生が何人かおられたので聞いたのですけれども、あまり反応がよくなかったのでやめました。

それはそれで、総理は最初のパラグラフだったかな、ちょっとフランス語でやられました。そのスピーチの中身を僕は自分で書いたのによく覚えていないのだけれども、オタワの新聞が「東西文明のような話をして **stunning** なスピーチだった」なんていうことを書いてくれました。

それから、総理はこのときマルルーニに「カナダは日本にとって **dream land** である」ということを言われて、「まだ **business land** ではないから、一生懸命 PR してもらう必要がある」ということも言われました。

僕の記憶にあるのは、マルルーニの日本訪問、翌年の 5 月 4 日からですけれども、これは 2 国間の公式訪問でした、東京サミットのときに。そのときのマルルーニと総理との会談で、たとえばマルルーニが「**The only thing I can't do is kidnap one of the French leaders**」、なぜだか分かりますか。これはいわゆるコアビタシオン (**co-habitation**) が始まったばかりなのですね。サミットのときにミッテラン (**François Mitterand**) 大統領とシラク (**Jacques Chirac**) 首相が両方来ました。これ、選挙があって両党体制が発足してまだ 1 か月ぐらい後だったかな。だから、東京サミットのロジをやる人はひどい目に遭いましたけど。そのことを言っているわけです。

それから、サッチャーについて、「**Thatcher has a gift for indirection**」、これは皮肉です。直接的に物を言わないで間接的に物を言うのが **indirection** ですが、サッチャーは決してそうじゃない。サミットについてボンのときは「**worst bloody summit**」だと言っていたけれども、東京は「ベスト」だと言っていたと。これはシュミットが聞いたら怒りますよね。

それから、マルルーニが「**Need a clear statement that G7 will be created**」、G7 の一員としてのカナダの位置をはっきりさせるということがあるのでしょうか。カナダは「**Major powerful trading nation**」であり、「唯一の **weakness** は **population**」である。人口はちょっと足りないけど。

米加自由貿易協定交渉開始については、マルルーニが、「アメリカの保護主義が深まっているけれども、相手がレーガンなので交渉可能だった」と。中曽根さんが、さっき言ったのと同じですが「GATT の範囲内、パートナーを害しないのであれば歓迎する」と。マルルーニは「**Mulroney is Reagan's puppy dog**」と言われるけれども、飼い犬みたいにレーガンの言うことを次々聞いているのはマルルーニじゃなくてサッチャーだとか。結構いろいろ言っていました。

それから農業問題について、「カナダは米 EU の争いのトバッチリを受けている」。中曽根さんは「GATT を守ることが重要だ」。テロについての、サッチャー案というのも話題になりました。だいぶ

んサッチャーは迫力あったみたいですね、このとき。

日加の貿易については木材（合板）の話、住宅について日本の建築基準法を改正できないかという話、農業の話。カナダの貿易というのは農業製品が圧倒的にありますから。

それから、石炭の対日輸出については **fair share** を得たい。原子力で **CANDU** 原子炉を売りたいと、これはずっと言っているけれども、実現していない電力会社の炉型選択の話。自動車、日本の対加投資。その後の話ですけれども、カナダに自動車会社、トヨタとかホンダとか進出してアメリカの市場にも売っていますから、非常に重要な役割を果たすのですけれども、その話も出た。

それから、カナダにおける日本研究に 5 年間 100 万カナダドルを援助する話。マルルーニが「**Expanded role for Japan**」、カナダについて日本の役割を拡大してほしい。「**Higher profile**」。「**Good relation with Reagan**」というのは中曽根さんのことを言っているのだろーと思いますね。中曽根さんから「カナダはミドルパワーとしての力と伝統を持っているので、一緒にやりましょう」というような会談でした。

実は僕はこのとき大変に苦労したことがあって、スライドのそこに「参議院演説」と書いてあるでしょう。参議院での演説はいろいろな問題があって、まずは英語とフランス語、両方通訳つけろと言われたが、参議院は先例がないから駄目だということで、英語で通訳してそれをフランス語に通訳することにしました。

それから、このマルルーニの演説で中曽根サミット議長を褒めたまではいいのですが、舞台裏で大変問題になったのが、下に「**podium 問題で苦労!**」と書いてあるでしょう。これ、カナダ側が参議院の議場に携帯用のポディウム（演台）を持ち込みたいと言ってきて、参議院事務局がこれに頑強に反対したのです。カナダ側は全然理由を言わなかったのですけれども、ずっと議論しているうちに明らかになったのは、今ではかなり周知の事実だと思いますが、マルルーニは高いところでは目まい（**vertigo**）がするらしくて、ポディウムでこうやって握って支えてないと落ちそうになるので、それを防ぐために携帯用のポディウムを持ち込みたいという話だったのです。けれども、そのことは伏せて参議院に話したら参議院がもう全く駄目でした。参議院の伝統を何だと思っているのだという反応でした。それでにっちもさっちもいかなくて。この件で当時在京のスティアズ（**Barry Steers**）カナダ大使が課長の僕に電話をしてきて激しくやりあったこともありました。

当時の在京カナダ大使館にいた人たちで、実は今のカナダ大使の前のマッケンジー・クラグストン（**Mackenzie Clugston**）大使も当時担当官でやっていて、その話を思い出しては、あれは苦労したねという話をしているのです。なぜそういう問題になるかということ、カナダの場合には首相府（**Prime Minister's Office**）というのがある。その前に枢密院（**Privy Council Office**）というのがあるって、これが内閣みたいな役割を果たしているのですが、**Prime Minister's Office** というのは **Prime Minister** のプライベートオフィスみたいなことで、ここは首相の取り巻きがいろいろな無理難題を言うてくるのです。この **Prime Minister's Office** から言われたことは大使館としても実行しなければいけないけれども、なぜポディウムが必要だなんていうことはしゃべっちゃいけないと厳しく言われていたので、にっちもさっちもいかなかったということだったようです。**Privy Council Office** と **Prime Minister's Office** の関係というのは今でも似たようなところがあって、僕もカナダ大使のときに苦労しましたが、そういう **bureaucracy** の問題がありました。

参議院は相当機嫌を損ねて、特別の要望は前広に相談してこいとか、一か国語が原則であるとか、議場内に入る人は議場の規則は守れとか大分嫌みを言われました。そういう意味で非常に思い出の深い訪問ではありました。すみません、蛇足が入って。以上です。

—— 意味がわからなかったのですが、一か国語を原則というのは。

沼田 カナダは英仏両語を公用語としています。マルルーニはスピーチで両方使いますから、両方の通訳が必要ということです。

—— それが決まりなんですよ、確か。

沼田 私もカナダでのスピーチは英語とフランス語両方やるようにしていました。全部じゃないけど。中曽根さんもカナダ連邦議会で、フランス語をちょっぴりやられて英語もやられた。それは両方やらなければいけないのですよね。参議院というのは当時頭が固かったですね。今はどうか分からないけど。

—— 大使から課長に電話がかかってくるというのは。

沼田 普通はないです。

—— 大使は、カナダとの付き合いとか、お仕事をされたのは北米一課長になられてからですか。

沼田 いや、70年代もやっていましたから、北米一課に4年間いたでしょう。それと、北米一課長のときですね。それから大使のとき。

でも、北米一課長をやっていたときに、その前もそうだけれども、北米一課の仕事でカナダの比重というのは、アメリカとカナダを比べると9対1ですね。これはカナダに申し訳ないのだけど、今もあまり変わらないのではないかな。もっと比重を上げていいと思いますが。なかなか難しいですね。

—— カナダを総理が訪問されるということになったのは、東京サミットとの関係でということでしょうか。

沼田 サミットの前に各国の首脳と一応話をしておきたいということ、それからマルルーニは保守党でしょう。保守党でレーガンと仲がいい、馬が合うというのはわかるし、もう一つは、マルルーニはアイルランド系だけれどもフランス語がうまいんです、ケベック育ちで。だから、フランス語圏ともツーカーだし。さっきのやりとりでもレーガンとの仲のよさを見せるような関係もあるし、フランスの2人のリーダーの調整をやって、自分はフランス語もできるよということを言っているわけでしょう。だから、そういう意味で役に立つということはあったのだと思います。

—— こういうときの振りつけとか、どこに行くべきかといった判断は最終的にはどこでされるのでしょうか。

沼田 総理がどこに訪問していくかというのは、官房なんかが中心になって全省的にやりますけどね。今はどこがやっているのかな、総政局がやっているのかな。

—— このときは、経済局がたとえば東京サミットとの関係でカナダに行っていただきたいというふうな要望は。

沼田 そういふのはありますよね。我々ももちろん、カナダにはめったに行っていないから行ってくださいといふことは言うし。でも、アメリカに行かないでといふのは中曽根さんですね。大平総理もカナダに行かれました、モンテペロ・サミットのときに。あのとき僕は、大平訪米の通訳をして、そのまま一緒にカナダに行って通訳しましたから。アメリカと一緒にいふのはよくあるのだけでも。あのときも大平総理はオタワの議会で演説されました。

田中総理もラテンアメリカ訪問の後カナダだけ行っていますね、1974年かな。田中総理は、トロント大学で名誉博士号を授与されてスピーチをされて、そのスピーチは僕が書いて通訳しました。

—— カナダの話は、また大使のときのお話という形で。

沼田 また別にやりましょう。

沼田貞昭オーラルヒストリー ⑥

ジュネーブ軍縮代表部参事官
—冷戦末期の軍備管理と核軍縮—

質問表 6 ジュネーブ軍縮代表部参事官―冷戦末期の軍備管理と核軍縮―

1. 軍縮会議日本政府代表部時代についてお尋ねします。1987 年、大使は北米一課長から軍縮代表部参事官に異動され、1989 年に駐豪公使に着任されるまでの約 2 年間、ジュネーブでお勤めになられます。
 - (1) まずは、本省との関係を含め、軍縮代表部の役割に関する総論的なお話をいただければ幸いです。
 - (2) 次に、軍縮代表部の陣営・体制についてお聞かせください。着任にあたっては、前任者からはどのような引継ぎがございましたでしょうか。
 - (3) 最後に、諸外国、特に米国とソ連のカウンターパートとなった方々のことについて印象に残っていることがございましたらお話してください。また、多国間外交の難しさや面白さなどについても伺えれば幸いです。
-

■参考：当時の軍縮会議の陣営

【日本政府代表部】山田中正大使

【米国関係者】カンペルマン米首席代表、グリットマン INF 代表、ウッドワース INF 交渉米次席代表、エインホーン米代表団員（戦略核担当）

【ソ連関係者】オブロフ大使、マステルコフ INF 首席代表

2. 米ソ交渉を中心に軍備管理・軍縮問題についてお話を伺いたいと思います。

まず、軍縮代表部赴任前の時代についてお聞きします。

- (1) 1978年から82年の在米大使館一等書記官時代における軍備管理・軍縮問題については、既にお話しいただきましたが、追加事項などがございましたら、お話しいただければ幸いです。
- (2) 1984年から86年の安全保障課長・北米一課長時代には、83年に中断した米ソ交渉がNST (Nuclear and Space Talks) として再開します。日米協議を中心に、外務省および日本政府の対応について伺えれば幸いです。

■参考：当時の主な出来事

- | | |
|-----------|----------------------------------|
| 1977年 10月 | シュミット首相の IISS 演説 (ディカップリングへの懸念) |
| 1977年 12月 | SS-20 の実践配備 |
| 1979年 6月 | SALT II 条約調印 |
| 1979年 12月 | NATO による「二重決定」 |
| 1981年 11月 | レーガン提案 (INF「ゼロ・オプション」) |
| 1981年 11月 | INF 交渉開始 |
| 1982年 6月 | START 交渉開始 |
| 1983年 1月 | アンドロポフ提案 (SS-20 の極東移転案) |
| 1983年 5月 | ウィリアムズバーグ・サミット |
| 1983年 11月 | INF 交渉の中断 |
| 1983年 12月 | START 交渉の中断 |
| 1985年 3月 | NST 開始 |
| 1985年 11月 | ジュネーブ首脳会談 |
| 1986年 2月 | レーガン・中曽根書簡 (INF のアジア部 50%残置問題など) |
| 1986年 9月 | 日本政府が SDI 研究への参加表明 |
| 1986年 10月 | レイキャビク首脳会談 |

3. 次に、軍縮代表部時代の米ソ核軍備管理・軍縮交渉についてお尋ねします。
大使のご着任当時、ジュネーヴでは NST が行われていましたが、着任直後に一括交渉が解除され、INF、戦略兵器、防御・宇宙兵器の個別交渉へと移ります。
- (1) まずは、大使の在任中に妥結する INF 交渉の論点、およびそれらに対する外務省の立場についてお聞かせください。
 - (2) 米ソをはじめ、諸外国の軍縮代表部とのやりとりについてもお話しいただければ幸いです。
 - (3) 次に、戦略兵器と防御・宇宙兵器に関する米ソ交渉、およびそれらに対する外務省の立場についてお聞かせいただければ幸いです。
-

■参考：当時の主な出来事

- 1987 年 1 月 中曽根首相の東欧訪問（「平和と軍縮への献言」演説）
- 1987 年 1 月 NST 第 7 ラウンド
- 1987 年 2 月 ゴルバチョフ提案（一括交渉の解除、SRINF・SNF 削減）
- 1987 年 4 月 NST 第 8 ラウンド
- 1987 年 6 月 ベネチア・サミット
- 1987 年 7 月 ゴルバチョフによる「グローバル・ダブル・ゼロ」提案
- 1987 年 9 月 INF 基本合意（11 月調印）
- 1988 年 11 月 START・D&S 交渉の休会
- 1989 年 6 月 START・D&S 交渉再開
- 1990 年 6 月 START 基本合意（91 年 7 月調印）

4. その他の軍縮交渉についてお尋ねします。大使の軍縮代表部時代には、化学兵器禁止のほか、核実験禁止、宇宙軍備競争防止なども議題に上がっていました。これらについて、印象に残っていることをお聞かせください。

■参考：当時の主な出来事

- 1987年 2-4月 軍縮会議 春会期
- 1987年 6-8月 軍縮会議 夏会期
- 1987年 7月 日本政府による化学兵器非生産の検討に関する作業文書の提出
- 1988年 2-4月 軍縮会議 春会期
- 1988年 7-9月 軍縮会議 夏会期
- 1988年 9月 レーガン国連演説（化学兵器に関する国際会議を提唱）
- 1989年 1月 化学兵器禁止パリ国際会議
- 1989年 2-4月 軍縮会議 春会期
- 1989年 6-8月 軍縮会議 夏会期
- 1989年 9月 化学兵器禁止官民合同会議（豪政府主催）
- 1989-90年 核実験禁止に関するアド・ホック委員会の設置

5. ジュネーブでのご勤務を終えられた 1989 年、大使は在オーストラリア大使館に着任され、冷戦終結を豪州で迎えられました。当時のホーク政権は対日関係を重視しており、第 1 回 APEC 閣僚会議は日豪両政府の協力によって開催が実現したともいわれています。こうした点を含め、オーストラリアでのご勤務で強くご印象に残っている点やエピソードはございますか。
-

■大使略歴

1989 年 2 月 在オーストラリア大使館公使
1991 年 3 月 帰国

■キーワード

- ・ 第 1 回 APEC 閣僚会議

■参考：当時の主な出来事

1989 年 11 月 キャンベラにて第 1 回 APEC 閣僚会議開催
1990 年 9 月 ホーク豪首相、訪日

ジュネーブ軍縮代表部参事官—冷戦末期の軍備管理と核軍縮—

■ ジュネーブ軍縮代表部

—— 軍縮会議日本政府代表部時代になります。一部、少し時代を遡って INF の話を伺おうかと思いますが、主に代表部時代のお話をお伺いしていきたいと思います。

1987 年に、大使は軍縮代表部の参事官に異動されることになり、1989 年に駐豪公使としてオーストラリアに行かれるまで 2 年間、ジュネーブでお勤めになられます。我々が軍縮代表部のことをあまりよく分かっておりませんので、まずは総論的に軍縮代表部のお仕事の内容を、本省との関係を含めてお伺いできればと思います。よろしくお願いします。

沼田 その前に、軍縮代表部の話というのはすごく地味な話なのです。細かく言っても皆さんお分かりいただけないような話が多いので、後で米ソの話がかなり出てきますから、最初に軍縮代表部一般の話をして、それから米ソ軍備管理の話。その後、軍縮会議のときに出ていた主要な問題としての核実験禁止問題と化学兵器の問題を中心にやるということですのでよろしくお願いしたいと思います。

まず軍縮代表部ですけれども、軍縮代表部というのは軍縮会議（Conference on Disarmament）の日本の代表部ということです。実はスイスには大使館が 3 つあるのです。ベルンに駐スイス大使館、それからジュネーブの国際機関代表部、これは GATT、ILO、UNCTAD、WHO 等々をやっていて、それとは別に軍縮代表部があるのです。軍縮代表部というのは、軍縮会議の日本の代表部ですけれども、これは軍縮に関する唯一の多国間交渉機関です。私のいたときは、メンバー国が 40 か国でした。今はだいぶ増えて 60 何か国になっていると思います。

軍縮会議は、最初は 10 か国軍縮委員会として 1960 年に始まった。1962 年には 18 か国軍縮委員会。1979 年には第 1 回国連軍縮特総の決議によって軍縮委員会として設立されて、1984 年には「軍縮会議」と名称変更になった。国連などほかの国際機関から一応独立しています。決定はコンセンサス方式です。これがなかなか大変なのです。

軍縮会議というのは大体同じような議題を毎年やるのですけれども、主な議題は核実験禁止（Nuclear Test Ban）ですね。これは後で言いますけれども、交渉に至らない、私のときは。それから核軍縮、核戦争防止、化学兵器禁止（これは交渉していた）、それから宇宙軍拡の防止、非核兵器国に対する核兵器国からの安全保障という Negative Security Assurance、放射性兵器（Radiological Weapons）、それから、いわゆる包括的軍縮計画、国連に対する年次報告というような議題があります。これは全部同じように中身があるわけじゃない。核実験禁止はなかなか交渉に至らない、委員会もできないということでさんざん議論をしていたので、主なトピックでした。実際に交渉をやっていたのは化学兵器だけです。

それから、軍縮代表部の役割というのは、ジュネーブで軍縮会議での議論をずっとやっているだけじゃなくて、秋に国連総会があるときに第一委員会で軍縮関連の決議をずっと審議するわけですが、そのときには軍縮大使ほか私も、ほとんどみんなニューヨークに長期出張して乗り込んで、決議案の審議をしていました。だから、ニューヨークに 2 か月ぐらい出張していました。

本省との関係というのは、本省には軍縮課があるわけですね。軍縮課から一応訓令は来るのですけれども、軍縮会議の議論というのはすごく細かいので、その中身を本省の人は分かっているのかなという感じが常にしていて、なかなか本省の人に分かるように報告するのが難しいのです。「木を見て森を見ず」という話があるけれども、木の議論をしようとしているので、それを精密に報告しても本省

は分からないだろう。私は着任以来、これはこんな細かいことを言っても分からないよ、もっと分かりやすく何とか報告する手はないのというようなことをずっと言っていました。だから一応訓令は来ますから、訓令に基づいて行動していますけれども、その中身というのは、詳細な辺まで訓令を求めてもなかなかそれに答えるようなことはないということがありました。

次は陣営、体制の話になりますけれども、いいですか、続けてしまって。

—— この軍縮会議では米ソ間の核軍縮交渉は全く扱わないのでしょうか。

沼田 扱わないというわけではないけれども、軍縮会議の総会（plenary meeting）をやるときにアメリカとか当時のソ連の代表が出てきて、アメリカはけしからんとか、今、米ソはこういう交渉をしているというような一般論はしますが、米ソの二国間交渉には全く関係ありません。

—— では、ただジュネーブという場所が一緒だけで……。

沼田 場所が一緒だけです。その中で、これは後で話しますけれども、我々の代表部は米ソの二国間の交渉をしている米国代表団から直接にブリーフィングを受けていたという意味で非常に特殊な地位にあったのです。これはなかなか皆さんに分かっていただけないですけどね。だから、軍縮会議の総会で一般論は米ソもワアワアやるけれども、この中身には全く影響なかったですね。

—— 本省の「訓令」という単語があったのですけれども、本省とのやりとりというのは、電報は基本的に何種類ぐらいあるのですか。

沼田 1種類ですね。1種類というか、毎日会議がありますから、こういう会議でこういう議論がありましたというのは報告して、この次の会議ではこういうようなことが議論になりますからということで一応訓令を受けるわけですけども、本当に何を議論しているか本省で分かっていたのかなという疑問を常に持ちながらやっていました。軍縮を何年もやっている人なら分かるかもしれないけれども、そういう人はあまりいませんから。

こういうことを言ってもよくないけれども、僕が軍縮代表部に行って最初に感じたのは、「ここにいる人たちはオタクの集団だな」と。軍縮オタクの集団。ワシントンで politico-military をやって本省で安保課長をやった私はいわば軍拡オタクだった（笑声）。オタクじゃないけれども、軍拡をやってから行ったものだから。

—— 本省から一応訓令は来るのだけれども、事実上は現地でやっているというような状況で、ほとんどよきに計らえというような感じだったと。

沼田 かなりその部分が大きかったですね。そうですね、基本的には。何か大きな問題が出てくれば別ですけども。

—— 今お話しになっていた点とも関連するところだと思うのですけれども、一般論的には、しばしば北米局の安全保障課とか安保畑の方々と国連局の軍縮畑の方々の関係がやや微妙だったり、意見が対立することがあるかなという気もするのですけれども、この時期にはそもそもの考え方の違いとか、そういうところは特に意識せずに仕事はされていたのでしょうか。

沼田 いや、意識はしましたよ、僕は安保課長を経験して行っていますから、「何でこんな夢みたいなのを言っているのだろう」と思うことが多くてね。だから、代表部の館員も若干戸惑ったと思います。細かい電報が上がってきても、「こんなこと書いても分からないよ、もっと分かるように書きなさい」とか、大分煙たがられたのではないかと思います。そういう、軍縮は軍縮として安全保障と関係ないというような考え方が日本ではかなりあったのだけれども、軍縮会議というのはそれがかなり反映されている世界ですからね。安全保障の立場から見るといろいろ思うことがありました。さっきの米ソのバイの交渉と軍縮会議の議論はほとんど関係なかったというのも、そのことにも関連するのです。

—— 安保課長を経験された大使がこの時期に軍縮代表部に行くことになった経緯というのは。

沼田 なぜ行かされたのか知らないけれども…。よく分からない。

—— もしかしたら、米ソ交渉があるから。

沼田 いやいや、それはないでしょう。

—— 何か偶然で。

沼田 たまたまそうなっちゃったということだと思います。

—— 日本だけでなくて各国の代表、たとえば核を保有している米ソを含めイギリスやフランスの代表も軍縮畑でずっとやってきて、ちょっと理想的な議論に終始しているという感じなのでしょうか。

沼田 まあ、そうですね。そういう人が多かったな。

—— では、限られた軍縮コミュニティで、ちょっと閉じた世界というイメージでしょうか。

沼田 はい。若干の例外はありましたが。後でちょっと出てきますけれども、たとえばフランスの大使でピエール・モレル（Pierre Morel）という大使がいました。この人は大統領府にいたことがあります。年は僕より1つ下だったけれども、当時大使だったし、ENA 出身の典型的なフランスのエリートで、ソ連と安全保障の経験も持っていた。

それから、イギリスの代表は、軍縮とはいえ核保有国で化学兵器も持っているから、そういう観点からかなり突っ込んだ議論ができた。アメリカの場合には、アメリカの軍縮マフィアというのは ACDA（Arms Control and Disarmament Agency）なのだけれども、ACDA の中でも米ソ交渉に全然関係していない人が来ていたというようなことで、その二極分離みたいなものがありましたね。

館内の体制の話になってしまいますけれども、私が着任したのは山田中正大使の着任の2週間後なのですが、山田中正大使の前は今井隆吉大使だったのです。御存じですか、今井隆吉大使は朝日新聞の記者から日本原子力発電に行かれた原子力の権威で、クエート大使、軍縮大使になられて、その後、メキシコ大使になられた方です。今井隆吉大使と次席は小西正樹参事官で、今井さんが離任されて山田大使が着任されて、その2週間後に僕が着任して、その1週間後に小西さんが離任したということ

で、要するに大使・公使が同時に入れ替わったのです。私の前任者の小西さんは、実は安保課の首席をやっておられたことがあるので、安保の経験者という私との共通点はあります、私の1年上ですけども。その後、ジンバブエとマレーシアの大使。ドイツ語の方です。

私が着任した時点で、私は小西さんの後任、私のすぐ下に佐藤昌史君という参事官がいて、彼はロシア語の人ですけども、彼はその後ユーゴの公使をして、CTBTO (Comprehensive Test Ban Treaty Organization) というのかな、核実験禁止条約ができて、その事務局みたいなのができて、そこに出向しました。佐藤君の後には渥美千尋参事官が来ました。渥美参事官はその後、官房長官秘書官をやって、南部アジア部長をやって、パキスタン大使をやって、アイルランド大使をしました。それから、石栗勉書記官、彼はまさに軍縮の専門家で、私がまだ代表部にいるときに外務省から国連軍縮局に派遣されて、当時明石康さんが国連軍縮局の局長でしたけれども、その下に外務省から出向して、そのままずっと国連にいました。それから、ロシア語の館山彰書記官がいて、防衛駐在官は空の方で工藤一佐、その後任は松井一佐でした。

いざ私が軍縮代表部に就いて驚いたのは、まず人数が少ないですね。実際に動いたのは今申し上げた数人だけで、あとは官房の人ですから。それから、代表部の中がものすごく静かなのです。大使室があって、私が公使室にいて、2つ3つ離れた部屋で誰かが紙をめくる音が聞こえてくるという感じで、これはカルチャーショックでした。本省でいったら国際機関第一課 (GATT 課) で、安保課で、北米一課でしょう。ワイワイ、ガヤガヤとした大部屋なのですね。そういうところから静まり返ったところに行ってカルチャーショックだったですけども、だんだん慣れました。

体制については大体以上ですかね。

—— 前任の小西参事官から何か引継ぎのようなものはございましたか。

沼田 一応どんな議題についてどういう議論になっているというような話は引き継ぎました。でも、議題が多いから、どの国がどの議題に関心を持っていて、それぞれ委員会がありますから、どの委員会の議長は誰がやって、この構成として西側グループと東側グループと非同盟グループと中国と4つに分かれているので、そのグループの中で誰がリーダーシップをとろうとするかとか、どの国の人がある委員会の議長をとるかとか、あるいはグループのコーディネーターを誰がやるかとか、そういう種類の話についてブリーフを受けました。

—— 当時の文書を見ると、小西参事官が米ソ交渉のブリーフィングも受けていたようなのですが、その点の引継ぎがあったのでしょうか。

沼田 なかったですね。

—— 通常業務ではないから、そこまで直接的に引継ぎがあったというわけではないと。

沼田 恐らくブリーフィングの頻度が違ったのだと思うのです。今井大使もアメリカの代表に会っておられたらしいという話は聞いたのだけでも、我々のときのブリーフィングは10回ぐらい受けているのかな。

—— 内容も濃いですね。

沼田 内容も濃いですよ。そこの違いだったと思います。

代表部に行ったらその静けさに驚いたという話をしましたが、いざ会議が始まると、要するに 40 か国ですけれども、朝から晩まで同じ連中と顔を合わせています、ずっと会議の連続ですから。だから、非常に closed community で、オタクの世界というのはそういう意味もあります。どういう人たちかというと、西側グループのアメリカ代表団というのは、はっきり言って米ソ交渉をやっているような人たちに比べると力が弱いのです。ACDA のマルチをやっている人たちなのですが、大使にはあまり外交も安全保障も知らないような感じの political appointee が来ていました。

ただ、私が行ったときにアメリカはそれまでの代表がちょうど亡くなって、しばらく空いているような状態で、その間にリン・ハンセン (Lynn Hansen) という ACDA の Multilateral Affairs のディレクターの人が来ていました。この人はソ連の専門家で、エディンバラ大学で教えていたこともあるなかなかちゃんとした人でした。そのほかは、たとえば核実験とか化学兵器とかそれぞれの分野の専門家が ACDA とかいろいろなところから来ていましたが、専門家集団といえば聞こえはいいけれども、細かい話はよく知っているけれども、全体のピクチャーはあまり関心あるのかな、ないのかなという感じがしました。その中には僕の親しい人もいましたけれども、それまでに私が付き合っていたアメリカの外交官とかに比べると、「うーん、ちょっと違う種類の人たちだな」という感じはしました。

イギリスは女性大使で、ソールズビー (Tessa Solesby) という人だったかな。割合おとなしい人で、次席がエディス (Richard Edis)。この人がなかなか大きな顔して、俺が仕切るんだというような感じで、僕はあまりそれが気に入らなかったら大分議論しました。

フランスは、さっき申し上げたモレルという典型的なフランスの優秀な外交官で、大統領府にもいて、後にロシア大使、中国大使になった人です。

オーストラリアの大使はバトラー (Richard Butler) という、俳優のリチャード・バトラーと違ってハンサムな人ではないけれども、大変に自意識の強い人で、自分でとても仕切りたがる人でした。ウィットラム (Gough Whitlam) 首相の秘書官をやっていたのかな。労働党の系統で、いろいろなところで目立ちたがる人でした。彼はのちに国連大使になりました。

西ドイツは、岩間さん、フォン・シュテュルプナーゲル (von Stulpnagel) という名前、何か分かりますか。フォン・シュテュルプナーゲル (Michael von Stulpnagel) 大使は、ヒトラーに盾突いた軍人の親族です。

—— 暗殺計画に参加したと書いてありますね。すごいですね。

沼田 何となく影があるような感じもしました。

それから、東側はソ連、東独、チェコ、ポーランドなど。ソ連代表団の大使はナザルキン (Yury Nazarkine) という人でした。その下に何人かいましたけれども、ちょうどゴルバチョフの時代になっているのだけれども、こういうところに来ている人たちはあまり冷戦時代と変わっていないような感じで、パーティーで一緒になっても、ウォッカを飲むと、「ああ、しばらく前までのようにニエツト、ニエツトと言っていればよかった時代が懐かしい」とか言ったりするような人もいました。

それから、G21 という非同盟の国で、僕の記憶でいうとスウェーデンは西側グループじゃない。国連のニューヨークでは西側グループに入っていたのですが、スウェーデンは非同盟に入っていたような気がするのですけど。今の軍縮会議では西側に入っているようだけれども。スウェーデンはなかなか存在感が大きかったですね。イケウス (Rolf Ekeus) という大使がいて、その後、駐米大使になった人ですけれども、彼は軍縮の世界ではかなり有名な人ですね。それから、ブラジルなんかもかなり頑張っていた。メキシコの大使がロブレス (Alfonso Garcia Robles) という人で、当時もう

70 代の後半でしたけれども、外務大臣も務めたことがあり、トラテロルコ条約をつくったときの功労者で、ノーベル平和賞をもらっているのです。だから一種のアイコンとして非同盟の人はみんな尊敬していました。しかし、議論の中身は相当なタヌキの人でした。

それから、アルゼンチン、インド。インドはいろいろなところでうるさかった。パキスタンの大使はアフマド (Mansoor Ahmad) 大使で、その後、駐日大使で来られた人です。なかなかいい人で、僕がパキスタン大使のときも彼の家を訪ねたりしました。僕の感じでは、こういう非同盟の国はかなり優秀な外交官が来ていましたね。こういう国際機関というのを彼らは相当重視しますよね。だから、GATT もそうなのだけれども、こういうところにかなり優秀な人がいる。

中国はグループに属さないで、今考えると、西側と東側の意見が対立して、それに非同盟が入って三つ巴になっているときに、fence-sitting していたという感じがしました。様子を見ていて、都合のいいことだけとるという感じがしました。そういう意味では、自己主張があまり強いという感じはしませんでした。

あと、多国間外交の難しさや面白さというのは、今のようないろいろな利害が絡む中でどうやって仕切っていくかという話なのですけれども、私は実はバイばかりやってきて、マルチはこのときが初めてだったのです。会議の数がやたらに多いですから、そこでどこかで発言しなきゃいけない。どこかで議論を仕切る必要もあって、後でお話ししますが、2 年目は化学兵器禁止条約交渉の作業グループが 3 つに分かれて、その 1 つの議長をやりました。議長としてまとめる経験というのをやって、このマルチの仕事の経験は後で、特に報道官のときに役立ちました。なぜ報道官と関係があるかと思われるかもしれないけれども、要するに言葉で勝負しなきゃいけない部分が多いわけです。議論がもめたときの仕切りとか、チェアマンズ・サマリーを口頭でやるとかいった経験が役立ったという感じがします。

とりあえずイントロダクションとしての軍縮代表部についての話は以上です。

—— まるっきりの素人質問なのですが、この軍縮会議の中で西側、東側、そして G21 というグループに分かれるのですか。

沼田 分かれます。

—— これは議論するときもそれぞれグループの中でまず議論して、その後にグループ間で議論するという形になるのですか。

沼田 基本的にそうなのです。我々はしょっちゅう西側で会っているわけですよね。現場で調整するわけです。

—— 軍縮の場合は、当時の EC がまとまってというのはなかったと。

沼田 なかったと思う。だから、西側の中に入っていますね。分け方がニューヨークの国連と違うのです。ニューヨークの国連はアジアグループ、西欧グループとかに分けているでしょう。これはそれとちょっとずれているのです。

—— スウェーデンが……。

沼田 スウェーデンは、僕はどう考えても西側グループにいた記憶がないから、非同盟でしたね。

—— 中立諸国というのがなかったんですね。たとえばスイスはいないのですか。

沼田 スイスはオブザーバーじゃないかな。

—— そうですね。そんな感じがしますね。

沼田 スイスはオブザーバーだったと思う。

—— では、中立諸国は非同盟に入ることが多かった？

沼田 そうだった気がしますね。

—— 40 か国一堂に会するのですか、ほとんど。

沼田 総会はしょっちゅうあるけれども、これは 40 か国でやります。あとは、さっきいくつも議題を並べたなかで、交渉をやっているのは化学兵器だけだったのですけれども、会議はしょっちゅうやっているわけです。いろいろなコミッティで。そうすると、とても 40 か国みんなは出られないわけです。代表団が小さいところなんてどうしようもないわけでしょう。我々なんかはまだ人数がいた方だけれども、それでも付き合うのが大変だったわけ。だから、それはコミッティによってよく出てくる主要なメンバーというのがおのずから定まってくるわけです。何かリストありますか。

—— 今、外務省のホームページで現在の状況は出ていて……。

沼田 スウェーデンは西側に入っているでしょう。

—— スウェーデンは西側ですね。

沼田 でも、当時は西側にいた記憶が僕はありません。

—— 今だと、たとえば先ほど名前が出た国でも、スイスなんかは西側グループに入っています。

沼田 だから、大分違うでしょう。

—— オーストリアもですね。当時どうだったかは。

沼田 オーストリアはメンバーじゃなかったと思う。オブザーバーだったような気がしますけどね。

—— これ、どこかで確認してみます。

沼田 ちょっと僕もそれを確認しようかな。僕の離任レセプションのリストを見ているのだけれども、

オーストリアはメンバー・カントリーに入っていないね。オブザーバーとしてオーストリア、フィンランド、マレーシア、ニュージーランド、韓国、スペイン、スイス、チュニジアが挙がっています。だから、今とは大分変わっていることは確かですね。

ちなみに、G21 は非同盟として一括りにしているけれども、これもなかなか中がまとまらなかった。想像に難くないと思いますけれども。

—— 軍縮委員会だと主に 3 つ、西側、東側、非同盟とあると思うのですがけれども、どこが主導権を握っていたとか、そういうことはあったのでしょうか。

沼田 トピックによりますね。核実験禁止については、後でやりますけれども、これは要するに交渉をやるか否かという議論をずっとやっていた。アメリカはマルチの交渉は嫌だと言っているわけです。ソ連とやっているから、マルチでひっかき回されたくないと言っている。しかし、ソ連のほうは交渉してもいいと言った。非同盟は、さっき申し上げたガルシア・ロブレスなんかは、交渉をすぐ始めるべしと言っているわけです。日本は、やっぱり被爆国として非常に関心があるし、発言もする。オーストラリアのリチャード・バトラーなんかは何事にも目立ちたがる人だから、主導権をとりたがる。というような形でワイワイ議論している。そのような感じです。

それから、化学兵器については持っている国が強いですね、議論するのは。アメリカは化学兵器にこのとき非常に重点を置いていて、ソ連ともバイで始めていたけれども、このマルチの場での交渉に重点を置いていたからアメリカは発言していたし、イギリスもポートン・ダウン (Porton Down) だったか、化学兵器を持っているでしょう。経験があるし、ソ連はソ連で化学兵器を持っていますからいろいろ発言する。その後、イラン・イラク戦争なんかがあったから、その影響もあったけれども、中東の国も発言する。というようなことで、どのトピックについてどの国が関心を持ってよく発言するか、活発であったかというのははっきりと分かれていました。

—— ちなみに、中国が必ずしも積極的ではなかったというのは、何か理由はあったのですか。

沼田 やっぱり今の中国と大分違うのでしょうね。当時は、中国はいい顔をしたがっているという感じですね。今ほど中国は強くないですからね。日本との関係で遺棄化学兵器の問題は提起していたけれども、ただ、それも公の場というよりもバイで言っていたな。僕の感じは、中国は日和見というか、自己主張をあえてやるよりも大勢を見ていた、一言で言えば *fence sitter* だったという感じですね。中国はグループに属していなくて、当時は中国一国でやっていたわけだから。

—— G21 に入っていたわけではないんですね。

沼田 ないです。そこがポイントですね。東側にも入っていないです。

—— 今もなんですよ。今も「Group of One」と言っていて。

沼田 今は自己主張の強いひとりグループ。

—— ちなみに、今少し確認したところ、1 個だけソースがあって、スウェーデンは当時中立というか、G21 が最初にできた段階から中立国が 8 か国いたみたいで、そのうちの 1 つがスウェーデンだっ

たみたいですよ。

沼田 ありがとう。僕もそれを確認したかった。スウェーデンは、そういう意味ではすごく活発でしたよ。

しばらく米ソが続きますけれども、よろしいですか、また軍縮会議に戻りますから。

■ ワシントンでの米国からのブリーフ

—— それでは、一度、軍縮代表部時代から遡る形で、米ソ軍備交渉に移り、前史的なお話をいただければと思います。1 番は既にお話しいただいている、1978 年から 82 年の在米大使館一等書記官時代のことです。いくつか追加でお話しいただけるといいことなので、ぜひよろしくお願いします。

沼田 私が前にお話ししたのはワシントン時代ですから、78 年～82 年、特に 80 年～82 年ぐらいについてお話ししたのですが、安保課長になったのが 84 年なので、その間 2 年間にいくつか起きていることがある。それを皆様の頭の整理のために補足したいと思うのです。これは私が直接関与していたことではないけれども、こういうことがありましたねという意味で振り返りますね。

82 年の 6 月～7 月にかけて米ソの交渉というか協議が行われていて、ポール・ニツツェとユーリー・グビチンスキー (Yuli Kvitsinsky) という人が交渉していて、有名な「Walk in the Woods」というのがあったわけです。森の中で散歩しているときに 2 人で案を出した後、それを結局米ソ両国政府とも拒否をしたという話なのですが、その中身というのは、米ソとも欧州に INF ミサイルを 75 基展開する、パーシング II (Pershing II) は展開しない、ソ連アジア部の SS-20 を 90 基に限定するという話があったとされています。ただ、これは政府案みたいなことにはならなかった。

それから、83 年の 3 月 30 日にレーガン大統領が暫定的な、interim agreement というのを提案した。それは米ソとも INF ミサイルの弾頭数を 50～450 の間に限定。これを 4 月 2 日にソ連が拒否をした。83 年の 11 月 22 日、23 日に西ドイツにパーシング II を展開。それで、ソ連はジュネーブの INF 交渉から退席した。84 年 11 月 24 日にレーガン大統領が米ソ間の Nuclear and Space Talks (NST) 開始を発表したというのが間にあるわけです。

それから、84 年～86 年の話ですが……。

—— すみません、一度大使館時代及びその後の数年間で切らせていただきたいと思うのですが、1 点質問をよろしいでしょうか。

この「森の中の散歩」案を拝見して思い出したのですが、アメリカの中でのニツツェあるいは軍縮畑の人と国防総省の間で結構対立があったようです。もし大使が大使館で勤務している時代にそういった軍縮畑の人と国防総省の対立が何かあったらそのお話をいただければと思うのですが、そういったご記憶はございますか。

沼田 国防総省と国務省というか、ニツツェなんかとの間の対立ですか。私のときはどうだろう。この前申し上げたかもしれないけれども、私がワシントンでブリーフィングを受けたときは国務省の Politico-Military Bureau だったのです。国防総省から直接受けていなかったの、ちょっとそこはよく分からないな、正直言って。

—— なるほど。アメリカ政府内の議論を見ると、日本の味方になってくれそうな議論をするのは国防総省の傾向が強いような気がして、そちらと連携するのかなと思っていたのですが、必ずしもそういうつながりはなかったですか。

沼田 私がいたときはそういう感じではないですね。私が去ってからそれはあったかもしれないけれども。82年～84年の間に。

—— レーガン政権が81年にできたときに、いわゆる79年のNATOの二重決定を新政権の下でも、とりわけ軍備管理の方を引き継ぐかどうかというのがアメリカの中で相当議論があったようなのです。強硬な人たちはそもそも軍備管理にも関心がなく、一方で国務省の人たちはそれにすごく抵抗するというような構図があったらしいのですが、国務省の方からブリーフィングを受けていたときに、政権交代による大きな変化あるいは継続みたいなどころについて受けた印象とかはありますか。

沼田 断片的にしかないですけどね。ブリーフィングはカーター政権のときから受けていたけれども、それは続いたということがあって。たとえば、ワインバーガーのところに大使やほかの人が行ったときに、SALT IIの交渉を続けるかどうかは分からないよというようなことを言っていたというのは記憶にあります。

—— やっぱりそうですか。

沼田 「We have to negotiate from the positional strength」ということを言っていましたから、SALTについてはそんな感じだったという記憶はあります。INFについては、この前話したときにどこまで言ったかな。途中までで次は政権が替わってからということで、まさに「Walk in the Woods」あたりからまたリバイバルしようとしていたという構図ではないですかね。

—— では、Politico-Militaryの人とは淡々と政権をまたいで、現状がどうなのかという実質的なところを話していたというイメージで。

沼田 そういう感じです。

■ INFに関する日米協議—ラウニー訪日、レイキャビク—

—— 次に、1984年から86年の安全保障課長・北米一課長時代の日米協議を中心に、外務省および日本政府の対応についてお聞かせください。

沼田 ここからは非常に複雑な話になって恐縮なのですが、僕も自分のノートを見ていて頭がこんがらかってきたのを何とか整理しようとしてみたので、あまり細かいところになると説明できないかもしれない。

私が聞いていた範囲をそれぞれに再現すると、まず85年3月12日、Nuclear and Space Talksが開始されます。4月にスコウクロフト元国家安全保障担当補佐官が日本に来て外務省幹部に説明をしたときに、いろいろなことを言っていましたけれども、1つはICBMについてソ連のほうがアメリカ

のミサイルをやっつけちゃうハードキル能力というものを相当高めていて、アメリカはなかなか対抗できないということを言っていました。ジュネーブ交渉については、INF について SS-20 の軍事的価値はパーシング II とかアメリカの GLCM (Ground Launched Cruise Missile) より高いと言って、SS-20 に対する意識を非常に高めていました。この話はまた後で出てきます。

それから、Strategic (戦略兵器) について、ソ連はアメリカの Bomber (爆撃機) 及び巡航ミサイルを懸念している。ICBM についてはソ連のハードキル能力をアメリカは気にしている。ソ連はアメリカの Bomber 及び巡航ミサイルを懸念しているので、攻撃兵器については合意が可能だろう。それから、SDI については、ソ連はアメリカが諦めることを要求していて、アメリカは SDI 自体を交渉の対象にする意思はないということを言っていました。

1985 年 4 月に INF についてのソ連提案というのがあって、その中身はモラトリアム。11 月まで欧州のソ連中距離ミサイル及び他の対抗措置を中断する。これについてアメリカのコメントは、INF 弾頭数でいうとソ連が 8 対 1 の優位なので、それを固定されるというのは駄目、SS-20 が 1200 弾頭を超えているが、ソ連がこれを大幅に削減するインセンティブがなくなるから駄目だということをアメリカは言っていました。

この後、ソ連は、アメリカがヨーロッパからパーシング II 及び GLCM を全て撤去することを要求しました。と同時に、ソ連は欧州地域配備の中距離ミサイル SS-20、SS-4 及び SS-N5 というのがあるのかな、それを英仏のミサイル弾頭数と同じレベルに達するまで撤去を開始する。要するに、イギリス、フランスの核をカウントするという思想です。そこの同じレベルに達するまではソ連は引っ込める用意があるという提案をしたのに対して、アメリカとしてそれは受け入れられない、現行の不均衡を維持することになる、SS-20 の増強を許す一方、アメリカの長距離 INF 欧州展開を否定する口実として英仏のミサイルを利用していると。長距離ミサイルの制限、グローバルな削減というのをソ連は拒否しているから、これは受け入れられないということを言っていました。

次が有名な日本の「ギャング・オブ・フォー」です。86 年 2 月 7 日にラウニー (Edward Rowny) 中將、米ソ交渉の代表が日本に来てブリーフをした。当時はまだ山田中正国連局長ですね、それから北米局の渡邊允参事官、私もこのときは北米一課長として出ていましたけれども、そこでラウニーが言ったアメリカ側の提案というのは、「50% reduction of strategic arms as a first phase」ということと、INF についてレーガンがこういう手紙を出そうとしているということを言ったのです。

それは、ソ連はウラル山脈の西側、すなわちヨーロッパ側に配備した SS-20 の全てを廃棄し、アジアに配備した SS-20 は 100 基に半減する。アメリカは西ドイツに配備したパーシング II 108 基と、英国、西ドイツ、オランダ、ベルギー、イタリアに分散配置した GLCM 464 基を廃棄するという提案でした。これを聞いて、私もそのブリーフィングの場にはいましたけれども、山田国連局長だったかな、何人かの人から、これはアメリカの核抑止力の信頼性、日米安保の実施に深刻な影響が懸念されるとの発言があった。たとえばこれでいくと、三沢の F-16 とか日本周辺にいる空母の艦載機等の Forward Based Systems に影響を与えるということなので、日本にとって非常に深刻な影響があり得る、恐らく総理から何か答えることになるだろうと言いました。

そこで、国連大使をやっておられた佐藤行雄さんの本を読まれた方はおられるかな、『差し掛けられた傘』。あれに出てきます。岡本行夫君も自分の著書の中で書いているようですが、そのときに外務省の中で佐藤行雄官房総務課長と僕の前の安保課長だった加藤良三条約課長、岡本行夫安保課長、宮本雄二軍縮課長の 4 人が集まって頭をひねって出したのが、ここに書いてあるソ連の SS-20 を全てソ連中央部のバルナウル基地 (シベリア南西部) に集める、そうすると西欧と日本がともに射程内に入って両者がリスクを共有するようになるという案をつくって、それですぐその案を説明しに岡本君がワシントンに飛んで、宮本君がたしかヨーロッパに行って説明して。佐藤さんの本に書いてありますが、

そのときにアメリカでリンハード（Bob Linhard）核軍縮担当大統領補佐官——同じ人の名前が後で出てきますけれども——が、日本からこういう事情にただ「ノー」と言うのではなくて、具体的な対応が出されたことを非常に refreshing に感じると言ったとのことでした。

それはそれでインパクトがあって、次に 7 月 22 日にラウニーがまた日本に来て梁井新一外務審議官に説明したときのアメリカの案というのが、防衛システムについては ABM 条約で認められる R&D 及び関連実験を 1991 年まで双方が続ける。攻撃兵器削減に合意があれば、ディフェンス・システムの利点を他方と共有できる。要するに、SDI のディフェンス・システムを持つことのアドバンテージを他方と共有できるということを言って、攻撃兵器については弾道ミサイルの弾頭数を 50%削減。Air Launched Cruise Missile はより低い数まで削減。そして、中距離兵器については依然としてゼロまで削減を望むが、暫定的に同数のグローバル・リミットまで削減する。アジアにおける削減なくして欧州における削減なしとの固い決意を掲げる。アジアにおける削減なくして欧州における削減なしということに日本の提案の影響が明らかに見られるということですね。

このときに、僕の当時のノートを見ると、いろいろな形でアメリカの国務省とか国防総省の偉い人が、あの日本の提案は非常に良かったというようなことを言っていますね。

次は、これはまだ私が北米一課のときですけれども、86 年 10 月、レイキャビク（Reykjavik）の首脳会談です。これを私は北米一課長としてフォローしていて、ワシントンから折田正樹政務参事官がレイキャビクまで行って一生懸命フォローしたのだけれども、正直言って、なかなか何が議論されたのか分からなくてすごく苦労しました。すぐ何かコメントを出さなきゃいけないけれど、断片的にしか情報が入ってこなかった。そのときはなかなかわからなかったのですが、後からいろいろ聞いてまとめると、そのときの主要な点は、次の通りだったようです。

- （1）10 年間米ソとも ABM 条約から脱退しない。ABM 条約で認められている research、development and testing を行いつつ同条約の全ての規約を遵守する。
- （2）最初の 5 年間（1991 年末まで）に両国の戦略攻撃兵器は 50%削減する。
- （3）次の 5 年間（1996 年末まで）に両国の残りの攻撃用の弾道ミサイルが削減される。このように両国の攻撃用の弾道ミサイルが全面的に削減された後に、米ソは別途の合意がない限りミサイル防衛を配備できる。

以上でまとまる方向に行っていたと思っていたら、そこで弾道ミサイル防衛の扱い、ballistic missile defense の扱いをどうするかということに、レイキャビクでの 2 日間のうち、2 日目の議論の焦点が集中した。

そこで、ゴルバチョフが、宇宙に配備する全ての弾道ミサイルシステムの research、development and testing は「laboratories」に限定されるべしと主張した。レーガンは、これは ABM 条約の改定につながる交渉になるからと言ってそれを拒否して、要するにこの「laboratories」という一言をめぐって交渉が決裂した。この「laboratories」というのは、物理的に壁があることを意味するか否かとか、宇宙における実験はどうか、laboratories in space はどうかとかいろいろな議論があったけれども、これで交渉が決裂してしまった。

レイキャビクで何が起きたかすぐにはよく分からなかったのですが、省内で直後に出ていた議論というのは、「INF についてソ連が予想外にドラスティックな提案をしたようだが、START で攻撃戦略兵器をゼロにした場合にどういうことになるのか？」「Cruise missile だけに頼れるのか？」

「SDI ではいかなる妥協の余地があるのか？」「弾道ミサイルをゼロにした場合に SDI の意義というのはどうなるか？」というような、いろいろな点がよく分からないと話していました。

次のスライドでなぜいきなりエーデルマン（Kenneth Adelman）が出てくるかというと、実は私はこのときはもう、86 年 12 月の末に軍縮代表部には赴任したのですが、赴任してすぐワシントンで 87

年 1 月 21 日に日米軍備管理・軍縮協議というのがあったのです。これに私はジュネーブから飛んでいった。それには、日本側は中平立国連局長、宮本雄二軍縮課長、それに私なんかが参加していました。ACDA のほうはエーデルマン長官とか次長とかいろいろな人が参加していました。そのときにエーデルマン ACDA 長官は、レイキャビクについてあれは一種のチェスゲームだったと言っていました。ゴルバチョフが ABM 条約を 10 年間遵守するということをポンと出してきて、それに対してレーガンは全ての攻撃的弾道ミサイルを撤廃するということで対抗したと。ソ連の意図は、そういう議論をすることによってアメリカ国内での SDI 支持を減らして、ヨーロッパにおける SDI に対する怒りを高め、START 及び INF へのヨーロッパの熱意を煽ろうとして失敗したというのがエーデルマンの見方でした。

他方、このときのレイキャビクでのゴルバチョフの狙いについてというか評価について、グッドビー (James Goodby) という START 交渉米側交渉団の副団長をしていた人が『Reykjavik Revisited』という本の中で、ゴルバチョフがこう言っていたということを書いているのです。「核兵器のない世界のビジョンを再確認して、中距離及び戦略核兵器削減の合意への道を開いたことにより、軍備管理を推進する意味があった」。今から考えてみると、そうだったのかなという気がしますけどね。

このレイキャビクの議論について、86 年 11 月にラウニー代表がまた来たときに柳谷次官に説明したのは、strategic weapons については、ICBM、SLBM (Submarine-Launched Ballistic missile)、Heavy bomber を合計して 1600 基、warhead の数は 6000。Heavy missile というのを制限しなきゃいけないというので、そのための Sublimit が必要であるという議論をしていて、そういう意味で ICBM と SLBM を合わせて 4800 warheads。そのうち、permitted missiles というのかな、これは何のミサイルだったかな、どこかに中身が出ていましたけれども、「silo-based light and medium missiles with 6 or fewer warheads」を別とすると、permitted missiles の warheads は 1650。SLBM については、検証の手段があれば交渉の対象とすると言って、このときにラウニーが「外務大臣の書簡については承知しています。Forward Based System の問題とともに注視しています」と言ったと僕のノートに書いてあるのです。これは戦艦ニュージャージーの話だろうと思います。この前の説明のときに倉成大臣の書簡という話が出てきましたよね。倉成大臣がこの年の 8 月ぐらいに、戦艦ニュージャージーはトマホークを載っているので気にしているという書簡を出したという話があったと思うのですけれども、恐らくそのことを言ったのだと思います。

それから、検証の話をしはじめて、on-site inspection を含む包括的データ交換をする必要があるということ saying。INF についてアメリカの提案は、ソ連のアジア部、アメリカに各 100 弾頭。ここでアラスカの問題が出てきます。アメリカに 100 弾頭という場合にアラスカに配備するものを含む、それをソ連は嫌がっている。それから、アメリカは短距離 INF の撤廃を主張しているのに対して、ソ連は短距離 INF を freeze しろと言っていると。そういう状況で、アジアについては課題がまだ残っている。他方このときにラウニーは、ソ連は日本をストライクできるところにミサイルは置かないようなことを示唆していたと言っています。

それがレイキャビクについての話です。

■ 日米軍備管理・軍縮協議

—— 大使、よろしければ、一度ここで質問を挟ませていただいて。

沼田 その次の日米軍備管理・軍縮協議のところまでやっちゃっていいですか。そこから後は、ジュ

ネーブでアメリカ側のブリーフを受けた話になるので。

それで、日米軍備管理・軍縮協議の話ですけれども、さっき申し上げたように1月に僕がジュネーブに着任してすぐ飛んで行って、出ていた人はケネス・エーデルマン ACDA 長官 (Director, ACDA)、エメリー (David Emery) ACDA 次長、それからバーンズ (General William Burns) という、この人は何回も出てきますけれども、88年に ACDA の長官になった人だと思います。当時は国務省の Politico-Military Bureau の局長だったと思います。それから、ボブ・リンハードという NSC の人は、さっき申し上げたレーガンに対する我々の対案を岡本安保課長が説明した人。そのときにエーデルマンなんか言っていたのは、INF についてグローバルな削減が必要である。SS-20 は、世界の人口の 60%、地球の表面の 50% をストライクすることが可能である。Short range INF のうち SS-20 は射程 900 km もあるので、それも懸念の対象である。ソ連のアジア部の SS-20 は 571 弾頭ある。アジア部に 100 弾頭とすると SS-20 が 33 基となるけれども、これをソ連としてどこに置くかが問題だろう。他方、アメリカとしては国内政治上アラスカに配備せざるを得ない。アラスカに配備するとソ連国内の 400 のターゲットを狙えると言っていました。それから、ソ連が INF と SDI をリンクすると言っていたのだけれども、仮に INF を SDI とのリンクから外して削減交渉を進める場合、アジアとヨーロッパはどうするかという話になって、その結果がアジアに 100 弾頭となると日本の利益には資さないことになる。

SDI については、ソ連を心配させて軍備管理交渉を活性化しているというメリットはある。ソ連自身が自分の金とエネルギーをたくさん注ぎ込んできているので、西側がやるとするともっと多くのことをやるのではないかということを承知している。だから心配している。この SDI ということによって ground launched missile (地上発射ミサイル) の重要性を減殺する strategic end-run、——「end-run」というのは、日本語で何て言ったらよいでしょう？

—— ヒット・エンド・ランですかね。

沼田 end-run になり得ると。皆さんが分かればいいんだけど、strategic end-run というのを言っていましたね。

それから、ソ連の方がアメリカとか西欧に比べ、ミサイルのシェルターの hardening とか分散などが容易にできる。西側では mobile missiles の配備というのはなかなか困難だと言っていました。

そこで一旦区切りますか。

—— 恐らく皆さん、たくさん質問があると思うのですが、どこから始めましょうか。

—— 質問ではないのですけれども、今の end-run のところは、ちょっと調べると、「回避策」とか「うまくかわす」というアメフト用語。

沼田 アメフトか。

—— では、撃ち込まれたのを倒す可能性があるということですね。

—— 戦略的回避策になり得るといような感じですかね。

—— and じゃなくて end でいいのね。

沼田 end-run です。だから、ミサイルに対してミサイルで対抗しようとするといろいろ大変だから、アメリカもやっていられないと。ミサイルを撃っても防衛できるよということになると、それで戦略的にこっちが優位に立ち得る、そういう意味での end-run であるということだと思いますけどね。

—— 今 SDI の話が出たので、SDI の質問をまずさせていただければと思います。INF に対する日本の立場はかなり分かりやすく、アジア部の SS-20 を減らしてくれ、なくしてくれということだと思うのですが、SDI が米ソ交渉に含まれる可能性に対して、日本側、外務省はどういうふうに見ていたのですか。やっぱりこれは含まれてほしくないのですかね。

沼田 米ソ交渉に含まれてアメリカが SDI を引っ込めないようなことになったら困るということなことを言ったかどうか。それはどうだろうな。ただ、日本が SDI の研究参加表明したのはいつでしたっけ。86 年？

—— 86 年の 9 月ですね。

沼田 僕はそのときはもう直接関与していなくて、藤井北米局長と岡本安保課長なのだけれども、どうだろうな。僕自身が SDI というのは本当に効果があるのかしらという気持ちがあったのです。この前申し上げたかもしれないけれども。

他方、この ACDA の説明あるいはラウニーの説明にあるように、アメリカがあの問題を出したことによってソ連が軍備管理に真剣になったということは間違いないと思うので、そういう観点から言うと、それなりのメリットは日本も認めていたということになるのではないかと思います。

—— では、交渉のテコとしての役割を認めているものの、それ自体が……。

沼田 今から考えるとね。当時どうだったかというのは。交渉のテコとしての役割というのはいいかもしれない。

—— それが交渉の対象になっていたとしても、そこまで大きな問題はないと見ている傾向は強かった可能性がありますね。

沼田 そうですね。そういうことだと思います。後知恵の部分がかなりあるけどね。

—— 本筋の INF に行く前にもう 1 点伺いたいことがあって、START で戦略兵器が削減されること自体は、外務省にとってはどういう意味を持っていたのですか。50%に減る、一部ゼロになったらどうなるだろうねという議論が出たということだったのですが、減ること自体は基本的には歓迎の立場だったのですかね。

沼田 やっぱり歓迎ですよ、日本の基本的立場からいって。

—— 均衡さえしていれば問題はないという。

沼田 そうですね。日本自体が核の傘の下に入っているわけで、この傘が有効でないと困るわけだし。削減すること自体困りますという話はしていない。

—— 外務省の中で、攻撃兵器がゼロになった場合はどうなるという議論が出たということですが、何でも、何でこの議論が出たのでしょうか。

沼田 攻撃戦略兵器は、両方ゼロになればいいような気がしますけど。この段階では本当に、レイキャビクの直後というのはそんなに詰めた議論をできる状況じゃなくて、正直言って、何が起きたのかよく分からなかった状況での話です。

—— その中で、そういう可能性があるとは。

沼田 直後というのは、まさにその 2～3 日後の話ですからね。レイキャビクが終わって、何があったのかきょんととしていて、何か大きな合意になるかと思ったら駄目だったようだ、何が起きたのだろうというようなときだから、そんなに議論していない。

—— ちなみに、この省内の議論というのはどういう場で行われたのですか。

沼田 これは次官のところとか、とりあえずどういうコメントを出すかとかそういうような議論ですから、まだ材料が集まっていない時点での議論ですよ。冷静に判断する材料が集まったのは、ラウニーから柳谷次官に対する説明なんかである程度はつきりして、さらに軍備管理・軍縮協議は翌年の 1 月になって ACDA からいろいろ説明があって、ソ連が何を狙っていたかを聞いて、ああそうか、全体としてこういうことだったと思った、そんな感じですよ。

—— 今のところで、ラウニー次官の 11 月 15 日の訪日ですが、これは大使も出席されていて直接聞いていたということですよ。

沼田 そうですね。僕のノートには書いてあるから、いたに違いないけど。

—— このときは北米一課長で、そこから 2 か月後にジュネーブに行かれたわけですよ。

沼田 もう軍縮代表部に行くことは分かっていました。

—— 分かっていて、だから、継続してこの議論には参加されていたということですかね。

沼田 北米一課長としては、86 年の 2 月にも一応聞いていますけどね。

—— この 1 月の日米軍備管理協議の「仮に INF を SDI とのリンクから外して削減交渉を進める場合、アジアとヨーロッパはどうするかという話になって、その結果がアジアに 100 弾頭となると日本の利益には資さない」と言う点は、まさにそうだと思うのですが、これはアメリカ側からの説明ということですか。

沼田 そうです。アメリカ側からです。

—— アメリカ側が日本側に対して、利益に資さないからアメリカ側としてはそうはならないようにすると。

沼田 だから、ソ連の INF 削減は、日本はやってもらいたいわけでしょう。それを、SDI を口実にしてソ連が INF 削減を進めないと日本は困るだろうけれども、仮に SDI とは関係なく INF 削減を進めるということになったとしても、その結果アジアに集めてしまったのでは日本には依然として大変な問題になるという部分もあり得るよ、その部分を我々は注意して見ていかなきゃいけないということを行っているわけです。

—— 日本側に安心感を与えるという感じではないのですか。

沼田 ではないです。

—— そういう方向にならないように。

沼田 むしろ、そう簡単にはいかないかもしれなということ。

—— だから、前年の逆提案というか、ギャング・オブ・フォーの話がありつつも、やっぱりレイキャビク首脳会談での話を受けて、アメリカ側としても交渉の中でどうなるか分からないという部分が微妙にあったということですね。

沼田 そのとおりですね。この問題は十分後までもめますからね。

—— ちなみに、この段階でアメリカはアラスカに 100 基置いて、それでソ連のアジア部を相殺するというアイデアを出しているのですが、外務省側からするとこれで安心できるのですか。

沼田 どうだろうな。でも、ソ連の中に 400 ターゲットがあると言ってましたね。要するに、アメリカが言っているのは、アラスカに置いておくことは大事だ。アメリカは太平洋の向こうのソ連の太平洋に近い部分のこともちゃんと考えているということを言っている。だから、それは参考として我々は聞いていたということですよ。それで十分かどうかという議論までしたかどうかは覚えていないけれども。

—— あともう 1 点ですけども、日本側が提案したという話、佐藤さんの本などでも書かれていますし、アメリカ側の回顧録なんかでも、日本とずっとやっていた方はポジティブに、日本から初めてああいう具体的な提案があって、リフレッシュだという話が書かれています。ラウニーの回顧録『It Takes One to Tango』を見ると、彼自身は非常に評価している書きぶりなのですが、ただし、米国の政権内、とりわけ国務省の中には、日本の提案に対してのネガティブな反応、怒りみたいなものがあったという記述があるのです。

沼田 誰が怒ったの？ 僕は知らないけれども。

—— 具体的な名前は書かれていないのですけれども、国務省の中に交渉をもっと進めたい人たちがいたとすると、日本の立場というのは米ソ間で妥協を考える中で日本側がストップをかけた形になっているので。そういう反応があったとラウニーは書いているのかな、と。そういう国務省などから別の反応があったというのを耳にしたということはありませんか。

沼田 僕自身は耳にしていません。あったのかもしれないけれども。

—— ちょっと話が戻ってしまって恐縮ですが、ギャング・オブ・フォーの話の前段階ということで。ここはラウニーさんがレーガン書簡の前に説明に来てくれたということですね。

沼田 そうそう。

—— 実際にレーガンから中曽根首相にアジア部を残す提案をする前に、ラウニーが情報を……。

沼田 いやいや、たしか手紙が来ました。

—— もう来ているんですか。

沼田 総理宛てにたしか来ました。あのとき。僕自身はその手紙を見たかどうか記憶がないけれども。それに対する返簡という形で出したと思います。

—— では、既に来ていて、そこでラウニーの説明があったんですね。

—— アメリカ側の資料を見ると……。

沼田 アメリカがこういうことを考えているよというので。

—— そうですね。アメリカ側の資料をたどっていくとレーガン政権内で NSDD (National Security Decision Directive) 210 という政権のトップレベルのメモが 2 月 4 日に決裁されていて、そのタイトルが「ゴルバチョフ軍備管理提案に関する米国の反応についての同盟国との協議」。つまり、これから同盟国に対して協議をやっていくということが決まっていて、それを受けて書簡が先に発出されて、アジアにはラウニーさんが、ヨーロッパ側にはニツェが同時に飛ぶという流れですね。

沼田 書簡を出したと書いてあるでしょう。

—— 書簡は 2 月 6 日付でマンズフィールド大使から届けられているようです。

—— その説明だったんですね。

沼田 説明に来たわけです。

—— ニッツェはリーマン（Ronald Lehman）という人と欧州に、ラウニーはさっき出てきたリンハードとアジア（日本、中国、韓国、豪州）に行ったようですね。帰国後、ヨーロッパ・アジア双方のリアクションをまとめたメモが大統領宛に送られています。

沼田 レーガンからの書簡で来たから、こっちもちゃんと答えなきゃいけないから大変だったわけです。でも、今から考えると、ギャング・オブ・フォーがよくこの短い間にまとめて出したと思います。

—— ギャング・オブ・フォーのコメントの中では日米安保の信頼性が低下するとは書かれているのですが、それはあくまで世論の認識の中で低下するという書きぶりですね。そこに対する大使の今回提示していただいたメモでは、どちらかという和外務省の中でもアメリカの核抑止の信頼性は低下し得るという印象を受けるのですが、この点どうだったのでしょうか。

沼田 いやいや、僕はそこまで細かく考えて書いたわけじゃないです。でも、世論の認識として低下したら、やっぱり全体として低下するでしょう。

—— 政府としてもそれは同様だと。

沼田 それはやっぱり心配になります。

—— あと、三沢の F-16 と艦載機が INF の影響を受けるというのは、これは力が相殺されてしまうからということですか。

沼田 そうですね。

—— これはもしかしたら、アジア部にはアメリカの中距離核ミサイルがないから、ソ連がこの辺りを……。

—— 狙うということになってきたら。

沼田 そうそう。

—— 真っ先にたたいてくるだろうという感じですよ。

沼田 たたいてくる。

—— 先ほどの SDI の参加表明については、何か記憶されていることはありますか。省内でどういう雰囲気であっていったとか。

沼田 僕は北米一課に行っちゃっていたから、参加表明自体には関わっていないです。北米局の仕事の仕方はそういうことになっていたから。藤井さんの回顧録を見ると、大分苦労されたと書いてありますね。

—— 1点だけ確認というか、さっき伺っていて「うん？」と思ったところが1点あって。先ほどの倉成大臣のニュージャージーに関する書簡のところなのですが、これはもしかすると SLBM じゃなくて SLCM ですかね。それだとよりすっきりするかなと思ったのですが。

沼田 僕のメモでははっきりしないけれど、倉成書簡は SLCM のことを言っていたので、SLCM の可能性が高いですね。

—— 話が少し戻ってしまうのですが、ギャング・オブ・フォーの話で、この中曽根書簡を作るときに外務省の中でどのような議論があったのか、もしご記憶があれば教えてください。

沼田 僕は絡んでいなかったから分からない。佐藤さんの本に書いてあるとおりでと思います。要するに、宮本課長が当時官房総務課長だった佐藤さんのところに相談に来て、困った、どうしようと言って、それで佐藤さんが岡本君と宮本君、加藤さん、当時条約課長だったかな、4人で議論して、安保課に配属されていた自衛官も一緒になって西欧と日本が共に射程内に入る「ソ連中央部」がどこになるかと一生懸命調べて、それで案を作り、それをすぐ総理から大統領への返簡という形でまとめて出したということです。僕はそこのプロセスに関わっていないから、よく分からないけど。ただ、北米局長は決裁している。それじゃないとこんなに早く手紙は出せませんね。外務審議官もそうか。外務審議官は分かりません、正直なところ。

—— この2月7日のラウニー特使とのやりとりのところにギャング・オブ・フォーの方々はいないのですか。

沼田 いやいや、ギャング・オブ・フォーは岡本安保課長と宮本軍縮課長がいましたよ、たしか。山田国連局長もいましたから。

—— 通常こういう親書、特にアメリカからの親書が来るときというのは、事前に予告とかあるのでしょうか。この件はかなり時間的に厳しいものだったと思うのですが。

沼田 必ずしもないのではないですか。

—— そうすると、ほかの書簡を処理するというか、対応するときというのはどうなのでしょう。もう少し時間的に余裕があったり全省的に会議をしたりということになるのでしょうか。

沼田 いろいろなケースがありますけど。親書といってもいろいろありますから。あまりいい例じゃないかもしれないけれども、この前話したかな、ロッキード事件のときに三木総理からフォード大統領に書簡を送りました。早く真相を究明したいので資料を送ってくださいという。あのときの手紙は、官邸から案が来たのかな。官邸から案が来て北米一課で英語を作って僕が宮澤大臣の決裁をとってそのまま官邸に戻した、そんな感じですかね。急いでいるといろいろなことが起こります。たとえばロッキードについてどういう手紙を出すかというのは、すごく秘密密度が高く、大会議をするというわけにもいかない。

—— ワシントンで87年1月に開かれた日米協議ですけれども、これは定期的に行われていた協議

なのですか。

沼田 僕が出たのはこの1回ですけれども、1年に1回ぐらいはやっていたと思います。もっとも、僕は軍縮代表部に2年間いたけれども、この1回しか出ていません。

—— そうですか。実は、この協議が開かれたという記録を5年前にレーガンライブラリーに行ったときに見つけたんです。ただ、中身が分からなかったから、ああ、こういうことを話していたんだというのが今日分かって。

沼田 期せずして分かった？まだ公開していないのかな。

—— そうですね、アメリカ側は全く。日本側がこれから出るか出ないかというところなのですが。

■ ジュネーブでの米国からのINFブリーフ

—— 軍縮代表部時代のNSTに関するブリーフィングについて何えればと思います。いろいろ論点があったかと思うのですが、まずINFをメインで何えればと思います。

沼田 ここから後は結構複雑なのですけれども、何回かにわたるブリーフィングなので。ジュネーブにおける米代表団ブリーフィング。

ブリーファはそのときによって違いますけれども、全体の交渉のアメリカ側のトップはカンペルマン (Max Kampelman)。彼と会ったのは1回ぐらいですね。あと主なのは、INFのグリットマン (Maynard Glitman) 大使。彼は山田大使とフレッチャースクールで一緒だったこともあって、かなり懇切丁寧にブリーフしてくれたという感じがします。あとウッドワース (John Woodworth) という人と、ファーストネームは分からないがマコーネル (McConell) という人がいました。STARTは、さっき名前が出ていたロナルド・リーマン、それから Defense and Space はハムナー (Reed Hamner) という人だったと思います。日本側からブリーフィングに出たのは山田大使と私の2人です。

まず、INFは2月9日から始まったのですが、だんだんソ連との議論が詳細に入って議論が深まると、相違点もいろいろ出てくる。1つは、Strategic という概念を強調している。ソ連の言う Strategic というのは「CROT」と言っています。「Capable of Reaching Other Territories」ということで、ソ連はアラスカから撃つと Other Territories、ソ連にも届くのは駄目なんだということを言っていたけれども、アメリカとしてはアラスカ配備の方針。で、ソ連はアラスカ配備を阻止しようとしていた。アメリカ側はアラスカに配備しなければならないと言った。

それから、ショートレンジのINFは、ソ連はウラル以東のシステムを最初除外すると言っていたけれども、アメリカは断固拒否。

検証については、ソ連は、最初は撤去 (elimination) の On-Site Inspection を最初出して一旦撤回して、また復活してきた。この段階ではまだ検証の詳細には入っていない。

重要なのは、ソ連はヨーロッパから5年以内には撤去するとしつつ、グローバルゼロ実現の時期、要するにアジアからの100をいつ撤去するかということについては時期を明らかにしていないということをやっていました。

あと話題になったのは、短距離システムというのを実際にどうやって撤去するかというプロセスの

問題。

さっきのリンクの問題で、ソ連は宇宙とのリンクを主張しているのに対して、アメリカはリンクを否定して、INF 協定自体をやることに十分な意義があるということで、これは agree to disagree。事実としては、3 月 4 日に INF 条約のアメリカ案というのをアメリカ側が提示した。

次のブリーフィングは 3 月 5 日で、ソ連から一般原則以上のものを引き出すのは困難だった。Strategic という概念についてソ連はアラスカとの関連で固執しているけれども、アメリカはそれが前例となることを懸念して受け入れていない。アメリカは、欧州、アジアにかかわらず依然としてゼロとすることを希望している。verification の問題をソ連は後回しにしているようだ。ゴルバチョフは 2 月 28 日に INF と宇宙とのリンクを外すということを言明した。ここで外すということになった。

次に、4 月 22 日のブリーフィングで、アジアに 100 弾頭とのソ連の主張は、日本、中国に対する政治的考慮に根差すものであって、しかるべきときに政治的カードとして使おうとしている。軍事的には redundant だし、要するにそんなに交渉するような重要な問題ではないと思うと言っていました。

ソ連は、チェコと東独からの短距離 INF を撤去して廃棄することをオファーしてきた。アメリカ側は、英、仏、独のシステムを含まず、米ソのシステムをグローバルにゼロとすること、ゼロでないならば米ソが同じ数とすることを主張している。

それから、ソ連がパーシング I-a (Pershing I-a) の話を提起してきたらしくて、これを条約の中にきちっと書けということを言っていたみたいです。パーシング I-a は古くて近代化が必要なので、既に貯蔵中のものとして明示的には書いていないけれども、条約にカバーされている。だから、わざわざ書く必要はないということをアメリカは言っている。

ここで、これは我々から質問したのかな、アメリカ側は NATO との関係はどうなっていますかと聞いたら、「容易ではない。NATO の中に、これをやると柔軟反応戦略が崩されちゃうという強い意見がある。それ自体は legitimate な疑問なのだけれども、核兵器を廃棄するにつれて通常兵器を増強していけばいいとアメリカ側は考えている。NATO の中は賛成と反対で dichotomy がある」と言っていました。それから、Decoupling 云々ということと言われるけれども、あれは「frame of mind」と言ったかな、心の持ちようの問題で、あまりそれを言っていると自己充足的予言 (self-fulfilling prophecy) になってしまうと言っていました。

それから 4 月 27 日、INF 条約ソ連案というのが提示されて、欧州配備の米ソ長距離 INF を 5 年以内にそれぞれゼロとして、ソ連アジア部及び米国本土に配備する長距離 INF を各 100 弾頭に限定するという案がソ連から出てきた。

6 月 16 日にアメリカがグローバル・ダブルゼロを提案した。米ソそれぞれの長距離・短距離 INF ミサイルシステムの全廃を提案して、7 月 22 日にソ連がグローバル・ダブルゼロ提案を受諾したということです。

次に、8 月に、私の記憶する限り 1 回だけ、アメリカの代表団が軍縮会議 (Conference on Disarmament) の西側の同盟国に対して米ソ交渉についてのブリーフィングをやりました。そこでアメリカ側の INF についての説明は、グローバル・ダブルゼロにより局面は大きく打開され、署名した条約を上院外交委員会に 88 年 2 月か 3 月に提出できる見通しになったということでした。

でも、検証が最大の課題であると言って、検証の手段としては、日本語になかなかできないのでそのまま英語で書いてありますけれども、Perimeter portal monitoring、Tagging (physical, numerical accounting of items)、Ban on flight-testing (encryption) などが議論されている。

それから Challenge inspection (抜き打ち査察) の問題も出てきているけれども、これは化学兵器の方が難しい。西側の国々が一生懸命やっている化学兵器の交渉の中で Challenge inspection というのが非常に大きな課題だったので、その質問がどうしても出るわけです。それに対して、化学兵器は

施設が大きいし、生産する量も多いし、秘密の生産及び貯蔵が必要だし、ある程度のインフラがないと査察できないという意味で、ミサイルよりも Challenge inspection は難しいと思う。ソ連は declared sites の査察には合意していて、Suspected sites の査察は明示的には受け入れていないが、除外もしていない。

それから、同盟国との関係。ミサイル配備国 (basing countries)、つまりイギリス、西ドイツ、ベルギー、オランダ、イタリアとの協議を終えようとしている。これは verification についても配備国とずっと協議しているわけですが、その協議は終了しようとしている。それから、ソ連は第三国の基地を査察する権利を求めようとしているが、アメリカ側は「out of the question」と回答している。パーシング I-a の問題をソ連は言っていたけれども、あれは政治的プロパガンダだから、そのうち諦めるだろう。

量が多いけれども、続けてやっちゃいましょう。9 月の末、何日だったかちょっとはつきりしないけれど、このときにアメリカが検証議定書の中で「permanent inspection, tagging, non-encryption」というのは外したと言っています。

On-site inspection は大体ソ連と合意しつつある中身ですね。まず、base-line inspection というのをやって、initial inventory をやって、あとは base-line inspection は quota、年何回というようなことで数を限定してやる。それから、on-site inspection of elimination、廃棄の現地査察というのをやるのだけれども、ずっと続ける必要はなくて、3 年ぐらいたったらなくなるだろう。

それから、on-site inspection of facilities listed in the Memorandum of Understanding。お互いにどういう facilities を持っているかというのは Memorandum of Understanding でリストを出して、それについて年何回と回数を決めて on-site inspection をやっていく。異なる場所の間のミサイル移動を通告することによって inventory tracking record を維持していく。

suspect sites について、これはあらゆるサイトについていきなり査察をかけるという challenge inspection に代わって議論されていた suspect sites、疑い深いサイトについての challenge の中身ですね。short-notice, mandatory challenge inspections を suspect sites についてかけるという話については、年何回という quota を定めていこうと。当初は第三国にある施設も考えていたけれども、対象にするのは生産禁止、飛行実験禁止に関連する米ソの地上発射クルーズミサイル施設を対象とする。その期間は何年間にわたりやるということを決めようとしている。その期間を過ぎると新しいミサイルの製作は困難となる。これは前例のない徹底した査察であり、これを続けていくと、いずれ基地の diagram (図面) を提供する必要が生じるだろう。

ソ連は、INF ミサイルと関連し得る第三国の基地を査察する権利を要求しているけれども、それが何を意味するのか不明である。フィリピンのスービックのことを考えているのかなというようなことを言っていましたけれども。アメリカ側から見ると Cam Ranh Bay になるのかな。日本には言及していない。

パーシング I-a については、アメリカは条約に規定することを拒否している。パーシングというのは、ミサイルを一旦基地から撤去して、どうやってそのミサイルをなくすかという話なのだけれども、ミサイル撤去の 1 年後、弾頭を取り出して inoperative にする。特別なところに貯蔵して切り刻むということをやっていました。長距離 INF については 3 年以内、短距離 INF については 1 年以内にこれを行うと。

あと、この段階になるともう協定ができるという感じになっているので、上院でどうなるか。上院審議においてナン (Sam Nunn) 議員がなかなか難しい。交渉記録を開示することを要求されるだろうけれども、秘密指定を解除するのはできないというようなことを言っていました。

そして 11 月の初め、これはジュネーブでもブリーフを受けましたし、国連の第一委員会があつて

我々はニューヨークに出張していたので、ワシントンで ACDA にも行ってラウニー特使とバーンズ ACDA 長官と会った。そのときに、「98%できている。ソ連は署名すると確信している」と言っていました。

検証については、SS-20 と SS-25 というのは造る最初の段階がよく似ているので、その suspect site inspection というのを議論している。それから、ソ連が declare した facilities の inspection については、何年間は続けて、その後またやるかどうかということについて協議することを考えているが、その何年間というのを決めようとしているという話だったと思います。また、ソ連の主張として第三国にミサイル、技術を移転しないということを入れようとしている。それに対してアメリカは、条約に違反するようなことをやる意図はないと答えている。

それから、follow-on negotiations の話があって、ソ連は戦術航空機のことを考えているが、アメリカは核・非核両用機を交渉対象とするつもりはない。それから、第三国査察の話はなくなった。suspect site inspection、さっきの challenge inspection です。アメリカは 15 箇所を 10 年間ということを書いて、ソ連は最初の 5 年間 10 箇所、次の 5 年間 2 ないし 3 箇所ということを書いている。

米ソとも INF 配備国と合意済みであって、もう 1 つ、廃棄のメソッドとして発射しちゃうという Launch to destruction というのがあって、これを最初の 6 か月に 25%やる。ただ、実験そのものではないというような議論をして、12 月 8 日には米ソは署名した。翌年の 5 月 27 日にはアメリカが批准して、ソ連が批准したのが 5 月 28 日。6 月 1 日に発効した。

以上です。何かいろいろあって、ごちゃごちゃしていますけど。

—— いえ、非常に整理されていて分かりやすかったです。ありがとうございます。大きく分けると 2 段階なのかなと考えながら伺っていました。8 月にソ連がグローバル・ダブルゼロを受け入れたことで大きな話は大体片づき、その後は詰めに入るという流れですね。その順番で伺えればと思います。

まず、根本的なところですけれども、87 年 7 月にソ連がそれまで随分嫌がってきたグローバル・ダブルゼロ、要するにアジア部も廃棄するという決定をするのですが、これを大使はどのように受け止められましたか。

沼田 これは 4 月にブリーフィングを受けて、我々へのブリーフィングとしては次に出たのは 8 月なのです。ほかの国と一緒にブリーフィングを受けているわけ。ここに書いているのは事実として書いているので。要するに、同盟国も含めてブリーフィングしようと思ったのは、グローバル・ダブルゼロで、これは見通しができたということでブリーフしたということだと思うのです。

その前の 4 月のブリーフィングを見ると、アジアに 100 弾頭とのソ連の主張について彼らが言ったのは、アメリカを目指しているというよりも、日本や中国に対するはったりみたいなものじゃないかということを書いているわけですね、ここで既に。政治的カードとして使おうとしているのではないということだから、ここでヒントがかなり出ていると考えていいと思うのです。どうせ消えると考えているようだ。

それから、ソ連はチェコと東独からの廃棄を言っているわけでしょう。だからここでは、相当妥結が時期として近づいてきているという感じが出ていますね。そういう意味では、やっぱりそうだったのかという感じで受け止めました。

—— ソ連が折れた要因の分析はされましたか。

沼田 必ずしもしていないけれども、レイキャビク以来、攻撃的ミサイルはなくしていくということで両首脳の間でずっと協議をやっているわけだから、それは何とかやっていかなきゃいけないという意識がソ連にも働いていたと思います。あれだけソ連はいろいろな条件を出したけど。

—— カンペルマン代表とかグリットマン INF 代表、文書の中では名前が出てくるのですが、彼らはこういった方々でしたか。人物に関する印象も含めて伺えればと思います。

沼田 カンペルマンは、僕は会ったのをあまりよく覚えていませんが、彼は外交官出身ではないですね。もともと lawyer でしょう。この世界は lawyer が多いですけど。ほかのいろいろな問題もやっていた lawyer ですよ。それから、ウィキペディアで見ると、カンペルマンはクエーカーのようですね。

—— そういう雰囲気があったのですか。

沼田 よく覚えていない。1 回ぐらいしか会っていないから。

—— では、よくブリーフィングしてくれたのはグリットマンのほう？

沼田 グリットマンは、さっき申し上げたとおり、山田大使がフレッチャースクールに留学していたときの友達です。そういう絆もあって非常に 2 人の間はよかったという感じがします。グリットマンは、アトランティストというのですか、ヨーロッパ関係をずっとやってきた人ですね。ほかの交渉もやっていたようですね。

—— 並行していますね。

沼田 彼は career diplomat です。

ちなみに、ここに書かなかったけれども、一番最初の段階ではアメリカ側にエイビス・ボーレン (Avis Bohlen) という女性がいました。彼女のお父さんはチャールズ・ボーレン (Charles Bohlen)、有名な駐ソ連大使だった人です。

—— ボーレンはトルーマン政権期の人ですよ。

—— 先ほど NATO との関係についてアメリカ側は「非常に難しい、NATO でも意見が割れている」という話があったと思います。当時の NATO を見ていると恐らくそうだったと思うのですが、このときはジュネーブにおられて、ヨーロッパ側の外交官とコンタクトをとるということはそんなになかったのでしょうか。

沼田 ないです。というのは、Conference on Disarmament でやっている外交官はこれに絡んでいないから。日本代表团だけがちょっと変わっていて、米ソ二国間交渉も同時にフォローしていた。だから、恐らく米ソ交渉については我々が一番よく知っていたと思います。

—— ジュネーブのこの代表团の中では。ということですね。

沼田　そういうことです。それはなぜかという、日米の間でブリーフしてくれという話がずっと前からあって。

さっき、僕は言い忘れていました。日米の軍備管理・軍縮協議、このときに僕からジュネーブにおいてちゃんとブリーフしてくださいと言って、先方が了承しました。

—— 大使側からのリクエストでということなんですね。

沼田　そう。それは以前、僕はワシントンでもブリーフを受けていたし、山田大使とももちろん相談した上で言いましたけれども、ジュネーブでこれから交渉されるのだから、ちゃんとブリーフしてください、コンタクト・ポイントはどこにしたらいいですか、確認してくださいと言いました。それを向こうがちゃんとフォローしてきました。実際、僕が2月の初め、最初に会ったのはボーレン女史でした。

—— そうすると、米ソの交渉に関して、日本として正式にアメリカからブリーフをされる場というのがジュネーブになったという理解でよろしいでしょうか。

沼田　ワシントンでどこまでやっていたのか、僕の記憶にはありません。ブリーフは受けていたと思いますけど。ジュネーブでブリーフを受ける前にやっぱり準備しなきゃいけないわけですね。こっちは質問を考えなきゃいけないでしょう。その材料というのはどうしていたのかなと思って今思い出そうとしていますが、ワシントンからも情報は来ていたような気がします。やっぱり実際の交渉をやっている場でやっている人たちから直接話を聞くというのは役に立ちますから、そういう意味では我々は主なチャネルになっていたと思います。

—— それを大使からというか、軍縮代表部からの情報として本省に送るという形になるわけですか。

沼田　はい。

—— 大使がアメリカ側からブリーフィングを受けるのに質問を考えなければいけないということだったのですが、そのときに本省からこういうことを聞いてくれとかいう指示はあったのでしょうか。

沼田　あったような気はするのですが、よく覚えていない。全くなかったことはないと思うな。訓令という形で来ていたかどうか、ちょっと記憶が定かじゃないですけどね。

—— その場合は、出どころといいますか、主管する部署は軍縮課になるのですか。

沼田　そうです、軍縮課です。

—— 安保課ではなく軍縮課ですか。

沼田　軍縮課から来ていたと思います。

—— NATO との関係についてアメリカ側が話している部分があるのですが、大使としては、Decoupling は心の持ちようの問題だということはどう思いましたか？

沼田 そうかねという感じがしたけれども。

—— それを言っちゃおしまいですというところもあるかなと思ったのですが。

沼田 まあ、一生懸命交渉している人から見ればそういうことだったのかなと思いました。

—— アメリカとしては、もうちょっと我慢しろということだったのですかね。

沼田 そうでしょうね。これはグリットマンだったかな。

—— これは日本に向けてもメッセージとして出てきているということですか。

沼田 それは考え過ぎじゃないかしら。

—— 単に全般的に同盟国に対してそう言っているということですかね。

沼田 と思いますけどね。

—— よろしければ検証のほうに。まるっきり素人質問なんですが、Challenge inspections というのはどういうことなんですか。抜き打ちで行うタイプなんですか。

沼田 Challenge inspections というのは化学兵器禁止条約の中にあるわけですね。INF 条約にも書いてあると思いますが、化学兵器禁止条約の日本語の訳文を見ると、「申立てによる査察」と書いてあるんです。しかし、この訳だと Challenge inspections の感じが全然出ないわけ。Challenge inspections というのはまさに「チャレンジ」なんですよ。要するに、後で化学兵器のときに言おうと思っていたけれども、Challenge inspections というのは「anytime, anywhere, without the right of refusal」ということなの。いつ、いきなりやってきても拒否できない査察ということです。だから Challenge というか「抜き打ち」なんです。

化学兵器でさんざん議論しましたが、これが大変な話で、要するに極端に言えば、今日の真夜中にいきなり来ますよといって来ちゃうという話ですよ。だから、非常に怪しければ、怪しいと思った国はそういう査察を求める権利をという話になっているわけです。これは査察される方は大変だから、何とかそれを避けようとするでしょう。それが出発点になっているわけです。

結果として、INF については Suspect sites についてそれをやる、回数も制限するということが Challenge は認めるということになったわけです。化学兵器の場合は、僕も交渉の途中まではやったけど、最後までやらなかったから。さっきちょっと化学兵器条約を見ていたら、回数の制限はないですね。それはなぜかということ、化学兵器の方がこっそり作りやすいから。要するに、日本にたくさんケミカルを作っている工場があるでしょう。あの中でこっそり作っていたらできちゃうわけです。オウム真理教だって作っていましたよね。だから Challenge が必要になる、そういう話です。

—— 基本的には、INF ではソ連のほうが **Challenge inspection** を嫌っていたという構図で。

沼田 まあ、そうですね。だって、SS-20 が多いし。

—— もう配備もしていますものね。この査察の問題が入ってくると、まさに軍縮の世界なんだなというのがよく分かりますね。難しいですね、これは。

沼田 これは難しいですよ、本当に。日本は軍事をあまりやっていない関係で、話を理解するのは結構大変でした。

■ START

—— よろしければ、戦略兵器と防御・宇宙兵器に関する米ソ交渉、およびそれらに対する外務省の立場に移りたいと思います。

沼田 START のほうは **Sublimits** の話が非常にこんがらかっていて、ちょっと僕もこんがらかっているかもしれないから、そこはちょっと御容赦願いたいのですが。

INF で実際に僕がいた間に交渉は終了していないので若干話をもややもやしているかもしれませんが、我々がブリーフィングを受けるときは、INF のブリーフィングと START のブリーフィングと **Defense and Space** のブリーフィングを全部一緒に受けていたわけです。だから、それぞれの担当をしている人がブリーフしてくれたということなのですが、START については、最初はロナルド・リーマンだと思いますけれども、2月9日。

彼が言ったのは、過去6か月、レイキャビクがあったから大きく進展した。ソ連は、さっきのレイキャビクの話の2番目に出てきた5年間の攻撃用の弾道ミサイル削減と **Defense and Space** 及び **CTB** (核実験禁止) をリンクしている。**Defense and Space** は **SDI** です。

ここで **Sublimits** の話になるのです。いろいろな数字が出てきてちょっとこんがらかるかもしれませんが、**Strategic weapons** については **ICBM**、**SLBM** 及び **heavy bombers** は 1600 基、それから **warheads** は 6000 弾頭。**heavy missile** を制限しなきゃいけないということで、特にソ連側の **heavy missile** は脅威なわけですから **Sublimits** をどうするかということで、この段階では **ICBM** の弾頭数は全体の弾頭数の 80%以下にするということでパーセンテージを言うとともに、**ICBM** と **SLBM** の弾頭を合わせて 4800 弾頭ということをやっていた。それから、いわゆるトライアッド (三本足) の 1 つの足の弾頭数は 60%以下にするということで、**ICBM** は 3300 弾頭ということをやっていた。

その中で、**permitted missile** というのはここに書いてありますけれども、**heavy SS18s or SS-X-24s and Peacekeepers** というミサイルがあって、弾頭数が 1650。ただし、その中で **silo-based light and medium ICBMs with 6 or fewer warheads** を除くというようなことを言っていた。ただ、その後、ソ連はこのパーセンテージの制限を撤回してきたという話をしていました。

SLCM については、そもそも核搭載か非核搭載かの区別が不可能。ガイガーカウンターでやっても分からないと言っていました。検証が大変だと。全体を通じての **verification** について、ソ連は **On-site inspection** を含めると言っているけれども、詳細は不明とのことでした。

それから、**mobile missile** が非常に問題になっていて、これはソ連が厳しい検証を受け入れるとは思えない。さっきの話で、**mobile missile** というのは西側ではなかなかできないけれどもソ連はでき

るという話がありましたよね。ソ連の強みでしょうけれども、ソ連が厳しい検証を受け入れるとは思えないということを言っていました。

次に3月5日のブリーフィングで、ソ連は heavy ballistic missile の数を半減すると言っている。SLBM については具体的に文言をどう書くかという話をしていると。米ソのテキストを merge したけれども、その中で検証が主要関心事であるということを言っていました。

8月24日の、さっきの対同盟国ブリーフィングのときに言っていたのは、START についての米側案は5月8日に出して、ソ連側の案が7月31日に出てきた。Sublimit については、重弾道ミサイル (heavy ballistic missiles) は半減にとどまる。1600 基、6000 弾頭という話。ソ連側はパーセンテージおよび Sublimits の撤回と引換えに Bomber counting rules を含む。Bomber counting rules、爆撃機 1 機について 1 弾頭と数えるということですかね。Throw-weight の問題はまだ取り上げていない。Mobile ICBM を一応許容すると言っているけれども、これは効果的検証ができないので、circumvention (迂回的違反) の危険がある。

SLCM の具体的制限については、アメリカとして戦略的バランスに重要とは考えていないが、ソ連が主張しているので解決法を探している。全体の verification については、ソ連は曖昧である。この時点で START 交渉の先行きについて「cautious optimism」と言っていました。

それから、9月14日、アメリカ側は、禁止されているミサイル活動が行われる可能性のある米ソの施設に対する short-notice、mandatory challenge inspections を含む検証議定書を提案。short-notice、mandatory challenge inspections というのは、まさにさっきの INF と同じですね。

9月の末のブリーフィングは、ビジネスライクに交渉が進んでいると。この時点では、ソ連がこのペースで進めば年末までに条約をつくることは可能だけれども、年末までというのがデッドラインとは考えていないという説明があったのです。SLCM は 1600 基、6000 弾頭の外と考える。ソ連は、アメリカを検証不可能な SLCM 合意に引きずり込もうとしている。それから、deploy していない ALCM (Air Launched Cruise Missile) の問題というのが出てきている。

11月5日に山田大使と僕はワシントンに行って、ラウニーとバーンズからブリーフィングを受けました。バーンズはこのときはたしか ACDA の長官になっていたと思うのですけれども、この START の戦略的核兵器の検証というのは、関係施設の構造上、complicated and intrusive (侵入的) である。巡航ミサイルとか移動式ミサイルの検証というのは非常に難しい。ICBM の Sublimits をアメリカは 2000 と考えていて、3000 までは行きたくない。3000 まで行くと——これは warheads の数ですね——Destabilizing になるだろう。SLBM については 5500 ぐらいを考えていて、2000 までは下がりたくない。ALCM については 1000 というほど下には行ってほしくない。ソ連は、ALCM について 8000 と言っている。ソ連が 8000 弾頭と言っているのは、1 機について 20 と数えて、400 機 Bomber があれば 8000 という数字になる。この辺よく分かりませんが。

12月にワシントンサミット。これは INF の署名をやったときかな。START 条約の共同草案というのができましたが、そのときのシーリングは 1600 SNDV (Strategic Nuclear Delivery Vehicles)、6000 warheads。それから、heavy missiles 154 基に 1540 弾頭まで装填。弾道ミサイルの throw-weight を 50%削減。Sublimits は弾道ミサイルの弾頭総数を 4900 とする。INF 条約の検証条項を参考とした START 条約検証条項のガイドラインをつくらうという話だった。

88年1月22日に、Sublimits は、アメリカに許容されるのは ICBM 3000~3300 という話があった。それから、mobile missile については未定。heavy missile は 1540 基。SLBM の検証は、潜水艦が母港で弾頭に On-site inspection をする。それと平行に ICBM と SLBM の検証をする。ALCM は、各 hang point に 6 ALCMs というのは、飛行機の下にぶら下げるのが 1 機について 6 基ということですかね。Heavy bombers について home bases で On-site inspection は行わないという話をし

た。

START については今の話を聞いていると随分複雑だと思われたかもしれないけれども、7月15日にジュネーブ高等国際問題研究所でセミナーがあって、そこにアメリカの交渉団が来てブリーフしたのが一番分かりやすいと思います。

米ソの相違点というのは、まず移動式ミサイルをどうするかということで、移動式ミサイルについては残存性 (survivability) と検証可能性 (verifiability) の片方を重視するともう一方が損なわれるというジレンマがある。やっぱり検証可能性を優先することが必要だろうとなっていて、アメリカの場合にはまだ配備していないので、これはいっそ禁止しましょうという話をした。ソ連は既に配備を開始しているので、これを制限しようという話になるという違いがある。それから、ICBM の弾頭の Sublimits をどうするかというのが争点になっている。

それから検証について、Challenge inspection は anytime anywhere ということではもうなくて、suspect site inspection をどこまで認めるかという話になった。SLCM については、ソ連はいわゆる CROT、strategic ということを言っていて、アメリカは strategic ではないということを言っている。検証は極めて困難。どれだけ調達するかというのを予定しているという宣言ぐらいに変えたらどうか。ALCM については、ソ連の大半は射程 600 km 未満、heavy bomber から発射するもので、明らかに strategic weapon である。Space とのリンクは署名を妨げる問題ではないが、ソ連はカードとして使うだろうと言っています。

—— 一度ここで質問を挟ませていただいてよろしいでしょうか。START に関して、日本側はどういう立場だったのですか。基本的な立場は、とりあえず米ソの交渉の行方を見守ると。

沼田 そういうことですね。

—— INF のときは能動的には動かなかったということですか。

沼田 そんな感じですね。

—— それは、基本的にはそこまで日本の国家安全保障に直接的な影響はないだろうという解釈だったということですか。

沼田 まあ、そういうことですね。影響があり得るとすれば、やっぱりトマホークかな。

—— SLCM ですか。

沼田 SLCM でしょうね。それ以上は、ここはぜひちゃんとやってもらわなきゃいけないとかいうような訓令を受けた感じはあまりないですね。

—— それは SLCM に関しても同じですか。

沼田 ただ、SLCM は検証が難しいから、どこまでできるかというような話にずっと終始していますよね。だから、よく分からないなという感じで。

—— 結局含まれなかったんですよね、SLCM。

沼田 そういうことですね。

—— では、日本が個別具体的に心配するような内容はそこまでなさそうだとするところですか。

沼田 そういうことでしょうね、今から考えると。

—— 先ほどのジュネーブ高等国際問題研究所のセミナーのところで面白いなと思ったのが、残存性と検証可能性のジレンマという概念だったのですけれども。

沼田 survivability と verifiability。

—— ですね。これは verifiable にすると場所がばれてしまって攻撃をしやすくなって。

沼田 survivable じゃなくなる、そういうことですね。そう言われると分かりやすいですよ。

—— そこで結局お互いにもめるということですか。

沼田 アメリカはまだ配備していないから、いっそ禁止しちゃおう。ソ連はもう配備しているのだからいくつまでに制限するという話になる。これは最後になってやっと分かった感じがした。

—— START の内容も INF の検証の内容に負けず劣らずかなり難しい技術的な問題が入っていたと思うのですが、当時、大使はかなり勉強されながら。

沼田 いや、START まではやっていないけれども、ただ、Challenge inspection はどうするかという話は化学兵器でずっと同時並行してやっていたから、そこはある程度勘を持って聞けました。現に、さっきの INF の検証の話でも、西側の人にブリーフしたときに Challenge inspection の話をみんな聞いていましたから。化学兵器をどうするかという一番大変なときだったから。

—— そこにつながりがあったと。

沼田 そう。START はどうも、今ノートを見返してみても、INF ほどには自分の頭の中でしっくりこないですね。Sublimits の話がいろいろぐるぐる変わるでしょう、いろいろな数が出てきて。それが実際に何を意味するかというのがよくピクチャーできないものだからなかなか理解が難しい。ただ、どこの段階だったかな、アメリカが言っていたのは、あまり Sublimits をいじっちゃうと、今の核の抑止構造というか、弾道ミサイルの全体の構造を随分変えなきゃいけないから大変だというような話をしてた記憶はあります。

—— それはアメリカの核抑止体制がということですか。いわゆるトライアッドのバランスも変えなきゃいけないから。

沼田 そうそう。そういう話になっちゃうからという話はしていましたね。

■ 防衛・宇宙兵器

—— その他いかがでしょうか。もしなければ、防衛・宇宙に移ります。

沼田 Defense and Space の話は、最初は 86 年 2 月 11 日です。

レイキャビクの後に最初のブリーフィングを受けたときに、10 年後に攻撃的弾道ミサイルを全廃すると言っている。アメリカの方は 10 年間配備しなくて、その後に全廃というなら、いっそのこと 10 年以下で全廃できないかということ言っているところから始まったわけです。

8 月 24 日の、前から出てくる対同盟国ブリーフィングのときに、ソ連は Defense and Space と START をリンクしているのに対して、アメリカはリンクに反対していると。それから、アメリカは ABM 条約脱退の権利というのを主張していると。extraordinary circumstance、それと supreme interest が侵害された場合、それから重要な違反 (breach) があつた場合に脱退する権利があるということ言っている。ソ連は SDI が障害になっているということによってアメリカの議会における SDI の論議に影響を与えようとしているということ言っていました。

次に ABM 条約。最初脱退しないで、5 年間たった後にどうするかというときには、これは cooperation、どうやって協力していくかということが鍵になると。アメリカ側とすれば、ソ連はソ連で SDI を考えるのだから、それに協力していけばいいという意味だと思います。

そこで、レイキャビクで問題になった laboratories が何を意味するのか。建物の中あるいは外はどうなのだろう、宇宙にどういうものを置いてはいけないのか、宇宙のディフェンスのための機器の subcomponent も置いてはいけないのかというようなことが議論になるけれども、アメリカは追加的制約 (additional constraint) は受け入れないと言ったようです。

それから、ソ連は ABM 条約非脱退の期間を長くとりたがっている。10 ないし 20 年とりたがって、その脱退する 2~3 年前にその次どうするかを協議しようと言っているのに対して、アメリカは非脱退の期間は 10 年間ぐらいにして、その期間が切れる 2~3 年前から防衛 (defense) あるいは offense の関係につき交渉したいと思っているというようなことを言っていました。

その間の Confidence Building Measures (CBM) として open labs も考えられていた。カザフスタンのシャリー・シャガン (Sary Shagan) に地上発射レーザー基地がある。それから、アメリカのホワイトサンド (Whitesand) に核実験をやった基地がある。そこでお互いにやっている実験の相互オブザベーションをやるというようなことで CBM をやったらどうかということを考えて言っている。ABM 条約の non-withdrawal の期間が終わった後にアメリカは SDI を配備する権利があると言っているけれども、ソ連は撤退して 6 か月後に defense を配備すると言っている。Defense and Space の条約の見通しは、希望は持てるけれども、START がどうなるかによると。SDI は続けるというのが 87 年のブリーフィング。

11 月初めに、ABM 条約の非脱退 (non-withdrawal) 期間をソ連は 10 年と考えて、アメリカは 7 年。ソ連は、その時点でもはや SDI の全面的制限とか ABM 条約の特定の解釈に固執しなくなっている。特定の解釈の中身が何だったのか、覚えていません。

それから 87 年 11 月 5 日、ラウニーがワシントンでのブリーフィングのときに、ソ連は最近 SDI 自体を阻むというよりも stability ということ言っていると。ここでラウニーの説明で、ソ連はレーガンが将来についてコミットすることを要求している。それに対してレーガン大統領は Defense をレガ

シーとして残したいと。ここに基本的違いがあるから、すぐに局面が大きく打開されるとは思っていないということをラウニーが言っていた。

これはブリーフィングを受けたわけではないけれども事実として、翌 1988 年の 1 月 22 日にアメリカが、Defense and Space 条約のアメリカ案を出した。発効は START I の発効が条件。条約は無期限として、ABM 条約からの一定の非脱退期間を交渉する。非脱退期間中は ABM 条約を遵守する。期間が経過した後、締約国は 6 か月前の書面通告を経て、ABM 条約で禁止されている戦略ミサイル防衛配備を含む独自の行動をとることができる。

7 月 12 日に受けたブリーフィングのときに、クラスノヤルスク・レーダーというのは ABM 条約に違反しているとアメリカは言っていたのです。アメリカはソ連にこれが解決しなければ戦略兵器についての新合意はできないと伝えている。この時点で Defense and Space について年内に妥結の見通しは遠のいているので、次の政権にバトンを渡すことになっているとのことでした。

ということで、ABM 条約の non-withdrawal というのは 5 年間やって、その後をどうするかということですとずっとごちゃごちゃやっていたと。inconclusive な、そういう話ですね。

—— 先ほど何うのを忘れてしまったのですが、START ではリーマン代表から恐らくブリーフィングを受けて。

沼田 リーマンが主でしたね。

—— それで、今度、Defense and Space はハムナー代表。それぞれどういう方だったのでしょうか。

沼田 ハムナーという人はどういう人だったかよく分からない、僕もいろいろ探していますが。ロナルド・リーマンは、Lawrence Livermore National Laboratory。1988 年から 1989 年まで Assistant Secretary of Defense for Global Strategic Affairs。90 年に ACDA の長官。今は Director of the Center for Global Security Research。Lawrence Livermore National Laboratory にもいて、もともとは国防総省、それから ACDA、NSC、Senate Armed Services Committee のスタッフ云々。だから、Weapons of mass destruction の専門家ということですね。

—— やはり外交官と雰囲気は違いますか。

沼田 あまりよく覚えていないけれども、やっぱり違うかな。

—— あと伺いたいのは、ラウニー、当時大統領顧問ですかね。大使のスライドではレーガン大統領の「防衛」をレガシーとして残したいということを大使に伝えているようですけども、これは SDI を残したということですか。

沼田 そういうことでしょう。

—— そうなると、これはかなり妥協の余地がないということですよ。

沼田 だから、局面が大きく打開するとは思っていないと言っているわけですよ。

—— これは結局調べてもよく分からないままだったのですけれども、米ソ交渉は休会し、その後、決着するのですか。

沼田 Defense and Space はしていないのではないですか。

—— 途中でもうソ連が崩壊する形ですね。

沼田 SDI 自体。

—— そうですね。SDI 自体もうやむやになり、途中で AMD に変わっていくのですよね。

沼田 思い返してみれば、SDI の意味は何だったのかというと、どうもその間に Arms Control Negotiations として INF ができて、START もできた。SDI 自体はできなかった。そういうことでしょ、非常に乱暴に言えば。

—— 大きく見るとそうですね。この点に関しても外務省あるいは日本政府としては、これもそんなに能動的にこうしたいということはなかったと。

沼田 と思いますけどね。僕はこのときにもう大分離れていたけれども。

—— 大使御自身はいかがでしたか、この防衛・宇宙について。

沼田 この前、SDI のときにもお話ししたように、本当にこれできるのかしらという気持ちが非常にあったのでね。ただ、今でもずっと続いているし、今まさに問題なわけでしょう。日本でもイージス・アショアとかやっているわけでしょう。それから、98年にテポドンを飛ばされたときから我々もミサイル防衛のことは一生懸命考えるようになっているから、その影響はあったのだと思うのですけれども、レーガンが考えているような核兵器をなくす、impotent にするという意味での SDI みたいなのはやっぱり実現性はなかったのだらうと思いますけどね。

■ ジュネーブでの日米協議の意義

—— 一般的な質問で恐縮なのですが、今いろいろと大使が受けたブリーフを中心に御説明いただいたのですが、代表部の中でこういった問題について何か議論をしたり、この人はこういうキャラクターで何かあったというようなことはあったのでしょうか。大使がメインでずっとやられている……。

沼田 米ソについてはないです。

—— これについては基本的にブリーフィングを受けて、それを大使中心にまとめていると。

沼田 米ソについてははっきり言っちゃえば、当時の代表部内で米ソ交渉で何をやっているかというこ

とを理解していたのは山田大使と僕だけだったと思います。山田大使は国連局長をやっておられた。軍縮課は国連局にあるでしょう。だから、山田大使がそういうのをフォローしておられたわけですよ。僕は別の意味でフォローしていたから、ブリーフィングを聞いても何を言おうとしているのかがある程度見当がつくけれども、ほかの人たちは軍縮会議のほかのことで忙しくてとてもそういう余裕はないし、さらに言えば、そういう問題を理解するほどのバックグラウンドを持っていなかったということですね。

—— この問題については、防衛駐在官で来ている方々とかはもう全く関与しないような形だったと。

沼田 関与しません。

—— 私の質問も今のものと関連してですけれども、お聞きしていると結構、頻繁とまでは言わないですが、定期的に米側からブリーフがあって、そのことについてはアメリカ側はどういうふうにされていたのか。つまり、悪く言ってしまうと恠性としてやっていたのか、それとも、やはりアメリカ側としても日本に説明しておいたほうがいいということで割と好意的にしていたのか。

沼田 INFについては明らかに説明しておいた方がいいという感じがあったと思います。

—— その後はいかがですか。たとえば **Defense and Space** 条約案とか、ちょっと話が。

沼田 それは全部パッケージとしてやっていたから。でも、**Defense and Space** は中身がそんなに進んでいないわけですよ。START はある程度は進んだけれども。だから、全体としてブリーフしようということを約束しているし、それをやっていたということだったと思います。

—— このブリーフを受けておられたのは、先ほど山田大使と沼田大使ぐらいしか理解していなくてということでしたけれども、受けているのは日本側ではほかの方も同席されているわけですよ。

沼田 いや、僕と 2 人だけで、僕が全部質問を考えて全部電報を書きました。

—— そうなんですか。では、ほかの方は完全にノータッチということですか。

沼田 ノータッチ。

—— そうですね。最初大使が米側に要請されて始まったということで、言ってしまうと大使のためにと言うのであれば、大使がおられたからやっていたブリーフだったというふうに考えてもいいのですか。

沼田 いや、僕だけじゃないです。だって、実際に僕がそれを言ったときには国連局長も軍縮課長もいる場でそれを要請したわけですから、日本としてそれが必要だという意識は非常にあるわけですよ。まさに 86 年 2 月のギャング・オブ・フォーの話が出てくるときのように、そういう感じでびっくりするようなものが出てくるのは避けたいわけですよ。我々は。そういう意識は日本側にもあったし、アメリカ側もあのときにやっぱり日本側からああいう指摘を受けたのは意味があったなと思ったから

続けたということじゃないでしょうかね。

—— あと、時期的にアメリカがちょうどイラン・コントラ事件の余波があつて、国防総省を改革してとか、NSC の人がいっぱい替わつてという時期だと思うのですが、大使は何かそういうことの影響というのは感じられたことはありませんか。

沼田 それは特に感じませんでしたね。イラン・コントラはいつでしたっけ。

—— 86 年頃に発覚して、その後 87 年～88 年にかけていろいろな改革とか人事異動があつたという感じで。それとは別に事務方は淡々と米ソ交渉とか同盟国に説明をやっていたということでしょうか。

沼田 でも、政権にとって INF 条約というか、攻撃的兵器削減交渉というのは非常にプライオリティが高かったから、それを淡々と進めていたと考えていいと思います。

—— 今の点ですけれども、INF のほうですが、これは最初に東京で国連局長と軍縮課長と一緒にブリーフィングを受けられて。

沼田 いや、日米の協議はワシントン。

—— ワシントンですか。

沼田 僕はジュネーブから飛んでいきました、ワシントンに。87 年の 1 月。

—— ただ、アジアの部分はどうするという交渉自体の担当官というのは、要するに宮本課長になるわけですか。

沼田 そうですね。

—— そうすると、正規のラインというのは本省軍縮課とワシントン大使館の間ということですか。

沼田 そうでしょうね。それでやっていて、それで我々が参考となる情報をジュネーブからフィードインしていた、そういうピクチャーだと考えていただいて結構です。

—— 参考までということだと、ジュネーブで何か日本に関する交渉が行われるということとはなかったわけですね。

沼田 それはないですね。

—— 横からのピクチャーとしてこういう話が御参考までということで東京に行って、それは主にどこに送られているのですか。

沼田 主管は軍縮課だったと思います。電報の宛先は国連局長かな。

—— そこでそれを読んで交渉の参考にするという感じだったわけですね。

沼田 そうだったと思います。正直言って、軍縮会議よりはこのブリーフィングの方がよっぽど面白かったんです。化学兵器の交渉はまたちょっと別ですが。

—— INF の交渉はこの時期ジュネーブでやっていたんですか。

沼田 そうです。ジュネーブでやっていたわけです。

—— ずっと。その代表部の間で。

沼田 代表部じゃなくて、INF の交渉のための交渉団がジュネーブに来てやっていたわけ。

—— それをロジスティックにサポートしていたのが——アメリカはどういう構造なんですか、大使館と代表部と別々にあるのですか。

沼田 アメリカは、ジュネーブに軍縮代表部というのは一応あったのです、US Delegation to the Conference on Disarmament は。だけど、この米ソ交渉のサポートはしていなかったはずだから、全く別にやっていたようです。

—— でも、結構お偉いさんが飛んでくるわけで、少なくとも量的にはロジスティックなサポートがすごかったと思うのですけれども。

沼田 誰かがサポートしていたと思うけれども。

—— どうなっていたのかな。では、大使にジュネーブにおいてブリーフしてくれたのは代表団のほうなんですね。

沼田 代表団です。代表部じゃなくて代表団。

—— 交渉に来ている交渉団の方々から聞いたということ？

沼田 そうそう。直接聞いていたわけ。

—— この方たちは長期出張みたいになっているわけですか。

沼田 そうということです。行ったり来たりしていたわけ。

—— 来ると連絡をくれてという感じですか。

沼田 そうということです。

—— それは沼田大使に個人的に電話か何かが入るみたいな。

沼田 そのパイプがそうになっていて、それで僕が大使と一緒に話を聞いている。

—— 特に親しかったのはどの方ですか。

沼田 一番親しい関係は山田大使とグリットマンですね、INF の代表。フレッチャーの友達ということもあったので。

—— 大体向こうも 3〜4 名がそろってやって来るという感じだったのですか。

沼田 そうですね。

—— やって来るというか、こっちから伺うわけですね。その人々が一緒に迎えてくれるという感じなんですね。連絡は誰から入る感じだったのですか。

沼田 誰だったかな、僕のところに入っていたけれども。代表団が来るわけだから、その面倒を見ている人たちがいるので、そこからだったと思います。軍縮会議のアメリカの代表部ではなかったことは確かです。全く別になっていました。

—— アメリカの大使館は、スイスはどこにあるのですか。

沼田 ベルンでしょう。

—— ベルンか。では、そこがサポートしていたとも思えないですね。

沼田 いやいや、ジュネーブでサポートしていたはずですけどね。誰がサポートしていたのかは分からない。

—— では、タスクフォースみたいなのが常駐していたのですかね。

沼田 だって、米ソの交渉って前からやっているわけでしょう。「Walk in the Woods」のときもニッジェが来たりしてやっていたから。彼らは慣れていたのでしょう。

—— 大使はこの代表部でナンバー2 でいらっしゃったわけですけども、参事官自ら電報を起案することというのはあることなのですか。

沼田 ありますよ。全部書いていましたよ。

—— この電報は、軍縮課というか、国連局長に直接行くような形になるのでしょうか。

沼田 外務省の電報の形式はいろいろあるんです。「秘」とか「極秘」とか「限定配付」とか。これは極秘だったような気がするけれども。秘密度はかなり高いですね、交渉の中身だから。

—— ちなみに、この電報というのはワシントンにも参考配付になるのでしょうか。

沼田 ワシントンにもたしか送っていたはずですよ。ワシントンからどういうフィードバックがあったか、よく覚えていませんが。

—— ワシントンとか東京から大使に対していろいろな参考情報が送られてくるということもあったのでしょうか。

沼田 それは来ていたはずですよ。どういうのが来ていたか、そこまで僕は資料を保存していないからよく分からないけれども。

でも、きのうも僕はずっと自分のノート調べていたら、最初にグリットマンから INF のブリーフィングを受けたときに何を質問するかというのをいろいろまとめたメモが僕のノートの中にあっただよ。それはいろいろなものを見ながら、新聞報道も、恐らくワシントンから来ている情報も見て、大体こんな状況になっているだろうという見当をつけて、それでは何を聞いたらいいかという質問を考えて、それを大使に渡して、それで 2 人で聞きにいった、そういう感じです。結果は大使と僕しか聞いていないから、電報は僕が書くほかない、そういうピクチャーですよ。

—— この INF の問題をめぐっては、ジュネーブのパイプというのは非常に重要であったと考えられますか。

沼田 僕はそう思いますけどね。東京はどう考えていたかはよく分からないけれども、でも、実際交渉している人から聞いているわけですからね。

—— 恐らく、この大使が書かれた電報は今年の年末に外交史料館で公開されると思いますよ。

沼田 ああ、そうなんですか。公開されるの？

—— はい。この時期の電報を収めたファイルだとおぼしきものが何冊かあったのを利用請求して開けてもらうようにお願いして、それを見て、また質問があったら伺わせていただけるとよ。

沼田 僕がここに書いてあることと全く違っているかもしれないね。ここに書いてあるのは、僕が当時の自分の実際にとったメモしか材料がないですから。

でも、いざ何十年ぶりにメモを見たら、30 何年前でしょう、もう忘れていてちょっと往生しましたけどね。

—— 内容も難しい、細かいところも結構ありますものね。

沼田 難しいですね、今考えると。その後やっていないからね、この問題。

■ 核実験禁止

—— 化学兵器禁止及び核実験禁止なども大使の軍縮代表部時代の議題になっていたと思いますが、これらについてお話を伺えればと思います。どうぞよろしくお願いします。

沼田 軍縮会議ってどういう会議かというのはお話ししましたが、核実験禁止 (Nuclear Test Ban) というのは、議題としては重要なのですが、何も起こっていなかったということなのです。なぜかという、アドホック委員会というのができて 1984 年から議論していましたが、交渉が始まらなかった。アドホック委員会のマンデートをどうするかというので常にもめていた。要するに、非同盟 (G21) と東側は交渉を直ちに開始すべしということ saying it but not doing it みたいなことを言っていたけれども、アメリカは米ソ間のバイラテラルの交渉、TTBT (Threshold Test Ban Treaty)、PNET (Peaceful Nuclear Explosions Treaty) 批准へ向けての検証議定書の交渉というのをやっているの、軍縮会議での交渉はそれを阻害することになるからといって頑強に交渉を拒否していたわけです。東側、それから G21 にガルシア・ロブレスというメキシコの大使で、トラテロルコ条約の立役者の一人で、ノーベル平和賞をもらったというので非同盟の人にとっては神様みたいな人がいて、神様だから非常に穏やかな人かという、そうじゃなかったと思うのですけれども、割合西側の人が苦労していた。

そこで 86 年に、毎年それぞれの議題について西側グループの中でコーディネーターを決めるわけですが、山田大使がコーディネーターになった。何が問題かということ、委員会のマンデートの問題をどうするかということを議論していた。西側の中ではリチャード・バトラーというオーストラリアの大使、私とあまり年は変わらないのですが、もともと労働党系で大変な目立ちたがり屋の人で、後に国連大使になり、イラクの大量破壊兵器査察委員会 (UNSCOM) 委員長として有名になった人です。

それから、G21 の中ではインドとメキシコが強硬。インドは自分が核兵器を持っているのですけれども、核実験禁止の交渉を進めるべきだということを言って強硬で、これをブラジルとかアルゼンチンが支持をしていた。

マンデートについて、どういうことを議論していたかということ、キーフレーズになるのが「establish the Ad Hoc Committee to...」。その次に来るのが、1 つのオプションが「carry out the negotiation」ですね。2 つ目のオプションは「examine substantive issues」あるいは「examine all relevant issues」。その次に「with a view to negotiation」とつけるか、「with the objective of negotiation」とつけるかというようなことで一年中議論していた。このときは、交渉、マンデートには至らなかったわけです。

他方、検証についての専門家の議論というのが続いてあった。要するに Scientific Experts、地震学の専門家が集まって、「Group of Scientific Experts」と呼んでいましたけれども、日本からは末広重二元気象庁長官が出席していた。お魚の末広恭雄教授の弟さんです。地震学の専門家としてよくジュネーブに来て、世界中の地震探知ネットワークをつくるという作業をやっておられました。

軍縮会議での議論は以上のとおりなのですが、毎年国連総会のために、第一委員会の議論に我々軍縮代表部がニューヨークまで飛んで行って、2 か月ぐらいニューヨークに滞在してその議論に参加していたのです。国連の First Committee で 87 年の 10 月～11 月、それから 88 年の 10 月～11 月、国連に我々が陣取って議論していたのですが、そのときに国連の第一委員会で CTB 決議というのがあったのですね。Comprehensive Test Ban (包括的核実験禁止) の決議というのがあって、これはコアグループが出していました。コアグループの構成はスライドに書いてあるように、日本、ニュージーランド、オーストラリア、カナダ、スウェーデン、ノルウェー、オランダ。だから、西側プラス一応非同盟のスウェーデン、それにノルウェー。ノルウェーは西側ですね。このグループが CTB 決議を出し

てきた。

1986年の第一委員会では、我々の出した決議案は、アメリカが反対はしないけれども棄権はしました。ところが、87年になってアメリカの態度が硬化して反対と言い出して、我々は一生懸命アメリカの説得に努めました。実際、私も山田大使もニューヨークに出張している間にワシントンに行きました。そのときに山田大使からエメリーACDA次長などに働きかけたのですが、アメリカの反対という意向は変わらなかった。彼らに言わせれば、米ソの二国間の交渉が進展しつつあって、それに影響するのが心配だという理由でアメリカは反対に終わりました。その翌年も同様の経過をたどったということです。この決議案の中身は残念ながら覚えていないのですが、調べれば分かると思います。

以上が核実験禁止についての議論です。

■ 化学兵器禁止条約

沼田 それから、軍縮会議の場で唯一行われていたのが化学兵器禁止条約の交渉です。

これはアドホック委員会というのがあって、そこで交渉していたのですが、アドホック委員会の議長は、1987年、私の1年目はロルフ・イケウスというスウェーデンの大使。彼は軍縮の世界で非常に有名な人で、その後たしか駐米大使になりました。私にとって2年目の1988年はボグミ・スイカ（Bogumi Sujka）というポーランドの大使でした。私は、実は1年目は化学兵器をあまりやっていなかったのですが、2年目の1988年になって、このアドホック委員会が3つのワーキンググループに分かれて交渉をしたというか、条約の一部の起草をやった。その3つのグループのうちの3番目のワーキンググループC、これは第8条の「Organization」というのと第9条の「Consultation, Cooperation and Fact-finding」、要するに「Verification（検証）」、「Inspection（査察）」の議論をするワーキンググループの議長を1年間やりました。これはなかなか面白い経験でした。

この化学兵器禁止条約をめぐる状況という、米ソ間ではアメリカが「binary weapons」、2種の薬を混合した化学兵器というのを開発することをソ連は警戒していた。そういう状況の下で84年の4月にアメリカが化学兵器禁止条約のアメリカ案というのを出して、87年の2月、ちょうど私が軍縮代表部に着任した頃から米ソの二国間協議というのをやっていた。87年の10月には、ソ連が軍縮会議のアメリカも含めた各国の代表をシハニ（Shikhany）というところの化学兵器を造っている施設に招待して視察させたのです。このときには日本からは山田大使が行けました。

この化学兵器禁止条約はいろいろなことを議論していました。すごく細かい議論もしていましたが、大きな問題は日本の立場から見て何かということ、日本は化学産業が非常に盛んですから、民間の化学産業にどういう影響があるかということですね。やっぱり産業の立場からのいろいろな意見も聞かなきゃいけないということで、87年の7月に産業専門家会合というのがジュネーブでありました。このときに日本化学工業会の代表の方とロンドンのJETROの人が来ていました。西ドイツと日本は民間の立場から関心があるのですけれども、西ドイツは化学品の輸出が多い。日本は自家消費、日本の中で消費しているのが多い。その中でチオジグリコールという化学製品が影響されるということで、これはリストのどこに入るかというようなことを議論していました。

民間化学産業ということからいえば、私がジュネーブを離任したのが89年の3月だったかな、それでオーストラリアに着いた後、9月にオーストラリア政府の誰かが頑張ってキャンベラで化学兵器禁止官民合同会議というのがありました。ここに私のジュネーブの仲間がみんな乗り込んできたので、私はキャンベラの公使でしたけれども、私にとっては仲間とのリユニオンということで、彼らを自宅に招いて、オーストラリアのビールを一緒に飲んで楽しみました。

それからもう一つ、遺棄化学兵器の問題というのがありました。これはもともとベルギーが 1985 年ごろから提起しています。第二次世界大戦——第一次もあったな——に戦場となって、そこに化学兵器がいろいろ残っているということで、それをどうするかという話なのです。その議論が軍縮会議の場に出てきました。禁止条約の交渉の議論しているときに、これはたしか 87 年だったと思いますけれども、中国代表団から非公式に、当時私の下で化学兵器の交渉をやっていた佐藤昌史参事官のところに、ある日ひそかに話がありました。日本が残していった化学兵器がたくさんあるという話です。

これを聞いたときにまず東京に報告しましたがけれども、これはマルチの場でワイワイやる話じゃないなと我々は思いました。我々は、日中間で二国間問題として処理するべきであるということを東京に進言しました。これは皆さん御存知だと思いますけれども、今でも処理していますよね。内閣府に遺棄化学兵器廃棄本部というのがあって。最初は外務省がやっていたのですがけれども。後に防衛次官になった西正典君、彼が一時外務省に出向してこの関係の仕事をしていたこともあります。

この話が来たときに、私は役人ですからまず考えるのは、これは東京では誰が主管するのだろうと思うわけです。誰もやりたくないわけでしょう、この種の話は。軍縮課がこれを抱えて処理しろというのは大変だし、どう考えても日中の二国間の問題になるから、やっぱりこれは中国課にやってもらわなきゃいけないなと思って、日中間でパイの問題として処理することを進言しました。結局そうになりましたけどね。というか、外務省だけではできないから、結局内閣府に本部をつくってやるわけですよ。化学兵器禁止条約上は遺棄兵器の処理は何年までに終了というのがたしか決まっていたのだけれども、この問題については処理の期限を延長して、今もまだ遺棄の作業をしていますよね。このマルチの交渉の場では中国は廃棄についての遺棄国の責任を強調していました。

もう一つ大きな問題は、私のやっていた検証と査察の問題。第 9 条なのですが、その中でも、化学兵器禁止条約の最終的な条文を見ていただくと、9 条に「Challenge Inspection」という言葉が出てくるのです。INF や START でも出てきた、怪しいなと思ったらすぐ査察に行くぞという話。最初アメリカがこれを言い出して、「anytime, anywhere, without the right of refusal」ということを主張しました。ある日突然行くぞと言ったらすぐ受け入れなきゃいけないという話で、それはソ連なんかが抵抗したわけですね。それで、どこまで「anytime, anywhere, without the right of refusal」を薄めるかということをいろいろ議論していて、私はそのワーキンググループの議長ですから、あまり日本の立場を言うわけにはいかないけれども、日本の民間の化学産業のことを考えると、ある日突然来られても困るということがありますから、そこら辺をどうあんなにばいするかについて苦労しました。

どういうことが問題になるかという、要請国の権利、チャレンジする権利、チャレンジを受けた国の義務、それから「Challenge Inspection」という非常にドラスティックなもの以外にどういう alternative measures があり得るか、それから、要請国と被要請国だけの間で決めるのではなくて、もっと上の執行理事会、Executive Council というようなものも関与して、そのフィルターを経て決めるかどうかというようなことをずっと議論していました。私のワーキンググループではこれらの問題の大枠を議論していつ、アメリカもだんだん立場を修正していきました。そういうようなものの議論をしていて、私のときにはまだ途中までですから、どこまで進んだかな。条文をいくつかつくりましたが、途中まで。

このワーキンググループの議論というのも大変でした。条文を一つ一つ作っていくので、どこにコンマをいれるかとか、どこに括弧を入れるかとか、交渉途中だと決まっていけないのは square bracket ([]) に入れる、というようなことばかりやっていた。それから、星印というかアステリスク (*) も出てくるので、当時我々が冗談で言っていたのは、「我々はカクテル・パーティーでもコンマと round parenthesis と square bracket で話しているね」なんてふざけていましたけれども。

あともう一つは、「Organization」というのは機関をどうするか、「締約国会議 (Contracting Parties

Conference)」、「執行理事会 (Executive Council)」、「技術事務局 (Technical Secretariat)」という
ようなものの構成とか権能をどうするかという話で、これは西側、東側、非同盟のそれぞれの利害が
絡むので、ワーキンググループの中で活発な議論をしていました。その途中までの議論を私がまとめ
ていたということです。

一つ、イラン・イラク戦争の話があって、88年3月16日にハラブジャ (Harabja) というところ
でイラクがクルド人に毒ガス攻撃を行ったということを軍縮会議の場でもイランが非常に強烈に抗議
をして、それをどう扱うかということが議論になったのです。山田大使は、軍縮会議の関心事である
けれども、軍縮会議は化学兵器禁止条約を交渉することを任務としており、この問題への措置は国連
の安保理でやるべしということを主張しました。アメリカは、イランも使っている可能性に言及して
いました。

もう一つ、日本の貢献ということで、さっき核実験禁止については末広元気象庁長官の貢献があっ
たと申し上げましたけれども、化学兵器の場合には化学兵器の専門家の貢献が不可欠なのです。日本
では秋山一郎、当時2等陸佐がおられて、アドバイザーとしてジュネーブまで出張してきて専門家の
会議にも一緒に出てくれています。彼は自衛隊としては非常に珍しい方で、防衛大学校を経て陸上
自衛隊なんですけれども、化学兵器の専門家でイリノイ大学に5年ぐらい留学して Ph.D.をとった人
です。我々の交渉を助けてくれましたけれども、その後、オウム真理教の第7サティアンの解体撤去
の査察を統括して、1997年～2002年まで、それから2004年～2009年までの2度にわたって OPCW、
「Organization for the Prohibition of Chemical Weapons (化学兵器禁止機関)」の Technical
Secretariat の査察局長を務めていました。2002年～2004年までは陸上自衛隊化学学校長、これは陸
上自衛隊の化学系統の最高のポストです。それを務めた後でもう一回 Technical Secretariat で査察局
長を務めました。2013年に OPCW がノーベル平和賞を受賞したときに、秋山さんは代表の一員とし
て出ておられました。

以上です。

—— 地下核実験の禁止で、末広元気象庁長官などの専門家がいらしたのは、地震探知や地下核実験
を見張るというか、核実験をしていないかどうかを確認するためのネットワークをつくるということ
ですかね。

沼田 そうです。核実験は大体みんな地下でやっていますからね。日本は地震が多いから、その関係
のいろいろな技術があるということで、それを集めて「Nuclear Test Ban Treaty」ができた場合にそ
の検証をどうするかを検討するネットワークをつくっていこうという話をしていたということです。

—— なるほど。この核実験禁止は、基本的にアメリカは米ソの二国間で交渉したいから、必ずしも
軍縮代表部で議論したくないという立場だったと。

沼田 ここまではね。その後変わるけど。

—— ソ連はどういう立場だったのですか。

沼田 ソ連はむしろやりたがっていました。

—— そうだったんですね。アメリカだけが二国間に固執して。

沼田 そういうことです。

—— アメリカが二国間を重視していた理由というのはどういったものだったのですか。

沼田 当時の記録なんかを見ると、「Test Ban」というのが「Arms control（軍備管理）」の重要な一環であるというような発想でずっとやってきていますよね。まずはソ連との間で問題を片付けることを重視していましたが、その後 CTBT も推進して条約までつくるのだけれども、批准のところではつまづいたわけでしょう。米国内でいろいろ対立する議論はあったと思います。

—— 化学兵器の方に少し動いてしまうのですが、日本の立場で重要になってくる民間の化学産業は基本的に必ずしもウェルカムではないという立場ですよね。査察とか、特に「Challenge Inspection」なんて困るということだったのですけれども。査察とかが厳しくなり過ぎると業務に影響が出てくるからということ。

沼田 そうですね。これ、僕が議長をやっていたので、議長をやっていて自分の国の議論をどうやって通すかというのは難しいです。それこそ偏っていると思われちゃいけないので。ちょっとノウハウみたいなことをお話ししちゃうと、こういうワーキンググループでも何でも、議長をやっていると、議論のたたき台となる紙というのは議長がつくりまします。紙を事前にばらまいて各国の代表団の反応を探るわけですよ、内々に。この人は賛成してくれる、この国は反対だとか。それを一応見た上で、実際に議論が始まったときに誰を当てるか考えるわけ。要するに「この点に賛成する人、誰ですか」と聞いて、そのうち「反対の人、誰ですか」と聞いて、ちょうどその真ん中をとるような人は誰かな、と思って当てるわけ。なぜかという、コンセンサスでやらなきゃいけないから。多数決じゃないから。それをもんでいって、大体コンセンサスが出てきたなと思うと、調停するわけじゃないですけれども、その日の議論を口頭で総括しなきゃいけないでしょう。「Chairman's Summary」。その総括の中でまとめを出しちゃうわけ。落としどころを出しちゃうわけですね。そういう意味では、いい訓練になりました。

—— 具体的に日本の立場をそのときにうまく反映させられたなと思う瞬間なんてありますか。

沼田 ありますよ。どことは言わないけれども。あまり極端なことにならないようにするという。

—— 不利にはならないように、有利にもなり過ぎないように。

沼田 そうそう。

—— ちなみに、本省から日本の立場はこういうものなのかという、訓令ではないにせよ、何か……。

沼田 一応請訓はしてはいましたけど。後から、「いやあ、分かっていたかな」と。ものすごく細かい議論をしますから、本当に本省で電報を見ても分からないだろうなと思いましたね。僕自身、赴任したときにはなかなか分からなかったから。本省に分かりやすいように電報を書くようにと大分言いましたけれども。結局やっぱり、大筋は大体分かりますけれども、あとは現場の判断というのがか

なりあったね。もっとも本省にも関係各所はいますから、そういうところとは相談する必要はありますけれども。

—— このように民間の利害が絡んでくる交渉のときに、民間企業のほうから何か申入れといいますか、陳情のようなものが外務省に直接来ることというのはあるのですか。

沼田 あったのかもしれないけれども、あまり覚えていないですね。

—— さすがにジュネーブまでそれが伝わってくるということはなかなかないと。

沼田 そうですね。

—— ちょっと大きな話になるのですが、この 80 年代末のいまから見れば「冷戦末期」と呼ばれる時期にジュネーブにおられて、米ソがゴルバチョフ登場以降、軍縮を中心に一気に歩み寄ったみたいなイメージがあるのですが、現場におられた感覚としてはどうなのでしょう。それまでの時代と雰囲気が変わっているなという実感はあったのですか。それとも、結局は議論がまとまらないというか、細かい話ですが、たとえば「Test Ban」に関してもそうですし、化学兵器に関しても冷戦後に実現していくわけで、80 年代末の段階ではやっぱり変わってないなという感じでしょうか。

沼田 ちょうどその過渡期だったと思います。先ほどもお話ししたけれども、たとえばソ連の代表部の人たちはウォッカを飲むと、「グラスノスチの前が懐かしいな。とにかく国連の場でニュート、ニュートと言っていればよかったから」と懐かしがったりしているわけですよ。グラスノスチになって調子狂っちゃったよ、というようなことを言う人もいたしね。ちょうどそういう過渡期だったのでしょ

う。

それから、軍縮代表部でやっている交渉というのはこんな細かいことでワイワイ、ガヤガヤやっているわけですが、米ソの軍備管理のほうは、ずっと INF でお話ししたように、かなりギブ・アンド・テイクがあるわけでしょう。だから、その 2 つは随分違うなという感じがしました。米ソのバイをフォローしていると何か進んでいるなという感じがした。化学兵器はだんだん進んではきて、なかなかまとまらないだろうと思って。ちなみに、私が 89 年の初めにジュネーブを離任するときに、軍縮会議の仲間たちといつ化学兵器禁止条約ができるのだろうというときに、「今年中にできる」という人もいましたが、私は「あと 2 年はかかる」と言った覚えがあります。できたのが 2 年ぐらい後じゃないかな。もうちょっと後かな。

—— 93 年に署名、97 年に発効ですかね。

沼田 そうですね。というのは、米ソのバイの進み具合を見ていて、それにある程度影響されるだろうと思っていたけれども、それに比べると化学兵器禁止条約はまだまだだという感じでしたから。そんな感じでした。

—— 遺棄化学兵器の問題で、結局中国課に担当してもらったということなのですか。

沼田 途中まではね。だけど、そのためにまた組織をつくったわけですよね、遺棄化学兵器本部というのを。

—— ただ、今ホームページを見ているのですけれども、ものすごくたくさんやっているのですが、中国のみなんですよね。

沼田 中国のみです。

—— 砲弾処理とかもやっているんで、かなり国境地帯にもあるので、朝鮮半島とかベトナム半島とかにも全くなかったとは思えないのですけれども。

沼田 それは言ってきていない。

—— 向こうが言わないから、問題にしないと。

沼田 向こうは言ってきていないですね。

—— そういうことなんですね。これまでむしろ中国側は来いと、やれという感じだったと。

沼田 やれという、そういう話ですよ。大きな戦後処理の一環。

—— 誰が行ったんですかね。自衛隊が行ったとは思えないので。

沼田 処理に？

—— 砲弾処理って結構テクニカルに難しいと思うのですけれども。

沼田 自衛隊の人かなり行っているし、専門家は、元自衛隊の人もあるかもしれないしね。

—— なるほどね、身分を変えてというか。

沼田 僕は今ちょっと手元に持っていないけれども、大変な量でしょう。

—— 平成 30 年までに 6.3 万発と書いてありますね。

沼田 そうなんです。しかも、へんぴなところにあるから。

—— 中国中あらゆるところで。内モンゴルとかなので、とても最近は入れてもらえないだろうとか見ていたのですけれども。すみません、ちょっと話題がそれて。

—— 今の遺棄化学兵器の問題で、問題が北京の中国大使館ではなくてジュネーブから始まったというのは非常に面白いなと思ったのですけれども、このとき中国側が日本に対して厳しい態度をとって

きたというふうに大使は捉えられましたか。それとも、中曽根、竹下の時代で日中関係はまだ友好的で、あまり物事を大きくしたくないという感じでしたか。

沼田 話はしなきゃいけないけれども、まず静かにアプローチしようかという感じだったと思いますね。僕は、その話を聞いたときに、これは絶対大きな問題になるなと思いましたけど。これはとても簡単には処理できないなと思ったけれども。だから、本省にもこれはきちっと受け止めてほしいなと思いました。私がジュネーブを去るまでにはきちっと本省で受け止める体制はできていなかったけれども、やっぱり中国も真剣ですからずっといろいろやってきて、いまだに続いているという話ですね。

■ 在豪州大使館

—— では、よろしければ、次のオーストラリアのところに進みたいと思います。

1989年、ジュネーブからオーストラリア大使館に異動されて、冷戦終結をオーストラリアで迎えるということになりました。当時のホーク（Robert Hawke）政権は日本との関係を重視しており、第1回 APEC 閣僚会議は日本とオーストラリアとの協力によって実現したとも言われています。このオーストラリア大使館勤務時代のことでご印象に残っていることやエピソードなどをお聞かせください。

沼田 3つのことを申し上げようと思います。APECの話と安全保障の話、あとカンボジア和平というか、エヴァンズ（Gareth Evans）外務大臣のことです。

まず、APECの話は細かいことをあまり覚えていませんが、APECの第1回の閣僚会議が1989年11月にキャンベラで開かれました。そこに至るまでの過程で、明らかに外務省はAPECにそんなに積極的ではなくて、僕がキャンベラに着任した頃は。通産省は非常に積極的に推進しようとしていた。通産省は太平洋貿易産業大臣協議構想というのを出して、それを推進しようとしていて、89年1月にホーク豪首相が同じようなことを言い出しました。

今回ずっと僕はネットで調べていたら、当時の畠山襄通商政策局長がどこかに書いていたのですが、これは実は、政府の中では外務省が反対してうまく政府の案とならなかったけれども、通産省の人たちがつくった案をホーク首相とエヴァンズ外務大臣にこっそり渡したら、彼らが通産省の了承も得た上で自国の案として提案したものであると。スライドに僕は「当時は知らなかった」と書いたのは本当にそうだったのです。何か怪しいなと思ったけれども。通産省の当時それに関わった人の名前もその畠山さんが書いたものに出ています。シドニーにJETROの事務所があって、そこに出向していた人も絡んでいたということなんです。

外務省の反応は、外務省はASEANを重視していたのですが、そういうASEANを広げてやろうということについてASEANの対応がどうもはっきりしない。だからといってホーク首相が言い出した以上、そのアイデアが自然死するのを待つというわけにはいかないから、積極的に対応しようということで、第1回の閣僚会議の準備には我々が関わって、開催に至ったという経緯です。

その次の「安全保障」ですが、岩間さんはオーストラリアに愛着を感じておられると思うけれども、ポール・ディブ（Paul Dibb）って御存じですか。

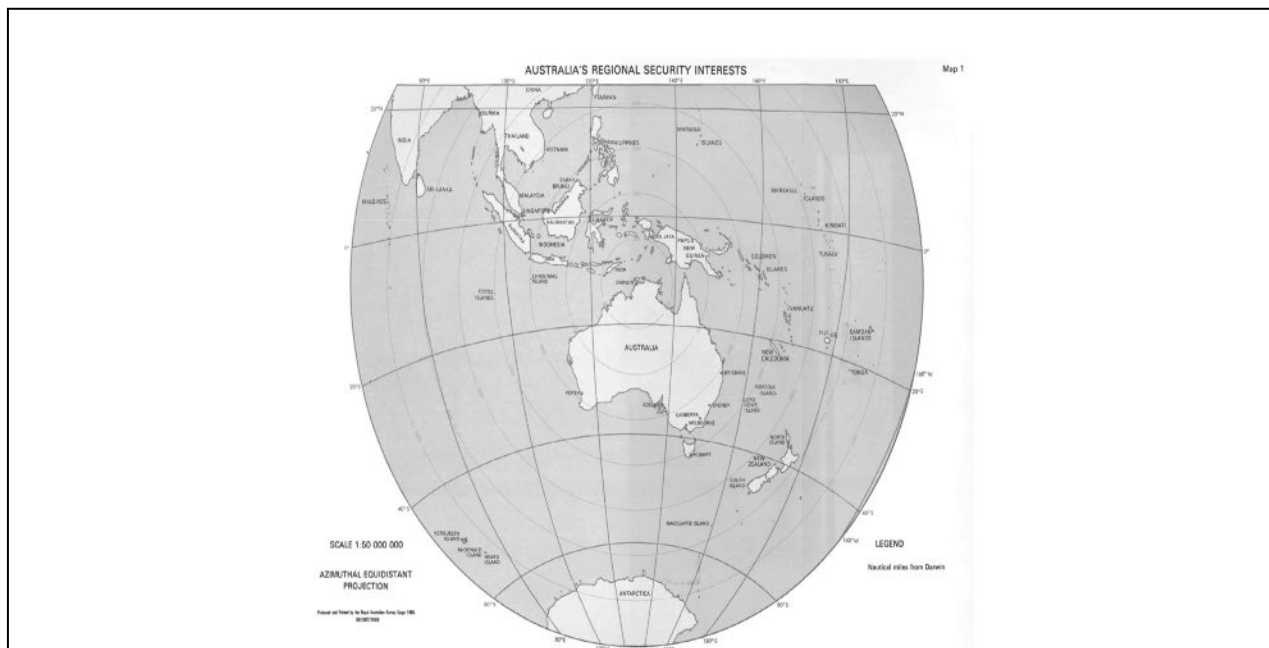
—— 名前は聞いたことがありますけれども、何でしたっけ。

沼田 国防副次官でした。オーストラリア国立大学（Australia National University）の先生でもありました。学者で、もともとイギリス人ですけどね。彼が 1986 年に『Review of Australia's Defense Capabilities』という本を出しました。ダーウィンを中心にすると世界がどう見えるかという話でね。

—— ASPI（Australian Strategic Policy Institute）で多分お会いしたと思います、ポール・ディブさん。顔を覚えています。

沼田 この地図の中心はダーウィンです。ダーウィンというのは北部のここら辺でしょう。これはオーストラリアの安全保障関係は何かというのを地図で表して、オーストラリアに対してどこから脅威が来るかというのを表したものです。ダーウィンを真ん中に置くとどこが一番近いかというとパプアニューギニアであり、ダーウィンのすぐ上は東ティモールでしょう。それから、インドネシアがある。この同心円の幅は 500 哩です。

オーストラリアは第一次世界大戦のときは遠くまで出ていったし、第二次世界大戦のときもヨーロッパ、アフリカ、南太平洋で参戦し、ベトナム戦争にも参戦した。それはいわゆる、「フォワード・ディフェンス（Forward defense）」、世界の各地まで「オーギー・ソルジャーズ」が飛んで行ってアメリカなんかと一緒に戦ったということなのですがけれども、実際にオーストラリアに対する脅威になり得るのは、今地図に出てくるようなパプアニューギニアであり、東ティモール、インドネシアと考えられる。ちなみに、1976 年～78 年ごろジャカルタでオーストラリア大使館の人と意見交換しているときに言われたのが、インドネシアとか東ティモールというのはオーストラリアにとっては「ダモクレスの剣」だということでした。あそこが危なくなるとオーストラリアにすぐ影響がある。ということで、オーストラリアにとっての脅威というのはすぐ北の方にあるのだ。そうすると、それにどうやって対処するかということで、北方に軍事リソースを集中すべきであるということをポール・ディブが「ディブ報告」で言ったわけです。



【出典】 Paul Dibb, Review of Australia's Defence Capabilities, report to the Minister for Defence (Canberra: Australian Government Publishing Service, 1986).

これは私も安保課長をやっていたものですから非常に興味があつて、彼といろいろ議論しましたが、オーストラリアの置かれている状況は日本とは大分違うんですね。アメリカとの同盟関係はありますが、米軍のオーストラリアにある施設というのはソ連の衛星通信を傍受するとか、そういう種類のことをやっていて、米軍もそんなにたくさんいるわけではない。オーストラリアのいくつかの土地にばらばらとそういう施設があるというような状況ですからね。ただ、オーストラリアがやっぱり気にしていたのは、さっきの地図を見ていただければ分かるように、太平洋、たとえばフィリピンの米軍基地がなくなったらどうなるかということ、**Maritime and air security** がどうなるかということ。これらに非常に興味があるということを我々は話していて、それを今から考えると、今まさに日米豪印でやっているような話につながるものがそこにあったのかなという感じがします。僕はそこまで意識してディブと話していたわけではないけれども、このときに彼とこういうことを話したということはそれなりに意味があったという感じがします。

それから、カンボジア和平の話です。その前にガレス・エヴァンズというオーストラリアの外務大臣、彼は僕と同じぐらいの年ですけれども、オックスフォードにいました。1968年～1970年までシェル (Shell) のスカラシップでモードリン・カレッジ (Magdalen College) というところで、私と同じ「Philosophy, Politics and Economics」でBAをとった。僕は彼と最初に会ったときに、「**Mr. Minister, You went up to Oxford just after I came down**」と言いました。あなたがオックスフォードに行ったのは私が去ったすぐ後だったと。これがどうも印象に残ったらしくて、それ以来私のことをファーストネームで呼んでいました。極めて精力的な人でした。

89年に第1回カンボジア問題バリ国際会議というのがあって、日本はそれに参加して、復旧・復興と避難民の祖国帰還を担当する第三委員会というのでオーストラリアと共同議長を務めました。日本側の議長になったのは、初代カンボジア大使になった今川幸雄さんです。そこに至るまでに私はオーストラリアの人たちとこの問題について議論をしていた。オーストラリアは非常にカンボジアの問題に関心を持っていて、我々も関心を持っていたので。それまではASEANとか安保理理事国とかが仕切っていた感じでしたが、私がオーストラリアの人たちに言っていたのは、「**We are both outsiders interested in looking in**」。この共同議長を務めたことで我々も絡むようになった。

これは何月だったか忘れましたが、ある日エヴァンズ大臣が私を呼び込みました。そのとき、ちょうど深田宏大使だったと思うけれども、何かで日本に帰っておられて、私は臨時代理大使でした。何の話かと思ったら、エヴァンズ大臣が小さな本を渡してきました。たしか色は青で「**little blue book**」と呼んでいたような気がします。「**little red book**」じゃなかった。それを渡して、「これに私が考えたカンボジアの **peace plan** が書いてある。ぜひ日本にもお金を出してほしい」と言いました。そのときに僕はいきなり随分厚かましいなと思ったものだから、「**When I was in high school, I learned about the Boston Tea Party. I remember the message “No taxation without representation”**」、本当にこのとおり言いました。そうしたら、エヴァンズ大臣が一瞬黙って、「**How blunt!**」と言って、わあっと笑い始めました。それで仲よくなったという話です。

あと、オーストラリアとの関係では、僕はオーストラリアから帰って副報道官になるのですが、その前からメディア対策をある程度始めていた。着任してすぐ、「キャンベラ・プレス・ギャラリー (Canberra Press Gallery)」というのがあって、これは割合小さいのですが、そこに外交・政治関係記者というのが全部合わせても10名足らずですが、その一人一人を順番にランチに招いて話をしていましたら、ある日、広報文化班のローカルスタッフの女性がすごく深刻な顔をしてやって来て、

「**Minister, there is a rumour going around that you are from the JCIA**」と言いました。僕は「**Great! I'll just keep on doing it**」と言って、ずっとそのまま続けました。それだけインパクトがあるのならいいだろうと思って。

そういうようなことをやってプレス工作をしていたら、当時日本の漁船が南太平洋で **Drift-net fishing**（流し網漁）というのをやっていて、これがビンナガマグロとか何かをとるのですけれども、ごそっと捕っちゃうので、ほかのものもたくさん捕っちゃうというのでアメリカでも問題になっていたし、オーストラリアでも問題にされていた。時々新聞で騒がれていたのですが、たしか日本が——この 2～3 年ぐらい後にはやめちゃうんですけどね——**Drift-net fishing** を相当制限することとなったという話を仲よくなったキャンベラ・プレス・ギャラリーの人に話したら、新聞に 1 面トップでわっと出たわけです。そうしたら、エヴァンズ大臣が「沼田にしてやられた」と言っていたという話を後で聞きました。楽しかったですね、そういうことは。

あとは、オーストラリアでも捕鯨が相当問題になっていて、ある朝突然大使館にデモが来て、そのうちの 1 人が大使館の入口の柱か何かに鎖で身をくくりつけちゃって警官がやって来たということがあります。テレビのインタビューなんかもありました。かなり厳しい質問を受けました。

オーストラリアは大体以上です。

—— ありがとうございます。オーストラリアに関して、APEC、安全保障、カンボジア和平、メディア対策ということで御質問をお願いいたします。

—— 安全保障の部分ですけれども、ディブさんと議論を交わされたということだったのですが、オーストラリアが **Forward defense** から **Self-reliance** にシフトすることをアメリカがどういうふうに見るかという議論は出ましたでしょうか。

沼田 それ自体をどういうふうに見るかという議論はあまりないのですけれども、当時僕がディブと何を話していたか思い返してみると、アメリカが必要なものは、たとえば **Northern Territory** のパイナップル・ギャップ（**Pine Gap**）というところの豪米共同軍事宇宙研究施設におけるソ連の弾道ミサイル実験の探知。これは要するにテレメトリーを探知するというようなことをやっていたし、**South Australia** のナランガー（**Nurrungar**）の豪米共同軍事施設では弾道ミサイル発射の **early warning** などをやっていた。これはこれとしてアメリカにとっては役に立つことなので、そういうのは続いている。またベトナム戦争があったら出てくれるかどうかという問題はあったかもしれないけれども、そういうときでもないから、オーストラリアなりに自分への脅威というのは何かと思ったら身近にあるから、そのためにちゃんと備えなきゃいけないということでした。そのこと自体に、アメリカが特にどうこうということにはなかったのではないかと思います。

他方、オーストラリアも、さっき申し上げたように、フィリピンの米軍基地がどうなるかということとは自分にも影響があるということを考えている。その辺になると日本も **Pacific** にいるわけですから、非常に重要な共通の関心事があると思いました。私がディブとなぜ話したかということ、それまであまり日豪間で安全保障の話をしていなかったものですから、そのような話を始めたほうがいいなと思って始めたということです。

—— 大使とディブさんのチャンネルというのは、その後も引き継がれていったのでしょうか。

沼田 どうだか、よく分かりません。武官もいましたけど、武官と一緒にこういう話をした記憶はあまりないです。ちなみに、当時キャンベラにおられた片原栄一さんって御存じ？

—— 防衛研究所の方ですか。

沼田 はい。彼が当時 ANU にいました。彼は GRIPS にもいたことがありますか？

—— うちは防研と結構いろいろなことをやっているの。

沼田 たしか彼は当時 ANU にいましたね。さっき言ったディブとの話も多分に僕の個人的興味から始まった話ですけども。でも、面白かったですよ。さっきの地図も、我々が普通オーストリアを考えると、遠くの方にあると思うでしょう。逆にオーストラリアを中心に見ると随分世界が違うなと思って。

—— 海が多いですね。

—— この当時、この少し前ですけども、たしかニュージーランドが非核政策にかじを切り始めた頃で、ニュージーランドとオーストラリアで全然違う対応をとっていた記憶があるのですけれども、あのことは何か話し合われたことがありましたか。

沼田 オーストラリアでは話さなかったですね。その話は、僕は安保課長でやっていましたけれども。ロンギ首相は 89 年までいたのかな。

—— 84 年～89 年ですね。

沼田 そうか。僕が着任したのが 89 年だから、ロンギさんは消えた後で、あまり議論しなかったような気がします。

—— ポール・ディブさん、お顔は覚えているので、多分私はずっと後に ASPI とかでお会いしたのかなと。なぜ彼が intelligence community に流れ着いたのか、すごく不思議な経歴なんですけどね、拝見していると。

沼田 奥さんが白ロシア人ですよ。

—— ソ連に関する博論を書いていますよね。

沼田 そうそう。彼はイギリス人だけど、労働者階級出身でイギリスの civil service exam を受けようと思ったら、イートンとかハロー出身のエリートばかりではじき出されるからというので、それでオーストラリアに行ってオーストラリアの役人になったということのようですけども。

—— civil service、落ちたみたいですよ。

沼田 そう。それでオーストラリアでは受かった。いい人でしたよ。

—— すごく柔らかな感じの方ですよ。「豪州の防衛に直結する地域に軍事リソースを集中すべし」というのですけれども、他方で 90 年代にはすごく積極的に PKO とか出していましたよね。たしかオ

ーオーストラリアの軍隊って、もともと数万人しかいないですよ。直結する地域ってどこでしょうという。

沼田 これは要するに「maritime and air」でしょう、重要なのは。オーストラリアの場合には、オーストラリアの陸軍軍人ってオージー・イングリッシュでは「diggers」ですよ。スコップとシャベルで地面を掘っているような感じですね。それが Australian Army の伝統だったけれども、それだけではなくて海とか空が大事です、特に北のほうの近海が大事です、そういうようなことだと思います。

—— 第二次世界大戦中に日本がダーウィンを空爆したんですよ。

沼田 その話も影響していたかもしれませんね。日本を一種の脅威と見ていたかもしれません。ダーウィンを空爆したし、シドニー・ハーバーは潜航艇が攻撃した。あれは戦争博物館にたしか置いてあったけれども、それがまたやって来るという潜在意識があったのではないかという話もあるようです。僕のときは、それはあまり感じなかったけれども。

—— でも、外から脅威が来たという記憶はあれしかないの。

沼田 そうなんです。

—— 今あんなにオーストラリアがクアッド (QUAD) でコミットしてくれるのは、ああいう記憶があるからかなと思えないでもないですけどね。ダーウィンへ行かれたか、大使。

沼田 ダーウィンは行ってないな。行きました？

—— 行きました。石油タンクか何かを造ろうとしていて、爆撃を受けて完成できなくて、完成したのは戦争が終わった後だったみたいな話で。そんなものすごい焼け野原になったわけでも、何百人と死んだわけでもないんですけども、この人たちにとっては大ごとだったんだよねという感じ。ダーウィンって本当に今でも地の果てという感じのところでした。でも、ああいうアウトバックの感じがオーストラリア人の原点ではありますよね。

沼田 そうですね。さっきの地図も面白いのは、ダーウィンを一番中心に置いてますね。ダーウィンから同心円で 500 ㎞ずつ書いてあるでしょう。そうすると、そういう世界の見方もあるのかなと思って。

—— 当時、冷戦が終わる時期ですけども、オーストラリアのカウンターパートの間で中国の存在はというふうに扱われていたか、ご記憶に何かありますか。

沼田 中国の話は、ディブと話したときにたしか出てきていた。たとえば、僕が彼と話したときに、彼は、さっき申し上げた彼自身の書いた報告を基に、エヴァンズ外務大臣の外務貿易省と一緒にあって、外務貿易省が白書か何かを出しました。それについて僕が彼に話しにいったときに、中国の動向を国防省は外務省よりもう少し厳しく見ている。中国の潜水艦等の海軍力は時代遅れのものであるにせよ、これが仮に南シナ海への勢力拡張のために展開される場合には、ASEAN のどの国も対抗し得

ないことを念頭に置いておく必要があると言っていました。まさに今の状況ですね。

—— 先取りしていますね。

沼田 僕もこの電報を読み返して、結構先取りしていたなと思いました。

—— オーストラリアにおられて華僑の存在って感じられたことはありますか。先ほど、インドネシアとかマレーシアにいと……。

沼田 オーストラリアではそれほど感じなかったけれども、ただ、僕の非常に親しい友人がいて、華僑ですけども、彼は数学者で釣りキチガイだった。僕は釣りをやったことがなかったけど、彼に連れていかれてマス釣りを覚えました。キャンベラ近辺の川とか湖で。結構 **Chinese Australian** のコミュニティがあるなという感じはしました。

—— ただ、逆に、キャンベラってものすごくホワイト・アングロサクソンだなという印象は受けましたが、シドニーはものすごく……。

沼田 また別ですよ。

—— 人種のるつぼなんですけど。ただ、うちに来る留学生なんかは 3~4 人に 1 人は中華系の人がいますね。よく勉強しますからね、彼らは。なので、そういうのもあって、やっぱりオーストラリアの中国に対する態度ってほかの欧米諸国とは違うのかなという気はしますしね。インドネシアがどうなのかもものすごくいつもアンテナを張っていますからね。東ティモールの時も真っ先に出張ってきましたから。

あと、日本が昔いた **South Pacific** のあたりにも関心がすごくありますよね。フィジーとかサモアとかトンガとか、この辺ですね。

沼田 僕がキャンベラにいたときにニューカレドニアに行きましたよ。ニューカレドニアで **South Pacific** についての会議があって、出張しました。あそこに日本人町がありましたよね、戦前は。あそこはオーストラリアにすごく近いですね。

—— いっぱいクルーズとか出ていますよね、私は行ったことがないですけど。自分の裏庭みたいな意識がすごくあって。

沼田 そうそう。確かに **South Pacific** は裏庭みたいな意識がありますね。それはすごく感じました。

—— **South Pacific** の案件は、日本ではオーストラリア大使館は全く関わらないのですか。

沼田 関わっていましたよ。僕はやっていました。**South Pacific Forum** の会議がニューカレドニアであったときに僕はオブザーバーとして参加しました。

—— この辺どこも小さい国なだけに、ちょっと頑張るか頑張らないかで恐ろしく違いが出るんです

よね。

沼田 でも、South Pacific についての会議を彼らがやっているときに日本が行くと、ちょっとよそ者扱いをうけているような感じでした。オーストラリアとニュージーランドが自分たちの裏庭だと思っているから。

—— 帝国主義の帝国主義という感じで、不思議な感じで縄張り意識を持っていますよね。だから、むしろ日本人とかのほうがこの辺ではやりやすいんじゃないかなと思うんですけどね。

沼田 倉成外務大臣も南太平洋に関心を持っていましたよね。

—— だから、東南アジアでもオーストラリア外交は必ずしも上手ではないですよ、インドネシアとかに対しても。もうちょっとソフトにやればいいのになという。

沼田 でも、インドネシアとの関係は、ディブのこの地図を見て、ジャカルタで「ダモクレスの剣」と言われたことを思い浮かべると、やっぱり大変だと思います。頭の上から落ちてくるかもしれないわけでしょう。

—— そうですね。ベトナム難民とかすごかったですよね。ボートピープルがいっぱい来ますからね。

—— JCIA の話は非常に面白かったのですが、大使はアメリカも長くおられて、イギリスにもおられて、そしてオーストラリア、カナダにおられたわけですが、「ファイブ・アイズ」というのがありますよね。このファイブ・アイズについて、大使はいつぐらいから、どのように認識されていたのか、もしくはお付き合いがあったかどうかなど、いかがでしょうか。

沼田 残念ながら付き合いはなかったですね。intelligence community の人と付き合いがあったのはワシントンだけです。当時はどういうわけか、CIA の人も大使館の non intelligence の人たち、我々外務省の人間とも付き合おうという気持ちがあったみたいで出入りしていたのですけれども、それだけです、残念ながら。

—— オーストラリアでも、今の安全保障の話はインテリジェンスの世界とは違うところにあったと。

沼田 違うところにありますね。ただ、僕の知っていたオーストラリア人の外交官でその後オーストラリアのインテリジェンスのヘッドになった人が2人います。

—— ファイブ・アイズというのがあるということは、大使はもう。

沼田 それは知っていました。

—— そのコミュニティには入っていけないという感じが。

沼田 なかなか入ってはいけない。

—— 1 点だけ。ちょっと角度が違うのですけれども、さっき南太平洋の話とニューカレドニアの話が出てきたのですけれども、大使がおられたときにこの地域でフランスのプレゼンスを感じることはありましたか。

沼田 あまり感じませんでしたね。

—— イギリスもやっぱりそうですか。

沼田 あまり感じませんでした。

—— オーストラリアン・ネイビーも要するにロイヤル・ネイビーですからね。私はファイブ・アイズってそういうことだと思うんですよね。どこかで血のつながっている親戚みたいな。ほとんどがロイヤルで、アメリカだけロイヤルじゃないですけれども、それ以外はみんな女王陛下に忠誠を誓っている軍隊なので。

沼田 日本も Commonwealth の一員になるかという話？

—— ちょっと私は違うと思うんですよ。あんなマフィアみたいなところに入って行って大丈夫かい、日本みたいなうぶな国が、という。

沼田 お気持ちはよく分かる。

—— やってるよという感じなんですよ。

沼田貞昭オーラルヒストリー ⑦

外務副報道官、駐英公使、外務報道官
—スークスマンとして—

質問票 7 外務副報道官、駐英公使、外務報道官—スピークスマンとして—

1. 大使はオーストラリアから帰任後、1991（平成 3）年 3 月に外務副報道官（大臣官房参事官、審議官（報道・広報担当））に着任されています。大使が副報道官を務められた時期には、慰安婦など歴史認識に係わる問題が大きな外交課題となりました。歴史問題はまた、官邸（外政審議室）との関係や外務省内で担当をどの部署にするかといった政府内政治としても対応が難しかったのではないかと思います。歴史問題について、副報道官としてご苦労なされたことやご印象に残っていることをお聞かせください。
-

■キーワード

- ・ 慰安婦問題
- ・ 慰安婦に関する加藤官房長官談話
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taisen/kato.html>
- ・ 慰安婦に関する河野官房長官談話
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taisen/kono.html>
- ・ 「sincere contrition」（海部総理演説（於・シンガポール））
- ・ 細川総理の所信表明演説
<http://worldjpn.grips.ac.jp/documents/texts/pm/19930823.SWJ.html>

■参考：大使略歴

- 1991 年 3 月 大臣官房参事官（報道・広報担当）
- 1992 年 8 月 大臣官房審議官（報道・広報担当）

■参考：当時の主な出来事

- 1991 年 5 月 海部俊樹総理、東南アジア訪問
- 1991 年 12 月 ブッシュ大統領、真珠湾戦没者記念式典で演説
- 1992 年 1 月 宮澤喜一総理、韓国訪問
(慰安婦問題に関してお詫びと反省を表明)
- 1992 年 7 月 加藤紘一官房長官、慰安婦問題に関する調査結果発表
- 1993 年 1 月 宮澤総理、ASEAN4 か国訪問
- 1993 年 8 月 河野洋平官房長官、慰安婦に関する報告書を発表
- 1993 年 8 月 細川護熙総理、所信表明演説
(侵略行為と植民地支配に深い反省とお詫びを表明)
- 1993 年 11 月 細川総理、韓国（慶州）訪問

2. 大使が副報道官であられた時期にはこの他にも、
- (1) 湾岸戦争への貢献をめぐる議論やカンボジア PKO への参加、
 - (2) 天皇陛下の中国訪問、
 - (3) 北方領土をめぐるソ連（ロシア）との交渉、
 - (4) 米国との構造協議
- など、さまざまな外交課題が山積していました。
- また、外務省内でも湾岸戦争時の対応の反省から総合外交政策局が設置されるなどの外交機能強化の取り組みが実施されています。こうした問題に関して、副報道官として強くご印象に残っていることをお聞かせください。
-

■キーワード

- ・ 湾岸戦争
- ・ 海上自衛隊掃海艇部隊のペルシャ湾派遣
- ・ カンボジア PKO
- ・ 天皇訪中
- ・ 北方領土交渉、ソ連崩壊
- ・ 東京サミット
- ・ 日米構造協議
- ・ 外交機能強化

■参考：当時の外務報道官

渡辺泰造（1989 年～1992 年）

英正道（1992 年～1993 年）

寺田輝介（1993 年～1995 年）

■参考：当時の主な出来事

- 1991 年 4 月 海部総理、米国訪問
- 1991 年 8 月 海部総理、中国訪問
- 1991 年 4 月 ゴルバチョフ大統領、訪日
- 1991 年 4 月 海上自衛隊掃海艇部隊のペルシャ湾派遣を決定
- 1991 年 7 月 海部総理、米国訪問
- 1991 年 12 月 ソ連崩壊
- 1992 年 10 月 天皇・皇后両陛下、中国訪問
- 1993 年 5 月 UNCTAC 派遣の文民警察官が襲撃され死亡
- 1993 年 7 月 東京サミット
- 1994 年 2 月 細川総理、米国訪問

3. 1994年2月から1998年1月の約4年間、大使は在英国特命全権公使としてロンドンに勤務されました。
- (1) 大使はエネルギーの半分ぐらいを「日英和解」の問題に使ったと書かれています（沼田貞昭「日英戦後和解（1994-1998年）」『SGRA Report』Vol.66、2013年）。イギリス人捕虜問題を含む日英間の戦後和解について、大使はどのような思いで取り組まれたのでしょうか。
- (2) 大使館のスポークスマンとして、和解に関する事柄以外でご記憶に残っていることがございましたらお話をください。
-

■キーワード

イギリス人捕虜問題

- ・ 対日戦勝 50 周年記念（VJ (Victory over Japan) Day）
- ・ 村山総理談話

https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/danwa/07/dmu_0815.html

- ・ 阪神・淡路大震災の発生
- ・ 日米安全保障共同宣言

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/usa/hosho/sengen.html>

- ・ 『ザ・サン』紙上での橋本総理の謝罪メッセージ
- ・ 天皇皇后両陛下の訪英

■参考：大使略歴

1994年2月 在英国大使館公使

■参考：当時の主な出来事

1995年1月 阪神・淡路大震災発生

1995年8月 村山総理談話発表

1995年8月15日 英国での対日戦勝50周年記念

1996年4月 日米安保共同宣言

1998年1月 『ザ・サン』に橋本龍太郎総理のメッセージ掲載

1998年5月 天皇皇后両陛下、英国・デンマーク訪問

4. 英国でのご勤務後、大使は 1998 年に外務報道官として本省に戻られています。
- (1) 同年秋には韓国から金大中大統領、中国から江沢民総書記が続けて来日し、植民地支配や侵略に関しての文言を含む共同宣言がそれぞれ発表されました。この時のことでご印象に残っていることをお聞かせください。
 - (2) さらに、この時期には北朝鮮によるテポドン発射やロシアとの北方領土問題、ガイドラインの改定など安全保障政策の整備も進んでいます。こうした外交案件をめぐって、外務報道官としてどのように取り組まれたのかをお話ください。
 - (3) また、G8 サミット、APEC などの際、日本のスポークスマンとして日本経済の先行きなどについてどのように説明されていたのでしょうか。
-

■キーワード

日韓共同宣言

https://www.mofa.go.jp/mofaj/kaidan/yojin/arc_98/k_sengen.html

(植民地支配による多大の損害と苦痛に痛切な反省と心からのお詫び)

- ・ 日中共同宣言

https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/nc_sengen.html

(中国への侵略による多大な災難と損害に深い反省を表明)

- ・ エリツィン訪日時「川奈提案」
- ・ 新ガイドライン
- ・ 周辺事態法

■参考：大使略歴

1998 年 1 月 外務報道官

■参考：当時の主な出来事

1998 年 4 月 エリツィン大統領訪日、川名で橋本総理と会談
1998 年 8 月 北朝鮮が日本列島越しにテポドンを発射
1998 年 10 月 金大中大統領訪日、「日韓共同宣言」
1998 年 11 月 江沢民総書記来日、「日中共同宣言」
1999 年 3 月 日本海で不審船が逃走
1999 年 5 月 「新ガイドライン」「周辺事態法」成立

外務副報道官、駐英公使、外務報道官—スークスマンとして—

■ 歴史認識問題への対応—外務副報道官として—

—— 大使は、オーストラリアからの帰任後、1991年3月に外務省の副報道官に着任されています。大使が副報道官を務められた時期には、慰安婦など歴史認識にかかわる問題が大きな外交課題となったと思います。

また、歴史問題というのは官邸ですとか外政審議室、外務省内での担当の割り振りとか、政府内政治としてもご苦労が多かったのではないかと思います。歴史問題について副報道官としてご苦労なされたことやご印象に残っていることをお聞かせください。

沼田 質問の後半のほうから先にお話ししようと思うのですが、歴史問題というのはいろいろな役所が絡んでいて、絡みたくない役所もあって、なかなか大変です。そういう状況で、特に外国にどう説明するかというのがなかなか難しい話で、中身がよくわからないまま説明しなければいけないということが結構ありました。他方、副報道官あるいは報道官というのは立場上何も言わないということは許されませんから、それはかなり苦しいこともありました。

その前置きで、たくさんあるので要点だけ申し上げますけど、海部俊樹総理の東南アジア訪問に同行したときに総理はシンガポールで政策演説をされました。91年5月3日。あの政策演説を当時の林景一南東アジア二課長（のち駐英大使、最高裁判事）が起案していて、彼から英語でどう訳したらいいかという相談を受けました。どこの部分かという、シンガポール演説の中で、「私は、あらためて今世紀前半の歴史を振り返り、多くのアジア・太平洋地域の人々に耐えがたい苦しみと悲しみをもたらした我が国の行為を厳しく反省するものであります」、ここをどう訳すかという話でした。

それまでは反省というと大体「reflection」という言葉が多かったです。でも「厳しく reflect」というのも変ですよ。それで林君も悩んで僕に相談してきて、僕がサジェストしたのが、英語のテキストは「At this juncture, looking back upon the first half of this century, I express our sincere contrition at Japanese past actions which inflicted unbearable sufferings and sorrows upon a great many people of the Asia-Pacific region」。結果、総理はこれを採用されて、スピーチは日本語でやられたけれどもこの部分の英訳はこの通りになりました。このスピーチを、実際に総理がスピーチをされる2日前だったか、副報道官のときも報道官のときも総理についていくというか先乗りすることが多かったのですが、事前に行って現地の外国人記者にブリーフしました。

—— 渡すわけではないのですか。

沼田 渡しました。

—— 全部渡すのですか、事前に。

沼田 このときは、事前にエンバーゴ付きで。そのときに BBC の特派員がいて、「contrition」という言葉を見て、「1週間前リー・クアンユーに会ったときに、リー・クアンユーは日本には contrition がないと言っていた」と教えてくれました。それで、しめたと思いました。実際に総理が演説をやられたでしょう。実際のリー・クアンユーとの会談で、やっぱりリー・クアンユーはこれを読んでいた

わけですよ。私のノートを調べたらそのくだりのメモがとってあって、総理は「Open contrition」、Openly に contrition と言われましたね、これは「a step in the right direction you must take to play a fuller role. A catharsis is necessary」、こういうことを通じる catharsis が必要だと言いました。

それから、その後、海部総理はフィリピンに行かれてアキノ（Corazon Aquino）大統領と会ったときに。

—— 先ほどの「contrition」という言葉は、ほかに候補はあったんですか。

沼田 その後「remorse」になっていますよね。

—— remorse。「regret」というのは。

沼田 regret じゃだめ。

—— だめというのとは。

沼田 感じが伝わらない。だって、内面的なものがないでしょう。それはいろいろ考えました。

それで、フィリピンに行ったときにアキノ大統領が「contrition」という言葉があることを気がついていて、それに言及していたというのを覚えています。他方、何であんな難しい言葉を使ったのだという声もあった。

—— 難しいですよ。

沼田 ちょっと宗教的な響きがするでしょう。

—— あまり私は聞いたことがないですね、「contrition」という。

沼田 contrition というのは、やや神の前でという感じがありますね。別にそういう意味で使ったわけじゃないけど。reflection だったらただ reflect しているだけだから意味ないでしょう。

—— そうですね、考えというだけです。

沼田 regret と言ったら sorry で済んじゃうでしょう。だから、やっぱり両方ともあまり適さないなと思って。これに類した例は、僕は北米一課の首席事務官のときに昭和天皇がアメリカに行かれて、ホワイトハウスのディナーの御挨拶の中で「私が深く悲しみとするあの戦争」というのがありますね。

「That unfortunate war which I deeply deplore」と訳したわけ。この英訳は僕です。

—— 「deplore」ですか。

沼田 ちょっと違うからね、このコンテクストとは。だから、そんなようなことも頭に置きながら「contrition」と書いたら、たまたまりー・クアンユーの言っていることと一致したということです。

—— 批判もあったというのは、省内的にということですか。

沼田 いやいや、國廣大使だったかな、何だか難しい言葉を使ったねと言われました。それが海部総理の話。

それから、宮澤総理の訪韓は、実際に会談でどういうやりとりがあったか、なかなか僕も記録もノートもなく。ただ、確かに慰安婦の問題が出てきました。割合突然出てきたという記憶があります。それで『朝日新聞』の報道ですよね、あれは 1992 年 1 月 11 日だったかな。これが何か問題になりそうだということは意識していました。実際の会談のやりとりがどうだったかというのは、結局僕のメモにはないので、河野談話作成過程等に関する但木敬一他検討チーム報告で確かめました。

—— 2014 年ですね。

沼田 あれを見ていて、かなり宮澤総理は踏み込んで言われたように書いてありますね。あの検討チームの記録によると、宮澤総理から従軍慰安婦の募集や慰安所の経営等に旧日本軍が関与していた動かしがたい事実を知るに至った、日本政府としては公にこれを認め、心から謝罪する立場を決定したと。従軍慰安婦として筆舌に尽くしがたい辛苦をなめられた方に対し衷心よりお詫びと反省の気持ちを表明したいと言われている。というふうに記録に書いてあるのですが、当時僕は韓国プレスにもブリーフした記憶があるけど、あの問題は大変だったという以上のことはあまり覚えていないです。

ただその次に、92 年 7 月 6 日に加藤紘一官房長官の調査結果の発表があったときに、あの発表の中身を外国プレスに僕は英語でブリーフしたわけです。何かすごくいろいろ質問されて、90 分ぐらいしごかれたという記憶があるのですが。あの官房長官発表の英訳に大分手を入れた記憶があります。加藤発表は、「慰安所の設置」等につき、「政府の関与があったことが認められた」と言って、それから「従軍慰安婦として筆舌に尽くしがたい辛苦をなめられた全ての方々に対し、改めて衷心よりお詫びと反省の気持ちをもうしあげたい」と言っていますよね。だから、英語では「the inquiry has revealed that the Government had been involved in the establishment of comfort stations,」と書いてあるでしょう。「The Government again would like to express its sincere apology and remorse」、remorse がこの辺に出てくる。「to all those who have suffered indescribable hardship as so-called “wartime comfort women,” irrespective of their nationality or place of birth」。それで、involved ってどういうことだということについては、これからさらに調べますという話でした。

—— そうなんですか。

沼田 そうです。調査するという話ですから。調査してきて、さらに調べるということでした。まだしばらく続くわけでしょう。聞き取り調査とかいろいろあるわけですね。この本（大沼保昭・岸俊光編『慰安婦問題という問い』勁草書房、2007 年）の中で当時の石原（信雄）副長官がいろいろ言っておられるような経緯があって、次に 93 年 8 月 4 日の河野洋平官房長官談話です。これもまた僕は外国プレスに対して英語ブリーフをやらされたわけです。何となく慰安婦担当スポークスマンみたいになっていた。こういう過去の問題ってどうも僕に回ってることが多かったのですけれども、このときも英語にも手を入れた記憶があります。一応訳したものが上がってきましたが、それを修正するわけです。

それでもう一回読み直してみましたが、たとえばこの河野談話の中で「本人たちの意思に反して集められた事例が数多くあり、更に、官憲等が直接これに加担したこともあったことが明らかになった」、

これがいろいろ議論されていますよね。これはどういうふうに訳していたかなと思ったら、「The then Japanese military was, directly or indirectly, involved」なんていうのがあって、それから「in many cases they were recruited against their own will through coaxing, coercion, etc. and that, at times, administrative/military personnel directly took part in the recruitments」と書かれています。

それから、その次に「当時の朝鮮半島は我が国の統治下であり、その募集、移送、管理等も甘言、強圧による等、総じて本人たちの意思に反して行われた」と書いてあって、これがまた問題になっているところでしょう。この訳がどうなっているかなと思って見たら、「their recruitment, transfer, control, etc. were conducted generally against their will」となっています。だから、全体として強制連行を認めているか認めてないかというのでいろいろ議論が分かれていて、後に狭義の強制はなかった云々という話になりましたね。

ちなみにその話までしちゃいますと、2007年の米下院外交委員会の決議に対して6月13日付ワシントンポストに全面広告出したでしょう。ああいう全面広告を出すということは、僕自身は大変な失策だったと思う。スポークスマンとしての立場から見たら counterproductive。「The fact」として事実関係はこうだと言ってね。中国の官製プロパガンダみたいな感じだったでしょう。それは別としてね、このときも随分質問を受けました。

—— どういう。

沼田 強制連行はどういうのがあったのか、とか。ただ、それはわからないわけですよ。事実こうこう、誰が何月何日に殺されましたということが出てきてないから、そういう質問に答えるのはきついんですよね。このテキストしかないもの。

—— 外政審議室が大体最初の案をつくっていると思うのですけど。

沼田 そうですよ。

—— 前半の宮澤さんの発表のときには有馬さんがいらっしゃったかもしれませんけれど。

沼田 有馬さんはいた？

—— 有馬さんは外政審議室長でいたことがなかったかな。

沼田 宮沢総理韓国訪問の時は有馬さんが外政審議室長でおられたけれど、加藤官房長官発表のときの外政審議室長は谷野作太郎さんだと思います。

—— ごく初期ぐらいだと思います、本当に。

—— 要するに外務省の御出身なわけですけども、連携といいますか、外政審で日本語のドラフトをつくっていくわけですけども、常に情報は外務省の方とやりとりしながらという感じだったのでしょうか。

沼田 よくわからない、僕のところには結果しか来ないから。

—— そうですか。もうできたものが来ているんですね。

沼田 それで時間もなくてね、訳を一生懸命見てね。それで 20 分くらいブリーフィングを受けて、外国人記者にブリーフするわけですから、つらいですよ、それは。

—— 英訳は外務省のほうでやっているわけですか。

沼田 英訳は外務省でやっているはずですよ。ネイティブ・チェックは入っているかもしれないな。それでもおかしいと思うと大分直しちゃいますけどね。ということなので、この 2 つについては外国プレス等の関係で苦労しました。

—— 今に至るまで、かなりしこりが残っているわけですが、当時の政権として、問題が出てきたときにこれをどういう方向に持っていこうとか、そういう感じはあったのでしょうか。こういうことには気をつけてやってねとか。

沼田 それはむしろ、この本の石原さんなんかが言っておられることに尽きていると思います。でも、これを読むと、石原さんはかなり信念を持ってやっておられたという感じが出てきますよね。谷野さんも信念を持ってやっておられたと思います。

—— 引き受け手がないので官邸がとにかく出るという感じですよ。ただ、実態としては外務省でやっているということになりますよね。御出身はそういうところであるし、現場もあいているという。

沼田 当時も、その後もずっとこの問題が尾を引いているから、北東アジア課の人たちがよくブリーフに来ました。彼らは大変だったと思う。当時北東アジア課の首席で藤井新君という人がいましたが、韓国語の優秀な人で、早く亡くなりましたね。彼なんか苦労したと思います。

先ほどのお詫びの言い方ですけれども、「sincere apologies and remorse」というのが河野談話でも出てくるわけですよ。そうこうしているうちに細川護熙総理が 93 年 8 月 23 日に行った所信表明演説で、侵略行為や植民地支配が出てきます。「過去の我が国の侵略行為や植民地支配などが多くの人々に耐えがたい苦しみと悲しみをもたらしたことに改めて深い反省とお詫びの気持ちを申し述べる」。この部分が「our profound remorse and apologies for the fact that past Japanese actions, including aggression and colonial rule, caused unbearable suffering and sorrow for so many people」、村山談話とすごくよく似ていますね。後で村山談話が出てきますけど、大体これを踏襲していますよね。それは当然チェックするわけですよ、この間どう訳したとかどういう言葉使ったというのは。

—— それを同じでいくか強めるか。

沼田 そう。だから、この辺でパターン化しているわけですよ。単なる反省ではなくなってきたわけ。reflection とか regret ではなくなってきた。

それで、そのままロンドンの話に行っちゃっていいですか。

—— その前に、副報道官と報道官の役割分担とか。

沼田 報道官は霞クラブとの会見があり、かつ総理の外交訪問には基本的には報道官がついていくことになっていました。それから、外国プレスの会見は報道官と副報道官で分けてやっていました。週2回あったら1回は報道官が1回は僕とかね。ただ、総理が外国に行かれる場合に僕がついていった場合もあります。さっきの宮澤さんなんかはそうだし、ほかにも何回かありましたね。だから、それが大体の分担ですね。

それで、よろしいですか、イギリスの方の話に。

—— すみません、役割分担と関連して。先ほど大使が過去の問題の対処は私の役回りになることが多かったとおっしゃっていましたが。

沼田 何となく。

—— それは何か申し合わせがあったわけでは？

沼田 別に申し合わせがあったわけではない。外国プレスへのブリーフとか、あまり皆さんやりたがらないでしょう。

—— 北米一課の時代の昭和天皇のときにもこの問題は出てきたというのは。

沼田 これは北米一課の首席時代ですから、陛下の御訪米のお言葉や何かの原案はつくっていました。その過程であれをどう訳すかなんて話になって。

—— これはちょうど政権交代の時期なんですけど、そのことがやはり意味があったと思いますか。

沼田 ありますね、あると思いますよ。細川さんのこの表現ね、非常にはっきりとしているでしょう。

—— はい、おわびですね。

沼田 その前に、侵略行為や植民地支配、これがキーワードです。これははっきり言っていますからね。やっぱりそれは政権交代の意味があったと思います。

■ 駐英特命全権公使着任

沼田 次に、イギリスの話で。すぐ捕虜の問題に戻りますけれども。これ〔手元の資料〕イギリス在勤中にやったスピーチのリストです、64回。

—— 何か月でですか。

沼田 4年間。こっちはラジオ・テレビインタビュー127回。どういうトピックだったかというのをリストにしました。たとえばこれを見ていただくと、POW（Prisoner of War）の話も大分あります。

94 年から。

—— 鯨も。

沼田 鯨が最初 7 回ある。この辺から捕鯨の問題が出てくるでしょう。それで 94 年に入るわけ。だから、この問題でも大分イギリスのラジオ、BBC なんかのインタビューでいじめられました。

ロンドンで僕はなぜそういうことになったかという、副報道官を 3 年やってから行ったわけです。ロンドンの大使館に着いてみたらまさに捕鯨の問題でラジオやテレビのインタビューの依頼というのはたくさん来ていたけれども、みんな断っていたみたい。農水出身の人のところにインタビュー要請が行くけど、みんな答えたくないから断っていたのでしょう。僕は、3 年間 Deputy Spokesman をやってから行ったので、どういうリクエストが来ているかを全部僕のところにまず持ってきてくれと言いました。受けるか受けないか、誰が受けるか決めるから。結局、自分が全部受けちゃった。そういう経緯があります。

特命全権公使というのは、結構自由です。総務じゃないから。総務公使はナンバー 3 です。特命全権公使はナンバー 2。だから割合自由、要するに何とか班長ではないから。だから、何もしなくてもいいのかなとは思いますがね（笑声）。

—— そんなことは。

沼田 だから、割合自由に自分が何に重点を置くか決められます。そういう意味では対外発信には適している。僕が一番活発に対外発信していたのはロンドンのときです。ここにもいくつかあるけど、スピーチとかそういうようなことでは比較的自由に動けたということがあります。

なぜインタビューをそんなに受けることになったかという、ロンドンに赴任する前に僕は副報道官をやっていたから、BBC の当時の東京支局長と仲がよかった。フィリップ・ショート (Philip Short) という人だけど。彼にロンドンに行ったら BBC のどういう人に会ったらいいだろうと聞いたわけ。そうしたら十数人の長いリストをくれて、こいつはいいやつだとか嫌なやつだとかの注釈付き。それに載っている人に片っ端から会いにいきました。

—— 何人ぐらいいたんですか。

沼田 十数人いました。その中に、イギリスの BBC のラジオで「Radio 4」というチャンネルに「The Today Programme」というのがあって、朝の 6 時半から 9 時ごろまで時事問題だけ、ずっとニュースとインタビューだけ流す。これはイギリスの国会議員の 8 割が聞いていると言われていて、その日のアジェンダ・セッティングをするわけです。8 時過ぎぐらいになると首相が出てきたり大臣が出てきたりしている。これ、全部生放送なんです。

—— そうなんですか、編集なし。

沼田 そのプロデューサー、モーゼイ (Roger Mosey) という人だったけれども、彼に会うといいよと言われて、僕は表敬を申し込んで、そうしたら来てくださいと言って、まさに放送しているスタジオの後ろで見ていてくれと言うわけ。おもしろかった。世界中に電話している。たとえば、ユーゴに行っている英軍の司令官に電話してすぐ生でインタビューするとか、そういうのをやって、世界中に

放送しているわけ。とてもダイナミックで、これはすごいなと思いました。

番組が終わって時に、モーゼイ・プロデューサーと懇談した時に、日本のことを取り上げるときには、誰にインタビューしたら良いかといった点についてアドバイスが必要なら僕に連絡してくださいと言いました。そしたら次の日の朝7時過ぎに「The Today Programme」から電話がかかってきて、「細川首相がさっきやめたそうだけど、すぐ貴方に電話でインタビューしたい」というわけ。

で、困っちゃいました。細川さんがやめた。当時、のちの次官の斎木昭隆君が英国を主管する西欧二課長でした。慌てて彼に電話して、「総理がやめたそうだけど、記者会見か何かやっておられるだろうから、その要点だけ知らせて」と言いました。というのは、15分後にBBCから電話がかかってくるようになっていたから。そして、総理が会見で何を言っておられたかというのを電話で聞きました。当時はファックスでやっている暇もないし。要するに改革のために身を引くんだというようなことを言われたとのことでした。それだけしか材料がないわけです。

困りましたが、しょうがない。それで、女性のキャスターで Sue McGregor という人がいて、この人の「The Today Programme」は質問が厳しいので有名でした。しかも、生放送ですからね。でも、2分ぐらい何とか持たせました。何て言ったかということ、この総理の辞任というのは「in the context of the move for further reform and cleansing of politics」「he resigned in the interest of reform」という観点から見るべきだと言った。ほぼ僕の作文でした。ちなみに、こういうインタビューのかなりの部分は transcript があります。できる限り記録を残すようにしていました。

—— くれるのですか。

沼田 外注して作らせていました。だから、ないのもあるけど、かなりの部分は今でもファイルにして持っています。

では、話を先にしちゃいましょうね。一番大変だったのは阪神淡路大震災。これはインタビューの表、そこにありますか。すごい数が並んでいるでしょう。95年の31番から、これ全部一日ですよ。これが1日目、2日目。

—— 1日目に1から42までですか。

沼田 いやいや、31から42で12件。それから2日目が4件、3日目が、何かそんな感じでした。これも大変でした。なぜかという、あのときは何が起きているかわからなかったわけ。国内でわからなかったでしょう。あのとき、関西におられた？

—— 私、東京にいて両親が神戸だったんですけど、電話通じないです。何もわからなかった。

沼田 何もわからないでしょう。何もわからないでしょうけど、こっちはロンドンにいて答えなければいけない。

—— 夕方ぐらいまで電話通じなかったです。

沼田 でも、朝、大使館に行ったら、大使館の前にテレビカメラが行列をつくっているわけですよ。それで困っちゃってね。何かしゃべらなきゃいけないなど。関東大震災以来、一生懸命に耐震建築とか何とかやってきたけれども、うまくいかないこともあるとか言ってその日はなんとか凌ぎました。

このリストの中で BBC の「News at One」はお昼にみんなが見るテレビ番組です。そのスタジオで待っているときに、ああそうか、猫とネズミのたとえを使おうと思ったわけ。ネズミは猫の爪から逃れようとするけれどもつかまっちゃうことがある。なぜかという、イギリス人は地震というのは人災だと思っている人がいるから。自分で経験ないからね。だから、それはそう言えば伝わるかなと思って。とにかくそのようなことでその日は 12 回のインタビューを凌ぎました。

2 日目になったら、だんだん厳しくなってきました。海外から被災地に来たボランティアをうまく使っていないとか、いろいろな問題があったでしょう。それから、中にはひどい報道があつて、レスキュー隊がもう諦めちゃって災害の場から去ってしまったなんていう報道もあつてね。そういう質問ばかりしてきた女性のキャスターがいたので、相当こちらも頭にきてやりとりしたら、その日のうちにその番組のプロデューサーから「大変失礼しました」と手紙がきました。

—— 2 日目、火事とか起こってきて、かなり混乱していましたよね。

■ 日英和解

沼田 以上が前置きで、次は捕虜の問題。捕虜の問題は、実はこれ（渥美国際交流財団の SGRA レポート第 66 号「日英戦後和解（1994 - 1998）」）にほとんど書いてあります。

—— はい、いただいています。

沼田 繰り返しになるから要点だけ申し上げると、要するに私がロンドンに着いた段階で捕虜の問題というのは法的には平和条約で処理が終わっていた。それから戦争犯罪も東京裁判で。それから、補償の問題も一応サンフランシスコ平和条約のもとでけりをつけている。イギリスの場合には在外日本資産を接収したとか何とか、そういうお金で 1952 年にイギリス人の元捕虜に 76.5 ポンド、民間抑留者に 48.5 ポンドを分配したということだったけれども、捕虜の人たちは非常に不満を持っていた。

なぜかという、彼らの参加したビルマ戦線なんかの英軍は結構負けたりしていて、ヨーロッパに比べて戦争が長引いたでしょう。彼らは「Forgotten Army」と言われていました。5 月の VE デー（Victory in Europe Day）にヨーロッパ戦線で闘っていた人たちは凱旋したが、彼らは 8 月になって帰ってきて「おまえら今頃帰って来て何やってたんだ」と言われていじめられた。だけど、いじめられたけれども、イギリスの社会で働いていかなくはいけないというので、その不満が鬱積したまま 50 年たったわけですね。それが噴き出てきたという話です。それで、具体的には捕虜の人、この写真に出てくるティザリントン（Arthur Titherington）という人が中心になって訴訟を起こしたわけですね。

その前に、このティザリントンという人も 94 年 4 月 15 日に藤井宏昭大使のところに会いにきています。彼らが東京地裁で訴訟を起こしたのが 94 年 7 月。95 年に入ったら、一斉にこの問題が出てきた。彼らの不満というのが全部噴き出してきて、イギリスの新聞、ラジオ、テレビにほぼ連日、この話が出ていました。タブロイドだけじゃなくて。それでさあどうしようという話になりました。

さっき調べていたら、「Japan excluded from VJ Day commemoration」という記事がありました。1 年の初めに VE デーと VJ デーに何をやるかというのをイギリス政府が発表したわけですね。そのときに VE デーはいろいろな国の首脳なんかを呼ぶけれども、VJ デーのときには日本からは誰も呼ばないということになりました。それはメージャー（John Major）首相が記者会見でそう言った。そ

れはなぜかというとなんかこうなことがあって、変に刺激したくないということでした。それと、この記事の中にはメジャーがそういう決定をしたことについて私が引用されているんだけど、

「Sadaaki Numata, minister plenipotentiary at the Japanese embassy in London, said after being told of the press conference」、メジャーの press conference のことですね、「we respect the British government's considered judgment. We do not in any way consider it a snub.」というのが引用されました。

—— これはどこの新聞ですか。

沼田 「Guardian」ですね。それでこういうのが続いて、1月20日にデーヴィッド・ライト (David Wright) 副次官と私が会った。ライトというのはその後駐日大使で来た人です。今でも覚えていますけど、特に我々はメディアとの関係をどうするかというのを、僕はインタビューをずっとやっていたから関心があって、相談しました。彼は「Let's keep our powder dry」と言いました。「keep our powder dry」というのはピストルをやたらに撃つのではなく、頃合いを見計らって撃ったほうがいい。というのは、あまり目立つと捕虜の人たちを刺激してますます話が大きくなる可能性があるから。それまでも僕は、94年には何回かインタビューを受けていましたけれども、95年に入ってから8月までは POW 関係のインタビューはほとんど受けていません。

「Nerve Gas」というのはオウム真理教の話。ちょっとオウムの話、一言だけします。この年にオウムの事件が起きたときに、やっぱりインタビューのリクエストが来たわけですよ。館員からは、何か日本は変なところと思われるといけなから、公使はインタビューを受けないほうがいいですよと言われましたけど、僕は自信があって受けると言いました。なぜ自信があったかというと、ジュネーブで化学兵器禁止条約を交渉していましたから。化学兵器禁止条約で特に検証 (verification) をどうやるかというワーキンググループの議長をやっていたから、要するに化学兵器はつくろうと思えばだれでもつくることがわかっていた。頭のおかしい人が薬を2つ3つあわせればできちゃうわけでしょう。だから、僕は何か聞かれたら「This can happen anywhere」と言ってそれで通しました。

捕虜の問題は「Let's keep our powder dry」として、それでしばらく静かにしていた。つらかったですけどね。そうして、6月9日に衆議院で「歴史を教訓に平和への決意を新たにする決議」というのが出ましたが、これが「アジアの諸国民に与えた苦痛を認識し深い反省の念を表明する」と何を言っているのかわからないというか中途半端な内容でした。イギリスのメディアは、この国会の決議というのは衆議院議員509人中賛成が230人しかいない、日本国内の意見は分裂している、深い反省の念は謝罪じゃないとかの反応で逆効果でした。

そのうち8月に原爆記念日。あのときに、イギリスのラジオやテレビでも大分原爆について実は議論が分かれていました。原爆肯定論、戦争終結に必要なだったというのと、日本はもう降伏寸前だったのにあそこまでやる必要はなかったと、議論は結構両方出ていました。他方、原爆については日本人の被害者意識が強いことをとりあげていたものも相当ありました。

という中で、マスコミの報道には日本軍がいかにひどいことをしたかという話がいろいろ出てきた。これには「点呼」の話はたしか出しましたね。大分古い BBC のドラマで日本軍に収容されていた女性たちについての「Tenko (点呼)」というのがあって、これがまた放送されたわけです。

—— これは昔のを再放送したんですか。

沼田 昔のですね。1981年～1984年に放映したものを再放映しました。

そして8月13日に、7月の初めにジョン・メージャーが保守党の党首に再選されたことに対するお祝いの手紙を村山総理が送りました。その中で、捕虜の問題について痛切な反省の意と心からのおわびの気持ちを表明されましたが、村山総理は夏休みでどこか行っておられて、記者が英国からの報道でこの手紙のことを知って、「おわびしたんですか」と聞いたのに対して、「おわびなんかしてないよ」と言われたらしい。これがまた騒ぎになっちゃって、「いや、そんなことはない。ちゃんとおわびの気持ちを表明されました」というのを僕はBBCのラジオ2回ですね、1つはさっき申し上げた「The Today Programme」、それから「Sky News」でも総理がきちっとおわびを書かれたということを言いました。

そして8月15日に村山談話が出されました。さっきの国会の決議もありましたから、我々はライト副次官が言っていた「keep our powder dry」ということも踏まえて、要するに8月15日に焦点を絞っていました。この機会にきちっとした立場を表明しようということだから、村山談話できちっとしたことを言ってくださいと我々は東京に言ってきた。もちろんソウルからも北京からも同じことをやっていたと思います。それで村山談話になりました。あれも谷野さんかな、書かれたのは。

—— インド大使をされた平林（博）さんとおっしゃったかな。

沼田 平林さんは外政審議室……、いやまだ。

—— 外政ですね、あのときは確か。

沼田 谷野さんじゃない？

—— 谷野さんだったですかね、すみません。

沼田 でしょう。平林さんじゃないと思う。

—— 谷野さんがいろいろな研究者の方とかにも相談しながらつくられたという。

沼田 そうですよ。これ実は、なぜ僕がBBCの人と仲よくしてインタビューにたくさん出たかという、このことも頭にありました。8月15日にどうするか、メディアの関係をどう処理するかということが非常に頭にあって、それまでに大分この「The Today Programme」と仲よくなっていたので、8月15日の朝の「The Today Programme」で藤井大使が出ることを予約しておいて、朝7時過ぎに出ていただきました。

そのポイントはということかということ、これは日本のキャビネットのディンジョンで、総理がきちんと公式に謝罪していますということを繰り返しました。この日は7時半に大使が「The Today Programme」に出て、その後、僕は10時半民放、11時民放、11時半民放、12時15分BBC。午後1時にまた大使がBBCの「One O'clock News」に出て、僕が2時半BBC、4時「Channel 4」、5時5分BBCの地方のラジオ、6時BBCの「World Service TV」。10時、大使がBBCの「Newsnight」。一日中一斉にやりました。そうしたら、翌日静かになりました。おもしろいものですよ。ぴたっと静かになった。

そして、8月19日に、イギリスのVJデーのCommemorationというのがあって、かつての兵士が女王の前を行進して「Forgotten Army」という恨みつらみが癒されたという話になりました。ちなみ

に、この 8 月 15 日の週には、大使館でフォローしていたのですが、ラジオ・テレビでこの POW や村山談話なんかの報道が 1 週間で 167 件報道された。翌年の 8 月 15 日の週、何回ぐらい報道されたと思います？

—— どうですかね、2 桁ぐらいになっちゃったんですかね。

沼田 24 件。

—— なるほどね、そんなものですよ。

沼田 というのが 95 年の話です。でも、それで一応謝罪の言葉は区切りがついたかなと思いました。そこから後が大変でした。法的処理としては講和と戦争犯罪の処理があって、補償があって謝罪があって、その次に和解というのがあるでしょう。和解というのが一番難しいです、人の心の中に入っていかなきゃいけないから。それから 3 年間かな、和解の話になるのですけれども、そのころには 3 年ぐらいたったら陛下が来られるだろうということは我々思っていたわけです。そのための環境をどう整えたらいいかということも考えていました。

そこで和解努力の一環として、捕虜の人たちに僕は会っていました。捕虜の人たちと会うときのためのトーキングポイントのコピーをここに付けましたけれども、後で触れます。

和解に向けて中心になったのが、1 つはビルマ戦線で戦っていた旧日本軍の将校の方たち、日本側には「日本全ビルマ作戦戦友団体連絡会議」というのがありました。イギリスには「Burma Campaign Fellowship Group」というのがあって、これは 90 年にできていますけれども、彼らの間で 1 つ共通する点がありました。何だと思いませんか——戦死した人たちに申し訳ないという気持ち。これは共通しています。だから、それを共通項として、お互いに行き来したりしていて和解の動きが出てきた。ロンドンに平久保正男さんという方がおられて、これの中に写真も出てきます。

—— 丸紅の人ですか。

沼田 丸紅の人、そうそう。ずっとロンドンにおられて、彼はインパール作戦の陸軍主計中尉でした。彼はこの Burma Campaign Fellowship Group との和解の運動をずっとやっておられて、97 年 2 月には日英双方の有志・家族など 36 人が「日英旧軍人の和解と相互理解のための両国相互訪問の総結集」、行ったり来たりしていたものの総結集として、日英両方ともビルマに行って、旧戦地に行って合同慰霊祭をやったんですね、Joint Memorial Service をやったというのが 1 つの大きな動き。

それからもう 1 つは、94 年 8 月に村山イニシアティブというのが発表されました。「日英草の根平和交流計画」というのが作られて、この枠のもとでボランティアの人たちの活動を支援したんです。どういうことかという、ボランティアの人たちで元捕虜とか民間人抑留者、自身は年をとっているけど、その子供とかお孫さんなんかを日本に連れていくとかね。あるいは恵子・ホームズさんという人がいます。彼女の出身地は三重県紀和町、昔「入鹿」という村でしたが、そこにイギリス人の捕虜収容所があったんですね。そこで 16 人の捕虜が亡くなったお墓を戦後その町の人たちが、地元の老人クラブがお掃除して守ってきたということでした。恵子・ホームズさんの御主人は事故で亡くなったけれども、その話をイギリスに行ってから知ったのかな。彼女は勇敢にもその捕虜の人たちのところに自分で乗り込んでいって仲よくしましよと働きかけた。そこから始まっているわけ。彼女は敬けんなクリスチャンですが、彼女が中心になって Agape というプロジェクトで 1989 年からイギリス

人の捕虜と交流してきた。このプログラムを村山イニシアティブの下でサポートして、結局 450 人が日本を訪問しています。

それからもう 1 つは、ブラウニング (Mary Grace Browning) という人で、この人はサフォーク (Suffolk) の高校の日本語の先生で、ケンブリッジ大学でライト大使と一緒にだったという人ですが、彼女が Pacific Venture というのでやっぱり捕虜の孫などを日本に連れていくプログラムを実施していました。

もう 1 つは、小菅信子さん (のちの山梨学院大学教授)、御存知ですね。これ写真が出ているけれども、彼女も勇敢な人ですよ。ケンブリッジでの英国人戦死者を弔う Remembrance Commemoration に自ら行って花を捧げ、それをきっかけとして、旧日本軍捕虜との交流を始めました。その記事を僕が見て、会いました。彼女は本を出していますから、それに僕のことが書いてあります。

—— これですね (『戦後和解』中公新書、2005 年)。

沼田 これ以外にも書いてある。『ポピーと桜』(岩波書店、2008 年)、あれには僕のことが大分出てくる。彼女は、97 年 11 月に日本とイギリスの学者を集めて捕虜の問題についての会議もしました。

それからもう 1 つは、Coventry Cathedral の話ですね。Coventry Cathedral は、もともとあれは reconciliation のシンボルですよ。というのは、連合軍はドイツのどこを爆撃したんです。

—— ドレスデンですね。

沼田 ドレスデンとコヴェントリーがペアになっているわけですよ。コヴェントリーもドイツ軍に爆撃されましたから。そこで和解のシンボルということで、たまたま 97 年 11 月の Remembrance Sunday だったか、Coventry Cathedral にアメリカの聖公会のトップのエドモンド・ブラウニング (Edmond Browning)、Presiding Bishop and Primate of the Episcopal Church of the United States of America が来て reconciliation service をやるからということで、Coventry Cathedral のペティ次席司祭 (John Petty, Provost, Coventry Cathedral) から僕も招かれました。そこへ行ってスピーチをしました。

—— (SGRA レポート第 66 号「日英戦後和解 (1994 - 1998)」の) 左側の写真ですね (口絵写真)。

沼田 ここの場所というのは「和解の像」というのがあります。この後ろに見えないかな。「和解の像」というのは同じものがここにもあって。バージン・アトランティック (Virgin Atlantic) のブランソン (Richard Branson) 社長が寄附して、ここに「和解の像」というのがあって、もう 1 つそのレプリカが広島市の平和祈念公園の国際会議場にあります。その前でこの式典があった。式典があったのは 97 年 10 月 5 日ですね。それから 10 日ぐらいたったら、藤井大使が離任されて、林貞行大使が着任されました。林大使に僕から進言したのは、11 月 9 日の Remembrance Sunday にぜひ Coventry Cathedral で献花をしてくださいということだった。その日の朝に林大使も BBC の「The Today Programme」に出て、インタビューを受け、そして Coventry Cathedral で献花をされたわけです。それがこの写真ですよ。

というようなことで、だんだん雰囲気はよくなってきたと思います。私が離任したのが 98 年 1 月なのですけれども、その間にもう 1 つやることができました。何かというと、イギリスの在郷軍人団体というのが強力な存在でした。在郷軍人会は「Royal British Legion」と言いますが、これがやっぱ

り日本についてあまりいい感じを持ってなかった。他方日英経済関係はよくなっていた。それで、Royal British Legion のグラハム・ダウニング（Graham Downing）会長のところに僕は会いに行きました。11 月ぐらいだったかな。そうしたら結構彼が関心持ってね。彼も、捕虜の問題があるがゆえに日本とけんかばかりしているのはよくないという感じも持っていたのだろうと思います。

それで、僕はいよいよ離任をするとなつて、98 年 1 月 9 日に離任レセプションをやりました。離任レセプションに元捕虜とか和解関係の団体の代表、日英交流関係者などを招いて 100 人を超える行事をやりました。そのときのことは小菅信子さんが『中央公論』に書いた記事の中にも出てきますけれども、小菅さんが言っている僕の「忘れてはいけない」という挨拶というのは、「The circle of reconciliation is gradually widening from those who actually suffered to their spouses, children, grandchildren and other relatives. The torch is being passed on to the younger generations. The key message there is reconciliation without forgetting. This is particularly important to the young people in Japan as they take to their heart the lesson that the mistakes of the past should never be repeated」というものでした。

僕がいたのはそこまでです。この離任レセプションをしている日にトニー・ブレア（Tony Blair）首相が日本に来ました。それで、僕が離任の寸前でばたばたしているときに東京から電話がかかってきて、トニー・ブレアのスポークスマンのアレスター・キャンベル（Alastair Campbell）という人が、橋本龍太郎総理に『SUN』という新聞に投稿してもらったらどうかと言ってきたので、「公使どう思いますか」と聞かれて「ぜひ進めて欲しい」と言いました。というのは、タブロイドはそれまで僕は手がつかなかった。大変だし。なかなかクオリティ・ニューズペーパーのようにいかないしね。タブロイドは大変だなと思っていたら、アレスター・キャンベルはタブロイド紙編集の出身でしたから、彼から言ってきたのだったらそれは乗らない話じゃないといって、それで東京で一生懸命つくって投稿したのが資料に出ているでしょう、たしか。

—— タブロイド出身者が報道官になるんですね。

沼田 そうです。『TIMES』はあまりクオリティ・ペーパーでもないけれども、そういう国なんです。

—— このときの文面は大使が考えられたのですか。

沼田 いや、もうこれは僕ではない。だって、もう離任だから。官邸でしょう。でも、西欧二課が一緒に考えたと思うけど。村山談話と同様の「反省とお詫びの意」、日英旧軍人による東南アジアでの合同慰霊祭、さっきの平久保さんの話ですね。元捕虜及び捕虜の孫の訪日を年 40 人～50 人というのを 80 人～100 人ぐらいにすると。だから、それまでやってきたことをなぞっているわけですね。

私のロンドンでの話はそこまでですけども、続けて私が報道官で帰ってきた後ですが、98 年 5 月の陛下の御訪英のときに私が貢献したのは、陛下のスポークスマンとして千葉一夫大使を推薦したことです。元駐英大使。ものすごく有能な方だし、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語全部やられるのかな、英語もすごくおできになる方で。千葉大使はこの時随分会見もやられたし、インタビューもやられたようです。

あのときに両陛下を歓迎した人が 2 万 5000 人いたとのこと。さっき言ったティザリントンなど捕虜とか抑留者など 500 人が抗議デモをして陛下に背を向けたというのが報道されましたが、他方、それと同時にさっき言っていた Burma Campaign Fellowship Group のジョン・ナンネリー（John Nunnely）会長が『TIMES』にああいうのはあるまじき行動であると投書しました。だから、両方の

意見が出たわけです。ちなみにティザリントンは、私の離任レセプションに来ていました。私の友達にはなっていましたから。

じゃあ日英の戦後和解は成功したのかどうかと言うと、私は一応成功したと思います。それはなぜかという、1 つは、VJ デー50 周年の嵐を一応乗り切った。どうやって乗り切ったかという、政府レベルできちっと話をする、それでほかのレベルでボランティアも含めて和解を進めていくという両方が必要ですが、その両方を進めることができた。政府レベルがさっきのデーヴィッド・ライトの「keep our powder dry」じゃないけれども、要するに日英の法的立場はサンフランシスコ平和条約で解決しているということで一致していたわけですから。だから、それを動かさないということについて共通の立場をとりつつ、かつメディア対策は 8 月 15 日に集中しようという作戦のもとにやったということ。

それから 2 番目のレベルについては、民間有志とかボランティアなどによる和解のイニシアティブを側面援助したこと。ポジティブな話でネガティブな話を中和するというのがアドバタイジングの世界では常識らしいですけど。その具体的な例である林大使のコヴェントリー大聖堂での献花なんかも非常に象徴的な意味を持つわけですね。トップダウンでもボトムアップでもなく、いくつものレベルで進めるということが必要です。コヴェントリーのような象徴的場所がそういう意味を持つ。そういう和解の輪が広がるにつれて捕虜問題への対日感情への負の影響が薄らいだということだと思います。全体として良好な日英関係というのはお送りしましたっけ、僕が『外交フォーラム』に書いた通り、日英関係全般としては良好でしたが、その中で和解の問題には随分時間をとって取り組みました。

—— イギリス人捕虜の問題は、「Forgotten Army」というふうに言われていたという話を拝聴しますと、イギリスの国内問題でもあるのかなと。

沼田 その通りです。

—— それは、イギリス政府としてはこの問題には何か関与は。

沼田 関与しました。関与したというのは、さっき Royal British Legion 等の話が出てきたでしょう。私がイギリスから帰ってから、イギリス国内で、それからアメリカでも日系人との和解とかあったでしょう。林大使とこの前話していたら、ああいうのも影響したみたいで、イギリス政府も何かやれという圧力が高まったのです。

イギリス政府はいつだったか、ちょっと待ってください、僕が帰ってからだけでも、どこかに書いたな。イギリス政府も法的には日本と同様の立場をとっていたけれども、Royal British Legion を中心として要求が高まって、2000 年 11 月 7 日に特別慰労金として元捕虜・配偶者に対して 1 万ポンドを支給するという措置をとった。それで一応静まったということですね。

—— これは細かいのですが、コモンウェルスたとえばオーストラリアの軍人もシンガポールとかで捕虜になっていますよね。そういう話は出てこなかったですか。

沼田 オーストラリアは、89 年から僕は在勤しましたが、あまり出ていないですね。オーストラリアは被害の状況が違ったと思います。

英軍の将兵で日本軍の捕虜となった人は約 5 万人と言われています。その死亡率は 25% です。ドイツ軍の捕虜になった英軍将兵の死亡率は 5%。やっぱりイギリスが一番多かったのです。その次がア

メリカだったかな。そういう違いがあると思う。ちなみにカナダもあまりなかった。僕が大使のときにあまりなかったですね。

—— そうですか、おもしろいですね。

沼田 ただ、蛇足になりますけれども、カナダに僕が大使で赴任したら、オタワの冬は寒いでしょう。日米開戦の日、12月8日という寒くて雪が降っている日に、毎年抗議に来るおじいさんが外でデモしていました。大使館の警備の人が、抗議書は警備の方で受け取っておきますと言うから、抗議書は僕が受け取ります、僕が会うから中に入れてくださいと言った。そのおじいさんはすごく喜んでいました。会うだけで違います。

—— そうですね。オランダとかもそうですね。

沼田 オランダもそうでしょう。佐藤行雄さんがね。会って話をするのは最初はつらいですけどね。ティザリントンが私に 97 年 8 月 15 日に会いに来た時どういうトーキングポイントを用意していたかという、簡単に言うと、とにかく対話を続けたい。それから、基本的な点として日英関係全般が非常に良好であるということを喜んでいるし、それを頭に置いて処理していきたい。それから英語のほうがいいかな、「Your strong feelings have been on our minds」と。藤井大使も僕も 3 年間ずっとそう思ってきた。それで、この 3 年間の間に我々は reconciliation の努力を続けてきて、その輪が広がりつつあって、捕虜の人たちもあるいは民間抑留者の人たちの中にもだんだん態度が柔らかくなった人もいる。だから、あなた方もよかったらぜひそれに参加してほしいという話をして、お孫さんたちなんかは日本に行ったりしているという話をした。

それから、Apology and Compensation について。Apology については 95 年 8 月 15 日に村山談話で非常にはっきりと日本政府を代表して——これが大事なことです、あれが村山個人のものであって政府の公式の謝罪じゃなかったということをいろいろな人が言っていたので、それは政府の公式な立場の表明だったということを言いました。

—— 閣議決定していますよね。

沼田 そうそう。もう 1 つ閣議決定の後の記者会見で、村山総理は、あの談話はイギリス人の捕虜にも向けたものですよとされています。その話をして、それから、97 年 8 月 15 日には橋本総理もそのラインを踏襲して言われている。補償の問題については、これはサンフランシスコ平和条約のもとで法的に処理されていると。その後は、この時点では陛下が 98 年に来られることはもう出ていたのかな。

陛下のご訪問というのは Goodwill visit なので、今の憲法のもとでは「Under the constitution, the Emperor is the symbol of Japan and is totally apolitical. The visit should not be linked with the question of apology or compensation」、陛下のご訪問と結びつけるべきではないというようなことを説明した。と言っても先方はわかりましたとはなかなかありませんでしたけどね。

—— 98 年の陛下の訪英というのは一つハイライトになっていると思うのですが、そこに向けた環境づくりというのは、これは大使館のレベルでたとえば大使なんかがお考えになっているのか、それとも宮内庁とかもう少し日本政府としてこういうふうにやっていくというようなコンセンサス

たいなものもあって進んでいったのでしょうかね。

沼田 私とか藤井大使は我々がやった、イニシアティブをとったと思っていますけどね。

—— 特に本省でどこかと相談したとかいうことはないですか。

沼田 いや、本省とは野村一成欧亜局長なんかとも相談してやっていました。ただ、今ずっとお話ししたことからおわかりのように、現地で何をやるかが大事なのです。

—— そうですよ。かなり現地での瞬間、瞬間の判断という感じですよ。

沼田 そうそう。95年8月15日のメディアなんてまさに瞬間の凝縮ですよ。一日10何回もインタビューやるのなんか。ただそのためにはふだんからつき合っていないとできない。だから、インタビューを断っていたらできないわけですよ。何回もインタビューしていると親しくなるから。今ラジオ・テレビの話ばかりしましたがけれども、新聞なんかは特にリーダーライター、論説委員というか社説を書く人たちと仲よくしていることが大事です。そうすると、しょっちゅう一緒に食事をして。当時の僕の手帳を見ると週に何回もいろいろな人たちと食べているけれども、そうしていると向こうから聞いてくるようになります。日本のことでこの問題について社説を今書いているけどどう思うか聞きたいとかね。そうなればいいんですけど。日本でも同じかな。

—— 同じですね。

沼田 同じでしょう、そういうことですよ。

—— やっぱ聞きたいものなんですよ。それは聞かないと、書いているほうは。

■ メディアトレーニング

—— 大使が英国に到着されたときに、それまでの大使館の対応、特にインタビューに答えてこなかったところがコミュニケーション上はまずいというような問題意識はありましたか。

沼田 ありましたね。だから、僕はたまたま副報道官を3年やってから行ったから、インタビューにもなれていたのかな。ただ、着いてすぐ捕鯨の問題から始まりましたけれども、メディアトレーニングというのがありました。その前に僕は副報道官のときも随分メディアのインタビューを受けたけれども、実際のロンドンでやったメディアトレーニングというのは、BBCの「パノラマ」という番組に出ていた人がBBCをやめてプロのトレーナーになっているわけ。これ厳しかったです。僕が捕鯨の問題の資料を全部送っておいたら、彼はスタジオを持っていて、そこに行って最初15分間次々と質問をぶつけてきました。僕が答えるのをビデオで撮って、その上で次は5分間でもっと絞ったクエスチョン。ここまではface to face。最後はカメラだけを相手にして、飛んでくる質問をイヤホンで聞いて、カメラを睨みながら1分間答える。それを何回かやるとだんだん自信が出てくる。

—— それは非常に属人的というか、外務省としてというよりも大使ご自身にそういう問題意識があつて、対応していきたいという意味もあつたということでしょうか。

沼田 まあ、そうですね。

—— そして、そういう研修にも出られて。

沼田 英国のメディア・トレーニングのプロとの研修は1回です。

—— それと過去の副報道官としての経験もあつたので、BBCにもどんどん出ていったという。

沼田 そうですね。一旦受けるとね。それで、この紙（「能動的対外発信の要諦」）を書いた。

—— おもしろいですよね、これ。

沼田 手の内を全部見せちゃったけど、こういうことなんですよ、要するに。

—— これを読んで僕が思ったのは、割と率直というか正直さというか、そういうことなのかなと思ったんですよね。もう少し「操作」という言葉はちょっと違うかもしれないですけども、日本政府を緩やかに支持してくれるとか考え方に賛成してくれるような世論をつくっていくというような気持でやっているのではないかなと思ったのですが、そういうのはちょっと違うのですか。

沼田 いや、それはありますよ、もちろん。だんだんこれをやっていくと、論説委員なんかでも割合 sympathetic になってくるというのはありますよね。たとえば、僕は『TIMES』のローズマリー・ライター（Rosemary Righter）という論説委員と仲よくなったし、ビル・エモット（Bill Emmott）も当時『エコノミスト』の編集長でしょう。彼にも時々会っていたし、それから『エコノミスト』の外交担当の記者でエドウィナ・モートン（Edwina Moreton）という人がいましたが、彼女とは毎月一回食事していた。レストランは決まっていたね。交代でお金を払うことにして、それをずっと続けていました。そういうのが多いですよ、結構。それをやっていないとね。

—— 何かこう、記憶に残る失敗談みたいなのはありますか。

沼田 記憶に残る失敗、記憶に残る painful memory はね。

—— 通常、外務省の方が委縮されるのは失言してはいけないということ。

沼田 まあそうですけどね。記憶に残るものとしては、「地球サミット」って覚えておられる？92年。

—— リオ。

沼田 リオ。あのときに宮澤総理がビデオで出演するはずがだめになったという話、覚えておられますか。

—— ありますね。

沼田 あのとときに僕は、実はリオに 10 日前から入っていました。毎日、お昼に日本代表団のスポークスマンとしてブリーフしていたわけ。総理が来られると思ってそのためにやっていたんですが、PKO 法案の審議の都合で来られなくなって、代わりにビデオでスピーチを議場に流すという手配になっていた。いざ当日になったら、代表団の人はみんな会議場に入っていました。僕は外で記者団の人と一緒にテレビを見ていたら、いつまでたってもビデオが出てこない。同行記者の人たちが騒ぎ始めて、「どうしたんだ、説明しろ」と言われて、僕しか説明する人がいない。中で何が起きているか全くわからない。それでつるし上げを食いました。そのうちに代表団の妹尾正毅大使なんかが議場から出てきたので、僕は邦人記者団のつるし上げを抜けて外国人記者団にブリーフィングをしに行き、本来総理が言うべきだった内容をそこで発表することになりました。あときはつらかったです。

—— スポークスマンとしての業務に関する組織的なトレーニングみたいなものは外務省ではやらないのですか。

沼田 今はやっているはずですよ。僕は、この「能動的対外発信の要諦」というメモを書いたのは、カナダから帰って 3 カ月後ですよ。これは当時の報道官への僕からの引き継ぎ事項として作りました。最近メディアトレーニングも本省で外国人の専門家に頼んでやっているはずですよ。僕はメディアトレーニングの必要性を前からずっと主張してきました。ただ、正直なところ、ロンドンだからインタビューもしばしばできたのかもしれない。今だったら難しいかもしれません。というのは、これだけの頻度でやると、対処方針なんてないわけでしょう。神戸の地震なんていうのは対処方針なしでやったわけでしょう。

ペルーの大使公邸占拠事件の話をちょっとさせてください。ペルーの話はどういうことかという、ペルーの人質は 96 年の末かな。

—— 96 年 12 月。

—— 天皇レセプション。

沼田 そうそう、だから 4 カ月続いたでしょう。あときはロンドンで大分インタビューの要請はありましたが、ずっと避けていました。だって、テロリストだって見ているわけでしょう。非常にデリケートな話だから。ただ、これ解放された日ですよ、4 月 22 日かな、23 日にインタビュー受けていますね、BBC の「World Service Television」。そのときの発言要領と実際の transcript をお渡しします。

インタビューを受ける時は、いつも何かメッセージが必要なわけです。予算委員会の質疑じゃないから、こちらから伝えるメッセージがないと関心持ってくれない。そこで、人質が解放されたら何を言おうかと考えていました。あの時の基本的なメッセージは、Relief と Thanks と Condolences でした。Relief というのは人質が解放されてほっとしたということ。Thanks は「Thanks to President Fujimori and the Peruvian government and to the solidarity and support of the international community」。それであのとときに、ペルーの兵士が 3 人亡くなっているのだから「Deep condolences to the three who lost their lives」と言っ

この突入を強行するというのは事前に通告があったのかという質問ももちろんあるわけですね。でも、事前通告はなかったでしょう。なかったけれども、ここは「We would have liked to see this resolved through peaceful means」だけでも、橋本総理がフジモリ（Alberto Fujimori）大統領と電話で話をして、フジモリ大統領が「Very delicate decision where timing was crucial」と言ったのに対して橋本総理が、武力行使したことは Regret するけれども「But I understand. I might have done the same had I been in your position」と言われたことをそれまでの報道から抜き出してこのインタビューでも伝えることとしました。

それに僕のコメントとして、「Only the man on the spot can make the crucial decision」。それと同時に、「We knew that use of force might take place if the hostages came to harm」ということを言いました。僕がこのインタビューの transcript をお見せするのは、ほぼ今言った通りに実際のインタビューが進行したからです。

—— やはり 3 つのポイントというのを事前に考えてドラフトを用意しておくという。

沼田 します。ドラフトというか箇条書きのメモのようなものを作ります。こういう感じで、これは実際に使ったメモです。

—— ラジオとかに出るときもこういう感じですか。

沼田 はい、時間があればね。手書きのときもあるし。とにかく準備は必要です。

—— そうですね。大使が先ほどおっしゃった、今だったら難しかっただろうというのは、対処方針など。

沼田 まあ、官邸の締めが厳しいでしょう、今。

—— そうですね。

—— それは SNS が増えたとか、そういうことではなくて、政権の問題ということですか。

沼田 今はまず総理に関することで外務省のスポークスマンがそれだけフリーにしゃべれるのかな、どうなんだろう。

—— そうですね、村山談話とかに関して大使はその場でかなり発言されていた。

沼田 村山談話自体は談話がはっきりありますから。でも、それに至る段階では大分その場で考えた。今の人質事件なんていうのは全くその場の流れで。唯一の手がかりは橋本総理とフジモリ大統領との電話会談の内容についてのブリーフで、それをもとにやっているわけですね。だけど、「Relief, Thanks and Condolences」というのは常識的な答えだけれども。これ、普通に国会答弁用に答弁資料を書くと、何がメッセージかわからなくなっちゃう。

というのは副報道官のときにも経験しましたが、最初はふだん我々が使ういわゆる想定問答を使って答えようとしたんですが、だめでした。特にラジオ・テレビのインタビューは。というのは時間との

勝負でしょう。くだくだ言っていると向こうが怒り始めてしまいます。想定問答というのは皆さんもごらんになったことがあると思うけれども、突っ込まれそうなことをいろいろ考えて、さらに追及された場合、さらに追及された場合と3ページぐらいあって、3ページ目の最後ぐらいまでさらに追及された場合とあるでしょう。実際のインタビューというのは、2問目ぐらいで3ページ目の最後まで行っちゃうわけです。

—— あと、あれは聞かれない限り答えない前提になっているんですよね。

沼田 そう、だからそれがいけない。本当に。

—— 全力ダッシュで自分のポイントをまず言わないといけないんですよね。

沼田 そうそう。過去の問題はそれで大体いいですか。

■ 外務報道官として

—— イギリスから戻られて報道官に着任された98年には、金大中と江沢民の訪日がありました。

沼田 在外のときよりも報道官のときのほうが難しかったですね。霞クラブの会見もあるけれども、これはあまりお話しすることはない。というのは、国内では官房長官が日に2回会見されているし、外務大臣も次官も会見していますからね。あまり報道官が国内的な意味でつけ加えることはないのです。

報道官の仕事は、霞クラブの会見をやること、それから我々のころは総理が外国訪問されるときに対外的なスポークスマンとしての役割を果たすこと、実際には総理の内外記者会見の司会もしましたし、会見準備のブリーフィングもやりました。全部想定問答をつくって。それが結構大変でした。

それは前置きとして、金大中のほうが時期的に先でしたね。金大中と江沢民はいろいろと比較されます。金大中の訪日のときは、事前に僕は東京で外国プレスにブリーフしていた方の話かな。たとえば金大中訪日の前に、韓国との関係で過去の問題点をどういうふうに取り扱うのか。謝罪とかそういうのをやるのかと、韓国の場合どうするのという質問があったので、やはり95年8月15日の村山談話というのが基礎になると。それと同時に日韓の2国間の要素も含まれることになるでしょうという説明をしていました。

そして、実際のあのときの日韓共同宣言ですか。これが、「我が国が過去の一時期韓国国民に対し植民地支配により多大の損害と苦痛を与えたという歴史的事実を謙虚に受けとめ、これに対し、痛切な反省と心からのお詫びを述べた」、大体村山談話の発言と一致しますね。金大中大統領の方が、「かかる小渕総理大臣の歴史認識の表明を真摯に受けとめ、これを評価すると同時に、両国が過去の不幸な歴史を乗り越えて和解と善隣友好協力に基づいた未来志向的な関係を発展させるためにお互いに努力することが時代の要請である」。非常にはっきりしている。で、宣言に署名したわけですね。

金大中についてはそれに尽きちゃうのですけれども。金大中が98年の10月7日ぐらいでしょう。そして、11月25日に江沢民、これが大変でした。なぜ大変だったか。共同宣言がなかなか出なかった。発表が5時間おくれました。僕はまだ共同宣言が配られていない状況で霞クラブにもブリーフしたし、それから外国プレにもブリーフしました。そうしたら外国プレスが大変だった。だって、テキ

ストがないわけでしょう。それで、随分いろいろなことを聞かれてね。過去への言及ぶりはどうなっているのか、村山談話との違いはどうなっているのか、中国への直接的謝罪はあるのか、金大中のときは署名したけど署名するのかしないのか、法的拘束力があるのかないのか。そういう問答で英文 transcript が 5 ページぐらいある。

その transcript で見ると、日韓の宣言との違いというのを随分しつこく聞かれて、最後の方で、僕もしびれを切らしているから、こういう答えをしています。「If you are to try to detect a trace of difference between these two references, I think that would become a somewhat excruciating, semantic, linguistic, lexicological exercise」。この頃、記事をつけましたけれども、『Financial Times』が「collective amnesia」という記事を出しました。

—— 誰のことですか。

沼田 日本が。集団的記憶喪失症。2 回記事出して、それに対して僕は反論の投稿をしました。これが反論投稿です。要旨はここに書いてありますけどね。これは『Financial Times』にしてはお粗末な記事だったと思います。

—— 一時期、英語プレスがすごく。

沼田 すみません、『Financial Times』が珍しく僕のことを褒めているのがあるので。

—— それはいつでしょう、99 年？

沼田 このポール・エイブラムス (Paul Abrahams) 東京支局長はさっきの記事を書いた人ですけど、その償いか何か知らないけど、「日本人は英語が下手だけど、例外」なんて書かれました。

—— British royal family みたいな発音だと書いてある。

沼田 それから、テポドンの話。テポドンはショックでした。僕は日本に帰ってからも BBC から随分電話インタビューを受けていました。先方は僕の家電話番号を持っているものだから逃げられなくて。でも、大体僕は夜、家に帰ってから受けることにしていました。役所にいるとばたばたしているし。そうすると夜中の 12 時とか、そのぐらいの時間になりました。

それで、家のテレビで BBC をつけていると、僕が電話でしゃべっている生放送を家内がテレビで見えていましたが、何か家内が「あなた失礼よ」と言って怒っているわけ。なぜと聞いたら、「相手の質問が終わってないのにあなた答え始めているじゃない」と。これはなぜかという、ちゃんと質問を聞いてから答えているつもりでしたけれども、電波の関係で若干タイムラグが生じていたのです。

それはそれとして、テポドンのときも、BBC のテレビとさっき言った「The Today Programme」、それから CNN からインタビューを受けていますね、電話インタビューだけでも。このとき何を言ったか。「Express our strong regret. It is a very serious concern to Japan's security and to the peace and stability of North-East Asia. And it is a global concern in the context of the proliferation of weapons of mass destruction」と、この 3 点ですね。これは別の機会にテポドンのことについて「Only a test fire」じゃないかと、何でそんなに騒ぐのという質問をどこかで受けていますね。それに対して「It is a very real danger of proliferation of missiles. It could possibly hit the United States」

というような答えをしています。

—— こういう直接アポが来るというか、打診が来るときというのはどういうふうに対応されるのでしょうか。もちろんほかの方にも連絡はされるのでしょうかけれども、そういう対応方針というかどうかというふうに答えるとかはもう大使が御自身で案を練られるのでしょうか。

沼田 いつ何を聞かれるかわからないでしょう。だから、資料はなるべく持つようにしていました。聞かれそうな問題、たとえば北朝鮮とか核の問題とか、英語を使わなきゃいけないことが多いから英語の資料とかね。だから、そういう意味での準備については、たしか僕は「能動的対外発信の要諦」に書いたな。2 ページ目の、「**topical** な問題の基本的事実関係、主要論点などを普段から整理して、即応体制を整える。**Ex.**中国。北朝鮮。日米安保。安保理常任理事国問題。靖国。慰安婦。**FTA**。アフガニスタン。国内政治状況」、国内政治状況を聞かれるのがつらいですね。

—— これはつまり、報道官が自分の頭の中でこれを整理しておいたほうがいいですよという。

沼田 整理しておかないと対応できない。いつ聞かれるかわからない。

—— なるほど。部下任せではということ。

沼田 もちろん資料はもらいますけどね。自分なりに整理しておかないと。大事なことは、メッセージが何かと考えなきゃいけないでしょう、事実関係は想定問答みたいなので来るけれども、想定問答じゃ足りないからどういうふうにメッセージを出すかを考えなきゃいけない。

—— こういうのは、電話がかかってきたら、たとえば何時間後に出てくださいみたいな感じで直接個人の電話に来るわけですか。

沼田 来ますよ。

—— そうすると、特に決裁とかそういうものなく、もう報道官としてそこに対応して答えていくという形になっていると。

沼田 はい、ほとんどの場合は。

—— 報道官というのは、部下というか下のスタッフというのはどのぐらい。

沼田 たくさんいますけどね。報道官組織、僕のころは 80 人ぐらいいました。今組織がちょっと変わったけれども、報道課は国内の新聞、テレビ、ラジオを担当する。それから、私のころは国際報道課が米国のニューヨークタイムス、ワシントンポスト、CNN、ABC 等々、英国のタイムズ、ファイナンシャルタイムズ、エコノミスト、BBC 等々、世界各国の外国プレスですよね。それから国内広報課というのと海外広報課、これはもうちょっと時間の単位が長いですね。月の単位ぐらいになると広報ということでした。

それで、いきなりインタビューの依頼が飛び込んでくることがありましてね。たとえば 1999 年 9

月 30 日の東海村の事故って覚えておられる？ 2 人亡くなった。

—— JCO。

沼田 あのときに朝 3 時ごろに BBC から電話がかかってきました。それで、家内が何か言い合っているわけ、英語でね。

—— お気の毒に。

沼田 そうしたら、「BBC の人失礼ね。私に「Is there anyone who speaks English?」だって。だから、「What language do you think I'm speaking?」と言り返したわ」と。

—— 強い（笑声）。

沼田 あのときは本当に困っちゃってね、何が起きているかわからなくて。

—— そうですよね、規模が全くわからない。

沼田 ただ、あのときは野中広務官房長官だったかな。野中官房長官は、あのとき 30 分置きぐらいにブリーフィングしておられた。あれはすごかったですね。だから、それしか頼りになるものがないわけですよ。我が省の原子力課に聞いてもなかなかわからないし。あのときはガイドラインなしにやっていたんですが、一つ助かったのは、当時の大嶋英一国内広報課長（のちのフィジー大使）が、ロンドンで一緒でしたけど、彼は東大の物理出身で、大学院も出ている。彼に「これ、どう？」と聞いたら「まずいですね。人的な事故のようですね」との答えでした。それで人的災害だろうということは大体見当がついたわけです。ああいうときに CNN なんかの関心事はチェルノブイリと比較してどうかというのと、人的災害なのか、そうじゃないのかということでしょう。これはもちろんはつきり言っていて人的災害の可能性があると言った方がいいなと思って、それで答えましたけどね。これも決裁とっていただめですよ。

—— そうということだと、夜おちおち晩酌もできないですね。

沼田 いや、晩酌はしていましたが（笑声）。

江沢民に戻ります。江沢民のときは共同宣言がなかったので非常に苦労したという話と、それから当時の僕の transcript を見ていたら、あの共同宣言の中で「アジア地域における覇権はこれを求めることなく、武力又は武力による威嚇に訴えず、すべての紛争は平和手段により解決すべきであることを改めて表明した」というのが共同宣言の中にありますが、これが外国プレス会見で中国側のテキストにこの部分がないと言われた。実際はあったんだろうと思いますが。あまりそれについて報道された覚えはありませんが、その質問を受けた時はちょっとどきっとしました。

それから、さっきペルーは終わりましたね。オウムは話しましたね。

—— 北方領土に関してはどうでしたか。

沼田 北方領土は、すごく苦勞したことがあります。オーストラリアから帰ってきて副報道官になったのが 91 年 3 月でしたが、4 月にゴルバチョフ書記長が来ました。ゴルバチョフ・海部会談があった、そのときに僕が外国プレスのブリーフを 4 回ぐらいしました。会談の中に入っていないから、日本側の記者ブリーフを聞いてそれを基にブリーフするわけです。欧亜局は非常にガードが固かったです。特に北方領土の問題については。僕は外国プレスブリーフを何回もしなきゃいけなかったのですが、北方領土の問題については一切ノーコメントで通せと言われました。これ、とてもつらかったです。ただノーコメント、ノーコメントというの也能がないから、何て言ったらいいかなと思ってね。10 通りぐらい英語の言い方を考えました。

—— ノーコメントを？

沼田 いや、「I'm sorry I can't comment」とか「It is beyond my mandate」とか、そういう感じ。ひっかけの質問も来ましたが、それには「I wish I could help you, but I can't」とかね。非常にうまいひっかけのときは「I admire your fertile imagination, but I can't help you」。しかし、今のホワイトハウスの報道官なんて「No comment. No comment」ばかり。

—— あそこは語彙が少なければ少ないほどいいという感じ。

沼田 報道官にもよるのでしょうけどね。英正道元外務報道官の本を読むと、ブッキラボウに近いくらいハッキリとノーと言うほうがよいと書いておられるけれども、それぞれの人のスタイルでしょうね。僕はあまり対決しないようにやったつもりです。

—— 北方領土の問題は極端かもしれないですけども、ほかのケースで共同声明をつくることというのは、報道官はある程度知らされているのですか。

沼田 共同声明をつくる段階では、あまりそこまではやっていませんね。

—— 江沢民のときもやはりそれは。

沼田 江沢民のときは、僕が『外交フォーラム』の「メディアと外交」シリーズの最終回（2000 年 5 月号「スポークスマンの教訓」）の中で書いていますね。「過去の問題の取り扱いが大きな注目を集め、そもそも日中側も署名することは考えていなかった共同宣言について、そこばかり報道が集中。この結果、平和と発展のための日中の友好協力パートナーシップという、この訪問の主要テーマから焦点がずれてしまった」と。アジェンダ設定をもっときちんとやっておけばよかったのではないかという感想は持ちましたね。

こう書いているけれども、この裏には何も教えてくれなかった中国課に対する僕の気持ちがかかり入っています。

—— 『外交フォーラム』に書かれるときに、この原稿は本省を回るのですか。

沼田 本省の決裁は僕がやりましたから。

—— ああ、そうですか（笑声）。

沼田 あまり回した覚えはないな、これは。回したかな。

—— それは判断できるお立場にいらしたんですね。

沼田 当時は、国内の雑誌に皆さんが寄稿される原稿の決裁が僕のところに回ってきていました。

—— 主管が国内広報課。

沼田 そういうこと。

—— 下手に回すといっぱい何かついてきますよね。

沼田 中身がなくなっちゃうでしょう。ここで書いていることの中で若干感想になるのですが、ニック・ガウイング（Nik Gowing）という BBC のキャスターには僕もロンドン時代に BBC の「World Service」で何回もインタビューされて仲良くなりましたが、彼が言っていたのは、短時間のメディア対応の要諦は 3 つの F だと。3Fs、「First」「Fast」「even if Flawed」。第 1 の F は First、敵（競争相手）よりも早く先に情報を出す。第 2 の F は Fast、すなわちとにかく早く対応する。第 3 の F は Flawed、不完全な情報であってもその旨を断りつつとにかく出して、後から必要に応じ訂正していく。これは要するに Information space、情報空間を誰が先取りするかという勝負のことです。今なんかはまさにそのとおりで、SNS もあるし、ものすごく難しいですけどね。だけど、これはその次に書いているけれども、「翻って我が国のことを考えると、果たして 30 分の間に発表すべきことについて政府部内の調整が可能であるかどうか、不完全な情報でも後から修正するとの前提でとにかく出すといったことが、日本のやり方になじむか否か等々、考えさせられる」、日本ではできないですよ、御存知のとおり。不完全でも出して修正していくというのはできないな。

—— ちょっと難しいですね。

沼田 難しいですね。ずっとこれは我々にとって課題ですね。

あと何だったかな。報道官のときの経験として。『外交フォーラム』の「メディアと外交」シリーズの第 2 回「日本を見る外国の眼」、そこの最初に書いてある「市場とのシャドー・ボクシング」、マーケットとのシャドー・ボクシングというのがあります。

これはなぜ感じたかという、僕が帰ってきたのが 98 年の初めですから、Asian financial crisis とか日本のバブルがはじけてその後もたもたしている時期。要するに日本の経済運営についての批判が非常に強かったわけですよ。その中で報道官の大きな任務は、総理についていってスポークスマンをやることですから、それが大変なのは G8 でした。あと APEC とか ASEM（アジア欧州会合）とかいろいろあるけれども。

私が 98 年に帰ってきてすぐの 3 月 31 日～4 月 5 日、ASEM をロンドンでやって、それからバーミンガム G8 サミットが 5 月にあって、11 月に APEC 首脳会談（クアラルンプール）があって、12 月に総理の ASEAN 首脳会議があって、その次の年はケルンの G8 サミットがありましたね。それから、99 年は総理訪米がありましたね、5 月の初めか。そういうところで経済の問題が必ず出るわけですよ。

『外交フォーラム』にも書いたけれども、日本政府の施策について非常に批判的な記事が出ましたが、どういうわけか証券会社のアナリストという人たちがよく引用されていました。非常にきついことを言っていた。同じようなことを米国のルービン（Robert Rubin）財務長官とかサマーズ（Larry Summers）財務副長官とかが言っていた。だから、僕の感じとしては『New York Times』とか『Wall Street Journal』がマーケットの声を増幅しているようだった。まるでマーケットとシャドー・ボクシングをしているような感じがしました。これは本当にそう思いました。98年から99年になってちょっとよくなりましたが。

その間にそれじゃどういうふうにその辺に対応したかということなのですが、僕が帰国した98年のころは、要するに湾岸危機のときと同じです。「too little, too late」と言われるわけですよ。日本の内需主導による経済成長、金融システムの安定化については日本の対応は「too little, too late」であると。これに対して僕がどういうことを言っていたかというと、これは英国のThe Economist誌にLetter to the Editorとして投稿した例です。日本の経済というのは非常に規模が大きい、スーパータンカーみたいなものだ。スーパータンカーの方向転換というのは魔法の杖を振ればできるものじゃなくて、もっと大変だ。「When you try to turn a supertanker around, you cannot do it with the wave of a magic wand.」というようなことを書きました。これも何か表現を頭に入りやすいように工夫するということですね。それが98年でしょう。

99年のケルンサミットのときには、もうちょっと見通しがよくなっていました。ケルンサミットは6月だ。そのときには1月から3月のクォーターの実成長率が1.9%とあって、世界経済についてもちっと見通しがよくなってきましたが、このときの僕の外国プレスブリーフの記録を見ていたら、日本経済はボトムアウトしたと見ていいかという質問がありました。「Not quite bottoming out」とか「Leveling off」とか言った上で、「Nascent signs of recovery」、これまた國廣さんに怒られそうな表現でしたね、回復の兆しがボツボツ出てきているという表現をしました。

—— これは、コソボ紛争がちょうど。

沼田 コソボが大きかったですね。

それで、コソボについて日本が大分援助を出しました。

—— ただ、この時点では停戦に持っていこうというところですね。

沼田 ただ、資金協力を大分出しました、あのとき。

—— 既にケルンで言っていましたか。

沼田 ケルンで言っているはずですよ。ちょっと待ってください。メモを見るとコソボ、マケドニアとか。ケルンサミット、コソボ問題。空爆開始以降、ロシア、日本といった非NATO加盟国を含めたG8というユニークなフレームが成立して解決の道筋を模索。その結果、G8外相会談を経てミロシェビッチ（Slobodan Milosevic）の譲歩による空爆の停止を達成し、サミットにおいてはより長期的問題である難民機関復興支援のあり方、南東欧地域の安定化について有意義な提案を行う。それで日本は「Refugee assistance 40 million dollars, assistance to Albania and Macedonia, 60 million dollars. And 100 million dollars for rehabilitation of Kosovo and return of refugees to Kosovo」。それと同時に「Taking part in the international civilian efforts for rehabilitation of Kosovo」ということを

日本がしていますね。

—— かなり用意して行かれたんですかね。

沼田 このときはそうですね、クリントンからも大分言われていたし。

—— その前に、ボスニアで明石さんがかなりつらい立場に置かれたことがあったんですけど。

沼田 あれは何年だったっけ。94 年じゃないかな。

—— そのころは全然。

沼田 オルブライトと。

—— ロンドンにおられた頃ですね、ちょうど。

沼田 そう、あのときはロンドンですね。コソボについても 2 回ぐらいインタビューを受けたような気がします。

—— North Korea はいっぱいありますね。

沼田 North Korea は多いでしょう。

—— ボスニアですよ。

沼田 ボスニア、あるかな。

—— ボスニアはなさそうですね。BBC のリストにはないですね。

沼田 ついでに、今見ておられるこのリストでちょっと言いたかったのは、4 年間で 64 回のスピーチ、あるいはレクチャーですけどね。要するに「Explaining Japan」とか「Japan-U.K. relations」というのはあまり多くないです。「Explaining Japan」というのは 2 回でしょう。「U.K.-Japan」というのが 5 回でしょう。「Japan's Place in the World - Foreign Policy」、これは多いですね、10 回でしょう。それから「Art and Culture」、こういうのが多いです。展覧会で挨拶するとか、そういう文化関係の行事はやっぱりロンドンが多い。日本関係の文化行事が大使館以外のところで 1 日に 4 つか 5 つは必ずやるところですから、そういうのが非常に多い。それから捕虜などの関係の「Reconciliation」もありますよね。

それで、もう 1 つ申し上げたかったのは、「Japan's Place in the World - Foreign Policy, Security」、こういうのが結構多くて、その場所を見ていただくと Oxford とか King's College, London、London School of Economics、University of Southampton などの大学、それから Wilton Park って御存知？ 僕はよく行きました。

—— これはどういう雰囲気なんですか。よく名前は聞くんですけど。

沼田 Wilton Park というのは Country house です。そこにいろいろな知識人が集まって。

—— 外務省が頑張っているんですか。

沼田 Wilton Park はイギリスの外務省が持っていて。世界からいろいろな人を集めてラウンドテーブルみたいなことをやって、イギリスにしては珍しく、ちゃんとおいしい食事が出ました。牛に囲まれているようなところだからのんびりした雰囲気の中で。

—— これは宿泊もそこで？

沼田 宿泊もそこ。それで思い出したけれども、ディッチリー・ファウンデーション（Ditchley Foundation）が有名ですね。ディッチリーも何回か行きましたけれども、97年の12月だったかな、メディアについてのシンポジウムがありました。それは、このどこかに書いたな。Future of quality newspaper というものです

—— これです、「スポークスマンの悩み」。

沼田 これ、すごくおもしろかった。というのは、日本からは残念ながらジャーナリストの方が来られなかったの、よくそういうときは僕が代わりに出ていましたけど。

おもしろかったのは、日本でたとえばイギリスの quality newspaper というと『TIMES』と思う人が多いけれども、もうこのときは既にかなりルパート・マードックの影響が濃くなっていて、『TIMES』なんかもモニカ・ルインスキー（Monica Lewinski）スキャンダルとか、そういう話ばかりで、かなりタブロイド的になっていたわけです。本当の quality newspaper というのは『Financial Times』ですよ。『Guardian』も若干そうかな。そういう状況でアメリカの『Washington Post』とか『New York Times』とかドイツの新聞とかみんな来てわいわいがやがや議論していたのは非常におもしろかったですね。でも、日本は5大紙のサーキュレーションはすごいでしょう。あれ言うともみんなびっくりしていました。

—— ちょっと規模が違いますけれども。

—— 個別の問題になるのですが、2番のトピックを中心に副報道官、報道官として対応された湾岸戦争、カンボジア PKO、天皇陛下の訪中についてお聞かせください。

沼田 湾岸戦争は僕がオーストラリアから帰国して副報道官になったときは、日本の貢献が「too little, too late」と言われていた。

—— ですね、時期的には。

沼田 あの時期ですね。そういうことを言われていたという記憶はあるけれども、湾岸戦争自体いつからいつだったっけ。

—— 91 年の年明け？

—— 91 年 1 月に開戦ですね。

—— 停戦は。

沼田 3 月。僕はもうその後ですね。若干後で、副報道官としては 1 カ月後、4 月だから、何か後遺症みたいのがあったけれども。

—— やはり大使が報道官につかれたときの外国プレスの日本に対する印象というのは、非常に冷たかったというか厳しかったという印象ですか。

沼田 そうですね。経済の話が多かった。だから、「シャドー・ボクシング」と言っているわけで。外国プレスとの関係は、英さんの本を読まれた方はおられる？ 英元報道官。私のやり方は、彼の本の中で、自分とはアプローチが違うという書き方でしょう。どこが違うのかなと思って（笑声）。

私は、もちろん報道官とメディアとの間に距離は必要だと思うのですが、ただ、対決姿勢をとるつもりはなかったから、なるべくそう考えて努力したつもりです。ロンドンから報道官で帰るときに、次官をやっておられた林大使から言われたのは、とにかくミスリードしてはいけない。これが一番大事ですよ。わからなかったら「わからない、調べます」と言って後で調べて言う。強弁しちゃいけない。というつもりでやっていました。だから、今のホワイトハウスの報道官なんか見ていると、あれで済むのならいいよねと思います。中国外交部のあの女性報道官もすごいな。あれで済むのならいいのですけどね。

—— 副報道官として勤務されていたころと報道官として勤務されていたころと、日本の経済力が大分違っている時期だと思うのですが、外国のプレスからの注目度というか、そういったものに何か差みたいなものを感じられたことはありましたか。

沼田 やっぱ報道官のときが非常に感じましたね。

副報道官のとき、経済も時々聞かれていたけれども、英さんの本にも出ている宮沢総理の勤労倫理発言、あれが大変でした。英さんが一番大変だったけれども、一緒にやっていた。総理の発言が報道されて、あのときも、瞬間の勝負でした。なぜかという、わあっと外電が流れるでしょう。わあっと外電が流れると、それがワシントンで何時に反応が出てくるか。日本で昼間に流れると、我々がターゲットにしなきゃいけないのはワシントンで朝皆が動き始める時間、日本時間の午後 9 時半でした。ホワイトハウスのプレスブリーフィングなんかが始まる時とか、ニュースサイクルが始まるとき朝 7 時とか、それまでにどう対応するかということで決まっちゃう。英さんもそこで書いておられるけれども、とにかく何か訂正コメントを出さなきゃいけないというので、必死になって我々は作業したわけ。それを騒ぎ過ぎだと言われた。でも、そのぐらいでやっていかないと危ないです。

それからもうひとつ、つくづく感じたのは、『外交フォーラム』に書いたけれども、グラウンドルール、オンレコ、オフレコ、バックグラウンド、この区別をきちっとしないと危なくてしょうがない。最近どうですか、日本の政治家は。やっぱり不用意な発言が多いですね。

—— そうですね。最近もう音源をとられちゃっているの。

沼田 どうしようもないですね。

—— もう逃げようがないですよ。

沼田 逃げようがない、音源をとられちゃっている。それは、僕のころはまだ音源はとられていないけれども、要するに身内の集まりで気軽に言ったことがわあっと外電で流れちゃって、そんなつもりじゃなかった、あれはオフレコだから外せとか、そういうのが多かったですね。今でも多いですね。

—— 多いです。区別ついていない方が大変多いのですけどね。

沼田 僕は、『外交フォーラム』に書いたけれども、たとえば報道官のときも会見じゃないけど電話で聞かれることがよくありました。例えば『New York Times』から電話で何か聞かれて 10 分間しゃべるときに、オンレコ部分 3 分、バックグラウンド 4 分、オフレコ 3 分とか全部区切ってしゃべるわけですよ、危ないから。その習慣を身につけないとやりにくいですよ。

—— このころ、小渕首相の「冷めたピザ」のお話がありましたね。

沼田 そうそう、「冷めたピザ」は写真がありますよ。これは『TIME』マガジンの 99 年 4 月 26 日号ですよ。総理がアメリカに行かれることはわかっていて、その前に『TIME』マガジンがインタビューしたわけですよ。僕がそのインタビューをセットして同席していましたけれども、「Pizza」は僕のアイデアではない。総理就任直後に冷めたピザみたいにつまらない人だと書かれたことは確かです。それは『New York Times』に出たのかな。それを逆手にとったのは誰のアイデアかな。もしかして斎木昭隆君じゃないかと思いますけど、斎木君は内閣副広報官という肩書で海老原紳秘書官と一緒にやっていたから。でも、これはヒットでした。だって、この表紙に「Once dismissed as “cold pizza,” Japan’s unlikely leader proves he can deliver」と書かれています。よくできていますよ。

僕はこの話を時々講演なんかでしますが、アメリカとかイギリスの政治家なんかは「self-deprecating humor」、自分をおとしめるようなユーモア、自虐的ユーモアが結構多いけれども、日本の政治家、橋本さんなんかは自虐的ユーモアなんてありませんでした。小渕さんはこういうのが結構上手でした。

—— これは『TIME』からインタビューが来た時点では、やや事前の評価を覆すようなポジティブな評価で書いてくれそうな感じだったんですか。

沼田 わからない、それは。

—— こっちから発信でわざと自虐的にして。

沼田 だから、これは全く官邸の主導ということですね。誰だろう。

—— この写真もオーケーだったんですかね。

沼田 いやいや、だって総理がこうやって持って。

—— 本当に、加工じゃなくて本物なんですか。

沼田 本物ですよ。だから、官邸のアイデアなんですよ、これ。今度斎木君に会ったら、あのとき誰が考えたのか聞いてみようかな。これはヒットでしたね。

—— ピザをわざわざ持ってきて、この質問の『TIME』のために撮ったんですね。

沼田 そうそう。

—— しかも、あまりおいしそうなピザじゃない。冷めたピザらしいと見えるピザを注文して。

沼田 これは記憶に残りますね。

—— 省内の組織の話になるのですが、総合外交政策局がつくられたりといった組織改変が大使が副報道官になられたときにあったと思うのですが、その時期のことで何かご記憶に残っていることはございますか。

沼田 報道官組織の中をいじるとか、そういう話は時々あります。必ず出てきますね。そうすると、どちらかというところアジア局とか、北米局に長くいたからあまり北米局の悪口は言いたくないけど、そういうところの言い分をみんな聞くという傾向はありますね。むしろ組織というよりも、報道官、副報道官のときもそうですけど、なぜ「報道官」という名前にしたのか。もとは情文局長でしょう。

—— そうですね。中曽根内閣ぐらいでしたかね。

—— 84年の。

沼田 84年、そうそう。だから、初代が三宅和助さん（のちのシンガポール大使）だな。それから波多野敬雄さん（のちの国連大使）でしょう。そのときはやっぱりスポークスマン機能を重視するということでした。報道官自身が発信するという。それが渡辺泰造さん（のちのインドネシア大使）のときに英語での記者会見というのを重視して、副報道官も英語でやると。だから、英語での発信というのは大分大きくなって、私もどちらかというところに大分重点を置いてきたということがありますね。今回の話、ほとんどそうだったでしょう。

今の官邸との関係というのがどうなっているか、僕は実はよくわかりません。内閣広報官の機能が大分強くなっているようだしね。私のときは、たとえば総理の外国訪問に内閣広報官が同行するということはほとんどなかった。だから、内外会見を私が仕切っていましたから、想定問答も準備していたし、会見の前の勉強会も私が主宰していたので、それに比べると今は大分違うのではないかと思います。今は、むしろ報道官は外務大臣についていくことのほうが多いのかな。やっぱり官邸機能の強化の関係だと思います。

—— よく斎木さんが小渕内閣のときに官邸に行かれて対外発信を担当したのが一つの契機になったというふうに聞いたのですけれども。

沼田 そうでしょうね。でも、内閣副広報官は斎木君が始めて、僕は内閣副広報官で一番活躍したのは四方敬之君（のちの経済局長）だと思いますよ。3・11の地震のとき。あれはすごかった。

—— 苦労していましたけどね。

沼田 よくやった。

—— 何か相談を受けられましたか？

沼田 きょう持ってこようかと思って持ってこなかったのが、今度機会があったら、もし御関心があれば。あれは3月11日だったでしょう。3月20日に僕はBBCのインタビューを受けました。そのDVDがあって、これは生のインタビューで4分半、9問。これは結構タフなインタビューでした。

—— 要するに政府の情報が小出しでしたから、それでスポークスマンがものすごく苦労したと思うのですが。

沼田 そうでしょう。小出しだったしね。それから、さっきのニック・ガウイングの「First」「Fast」「even if Flawed」というのが全部だめだったでしょう。そんなこと言っちゃ悪いけど。だから、やっぱり司令塔がないという感じがしたでしょう。その中で四方君が孤軍奮闘していた。難しいですよ、ああいうときはね。

—— 私なんかとてもできないなと。彼は同級生なんですけど。

沼田 そう、同級生？

—— はい。とってもできないなと思ったのは、やっぱり報道官でも腹が立ちますよね、その政権に対して。でも、腹立てずに弁護しながら、だけど外プレを満足させる何かを言わなきゃいけないですよ。そういうときはどういう気持ちなんでしょう。

沼田 あれは、なんて言ったらいいかな、ホワイトハウスやなんかの報道官とちょっと違うのは、彼らはpolitical campaignをしてきた人でしょう。だからスピンもかけるしね。でも、我々は官僚ですよ。だから、若干sense of detachmentがある。

—— detachment？

沼田 detachmentというのは、やや客観的に物を見る。選挙のキャンペーンをやっているわけじゃないから。事実を淡々と述べて、それでメッセージを伝えていくということかもしれない。

—— 自分個人として思うことはあるわけじゃないですか。

沼田 ありますよ。

—— そこは出さない？

沼田 出さない。

—— それはもう訓練として出さない。

沼田 でも、まあイライラすることはありますけど。

—— でも、少しは出したほうが人間関係がよくなるときもあるわけじゃないですか。

沼田 そうね。でも、報道官というのは特にこれ、僕が副報道官としての最後の会見、きょう最後ですねと聞かれたときに何と言ったか。「This has been a very challenging experience for me, for 34 months since March 1991」、長かったですね、僕は副報道官を 3 年やった。「The job of a Press Secretary is often described in very graphic terms. I have seen words like “sparring”, “slogging”, “tap-dancing”, and “tip-toeing”. Despite these physical exertions, I think I have stayed more or less intact, and I thank you for that」。その後によせばいいのに「At the same time, mentally, it has been a very stimulating and also a very rewarding experience. I am very grateful to you for having given me this very valuable experience. Perhaps someday, sometime, somewhere we can both look forward to a repeat performance」と言っちゃったものだからまた報道官になっちゃった（笑声）。

いや、だから何て言ったらいいかな。真面目な顔してはぐらかすことです。そういうのが必要ですよ。

—— そうできることに快感を覚えるような達人になっていくわけですね。

沼田 言葉の使い方に神経質になるということは確かにありますよね。

—— 高校時代アメリカでお過ごしになって、オックスフォードでお過ごしになって、すごくクイーンズイングリッシュですよ。

沼田 はい、今はね、どちらかというと。

—— 英国が長かったということもありますかね。でも、ワシントンも長い。

沼田 イギリスが 8 年で、アメリカが AFS のときを数えると 5 年、ほかにもオーストラリアもあるしカナダもあるし、パキスタンもあるし。

—— その割にはイギリスのカルチュラルな。

沼田 一番強いですね、それはやっぱり。

—— それはやっぱりオックスフォードですか。

沼田 そうですね。

—— あの時代のインテンシブなインプットがそういうふうに出てきているという感じですか。

沼田 言葉を使うという意味ではこの前もちょっと話したかもしれないけど、オックスフォードで「Philosophy, Politics and Economics」を undergraduate でやっていて、特に Philosophy で鍛えられたので、それが大分役に立ったということ。言葉をきちっと使わなければいけない。

—— そうですね。今後外交官を目指す若者に対して何かおっしゃりたいこと。これをぜひ。

沼田 これですね（「能動的対外発信の要諦」）。これは大使になるときですけどね。講演とかスピーチの適当な場（platform）を探し、売り込む（待っていても話は来ない）。ジャーナリストを食事等に招き、懇談しつつ、気の合う相手を探す（釣りのように竿をだしてアタリを待つ）。だから、何と言ったらいいかな、若いときも、ワシントンにいたときもですが、なるべくスピーチなんかは、一等書記官の時でも機会があればやるようにしていました。

それからもう1つ、スピーチは全部自分で書いていました。

—— そうですか、全て。

沼田 これは principle としてずっと自分で書いていた。結構大変でしたけど。インプットはもらうけれども、実際にやるときは全部自分で書いています。人の書いたものだとどうもやりにくい。

■ パブリック・ディプロマシー

—— パブリック・ディプロマシー、あるいは「戦略的対外発信」について質問よろしいでしょうか。

沼田 「戦略的対外発信」。この前、報道官がそれを話していて僕は行けなかったんだけど、こういう話でしたっけ。

—— 世論を誘導するとかではなく、こっちから積極的に、ジャパン・ハウスとかというのを各地につくったりして日本文化だとかを発信する。また別の枠組みでいうと、我々のようなアカデミックな人たちが海外に派遣されて講演やセミナーに参加する、といったことです。

沼田 それはいいですね。

—— それに、尖閣の問題などで大使が現地のテレビ番組に出演したり、現地の新聞紙上に記事を寄稿したり、そういうのをどういうふうにご覧になってこられたのかを教えてください。

沼田 それは大いにやったほうがいいと思いますけどね。僕は、退官してからパブリック・ディプロマシーをずっとやっていますから。国際交流基金日米センターの所長をしていたでしょう。あれは知的交流だからまさにそれは多かったし、今やっている日本英語交流連盟もそれに関係しないわけじゃない。尖閣なんかについてどんどん寄稿するというのはいいと思いますね。

きょう全部持ってこなかったけれども、**letters to the editor** とか本に寄稿したりしたものもありますけど、それはどんどんやるべきだと思いますね。ただ、中国がいろいろやっているから同じことをやらないのはけしからぬという議論があるでしょう。あれは非常に疑問があります。たとえば国際放送について言えば、中国の国際放送をまねする必要はない。僕は NHK の国際放送の番組審議委員を 4 年間やっていて感じていたことですが、たとえば BBC の場合に、**arm's length policy** と言われますね。政府と全くぴたり一体じゃなくて **arm's length** を保つ。それをやらないと **credibility** がなくなる。プロパガンダになっちゃう。この意識は重要だと思いますよ。僕は、国際放送の番組審議委員会の場で時々そう言っていました。

—— 反対意見も見せることは大事なんですね。

沼田 大事です。それで思い出した。

その記事の中で僕は、櫻井よしこさんにいびられている。これはアイリス・チャン (Iris Chang) の『ザ・レイプ・オブ・南京』が出たときに斎藤邦彦大使がアメリカのテレビに出られて、何かいろいろ言われたときに、櫻井よしこさんが僕のところに来てインタビューして、その結果が。

—— これは何ですか、メディアは。

—— 99 年 12 月、『諸君』。

沼田 それで、これは大変でした。

—— 「工夫も知恵もない日本外交」って書いてある。

沼田 でしょう、ひどいですね。ここで、どう引用されましたかね。「チャン氏の著書の内容について個別的に誤りを指摘することは、日本国政府の取り組むべき問題ではない、なぜなら国内でも議論が分かれているから、国内でいろいろな説が存在することは必要に応じ紹介」、これはちょっとこういう言い方はしませんでしたけどね。「議論の分かれていることについて指摘」、議論が分かれているのだから、チャンさんの言うことがおかしいと頭から決めつけるのは気をつけなきゃいけないというのが僕の趣旨でしたけれども。

国際放送の話に戻ると、やっぱり NHK の国際放送の番組審議会でも議論になるのですけれども、自民党なんかの方々はもっとちゃんと政府の正論をどんどん出すべきだと言われる。僕はそれをやりすぎるとプロパガンダと受け取られる可能性があると思います。外務省出身者があまりそういうことを言わない方がいいのかもしれませんが、でも、その話をしていると思いつくのが、慰安婦の問題に戻るけど、2007 年の *Washington Post* で全紙面を買った広告です。ああいうのは逆効果になるわけですね。いかにもお仕着せという感じになっちゃうから。

ジャパン・ハウスは今どういうふうに機能しているのかわからないけれども、私はあのときに大事だと思ったのは、その国の人の関心とか考え方というのをよく頭に置いておく必要があるということ

です。一方的にただ売り込むというのじゃなくて、プロパガンダにならないためには。今、実際の運営がどうなっているかよくわからないけれども。

そういう意味では、フォーリン・プレスセンターなんかとも話していて、赤坂清隆理事長を僕はよく知っているけど、たとえば外国の記者を招待してどういう報道が出るか、あるいは外国記者を招待して誰に会わせるかというところから問題が生じますよね。かつて問題のある記事を書いた人の場合は、その取材に協力した日本の識者には会わせないとかそういうのがあるみたいだけど、あまりそれはやらないほうがいいと思います。

それで1つ思い出した。いつだったか、副報道官のとき、92年ぐらいかな、東京の中国大使館の広報担当の参事官が僕のところに来て、東京には外国のプレスが800人ぐらいいるけれども、どうやって彼らをコントロールしていますかと、本当にそう聞かれました。

—— そうですか。教えてくださいっていう感じで。

沼田 私が答えたのは、コントロールなんかしていませんということでした。コントロールするというのが第一じゃないほうがいいと思いますけどね。でもそれは歴代報道官がみんなそう考えているかどうかかわからないけど。

—— 最後に、冷戦後の日本外交、90年代の日本外交というのは、歴史の問題に対して真摯に向き合ってきたというふうに捉えられることが多いのですが、大使の印象としてはいかがですか。

沼田 僕はイギリスなんかで講演していたときにも言いましたけど、かつて山崎正和さんだったかな、どこかで言うておられたのは、日本の国内には保守対革新、右対左という意味での **internal Berlin wall** があったという話。だから、戦争のけじめをどうつけるかということが結局行われなまま過ぎてしまった。それはいろいろな要素がありますよね。岸信介さんが戦後政界に戻ってきて総理になったとかね。安保改定はやられたけれども、何となく戦争の問題をどう受けとめるかというのが右と左の闘いの争点になって、そういう状態がずっと続いていたでしょう。加えて、昭和天皇が御存命だったときにはなかなかそれが言いにくかったということもあると思う。それが90年代に入って割合オープンになってきた。オープンになってきたけれども、最初はそれこそ「反省」と言っていたわけでしょう、**reflection** だったわけでしょう。それがだんだん、**contrition** というのはあまり続かなかったけれども、**remorse** になって **apology** になっていくわけでしょう。そういう意味では案外進んだなという感じがしていますけどね。完全かどうかはわからないけど。またちょっと揺れ戻しがあるかもしれないけどね。

—— そのときは政治のイニシアティブがあったというふうにお考えですか。

沼田 政治のイニシアティブはありましたね。村山談話を考えると、やっぱり村山総理だから出せたと思います。その前に細川さんもかなり踏み込んでいるし。今の総理はどう考えておられるかわからない。

—— 時々政権が変わらないと方針って変えられないですよ。ドイツの例を見ていてもそう思いますけどね。一旦変えてもらおうと、またもとに戻ってもそっちに寄っていきやすくなりますけどね。ずっと同じだと引きずっちゃうところがありますよね。

沼田 日米で考えれば、オバマ（Barack Obama）大統領が広島を訪問し、安倍総理も真珠湾へ行っただしょう。ああいうのが何とか実現したから一つの区切りがついたと思うけれども。

—— やっぱり条約局的な解釈というか、それは正しいと僕も思うのですけれども、一応これで終わっていますよという解釈に国際法上ちょっとずつ揺れが生じていて、国際的な人権重視の流れが出てきて。

沼田 そうね。さっき慰安婦について岸俊光さんが書かれた記事で横田洋三さんの話も読みました。

—— そういう人権の面でどういうふうに対応していくのかというのは、外務省だけで考えるのはなかなか難しいことになってきて、結局は譲歩を続けている、対応せざるを得ないというか、非常に難しいなという感じがするのですけれどもね。

沼田 条約局長経験者でも栗山さんみたいにかなりリベラルな方もおられるけどね。

—— 鯨でも随分苦勞なさったみたいですけど。

沼田 鯨は僕も苦勞しました。鯨ってやっぱり感情的な問題ですからね。ただ、あれもメッセージをどうするかという話でね。メッセージは3つです、当時は。

1 つは、ネガティブな言い方になるけど、「We have no intention to revive the great Japanese whaling armada」というわけ。また大船団方式でやろうというつもりはありませんと。「But, we can catch whales for research for scientific purposes, which is condoned by the whaling convention」でしょう、そして「Each country has its own culture and tradition」、その3つです。テレビでやろうとするとそのぐらい絞らないとわからない。

今はちょっと、何で国際捕鯨取締条約から脱退したのでしょうかね。でも、今でもそのメッセージはあまり変わらないと思います。だって、南氷洋ではもうとらないと言ったわけでしょう。それを対外的にはもっと出したほうがいいと思う。商業捕鯨再開と強調すると、また大船団を組んで行くのかと思われる。そうじゃないわけでしょう。日本の周辺でやるという話なので、それはそういうメッセージを出した方がいいと思う。なかなかあれも大変だったろうな、外務省も。

僕は92年の地球サミットでリオに行ったときも大分捕鯨のことを聞かれましたよ。リオには10日間いて、その間にずっとブリーフィングやるだけじゃなくてインタビューを受けていました。その中にさっき言った「The Today Programme」の人もいて、僕がそのインタビューで捕鯨についてしゃべっていたら、イギリス外務省のトニー・ミリントン（Tony Millington）という在京英国大使館政務参事官をやっていた僕の友人が、ロンドンで聞いていてびっくりしたっていうわけ。突如僕の声が聞こえてきたって。それが大分トレーニングにはなりましたけどね。

—— 今振り返って、報道官としての仕事を楽しまれたというふうに思われますか。

沼田 むしろロンドンのほうが楽しかった。

—— arm's length の距離があった分。

沼田　そうですね。ロンドンの方が楽しかったな。報道官もほかの局長をやるよりはよかったかもしれないけど。

沼田貞昭オーラルヒストリー ⑧

パキスタン大使

ー同時多発テロ、印パ対立ー

質問票 8 パキスタン大使―同時多発テロ、印パ対立―

1. 外務報道官を務められた後、大使は 2000 年 2 月に駐パキスタン大使に着任されています。当時は 1998 年の核実験や 1999 年のクーデタなどで、西側とパキスタンの関係が冷却化していた時期と思いますが、着任時に感じられた、パキスタンの対日姿勢・感情や、パキスタンの軍事政権について、ご印象に残っておられることをお話してください。
-

■キーワード

- ・ 日パ関係
- ・ パキスタン軍事政権

■参考：大使略歴

2000 年 2 月 在パキスタン大使（～2002 年 11 月）

■参考：当時の主な出来事

1998年 5月 印パ核実験
1999年 5-7月 印パ限定戦争
1999年 10月 ムシャラフ陸軍参謀長によるクーデタ
2001年 6月 ムシャラフ大統領就任

2. 2001 年 9 月には 9.11 同時多発テロ事件が発生し、10 月には米国が対アフガニスタン軍事行動を開始しました。これら一連の事態が隣国であるパキスタンにどう影響すると感じられていましたか。また、在留邦人の安全確保に当たり、大使館としてどのような措置を講じられたのでしょうか。また、9.11 同時多発テロの直後にはテロ対策特別措置法に基づき自衛隊がインド洋での活動を開始しますが、こうした日本の動きはパキスタンでどう受け止められたのでしょうか。
-

■キーワード

- ・ 9.11 同時多発テロ
- ・ アフガニスタン

■参考：当時の主な出来事

- 2001 年 3 月 バーミアン石仏破壊
- 2001 年 9 月 9.11 同時多発テロ事件
- 2001 年 10 月 米国の対アフガニスタン軍事行動開始

3. 印パ関係についてお聞きます。2001年7月にはムシャラフ大統領がインドを訪問し、アグラでヴァジパイ印首相と会談しました。その後、2001年12月、パキスタン ISI の支援が疑われるテロ組織によるインド国会襲撃事件を発端に、印パ双方が80万の軍隊を国境沿いに配備する危機が生じ、核戦争が危ぶまれました。当時、危機が戦争に転化する危険をどのように感じられ、在留邦人の安全確保にいかなる措置を講じられたのでしょうか。また、戦争回避のためにパキスタン側に働きかけていたことなどはあったのでしょうか。ご印象に残っておられることをお話しください。

■キーワード

- ・ インド国会襲撃事件
- ・ カシミール問題
- ・ テロリズム
- ・ 核抑止

■参考：当時の主な出来事

2001年 7月	アグラ印パ首脳会談
2001年 10月	インド側カシミール州議会テロ
2001年 12月	パキスタン支援のテロ組織がインド国会を襲撃、印パ危機（二頂点危機）に発展
2002年 5月	インド側カシミール陸軍基地へのテロ攻撃
2002年 10月	危機収束

4. 日パ関係についてお聞きします。2000年8月に森総理が現職総理としては10年ぶりにパキスタンを訪問しました。2002年3月にはムシャラフ大統領が日本を訪問しました。この間に、パキスタンに対する日本の経済措置（制裁）も解除され、対パキスタン援助も再開されました。日本とパキスタンとの関係について、ご印象に残っておられることをお話しください。
-

■キーワード

- ・ 日パキスタン関係
- ・ テロ対策特別措置法
- ・ 自衛隊インド洋補給支援活動

■参考：当時の主な出来事

- 2000年 8月 森総理南西アジア4か国訪問
(外務省発表「日パキスタン首脳会談（概要）」)
https://www.mofa.go.jp/mofaj/kaidan/kiroku/s_mori/arc_00/asia4_00/n_p.html
- 2001年 11月 テロ対策特別措置法施行
- 2001年 12月 自衛艦隊によるインド洋での補給支援活動開始

パキスタン大使―同時多発テロ、印パ対立―

■ パキスタン大使着任

—— 大使は2000年2月に駐パキスタン大使に着任されています。当時は1998年の核実験や1999年のクーデターなどで、西側とパキスタンの関係が冷却化していた時期と思います。着任時に感じられた、パキスタンの対日姿勢・感情や、パキスタンの軍事政権について、ご印象に残っておられることをお話しください。

沼田 外務報道官を務めて2000年2月に着任、99年にクーデター。この辺は着任して数カ月のお話ですね。

着任してみて、まずイメージの問題があったと思います。日本のパキスタンに対するイメージはうさん臭い遠い国、何か物騒、インドといがみ合って核実験をした、だから制裁もかけなきゃいけないというものだった。軍事独裁下にあって、急進イスラムがかなり跳梁跋扈していて、タリバン化の危険があるのではないかなという感じがあったわけですね。

そこで、私が着任して間もないころにやった新聞のインタビューの記事があります。「Pakistan needs to improve its image...」というのがどこかにあると思います。これは6月号かな。

—— 『Friday Times』ですね。

沼田 これは結構詳しく書いていて、当時の私の問題意識というのかなりよく出していると思う。今詳しくは触れませんが。

他方パキスタンの対日姿勢とか感情というのを申しますと、もし写真類が必要ならば、ここにいくつかあるのです。ちょっとさかのぼりますと、こんなのは必要なのかな、これは宮澤元総理から僕がいただいた手紙です。読めないところがある。「大奥様」と書いてあるのかな。

—— 宮澤総理とはいつごろからの。

沼田 宮澤総理はかなりよく存じ上げていました。宮澤外務大臣のときに、あの方は通訳は要らないけど、通訳として時々使われていたから。それから僕は副報道官のときに、宮澤総理がたとえば外国のプレスとインタビューをするなんていうときはブリーフィングに行っていました。発言要領を英語でつくってブリーフした。だから、かなりよく存じ上げていた。報道官が終わって赴任するときに、このメッセージをいただいた。何で彼はパキスタンに行くのだろうと思っておられたのかもしれないけれど。

—— 何かそういうイメージの国だということですね。

沼田 そうそう。

—— これが原紙ですか、こういう形で来たんですね。

沼田 そうそう。これは河野（洋平）大臣から辞令をもらっている写真ですね。それで着任して、これはターラル（Muhammad Rafiq Tarar）大統領に表敬したときの写真です。これはイナムル・ハク（Inam-ul-Haq）という、後で出てくる外務次官です。

ということで、ターラル大統領を表敬したのが 2000 年 4 月 8 日ですけれども、大統領が言っていたのは日本の役割に期待する。それはなぜかという、要するに CTBT（包括的核実験禁止条約）と経済協力のリンクの問題で、CTBT をめぐる問題を克服して経済協力を再開してほしいと。ということは、彼らはやはり経済大国・日本のイメージに、90 年代最大のドナーでしたから、日本の援助を重ね合わせた片思いに近い親近感があった。他方、日本からいろいろつけられる注文はうさん臭いとも思っていたでしょうね。

さて、それから西側との関係というこの質問の中にあるけれども、私が赴任したのは 2000 年 3 月 26 日でした。クリントン大統領がパキスタンを訪問したのはその前の日だったのです。3 月 25 日に 6 時間半ストップオーバーして、インドに 5 日間いたけどパキスタンには 6 時間半しかいなかったというのが問題になっていた。僕は 3 月 26 日に着任して次の日、3 月 27 日にすぐ、まだ信任状も奉呈していないけれども、クリントン訪問についてのイナムル・ハク外務次官のブリーフィングとマイラム（William B. Milam）米国大使によるブリーフィングにすぐ出席して報告電報を書きました。

—— この写真は同じときですか。

沼田 いや、これはもうちょっと後。着任してしばらく後ですから。この信任状奉呈をしたのは 4 月 10 日ですね。

それで、クリントンがあのととき行った意味というのは、パキスタンを孤立化させることなく、ハイレベルの直接対応を維持したということに意味があったと思います。それから、クリントンはアフガニスタンについて率直な懸念を伝えました。カシミール問題も取り上げていたはずですけどね。それから、我々から見てみると、パキスタンが民主主義に向けた動きから外れることにならないようにたがをはめたということだと思います。

—— そうすると、クーデターがあって、その後も関与を続けるという意思を示したということですか。

沼田 そうそう。しばらくパキスタンは除け者みたいになっていたのを、一応関与するよ、だけど注文をつけるよという感じになったわけですね。

他方、インドに 5 日間いてパキスタンは 6 時間半ですから、これは、かつてはパキスタンと最も親しくしていたけれどもインドにシフトしたなという印象を与えたわけですね。このときヤクブ・カーン（Yaqub Khan）元外務大臣が——彼は何度も登場します、私は本当に彼を尊敬していたものですから——私に言っていたのが、冷戦が終わったときのパキスタンとインドの置かれた立場を比較すると、パキスタンの立場は大幅に下がった、インドは急に上がったと言っていました。だから、パキスタンの地位が下がっているのを少し食いとめたというイメージはあったのかもしれませんが。

それから、パキスタンの政治体制、着いて数カ月の間に感じたのは、いろいろな人と話していると、パキスタンについては feudal という言葉と tribal という言葉が非常によく出てくるのに気がついた。やはり feudal で tribal な社会だなと思いました。前近代的で、日本の戦国時代と徳川時代と明治と今とが混在したような社会だなという感じがしました。

他方、ムシャラフ（Pervez Musharraf）軍事政権と言われて何か軍事独裁政権という感じで受けと

められていたけれども、必ずしもそういう感じはしなかった。たとえばミャンマーの軍事政権とか、かつての韓国の政権とか、ラテンアメリカの軍事独裁政権なんかに比べると、そういう感じは必ずしもしなかった。それから、テクノクラートを非常に活用されていたと思う。その後、ショーカット・アジズ（Shaukat Aziz、当時大蔵大臣、のちに首相）の話が何回も出てきます。彼と一番接触があったと思うので。これが最初の印象です。

—— いくつかお伺いしてもよろしいですか。着任された後、イナムル・ハク外務次官に会われたときに日本への期待が示されたというお話。

沼田 今の話は大統領。

—— 失礼しました、大統領に会って日本への期待が示されたというお話で、一方注文はつけられなくなかったというところに関連してなんですけど、一番彼らが嫌がっていた、注文をつけられたくないところは民主主義の話だったのか、それとも核の話だったのかというのを。

沼田 核じゃない？

—— 核ですか。

沼田 日本は民主主義をそんなに押しつけませんから。その話はさっき言おうと思ったのだけど、要するにイスラマバードみたいなところだと西側の大使はお互いによく行き来するわけですよ。G8 はロシアが入るけれども、ロシアは入らない、西側の国の大使がよくお互いに行き来して、月 1 度くらいランチを一緒にして、パキスタンの民主化の話なんかをする。それから人権の話ね。そういうときにやはり **Human Rights Embassies** というのがありました。アメリカ、イギリスもそうだけど、特にスカンジナビアとか人権問題を非常に重視するところ。

それから、民主主義についても、西欧型の民主主義をそのままパキスタンでもやるべきだという議論と、僕みたいに日本にも第 2 次世界大戦以前から日本的なデモクラシーはあったので、必ずしも **One pattern fits all** とは限らないという議論をする人と両方いるわけですよ。だから、日本について民主主義の観念でそんなにうるさく言ってくる国だという感じではなかったのだと思う。

—— そうすると、核のところが一番言われなくなかったと。

沼田 核は言われなくなかったけれども、援助が再開されないからね。着任して 1 年半の間、それがずっと問題でした。

そういう状況のもとで、ちょっと話が飛びますけど、着任してすぐ僕の名前が新聞に出ちゃったのは、ここにあるかな。これこれ、『**Pakistan Times**』。日付はいつになっていますか。

—— 4 月 20 日です。

沼田 だから、着任して 1 カ月たっていないでしょう。これは通信社がインタビューに来て、僕は、インタビューは決して断らない主義でした。その前が報道官ですから。ロンドンにいたときからずっと断らない主義だったので、インタビューを受けたわけですよ。そうしたら、通信社の人が来てこう

いう記事が書かれて、それがインドの新聞で報道されて平林博大使が怒ったわけ。平林大使から直接ではなかったかな、在インド大使館とやりとりがありました。実は、これはミスクォートです。よく記事を見ていただくとそんなこと言ってないんだけどね。それで、次のページに訂正記事が出ているでしょう。

—— ほぼ1週間後。26日付です。

沼田 21日と26日。

—— 「selective quoting」。

沼田 そう「selective」。これ、結構素直に訂正記事を出していると思う。

問題は、日本が印パの話し合いの場を提供してもいいよと言ったとか言わないとかいう話ですけども、実はこれは小渕外務大臣のときにそういうことを国会で言ったんです。それが僕は頭にあって言ったと思います。98年6月に小渕外務大臣が国会答弁で、東京に関係国を招待して歴年の紛争問題にめどをつけることが望ましいのではないかと柿澤弘治議員から質問されたのに対して答えていた。それが僕はたしか頭にあったと思うけれども、その話自体は言わなかった。ということで、この種のことで、カシミール問題に下手に日本が口を出すとやけどするぞと思っている人が多くてね。インドに関わっている人にはそういう人がおられますね。

■ 森総理のパキスタン訪問

沼田 それで、森喜朗総理の訪問に行っていていいですか。この質問の上では日パ関係のところだから。

要するに経済措置をとっていたものだから、それをとにかく早く解除したいなと思っていたけれども、なかなかそれがうまくいかなかった。どうも当時の僕のメモなんかを見ると、河野洋平外務大臣自身が非常に慎重だったということがあまるみたいです。

—— それはどういうお立場だったんですか。

沼田 彼の核兵器なんかに関する立場だったと思います。だから、なかなか制裁解除という話が進まなかった。

それで森総理の訪問について、在外を含め外務省の中でも、インドに対する配慮、それに核の問題もあるので、総理はパキスタンに行かれるべきではないという意見が出てきた。私はこれに反論して、本省とか在インド大使館とかの間でいろいろ電報の応酬もありました。でも、実際には訪問は実現しました。

—— 森総理自身のお考えみたいなのはあったんですか。

沼田 森総理はやはり来ていいと。

—— 来たいと、できれば何か動かしたいという。

沼田 そういう気持ちはあったのでしょうか。

—— このころのアメリカの温度感というのはどういうふうに感じていらっしゃいましたか。それぞれパキスタン、インドに対して。

沼田 やはりインドですよ、どちらかといえばね。アメリカもインドにも制裁をかけていたけど。でも、インドの方がつき合いやすいという感じだったと思います。それは、さっきのクリントンの 5 日と 6 時間半の話でも。

—— そうですけども、その後もずっとインドに甘いわけですよ、現在に至っても。パキスタンは危ないという感覚ですか。

沼田 でしょうね。ただ、インドに甘かったけれども、話が前後しますが、2002 年のカシミール問題から印パ戦争になりかかったときに騒いだのはアメリカでした。騒いだのがアメリカというのは、アメリカ人のビジネスマンがインドにたくさんいたから。それに危害が及んでは大変だということで、当時のブラックウィル大使が大分ニューデリーで叫んだらしくて、それにつられてというわけでもないけれども、我々在パキスタン大使館よりもデリーの大使館の方が早く邦人を出国させたいと言いました。あのときは、アメリカが厳しく出たということで戦争にならずに済んだ面もかなりある。

森総理の話に戻っていいですか。

—— その前に 1 点だけちょっと。今の質問と関連してですけども、逆にパキスタン側の当時のアメリカに対する感情、もちろん制裁とかいろいろあって悪化していたのは悪化していたんですけど、いつかはよくなっていくだろうと彼らは当時思っていたのでしょうか。それともずっとあの状態のままだと思っていたのか、その辺どう感じられましたか。

沼田 パキスタンの対米感情というのは非常に複雑でね。要するに捨てられたと思っていたわけ、ずっと。80 年代のアフガニスタンでムシャラフも米軍、CIA なんかと一緒に戦っていてヒーローだったのに、一旦ソ連が撤退したら、これは、鼻かんだあとのちり紙みたいに捨てられという表現とか、あえて言いませんけれどももっと下品な表現も聞きました。そういうアメリカに対する非常に複雑な感情は底流にずっとあります。それがもう少しよくなることもあるのだけれども、また悪くなることもある。

そこで、森総理が来られるということになると、いわゆる CTBT にパキスタンが署名するかどうかということと経済措置（制裁）とのリンクが最大の問題になるわけですよ。我々はパキスタンが署名したら解除してもいいよと言っていたわけですね。それはなぜかという、さっき申し上げたけれども、90 年代は日本が最大のドナーでしたから、パキスタンの期待は大きかったわけ。森総理が来られたときにこの問題をどう扱うかということは、森総理が来られる前に相当詰めたすり合わせをしました。サッタール（Abdul Sattar）外務大臣自身と私がやったこともあるし、さっきのイナムル・ハク外務次官と私は 3 回ぐらいやっているかな。実際にどういう表現で発表するかというのもやりました。

サッタール外務大臣は、その前から CTBT に署名してもいいよというようなことを言っていました。CTBT に署名すること自体は問題ないけれども国内の状況を整えなきゃいけないというようなことを言っていて、だったらそれをはっきり言ってよという話ですよ。いつ署名するとか、そういう

意思表示があれば我々も経済措置を緩めることは考えるというようなことを言っていました。それに対して向こう側がずっと言っていたのは、国内の政治状況がいろいろ微妙なので一旦署名しちゃうと何もやってくれないでそのまま批准まで追い込まれるかもしれないという、いわゆる *slippery slope* になることが心配だと言うことで、軍の人たちなんかもそう言っていた。それじゃどういう表現なら可能だろうかと具体的な表現のすり合わせをしていました。要するに、パキスタンは核実験のモラトリアムは維持する、「We will not be the first to resume nuclear tests or explosions」ということは言えるというわけですね。

—— インドがしなければということですね。

沼田 そうそう。こっちは署名の方針をはっきりして欲しい。そんな *first* とか何ら条件を付すことなく核実験モラトリアムを CTBT 発効まで継続して欲しい。そうすれば経済協力の円借款の輪切り案件——輪切り案件というのはフェイズ 1、フェイズ 2、フェイズ 3 とつながっている案件ね、大きいのはコハット (Kohat) トンネルというのがありました。

—— 何トンネル？

沼田 コハット、これは地名です。北西辺境州 (North-West Frontier Province) のペシャワールに近いところの地名です。大成建設がつくっていた大きなトンネルです。日本の円借款により拡幅・改良工事を進めてきた北西辺境州とシンド州を結ぶ国道 55 号線 (インダス・ハイウェイ) 上のコハット峠の通過部分は、急峻な地形により拡幅が困難なため未改修のままで、交通渋滞の発生や落石などの問題がありました。このコハット峠の代替ルートとして峠をブチ抜く新たなトンネルとアプローチ道路の建設を円借款で支援していましたが、そのフェイズ 1 は工事していて、フェイズ 2 の借款をどうするかとの問題でした。結局これは何回もパキスタン側とすり合わせをして落ち着いたのは、森総理との会談の内容というのが発表されていますよね。あれで見るとわかるけれども、会談の中でムシャラフが CTBT 発効までモラトリアムを継続することになると前向きな姿勢を示したので、コハットトンネルについてパキスタンの経済状況及び債務返済状況等を勘案しつつ追加的資金需要への前向きな対応を検討と、随分いろいろ言っているけれども、要するに考えると言いました。

あと森総理とのやりとりで重要な点は、いわゆる民主化との関係でいえば、パキスタンは 2002 年 10 月までに総選挙を実施すると表明していることを評価する。それから、印パ関係については、印パの対話を再開することを希望する。それから、パキスタンはテロ防止のために有効な措置をとるべきであるということを行った。

これに対してムシャラフが言ったのは、パキスタン自身がテロの被害者である。印領カシミールにおいてパキスタン側の住民はインドの残虐行為の *victim* になっているというようなことを言っていました。それから、アフガニスタンについては、アフガニスタンに設けられたテロリストの聖域や基地を閉鎖するようパキスタンとしてもアフガニスタンと交渉しているということを行った。

それで、CTBT の話について一応森総理はそれで終わったわけですね。我々は、経済措置が続いてこのままだと日パ関係というのはジリ貧になってくるのではないかと非常に気にしたわけです。パキスタンは我々が援助を再開しないことを恨んでいるし。ジリ貧になっちゃうと困るなと思ったところで森総理がとにかく来られたということで、さらに低迷することにストップをかけたという意味はあったと思います。

その後何が起きたかという、バイラテラルな話で、援助が再開されない——援助って一部はやつ

ていたわけですよ、技術協力と草の根無償に限り続けていましたけど。それ以外の援助は再開されないにしても、ビジネスマン同士の交流を何とかできないかということを考えて、当時のカラチの出木場一実総領事（のちのタンザニア大使）も非常にそのことを考えてくれた。ビジネスマンはカラチの方がたくさんいますから、イスラマバードというのはあんな街ですから。日パのビジネスマンが会員の日パ経済委員会というのがあったのですが、もうちょっとそれをアクティブにすることができないかなということで、出木場総領事と組んで主にカラチのパキスタン経済界要人を動員して **Pakistan Japan Business Forum** というのをつくろうということになった。それは 2001 年 2 月 6 日に発足しました。どこかに写真があったと思います。

こうして **Pakistan Japan Business Forum** というのをとにかく打ち上げました。ビジネスはビジネスで何とかやっていきましょうということで。それがこの **Launch** のときの写真。これで僕は何回かカラチにも行きましたけれども、それで何とか日パ関係でいろいろやっているという姿を見せてきました。次の日パ経済フォーラムというのは両国政府の人も参加して開きました。

それから援助関係については、2001 年 3 月 12 日かな、「**Pakistan Development Forum**」といって、世銀の西水美恵子副総裁、日本人の副総裁。彼女が当時南アジアを担当していて、彼女は都立西高の僕の後輩らしいけど、かなり熱心にやっていて、何とか国際社会としてパキスタンに関心を持っていますというのを保とうとしていたわけです。

2001 年 3 月の半ばにサッター外務大臣が訪日していますね。CTBT について同じようなやりとりをした。

それから、当時の僕の日程を見ると、2001 年 4 月 23 日に僕はアブドゥル・カディール・カーン（**Abdul Qadeer Khan**）と昼飯を食べたと。

—— そのときはまだ、彼が一応政府のポストについていたころですね、そうすると。

沼田 まだいました。A. Q. カーンとなぜ昼飯を食べたかということ、誰かのパーティーに行ったらサッター外務大臣がきていました。それで A. Q. カーンもすぐ近くに座っていた。CTBT の話になったときに A. Q. カーンが CTBT に早く署名すればいいと言ったんですよ。おもしろいなと思ってね。話を聞こうと思って、声をかけました。どういうふうに出会ったのかなと思って、誰か連れてくるなら連れてきてもいいし、1 人で来たいのなら 1 人でと言って公邸に招いたら 1 人で来たので、1 対 1 で食事しました。彼と食事した日本人はあまりいないと思う。

—— そうだと思います。

沼田 でも、本当のことは何も言ってくれなかった。

—— その CTBT に早く署名すればいいんだというのは、彼の。

沼田 理由がどうもよくわからなかったですね。

—— 彼は当時何のポストですか、原子力委員長？

沼田 いや、委員長じゃないですよ。研究所。

—— カーン・ラボラトリーの。ちょうどもう疑われ始めていたぐらいのころですね。

沼田 疑われ始めていた。それがあるのかな。よくわからない。とにかく質問してもあまり要領を得ない反応で。

今でも覚えているのは、いろいろなところに核関連の技術を流しているのではないかという疑惑があったわけでしょう。その話を何となく聞いたら、特に中東の諸国なんかに核技術を流しているのかどうかと聞いたら、いやとにかくモサドの目があらゆるところで光っているからそんなことはできないと言ったのを覚えています。これはこちらの質問に直接答えるのを逃げたわけです。A. Q. カーンは、後ほど僕のムシャラフ大統領の離任表敬のときに登場しますから、またその話が出てきます。彼と会ったのが 2001 年 4 月 23 日ですね。そして、そこまでが日パ関係で、それで 9・11 に入る。

—— その前に 1 個だけお伺いしてもよろしいですか。先ほどパキスタンの軍事政権に関して、ミャンマーとかのああいう軍事政権とは違うような印象を受けられたというところと、あと関連でムシャラフという人は当時のパキスタンでかなり強烈な指導者だったと思うんですけど、どういう印象を受けられたか。

沼田 いや、なかなかつき合いやすい人だったとの感じですけど。

—— そういう人ですか。それは割とオープンなというか、そういう。

沼田 割とオープンという感じでした。ムシャラフの印象というのは割とオープンだという感じがしたのと、それからあまり独裁者という感じがしなかった。優秀な軍人だろうなという感じはしましたけれど。

ムシャラフについて僕が覚えているのは、またヤクブ・カーンさんですが、「僕は軍人としてパルヴェーズに **commando** (奇襲隊) を率いて戦うことは教えたけれども、世界の中でパキスタンを **manage** していくことは教えていないから心配だ」と言っていました。

—— ヤクブ・カーンとは軍のどこかで。

沼田 どこかで一緒だったのでしょうか。

—— 一緒なんですかね。

沼田 軍歴を調べてみればわかるかもしれない。ヤクブ・カーンさんは 1971 年に東パキスタンの司令官をやめて、その後外務大臣を 7 回務めたりしています。駐米大使、駐仏大使もやって、アフガニスタンからのソ連軍の撤退などを定めた 1988 年のアフガニスタンとの **Geneva Accords** もつくった人でしょう。ものすごく識見のある人だから、それから見ればムシャラフさんはグローバルステーツマンではなかった。ただ、ショーカット・アジズをはじめとしてテクノクラートはよく使っていましたよね。そういう意味で、僕は日本の政治家の人にも言っていましたが、いわゆるディクテーターじゃなかったと思います。

■ 9・11 同時多発テロ

沼田 それで9・11に行っていていいですか。アフガニスタンの話になりますけれども。9・11の前にいくつかあるけれども、1つは、僕は2000年の8月にマームド・アーメド (Mahmud Ahmed) ISI (統合情報局) 長官に会っています。彼が言っていた中で1つ覚えているのは、アフガニスタンの国技と言われるブスカシ (buzkashi) というスポーツを知っていますか。ブスカシというのは、頭を切り取ったヤギの死体をボールのかわりにしてやるポロだそうです。僕も実物は見ていないけど。

—— 馬に乗ってですか。

沼田 すごいですよね。アフガニスタンというのはそういう国だと。それで、そのブスカシの試合をやはり我々はきちっと見ている必要があるというようなことを言っていました。

—— ブスカシの試合を見ている必要がある。

沼田 オブザーバーとして。それで、いや試合を見ているだけじゃなくて、行司がまわしを締めて相撲を取り始めるようなことがあるのではないかと僕が聞きました。相撲とは言わなかったけど、リングに入っちゃうことはないのと聞いたら、そのときは「We will engage, but not dictate」と言った。だから、何もやっていないわけじゃないと思いました。このことはずっと続きます。

—— そのブスカシというのはパキスタン側にはないんですか、カルチャーとして。

沼田 パキスタンにはないでしょう。もともと中央アジアの遊牧民のものそうですね。ウィキペディアで見ると出てきますけどね。すごく乱暴なゲームですよ。それが1つ。

それから、バーミヤンの石仏の問題があります。これが破壊されたのが2001年3月12日となっているかな。このころに僕はザイーフ (Abdul Salam Zaeef) というタリバンの大使と何回か会っています。タリバンは、当時国交を持っていたのがパキスタンとパレスチナと。

—— サウジとUAEですね。

沼田 このザイーフ大使が来るときは、彼もこんなひげをはやしていました。彼は、必ずひげの大男を通訳ということで連れてきました。でも、ザイーフは実は英語はわかっているのではないかとも思いました。彼との話がすごく消耗するのは、何回言ってもなかなか反応が返ってこない。しばらくたってやっと返ってくる。僕はこれを「slow motion ping-pong」と言っていました。通訳も入るからなかなか要領を得なかった。要するに日本人にとってバーミヤンの仏教の遺跡は非常に大事だし、人類共通の遺産で、平山郁夫画伯が非常に関心を持っておられるということを言いました。

それが2001年3月ごろの話でしょう、僕はそのちょっと前、ムシャラフ大統領訪日のときに東京に帰った際に平山画伯にも会いました。平山画伯はシルクロードの関係でずっと見ておられるからバーミヤンの石仏を大事にしておられた。タリバンがあれを破壊しようとしていることを聞いておられて、平山さんは切り分けてどこかほかのところに持って行って再現したらどうかということも言っておられた。そういうことも僕は言ったわけです。そうしたら、ザイーフ大使は9・11の後グアンタナモに収監されていましたが、その後書いた本の中で、日本から切り分けてほかのところへ持っていっ

たらどうかという提案もあったと言っている。それも全然だめで、要するにタリバンが爆破したわけですね。何で爆破したのかと聞いたら、いやとにかくウレマ（イスラム法学者）からの命令だからオマル（Muhammad Omar）師もどうしようもなかったというようなことを言っていましたけど。

それから、あのころに日本が和平対話を提案したというのを御存知ですか。

—— 存じておりません。

沼田 これは、アフガニスタンに国連の UNSMA (United Nations Special Mission to Afghanistan) というのがあって、ヴェンドレル (Francesc Vendrell) というスペイン出身の人が特別代表でした。そのときにヴェンドレルと一緒に働いていたのが田中浩一郎さん (のちの慶應大学教授)。彼はイスラマバードとアフガニスタンを行ったり来たりしていて、ヴェンドレルと田中さんがよく僕のところへ来ていました。

その関係の話をすると、ヴェンドレルと田中さんと時々話をしてアフガニスタンの情勢を聞いたりしていて、それから当時アフガニスタンについては「6 プラス 2」というのがあった。「6 プラス 2」コンタクト・グループというのは、中国、イラン、パキスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン+米、露でいろいろ相談していたという枠組みがあった。それで、ヴェンドレルから出てきた話ですが、日本にも協力してほしい。タリバンのムタワキル (Wakil Ahmed Muttawakil) 外務大臣と北部同盟のアブドゥラ (Abdullah Abdullah) 外務大臣代行を東京に呼んで、そこに国連の人もいて、それで和平の対話ができないかという話が 2001 年の 3 月～4 月にかけてありました。その話を僕はザイーフ大使に伝えていました。

北部同盟に対しては田中さんがたしか連絡とっていたと思う。アブドゥラ外務大臣代行はそれに出るという意思表示がありましたが、タリバンは国連が出てくるところには行かないといって断ってきた。国連というのは超大国の言うままになっているから、そういうところには行かないということを言ったのと、それからいずれにしても外務大臣というのはハイレベルなので行けないとか言って、とにかくだめだった。

それから、2001 年 7 月 7 日にイギリスの Weston Park というところで、「6 プラス 2」のコンタクト・グループの国及びほかの国の人たちが集まるアフガニスタンについてのシンポジウムがあって、僕もロンドンまで飛んで出席しました。随分いろいろな議論がありました。ただ、残念ながら、今反省してみると、アフガニスタン問題について、当時日本からあまり積極的なことを提案し得る状況ではなかったですね。バーミヤンの石仏を壊すのをやめなさいとか、さっき言った対話の仲立ちの試みとかがあったけれども、やはり決め手を欠いていた。

それから、もう 1 つ反省を込めて言うと、我々のカブールの大使館を引っ込めちゃったわけでしょう、ソ連がいなくなってから。タリバンとの接触といっても、本当に何も接触がない時期が相当続きました。他方、北部同盟とも別に接触はなかったので、ちょっと空白になっていたなという感じがありました。そういう状況でアフガン和平に何かしたいと思っても、若干部外者的な感じがあったと思う。僕自身が Weston Park のシンポジウムに参加して、それは感じました。

それはそれとして、それが 7 月でしょう。この年は珍しく僕は夏休みをとってイスタンブールまで行って、8 月末の 1 週間、家内と 2 人でゆっくり楽しんで帰ってきたら、その 2 週間後に地獄が始まった。地獄というか何が起きたかという、プライベートなことを申し上げて申しわけないけれども、9 月 10 日だったかな、僕の娘が大学に入学して初めてパキスタンに来たわけです。

—— このタイミングでですか。

沼田 それで、11日に家内と娘と3人でペシャワールとかカイバル峠とかラホールとかを旅行しようといっていて準備が整ったところで、テレビを見ていた。夕方5時45分から。そうしたら、ワールド・トレード・センターにボーンと飛行機が突っ込む画像が見えて。それで、僕は見た途端にアルカイダだと思った。だって、タリバンがかくまっているでしょう。だから、あれを見た途端にアルカイダに違いないと思ったから、これはいかんと思いました。

翌朝、家内と娘は送り出しましたけど。

—— 日本に。

沼田 いやいや。

—— じゃなくて、旅行に行ったんですか。

—— えっ、旅行にですか。

沼田 こんな話、いい？ 何かそれちゃって。

それはなぜかという、僕と家内と娘でペシャワールまで行くと、アフリディ族の族長の息子が手下を連れて我々を護衛してくれることになっていた。部族地域 (tribal area) にあるカイバル峠はなぜ入れないかという、アフリディ族の人たちがあそこに住んでいて、よそ者を入れないわけでしょう。外国人が行くには1週間前か何かにパスをとらなきゃいけないことになっています。族長の息子とその手下がついてくるということは、ミニバスにカラシニコフを持った人が12人ぐらい乗ってついてくるということでした。それで、娘もびっくりしたようでした。

—— でも、大使としては安心だと思っていました？

沼田 娘は、「お父さん、こんな仕事しているの？」って思ったようです。そうしたら、カイバル峠の道ではアフガニスタン側からどんどんバスとかトラックで人が入って来たそうです。アフガン難民になる人たちがどんどん入ってきていたという。

9月11日が火曜日で、そこから数日間、アメリカ大使と連絡をとったりイギリス大使と連絡をとったり、どの国が何をやろうとしているかという話は、そこにいろいろ書きましたよね。その間に日本人も24人亡くなったということがわかりました。アメリカはもちろんパキスタンに対してデマルシュをしているし、イギリスもデマルシュをしている。僕は日本からもやるべきだと13日の木曜日に本省に請訓しました。なぜかという、日本人も亡くなっているし、パキスタンがどう反応するかということは日パ関係に非常に大きな影響があるということを申し入れるべきだと請訓したわけです。

それを申し入れてよろしいという返事が来たのが14日金曜日でした。すぐ翌日15日のアポイントメントを外務大臣に申し込み、アポイントメントは一旦とれました。土曜日になると、ムシャラフ大統領が閣僚と軍の幹部を全部呼んで大きな会議をやっているの、外務大臣はお会いできません、外務次官がお会いしますという返事が来て、夕方の4時だったか5時にイナムル・ハク外務次官と会いました。そのときに僕が日本も関心を持たざるを得ませんという話をしたら、外務次官が「We realize that we have become a frontline state again」と言いました。今、ムシャラフ大統領のところでみんな朝から議論していて結論が出たところで、「We realize that we have become a frontline state

again」。だから、アメリカとの間で intelligence cooperation と logistic support and border vigilance を主要要素とする協力の枠組みをつくることに決めたという話でした。

—— 1点ちょっとすみません、関連でお伺いしていいですか。11日から今のところまでの間ですが、アメリカ大使館とイギリス大使館とやりとりされた。この間パキスタンとアメリカの間で相当激しいやりとりが多分あったと。

沼田 それはまさに言おうと思っていました。アーミテージ国務副長官が「We will bomb you back to the stone age」と言ったという話。

—— それは本当に、やはり言ったんですか。

沼田 さっき調べたんですが、2006年6月22日のイギリスの『Guardian』によると、ムシャラフの発言としてアーミテージがそう言ったと報じられていますね。あのときにアーミテージがISIのマームド・アーメド長官に対して「Be prepared to be bombed. Be prepared to go back to the stone age」と言ったということをムシャラフが言ったことになっていますね。アーミテージはたしかそんなことは言っていないと否定しているようですが、僕はワシントン時代にアーミテージを知っていましたから、彼なら言いそうだなとは思いました。いずれにしてもムシャラフは、パキスタンの生死を決める判断をしたわけです。

当時僕がコンタクトをとっていたのはアメリカのウェンディー・チェンバリン(Wendy Chamberlin)大使。彼女は僕のメモで見るとまだ着任早々で、彼女に僕は9月18日に会っていますね。その前には電話で話していたかな。それから、ヒラリー・シノット(Hilary Synnott)とも会っている。この人も後で出てきますけれども、イギリス大使。それからヤクブ・カーンさんに9月20日に会っていますね。それから、タラト・マスード(Talat Masood) ってご存知ですか？

—— 元国防省。

沼田 元国防調達次官。彼には9月17日に会っていますね。

9月15日にパキスタンはアメリカなどと協力するとの決定がありましたが、我々の最大の関心事はパキスタンの治安状況がどうなるかということでした。これをどう判断するかは難しかったです。軍の人は教えてくれないし。パキスタンに行って苦労したのは、軍事政権とつき合うときに軍事関係がないと非常に難しいです。防衛駐在官はもちろん最大限の努力はするけれども、その効果は軍事・防衛協力関係がどれだけ緊密であるかによって違ってくるでしょう。やはり隔靴搔痒感があります。その中で何人かの人を頼りにしなければいけない。そのときに頼りにしたのがヤクブ・カーンさんであり、タラト・マスードであり、あとバングラデシュの大使アリム・ウル・ハク(Alim ul Haque)という人。なぜバングラの大使かというと、バングラの大使はパキスタン外務省にバングラデシュ独立前の1970年に入った人で、同期生がパキスタン政府に何人もいるわけです。だから、よくわかっている。

我々は東京との関係で治安状況がどうなっているかということを報告しなければいけないでしょう。そのときにヤクブ・カーンさんが僕に話したのが、アフガニスタンとパキスタンは軍事的に言えばSingle zone of operation だと。アフガニスタンの中で軍事的にいろいろ起きることとパキスタンの中の政治社会情勢というのは全部密接に関連している。だから、これはパキスタンにとってもものすごい

大きな影響のある問題で、そういう状況でムシャラフが軍人であることは有利に作用するだろう、彼はちゃんとした対応ができるだろう。コマンドとしてどうやるかということをお教えしたけど、という話をしていたのは、このときだったような気がします。また、ムシャラフは軍人であるがゆえに **life and death** のことを躊躇しないで決めることができるとも言われました。また、ヤクブ・カーンさんは、戦争がどういうふうに関わり展開していくか、こんなことが起きるでしょうという話もしてくれて、とにかくタリバンのコミュニケーション網が破壊されるでしょうと言われた。そのとおりになりました。

その次に、それでは治安状況というのはどうなるか。この判断が難しいのだけれども、バングラの大使の言っていることを聞いて、「そういうものか」と思いました。まず騒乱が起きると第一線でやらないといけないのは警察。警察はあまり強くないから。第二線はレンジャー。それでも手に負えなくなると、ここから生々しい話になるけれども、死者が 1000 の単位を超えてくると軍隊が出てくる。ちなみに 1970、1971 年は東パキスタンでは 1 万 5000 人～3 万人の死者が出たと言われているというわけ。この話を聞いてびっくりしました。日本でこんなこと言ったら大変ですね。やはり南アジアの人の生命観は違うのかなと思いました。

—— そのとき、バングラ大使の読みではどこまで至ると思っていたんですか。1000 を超えて軍隊が出てくるところまで至ると。

沼田 いや、そうなるかならないかはわからないということでした。実際にはそうなりませんでしたね。でも、話の単位がね。それまで連日デモがあって何人死んだ、1 人死んだ 2 人死んだなんていうのがどんどん来るわけでしょう。日本の常識だとそれだけで大変なことになっちゃうでしょう。パキスタンではそうではないということがわかって、「ああ、そうなのか」と思いました。

それで、10 月 7 日にアメリカなどの軍事行動が始まると、我々とつき合っているパキスタンの金持ちとかエスタブリッシュメントの人たちがつらつら不満を述べていました。というのは、彼らは今までのうのうとしていたけれど、国内がおかしくなると身辺が危うくなる。「外交官の人は外に逃げられるからいいよね」と言われました。そのときに、パキスタンはアフガン戦争のときに一生懸命やったのに、その後アメリカに使い捨てにされたとか、そういう不満を大分聞きました。

それから、そのころにハイダー (Lt. General Moinuddin Haider) 内務大臣にも会った。彼は治安関係を見ていたので。彼が言っていたのは、イスラム自体をどれだけ敵にすることによって民衆の反応はすごく違いうる。あまりアメリカがやると相撲取りが赤ん坊をやっつけているように思われちゃうと言っていたな。相撲レスラーがベビーを殴っているような感じで受け取られちゃうかもしれないと言っていた。

でも、11 月 13 日までかな。タリバンが崩壊したのは 11 月 13 日で、パキスタンのタリバン化の危険はひとまず避けられた。しかし、そのときにまたヤクブ・カーンさんが言っていたのは、イスラム過激派の問題は必ずカシミールに影響してくるし、難民がどんどん入ってきて、パキスタン国内に滞留してしまう。それから、アフガニスタンの将来はどうなるかというか、アフガニスタンは軍閥がはびこっている。彼は「mini-Shogun syndrome」と言っていましたね、僕のメモを見ると。その軍閥が割拠していてね、なかなか一筋縄ではいかない万華鏡のような状況になるだろう。その中ではどうしたらいいかという、ロヤジルガをやるほかないでしょうということでした。いずれにしても、North West Frontier Province が非常に影響を受けて、「NWFP will not be the same」と言っておられた。

—— 1 つ、その過程でお伺いさせてください。米軍事行動が始まってタリバン政権が倒れてという、この過程で感じられたパキスタン国内のアフガンに対するシンパシーみたいなものはいかがでし

たか。それは政府の人たちとか、いろいろクラスターによって違うかもしれないですけど、その辺はどう感じられましたか。

沼田 地域によっては違いがあったと思います。たとえばさっきアフリディと言ったでしょう。アフリディ族というのは、カイバル峠の両側にいるわけ。国境があってないようなもの。だから、そういう意味でのシンパシーというのは非常にあったのだろけれども、たとえばシンド州の南の方とか、アフリディの人もカラチには大分いるけど、地域によって随分違うと思いました。

—— それでは、部族的なシンパシーを除けば特段、同じイスラム教徒であるとかそういう感じのシンパシーはそこまで大きくはなかった。

沼田 それはイスラムをどれだけ信じているかによるでしょうね。狂信的な人はシンパシーを感じているだろうから。でも、これでパキスタンまで巻き込まれたらえらい迷惑だよなという感じがすごくあったと思う。

■ 同時多発テロ後の邦人保護

沼田 次は在留邦人の話なのですが、パキスタンで何か起きたときにどうしたらいいかという話は、我々もそれが最大の問題で、2000年12月に Controlled Risks という会社の人が来て安全管理セミナーをやりました。どういうことに気をつけたらいいか、人の集まっているところにあまり行くのはやめようとかそういう話をしていました。

—— どの会社ですか。

沼田 Controlled Risks というのはイギリスの有名な会社。

それで、9月16日に危険度4「家族退避勧告」というのを出しました。国境から100km以内は危険度5で退避勧告、そのほかの地域は「家族退避勧告」というのを出した。実は、私の話に戻るけれども、娘は9月16日にもう日本に帰しました。

—— そうですね。何日間、結局旅行していらしたんですか。

沼田 4日ぐらいね。

—— そうですね。

沼田 家族退避勧告を出したから、9月18日の火曜日には家内が館員の家族を引率して帰りました。館員の家族ってみんな若い人だったから、子供たちも小学生とか以下とか、それはそれで結構大変でした。

—— どれくらいの邦人が当時いたのですか。

沼田 そのときに、まず退避勧告が出て帰ってもらうということがありましたが、当時は館員が 24 人。邦人は我々の所管区域で永住者を含めて 165 人となっているな。でも、カラチのほうが多いのですよ。大変だったのは、ここで緊急避難計画をつくるわけ。状況が悪くなったらどうするかということを考えなければいけないでしょう。緊急避難計画を 9 月 26 日につくった。

—— 自衛隊機利用ですか。

沼田 その可能性も考えました。ただ、このときは、バスを仕立てて帰ると言っている人を送るという想定で、9 月 26 日の時点で誰が何をやるという計画を全部つくりました。

—— ここはどの辺ですか。

—— インド東方。ラホールに抜けられる。

沼田 ラホールの近くにワガ (Waga) という国境の町があります。インド側の衛兵交代のときには、衛兵が足を天まで蹴り上げて行進します。

—— アムリツア、あっちのほう。

沼田 アムリツアがインド側。ラホールから 20 km で、ワガがある。それを越えるとアムリツア。このときは平林大使も協力していただいて、向こう側での受け入れ体制を在インド大使館で考えていました。

—— こういうのは、もともとの原型になるような計画というのはあったんですか。

沼田 あまりないですね。

—— じゃ、もう一からつくらないといけない。

沼田 全くなかったわけじゃないと思うけど、あまりなかった。

—— パキスタンの日本大使館としてこの手のものをつくったのはこれが初めてだったんですか。それとも、ソ連、アフガンの対ソ戦の際にもあったのでしょうか。

沼田 どうか。だけど、あまりありませんでしたね。

—— 借り上げバスというのは現地で借りるのですか。

沼田 そうです。ラホールまで 4 時間かかって行って。

—— インド側はどんな反応でしたか。

沼田 インドは別にそれはなかったと思います。ニューデリーの大使館は快く準備していただいたようだから。

—— カラチの方はどういう計画だったのですか。

沼田 カラチは、あれはどういうふうに抜け出すことになっていたかな。海かな。だって、イランの方に抜けるのも大変ですよ。

—— そうですね。そうするとインドのどこかの港に行った。

—— この計画は本省にももちろん。

沼田 もちろん、そのためにつくるわけ。

—— 一応もう、あなた運転してねというところまで詰めていくんですかね。どのバス会社か、そういうことも決めて。

沼田 バス会社は考えていましたね。大使館集合場所での総括、ゲート案内、荷物は誰、書類審査は誰、バス先導者、医療を担当する医務官というようなことまで全部考えて。

—— 大体何名という予定でいらしたんですか。

沼田 その意向確認をしていたわけです。いざこれをやらなきゃいけないときに。大使館の管轄地域の永住者 165 人で、残留を希望する人が一番多かった。それはなぜかという、パキスタン人と結婚した日本人の女性とその子供が一番多いから。決めていないという人が次で、出ていくという人は 3 分の 1 もいなかったという記憶ですけどね。そのほかに短期旅行者。大使館の管轄というのは、イスラマバード、それからパンジャブ州及び NWFP (North West Frontier Province)、それから Hunza とかあっちのほう。

—— カシミールのほうですね。

沼田 そう。それで、短期旅行者が 42 人、そのほか 50 人となっているな。館員で残っていたのが 24 人ですから。実は、この意向確認というのが大変でした。だって、電話が簡単に通じるわけじゃないでしょう。そうすると、たとえばラホールは領事館、領事がいらないから。でも名誉総領事がいました。ホンダと提携したアトラスという会社の社長の人。そのアトラスの会社の車で在留邦人のところを回って意向確認してもらいました。

—— ちょっと話が飛んじゃいますけど、この種の計画を立てて引き揚げの準備をしていたというのは、ほかの国の大使館も一様に同じぐらいの時期に。

沼田 ただ、それは程度の違いがあります。このときはデータが残っていない。2002 年に印パが怪しくなったときにほかの国がどうだったのかというのは後で出てくるけれども、たとえばアメリカとか

イギリスとかカナダは二重国籍がすごくたくさんいる。これは結構大変な問題のようです。彼らの危険度指定というのはかなり個人の裁量、それぞれのナショナル（国籍保有者）の裁量に任せるところがある。できたら出国を勧告しますとか何とか、幅を持たせているようです。そうじゃないと二重国籍の人なんて扱いようがなくなっちゃうということはあったけれども、やはりほかの大使館も大体同じようなことをしていたと思います。

たとえば、意向確認で僕がペシャワール会のドクター中村哲さんに電話で話をしました。彼は一生懸命パキスタン、アフガニスタンの中で活躍しているわけでしょう。僕から命あつてのことですからお願いして、仕方なく一旦帰国してくれました。問題だったのは日本人学校。イスラマバードの日本人学校は非常にいい学校で、中学生が4人ぐらい、小学生が20人ぐらいかな。20数人の生徒で先生が7人いますから、理想的な教育でした。すごくいい学校でした。そこで楽しくやっていたら、途中で帰らなきゃいけなくなりました。それから、退避勧告じゃないけれども、要するに家族を帰さないということと、ほかの方はコマーシャルフライトがアベイラブルのうちになるべく帰ってほしいということを言いました、どうなるかわからないから。皆さん、かなりの人は帰国されました。

で、何が起きるか。たとえば館員家族についていうと、ぽんと帰って実家に転がり込むとか、奥さんたちは自分の実家に転がり込むか、旦那の実家に行くか。そうじゃないと桜上水の外務省の寮を借りるとか。桜上水の寮に入ったら「あなたいつ出てくれるんですか」とすぐ聞かれたとかね。そういうのを家内がひとりひとり電話してフォローしていました。そういうことが生じる。

—— そこまでケアするんですね。

沼田 そうですね。それから、企業の方は一旦帰ったら窓際族になっちゃうわけです。日本人学校についていえば、日本人学校の子供たちはお母さんと一緒に、あるいは親と一緒に帰っても、じゃどうするかといえば、それぞれの地域の学校に体験入学みたいな形になるのも中途半端でしょう。だから、日本人学校の先生も生徒たちも早く帰ってきたいという声が相当出てきて。幸いに軍事行動が続いたのが1カ月かな。クリスマスまでにはみんな戻ってきましたけどね。

あと問題が生じたのは先ほどお話ししたコハットトンネル。これは大成建設が一生懸命つくって。これは帰りたくても工事放棄ができない——工事停止命令というのをパキスタン側が出さないわけでしょう。だってパキスタン政府は安全だと思っているから。だから、本当にどうしようもなくなったら帰るという話だったけど、結局たしか彼らは残りました。

他方、プレスね。9・11が起きるまでは『毎日新聞』1社だけ特派員がいた、春日孝之さん。ところが9・11が起きたら突如140人ぐらい日本のプレスが来た、本当（笑声）。

—— そんなに来たんですね。

沼田 わあっと来ました。マリオットホテルって知っているでしょう。

—— はい。

沼田 マリオットホテルの屋上から画を撮るというので、みんなどういうわけかサファリスーツみたいなのを着てね。当時のテレビなんかを見てみると、どんどん報道していたでしょう。

さて、それで、時間たっちゃうけどいいですか、この話続けて。家族が帰っちゃって、館員が24人、どの家も男だけ残りました。使用人はいるけど。そうして我々が一番つらかったのは、いつ終わるか

わからないわけ、これが。ある館員が言っていたけれども、これは距離の決まっていないマラソンを走っているようなものだ。

本当に状況が悪くなったらどうするかという話は、自衛隊機が出せるか、あるいは陸路ラホールから抜けるかというような話をしている。11月13日にタリバンが崩壊したので危険度を引き下げて、国境から50km以内が危険度4。それ以外が3。イスラマバード、ラワルピンディ、ラホールが2に引き下げられました。

あと詳しくは言いませんけど、柳田大元という自称ジャーナリストがタリバンにつかまっちゃって、早く解放しろという交渉を僕がザイーフ大使とやっていました。

—— ああ、そうだったんですか。

沼田 これも *slow motion ping-pong* のように話がなかなか進まず、全然がちが明かない。結局この人はタリバンが崩壊したということに出てきましたけどね。たまたま日本人の記者団がジャララバードに取材に行っていて、そこで軍閥の家に保護されていた柳田氏に出会ったとのことで、朝日の記者の人がトルファン国境まで連れてきてくれて、私と中野勝一参事官と大野政美領事がトルファンまで行って引き取って帰ってきた。

それから、政治家が途中たくさん来られました。杉浦正健外務副大臣が9月26日に来られた。連立与党の3幹事長（山崎拓、冬柴鉄三、二階俊博）が11月2日、3日、田中眞紀子外務大臣が11月22日～27日。その後年末まで約50人、そこにリストが全部出ているけど、これが大変だった。本当に大変だった。

—— この軍事行動中のパキスタンの町の中の生活というのはどういう感じでしたか。

沼田 別にそれほど荒れているわけでもなかったです。局所的にデモがありましたけど。ただ、我々にとって難しいのは、緊張感を保たなきゃいけないが、*business as usual* にやらなければいけないこと。これが結構心理的に難しかったですね。

—— 物のパニック買いがあったりとか、そういうことは別になかった？

沼田 それは別にない。

—— 大使をはじめとして、現地の大使館側の空気と日本の本省側の緊張感というのはどうだったのですか。温度差というのはあったのでしょうか。

沼田 温度差は別の意味でありました。たとえば連立与党3幹事長というのは山崎拓さんと冬柴鉄三さんと二階俊博さん。この元気のいい3人の方が来られましてね、結構大変でした。何が大変かというと、特措法の話ですよ。自衛隊を出すという話。3幹事長のパキスタン要人との会談録はインターネットにありますから、探せば出てくるけど。

要するに自衛隊を派遣して難民の救助とか病院での活動とか、そういうのをどんどんやるべきだということで来られたでしょう。ムシャラフ大統領なんかに会って話をして、非常に意気込んでおられたけれども、我々にとって大変なことがいくつかあってね。自衛隊の人がいきなり来たら誰が面倒みるのという話。それから、本当に自衛隊の人が来て制服を着て活動するとなると、*North West*

Frontier Province のカイバル峠にすぐ近いようなところで、そういう目立つ行動をして大丈夫なのかというのが我々にとってものすごく心配なわけですよ。

—— 途中ですみません。やはりそこはかなりの反発を生むだろうと思われました？

沼田 思う、もちろん。

—— それは日本だからというよりも、やはりあの地域だからということですよ。

沼田 そうそう。日本人ならまだアメリカ人よりはいいかもしれないけれど、外国人を排除しているあの地域に日本人が行くこと自体とても目立ちますから。そういうことを我々はすごく心配しました。

実際はそこまでいなくて済みましたけれども、この与党の 3 幹事長もいろいろな人の話を聞いて、たとえばこのウェブサイトで見ただければわかるけれども、UNHCR の代表と話していますね、このときに。これはたとえば、彼らは野戦病院みたいなところでタリバンに攻撃される可能性がありますと言っているわけです。西欧に比べて日本人はそれほど問題はないかもしれないけど、自衛隊の制服を着て活動することに懸念があるとすればユニフォームも軽装のほうがいいとかね。与党 3 幹事長はあまりそういうことは考えておられないようだから、とっても心配でした。

—— 山崎拓は防衛族でその点詳しいように思うんですけども。

沼田 だからといって、何がセンシティブかというところまで詳しくあったかどうかわからない。その他にもいろいろな経験が、イラクとか、カンボジアであったけど、カンボジアとも違いますよね、このイスラムの難民の地域というのは。

—— アメリカが入っていて、日本として「show the flag」ということはすごく言われましたね、あのとき。

沼田 それは、僕も湾岸戦争のころはそう思っていましたけどね。実際にはなかなか大変ですよ、それ。

—— 最終的にインド洋の給油に落ち着くわけですけども、それまでにはかなりいろいろな迷走があったという感じですか。

沼田 ありました。だから、この話が長くなっちゃう。でも、杉浦副大臣が来られて制裁を解除しました。制裁を解除していろいろな援助を出した。たとえば C-130 が 10 月 9 日にイスラマバードに来て、テント 500 張等の救援物資を運んできたので、10 月 25 日に引き渡し式をした。12 月 22 日に難民救援物資を運んだ掃海艦「うらが」、護衛艦「さわぎり」がカラチに入港してテントなどを UNHCR へ渡したとか、そういうことがあります。

—— どっと難民がパキスタン側に入ってきているという状況ですが、それまでもアフガンからの難民はいたんですか。

沼田 いました。80年代のときから大分来ているから。パキスタンはお荷物をずっと抱えているのにみんな面倒見てくれないと思っていた。

—— やはりここでどっとふえたと。

沼田 そう。それで、タリバン崩壊後は12月5日のボン合意というのがあって、暫定政権樹立、緊急ロヤジルガ招集、ISAF（International Security Assistance Force）の設立、UNAMA（United Nations Assistance Mission to Afghanistan）の設立が決定された——UNSMA（United Nations Special Mission to Afghanistan）の名前が変わっただけです。

日本のNGO関係者も大分来ました。議員も来たしNGO関係者も来たけれども、NGO関係者はあまり慣れていないわけです。だから、いくつか問題が生じたりしました。

12月22日にカルザイ（Hamid Karzai）暫定政権発足式がカブールであって、植竹繁雄外務副大臣がバルト三国か何かを訪問しておられたのが、急遽来られました。僕はカブールまで植竹副大臣と一緒に国連機で日帰り往復しました。

その後、我々が忙しかったのは、在アフガニスタン大使館の開設でした。さっき申し上げたように、80年代のアフガン戦争の後、治安がおかしくなってもう大使館を撤去していたでしょう。それで、2002年1月6日以降は常時2名、3週間ローテーションで大使館開設の準備。2名というのは我々の館員だけでなく、ほかのいろいろな公館からも人が飛んでいっていて、駒野欽一大使が1月15日に発令になって、すぐ赴任しました。緒方貞子さんがアフガニスタン復興支援閣僚級会合の代表になるので、1月9日～12日までアフガニスタンを訪問されて、僕はアフガニスタンに初めてついてきました。失礼、12月22日に半日行って、それから緒方さんについてもう1回行きました。

—— このころもコマーシャルフライトはあったんですか。

沼田 国連機しかない。

—— というのは、実質誰が運営していたんですか。

沼田 国連ですよ。

—— 米軍が多かったですか。そういうわけではない？

沼田 それで覚えているのは、植竹副大臣と12月22日に行ったときに感じたけれども、バگرام空港に着陸するでしょう。それから、カルザイ政権の発足式というのはカブールの町の中であるわけで、その式場までバスで行きましたが、道の片方の端に青い小石、もう一方の側に赤い小石がびっしり置いてあった。これは何だかわかりますか？

—— 地雷撤去の。

沼田 そう。撤去というか、青い方は撤去した後。赤い方は撤去してない。だから、もしバスがその石を乗り越えたらと思うとすごく緊張する。それから、バگرام空港に降り立ったときに、1945年8月15日の日本はこうだったのかなと思うほどの破壊状況でした。

—— 1 点お伺いしてもよろしいですか。9・11 後のアメリカの侵攻があつて、タリバン政権が倒れてカルザイ政権が発足する。このプロセスの中で、パキスタン側とも大分接触というかやりとりされたと思うのですが、実際にはパキスタンはああやっっているながらタリバンと縁を切っていなかったわけですよね。そのあたりで何か感じられたところがありましたか。

沼田 何となくありますね。ISI が何をやっていたかというのがよくわからなかったですね。でも、9・11 が起きたところで ISI のマームド・アーメド長官はクビになりましね。アフガニスタン国内の紛争について「We will engage, not dictate」とか言っていた彼です。その後、僕はその次の ISI 長官にずっと後に会いましたが、イーサン？

—— そうです、イーサン・ウルハク（Ehsan ul-Haq）ですね。

沼田 イーサンは何か言っていたかな、ちょっと忘れちゃった。何かよくわからなかった。要するにアフガニスタンについてパキスタンが何をやろうとしているのかというのは、基本的に軍が dictate しているから非常に不透明でした。外務省にアフガン担当局長がいましたけれども、彼の話聞いてもいまちよくわからなかった。

—— パキスタンの中央政府と北のほうはトライブが違ふとおっしゃいましたが、そういう感じでもないのですか。

沼田 パキスタン軍の中核にいるのはパンジャブの人が多いという話がありますね。ただ、僕が行ったときにアジズ・カーン（Muhammad Aziz Khan）という人が統参本部の議長でしたが、彼はカシミールの人でした。でも、North West Frontier Province の人も軍人にはいるから。やっとな 9・11 が終わりましたね。何か話題が多くて。

さっきちょっと言いましたが、日本はこの復興プロセスになって役割ができたという感じね。緒方さんの存在も大きいけれども。それまでは横から茶々入れようとしてもなかなか入れられないという感じでした。

—— 入れようとはしたんですか。

沼田 だから、さっきの。

—— 自衛隊のという。

沼田 いや、タリバンと北部同盟の人と一緒に招いて会議を東京でやろうとかね。

—— ああ、そういう意味ですか。

沼田 その程度しかできなかったのかなという感じです。

—— 実際に 9・11 が起きてから一息つくのが 11 月の。

沼田 20 何日でしょう。

—— それまでの間はもう完全に傍観者と。

沼田 まあ、それで慌てて大使館をつくったわけですよ。駒野大使は本当に大変だったろうと思います。

他の国がどうしていたかという、アメリカにしてもイギリスにしてもカナダにしても、NGO がアフガニスタンの国内に大分行っていました。だから、彼らを通じての情報というのはかなり持っていた。こっちはそれがないというのもつらかったですね。

—— ペシャワール会とか、そういうところからは入ってきましたか。

沼田 でもペシャワール会を通じてアフガニスタンの国内情勢というのはあまり入ってきませんでした。彼らも人数が限られているし。

それで、河野太郎、塩崎恭久、下地幹郎の 3 人の議員がジャパン・プラットフォームかな、NGO の人と一緒にきました。それで、来てみたら大使館はアフガニスタンの国内状況を全然把握していない、けしからんとか言われて苦労しました。

■ 印パ関係とムシャラフ訪日

沼田 9・11 が終わって、このあたりからしばらく静かだったのだけれども、水面下でいろいろありました。9・11 が終わってアフガニスタンでタリバンと一緒にやっていたテロリストみたいな人がパキスタンに入ってきました。そのことから、カシミールとも連動するということが起きて、インドがその点を取り上げてけしからぬということを言って、それでインドの議会の攻撃したのはいつだっけ。

—— 州議会のことを言っているのですよね。2001 年 10 月です。

沼田 そうでしょう。それでムシャラフ演説。2002 年 1 月 12 日に——ちょっと待って、印パの方をやらなきゃいけないかな。アグラの首脳会談の話ですね。

先にアフガンの話をしましたけれども、その前に 2001 年 7 月のアグラの首脳会談というのがありましたね。2001 年 7 月、これはカシミールの問題になるのですが、カシミールの問題について僕が今覚えているのは、またヤクブ・カーンさん。彼の写真がどこかにあるのですが、まあインドのどこかの王族出身ですよ。すごい迫力。これが彼から最後に来たクリスマスカード。何も書いてない、これだけが来ていた。3 年ぐらい前に 95 歳で亡くなりましたけど、本当にすごい人でした。

僕がジュネーブの軍縮代表部にいたときに新聞記者の人から聞きました。あのころ、いわゆるアフガン問題のジュネーブ交渉をヤクブ・カーンさんが外務大臣でやっておられたでしょう。日本人の記者が記者会見に行くと、パキスタンの外務大臣は英語でもフランス語でもロシア語でもドイツ語でも立石に水で（笑声）。本当にすごかった。教養のある軍人というものはすごいと言っていました。

—— 伝説の外務大臣ですよ。

沼田 やはり大変識見に富んだ方だね。それでヤクブ・カーンさんが僕に言っていたのは、カシミール問題というのはパキスタン人の精神構造に深く根差している。パキスタン人に赤ん坊のころから耳元にアザーンのようにささやかれるメッセージがある。アザーンというのはモスクから拡声器で伝えるお祈り。そのメッセージというのは、Pan-Islamism はパキスタンの国家としての核心であり、国境を越えた広がりを持つということだ。イスラムの世界というのはパキスタンだけに限らないということをずっと子供のときから教えられている。だけど、これはネーションステートとしてのパキスタンとは矛盾する。その矛盾をずっと抱えているということを言っておられました。

なお、いわゆる LOC (Line of Control) というのは全部で 700 kmあるのかな。本当に険しい山の中、深い森の中を通っているようです。

それで 2001 年 7 月 15 日のアグラ首脳会談。これはある意味では 9・11 が終わってムシャラフにとっての 1 つの、それからインド首相のヴァジパイ (Atal Bihari Vajpayee) にとっても 1 つのチャンスだったと思います。右派のヴァジパイと軍事政権のムシャラフだから、うまくいけばうまくいくと、1999 年 2 月のラホール宣言の糸をつなぐということで期待された。その間にトラック II のいろいろな話し合いというのがあったでしょう。トラック II の話し合いというのはタラト・マスードさんもたしか絡んでいたし、もう 1 人ニヤーズ・ナイク (Niaz Naik) さんという元外務次官も。

—— バックチャネルでずっと動いていた人ですね。

沼田 そうそう、僕はニヤーズ・ナイクさんも親しかったけど、タラト・マスードさんも親しかった。

それで、アグラ首脳会談で共同声明みたいなものを文面で一旦合意したようです。新聞にも出ていたけれども。これで合意ができたと思ったら、それをインド側が部内協議のため持って帰ったらインドの閣内で却下されてしまい、その後はインド側から返事がないまま決裂してしまったという話です。何が問題だったかということ、要するに「カシミール問題の進展は印パ関係の正常化に資する」ということをどう表現するかということで、これは僕がイナムル・ハク次官から聞いた表現では、ここにありますけど、サッター外務大臣とインドの外務大臣が合意した文言は、「Progress toward the settlement of Jammu and Kashmir would be conducive toward the normalization and will further the establishment of a cooperative relationship in a mutually reinforcing manner」。「mutually reinforcing manner」と言っているのだから、これはパキスタン側がカシミール問題の解決を前提条件とはしていないことを意味する。これで何とかいくと思ったらだめだったという説明をしていましたね。当時、インドとパキスタンの新聞でいろいろ出ましたよね。

—— ちょっとフォローしてみます。

沼田 残念でしたということで、一応対話のストラクチャーというのは構築したけれども、このときにサッター外務大臣が僕に言っていたのは、ギリシャ神話のシーシュポス (Sisyphus) が山の坂道で岩を押し上げようとするけれども、どうしても落ちてきちゃうというのがあるでしょう。ああいう感じがしたとサッター外務大臣が言っていた。だから、期待は高まったけれども、missed opportunity だった。window of opportunity というのはあそこで閉じちゃったということですね。

その間にパキスタンの内政の問題が入ってきます。これは 9・11 の前だけれども。パキスタンの内政の問題について言うと、僕が思うのは、欧米的な意味での political leaders というか political class が存在していないということです。インドのような中産階級もいない。誰がいるかというと、feudal

がいて **tribal** がいる。封建地主が政治を私物化している。腐敗が起きると軍が入ってくる。

パキスタンの民政復帰とよく言われましたが、僕は本当に復帰なのかしらと思った。本当に民政だったのかな、パキスタンの **parliamentary democracy** というのは。だって、議員は誰かという地主だということでは、あまり **democracy** ではないのではないかという感じがしていました。そこで問題になるのが、内政が混乱すると軍隊が出て来て、それを仕切ろうとするということです。「**impartial arbiter**」だと言うけれども、要するにレフリー、アンパイアが試合に入って戦いはじめるということが問題なのではないかというのがバックグラウンドにあります。その中で 2000 年 12 月 31 日に地方選挙をやって、草の根民主主義というか、地方レベルで地区の首長 (**nazim**) とか何かいうのをいろいろ選びました。

2001 年 6 月 20 日には突然ムシャラフの大統領就任式がありました。その就任式の日には僕も突如呼ばれました。数週間後にアグラでの印パ首脳会談を控えていたので、その前にそれまでの「行政長官」(**Chief Executive**) ではなくて大統領になっておくという考慮もあったかもしれない。

そこで **Provisional Constitutional Order** というのができて、このときに何を意味しているのかなと思いました。行政長官顧問のピルザダ (**Sharifuddin Pirzada**) という、リーガル・アドバイザーみたいな人で憲法関係をずっとやっていた人がいて、彼が僕に言っていたのは、いずれやろうとしていることは、まず大統領に議会解散権、3 軍の長及び統合参謀本部議長の任免権、首相及び内閣の解任権を与える。そして、**National Security Council** をつくる。**National Security Council** のメンバーは、大統領と首相と 4 つの **province** の首相及び 3 軍の指導者とする。これでチェック・アンド・バランス。軍の役割が非常に大きいですが、そこが問題でした。それを実行したのはもっと後になりました。

というようなことがあって、それで 9・11 が起きて。

—— インド国会があつて。

沼田 インド国会襲撃事件になりますね。

—— その前に、カシミールの州議会テロが。

沼田 インド国会襲撃事件というのは 2001 年 12 月 13 日でしょう。

—— ここも入っていますね、スリナガルのカシミール州議会、10 月 1 日ですね。

沼田 そうそう。その後の話として、2001 年 12 月 13 日にインド国会襲撃事件というのがあって、その反応としての印パの応酬、僕はこれを「**Coercive Diplomacy vs. Cross-border Terrorism**」と言っていました。

インド国会襲撃事件でインド側が陸軍部隊を大動員した。その後パキスタン側がそれに反応して、2002 年春までに印パ合わせて 100 万人が集結したでしょう。そういう状況のもとで、ムシャラフが 2002 年 1 月 12 日に演説をした。

その中身というのは、カシミールにおけるものも含め、いかなるテロリズムにも反対する。それから、**Lashkar-e-Taiba**、それと **Jaish-e-Mohammed** の存続を禁止するとして 2000 人逮捕した。モスクでの政治活動とマドラッサの取り締まりをやった。これに対してインドの方は越境テロを停止しろと、それからテロ容疑者 20 人の引き渡しを要求した。これで大分緊張が高まったところで、小泉総

理がムシャラフとヴァジパイに電話をしたというのも入ってきますね。

その間にパキスタンの国内では、2月1日、ダニエル・パール（Daniel Pearl）が首を切られた。『Wall Street Journal』の記者で、カラチで誘拐されて首を切られた。それから、2002年3月17日に、イスラマバード・キリスト教教会で自爆テロがあった。このときにわが大使館の館員のフィリピン出身の奥さんが負傷しました。彼女が負傷した後しばらく私の家内がいろいろ相談相手をしていました。そのときにスリランカの大使が、自分も負傷して家族も負傷したけれども、我々の館員の奥さんを病院に連れていってくれました。そのときに、そのちょっと後にメモリアルサービスがあつて、僕が外交団長とそのスリランカの大使から頼まれてスピーチをしました。時々そのようなことがあつて、国内はがたがたしていました。

印パの話だけをたどっていくとそういうことですが、この間にムシャラフ大統領は日本を訪問しました。

—— そうですね。実は、この2002年3月のムシャラフ訪日というのを私存じ上げていませんで、このタイミングで来たのかと。

沼田 そうです。ムシャラフの訪日の話していいですか。

ムシャラフの訪日の話はネットで出てきますよ。このときは日パ関係が一番よかったときで、3月から4月にかけて。パキスタン国内ではいろいろありましたけれど、ムシャラフは日本に来たわけです。9・11でムシャラフさんはいい選択をしたということで、彼に対する日本の評価が高まっていました。

日パ外交関係樹立50周年という時期だから、それが訪日の大きな理由でした。パキスタンもちゃんと我々とつき合う相手になったということで、そのときは小泉総理が、ムシャラフのテロと戦う選択を評価、民主化については10月の選挙に選挙監視団を派遣すると述べて、経済協力も一応整理ができました。カシミールについて、ムシャラフから日本にインドへの影響力行使を求め、小泉総理からはアフガニスタンについてボン合意を支持して、アフガン復興を助けますということを言いました。

CTBTについてはこの中に出てくるけれども、さっきと同じような話で、ムシャラフ大統領は、パキスタンが核実験を再開する最初の国とはならず、核に対して抑制的な対応を続ける。核の拡散をしない。CTBT署名に個人的に問題はないと考えるが、国内的コンセンサスが必要であり、その形成に努力したいと言っていました。

そして、パキスタン国内でテロ事件なんかはありましたが、日パ関係もようやく常態に戻ったかなということで、日パ外交関係50周年記念行事を4月28日に行うことを計画しました。このときに日パ議員連盟の先生方が見えました。団長が堀内光雄自民党政調会長。公邸で盛大なレセプションをしました。それと同時に、シンポジウムをやりました。まずレセプションの話からいくと、そこに新聞記事の切り抜きがどこかにあると思います。みんなで歌っているのがあった。

—— 英語の記事ですか。

沼田 英語の記事。これはサッター外務大臣がいるわけですよ。公邸で50周年記念レセプションをやって、そのときに日本人の婦人会と男性も入って混声合唱団を構成し、「Jeeway Pakistan」（ジベ・パキスタン）という歌を歌いました。「Jeeway Pakistan」というのはパキスタンの国歌でないけれども、あまり歌を歌わないパキスタン人に良く知られている歌で、それをみんなで合唱していたら、あの謹厳実直なサッターさんが舞台上が上がってきた。それで堀内さんも一緒に上がって、みんなで

歌いました。思えば、この時が僕のいた中では日パ関係が一番良かったと思った時です。そのときにシンポジウムも開きました。

—— これは何の新聞ですかね。

沼田 これは『Daily News』じゃないかな。シンポジウムは4月29日ですね。このときに Qaid-e-Azam 大学で中心になってくれたのがリファット・フセイン博士 (Dr. Riffat Hussein)。

—— このときはまだ Qaid-e-Azam 大学だったんですね。

沼田 そうそう。彼に頼んでシンポジウムをやって、日本から出ていただいたのが平島茂望明治学院大学教授 (開発経済、農業経済)、それから立教大学の小西正捷教授 (『もっと知りたいパキスタン』 (弘文堂、1987年) の編著者)。

—— パキスタン政治の方ですか。

沼田 文化人類学者です。それから小林俊二元バングラデシュ、パキスタン、インド大使。パキスタン側から 1988 年～93 年に駐日大使を務めたマンスール・アーマド (Mansoor Ahmad) 大使。恐らくあの時までこういう知的なシンポジウムというのはほとんどやってなかったです。僕はそれをやりたかったわけです。結構いろいろなことを議論した。

—— 幅広いですね。

沼田 その後また何かやっているかもしれないけれども、あまり例はなかった。だって修羅場ばかりで (笑声)。そのときにこの議員団の人たちをカイバル峠まで連れていった。

—— 今じゃ考えられないですね。

沼田 ということで「よかった、よかった」と言っていました。

■ 印パ対立と邦人保護

—— それが 2002 年の春ですね。

沼田 2002 年 4 月ですね。そこからすぐまたおかしくなります。

当時ある館員が離任した時に、パキスタンは何か一つのことが終わったと思ったら、すぐ次のことが始まると言っていました。50 周年が終わったと思ったらまた何かが起こる。

—— ここには、5 月、インド側カシミール陸軍基地へのテロ攻撃とあります。

沼田 それから印パの緊張に戻りましょう。

インド国会襲撃事件があつてムシャラフ演説があつて、ダニエル・パールが殺されて、イスラマバード・キリスト教教会自爆テロがあつて。5月にアメリカ大使が交代しました。ウェンディー・チェンバレンという女性大使でしたが、彼女はティーンエイジャーの娘たちがいて、パキスタンが安全でないものだから教育上問題があるので帰りたいと言って帰ったわけです。その後にナンシー・パウエル（Nancy Powell）というやはり女性が来た。南アジアに詳しい、なかなか落ち着いた、いい大使だったと思います。

それで、5月14日にカシミールのジャンム近郊でインドの陸軍キャンプ襲撃事件というのが起きました。その前、1月12日にムシャラフはもうそういうのはないですと言っていたのに襲撃事件が起きたから、またもめたわけです。それで、5月27日にインド側の圧力がどんどん高まって、ムシャラフがまた演説して、LOC越えのテロはありませんと言いました。これは国際社会にとっては意味のあるメッセージでした。このときに杉浦外務副大臣がまた来られました。杉浦外務副大臣が来られたので、僕がいつも相談していたヤクブ・カーンさんとかタラト・マスードとか、あとサルタージ・アジズ（Sartaj Aziz）元外務大臣もいたかな、そういう人たちと杉浦さんの食事をアレンジした。そのときにヤクブ・カーンさんが言っていたのは、このムシャラフの演説というのは英語で言うと「run with the hare and hunt with the hounds」、ウサギと一緒に逃げながら猟犬と狩りをするようなものだ。要するに大変だという表現をした。それはなぜかということ、国際社会に対してきちっとやっていると言わなきゃいけないけれども、あまりそれをやり過ぎると国内から反発が起きる。

話が行ったり来たりしていますが、その前にちょっと話さなきゃいけないことがありました。内政上の問題ですけれども、2002年4月30日、我々が外交関係樹立50周年を祝ったすぐ後に大統領の任期を5年にする国民投票をやりました。それはどういうことかということ、大統領の地位を安定させるということ、軍の地位を国家安全保障に関してきちんとするということだった。投票率70%、賛成98%と言われましたが、不正投票があるに違いないと言われていた。政党勢力が相当反発して、これはムシャラフにはちょっと傷がついてしまった。このときにタラト・マスードさんが僕に、「He let the cat out of the bag too early. The Army as the sole arbiter」と言っていました。軍が何もかも決めるということをや性急に出してしまったが、「The Army should be the umpire and not the player」、軍は審判であってもプレイヤーになるべきではない。いつもこのテーマは出てくるけれども、それをやっちゃって国内ががたがたし始めた。それも背景にあるから、ムシャラフはこの5月17日の演説で、国際社会にはちゃんとやっていますと言いつつも国内世論との関係では反発を毎回招いて、ちょっと危ない状況になってきた。だから、ヤクブ・カーンさんが「run with the hare and hunt with the hounds」と言った。

この間にどんどん印パ間の緊張が高まってきて、6月2日に『News』という英字新聞が主催する円卓会議がありました。ここにいろいろな政党の人とかも来ていました。そこで要するに核をある程度使うことも考えるべしという限定核戦争論が出てきました。僕もそこにいました。あまりひどい議論なので、それは自殺に等しいと言いました。限定戦争なんて言ってもエスカレートしていったらどうなる。全面核戦争になったらみんなが負ける、みんなが敗者になる。そうすると日本のODAにも影響する。パキスタンの国内が不安定になるし、テロが跋扈して、それはインドの利益になるだけではないか。外交努力が是非とも必要であると言いました。5月27日に『New York Times』に出ていた記事で、印パ間の全面核戦争があると死者は1200万、負傷者は700万出ると言っている。我々は広島・長崎の経験からそういうことがあり得ると心配していると言ったら、そこに出席していたタラト・マスードさんとバングラデシュのアリムル・ハク大使が僕に賛成した。それからそのときに、パキスタンの核問題の大きな問題は一般大衆が無知であること、南アジア地域特有の fatalistic resignation があることだと言った人がいる。これは誰だと思いませんか。

—— どなたですか。

沼田 ホードボーイ (Pervez Hoodbhoy) 博士 (物理学者)。

—— リベラルですね。

沼田 そうです。このシンポジウムはいろいろな意見が聞けておもしろかったです。

そこで、僕としては実際問題として核戦争の可能性がどこまであり得るかを考えなければいけなくなりました。そのときに聞いた相手が2人いて、タラト・マスードさんとイギリスのヒラリー・シノット大使。彼らの言っていることを総合すると、インドは一応核戦略のドクトリンを公表していたでしょう、パキスタンはドクトリンを出していない。だから、何が起こるかわからないけれども、このタラト・マスードさんは元軍の幹部で戦略に詳しいし、ヒラリー・シノット大使はデリーの大使館の次席もしていたし、もともと海軍の軍人から外務省に入った人です。だから、戦略関係に詳しい人で、ロンドンの IISS にもいたのかな。この2人の話を総合すると、インドが侵攻してきたら、それに対してパキスタンはカウンターフォースで航空機から戦術核を落とす可能性がある。ただ、strategic depth (戦略的縦深性) が欠けているから、自分の国の部隊に落としちゃうおそれがある。そうするとあまりに損害が大きいから、それをやるよりは最初から全ての核をぶち込んでインドの密集都市を攻撃するおそれがある。そういった恐ろしい話を聞いて僕は電報にしていました。まあそういう事態には至りませんでしたけど。

そのときにヤクブ・カーンさんが言っていたのは、そういうシナリオが考えられるけれども、問題はインドが自分にとっての利害得失をどう計算するかわからないことだ。たとえば、カシミールをとるかわりにムンバイを諦めるというようなことが考えられないことはないかもしれない。

それからもう1つ、タラト・マスードが言っていたのは、そういうときに狂信的に命を投げ打つ傾向はパキスタン人の方が強い。これは僕もそうではないかと感じました。インド人のほうが冷徹に利害を計算するのではないかと。

—— すみません、脇道にそれて恐縮なんですけど、私それすごく興味があるところで、パキスタン人自身がよく言いますよね。大使はどういうところからそれを感じられたんですか。

沼田 何なんだろうね、国民性というか。

—— 宗教の問題ですか。

沼田 宗教があるかもしれないね。イスラムというのがあるかもしれないね。

話が脇道にそれるけどね。この話はまだしていないと思うけど、パキスタン人は特殊な英語の使い方をすることがあって、「compulsion」、「ground reality」、それから「discuss something threadbare」、この3つをよく聞きました。その中で「compulsion」というのは、まさにやむにやまれずやっていること。そういう intensity というか思い入れみたいなものが国民性の中にあるようです。それから、イスラムや Pan-Islamism が赤ちゃんのときから耳の中にささやかれていると、そのためには何もかも犠牲にするというのがあるのかもしれない。

そこで、いよいよ危なくなったなと思ったのが、6月7日にアーミテージ国務副長官がパキスタン

を訪問して、越境侵入恒久停止というのを何回もムシャラフに言って、ムシャラフがそれを確認したという話があった時です。それからムシャラフはテロキャンプの閉鎖についても何か考えるということを行ったということを着任早々のナンシー・パウエル米国大使が我々に説明していました。そのときに彼女が「Musharraf is committed to permanent end to infiltration」、それからテロキャンプについては「They will do something visible soon」ということを言いました。

6月12日から13日にかけて、ラムズフェルド（Donald Rumsfeld）国防長官がインドとパキスタンを訪問して、これは特に新しいことはなかったのかな。アルカイダがカシミールにいるのではないかというようなことが出てきていますね。それを質問されてラムズフェルドは、「そういう scraps of intelligence はあるけれども、Not actionable intelligence」。

こうして、戦争勃発の危険はひとまず回避された。問題になったのは、越境テロ停止というのをどうやって検証するかという話。第三者が検証するのか共同パトロールするのか、あるいは科学的にやる方法があるのかというようなことが議論になっていた。

—— すみません。ちょっとその過程のことでいくつかお伺いをさせていただきますけれども、今のクライシスの中を見ていて、一番戦争になると思われた瞬間というのはいつでしたか。

沼田 一番戦争になると思ったのは……。さっきの『News』のラウンドテーブルのときかな、6月2日。

—— 逆にいえば、テロが起きてお互いに動員をかけて、年末の12月から1月のムシャラフ演説まではそこまで感じられなかった。

沼田 そこまでは感じていない。この5月の末から6月の初めぐらいですね、一番緊張したのが。

—— 冷徹なインドに対してより狂信的なパキスタンという話、私も聞いていてすごくおもしろかったんですが、それはいわゆるマッドマン・セオリーではないですけれども、自分を狂信的に見せかけているというわけではないんですか。

沼田 そこまで計算しているとも思えなかった。

—— 印パ関係は、それこそ本当に核を使うかもしれないという可能性が結構作用しているというか、不確定要素として残っているというのが印象深くて。

沼田 そうなんですよ。

—— それとの関連でお伺いしますが、この間パキスタンは外交団に対してどう見せようとしていたのですか。事態は全部 Under control だというふうな見せ方をしようとしていたのか、それともインドは何をするかわからないという見せ方をしようとしていたのか。

沼田 どちらかというとは後者かな。

—— それが核戦争に至るかもしれないと、ある種脅そうとしていたという攻め方ですか。

沼田 そのときにパウエル (Colin Powell) 国務長官も 7 月末に来ていて、このころから Indian-held Kashmir の選挙という話が 9 月、10 月か、それを見てもみないとわからないよね、それまではあくまでもインド軍も撤退しないだろうという話があって、他方ムシャラフの方はインドによる人権侵害がひどいということを言って。Cross-border movement については「We do not encourage, sponsor or allow cross-border movement」と言っていました。それをどうやってモニターするのかというのが問題だった。ただ、ムシャラフが「We do not encourage, sponsor or allow cross-border movement」と言ったのに対してパウエル国務長官が、我々の承知しているところでは「They are still supported by elements of government」と言ったという話がある。そのときにムシャラフは黙っていたと、これはどちらから聞いたのかな、米国大使から聞いた。何かまだあるみたいな。テロリストキャンプについては、ムシャラフが「Leave it to me, I'll deal with this」と言ったという話でした。

それから僕も離任が近くなってくるのですが、8 月 28 日に渡部恒三衆議院副議長一行が来て、僕はまたいつもの人たちを集めました。サルタージ・アジズとか。そうしたら、そのときにサルタージ・アジズが、パキスタンは「We are the victim of many global fault lines」と言いました。「fault lines」ね、地震の活断層、あれがクロスしているところだと。難民も 300 万人ぐらい抱えているということをやった。そうだ、このときにサルタージ・アジズが、僕のノートによると「After 9.11, if Pakistan did not have nuclear deterrent, India would have attacked camps in Azad Kashmir」と言った。

そして渡部副議長がスームロ (Muhammad Mian Soomro) 上院議長に会った時にスームロ議長が言っていたのは、パキスタンは地理的に非常に難しい立場にあると。global fault lines に似たような話で、東にインドを抱え、西もアフガニスタンとイランとの関係が必ずしもいいとは限らないと。そういうところにおいて、80 年代のアフガン戦争のときには僕のメモによると「a small country interfered in the fight between two big countries and got punished」。

—— さも言いそうなの。

沼田 感じでしょう。そう言っていますね。

それから、その間に僕の会っていたイナムル・ハク外務次官は国務大臣に昇格していて、その後任のリアズ・コカール (Riaz Khkhar) という外務次官に 9 月 2 日に会ったら、「India can't set preconditions, India can't be a policeman, judge, prosecutor and jury at the same time」。それから「We are unable to seal the border airtight」。だから、やはり何か起きたんですね。

そのときに Gultari というところでちょっと衝突があった。

—— 印パ間のですか。

沼田 印パ間の。インド軍のパイロットが攻撃したという話があってね。ちょっと skirmish があったみたい。

—— そうですね。何かやっていたことは承知をしております。

沼田 そこで僕は離任が近づいていましたけど、9 月 12 日に ISI のイーサン長官に会った。表敬に行ったのかな。そのときに Cross-border movement については、「Some elements are going across. Can only stop so much. If we can, India can」と言った。結構正直でしたよね。

Monitoring については、「We are not susceptible if India does not respond」。Camps については「Taking certain steps, expect reciprocity. India is constantly changing goal posts」「Indian-held Kashmir elections are a farce」。それから、「Army does not want a role in the political/democratic structure, which is very brittle」と言っていました。

—— これはイーサン・ウルハクですね。

沼田 そうです。この印パの騒ぎの間に本省は危険情報を改訂しました。

—— そのあたりのお話を。

沼田 危険情報は全世界的に改訂しました。その前がどうだったかよく覚えていませんが、3月5日に全世界的に危険情報を改訂して、Aというのが「十分注意してください」、Bが「渡航の是非を検討してください」、Cが「渡航の延期をお勧めします」、Dが「退避を勧告します」というふうにシステムを変えました。もうちょっとフレキシビリティを持たせるようにして。4月26日にパキスタンについても改訂して、5月の下旬、いよいよ危うくなってきたときに、我々大使館として緊急事態への対応策というのを策定しました。こういうことが起きたら何をするというのをね。

—— 先ほどの9・11のときと同じような。

沼田 これはもうちょっとリアリティがありました。

—— そんな感じでした？

沼田 なぜかという、ラホールに出られないでしょう。ちょっとだけお見せしますが、こういうのをつくりました。

—— 全面戦争のところが空白ですね。

沼田 そのときに危険度はどういう状況かというようなシナリオを考えて、それぞれの段階で具体的に何をするかを全部考えました。

—— ここでもう館員も退避ということですね。

—— 逆に言えば、カシミール限定戦争までは残るという感じですね。

沼田 そう。誰が残るかというリストも別途つくっていた。最後は僕を含めて5人ぐらいだったかな。

—— 最後のところ、ここが空白なのは、これは同じというか。

沼田 もう帰ってしまうから。政府専用機しかありえないわけです、そのときは。

—— 政府専用機ないし自衛隊機。

沼田 そう。それで、9・11 のときには在留邦人の人に説明したわけですね。商業機があるうちに帰ってくださいという説明をした。今回は、実はインドの方から先に本省にその話が行った。

—— インド大使館。

沼田 在インド大使館。それはなぜかという、どうもブラックウィル大使の行動が非常に大きな要素で、ブラックウィルって知っているでしょう。

—— ロバート・ブラックウィル。

沼田 彼がインド大使でした。インドはアメリカ人のビジネスマンが圧倒的に多いわけです。彼らが帰っちゃうぞと言うと、インドにもものすごく効くわけです。まさにそうだったわけ。インドから危機感の火の手が上がって、それが我々の方にも来た。僕はあまり煽りたくはなかったです。既に1回邦人の退避をやっていて、邦人の人がいかに大変だったかというのがわかっていましたから。でも、インドからそれが始まったので在留邦人向け説明会というのを6月3日にやりました。そのときに、事態が本当に悪くなったら残る道は唯一空路がある、商業機があるうちに帰ってくださいということを言っ。そのときに籠城というのは考えられないですかという質問に「それは危険です」と言った。ターゲットになっちゃうおそれがある。

—— 籠城ですか。

沼田 籠城というのは、クウェイトであったでしょう。イラクのクウェイト侵攻に際してクウェイト在留日本人を大使館に収容して、大使館がイラク軍に包囲された後にイラク政府に拘束されたこと。人質になっちゃったこと。

—— どこにということですか。

沼田 大使館に籠城。

—— 在留邦人が。

沼田 そう。だから、そのときは緊急備蓄というのは、館員が25人いるとすれば10日分あるかなとか、そういう計算をしていたけど。そのときに我々の所轄の地域に邦人が254と書いてあるな、僕のこのメモには。そのうち東京の方から小泉総理が邦人を早く帰せと強く指示しているというのが来ました。

—— インド側に対しても同じ指示を小泉総理から出していたんですか。

沼田 両方。

—— アメリカももう退避勧告していたんですか。

沼田 アメリカもしていましたね。ただ、もうちょっと幅を持たせた勧告だったと思います。我々の緊急退避計画は5月の段階でつくっていますね。6月7日に緊急退避計画をまたつくりました。9・11のときみたいに。

—— そうすると、もうこれで政府専用機もしくは自衛隊機のオペレーションまで一応計画しているんですね。

沼田 我々はそれをやっていて、東京は自衛隊機の準備を粛々と進めていると言っていた。総理の下で指示していたしね。

—— それはどこの空港に行くのですか。

沼田 これはイスラマバードから出るほかないでしょう。大体着陸できるのかどうか、そういう問題があるけどね。

—— そうですね。あそこは軍の基地とセットですね。

沼田 そう。インドの空域をどうするのとかね。どのあたりで館員の誰を残すというのを全部やったわけよ。これはうちだけじゃなくて。

—— インドも全部含めてですか。

沼田 そうです。うちは僕のほか、防衛駐在官を含め館員5名が残るという計画だった。

—— 自衛隊機もしくは陸路アフガンへ抜けることになっていたんですか。

沼田 それしかなかったです。

—— この計画は、アフガン側のできたばかりの日本大使館との間でもやはり調整を。

沼田 カイバル峠をちゃんと通過できるかどうかもわからなかったんで、そこまでは難しかった。

—— 陸路というのは一応車で行くと。ガソリンの備蓄もしておいてという。

沼田 まあそこまでいかなかったけどね。そこまでは一応考えたわけです。

それで、また日本人学校の問題が生じたわけですよ。小学生23人、中学生5人、教員7人。ただ、今回は夏休み直前だったでしょう。だから、夏休みを前倒しした。6月10日から夏休みにして。だから、館員家族は6月9日に帰ったし、ほかの邦人もそのころに帰った。その間にブリティッシュスクールがクローズしてアメリカンスクールもクローズして、イスラマバード・インターナショナルスクールというのはアメリカ人が多いけれども、9・11のときにクローズして、これをまたクローズした

わけです。すでに話したとおり、日本人学校をクローズするかどうかという問題になって、一旦帰国したのでいろいろな問題が生じたわけ。要するに体験入学みたいな形でいつまでいるのという話があるし、それから3カ月以上先生が残っていると人事異動の対象になっちゃうという話があってね、それぞれの教育委員会との関係で。皆さん、早く帰ってきたいと矢のように来るわけ。僕は内務次官のところにネゴに行きました。

—— 内務次官？

沼田 警察の親玉です。

—— パキスタンのですね。

沼田 なぜかという、テロがあるとすると、標的になるのはアメリカ人やイギリス人などの方でしょう。日本人はそれほど標的にはならないであろう。とすれば、警察の警護をつけることによって日本人学校を再開できないかと思った。それを向こうは呑んだわけです。彼らが言ったのは、そのときはテロの標的はアメリカ、イギリスなど欧米人である。日本人学校は95%問題ないと。——5%のリスクはあるけど。私服警官をつけますと言った。

—— 私服警官ですか。

沼田 私服です。そのときにほかの国の人はどうなっているかと聞いたら、このときの数字がありますが、アメリカ人は mono nationals が150人で dual nationals が4000人いると言っていた。

—— そんなにいるんですか。

沼田 イギリスは mono nationals が600人、dual は1万プラス。カナダは registered Canadians が1500、そのうち75%が dual。だから、彼らはこういうとき大変です。インドでも全く同じようなことがあったから、ブラックウィル大使が騒いだわけ。

在留邦人に向けて説明会を6月3日にしたときに僕が説明しましたが、何かとっても苦しそうだったみたい。皆さんにまたお願いしなきゃいけないというのでね。だって、みんな帰りたくないわけでしょう。そんなに町中騒いでいるわけでもないわけだから、なぜ帰らなきゃいけないと思われるでしょう。ニューデリーでの説明会は大分もめたようですが、イスラマバードはもめませんでした。最後に僕が離任するときに、日本人会の会長の人が「あのとき大使があまり苦しうだからいろいろ言えなかった」と言われました。

—— すみません、その点に関連して。在ニューデリーの日本大使館との温度差じゃないですけど、それは向こうのほうが騒いでいたんですか。

沼田 はい。こっちは一回経験しているから、その差は出たのでしょう。

—— ここのやりとりというのはやはりあったんですか、大使館同士のやりとりというのは。

沼田 大使館同士のやりとりというのもお互いに転電し合いますから。

—— それはあれですよ。今 5 つぐらい在外公館が出ていましたよね。やはり横一線に動くわけですか。

沼田 横一線に動きますね。

—— 6 館出ていますね、インドからパキスタン。

沼田 インドは多いしね。

—— これは、最終決定は外務大臣がするわけですか。

沼田 そうですね。

—— でも、現地の情勢判断が大事ですよ。

沼田 それで、大体全部お話ししたけれども、援助の点について触れていいですか。
援助は実際問題として随分時間使ったものだから。

—— すみません。今のところで伺いたいのですが、ここの危機のところ。私たち国際政治学者はいろいろなところでいろいろな無責任な会議をするわけですよ。そうするといろいろなことが聞こえてくるのですけれども、こういうときにアメリカはパキスタンの核兵器を抑える計画を持っているんだという話が聞こえてくるのです。そういうことは聞かれましたか？

沼田 わからない。関心は持っていたけど。持っていたかもしれないですね。

—— そのようなキャパシティは現地にあるんですかね。まあアフガニスタンから入れますよね。

沼田 入れるでしょう。

—— やろうと思えば。かなり展開していましたよね。

沼田 アーミテージだったらそのぐらいのこと考えるだろうなと思うけど。

—— 2001 年 9 月から 11 月にかけて、カブールのタリバン政権は崩壊したわけですが、ウサマ・ビン・ラディン（Usama bin Ladin）は取り逃がしたわけですよ。あのときのことは随分後から国内的にはたたかれたのですが、パキスタンから見ていてもあれはしょうがないなという感じでしたか。

沼田 いや、僕もあれはやはりびっくりしましたね。パキスタン政府はどこまで知っていたのかなと思います。

■ パキスタンへの援助競争

沼田 援助の話をしてみると、9・11のときに制裁を解除して3億ドルの無償援助を出すということを決めました。コハットの円借款も次の分もやろうと。それから警察改革なんかに重点を置いていこうという話をしたのですが、9・11の後から援助の競争が始まったわけですよ。各国みんな、パキスタンが国際社会に戻ってきて「よくいらっしゃいました、それじゃ援助しましょう」という話になったわけ。ドナー競争になって、その次に印パの危機になると今度は戦争するかもしれないところに援助をどうするのだという話になるわけです。

そうすると、危険度の話と、他方ムシャラフ政権を安定させるためには援助をしなければいけないという、そのジレンマが生じるわけですよ。これでいろいろ議論していて、ムシャラフ大統領の政治的 maneuver の余地を広げてやる必要がある、だからやはり支援していくことが必要ということになる。それから、ドナー間でこの間に poverty reduction を重点とするという方向にシフトした。具体的には保健とか教育分野。

援助政策についてはいろいろな議論がありますが、援助政策をする場合に借款はだめだという議論があるわけですよ。無償でなきゃだめだとか、効率的・効果的援助をなきゃいけない、それを数字でちゃんと把握できるようにしろとかね。それから、プロジェクト援助じゃなくてプログラム援助にしろとか、セクター・プログラム改革がどのぐらい進んでいるかというのをインディケーターとして援助案件の効果を計測すべきであるとか、そういう議論がいろいろありました。

我が国の援助というのは、セクター別プロジェクトの重視がずっと続いていました。それで我が国はそれまで最大のドナーでしょう。ところが、今申し上げたような援助のあるべき姿といった議論になるとイギリスとかスカンジナビアとかが強いわけ。世銀の主催の会議なんかに出ると僕も随分発言したりしましたが、これはうかうかしていると日本の存在感が薄れていくなと思いました。たとえばインフラプロジェクトよりも教育とか保健とかに重点を置く、それからジェンダーの問題があるでしょう。ジェンダーの問題って我々はあまり得意じゃない。

—— そうなんですか。本当は日本みたいなところはやったほうがいいんですけどね。

沼田 ねえ。だから、3億ドルを出すことにした、その使い道をどうするのかという話になるわけね。

もう1つ大きな話は、債務繰延の面。これは大変大きな問題で、なるべくソフトな条件にしてくれという話があって、いろいろ議論していて、僕は最後どうなったのか今朝調べようと思ったらちょっとわからない。もしあれだったら JBIC に聞いてください。最後どうなったか、わかるはずだから。とにかくなるべくソフトな条件にしてくれというような状況で僕は帰ってきたわけです。

■ パキスタンでの勤務を振り返って

沼田 以上をまとめて、最後に総括します。

僕にとって初めての国で、かつ知らない国でした。いろいろチャレンジがあったけれども、特に3つのことに助けられたと思います。

1つは専門家、パキスタンあるいはウルドゥ語の専門家。僕はインドネシアでも感じましたが、ウ

ルドゥ語の専門家の役割は非常に大きいし、こういうモヤモヤしているときに、たとえば国内でどれだけ宗教団体が騒いでいるのかなんていうときに、中野勝一さんというその後カラチの総領事になった人が参事官でしたが、彼は町に貼られているいろいろなポスターを見て回って、どういう団体がどういうことについて騒いでいるかを分析していた。そういう情報というのはすごく大事ですね。そういう大使館の専門家スタッフに助けられたということ。

2 番目は、前からずっと言っていますけれども、我々はパキスタンとの軍事協力というのが希薄なので、パキスタンみたいにカシミールとかアフガニスタンとか核兵器とかの重要問題を軍が仕切っている国で何が起きているかというのは、外交問題も含めてすごく不透明です。それを理解するためには、軍からも情報をとろうとするけれども、さっき何人か現職の軍人を引用したけど、あの程度のいわば建前しか言わなかったから。そうすると、そういうときに識見の高い軍とか外務省の元幹部、あるいは軍人兼外交官、それからテクノクラートの存在が非常に重要だったと思います。

具体的に名前を挙げれば旧軍人ではヤクブ・カーンさん、タラト・マスードさん、それから元外務次官のナジムディン・シェイク (Najmuddin Shaikh) という人がいます。それからニヤーズ・ナイク元外務次官。サルタージ・アジズさんは元外務大臣・大蔵大臣。

外交団ではバングラの大使のアリムル・ハクさん。それから、英国大使のヒラリー・シノット。あとドイツ大使が 9・11 の前までかな、デア (Hans-Joachim Daerr) 大使ってのちの日本大使、御存じでしょう。彼は僕の仲間で、仲よくしていました。彼はパキスタンの後も、アフガニスタンの特使みたいなのをずっとやっていました。そういう人たちと仲よくしていて、あとはアメリカ大使のウェンディー・チェンバリンとナンシー・パウエル、その前がマイラム大使だったかな。でも、行き来があったのはウェンディー・チェンバリンとナンシー・パウエルですね、そういう人たちに助けられました。

離任の話をしましょう、離任表敬ね。まず 10 月 7 日にイナムル・ハク外務担当国務大臣のところに行ったときに彼が言ったのは、パキスタンの困難な時期において日本は lecture (説教) するのではなく、よき友人として問題を共有し話し合う (discuss) する姿勢で協力してきたことを多とすると。と言われると、アーミテージのことを言っていたのかなと (笑声)。それが 1 つ。

それから僕は 10 月 20 日に出発しましたが、ムシャラフ大統領に 19 日に離任表敬しました。だから一生懸命離任表敬の報告電報を書いて、それで飛行機に乗った。そのときに僕が言ったのは、この 2 年半は「Eventful, challenging and rewarding」。これは本当に心からそう思いました。ムシャラフ大統領が言ったのは、両国が互いに安心して (in comfort) つき合えるようになったことを評価していると。それから、印パ関係について日本が fair and balanced な態度をとられていることを評価すると。ここまでは良かったのですが、その日の朝の『New York Times』に A. Q. カーンが北朝鮮に遠心分離機が何かを流していたという記事が出ていたので、それを取り上げざるを得ないと言って聞きましたら、「You can believe with 500% confidence」、何で 500%なのかよくわかりませんが、「that there is no nuclear proliferation from Pakistan」、そして「We will not go against the interest of Japan in your region」と言った。本当かなと思わなかったわけでもありませんが。

—— そうですね。

沼田 さっきなぜ「Eventful, challenging and rewarding」と言ったかというのと、「Eventful」はおわかりでしょう。「Challenging」のことから言うと、僕自身にとってチャレンジングでしたけれども、それはパキスタンにとってのチャレンジでもあった。パキスタンにとって何がチャレンジかというのと、さっきパキスタンの人は「compulsion」という言葉をよく使うと言いましたけれども、パキスタンに

とって 3 つの **compulsion** があります。

1 つは、大国間の抗争の中で生き延びるという **compulsion**。ホップカーク (Peter Hopkirk) という人が『**The Great Game**』という本を書いた。あれはいい本ですよね。あれと同じようなことが 80 年代のアフガン戦争で起きて、また起きたわけでしょう。そういう中で生きていかなければいけないということ。パキスタンはサルタージ・アジズが言っている **global fault lines** というのがみんな交錯するところに位置しています。大国間の抗争の中で生き延びるというチャレンジ、**compulsion**。2 番目がインドに対抗するという **compulsion**。それはカシミール問題でヤクブ・カーンさんの言っていた **Pan Islamic State** としてのパキスタンということと核抑止力を持たなきゃいけないという **compulsion**。3 番目が、建国の指導者カーイデ・アーザム (**Quaid-e-Azam**、ジンナー [Muhammad Ali Jinnah] の別名) が言った **Moderate Islamic State** として発展していくというときに、種族とか地域間の格差があるし、シーアとスンニとか宗派間の闘争というのがしょっちゅうある。そういうこととどうやって折り合いをつけていくかという問題がある。

パキスタンは僕の在勤中に 2 つの踏み絵を踏みました。英語では「**biting two bullets**」。1 つ目の踏み絵は、9・11 のときのタリバンとの決別。2 つ目はテロ・急進イスラム団体の取り締まり。2002 年 1 月 12 日のムシャラフ・スピーチの試練がまだ続いている。

そしてパキスタンは 3 つの正面での戦いを続けている。第 1 にインドとの緊張／対決関係、第 2 に国内のテロ対策、第 3 に経済、社会、政治改革、これを進めていかなければいけない。特に貧困問題とか。それからデモクラシーをどうするかと。デモクラシーもまさにまだ **feudal**、**tribal** な要素が色濃く残る社会での民主主義という問題。

チャレンジの中身はざっと以上のようなものでした。

では、なぜ僕にとって **Rewarding** な 2 年半だったかということ、ムシャラフ大統領も言ったように、とにかく互いに安心して (**in comfort**) つき合う仲間になったということ。それは制裁停止、援助再開もあるし、とにかく首脳相互訪問というのが実現したという意味では、大使としてそれは満足している。

でも、パキスタンに課題はいろいろ残っています。僕はパキスタンに着任してすぐの頃から言っているのですが、着任したときに何となくその国の色というのが見えますよね。冷戦時代にベルリンの壁を越えると物が茶色に、あるいはグレーに見えた。

—— 煙っていましたね、何か。

沼田 パキスタンに着いたときに、それと同じような感じがしました、ちょっと意味が違うけど。もちろんものすごく派手な色のバスなんかあるけど、全体として何となく茶色いというかグレーというか、あまり華やかな感じがしない、大都市を別とすればね。どうも僕はパキスタンで起こることは「**Nothing is black and white**」と言っていました。だから「**Different shades of gray**」を見分けなきゃいけない。時々ものすごくダークグレーになることがある。軍事・外交政策についても軍政のもとで何が行われているかよくわからないというのがあるしね。そうすると、パキスタンでまだグレーなエリアがいろいろ残っている。民主化という場合にも軍の地位がどうなっていくか、政治家が育っているか。僕のときに比べると、今はイムラン・カーン (**Imran Khan**) が出てきていることは全体としてはいいような気もするけど、まだ軍の力が強いと思うし、そこはどうなっているのか。それから、**Moderate Islam** と急進イスラムとの葛藤というのがまだある。シャリア法なりパルダもあるし、**honor killing** (家や親族の名誉を守るという名目で、夫・父・兄弟などの男性が、家族である妻・娘・姉妹などの女性を殺すこと) もまだある。それから貧富のギャップもまだ随分残っていると思います。

それから、2 番目の問題。ヤクブ・カーンさんが言われた、冷戦の後パキスタンの地位が下がってインドの地位が上がったという問題。今見ると、一旦パキスタンの地位は上がったけれども、インドの国際的地位がますます上がる中でパキスタンの地位はますます下がっているような気がする。それでは、パキスタンは一層中国に接近していくのかといった話があるでしょう。それから、イスラムとということを別とするとナショナル・ユニティの原動力が欠けているのではないか。地域別、人種別の違いがあるでしょう。だから、それが心配ですよ。

そうだとすると、新聞記事が残っていますか。僕が離任する直前のスピーチですが、イスラマバードの English Speaking Union で行った講演の題が「Empathizing with a Frontline State」。その中身は、今僕が言ったような話をさっきの 3 compulsions and 3 fronts の話をした上で、日本としてもそういうパキスタンの地位に empathize していく必要があるということを最後のメッセージとしていいました。

—— 『DAILY NATION』10 月 14 日、2002 年。

沼田 これが出発 1 週間前ですね。

今のような話を考えると、日本人の frontline state Pakistan に対する Empathy というのは側隠の情と言ったらいいかな、いまは薄れているのではないかと思うのです。そうすると、ムシャラフに会ったときには僕が着任時に比べて日本とパキスタンの心理的距離は縮まったと言えたけれども、また広がってしまったような気がします。

—— 先ほど 3 つのことに助けられたとおっしゃって。

沼田 1 つは専門家、2 つはパキスタンのワイズメン、3 番目は外交団の仲間。

その後どうなっているかな。僕も最近はその後パキスタンをあまりフォローしていないからよくわかりませんが。

—— 経済的にもインドがすごく注目されていますからね。

沼田 インドとの差がどんどん開いているような気がします。

—— 大使がおっしゃるナショナル・ユニティのもとがないというのは、本当にそのとおりで、私もそういう気がしますね。

沼田 田中眞紀子外務大臣のパキスタン訪問の話というのはあまりしなかったかな。

—— それはいただいていない気がします。

沼田 3 幹事長とか何とかのすぐ後に田中大臣が来られたんですよ。僕の同期生の野上義二次官から電話がかかってきて、「田中大臣が行くから発言に気をつけてくれ」と（笑声）。

—— 当時はすごく大変そうでした。

沼田 館員みんな戦々恐々としました。その電話を受けたときにスタッフミーティングの最中だったので、みんな館員が聞いていました。

実は、田中眞紀子外務大臣が外国を訪問した中ではパキスタン訪問が一番うまくいったということになっている。その理由は非常に単純で、僕は田中角栄総理の通訳をずっとやっていたから、眞紀子さんはそのときから知っていて、眞紀子さんの通訳をさせられたこともある。

それで、田中大臣は空港に到着して私の顔を見るなり、「沼田さん、私とこんなところで会うとは思わなかったでしょう」と。

—— 英語すごくお上手ですね、眞紀子さん。

沼田 高校生のときにペンシルバニアの高校に行かれたので英語は話されるけれど、通訳は必要です。

—— 割と発音きれいですよね。

沼田 発音はきれいだけど。

それで大変でした。野上君から言われたのは、発言に気をつけろというわけですね。大臣に何か言うと、それを全部外に話されたりするから。柳井駐米大使と電話で話して、聞いたことをそのまましゃべっちゃって問題になったのがあるでしょう。アメリカのセキュリティに関することなんか言っちゃったとか、そういう話が。

—— 9・11 のときですね。退避場所を言っちゃってということがありましたね。

沼田 だから、みんな注意して、それで、公邸に泊まりたいというご希望なので公邸に泊まってもらいました。

ちょうどその前に僕の日本から連れて行った公邸料理人が、あまりたくさん訪問者が来るものだから心臓発作を起こして、日本に移送しました。ちょうどその日がタリバンに捕まっていた柳田大元という自称ジャーナリストを引き取りに行く日でしたから大変でした。

大臣を公邸に泊めることにしましたが、庭にアネックスがあったんです。そこにお泊めすることにして、そこにもう1つ部屋があるけれども、そこは誰を泊めようかと思って、大臣秘書官の上月豊久君がロンドンで一緒だったから彼の希望を聞いたら、彼は是非公邸の方に泊まりたいとのことで、彼とゆっくり話をしました。

—— あのところは。タクシーで御一緒したことがあって、もうずっと愚痴を聞かされた経験があって。

沼田 大変でしたね。僕は野上君の警告があったので、なるべくべったりついているように見られないようにしていました。そうしたら、それを日本のテレビで見ていた友人なんかが「何で大臣をよけていたんだ」と言っていました。(笑声)。

沼田貞昭オーラルヒストリー ⑨

沖縄担当大使

—日本政府・米国・沖縄の狭間—

質問票 9 沖縄担当大使—日本政府・米国・沖縄の狭間—

1. 約 2 年間お務めになられた沖縄担当大使（2003 年～2004 年）の時期についてお聞きします。
 - (1) 沖縄担当大使の内示を受けたときの第一印象はどのようなものでしたか。
 - (2) 沖縄担当大使は 1997 年に新設された新しいポストです。当時の沖縄担当大使のお仕事の内容についてお聞かせください。
 - (3) 沖縄担当大使に着任されたとき、大使は普天間基地を含む沖縄米軍基地についてどのような問題意識をお持ちでしたか。
-

■大使略歴

2003 年 1 月 沖縄担当大使（～2004 年 12 月）

■参考：当時の関係者

外務大臣 川口順子（2002 年 2 月～2004 年 9 月）

町村信孝（2004 年 9 月～2005 年 10 月）

沖縄担当大臣 細田博之（2002 年 9 月～2003 年 9 月）

茂木敏充（2003 年 9 月～2004 年 9 月）

小池百合子（2004 年 9 月～2006 年 9 月）

官房長官 福田康夫（～2003 年 9 月）、細田博之（2003 年 9 月～）

官房副長官 細田博之（～2003 年 9 月）

古川貞二郎（～2003 年 9 月）、二橋正弘（2003 年 9 月～）

北米局長 海老原紳（2002 年～2005 年）

安全保障課長 兼原信克（～2003 年 8 月）、藤山美典（2003 年 8 月～）

地位協定室長 山田重夫（～2004 年 8 月）、四方敬之（2004 年 8 月～）

外務省沖縄事務所次長 赤松武（～2004 年 1 月）、堤尚弘（2004 年 1 月～）

防衛庁防衛施設庁長官 嶋口武彦（～2003 年 7 月）、山中照栄（2003 年 8 月～）

那覇防衛施設局長 岡崎匠（2004 年 7 月）、西正典（2004 年 8 月～）

内閣府政策統括官 武田宗高

沖縄県知事 稲嶺恵一

米国総領事 Tim Betts, Thomas Reich

在沖四軍調整官 Lt. Gen. Wallace Gregson（～June 2003）, Lt. Gen. Robert Blackman (August 2003～)

2. 在沖縄米軍基地をめぐる事件・事故についてお聞きします。

(1) 米軍関係者による犯罪等の事件についてどのような問題がありましたか。

(2) 2004年8月13日、普天間基地所属の米軍ヘリが沖縄国際大学に墜落する事件が起きました。

(ア) まず、この事故直後のご対応についてご印象に残っていることをお聞かせください。

(イ) 事故を受けて、沖縄では大規模な抗議活動が展開され、日米地位協定の見直しを求める声も高まりました。一方、事故の受け止め方には沖縄のなかにも温度差があったともいわれています。こうした沖縄の状況を当時どのように認識されていましたか。

(ウ) 事故発生当初、小泉純一郎内閣の反応は鈍かったともいわれています。政府の対応を大使は当時どのようにみておられましたか。また、ヘリ墜落事故をめぐる政治の動きに関して、ご印象に残っていることをお聞かせください。

■キーワード

- ・ 在日米軍基地再編協議
- ・ ラムズフェルド国防長官の沖縄訪問

■参考：当時の主な出来事

2003年 1月 日米間で「防衛政策見直し協議（DPRI）」（在日米軍基地再編協議）本格開始

2003年 11月 ラムズフェルド国防長官、沖縄訪問

3. 在沖米軍基地整理・縮小・統合等についてお尋ねします。

- (1) 大使の沖縄在任中、普天間基地の移設問題についてどのような動きがありましたか。
 - (2) 当時、日米両政府間では「防衛政策見直し協議（DPRI）」と呼ばれる在日米軍基地の再編協議が始まっていました。大使はこの協議にどのように関わっておられたのでしょうか。沖縄で米軍と意見交換や交渉をすることはあったのでしょうか。
 - (3) 2003年11月にはラムズフェルド国防長官が沖縄を訪問し、ヘリコプターで普天間基地を視察しています。このラムズフェルド沖縄訪問について、ご印象に残っていることをお聞かせください。
-

■キーワード

- ・ 沖縄国際大学への米軍ヘリ墜落
- ・ 在沖米軍基地再編

■参考：当時の主な出来事

- 2004年 8月 沖縄国際大学に普天間基地所属の米軍ヘリ墜落（13日）
- 2004年 9月 沖縄国際大学で大規模な抗議集会（12日）
- 2004年 10月 小泉総理、ハノイで在沖米軍基地の海外移転や本土への移設について言及
- 2004年 11月 中国の原子力潜水艦が石垣島周辺海域を領海侵犯（10日）

4. 最後に、基地問題関連以外のことをお聞きします。

- (1) 基地問題の他に、何かご記憶に残っていることをお聞かせください。
 - (2) 2004年12月に沖縄担当大使の任を終えられたとき、どのような感慨をお持ちになりましたか。
-

■ 沖縄大使着任

—— パキスタン在勤の後、大使は沖縄大使に御着任されました。この沖縄大使の時代について、最初に内示を受けたときに第一印象はどのようなものでしたでしょうか。

沼田 うーんと思いましたけどね。私は外務省以外に出向したことがなかったものですから、本省以外で初めての国内勤務ということなので。沖縄は、若いときに北米一課にいたときに一応返還後の沖縄を担当していましたが、あまり仕事がなく、そのときに沖縄に1回か2回出張したことはあった。それから、安保課長時代にも1回行きましたね、安倍外務大臣と一緒にだったと思います。合計3回ぐらい行きましたけれども、あまり土地勘はなかった。ただ、どういうところかなというcuriosityはありました。

それから、私は実はギターの弾き語りが趣味です。今でもやっていますけれども。それで、三線を一度弾いてみたいなという気持ちがありました。沖縄民謡も覚えてみたいなと。そのチャンスが来たといってほくそ笑んでいたと家内が言っていますけどね。それは別として。

—— 突然降ってきたという印象ですか、沖縄大使というのは。

沼田 ええっ、なるほど。でも安保課長をやっていたからなと、そういう経験もやってみてもいいかなという感じがしました。

—— この沖縄大使というのは1997年につくられた新しいポストで、我々から見ているとなかなか実際に何をしているのか見えにくいところがあるのですけれども、お仕事の内容についてお聞かせいただけますか。

沼田 まず、私が若いときに北米一課にいたとき、それから安保課長時代にも沖縄に行ったと言いましたが、復帰するまでは外務省の事務所がありました。大使も復帰交渉の関連で置いていたのですが、72年の復帰以来外務省のプレゼンスはなくて、基地問題は防衛庁というか防衛施設局が中心になってやっていたわけです。

ところが、95年9月に北谷で少女が米兵に暴行されたという事件が起きて大騒ぎになったのですが、そのときに橋本総理が外務省も何かあそこに置いて現地で汗をかけと言われて、沖縄事務所というのができたわけです。政府代表という辞令をもらうのですが、初代が原島秀毅大使（のちのマレーシア大使）、第2代が後に駐露大使や東宮大夫を務めた野村一成大使です。第3代が橋本宏大使（のちのオーストリア大使）。橋本大使は報道官の僕の前任者でもありますけれども。私は第4代ですが、第4代まで来て、存在を一応認知されるようになって、だんだん定着するようになってきたかなという感じはしました。

—— 着任されたとき、普天間基地の問題を含めて沖縄米軍基地について大使はどのような問題意識を持たれていたのでしょうか。

沼田 基地の問題全体については後で申し上げますけれども、着任したときの私の問題意識、自分は何をやるために行くのかなというこの問題意識からいえば、当時着任の記者会見なんかでも言っていたのですけれども、3つありました。

1 つは県ほか地元関係者との連絡調整役、潤滑油として活動する。それから、米軍がよき隣人、沖縄にとって「Good neighbor」となれることを目指しての橋渡しをする。アメリカ側の人に対しては、「Honest, sincere and sensitive interlocutor」として務めたいということを言っていました。2 番目に、県民の基地負担軽減のための努力をする。そのために、事件・事故の防止とか地位協定の運用の改善とかに努める。3 番目に国際交流、沖縄振興への貢献、人材育成とか国際会議の誘致などの面でも貢献したい。

着任のときはそう言ったのですが、実際に2年間苦労して感じたのは、実際の仕事というのは火消し、消防士ですね。「火の用心、火の用心」と言って火消しに走り回ることです。それまでやっていた仕事との最大の違いは、私は副報道官、ロンドンの公使、報道官、それからパキスタン大使、それで沖縄大使になったのですけれども、それまでの私の主な仕事は対外発信というか、メッセージを出すことでした。メッセージを出して人を説得することだったのですが、沖縄の場合にはメッセージが出せない。要するに、あまりメッセージを出すとたたかれちゃうから、じっと黙っていて裏で火消しに回る黒子の役割が多かったということで、そのアジャストメントが大変でした。

—— ストレスを感じられることはありましたか。

沼田 それはあります。それはこれからずっと説明すると分かると思いますよ。

—— 現地スタッフは、どういう方が何人ぐらいいらっしゃるのですか。

沼田 現地のスタッフは、ナンバー2の副所長は赤松武君、今はストラスブールの総領事をしています。あと本省からは専門職の人が2人に庶務の女性1人、さらに沖縄で採用した庶務の女性が2人。あと運転手、そんなところですよ。非常に小さな世帯です。

—— 物理的には、これはどこにあるのですか。

沼田 那覇市の大同生命という生命保険会社の1フロアにありました。

—— 那覇の国際通りあたりですか。

沼田 国際通りよりはもうちょっと外れた松山。県庁に近いところです。

—— 大使公邸というのはあるのですか。

沼田 ないんです。民間のアパートを借りていました。料理人もいない。

—— レセプションとかを御主催なさることはまずないのですか。

沼田 ないです。できません。

—— 後で出てくるかもしれないのですけれども、ふだんの業務のときのカウンターパートは多方面にわたると思うのですが、どういう方だったのでしょうか。たとえば県庁だと、どのクラスの方とふだんやりとりを。

沼田 県庁は、知事にも会いますが、沖縄の場合には知事と会うときには新聞記者が初めから終わりまでいるという前提です。これはとてもやりにくい。後でラムズフェルド国防長官が来たときの話をしますけれども。それだけでは立ち入った話ができないので、時々こっそりやる。新聞記者に見つからないようにこっそり会うというアレンジはしました。違うところから知事室に入るとかね。それが知事ですね。私のときは稲嶺一郎知事です。それから、副知事、知事公室長という人がいて、知事公室長が基地問題の事務方ですね。

ちょっとリストを見せていただけますか。赤松武君の名前が入っているでしょう。副所長は最初の1年が赤松武君で、その次が、今、南スーダン大使をしている堤尚宏君ですね。

沖縄県の人たちのほかに防衛施設局長ですね。防衛施設局長が、私の任期の最初が岡崎匠さん（のちの防衛省装備施設本部長）ですね。それから2年目の、ヘリコプターが落ちてきたそのちょっと前に、後に防衛省の次官になった西正典さんが防衛施設局長で来ました。

それから、カウンターパートというか、仕事の相手としては、日本側でいえば沖縄県のいろいろな市長さんとか町長さんとか村長さんとか。それから沖縄県議会の人とか市議会とか町議会とか村議会の人たちというようなローカルの人たちが非常に多かった。

アメリカについて言えば、直接のカウンターパートは、四軍調整官です。沖縄にはいちおう陸・海・空・海兵隊といて、海兵隊が圧倒的に多いのですが、その四軍の調整官としているのが海兵隊の中将です。最初がグREGSON（Wallace Gregson）中將で、その後がブラックマン（Robert Blackman）中將。それから、嘉手納の司令官は准将でした。沖縄には米軍の「Generals（将官）」がたしか6人ぐらいいます。私が冗談で言っていたのは「パキスタンではカレーと Generals という強烈なコンビネーションを相手にしてきたけれども、今度沖縄に来たら泡盛と Generals を相手にしている」と。

—— 続いて政治との関係の話で少し伺いたいと思います。本省というのでしょうか、東京との関係では、どのような指揮系統になっていたのでしょうか。

沼田 月に1回東京に帰って、官房長官、副長官、外務大臣、副大臣、政務官、それから内閣府の沖縄担当の政策統括官、防衛施設庁長官などに報告をしていました。それで、最初の頃、福田（康夫）官房長官でしたけれども、福田官房長官のところへ報告しているときに「沖縄担当大使というのは本当に必要ですか」という質問をされましてね。いい質問ですけれども、それに対して僕が答えたのは、沖縄県の中では知事は偉いです、王様のように偉いです。それから、米軍も四軍調整官というのは一応中將ですから。それで、将官が6〜7人。将官というのは海兵隊の中だけでも中將がいて、航空関係の司令官は少將で、それから准將がいた。それから、空軍の嘉手納の司令が准將で。それから、沖縄に常駐というわけではないけれど、海軍の人は少將くらいの人がありますからね。その「Generals」を何人も相手にしなきゃいけないということなので、やっぱりそのためにはランクが必要であるということと、もう一つは、どうしても地元と米軍の利害が鋭く対立するわけですから、それを調整するには外交的経験と判断が必要であると。だからこそ橋本首相も北谷の事件が起きた後に「外務省も向こうで汗をかけ」と言われたのだと思います。

もう一つは、何をやるかということ、アメリカ側との関係で四軍調整官ほか、在沖米軍の指導部に対し

て、「今、県内の情勢がこうなっている」とか「日本の国内情勢がこうなっているから米軍としてどういうことに気をつけて何をするべきか、何をやっちゃいけないか」という、相当耳に痛い話を言わなきゃいけない。そういう意味では、いわばポリティカル・アドバイザーみたいな仕事です。米国総領事もいるのですけれども、日本側から見てどうかという話をしなきゃいけないということなので、これがかなり大きなウエートを占めていて、それに相手がちゃんと耳を傾けるためには一応大使としての格とか経験が必要であるというようなことを福田官房長官に言いました。これは今でもそうだと思います。

—— 東京ではほぼ毎月報告をされていたということですが、これは個別にそれぞれの方に順番に回って報告を行っていく。

沼田 回ってやっていました。

—— そういう形なんですね。

沼田 月に1回やっていましたから、そのたびにメモを作っていたのです。今回の一連のパワーポイントも、実は当時何をやっていたかなというのを、そのメモを見て作っています。何が問題になっていたかを思い出して、その上で自分が当時つけていたノートなんかを見て、このパワーポイントを作りました。

—— 四軍調整官ほか、在沖米軍指導部に対してもということですが、米軍側とは何か事件が起こると頻繁に会うことになると思うのですが、ルーティンとしてはどれくらいのペースで沖縄では人に会っているというような感じだったのですか。

沼田 人に会っているというのは、後で出てきますけれども、陳情とか抗議を受けた回数としては80何回会っています。それは別として、四軍司令官とは月に1回ぐらい会っているかな。もうちょっと会っているかな。ほかのいろいろなジェネラルズにも会っていますから。それから、町長さんとか知事・県庁関係、市議会とか市長さんとか村長さんとかに割合しょっちゅう会っています。米軍関係者にもかなりしょっちゅう会っているし、私が会っているだけじゃなくて、たとえば赤松副所長がその下の人に会っているとか。ほぼ毎日何かで連絡をとっているという感じですね。

—— ちょっと戻ってしまうかもしれないんですが、着任するに当たって、日本国内のことではあるわけですが、何かブリーフを受けたり、何か説明を受ける機会というのは沖縄担当大使に関してはあったのでしょうか。

沼田 一応ありました。安保課の中にある地位協定室というのが担当なわけですね。地位協定室からのブリーフは受けました。当時の地位協定室長は、総合外交政策局長を務めている山田重雄君でした。

—— 質問の順番が飛んでしまって申し訳なかったのですが、着任時の認識ということですね。在沖米軍基地の問題について、大使は着任時どのように認識されていたのでしょうか。

沼田 これを言おうと思っていました。行くまでは、北米一課の事務官、在米大使館書記官、安保課

長、北米一課長として、日米同盟関係というのをずっとやっていましたから、その一環だろうとは思っていたんですが、着任して感じたのは、沖縄側から見ている日米関係というのと外から見ている日米関係というか、沖縄の関係というのは随分違うなということを本当に感じました。

沖縄の米軍基地問題は、沖縄と日本（日本というのは本土（mainland）と日本政府、それが2つ一緒になって日本）、それから米軍の3者間（tripolar）の問題だということを感じました。沖縄は日本の一部だから変な話ですけどね。でも、沖縄、日本、米軍という3者間の問題だという感じがしました。実は、僕は沖縄に赴任する前にベーカー（Howard Baker）大使のところに表敬に行きましたが、そのときにベーカー大使が、「沖縄の問題というのは日米 bipolar だけじゃなくて tripolar、あるいはほかのいろいろな問題もある multipolar の問題である」と言われましたが、このことは非常に感じました。

大使の立ち位置というのは、要するに沖縄と米軍の間に挟み撃ちになるわけですから、サンドバッグ。沖縄は空手が盛んですけれども、沖縄で空手を練習するときに、「マチワラ（巻き藁）」って御存じ？空手をやる方おられますか。

—— やっておりました。

沼田 「巻き藁」って御存じ？

—— はい。昔、殴っていました。

沼田 そうそう、それですよ。木の柱に縄を巻きつけて、殴るやつね。あれだと言っていました。

やっぱりすごくつらいのは、沖縄大使という以上、県民は大使が県民の立場に立つものだということとを前提としている。アメリカ側は、大使というのは米軍の立場を守ってくれることを期待している。私は日本政府の人間ですから、政府の立場に立ってやらなきゃいけないということで、どうしてもそこにコンフリクトが生じますから、精神衛生にはあまりよくないです。

そこで、米軍幹部に強調した点は、沖縄の人がいつも言っていて、稲嶺知事なんかもいつも言っていたことですが、戦後 58 年の——当時 58 年ですよ、僕が赴任した時点で——歴史の重みですね。沖縄戦で本土の犠牲になったこと。要するに県民の 4 分の 1 が亡くなっているわけですよ、沖縄戦で。それが終わったらアメリカの統治になって、返還闘争を経て 72 年に返還になったけれども、米軍基地が集中している。当時は日本中にある米軍基地の 75% ぐらいが集中しているということで、要するに本土にも米国にも平等に扱われてこなかった。これは、今は戦後 58 年の話だけをしましたけれども、沖縄の人と話していると、もっと遡るわけです。明治の初めの琉球処分まで遡っちゃうから。あの頃から差別されてきたという意識があるから、それが全部絡んでくる。

彼らにとって受け入れ難いのは、米軍基地が恒久化することです。「本土人」と書きましたけれども「ヤマトンチュ」、沖縄の人は「ウチナンチュ」ですけれども、ヤマトンチュがそれぞれの地元に米軍基地があることを嫌がるのは、「NIMBY syndrome」で受け入れ難い。英語で「NIMBY syndrome」と言いますよね、「Not In My Back Yard」という。ウチナンチュたちの「NIMBY syndrome」はそれに苦しんだ歴史があるのだから、正当化されるけれども、ヤマトンチュの「NIMBY syndrome」は受け入れ難いと思うわけです。

それから、稲嶺知事がよく言っておられたのが「点と線とマグマ」。強姦事件であるとか、場合によっては殺人事件であるとか、いろいろなアメリカ兵による事故とか事件とかがあると、その一つ一つは点かもしれないけれども、それがだんだん線としてつながってきて、それがずっとつながると、そ

の間に県民感情のマグマがたまる、それが時々噴出するということを言っていました。

そういうことから、何が大事かという、事件・事故の防止とか環境問題みたいな目に見える成果が必要になるということを米軍の幹部、四軍調整官をはじめとしていろいろな人に口を酸っぱくして言っていました。

他方、沖縄の人たちに対して言っていたのは、我々は基地の整理統合・縮小、地位協定の運用改善のためにいろいろ努力していますということ。それから、私はパキスタンで9・11同時多発テロ事件、その後のアフガニスタン攻撃を経験してから行ったこともあって、外の世界で起こっていることにもっと目を向けてほしいと。テロとか核兵器等の大量破壊兵器拡散などの脅威があるので、安全保障というのは現実の緊急な課題であるということをお話していただきました。

私が着任したのが2003年の1月ですけれども、その後まもなくイラク戦争になりました。『琉球新報』が2003年4月に「イラク戦争と沖縄」というティーチインを主催して、それに私も出ました。これにアメリカ人のかなり左の学者が出てきて、アメリカの批判を盛んにしていたのですけれども、私はそこでアメリカ政府を支持している日本政府の立場から発言して、大分叩かれました。そういう批判に対してはテロとか核兵器などの脅威の話をして、外の世界で起こっていることにもっと目を向けてほしいと言いましたけれども、あまり理解が得られなかったのかもしれない。それで、パキスタンのときの経験なんかも含めて、安全保障というか、備えあれば憂いなしということをお話もしました。ここは非常に難しいところで、最後に離任の記者会見で何が起きたかは後でお話しします。

—— 少し話が戻ってしまうのですが、沖縄大使として報告する相手というのは外務大臣、官房長官とかがいると思うのですが、他に沖縄担当大臣というのをもいたと思うのですが。

沼田 沖縄担当大臣はいました。沖縄担当大臣は茂木敏充さんもいましたね。その次は小池百合子さんでした。

—— 細田さんは。

沼田 そうですね。細田博之さんは2003年9月まで沖縄担当大臣、その後官房長官でした。

—— この報告する際の内容というのは、大臣によって変わったりするのですか。

沼田 どこに重点を置くかは変わります。でも、大体同じ話をしていました。

—— 先ほどの『琉球新報』のティーチインなのですが、アメリカ人の学者……。

沼田 ダグラス・ラミス (Douglas Lummis) という人。元海兵隊員。津田塾大で教えた後、沖縄にずっといる人ですよ。かなり左の反戦一辺倒みたいな人でした。

—— 大使は正式にパネリストと呼ばれたのですか。

沼田 そうです。

—— では、論戦を公衆の面前で行うという。

沼田 そうせざるを得なかったですね。

—— 基本的にそのアメリカ人も含め反戦・反軍的な意見で押してきたのに対して、大使はどういうふうにそれを。

沼田 今から考えると、大量破壊兵器拡散の話はその後おかしくなりましたが、パキスタンにもいましたからね。パキスタンでその脅威を身近に感じていて、やっぱりそういうのに無関心ではられないから、アメリカが軍事行動をとるというのも、それは理解できるという立場をとらざるを得ないわけです。当時の新聞記事を探しましたが、僕は、抑圧からイラク国民が解放されたとも言っていますね。沖縄市の市長の仲宗根（正和）さんが「県民は戦争反対の立場」、ダグラス・ラミスは「攻撃されるべきは米国」と言ったと、こういうトーンです。決して楽しいものではなかったです。

—— 沖縄の在沖米軍基地に対する批判なんかにはどういうふうに対処されたか覚えていらっしゃいますか。

沼田 それはさっき申し上げた基地の整理縮小ということで一生懸命努力している、それから事件・事故の防止なんかについてはなるべく最小限するようにと。沖縄の歴史の重みをアメリカ軍の人たちに対しては口を酸っぱくして言っていますとか、いろいろ言いましたけどね。

■ 在沖米軍による事件・事故

—— では、沖縄にある米軍基地の問題、事件・事故についてお伺いしたいと思います。

沼田 やっぱり米軍基地の問題って何だったかなと思って考えてみると、どうしても事件・事故になりますね。

まず、米軍関係者による犯罪などの事件についてですけれども、私の前任者の橋本大使が離任会見で「皆さん、アメリカ兵の犯罪が多いと言われるけれども、米兵の犯罪率は沖縄県民より低いですよ」ということを言ったら、県内のマスコミから大分反発がありました。私も離任会見で別のことで問題発言したことになっているけれども、これは非常にセンシティブな問題です。

細かい話は別として、何が大きな問題になっていたかというと、起訴前拘禁移転問題。地位協定 17 条 5 項 (c) との関連で、沖縄の場合には、米兵が何か犯罪を犯すと第一次裁判権が基地外の日本側にある場合でも起訴するまでは身柄はアメリカ側が拘禁しているというケースが多いのですけれども、それを早く日本側に移せというのが大きな問題になっています。私が赴任した時点では、その前に 2002 年 11 月 2 日にマイケル・ブラウン（Michael Brown）という海兵隊の少佐が強姦未遂事件を起こした。被害者はフィリピンの女性で、拘禁移転要請を県警がしたのですけれども、アメリカ側がこれに応じなかったということで、相当この問題はしこりが残っていました。結果的には、2004 年 7 月 8 日に那覇地裁が懲役 1 年、執行猶予 3 年の判決を出して、そして罰金 14 万円。弁護側は上告して最高裁まで行って棄却したという事件があつて、それがくすぶっていた。

それから、私が着任してから 2003 年 5 月に起きたのですけれども、金武町で海兵隊員——この人

は上等兵です——が婦女暴行致傷事件を起こして、6月16日に逮捕状が発出されて、18日にすぐ身柄が移転されました。これは福田官房長官も関与されましたし、ベーカー大使も相当尽力したということもあって、身柄の移転は早かったのですが、8月15日に求刑があって、9月26日に懲役3年6か月が確定。

こういうことを契機として、地位協定との関連では刑事裁判手続についての交渉というのが行われました。殺人罪とか強姦について起訴前に拘禁を移転すべきだということについての日米の交渉が行われたのです。地位協定17条5項は、「被疑者の拘禁は、その者の身柄が合衆国の手中にあるときは、日本国により公訴が提起されるまでの間、合衆国が引き続き行うものとする」というのがもともとの規定です。2005年10月、これは北谷町の事件の後ですけれども、「殺人または強姦という凶悪な犯罪の特定の場合に日本国が行うことがある被疑者の起訴前の拘禁の移転についてアメリカ側が好意的な考慮を払う」ということを言ったわけです。そのときに、「日本国が考慮されるべきと信ずるその他の特定の場合について日本側が提示することがある特別の見解を十分に考慮する」という合同委員会の合意があったのです。

そこで、とにかくもっと早く移転してほしいということで、日本側がやりたかったのは1995年10月合同委員会合意の「その他の特定の場合」というのをもっと明らかにしたいということだったのですが、アメリカ側は取調べにアメリカ側の関係者が立会できないということを非常に問題にしていました。アメリカ側の被疑者の人権が守られていないということを問題にされていて、この刑事裁判手続の交渉というのが随分時間がかかりました。7月から翌年の3月まで5回交渉しています。東京、ワシントン、ホノルル、ワシントン、ワシントン。その結果、2004年4月に合同委員会合意ができましたけれども、それは、捜査権限を有する米軍司令部の代表者が日本側当局による被疑者の取調べに同席することが認められる、と。これはアメリカ側がずっと要求していたことです。弁護士じゃなくて米軍司令部の代表者が取調べに同席することが認められる。日本側がずっと言っていた「その他の特定の場合」の解釈については、日本政府が重大な関心を有するいかなる犯罪も排除しないということを確認した。

これは一つの前進ですけれども、稲嶺知事の反応は、随分時間をかけて交渉していただいたことは多とするけれども、県がそもそも要望してきた地位協定の抜本的改定とは違うという反応でした。刑事裁判手続の問題というのは非常にいろいろな問題があります。アメリカ側にしてみれば弁護士も同席すべきだという話になるけれども、そうなるとカルロス・ゴーン事件みたいな話になってきますね。日本の司法自体の問題になってくるから、非常に厄介な問題だということです。

それから、米軍関係者による事件防止対策というのをどうするかということで、これは私のいるときに、2003年の軍人の検挙数が前の年に比べて凶悪事犯が34件増えて87人いた。凶暴犯、粗暴犯、住居侵入、器物損壊がコザ市のあたりですね。我々も隊員教育とか綱紀粛正とか実効的対策をとれということをいつも言っていたのです。これをブラックマン四軍調整官（海兵隊中將）ほか沖米軍上層部も非常に気にして、非常に深刻に受け止めた。彼らは要するにMPによる制服パトロールをしたいということを強く希望したのですが、制服パトロールというのは沖縄県警が非常に抵抗しました。県警は自分の仕事だと思っているということもあるのですけれども、制服で回られると占領時代に逆戻りしたみたいだという県民感情の反応が起こることを非常に気にしている。

ということで、非常に抵抗が大きくて相当我々も消耗したのですが、いろいろ議論していて、結局私が仲介して、ブラックマン四軍調整官と高橋清孝県警本部長（のちの警視総監、内閣危機管理監）を食事に招いて話しました。そういうこともあって、在沖米軍としては、綱紀粛正などの基地内措置に加えて海兵隊の中で「Liberty Card」、外出規制の制度を導入する。要するに、階級に応じて「Liberty Card」の何色のカードを出すかということによって、その効果として三等軍曹以下の若い兵士 8800

人の基地外外出を規制するということをやりました。県警は制服パトロールはいわば最後の手段であると言うのに対して、米軍は夜間外出禁止ないし一定地域をオフリミッツにすることが最後の手段であると言っていたのですが、結局、米軍の制服じゃなくて私服の生活指導巡回員と沖縄県警の警官の共同パトロールというものを沖縄市で3か月間試験的に実施しようということになって、これが実施されたわけです。沖縄市の飲食店がしばらく静かになって、事件件数も減少した。それから、実は何軒かの店についてはアメリカがオフリミッツにしました。事件の多いところを。それとさっきの「Liberty Card」なんかが功を奏したということがあります。

ただ、こう書くと割合簡単なようですけども、その間の根回しが結構大変でした。このときは堤副所長でしたが、堤副所長は沖縄市まで行って、コザの飲食街なんかの人たちをずっと訪ねて根回ししました。共同パトロールというのはどうですかといって根回しをして、彼らもあまり反対しないということが出てきて。上原康助さんって御存じ？ 社会党の議員でもう引退していましたが、彼はかつて沖縄の全駐労の委員長でした。駐留軍で働く労組の委員長だった人なので、私も彼を食事に呼んで、米軍の犯罪防止で何かきちっとしたことをやらなきゃいけませんといって、「ジョイント・パトロールというのはどうですか」と聞いたら、「それはいいんじゃないですか」と言われていたので、そのような根回しをした上でやっと県警を少し動かしたということです。

—— 上原さんとは、もともと何か沼田大使はつながりがあったのですか。

沼田 安保課長時代に国会でやられたという（笑声）。だから、顔は知っていました。

—— 大使からのイニシアティブというか、沖縄大使の方から打診したという形になるのですか。それとも、本省のほうになるのですか。

沼田 いやいや、僕のイニシアティブです。上原さんと泡盛を飲みながら。向こうもお酒強いですから大変でしたけど。

—— 順番に少し前のところもお聞きしたいのですが、合同委員会に関しては、大使は関与する立場ではないのですか。

沼田 僕は関与していません。これは東京の話になりますから。

—— ちょうど出たのが着任後になるということに。

沼田 きっかけになったのは沖縄の事件でしたけど、もともとあった95年の合同委員会合意に何を付け足すかという話ですから、これはやっぱり東京でやらざるを得ない。これは北米局の参事官とアメリカ側は誰だったかな、ペンタゴンとやっているわけですね。東京、ワシントン、ホノルル、ワシントン、ワシントンとやっていますから。だから、山田地位協定室長も一緒になってやっていて、それは合同委員会の合意ということだから、東京ないしワシントンでやっていて、沖縄でやっているわけではないです。地位協定全体の問題になりますから。

—— 先ほどゴーン事件のお話もありましたが、どうも日本国内でいろいろ議論されているのを見るとかみ合わないなという気がするの、やや図式的かもしれないですけども、外務省とアメリカ側

の交渉というよりは、法務省とか警察、そもそも日本の司法とアメリカ側の考える司法のずれの問題のほうがきいているのかなというような。

沼田 まさにそうです。だから大変なのです。これは最後にお話ししようと思っていましたが、琉球大学准教授の女性の何さんでしたっけ。

—— 山本章子さんですね。

沼田 彼女の本（『日米地位協定』中公新書、2019年）にもいろいろ書いてありますが、それほど簡単な話じゃないのです。たとえば地位協定 17 条についてアメリカ側からずっと言われているのは、米軍関係者の人権保障ということです。その中身はどういうのがあるかというと、起訴前拘禁移転を許すか否かという問題もあるけれども、さっきちょっと申し上げた弁護士を立ち会わせるべきだという話、これがゴーン事件みたいな話になってくる。

それから、米軍関係者の公務外の死亡事故について、家族への通報が済むまでは死亡者の氏名を公表しないでほしいという話もある。米軍の場合にはまず *next of kin*（最近親者）に言わなきゃいけないでしょう。それから初めて氏名を公表するということですが、日本側の警察がすぐ名前を出しちゃうと、それは困るという種類の話がある。

それから、これは刑事だけに限らないけれども、18 条で、米軍の公務中の行為に関連して生じる損害賠償の判決が米国を拘束しないようにしてほしいとか、司法制度そのものに関わってくるような話がいろいろ出てくるので、やっぱり中央での交渉になっちゃうし、相当厄介な問題が出てくる。

なぜそれを申し上げているかというと、地位協定の運用の改善だけでやっていてけしからんと言われますけれども、いざ地位協定を改定しようとするとうこういう問題が米側からも提起されて、とても困難な話になるということなんです。その根幹にはそもそも司法制度の違いというような問題があるということです。

—— ありがとうございます。その辺りがなかなか日本の中だと議論にならないなと思いつつ、一番重要なポイントなのかなと思っていたので。

沼田 まさに知事は「県の要望してきた抜本的改定とは違う」と言われますけれども、抜本的改定というのは、こちらの思っているとおりの改定だけではなくて、一旦手をつけ始めると、アメリカ側から今のような問題を全部提起されたらパンドラの箱を開けちゃうでしょうということです。

これは地位協定室にあらためて聞いて調べましたが、日米地位協定の見直しに関する議論で、見直ししろということをいろいろ言われるけれども、政府としては協定についてこれまで手当てすべき事項の性格に応じて効果的かつ機敏に対応できる最も適切な取り組みを通じ、一つ一つ具体的な問題に対応してきている、そのような取り組みを積み上げることによって同協定のあるべき姿を不断に追求していくということです。

私がやっていた頃よりも大分進んできているのは、今の刑事裁判手続の改善というのも、これは説明しましたけれども、次に「公務」の範囲に関する合同委員会合意の改正とか、環境補足協定の締結とか、それから、軍属が犯罪を犯した場合どうするかということについての軍属に関する補足協定の締結とか、これは後で触れますけれども、まさに飛行機が落ちたときのガイドラインの改正をすることとか、こういうのをやってきているわけです。だから、地位協定を改正しなきゃいけないということを言うけれども、それほど簡単な問題じゃないし、実際にはこういうことをやってきている。これは私

がいたときだけじゃなくて、その後の動きが多いですけれども、そういうことを皆さんもうちょっと分かっていたらいいなと思っています。

ほかにもいろいろあるのですけれども、米兵による犯罪についての話で主な点は以上です。

—— この米兵の犯罪、事件防止対策のほうについては、大使やサブの方でやられたということですが、外務本省というよりはかなり沖縄現地のほうで動くということになるのでしょうか。

沼田 そうですね。犯罪防止対策のほうは現地でやる部分が随分多かったですね。結局、県警と米軍との関係、どうやって両者を協力させるかという問題ですから、私が間に立ってその2つを引き合わせるというようなことが多かったです。

—— これは、そうすると、沖縄県ではないんですかね。

沼田 沖縄県ですけれども県警察本部で、県警本部長というのは警察庁キャリアのエリートが行くわけですね。高橋さんはその後、警視総監になって、その後内閣危機管理監。相当エリートが行くのですけれども、沖縄県警というのはまた沖縄県警独特の体質があります。だから、沖縄事務所の私のデピュティ、赤松君にしても、その後の堤君にしても、県警の刑事部長としょっちゅうやりとりしていました。沖縄県警独特のやり方があるから。米軍とも協力するように彼らを説得して動かすというのはなかなか大変な話だった。それは全部現地でやることですね。

—— そうすると、中央から来る本部長というよりは、もっと県警の中に入っていくような形。

沼田 そうですね。かなりそうです。

—— あと、追加的に個人的な関心もあるのですけれども、沖縄でも実際現地に行ってみると、たとえばコザなんかは基地からのお客さんがたくさん来てくれないとなかなか町全体も盛り上がらないということもあったりとか、沖縄といってもいろいろな違いがあったり、ずれがあったりすると思うのです。事件防止対策等を通じていろいろと関与があったと思うのですが、その辺りは大使はどういうふうに見られていたのでしょうか。

沼田 まさにその辺を、私のときの堤副所長が頑張ってくれました。飲食店も米兵が来なくなったら困るわけですよ。米兵が来なくなったら困るから、その範囲内でどうやったらいいかということ。だから、オフリミッツをやられると商売上がったことになるでしょう。米兵が来なくならないように、ただ犯罪が起こらないようにするにはどうしたらいいかということで、彼らのボトムラインは何かというのをこちらで心得た上で話をしないといけないから。だから、そういうことも含めて上原康助さんと話すのも同じような意味がありますけど、それも踏まえて県警本部長と米軍の両方に話をする、そのようなことになるわけです。泥くさい話ですよ、実に。

—— これらの点に関して外務本省の雰囲気と、これはもしかしたらこの後にお話しいただくような大きな事案のときのほうが出てくるのかもしれないですけれども、本省と沖縄現地にいて大分空気感が違うとか、そういうのを感じることはあったのでしょうか。

沼田 それはあまりなかったですね。後のヘリコプターが落ちたときの話のほうがもっとシリアスかもしれないけれども、それはあまりなかったですね。この犯罪問題、刑事裁判手続の話については、当時最初の頃の地位協定室長は山田重夫君です。彼は在米大使館時代に警察の人とか法務省の検事さんなんかと仲よくして、そういう縁も使っているいろいろな説得に努めたということはありません。

—— 合同委員会のことで少しお聞きしたいのですが、5 回にわたって東京やワシントンで行われたということですが、そのときに大使から意見具申をしたり、もしくは合同委員会についてということがあったという報告が大使のところに来るといえるのでしょうか。つまり、沖縄担当大使というのは合同委員会の意思決定の仕組みにどういうふうに関与しているのでしょうか。

沼田 あまり直接関係ないですね、正直申し上げれば。合同委員会は合同委員会としてやっていくという感じです。

—— 大使から、こういうことがあったのでこうすべきだという意見を述べる機会はあるのですか。

沼田 それぞれの事案の進め方についていろいろ意見を出していますから、それを踏まえた上で合同委員会をやっていくということだから。ただ、この刑事裁判手続の交渉については、さっきの説明でお分かりいただけると思うけれども、アメリカ側が関心を持っていることと沖縄が関心を持っていることは違ったわけでしょう。アメリカ側は、日本側のがちっと固まった刑事裁判手続にどうやって食い込めるかという話。こっちは身柄を早くよこせという話で、そこが違うので。この問題の背景にあるのは警察庁なり法務省の壁ということで、それはすぐれて東京の問題になっちゃうわけです。

■ 米軍ヘリ墜落事故

—— では、次に、2004 年 8 月の米軍ヘリの沖縄国際大学墜落についてお聞きします。

沼田 これが一番苦労した。

—— まず、この事件直後の対応についてご印象に残っていることをお聞かせください。

沼田 これはいろいろなことがありました。8 月 13 日、実は私はこのときカナダに行く内示を受けていました。夏休みを兼ねて東京に戻って、有楽町のビックカメラにコンピューターを買いにいったいきました。息子に連れられて。そうしたら携帯電話がチリチリと鳴って、電話をかけてきたのは、岩間さんがよく御存知の四方敬之君です。地位協定室長、今の経済局長ですね。彼も地位協定室長になったばかりだったのですけれども、「沖縄でヘリコプターが落ちました」と。午後 3 時過ぎでしたね。

それからが大変で、僕は家に飛んで帰って、飛行機を予約して四方君と一緒に沖縄に飛んで帰って、その日のうちに何とか県庁に行かなきゃいけないわけです。稲嶺知事はちょうどペルーを訪問していて不在で、牧野浩隆副知事でしたけど、牧野副知事の部屋に入ったのが午後 11 時 45 分です。だから、翌日にならないうちにとにかく県庁に行くというところまではやったのですけれども、それが 13 日当日。

牧野副知事のところに行く前にブラックマン四軍調整官に電話をして、非常に重大な事故なので事

故原因を徹底的に究明してほしいし、しかるべき措置をとってほしいという話をした上で、翌朝——13日というのは金曜日だったと思うのですが、翌14日朝に共産党とどこかの抗議団が来て、それを受けて、昼頃に外務政務官の荒井正吾さん——今の奈良県知事です——が来られて、荒井政務官とともにブラックマン四軍調整官を外務省の事務所に呼びました。それで、荒井政務官が話をして、それから政務官と一緒に牧野副知事のところに行って話をして、その後かな、沖縄国際大学まで行って現場を見ました。県の要求は、事故原因の早期徹底究明、再発防止措置を確実にするまで普天間所属の全ての航空機の飛行停止、それから普天間飛行場を移設するまでの安全対策をきちっとしてくれということでした。

それで、何が大変だったかという、米軍による事故現場の立入規制です。県警は外周りの部分を管理して、機体本体部分へのアクセスは米側が安全を理由に止めていたということになって、それが大問題になりました。当時の新聞の見出しは、「主権どこ　なぜ入れぬ」。こういう感じだったわけです。写真を見ると米側が何かやっていて、米側が作業しているのを消防の人が見ている写真かな。こういう状況で。

ヘリコプターの落ちたところが国際大学のビルの端っこでした。非常にビルに近いところ。私は荒井政務官を連れて見にいった、要するにここ（規制線）までしか入れなかったわけですよ、米軍が立っていてね。外務政務官だと言っても全然ちがいが明かなかったわけです。中に全然入れなくて、米軍ががっちり固めていた、そういう状況でした。

で、ブラックマンに対して、これは非常に印象が悪い、基地外で起きた事故であるにもかかわらずアメリカ側が管理権を持っているような感じを与えるから、これはいけないということを言いました。13日に事故が起きて、14日に非常に印象が悪いという話をした。15日からは米軍が県警と共同警備をするようになった。それが第1の問題。事故現場の処理の問題です。

第2の問題は、8月22日の朝にアメリカ側が、まさにCH-53Dという、落ちこちたのと同じ型のヘリコプターを6機、イラクへ向かって飛ばすと言ってきたわけです。我々は、事故原因が究明されるまで、それから再発防止措置が確立されるまで少なくともCH-53Dの飛行再開はやめてくれということ saying 言っていたのですが、アメリカ側がそれにもかかわらず強硬に飛ばそうとしました。これは東京で海老原紳北米局長（のちの駐英大使）が一応総理まで上げてというか、総理秘書官まで上げたうえで、それは飛ばすなということを海老原局長から米大のマハラック（Michael Michalak）臨時代理大使に対して言って、私からもブラックマン四軍調整官に対して言いましたが、米軍はこれを飛ばしました。私は電話連絡をずっと待っていて、そうしたらブラックマンから飛ばしたということ saying 言ってきて、そこで私が、墜落事故の原因につき十分な説明がなく、再発防止策が十分にとられたとの説明がないまま事故機と同型機の運用が行われたことに強く抗議をすると言って、ブラックマンは、作戦上万やむを得ない飛行でしたということ saying 言った。これが私にとっては相当つらい経験でした。そうしたら牧野副知事に呼びつけられて、牧野副知事としては、改めて普天間全機種 of 全機種の飛行停止を求める、地位協定の改定を強く求めるということ saying 言ってきました。

それで、8月31日に、このときは、ブラックマンはどこか……、四軍調整官というのは沖縄だけじゃなくて、沖縄からイラクぐらいまで全部見えていますから、しょっちゅういろいろなところへ飛んでいましたけれども、ブラックマンがいなくてフロック（James Flock）という、彼は少将だったかな、四軍調整官の代理がちょうど着任したときに、私がこのCH-53Dが6機飛行再開したということ saying ことで我々のクレディビリティが相当損なわれたということ saying 言いました。それから、さっきの事故現場の話で、米軍が施設・区域外で管理権を行使しているがごときパーセプションを与えたのは非常に問題であるということ saying ことを伝えました。

そこで出てきたのが地位協定の合意議事録の話ですけれども、「17条合意議事録10(a)及び(b)

に関し」の最初の方で、「日本国の当局は、……所在地のいかんを問わず合衆国軍隊の財産について、搜索、差押え又は検証を行なう権利を行使しない」とは書いてあるのですが、次のパラで「搜索、差押え又は検証を行なうことを日本国の当局が希望するときは、合衆国の軍当局は、要請により、その搜索、差押え又は検証を行なうことを約束する」と書いてあるわけです。これに基づいて県警は「検証の嘱託」というのを要請したので、これをちゃんとやってくれということを言いました。

その間、アメリカでは事故原因の究明が進んで、10月6日に第一海兵航空団司令ティーセン(Duane Thiessen) 准将が——彼は沖縄にいる人です——、その前の日の東京での合同委員会事故分科委員会で調査した内容を報告したのと同じことを私、西防衛施設局長、比嘉沖縄県基地対策室長及び安里宜野湾市助役にブリーフしました。内容は、事故原因はパイロットエラーではなく整備ミスだった、後部ローターのコッター・ピン(cotter pin)というのが欠落していたということです。それは整備のミスで見落としていた。その是正策としては、勤務時間の見直し、要するに疲れて見落としたということもあるだろうから勤務時間の見直し。それから、飛行前に全部チェックする項目というのがあって、目視でちゃんとチェックする項目があったのですけれども、その中にこの部分が入っていなかったのので、それを追加した。それから、整備マニュアルを修正した。それから、整備要員に対する行政的、懲戒的措置をとるということを言いました。この報告自体はかなりフルなものだったと思います。

それで一応この事件についてのアメリカ側の措置というのが明らかになりました。

—— 沖縄の状況に入る前に少し質問をさせていただきたいと思います。最初、大使は政務官と一緒に沖縄国際大学に行かれたということだったのですけれども、そのとき第一印象、実際に見たときの印象はどうでしたか。

沼田 これはひどいなと思いました。これはひどいなと思ったというのは、ビルの一部が黒焦げになっているわけです。それから、現場に入れないということね。やっぱりこれはイメージとしては非常に悪いですね。これは何とかしなきゃいけないという感じでした。ただ、これはあまり大きな声で言うことではないけれども、あのとき人命損失はありませんでした。

—— そうですね。夏休みで。

沼田 乗っていた米兵の怪我しかなかった。これはパイロットが非常にうまかったということは確からしいですけどね。ただ、それはあまり言えませんから。

—— 立入規制されていたということなんですけれども、イメージとしてどれくらいの距離があって、何が見えたんですか。

沼田 ここに沖縄国際大学のビルがあります。4階建てぐらいだったかな。その真ん前にヘリがおっこっているわけですよ。壁の一部が破壊されたみたいになっていてね。その周りに米兵がごちゃごちゃ、これは何メートルぐらいかな、10m、20mぐらいかな、この丸の中が。そんなに広いところじゃないですから。普天間の飛行場は隣ですから。すぐ隣。

実は大分前に、何年だったかな、九州大学のキャンパスにファントムジェットが落ちたという話、御存知ですか。あのときは九州大学のキャンパスに落ちましたが、県警が現場に先に着きました。基地から遠いところだったから。県警が先に着いたから、今回のようなこのような問題は起きませんでした。今回はとにかく普天間基地の本当に隣だったものだから、すぐ米軍が行ったわけです。それで、

エリアをセキュアしちゃったということが問題になりましたが、実際見て随分生々しい感じはしましたね。

—— ファントムの事故は 68 年ですね。

—— 日本側の雰囲気というか、今年になってからですかね、NHK のドキュメンタリーでもこの事故のことを BS で取り扱っているのを見たのですけれども、やっぱり立入りができないということや、沖縄国際大学のキャンパス内ですよね。ふだんであれば普通に立入りできますし、今は石碑みたいなものが建っていますけれども、やっぱりあそこに一切入れないということに対してかなり怒りがあったような。

沼田 本当にそうですね。それで、実はこの沖縄国際大学の事故の後に、似たようなヘリコプターが東村の高江というところに落ちました、2017 年 10 月 11 日。東村の高江に CH-53E というヘリが緊急着陸して燃え上がったけれども、このときに事故機の調査あるいは関係者聴取を米軍が地位協定を盾にとってできなかったということがあって、それも契機となって、今のこの合同委員会合意は 2019 年 7 月に改正されました。

ここで何が改善されたかという、迅速かつ早期に制限区域内へ立入りが実施されるようになったということ。それから、規制線内への立入手続を改善した。それから、機体の残骸の除去に当たって財産に重大な影響を与える可能性がある場合、米軍は状況によりほかの対応が必要な場合を除き、地方防衛局を通じて土地所有者と調整を行う。東江の場合には民有地だったわけでしょう。だから、その地主との調整を防衛局が行う。それまでは可能な限り早期に残骸を撤去することのみを規定していたけれども、この 2019 年の改正によって土地所有者との調整を日本側が行うことを規定するというようなことが改善されたということで、私がいたときに比べれば大分よくなったかなという感じがします。

—— このときの雰囲気というか、外務省関係者も含めて入れないということや、その状況に関してはどうかしないといけないというような感じだったのですか。

沼田 本当にそうですね。だって、私は荒井政務官を連れて行って入れなかったのですから。相当落胆しますよね。

—— 大学の敷地なのに政務官が行って入れないというのは、やっぱり普通感覚だと非常に大きな違和感がありますよね。

沼田 そうなんです。でも、米軍の人は、兵隊さんはあまりそういう感じはぴんときない。

—— キャンパスマップがあるので、それを画面共有させてもらっていいですか。この正門のあたりですかね。基地はこっち側だと思うんです、北側。違いますか。

沼田 北側？

—— 普天間基地はこっち側。

沼田 これは普天間？

—— はい。向こう側が普天間で、手前が普通の県道か何かで、バス停ですよ。

沼田 この辺じゃないかと思う。

—— 今多分建物を建て直したと思うんです。この本館、ここに事務棟みたいなのがあって、そこがぶつかったところだそうです。バス停があるちょうど手前ぐらいです。

—— ここですね、国際大学前バス停。ここに多分正門があるんですよ。

沼田 そうか、正門からあまり遠くなかったですね。この辺りだな。そんなに広いところじゃなかったですよ。

—— もう全部立入禁止になったんですか、大学は。

沼田 いや、この部分だけ。この中。

—— 当時の写真が出てくるのですけれども、こんな感じで、県道側から見ているんですね、多分写真は。いろいろなものがあるんですが、すごく燃えている写真とか出てくるんですよ。どこから撮ったんだろう。

たとえば、これは中に入って撮っている感じですよ。

沼田 ここまでは入れました。我々はこの辺から見ていて、ヘリコプターに近寄れなかったという感じですね。ビルディングのすごく近くで落ちたから。

—— もしここに人がいたら完全にアウトだったという感じですよ。

沼田 そうなんです。

—— 分かりました。ありがとうございます。

沼田 今の現場のことも大変でしたけれども、僕自身にとってショックだったのは、8月22日に6機がまた飛んだことでした。海老原局長にとっても非常にショックだったと思う。それは、後でまた言いますが、恐らくブラックマンも相当苦しかったと思います。上から「飛ばせ」と言われて抵抗できなかったのだらうと思います。電話で話している感じなんかでも分かりましたけどね。当時のライク（Thomas Reich）総領事もそこに一緒にいたらしいけれども、彼も随分苦労したみたいなのを後で言っていました。

海兵隊の上層部が飛ばせと言ったときに、それをひっくり返そうとすると、どうやったらひっくり返せたのか。あのときベーカー大使は日本にいなかったけれども、ベーカー大使がいたら違ったかもしれないという話もないわけではありません。

要するに何が問題かという、後で言いますけれども、日米の上層部の間では、同盟関係を大事にしていこうということとは総論としてはもちろん何回も言っているわけですね。しかし、こういう問題が起きたときに沖縄の感情をどこまで勘定に入れて措置をとるかということになると、そこまでの敏感性はアメリカ側にはなかったわけです。あえて言えば、日本側にもそこまでやらせる力がなかったといえそうかもしれない。在米大使館が動くという時間も余裕もなかったでしょう。それは、だって、日米の同盟だから、ヘリコプターを飛ばすぐらい当然じゃないかということのをワシントンの人は考えていたのではないかと思うけれども、そういう点は僕にとってはすごくフラストレーティングな話でした。

—— 飛行を再開しますというのがこの 22 日に来たということになるんですか。

沼田 午前何時かに来て、昼には飛んだわけです。だから、時間はほとんどない。2〜3 時間の話です。

—— そうすると、総理に上げてというのは、来た瞬間にもう秘書官に連絡するような形で。

沼田 それは東京の地位協定室のほうで連絡してやったわけですけどね。

—— それで、翌日に副知事とともにというような流れになると。

沼田 そういうことです。

—— アメリカ側が飛ばす理由として挙げた作戦というのは、イラク戦争絡みの作戦ですか。

沼田 イラク戦争絡みです。それははっきりしていました。

—— かなり緊急性は高かったんですね、彼らに言わせると。

沼田 でしょうね。何のオペレーションだったか、それはオペレーションだから言わないけど。そういう種類の問題というのはよくあります。

以上が私の苦い記憶 (painful memory) です。

—— ありがとうございます。

■ ヘリ墜落事故後の沖縄と日本政府の状況

—— では、次に沖縄の状況についてお聞きします。事故を受けて、沖縄では抗議活動が展開され、日米地位協定の見直しを求める声も高まりました。一方、事故の受け止め方には沖縄のなかにも温度差があったともいわれています。大使はこうした沖縄の状況を当時どのように認識されていましたか。

沼田 沖縄の状況は、マグマが噴出したと言うべきか、僕はアメリカ側には「semi-eruption」と言いましたけれども、95 年の少女暴行事件のときには全島一致の県民大会が行われて、8 万 5000 人、県

警の推定では 5 万人が参加したときがマグマの爆発だとすれば、このときは宜野湾市の市民大会、宜野湾の伊波洋一市長（のちの参議院議員）が音頭をとった市民大会というのがありましたが、これには稲嶺知事は不参加でした。稲嶺知事は自民党ですし、宜野湾市長とは必ずしも意見が一致しないから。主催者発表は 3 万人だけど、県警推定は 1 万 2000 人ぐらいだった。だから、95 年に比べれば規模は少なかったけれども、やっぱりマグマが出たことは間違いないので「semi-eruption」とでも言うのかなと思いました。

それから、米軍の安全措置に対する不信感というのが、海兵隊だけじゃなくて、空軍や海軍の全てに波及した。ほかの問題にも波及しましたけれども、そこまで説明している時間がないので、それは割愛します。

それから、地位協定の不平等性に対する感情が、さっきの現場処理の状況。九州大学の例に比べてもそれが非常に目立ったので、そういう感情が高まった。これを契機として、こういう事故が起きたときに現場でどう処理するかというのを担当する危機管理官というのを設けるべきだということを、これはたしか茂木大臣が言われたと思います。沖縄担当大臣をやっておられたから。それを契機として、内閣府から桐原弘毅さんという警察庁の若い人が、僕がまだいるうちに赴任しました。この前、地位協定室に確かめたら、危機管理官というのは今でも引き継いでいるようです。所属は内閣府ということになっているようですけれども、警察庁出身の人だと思いますが、沖縄に赴任しているようです。それで、そういう危機管理官なんかを中心として、さっき申し上げたガイドラインの改定が行われたということです。

以上が事故処理です。

—— ありがとうございます。では、今の話の流れの続きで日本政府の対応についてもお話しいただけますか。

沼田 日本政府の対応で一番感じたのは、海老原北米局長から総理まで上げたということは話しましたが、それにも関わらずヘリの飛行再開が強行されたということで、我々は非常に難しかったですね。沖縄事務所は何もやってくれないじゃないかという話になっちゃいますからね。当時の小泉内閣の対応が批判されたのではないかという御質問があったと思うけれども、その辺を指しているのかもしれない。そういう意味で、私が離任するちょっと前でしょう、離任したのが 12 月の初めですから。その 2～3 か月前の話ですから、最後の方が苦しかったです。

それと、さっきちょっと申し上げたけれども、日米同盟の総論について両国首脳レベルでいろいろ理解と認識の一致があると言われていたけれども、実際に同盟関係の一番下支えとなる沖縄での問題について、その実態についての認識というのは首脳レベルの理解とか認識と相当なギャップがあるんじゃないか。あえて言えば、米政府の上層部において沖縄基地問題に対する意識はそれほど高くなかったのではないかな。ラムズフェルドの話が次に出てきますけれども、あのレベルではそれほど意識していなかったのではないかしらと思うし、日本政府の上層部も、このときは総理の了解は出ましたが、どこまでアメリカと沖縄の県民感情をも踏まえて詰めて議論していくかということについての認識はそれほど強くなかったのかもしれないということもあって、私自身としてはあまり思い出したくない経験です。

—— すみません、思い出したくないことをほじくり返してしまいますけれども、この件は大使の外交官人生においても非常につらい経験であったということになるのでしょうか。

沼田 そうですね。つらい経験でしたね。僕の外交官人生で何が良かったかという話をすると、1つはこれですね。2つ目は9・11のとき、パキスタンで経験した在留邦人を帰したりした話。もう1つは、ロンドンでの英国人捕虜をめぐる和解の話。その3つですけれども、考えてみるとみんな戦争に関係しています。奇しくも、というか、当然そうなのかもしれないけど。その3つが記憶に残っていますね。

—— いろいろ現場で大変な苦勞をされ、板挟みに遭いということだったわけですが、この経験というのを外務本省に対して、もちろん平素のやりとりというのはあると思うのですが、何か報告を上げるとか、そういうことはされていたのでしょうか。

沼田 しましたよ。最後に僕は全体の総括として、当時の離任の書簡から引用します。

—— では、その点は最後にぜひお聞かせいただきたいと思います。

先ほどの3つの良かった点ということに関していうと、イギリスのときの戦争捕虜の話というのは、大使が非常に頑張られて和解の方向に導いた。9・11のときのパキスタンの問題も大変御苦勞されたけれども、オペレーションとしては成功した。

沼田 そうですね。

—— それに対して、この問題というのは苦い思いが残ったという感じになるのですか。

沼田 私が離任する時点では苦い思いが残った。その後は少なくとも現場の問題については大分改善されたようすけどね。記憶としては苦い思い出ですね。

—— ここで何うのが適当かどうか分からないのですが、危機管理官が警察庁からということで、日本の危機管理って結構いろいろなレベルで警察官僚がすごく重要なポジションを占めていて、それはそれで歴史的、内政的理由があるのだと思うのですが、私なんかは間に座って、こっち向くと外務省がいて、こっち向くと警察の人がいて、これ話が通じているのかなという感じがすることがしばしばあるのです。多分警察の方もそんなに国際畑の人材を育てているというわけでもないですよ。むしろ、中でのエリートコースを歩んできた方がこういうポストに就かれることが多くて。その点、実際現場で折衝なさる立場にあられて何かお感じになられたこととかありましたでしょうか。

沼田 難しい質問ですね。今の日本のナショナル・セキュリティ・アドバイザーについてどう思うかと言われると困りますけれども、僕は外務省の人の方がいいと思うけれども、それは別として。

沖縄の話に戻せば、やっぱり県警との関係って結構大変でした。さっきちょっと申し上げたけれども、沖縄県警というのは非常に独特な体質がありますから。県警本部長が大変良い人が来ても……。結局決めるのは県警本部長ですが、そこに至るまでのいろいろな案は、事務的にやっていくと副所長なり何なりが県警の刑事部長といろいろやらなきゃいけない。そこでなかなか明かすことがありません。桐原弘毅危機管理官は、赴任したときは県警本部じゃなくて我々の沖縄事務所に籍を置きました。それで風通しをよくしようとしていたところで私はすぐ離任しましたが、そのポストが続いたということはやっぱり意味があったのだろうという感じはします。

—— 沖縄の県警は、上に至るまで結構地元で固めているという感じですか。

沼田 そうです。

—— 大阪とかは結構中央から人が行きますよね。そういう感じではない？

沼田 必ずしもそういう感じではないですね。本部長は別だけど。

■ 米軍基地の整理・縮小・統合

—— では、続きの話で、今度は米軍基地の整理・縮小・統合についてお聞きしたいと思います。大使の沖縄在任中、普天間基地の移設問題についてどのような動きがありましたか。

沼田 整理・縮小・統合というふうにくくったのは、実は米軍再編の問題については基本的に東京でやっていた、大きな話として。その動きがあまりはっきりしないままで、沖縄との関係というのは結構微妙でした。なぜかという、後でお話ししますけれども、沖縄の期待感をあまり高まらせちゃいけないというのが一番の問題だったわけです。

まず普天間基地ですけれども、普天間の問題もいまだに続いています、私のいたときどうだったかという、2003年の春から夏ぐらいまでのことと言えば、稲嶺知事は辺野古の移設について、着工後15年間の使用期限ということを書いて、その問題の解決なしに着工はあり得ないということを書いていました。名護市長の岸本建男さんは、辺野古の移設は賛成していたのですが、ジュゴンの問題なんかをちゃんとしてくれということを書いていた。

宜野湾市については、私が着任して間もなく、革新の伊波洋一市長が当選して、彼は5年以内に普天間返還をしろということを書いた。下地幹郎議員は嘉手納統合ということを書いてた。嘉手納統合というのは、私が着任する前に麻生（太郎）自民党政調会長も言われたことがあるようです。けれども、2003年7月に沖縄市と嘉手納町と北谷町が嘉手納統合案には反対するという声明を出したということで、県内もいろいろな意見が出ていたということです。

2003年10月に衆議院議員選挙の沖縄第1区で公明党の白保台一議員は辺野古移設と言って、下地候補は嘉手納統合ということを書いて、公明党が勝ったということがありました。

2003年12月に『琉球新報』が調査したら、海外撤去と言ったのが48.6%、嘉手納統合と言ったのが14.7%、辺野古移設というのは10%未満ということで、これも意見が分かれた。

2004年2月～3月にかけていろいろな雑音が出てきました。アメリカの内部で普天間以外のオプション——嘉手納統合とか、どこかにメガフロートを浮かべるとか、伊江島にするとか下地島にするとかのようなアイデアが検討されているというような憶測とか報道が流れました。それを東京も相当気にして、3月5日に、僕が東京から言われて稲嶺知事に会いにいった、「普天間飛行場の移設・返還に関する代替案について米側から打診を受けているとの事実はない」、それから、「普天間飛行場の移設・返還はSACO最終報告、閣議決定、基本計画に従って進めることが日本政府の確固たる方針である」ということを稲嶺知事に伝えました。

いろいろな憶測が流れる中で、米軍の幹部がいろいろ言っているという話もあったものだから、アメリカ側のブラックマン四軍調整官などにも、この問題に関するいろいろな憶測が流れているけれども、それは沖縄県内の政治情勢にいろいろな影響を与えるからくれぐれも慎重を期すように申し入れ

ました。そうこうするうちに、4月19日から防衛施設局によるボーリング地質調査反対座り込みが始まって、5月16日には普天間基地を囲む「人間の鎖」というのがありました。

いろいろな代替案についての話が出てきた中で、日本政府としては工事期間をいかに短縮するかということに関心を向けました。環境評価に3年、工事に9.5年だと12.5年かかっちゃう、これをいかに短縮しようとするかということに日本政府は関心を寄せているということを言いました。その間に、参議院選挙がありました。参議院選挙で革新系の糸数慶子氏が勝ったということもあって、7月末に辺野古施設の建設を加速化するというのが日本政府の方針であるということをアメリカ側に伝えた。これは細田官房長官がNSCのマイケル・グリーン（Michael Green）に申し入れたということです。以上が普天間です。

—— ありがとうございます。再編のところに行く前に、辺野古のことについて皆さんから御質問があれば、よろしくお願いいたします。

—— 普天間の移転はいろいろなアイデアが出てきていると思うのですが、大使御自身はどれが一番いいとお考えでしたか。

沼田 やっぱり辺野古じゃないかな。嘉手納統合というのがいろいろ言われるのですけれども、やっぱり海兵隊と空軍と一緒にになったら相当大変そうですね。メンタリティも違うし、mode of operationも違うから、そう簡単にはいかないだろうと。メガフロートはいろいろ言われているし、ロバート・エルドリッジ（Robert Eldridge）なんかはメガフロートだったのかな。この辺になると沖縄の中のいろいろな土建会社とか建設会社の利害なんかが絡んでくるので難しいですよ。沖縄はそうじゃなくてもそういう種類の問題がいろいろあるけど。伊江島、下地島なんかはまいちという感じがするから、結局、嘉手納と普天間なんじゃないかと思います。でも、いつまでたってもうまくいかないですね。

—— 今、エルドリッジさんのお名前が出たのですが、大使が沖縄にいらっしゃった頃は、彼はまだ大阪ですかね。

沼田 彼は大阪大学の先生でしたけれども、僕は彼に招かれて、沖縄にいたときに大阪大学のOSIPP（大阪大学公共政策大学院）に講演に行きました。OSIPPで沖縄の問題だけでなくパブリック・ディプロマシーについて講演しました。そのときから彼をよく知っています。彼が沖縄の海兵隊に勤めたのはその後、僕がもう沖縄を離れてからです。今でも彼とコンタクトはあります。

エルドリッジの話を続けちゃうと、エルドリッジはグREGソン中将と非常に仲が良かったですよね。それでハワイのグREGソン中将のところに行きましたね。

—— アメリカ側の中で普天間以外のオプションが検討されているとの憶測・報道があったということですが、これは実際にアメリカ側から何かそういう情報というか検討しているというようなお話があったのですか。

沼田 なかったですね。私のところにはなかった。ただ、グREGソンが何か言っていたとか、そういう報道が流れました。NHKに対して何か言ったとかね。遠い将来にはintegrated basingというのがあり得るのではないかというようなことを言ったとかいう報道が流れたりして。端的に申し上げれば、

実はグREGソンがハワイから沖縄に来たときに言ったのですけれども、「そういうことを言ってもらっちゃ困る」と言いました。

—— アメリカが組織として、政府として考えているというよりかは、個人的な感想というか観測として。

沼田 個人的な感想というか、魑魅魍魎がいろいろなことを言っていた時期だと考えていただいていると思う。今でも言っているのかもしれないけれども。グREGソンが魑魅魍魎だというわけじゃないけど。

■ 防衛政策見直し協議（DPRI）

—— その次に、防衛政策見直し協議（DPRI）のことについてお伺いしたいと思います。日米両政府間では「防衛政策見直し協議」と呼ばれる在日米軍基地の再編協議が当時行われていました。大使はこの協議にどのように関わっていらっしゃったのでしょうか。また、沖縄で米軍と意見交換や交渉をすることはございましたでしょうか。

沼田 話さなかったわけじゃないけれども、あまり実質的な話はしていません。むしろ我々の関心は、県内の期待値が非常に膨れ上がる可能性があったので、それをどうやってコントロールするかということにありました。だから、我々が言っていたのは、在沖米軍は海兵隊と空軍が主力で、特に海兵隊が多いですね。陸軍というのはほとんどの部隊が小さいし、海軍は行ったり来たりしている。だから、米軍再編の効果というのは、在韓米軍 1 万 2500 人を削減するとかいう韓国とか、あるいはドイツと比べて非常に限られるということでした。

稲嶺知事は、2003 年の夏、アロヨ（Gloria Macapagal-Arroyo）大統領だったかの訪日のときにもフィリピンへの海兵隊の演習の移転というのがあり得るのではないかといいました。それから、後で触れますけれども、2003 年 11 月のラムズフェルド国防長官の沖縄訪問のときの話とか、あるいは新聞に出てくる在沖海兵隊の豪州移転というのがあり得るのではないかとというようなことで、県内の期待値は高まる傾向がありましたが、それをどうコントロールしていくかということに大きな関心があった。特に 2004 年 3 月～9 月まで海兵隊の 3000 人がイラクに派遣されたので、そのときに、3000 人をイラクに派遣して大丈夫なら、そのぐらいの削減は可能ではないかというような期待があった。

その間に、2004 年 6 月 8 日に日米首脳会談（ジョージア州シーアイランド）があって、その時の発表を引用しますと、「小泉純一郎総理より、日米安保体制につき、沖縄の負担軽減及び抑止力の維持という観点が重要であると思う旨述べるとともに、米軍の兵力構成の見直しの問題についてはよく事務的に協議させていきたい」。ブッシュ（George W. Bush）大統領は韓国のことについて言って、その上で「引き続き緊密に連絡していきたい、この地域における米国のコミットメントは引き続き強力である旨強調した」と。要するに総論しか言っていないわけですね。具体論には何も触れていない。このときに県庁は、県の希望が伝わったとして具体的成果を期待すると言っていましたけれども、県内マスコミは、具体的進展はなくて、県民は落胆しているという論調でした。

それから、その頃に在沖海兵隊の一部が北海道とか富士、座間に移転するのではないかとかいろいろな憶測が流れていましたけれども、我々は、これは今煮詰まっていけないということを言いました。

そうこうしているうちに、2004 年 7 月 11 日の参議院選挙で、「普天間の代替なき返還」を言って

いる野党共闘の糸数慶子候補が大差で勝利して情勢が厳しくなる。7月27日に川口順子外務大臣が会見で、米軍再編について今は事務レベルでいわばフリーディスカッションをしている状況ですということを書いて、28日に細田官房長官が、さっきちょっと申し上げたときと同じですけども、NSCのマイケル・グリーンに対して、仕切り直した、普天間をどうやって早くするかということに重点を置きたいということを書いた。そうこうしているうちに、11月8日に沖縄県は沖縄県独自の腹案策定を開始して、海兵隊の施設を中心に検討すると表明した。

その間ずっと、2004年の夏ぐらいから稲嶺知事は、米議会で海外基地見直し委員会というものの公聴会があるはずだ、その公聴会が開かれるときにはぜひアメリカに行って沖縄のことをアピールしたいということを書かれていた。しかしこの公聴会自体のメンバーをどうするかとかいろいろなことが整わなくて、私がいるうちには実現しなかった。それから、このときに私はたしか知事にも言いましたが、アメリカ議会で海外基地を見直すという場合に、沖縄の基地を削減するかという問題も出ないわけじゃないけれども、むしろ選挙区の問題として議員の票に直接関係するアメリカ国内の基地をどうするかということに関心が向けられる。だから、期待外れになる可能性がありますよというようなことは言っていました。

以上がDPRI。あまり中身がなくて恐縮ですけども、実際に進み始めるのは私が去った後なので。そこから後はグアムに行くとかいろいろ話が出て、タイムテーブルも随分こんがらかって、よく整理されていませんが、私のいたときは今申し上げたような状況でした。

—— 今、最後に、知事にもし行っても期待外れになりますよというようなことを伝えたということですけども、それは先ほど言われた中で言うと、マスメディアがいるところではなくて非公式にというところですね。

沼田 もちろんそうです。こういう話をするときはこっそり行きます。

—— それは一切表に出ない形で。

沼田 出ない形でやります。

—— 大使は、直接このDPRIの協議とかには参加されたわけではないんですね。

沼田 参加していません。

—— 感覚的な御見解で全く問題ないのですけれども、こういったアメリカの基地の再編は何度か行われているのですが、日本とか同盟国の申入れでアメリカが動くということはあるのでしょうか。

沼田 どうだろうな。でも、在韓米軍撤退はやめたというのがありますよね、カーター政権のときに。ちょうど僕がワシントンにいた頃だ。

—— あれは、日本も結構やめてほしいということを書いていますよね。

沼田 あれは効きましたよね。それから、この米軍再編の話もその後いろいろな紆余曲折があつて、僕も最終的に今どうなっているのか必ずしも頭の中が整理されていないけれども、海兵隊はグアムに

移すという話に一応なっているわけでしょう。なかなか進まないけど。あれもやっぱり日本からいろいろ言っていることが効いてはいると思います。日本はお金を出すと言っていますけどね。

—— やっぱり効くときは効くということですね。

沼田 効くときは効くのだろうと思います。なかなかうまくいかないけど。

—— 難しいですね。あと、マイケル・グリーンの名前が出ましたけれども、彼が沖縄に来たとか、そういうことはあるんですか。

沼田 いや、来ていませんね。彼を僕は知っていましたけれども、僕がいたときは来ていません。

—— 沖縄に何か米軍の要人が来たというのは。後でラムズフェルド訪沖を伺いますけれども、それ以外で何かありますか。

沼田 特に記憶にないですね。

—— じゃあ、やっぱりあまり来ないんですね。

沼田 そうですね、来ないですね。

—— 2004 年って結構微妙な時期で、一時期のブッシュ政権の飛ぶ鳥を落とすような勢いはなくなってきていて。これはちょうどファルージャの戦いが始まってイラクの情勢が悪くなりつつある頃で、ヨーロッパで反米主義もすごく強くなってきた頃かと思うのですが、この頃の日米関係について、どういう雰囲気だったとか、記憶していращやることはありますでしょうか。

沼田 いや、僕は沖縄のことを見ていたから。でも、僕の頭の中では、さっきのヘリコプターの話じゃないけど、決してうまくいっていなかったですから、やりにくかったなという感じはありますけどね。2004 年についてはね。沖縄にいて日米関係がうまくいっているが故に沖縄もうまくいっていると感じることはなかったですね。問題の性質上。

—— ただ、小泉政権でブッシュ・小泉ですから、日米関係も比較的よかった時期ではないかと思うんですけども、その割には首脳同士の関係があまり効いていないかなという感じが、沖縄を見ている限りではありますよね。

沼田 そうですね。そういう感じですね。

—— 当時はたしか、2003 年に北朝鮮の核開発問題がありましたよね。そういった北朝鮮情勢が何か沖縄での業務に影響を与えるということはございましたか。

沼田 なかったですね。

—— ほとんどなく。

沼田 はい。

—— じゃあ、あまり沖縄での業務に国際的な出来事が影響を与えるということではなくて、日々のオペレーションとか。

沼田 さっき『琉球新報』のティーチインの関係で申し上げたイラクの話は別としましてね。さっきのヘリコプターの墜落もイラクが影響するわけですけども、それ以外はあまりなかったですね。

—— 間接的にということですね。

■ ラムズフェルド国防長官の沖縄訪問

—— では、最後の、3 番目のラムズフェルド訪沖について伺えればと思います。2003 年 11 月にラムズフェルド（Donald Rumsfeld）国防長官が沖縄を訪問し、ヘリコプターで普天間基地を視察しています。このラムズフェルド沖縄訪問について、ご印象に残っていることをお聞かせください。

沼田 ラムズフェルドは、これは準備段階でやっぱりみんな気にしたわけですよ、ラムズフェルドも相当強烈な人だから。我々の関心事は、さっき申し上げたように米軍再編についての期待値を下げる必要があるなと思って。実は、2003 年 10 月 21 日に私はベーカー大使に会いに行きました、東京に行ったときに。その前に会ったのが、大使館にいたトーケル・パターソン（Torkel Patterson）という人。パターソンは国防総省の日本課長をやっていて、その後 NSC にもいたのかな。東京の大使館でベーカー大使のアドバイザーみたいなことをやっていましたが、彼と一緒に食事をして話したときに、沖縄の基地の問題を説明したら、彼がベーカー大使にも会わせると言ってベーカー大使に会いに行きました。

そのときに、ラムズフェルドの訪問がうまくいくようにということから、僕はやっぱりあまり対決色が出ないようにする必要があると言いました。ベーカー大使は、もちろん議会でラムズフェルドをよく知っていたわけですよ。ベーカー大使はラムズフェルドについて、「Abrasive, smart, but he does listen to people」ということは言っていました。私のほうから、対決色が出ないようにすると同時に、「ポジティブなメッセージを出していこう」と言いました。ポジティブなメッセージの中身というのは、後でまた触れますけれども、私がずっとアメリカ側に対して言っていたのは、沖縄の人たちに対して、よき隣人（good neighbor）であるだけじゃなくて、「helpful neighbor」であることを米軍の人に期待したい。それで、「インターナショナル・スクールを沖縄につくるのに貢献するとかいうようなことが考えられるのではないか」と話したら、ベーカー大使は、それはグッドアイデアなので自分の方でも考えてみるということをやった、というようなやりとりがありました。

それから、国防長官が来るに当たって問題はプレスの扱いで、さっきから申し上げていますがけれども、私が知事に会うのも陳情を受けるのも、原則として全部プレスが最初から最後まで一緒にいるというところですから、これは難しい。ラムズフェルドが来るときには冒頭取材のみにできないかということをやアメリカ側も言っていました。ただ、それはやっぱり県側は全体を公開するという慣例は崩せないということで、まあしょうがない、ラムズフェルドもプレスの扱いには慣れているからしょう

がないだろうということで、会談は全部プレスが同席するというで行われたわけです。

実際の知事とラムズフェルドの会談は、僕はその場にはいませんでした。県の関係者とアメリカ側の関係者しかいなかったから。ただ、県がバーベイタムの記録を作って、それを読みましたら、稲嶺知事は最初に分厚い要望書というのを渡したみたいですね。事前にも渡していたみたい。7項目書いてある。(イ) 基地整理縮小、(ロ) 普天間代替施設 15 年使用期限及び軍民飛行場の共用、(ハ) 海兵隊演習・訓練移転、在沖米軍兵力削減、(ニ) 地位協定抜本的見直し、(ホ) 事件・事故防止、安全管理、隊員教育、綱紀粛正。それから、これは何で入ったのかな、(ヘ) 米海軍新型低周波水中音波探知機の日本周辺海域での使用禁止、これは魚がとれなくなったらということでしょう。そして(ト) 航空機騒音防止対策。というのを事前にも渡していたらしいです。この要求を全部述べたようです。

そのときに、知事は、プラス面で米軍の人たちには沖縄での英語教育とか、これは後で触れますけれども、嘉手納でやっているスペシャル・オリンピックスなんかのボランティア活動とか、沖縄につくろうとしている新大学院大学なんかの関係でもいろいろ協力をいただいているというプラスもありますと言った上で、点と線とマグマの話をして、基地整理縮小が必要であり、訓練・騒音、沖縄県民は迷惑を被っていますという話を全部したわけです。

ラムズフェルド長官は、沖縄の人たちの大部分が自分たちを歓迎していることを喜んでいると。それから、訓練、演習、騒音のレベルは下がってきているということと言った。米海軍新型低周波水中音波探知機の話も何か答えていましたけれども、最後に、安保条約がある期間、この地域は平和であると言いました。

これだけ見ていただいて分かると思いますけれども、終わった結果、稲嶺知事は沖縄の立場と要望を目いっぱいぶつけたと御本人も思われたし、県内関係者もそう思った。他方、アメリカ側は、知事がプレスを意識して一方的に話をしてかみ合わなかったというふうに受け止めた。私もそういうふうに受け止めたということです。ちょっと残念でした。あまり対話にならなかった。

—— 最後の部分は、大使もどちらかという米側の評価に近い評価をされていたということですか。

沼田 やっぱりそうですね。だって、僕は事前にいろいろ根回ししようとしていたわけでしょう。ポジティブなメッセージを何とか出すようにとかね。予想していたことではあるけれども、ちょっと残念でしたね。

—— なるほど。その根回しの効果があまり出なかったということですかね。

沼田 あまり出なかったという感じですね。

—— 沖縄側としては、やはりプレスもいるから少し強く出たかったというところもあったのでしょうか。

沼田 少しというか、大分。

—— プレスを意識しているということなのでしょうけれども、この慣例というのは沖縄のメディア側が県にも要求している部分なんですか。

沼田 そうです。ずっと要求しています。

—— 県側としても、実質的な話合いをするのであれば、冒頭部分だけというのは本来はできるはずだったのに、やっぱりプレスとの関係性というのと、あと歴史的な慣習みたいなところから結局こういうことにならざるを得ないというところですか。

沼田 こういうことにならざるを得ない。それが非常にやりにくいところです。今でもそうなんじゃないかな。今の玉城デニー知事はどうしているか知らないけれども。

沖縄のメディアという場合に重要なポイントがあって、少なくとも私がいたときには『琉球新報』と『沖縄タイムス』の2つのどちらかをとっているという人たちが沖縄県民の4割だったかな。両方で人口の4割だから、人口は百数十万とすると50万部ぐらい。全国紙5大紙は『日本経済新聞』が一番多くて2000部で、『産経新聞』は200部とかいう話を聞きました。そういう世界です。

だから、沖縄のメディアというのは、新聞についていえば『琉球新報』か『沖縄タイムス』。『琉球新報』と『沖縄タイムス』のメインテーマというのは、少なくとも私のいたときには、基地と経済振興と観光かな。それはずっと変わらないわけです。そういう非常に限られたアジェンダの中でずっとやってきている。外国人の訪問者なんかに対する態度も、さっき申し上げたようなことになる。だから、私が陳情を受けるときも必ずテレビカメラが回っている中でやらなきゃいけない、そういう世界でしたから。

—— このときラムズフェルド側は何かアジェンダはあったのですか。そもそも誰が言い出してこれが実現したのですか。

沼田 ラムズフェルドが沖縄に来たいと言ったとのこと。ラムズフェルドは普天間を見に行って、上から見たのかな。やっぱりこのままじゃ危ないなという感じは持って帰ったみたいです。それは大事なことでしたけど。その後のDPRIの話には反映はされているだろうと思います。

—— 見方によっては、ラムズフェルドはミリタリーに対してものすごく強く出られる数少ないシビリアンでしたし、ちょうどDPRIもやるということで、基地再統合でこ入れするなら彼に食い込んだほうがいいという政治判断もあり得たと思うのですけれども。私は当時むしろアメリカ側からこれを見ていたので、うまくいくかなと思って。

沼田 だから、食い込み方を考えなきゃいけないところをあまり考えなかったということ。

—— そうなんでしょうね。

沼田 そういうことですよ。難しいですね。

—— たとえば、嘉手納統合案なんかは相当上まで上げないと、とてもじゃないけどできないわけで、ミリタリーレベルでやっていたら絶対落ちるところに落ちない。大統領レベルでガチャンと決めないとほぼ不可能だと思うのですけれども、こういう人が来たときは割とチャンスなはずなんですが、何かフラットにやっちゃったねという感じがとてもしました。

沼田 国防長官が来るなんていうチャンスはめったにないから。10何年ぶりとか言っていたかな。だ

から、目いっぱい要求を出したわけです。

—— いろいろなことをやっちゃった。ちょっともったいなかったですね、これ。

沼田 はい。

—— 新大学院大学って、これはどんな構想だったんですか。

沼田 それは次のアイテムに。科学技術大学院大学です。

—— OIST というやつですか。

沼田 そうです。Okinawa Institute of Science and Technology です。

■ 「良き隣人」「役に立つ隣人」政策

—— 最後に、基地問題関連以外のことをお伺いできればと思います。

沼田 それでは、珍しくちょっとポジティブな話をします。

1 つは「良き隣人政策」という話で、在日米軍と日本のいろいろな地元との関係で「Good neighbor policy」というのが言われていた頃ですよ。沖縄では 2003 年 6 月 14 日に第 4 回嘉手納スペシャル・オリンピックスというのがありました。これは嘉手納でやるのですが、県内の知的及び身体障害者 700 人と、在沖米軍と地元のボランティアが 1800 人参加してやったスペシャル・オリンピックスで、これは私も非常に感動しました。バーカー大使夫妻も見に来ていました。

そういうこともやっていたわけですが、私が最初グREGソン、それからブラックマンにしきりに言っていたのは、沖縄で「よき隣人」だけじゃなくて「役に立つ隣人」として米軍の存在を認識できないかと。沖縄をアジア太平洋及びほかの地域との国際交流の拠点として確立するという願望があるわけですから、『沖縄イニシアティブ』という本がありましたよね。2002 年に出た、高良倉吉さん（元琉球大学教授、沖縄県副知事）が関係しているアイデアですが、要するに沖縄を国際交流の拠点として、ハブとしてやっていくという話もあるわけですから。米軍は人材育成、特に英語教育の面で、米軍関係者及びその家族が全部合わせると 5 万人いるわけですから、それを活用することを考えたかどうかということを言っていました。そうしましたら、2003 年 7 月 16 日に四軍調整官がグREGソン中將からブラックマン中將に交代した式典の彼らの挨拶の中で「Productive and Helpful Neighbor」ということを言いました。これは僕の言ったことも採用したかなと思いました。

その頃に科学技術大学院大学をつくるという話があって、科学技術大学院大学をつくるというのは各国から優秀な科学者を集めるということですから、それがアトラクティブな仕事だと思わせるためには、ちゃんと子供の教育もできるようにしなきゃいけない。そうすると、沖縄にインターナショナル・スクールをつくる必要があるという話があって、それは米軍の子弟も行けるようなことも考えられるだろう、それにも米軍が協力したらどうかという話をしたわけです。稲嶺知事がラムズフェルドにちらっとその話をしていますけどね、科学技術大学院大学の話。

あと、私個人の話としては、県立向陽高校というのが文科省のスーパー・イングリッシュ・ランゲ

ージ・ハイスクールという計画の対象校になっていて、その運営指導委員会の特別顧問をして授業参観に何回か行きました。

「良き隣人政策」関係は以上です。

—— 先ほどの新大学院大学の構想ですけれども、これに大使が関わられていた部分もあるのですか。

沼田 いや、私のときはそこまでっていない。

—— このインターナショナル・スクールのアイデアを提供したということですね。

沼田 はい。ただ、このとき、細田大臣になっていたかな。細田大臣に会いにいったときに、科学技術大学院大学というのは今こういうふうになっているよという話を伺ったことはあります。それを基に僕は米軍の人に説明したわけです。

—— なるほど。

—— この件に関しては、日本政府全体の中で沖縄大使が果たす役割というのはどういうことが期待されていたのでしょうか。漠然とした質問で申し訳ないのですけれども。

沼田 期待はなかったと思います。ひどい言い方ですけれども、政府の中ではあまり頭になかったと思う。僕はむしろ、沖縄大使の役割というのはそういうのもあるということを認識してほしいと東京に対して言っていた。それは僕自身のバックグラウンドもありますが、外務省の中で英語ということに非常に関心を持ってきたし、コミュニケーションということに非常に関心を持ってきた。そういうこともあって、英語教育を重視した方がいいと言ったということです。

—— 組織としてということではなくて、大使御自身の。

沼田 そうですけど、僕は組織としてそれをやるべきだと思っていましたけどね。でも、基地のことばかり心配しているから、なかなかそこまで頭が回らないというような状況だったと思います。

—— 向陽高校の特別顧問に就任されたということだったのですけれども、ここで米軍の関係者を引き合わせたりということは。

沼田 なかったですね。

—— さすがにまだそこまでは。

沼田 そこまではなかなかいかない。

—— よろしいでしょうか。

沼田 ちょっと待って。その前に1つ。中国の潜水艦が尖閣のあたりに現れていた話というのが前の

御質問にありましたが、その話には沖縄事務所は関わっていませんでした。他方、2004年3月24日に中国人活動家7人が尖閣諸島に上陸したという話がありました。このときに沖縄事務所がちょっと絡んだ。この時は活動家7人が尖閣諸島に上陸したので、在京中国大使館員が沖縄に飛んできて、活動家に会わせろと。活動家は警察にいたわけですけどね。その活動家に大使館員が会って7人を送還するという話になりましたが、そのときに堤副所長がもともと中国語で、前任地が香港でした。香港でもそういう種類の話をやっていたということがあったので、彼が側面支援というか、通訳も兼ねて県警と中国大使館との間に立って手伝いをしたということがあります。そのときに県警は身柄を入管当局に引き渡して、3月26日に強制退去させた。沖縄県警もずっとこの人たちがいると困っただろうなという感じがします。これは側面支援です。

—— このときの話というのが、民主党政権のときには逮捕して大変になったけれども、2004年のときには比較的速やかに対処できたということになるのですね。

沼田 はい。

■ 離任に際して

—— 最後に、2004年12月に沖縄大使の任を終えられたわけですが、そのときにどのような感慨をお持ちになられたのでしょうか。

沼田 これは当時の離任報告からそのまま引いている部分がありますが、一言で言えば「忍」の一字だった。それはなぜかという、保守・革新を問わず米軍基地問題で抗議とか要求をする人たちにとって、外務省沖縄事務所と那覇防衛施設局が第一のターゲットとなる。私が在任中に抗議とか要請というのは書面を含め218件あって、うち私が直接会ったのは2年間で84件ありました。

2004年12月2日、私の離任会見で私が言ったのは、「在沖米軍の軍人は日本とかアジアの平和と安全を守る使命を持っており、必要が生じれば自らの生命を危険にさらすことも覚悟していることも念頭に置いて、米軍に常に抗議するのではなく対話をしてほしい」と言ったのです。これが『琉球新報』とか『沖縄タイムス』からけしからんと反発を受けて、稲嶺知事も反発されました。たしかそれまでは沖縄のマスコミの僕に対する扱いはそれほど問題はなかったんですが、最後に問題を起こしたということになっているのです。私が言ったことの中身は今でも信じていますけれども、こういう言い方をしても問題になるというのが沖縄の風土であるということが第1点。

第2点としては、さっきも申し上げましたが、米軍として何に気をつけて何をすべきか、あるいは避けるべきかを助言するポリティカル・アドバイザーとしての沖縄大使の役目は重要だったと思います。

さらに言えば、軍人というのはやっぱり軍隊という戦闘集団の行動志向的な linear thinking（直線思考）を持ちがちで、要するに目の前に障害があればたたき潰すという発想ですよ。それに対して沖縄の県民感情というのは、さっきの歴史の重みとか、点と線とマグマとか、本土の論理は我慢できないとか、いろいろな屈折した感情とか怨念とかが混じっているものですから、military linear thinking とそういう屈折した県民感情とか怨念との折り合いをつけるというのは難しい。そこをどうしてやっていったらいいかということはいろいろアドバイスしていかなきゃいけないということをつくづく感じました。

それから、さっきのヘリコプターが6機、事故の原因が解明されていない時点で飛んでいっちゃったときにつくづく感じたのは、日米同盟の総論ではいいとしても、各論で見えていくと、たとえば沖縄ではまだ脆弱な基盤がいろいろあるので、それがさらに不安定となると非常に危険であるということを経済政府中核部というか上層部に広く認識させるためになお一層の努力が必要だなという感じを強めました。

それから、これはさっきも申し上げたことですがけれども、いざ地位協定の改定交渉というとき、日米の要求がぶつかり合って、非常に苦しく時間がかかる交渉となると思われるので、私が離任のときに言ったのは、我々内部の心積もりとしてシミュレーション的なことをしておく必要があるだろうと。要するに、改定というのは将来まで全部否定すべきものでないだろうとは思ったのですがけれども、なかなかそうも言えないから、離任報告ではこういう言い方をしました。

さっきもお話ししましたがけれども、日米地位協定の改定という問題について、実際に問題が起きていたときにどういう解決をしてきたかというのがさっきの表で示したとおりです。

—— 「日米同盟の沖縄での脆弱な基盤がさらに不安定になる」という部分は非常に印象的なのですがけれども、ここでは「米政府中核等に」ということで「等」がついているのですが、各政権を見ていくと、日本政府の中核もこの点どれだけ理解しているのかなというふうに個人的には。

沼田 まさにそうなんです。ただ、もう僕は沖縄を離れるときはこう書きましたけど、日本政府も政権によって随分変わりますよね。鳩山政権は多分別だけだね。

—— あの政権は、別の意味でさらに脆弱にしてしまったような気がします。

沼田 さらに脆弱にしちゃいましたね。そのとおりです。

—— これは、大使として様々なポストに行かれ、各大使が離任報告として通常行うものの一環として出された報告ということになるのでしょうか。

沼田 橋本大使も何か出されたと思うし、こういう種類のものはそれぞれ出しますね。

—— カナダを離れるときとかパキスタンを離れるときも作られた、それと同じような形で出したと。

沼田 はい。

—— 沖縄大使というのは、潤滑油でもあり、火消し役、消防士でもあり、サンドバッグというか「巻き藁」でもあり、いろいろな役割を果たされている。ほかの大使の役割とは全く違うと思うのですがけれども、大使がこの沖縄大使を務める前と務めた後で、外務省の仕事というのでしょうか、大使の仕事というのでしょうか、そういうものに対する見方が変わったというようなことはありましたか。

沼田 さっき申し上げたとおり、沖縄に行く前は、特に僕は90年代は副報道官、ロンドンの次席、それから報道官とずっとやっていたので、外に対して日本の立場を説明して理解してもらうという対外発信というか、そういう意味でのコミュニケーションをずっとやってきたのですが、沖縄ではそれを控えて、ひたすら聞かなきゃいけない。ひたすら聞いた上で静かに米軍関係者なんかを説得するとか

いうことが必要になったので、私の中でそういう経験は人間としては役に立ったと思います。その後はカナダだったから割合普通にやっていたらよかったですけど。そういう意味では、外務省にいた経験の中でもいろいろ苦しいこともあったけれども、学ぶところは多かったと思います。

それから、ちょっと補足しますと、この離任の感想の中で、軍隊という戦闘集団の行動志向的な直線思考と沖縄の県民感情との折り合いというのは、実はこれは四軍調整官との関係でいえば、グレッグソン中将は、私がいたときにもう沖縄4年目の最後ぐらいだったので、かなり経験を積んでいて、沖縄の県民感情もかなり理解していました。まさに「Good neighbor」とか「Helpful neighbor」とか英語教育とかに非常に関心がありましたが、ブラックマン中将はまさにファイティング・リーダーという感じで、相当私の言うことが煙たかっただろうと思います。

それから、四軍調整官に私が会うときというのは文句を言うことが多かったですから煙たかったとは思いますが、そのうち、何回かやっているうちに、彼もしょっちゅう飛び回っているからなかなかつかまらないのですけれども、2 か月に一遍ぐらいかな、具体的案件があるから文句を言うだけじゃなくて、いわば時々ストック・テイキングをしましょうという話をしました。いろいろな問題があるけれども、全体を通じてどう考えたらいいかというのをストック・テイキングしようと言ってやっているうちに、だんだん彼も言うことを聞くようになったと思います。さっき申し上げた米軍人の犯罪の防止ということについては、彼はよくやってくれた、一生懸命やってくれたと思います。ヘリコプターの事故のときは彼も上からの圧力が相当あったのでしょうけれども、相当苦しうだったなという感じがします。

—— メインのカウンターパートはやはり四軍調整官の方で、国務省は総領事館とかあると思うのですけれども、そういうふうなやりとりというのは基本ないということですか。

沼田 いや、やりとりはありますけどね。最初に僕が行ったときはベッツ (Timothy Betts) だったかな。彼とは割合短かったけれども、その次のライク総領事ともやりとりは随分ありました。でも、沖縄でのメインアクターはやっぱり軍人のほうですね。ジェネラルズだけで 5~6 人いますから。その中でもやっぱり四軍調整官というのが一番重要な人物。

—— 軍とアメリカのシビリアンとの関係というのは現地ではどうなっているのですか。

沼田 シビリアンの言うことをやすやすと聞いているという感じではないですね、はっきり言えば。

—— 指揮命令系統が全く別ですからね。

沼田 それからもう一つは、在日米軍司令部との関係というのもまた別です。在日米軍司令部は横田にあるでしょう。在日米軍の司令官は空軍大将ですね。1 つランクが上だけれども、在日米軍司令部と沖縄の四軍調整官の関係というのもなかなか微妙な問題なので、必ずしも上下関係ではない。他方、たとえば事故処理の問題のやり方、それから刑事事件の裁判手続とかいった法律事項になると、横田の法務官というか、リーガル・オフィサーが絡んできて、彼らはかなり杓子定規になりがちです。だから、非常に堅い話が出てきて苦勞するということはありませんね。

—— そもそも占領していたときの四軍の司令官がいたのが四軍調整官にずばり来るわけですかね。

沼田 そうですね。

—— 高等弁務官というのがいましたよね。

沼田 はい。

—— あれはなくなったということでいいんですね。

沼田 あれはもう沖縄の復帰とともになくなりましたけどね。

—— 最後です。後任が宮本雄二大使ということですが、ここでは直接引継ぎとかをなさる余裕はありましたか。

沼田 一応しましたよ。彼と引継ぎをして、離任・着任のパーティーというのをやって、あのときは谷川秀善副大臣だったかな、副大臣が来られてやりましたけどね。引継ぎで知事のところへ一緒に行ったりしました。

原島大使から始まって野村、橋本、沼田と来ましたが、野村大使は沖縄サミットのときでした。野村大使のときが一番やりやすかったのではないかと思います。沖縄にとって非常にいい時期だったので、羨ましいと思うけれども。

—— 特に宮本さんに言い残されたことは何かありましたでしょうか。

沼田 さっきの離任報告で言ったようなことかな。でも、それは各大使が自分の思うとおりにやるほかないので。

沼田貞昭オーラルヒストリー ⑩

カナダ大使、退官

質問票10 カナダ大使、退官

1. 今回が最後のインタビューになります。2004年12月、大使は駐カナダ特命全権大使に着任されました。
 - (1) カナダ大使に着任されたとき、大使は日加関係についてどのような問題意識や展望をお持ちでしたか。
 - (2) 大使着任直後の2005年1月にはマーティン首相が訪日し、両陛下への謁見や小泉総理との会談を行っています。また、2006年6月には小泉総理がカナダのトロントとオタワを訪問しました。この両国首脳の相互訪問について、ご印象に残っていることをお聞かせください。
 - (3) 大使在任中、カナダとの関係で特に関心をお持ちになって取り組まれた事柄はございますか。また、当時、カナダとの関係で懸案となっていたことがありましたら、お聞かせください。
 - (4) 2009年7月、大使は天皇・皇后両陛下のカナダ・ハワイ御訪問に随行され、公式スポークスマンを務められました。この両陛下御外遊のことでご印象に残っていることをお聞かせください。
-

■大使略歴

2004年12月 駐カナダ特命全権大使（～2007年3月）
前任者：法眼健作、後任者：西田恒夫

■参考：当時の主な出来事

2005年1月 マーティン加首相訪日
2005年11月 APEC（釜山）で日加両首脳が「日加経済枠組み」文書に署名
2005年12月 BSE問題により禁止されていたカナダ産牛肉の輸入再開
2006年6月 小泉総理、カナダ訪問

■参考：当時の関係者

カナダ首相 ポール・マーティン（2003年12月～2006年2月）
スティーブン・ハーパー（2006年2月～2015年11月）

2. 次にご退官、そしてご退官後のお仕事についてお尋ねします。

- (1) 2007年3月、大使は駐カナダ大使の任を終えて、外務省をご退職されました。ご退職の時、どのような感慨を抱かれましたか。
 - (2) 外務省ご退職後、大使は国際交流基金日米センター所長に着任されました。この国際交流基金でのお仕事で強くご印象に残っていることはございますか。また、その後にお務めになられている日本英語交流連盟（会長）やフォーリン・プレスセンター（評議員）のことで強くご記憶に残っているエピソードがございましたらお聞かせください。
-

■大使略歴

- 2007年 3月 外務省退職
- 2007年 4月 国際交流基金日米センター所長（～2009年7月）
前任者：給田英哉、後任者：坂戸勝（所長代行）
- 2009年 6月 一般社団法人 日本英語交流連盟会長（～現在）

■参考：当時の主な出来事

- 2009年 在日カナダ公館設置80周年
- 2009年 7月 天皇・皇后両陛下カナダ訪問（オタワ、トロント、ビクトリア、バンクーバーを訪問）
- 2009年 7月 天皇・皇后両陛下ハワイ訪問（国立太平洋記念墓地で献花）

3. 40 年以上に及ぶ大使の外交官・外務官僚人生の総括として、最後に大使の目からみた日米関係・日米同盟の歴史的展開についてお尋ねします。大使は沖縄返還直後の 1972 年に最初に北米第一課に着任されてから 2004 年 12 月に沖縄担当大使を離任されるまで、30 年以上にわたって日米関係を内側から支え続けてこられました。この間、「日米同盟」という呼び方が定着したように、日米関係は安全保障面でとりわけ大きく変化しました。ご在職中の日米関係の変容について、大使はどのように総括・評価されますか。
-

カナダ大使、退官

■ カナダ大使着任

—— 2004 年 12 月に沖縄担当大使からカナダ大使に移られたわけですが、カナダ大使に着任されたとき、大使は日加関係についてどのような問題意識や展望をお持ちでしたか。

沼田 カナダは、北米局にその前にいたときも一応やっていたのですが、いざカナダ大使に赴任するというので、北米局のブリーフィングを受けたら、主要なポイントは、「あえて懸案はありません、強いて言えば懸案がないのが問題です」というものでした。そういうブリーフィングを受けたのは初めてでした。かなり問題のあるところをずっとやってきたので。

そこで、着任してみたら、やっぱり日加関係というのはうまくいっているとみんな思っていて、それがゆえにお互いに「Taking each other for granted」という感じが強かった。なぜかという、そもそも日本は工業国で、カナダは資源をたくさん持っている国で、ほっておいても経済はうまくいくという相互補完性（mutual complementarity）ということもあって、それを当然視している。ただ、これはずっと当然視しているとお互いに無関心になるおそれがある、Apathy に陥ってしまうおそれがある、そうすると、日加間にまだいろいろ探求できる潜在的可能性があるかもしれないけれども、それを見逃してしまうおそれもあるのではないかという感じを持ちました。

なぜそうなったのかなということを考えると、カナダの内政というのも結構流動的なんですね。よく言われることですが、英語系とフランス語系の対立というのがあります。

ちなみに、この英語系とフランス語系の対立ということについて、写真を見ていただきたいのですが、両陛下が写っていて、その間にいる肌の色が黒い美人が、当時陛下が行かれたときのミカエル・ジャン（Michaëlle Jean）総督ですが、彼女は 9 歳のときにハイチからカナダに移民として行った人です。そのジャン総督が就任したときのスピーチで、カナダの中には「Two Solitudes」があると言いました。Two Solitudes というのは、英語系のカナダ人の Solitude と特にケベックを中心とするフランス語系のカナダ人の Solitude、その 2 つの間がなかなかしっくりこないということから来る対立がある。他方、東の方ではオンタリオとかケベックが威張っているけれども、西の方、ブリティッシュ・コロンビアとかアルバータなどは東部に対して疎外感を感じているということがある。

さらに、都市と農村の対立というのがある。トロントというのは非常にコスモポリタンな町ですね、行かれると分かるけれども。モントリオールも大変にコスモポリタン。それから、バンクーバーは中国人が今は多いけれども、やっぱり大都市であると。そういうところと、本当にだだっ広くて何もなような、過疎で貧乏な農村というようにいろいろな対立軸があって、その中でカナダの外交政策というのは一貫性が欠けていて、日本をどう位置づけるかというのがなかなかはっきりしないということがある。

日本はというと、一般の日本人は、カナダはアメリカに属しているのではないかと、カナダ人はアメリカ人と同じだというふうに考えがちですが、実はそうではありません。カナダというのは非常に多様（diverse）で multiculturalism が進んでいて、政治状況もなかなか安定しない。そういうカナダとどう付き合うのかということについて戸惑いがあったのではないかと。そういうこともあって、日加関係はほっておいてもうまくいくという感じでの「Taking each other for granted」というのはあるけれども、他方、そのままほっておくと Apathy に陥ってしまう懸念があるという問題意識を私は持ったわけです。

■ 日加首脳の相互訪問

—— 大使着任直後の 2005 年にマーティン (Paul Martin) 首相が訪日されて、小泉総理大臣との会談などを行いました。その翌年 2006 年 6 月には小泉総理がカナダのトロントとオタワを訪問されています。この両首脳の相互訪問についてご印象に残っていることをお聞かせください。

沼田 実は、マーティン首相の訪日というのは、私が着任して 2 週間ちょっと後でした。12 月 28 日に着任して 1 月 16 日に首相訪日があったので、すぐ飛んで帰ってきたのです。マーティン首相の訪日のときの大きなポイントというのは、日加経済枠組みというのをつくろうということでした。さっき私が申し上げたように、潜在的可能性を見逃してしまうのではないかという認識もあって、二国間経済関係のさらなる促進についての研究を開始しましょうという話があって、実際この枠組みができたのはその半年ぐらい後だったのですけれども、それが 1 つです。

それから、国連改革について、小泉純一郎総理は、日本は常任理事国になりたいということがあったので、常任・非常任議席双方の拡大が必要であると言われたのに対して、マーティン首相は、カナダは常任・準常任理事国双方の拡大が必要であるということを言った。国連改革の話はまた後で詳しくやります。

それから、マーティン首相が L20、「L」は「Leader」ですね、「L20」というのを開こうと。これは大蔵大臣レベルでやっていたわけですが、それをもっと上の首脳レベルでやろうという話をした。世界的な問題を主要な先進国及び途上国が一堂に会して話し合う場をつくろうということを言って、それに対して総理は、グローバルに関心を持たれる問題で何らかの成果が上がるのかしらと割合消極的でした。総理にしてみれば、G8 とかいろいろあって行かなきゃいけないのに、何で L20 までやるのという感じがあったのだと思うのですけれども、こういうような問題提起があった。

それから、これは我々の関心事でもあるのですけれども、「human security (人間の安全保障)」の問題について、人間の安全保障委員会の最終報告書に触れて、生存、生活及び尊厳が脅かされている人々を保護し、彼らの能力を強化するために、人間の安全保障に関するアプローチや活動についての調整を探索していきましょうという話が両首相の間であった。

実は、この「human security」という問題について、日本人の考えている「human security」とカナダとかほかの特に西側の諸国が考えている「human security」は、ダブる部分もあるけど、ちょっと違う部分があります。「R2P」、「Responsibility to Protect」という議論がありますが、あれは humanitarian な問題について military intervention を認めるという趣旨がある。日本はその議論にはあまり乗っていないくて、もっと純粋な humanitarian なアプローチでいこうということでした。それは、私が 2005 年 4 月 11 日に当時のペティグルー (Peter Pettigrew) 外務大臣に会ったときにも、我々の言っている human security というのは、「Not an approach to justify military intervention but an approach to exhaust other than military means to prevent such situations from happening」というような説明をしました。それがマーティン首相訪日のときの話です。

次に大きな問題だったのが、国連改革です。これは皆さんお聞き及びかもしれませんが、2005 年 5 月に町村 (信孝) 外務大臣が世界各国に在勤している大使を集めて国連安保理改革について檄を飛ばしたという話を覚えておられますか。我々が集められたときに町村大臣から、アメリカが重い腰を上げつつあるけれども、どっちを向くか予断できない、中国や韓国が反対している、これからは胸突き八丁なので、みんな頑張れという話があって、国連代表部からは票読みをしていると 128 票は必

要だけれども、まだなかなかそこまでいかないという話がありました。

それを受けて、4月だったかな、みんな訓令を受けたわけです。特に常任理事国になりたかった日本、ドイツ、インド、ブラジルの我々4か国、G4が各国のキャピタルでJoint Démarcheをしろうという訓令が来ました。私もドイツ大使、インド大使、ブラジル大使と一緒にカナダ外務省に行って、Joint Démarcheをした相手がデイビッド・マローン (David Malone) でした。御存知ですね、国連大学の学長で今、日本にいる。彼が当時 Assistant Deputy Minister for Global Affairs をやっていて、彼のところに行って Joint Démarche をしたのですが、マローンの反応はかなり冷淡でした。彼がそのときに言ったのは、新たな常任理事国の拡大及び新たな拒否権付与に反対する。G4の言っているようなことだと、カナダが安保理に参加する可能性がますます遠のく。そう言われればそのとおりですね。それからさらに言ったのは、アメリカなどの大国にとって安保理審議が扱いにくくなると安保理で重要な意思決定ができなくなる、カナダにとって安保理の効果的機能が重要である。カナダはいずれにしても先頭に立って騒ぐことはしないけれども G4 の案は支持できないと、かなり冷淡だったのですが、実はこのときに僕とマローンがやり合っていたら、インドの女性大使から後で「日本の大使があんなに頑張ってくれるとは思わなかった。サンキュー」と言われました。インド人はよくしゃべるから、僕はインドの大使が頑張るだろうと思っていたのですが、彼女はあまり言わなくて僕が頑張っちゃったという感じです。ただ、そのおかげでマローンとは仲よくなりました。

その次に起きたのが、カナダ政府が「対外政策に関する基本方針」というのを——その次じゃないね、時系列的にはその前ですけれども——2005年4月に「International Policy Statement」というのを出しました。これはみんな期待していたのですけれども、このステートメントを出したときにマーティン首相は私を呼び入れました。マーティン首相は、ほかにEUの大使とブラジルの大使と南アフリカの大使と中国大使を別途1人ずつ呼び入れて、この「International Policy Statement」の話をしたようです。

そのステートメントの内容は、最優先事項は対米関係である。それから、Multilateralism を重視している。具体的には、国連の強化については安保理改革につき新たな常任理事国の拡大及び新たな拒否権の付与に反対するということが入っていて、それから L20 の創設ということを言った。これは小泉総理が消極的だったわけですね。それから、emerging giants、具体的には中国、インド、ブラジルとの関係を重視する。これは政治的な二国間関係を含むということを書いていました。要するに、中国、インド、ブラジルというのが非常に前面に出てきているので、日本の影が薄くなるなという印象を持ちました。

日本については、貿易投資の項で日加経済枠組み構想に言及していましたが、経済面からのみ捉えていて、これは物足りないなと思って、私もマーティン首相に呼ばれたときに、アフリカ開発とか気候変動、大量破壊兵器不拡散、人間の安全保障、感染症などグローバルな問題について日加にはいろいろ大きな協力の可能性があると言いました。要するに、この対外政策に関する基本方針における日本の扱いについては不満であるということ——「不満」とは言いませんでしたけれども——かなりはっきり言ったわけです。

そういうことを経て、2006年6月に小泉総理が来られました。これは保守党のハーパー (Stephen Harper) 政権が誕生したのが2006年1月ですから、その後まだあまり時日がたっていないときで、ハーパー政権が外交面でどう動くかというのがなかなかよく分からなくて、我々もジリジリしていたときでした。そこに小泉総理が来られた。この総理訪問の準備として、どういう成果文書を出すかということで東京から案が来て、我々はカナダの外務省、それから枢密院事務局 (Privy Council Office) ——いわば内閣官房みたいなものです——と調整をして案を作って、それを彼らが Prime Minister's Office (首相府) に送ったら、そこで止まってしまいました。

カナダの首相府というのは、この前に 1986 年のマルルーニ首相訪日の関連で申し上げましたが、要するに「Prime Minister's Private Office」、首相自身の手兵が集まっていると思っていただければいいので、ここがあまり役人的でない。たとえば我々が「peace and prosperity in East Asia」ということを 1 つのテーマとして挙げようとしたら、「East Asia」というのはあまり使っていない、「Asian」にしるとか、「peace and prosperity」でなくて「peace and security」と言えとか。それから、「human security」というのは自由党政権が言ったことなのでこの政権は好んでいないというようなことを言って、紙を出すという案はポシャりました。それも総理が着く直前だったです。そのときに我々が感じたのは、ハーパー新政権というのはやっぱり内政を偏重している、外交のグランドデザインが欠如しているということでした。

それから、その後、首脳会談をやって明らかになったのは、スティーブン・ハーパーさんは非常に個別の問題に集中する人だということでした。ある意味では今の日本の総理に似ているのかもしれない。ある人が、スティーブン・ハーパーのあだ名は「Stephen “Focus” Harper」だと言いました。そういう感じもありましたね。

それで、実際の会談になると、ここにあるような問題についてフォーカスしてきたわけです。1 つは、日加の FTA 交渉を始めたいということをはっきり言った。この問題は前からくすぶっていました。小泉総理が今の時点で交渉開始は困難だと言ったら、ハーパーは、これはカナダが非常に重要視しているので、あなたの後継者——この時点では小泉さんはもうそろそろやめられるということがはっきりしていたので——にもプレッシャーをかけますよと言いました。

それから、これが我々はショックを受けたのですけれども、Abduction の問題を取り上げたいと言うので、我々は北朝鮮の問題かと思ったら、子の奪取（ハグ）条約だった。これは結構深刻な問題です。カナダには具体的なケースが随分あって、要するに国際結婚して離婚したカップルの子供の親権を片方が持って子供を連れ去った場合に、もう片方の親が取り戻そうとするという話で、カナダ人の男性と結婚した日本人の女性が子供を日本に連れて帰っちゃって、それを取り戻そうとしてカナダ人の元の夫が騒いでいるというケースが具体的にあったのです。日本はハグ条約というのをまだ締結していなかったもので、それを早く締結してくれという話がありました。他方、小泉さんの言われている Abduction は北朝鮮の問題だった。そこで何かすれ違っちゃって、我々もちょっと困りました。

それから、ハーパーはやっぱり中国を非常に意識していました。小泉さんが中国についての我々のアプローチを言ったのに対して、ハーパーは、我々も中国を脅威ではなく機会（opportunity）として捉えていくというような話をしました。

それから、もう一つハーパーが重点を置いていたのはアフガニスタンです。アメリカと一緒にやろうと。アフガニスタンの復興支援という問題が出て、カナダは 2500 人のカナダ兵をカンダハール南部に派遣している。日本もカンダハール・ヘラート道路無償協力をやっていたということで、そういうことに協力していきましようという話があった。

それから、気候変動問題については、それまでの自由党政権はこれを重視していたのですけれども、日本にとって頭の痛い問題でした。ハーパーはこれに消極的で、温室効果ガス排出量の「絶対値」削減目標というのはカナダでは無理なので、排出「濃度」の削減を目標としているということを首脳会談の場で言った。濃度をどう測るのか、その場ではあまりはっきりしなかったのですけれども、要するに絶対値は駄目だという話だったわけです。

それから、人間の安全保障を小泉総理は取り上げられたのですけれども、ハーパー政権はこれには関心がないということでした。

安保理改革について小泉総理が取り上げたら、ハーパーは、これについてはいろいろこれから検討するけれども、「I have a fairly open mind」と、ちょっと希望が持てるようなことを言いました。

次までやっちゃいましょう。さっき首脳会談で出た日加 FTA・EPA の話ですけれども、この問題にはその後とても時間がかかりました。第 20 回日加次官級経済協議、これは 2006 年 7 月にあって、藪中（三十二）外務審議官が、FTA 交渉をカナダが始めたいというけれども、WTO の下で FTA をつくる場合の要件として、貿易額の 90%以上について関税を撤廃するというのがある。日本のカナダからの輸入を見ると農業製品が 57%あって、うち日本にとってセンシティブな品目（豚肉、小麦など）が 20%ある。そうすると、この 90%というのを満たせない。20%を 10%に落とせるか否かという問題があるという説明をしました。

ちなみに、日本と豪州との間でも FTA をつくるかどうか問題になっていて、こちらは豪州からの輸入額のうち農林水産品は 3 割程度。そのうちセンシティブ品目は 12～13%。オーストラリアの方がセンシティブ品目は少ないということでしたが、これに対して貿易省のモラン (Marie-Lucie Morin) 次官——彼女はケベックの人です——が、貿易構造に変化が起きるまで待つべきではないと言って、この問題をどうするか、要するに FTA の feasibility study を開始するか否かについて、1 年たって次の Joint Economic Commission のときに再検討 (revisit) することにしようということになりました。

私は、2006 年 3 月に離任しましたが、2 月ぐらいかな、エマーソン (David Emmerson) 貿易大臣に離任表敬をしたときに、この共同研究というのは共同研究をしてそれで終わりというのではなくて、先につなげていくという形で収めることが必要だと言うと言って、彼もそうだと言っていました。

これは日本側から見て FTA じゃなくて EPA (Economic Partnership Agreement) と呼んでいるわけですけれども、実際に共同研究が始まったのは 2011 年 2 月、共同研究の報告書というのがその 1 年後の 2012 年 3 月に出て、それから 2012 年 11 月～2014 年 11 月に 7 回交渉しましたが、その間に TPP の話が進んで、TPP が 2016 年 2 月にできた。TPP に加えて日加の EPA をやる必要があるか否かという議論はあったのですが、カナダも TPP に入ったのでそれは必要ないだろうと言うことで、一応その話は収まったということです。

以上について、まず質問を受けましょう。

—— 安保理改革のところですけども、この問題、私も当時大学生だったのでうっすらと覚えているのですが、結構国内で常任理事国になるための運動をすべきかどうかというので意見が割れていて、外務省の中でも結構意見が割れていたみたいなのを見たような覚えがあるのです。当時、沼田大使としては、これはどういうふうにお考えでしたか。実現できそうというような手応えはありましたか。

沼田 いや、なかなか難しいなと思いました。カナダはかつて 90 年代自由党政権時代に、日本が安保理に入るのを支持すると言ったことがありました。だから、何か希望が持てるということをみんな考えたらしいけれども、さっきのマローン次官補の 4 点はカナダの立場としてはいずれももっともなことです。要するに、自分のところに回ってこないのになぜそんなのを推進する必要があるのかという話で。そう言われちゃうと、でも黙れとは言えないでしょう。だから、私は難しいなと思いました。ほかに、アフリカをどう取り込むかという話があって。それから、中国が大きな壁になって、韓国も反対してかなり走り回っていたという状況で、なかなか客観情勢は難しいなと思いました。そうは言っても、大臣が檄を飛ばされていたという状況で Joint Démarche をしましたけれども、カナダとの関係は難しいなと思いました。

—— これは、当時は本省で町村大臣以下、指揮をとっておられてということだと思いますけれども、沼田大使のところにもたとえば票読みのお話ですか、今こういう状況でとかいうのは随時情報が来る

ということだったのですか。

沼田 ある程度は来ていました。あまり細かい話はなかったと思う。ちなみに、これを本省でやっていたのは当時総合外交政策局長の西田恒夫氏で、彼は僕の次のカナダ大使になりました。

—— 安保理改革ですけれども、G4 の Joint Démarche というのは、町村大臣が各国大使を全員集めた後にそれぞれの国でこの G4 が集まって、それぞれの国の政府なり外務省なりに働きかけを行えということで、別にカナダだけでやっていたわけではないということですか。

沼田 いろいろな国でやったはずですよ。

—— カナダというのは、やっぱりキーだったのですか。

沼田 実際には大きな役割を果たしていたけれども、さっきのマローンの発言の中で、「カナダは先頭に立って騒ぐことはしないが、G4 を支持しない」と言ったわけです。これが彼らの立場です。要するに、騒ぎ立てないけど私は支持しないよと言っているわけです。だから、それはそれなりに影響力があるわけです。

—— 今日に至るまで G4 は細々と総会のときに安保理改革のための会合を開いていますけど、もう当時から 15 年以上経過する中でかつてのような大きな盛り上がりはないですね。

沼田 ないみたいですね。

—— あのときすごく盛り上がったというのは、やはり町村大臣をはじめとして政治側がかなり強くコミットしようとしていたというのもあるのでしょうか。

沼田 そういう感じがしましたね、正直言って。

—— やっぱりそうなんですか。

沼田 そのために全部の大使を集めるというのもなかなかやらないことだから。

—— その点に関連して、政治家というと、もともと小泉さんは 90 年代、安保理常任理事国入り反対の急先鋒だったわけですが、結局小泉政権の下では、G4 の呼びかけとか、そういうのを形式的にはやっています。ただどうも外から見てみると熱心なのは外務省で、総理が率先してやっているような印象は全くなかったのですけれども、その辺りはどのように見られていましたか。

沼田 そうだったっけ。よく分からないな。外務大臣が熱心なことは分かっていたけれども。

—— 総理からどうこうというのではなくて、外務大臣の熱心さが……。

沼田 はい。

—— ちょっと前後してしまうのですけれども、カナダでハーパー政権ができた直後、というよりは数か月たって小泉さんが行かれるわけですが、この段階だとやっぱりまだ新政権ということで、どういうふうはこの政権が対外政策をやっていくのかとか、日本に対してどう臨んでいるのかみたいなものが見えない中で首脳会談が行われたということでしょうか。

沼田 そういう感じでしたね。自由党政権がこの政権交代まで 12 年続いたわけですね。12 年も続いて、ハーパーは外交にそう関心があるという感じじゃなかったから、外交全般についてどういうプライオリティを持って、何を考えて政権を発足したのかというのがなかなか見えなくて。対米関係を重視しているとか、アフガニスタンが大事だとか、そこまでは見えても、アジアについてどう考えているかというのはなかなか見えない。

中国とかインドのことはやっぱり重視しているだろうと思いました。というのは、カナダには Chinese Diaspora（中国系コミュニティ）も Indian Diaspora（インド系コミュニティ）も強力なのがありますから、彼らの影響を受けるわけです。だから、そういうこともあって中国やインドを重視するだろうということはありませんでした。もっとも中国については保守党としてイデオロギー上の抵抗はあったでしょうが。その中で日本の位置づけがどうなっているかというのがいまいちはっきりしない感じだったわけです。

そういう状況でいざ総理が会ってみたら、第 1 に FTA、その次に Child abduction という話になったわけです。だから、あまりいい感じの話にはならなかったですね。そこから後は、僕が離任するまで、結局日本の位置づけはどうなっているのかと思って、日本が大事だという話をずっと言って回ったのです。それから、ハーパー政権が重視している FTA の交渉というのはなかなか始められる状況になってこない。結構大変でした。

—— 時期としては政権ができたばかりのタイミングでの首脳会談というのはなかなか難しいなという気もするのですけれども、何でこの時期に。

沼田 総理がずっと来ていないから、早く来てくださいということをやっていて、たまたまそうなった。このタイミングしかなかったということですね。

—— マーティン首相とは直接会談されたというふうに書いてあるのですけれども、ハーパー首相とは会談されたのですか。

沼田 1 対 1 の直接会談はしていません。実は、小泉総理訪加のときにずっと前からハーパー首相にアポイントメントを申し込んでいました。成果文書を出さないということになって困っていたら、小泉総理の到着直後の時間に向こうから会ってもいいと連絡が来たけれども、たまたま小泉総理の到着時間と重なるのでしょうがなくて断ったということは覚えています。大使って、結構そういうとき困ります。総理をお迎えしないというわけにもいかないし。

—— どちらの総理をとるかという。

沼田 そうそう。

—— すごく漠然とした質問ですが、大使として行かれたとき、カナダの国際政治上における重要性はどこにあるとお考えでしたか。

最近でこそ、オーストラリアもそうですけれども、カナダもアジアの情勢に対して強く関心を持っていて、中国への意識を強めて具体的な行動もしていると思うのですが。国際政治上でのカナダの存在感をどういうふうに位置づけたらよいのか、いまいよく分からないところがあるんです。たとえばアメリカとも同盟を組んでいますし、ヨーロッパ諸国とも同盟を組んでいるわけですが、大使から見たときのカナダの対外政策の在り方みたいなものがどういうふうに見えていたのかなと。

沼田 それはカナダの政権によっても変わるのですね。自由党政権が 12 年続いたと申しあげましたけれども、レスター・ピアソン (Lester Pearson) の時代まで遡れば、Multilateral diplomacy、国連外交なんかでカナダが非常に積極的な役割を果たしていた時期はあるわけですね。特に国連 PKO の関連で。そういう意味で、カナダというのは一つの理想像みたいなものがあります。ただ、ハーパーはそれと真逆のことを言っていたわけです。だから、ちょっとトランプに似ていますけど、断絶があった。さっきの human security の問題は最たるものですが、そういう意味で、カナダの international standing というのは下がっちゃったということはあると思います。保守党政権の間は気候変動についても消極的でしたしね。

ピエール・トルドー首相の自由党政権まで遡ればかなり華やかにやっていたわけでしょう。それから、90 年代のアックスワージー (Lloyd Axworthy) 外務大臣かな、対人地雷禁止条約とか。かなり華やかにやっていた。そのイメージがあったけれども、それはこの政権交代で変わったので、さてカナダはどういう面でその存在感を残していくのかなということは私の頭の中にはあった。それから、ハーパー政権が登場してから、もっとアジアに関心を持つべきだとか、日本にもっと関心を持つべきだということは離任するまで言い続けました。

—— 日加の FTA、EPA について、特に推進していた勢力やグループ、人というはあったのでしょうか。

沼田 カナダの中では CCCE (Canadian Council of Chief Executives) というカナダの経団連みたいなのがあって、そこが推進していましたね。日加経済が何となく mutual complementarity で満足していたら、それはやっぱり限界がある、それを高いレベルに上げる必要があるという意識はカナダのビジネス・コミュニティの中にはありました。問題は、日本の中でそれを強力に推進する応援団 (constituency) がなかなかなかったということです。

これは、カナダにいたときにもオーストラリアとの比較というのがしょっちゅうあって、実は日豪の EPA の交渉というのは先に始まったわけですね。僕がカナダに対して言っていたのは、さっきの貿易額の 90% という条件を満たさないよということを言って、それと豪州と比較しても豪州の方が農産品が少ないということを言うと同時に、日豪というのはやっぱり同じ Asia Pacific の一員だという意識があって、日本人にとってよっぽど親しみやすいし、それからビジネスの面でも応援団がいる。日本の経済界の中にはオーストラリアに対する応援団がいる。岩間さんのお父さんをはじめとしてね。それに対してカナダは大分違う。そこを何とかしなきゃいけないという話をしたし、それから、オーストラリアとの比較で言えば、オーストラリアは日本がイラクに自衛隊を派遣したときに守ってくれたわけでしょう。そういう意味での common interest みたいな意識もあるけれども、カナダとの関係では残念ながらそこまでいっていないというような、いろいろな要素があるから難しいということをやっと言っていたわけです。

■ カナダ大使としての活動

—— では、次の大使としての関心事項というところに進めていただきたいと思います。カナダとの関係で特に関心をお持ちになって取り組まれた事柄や、カナダとの関係で懸案となっていたことがありましたら、お聞かせください。

沼田 これは今まで話してきたことの延長ですけれども、じゃあ私が何をやろうとしていたかという、カナダの政府とか議会とかビジネス、メディア、学界などに対して、特にこれはハーパー政権になる前から言ってきたことで、先ほどハーパーという人は **Mr. Stephen “Focus” Harper** だ、ピンポイントなアプローチをしてきたと言いましたが、やっぱり日加関係を包括的に発展させる必要がある。だから、絵にたとえればこの部分とこの部分とこの部分だけというのではなくて、全体として、フルキャンバスを考えてやっていく必要がある、相互無関心に陥ってはならないということを言い続けました。

それから、日加経済関係は伝統的貿易構造からの脱却、高度化を図るべし。要するに、カナダが一次産品を作って日本が工業製品を作るというだけじゃなくて、たとえばハイテクとかを導入すべきである。

3 番目に、カナダは日本企業、特に自動車産業にとって北米市場へのゲートウェイとなっている。カナダにトヨタもホンダも進出していて、そこで造った車がアメリカに行っているわけですからね。そういう意味で、日本企業にとって北米市場へのゲートウェイとなっているし、日本はカナダ企業にとってアジアへの **stepping stone** ないしゲートウェイとなるので、そういうことを踏まえて関係を発展させていくべきである。

それから、日本はアジアにおける **stabilizing force** である。なぜかという、平和国家として、もう戦争しません、侵略しませんということを掲げてきたし、日米同盟を発展させているし、最も成熟した民主主義国家であり、最も成熟した市場経済国であるということをカナダとして見逃してはいけない。そういうことを総合して考えると、日本はカナダと価値観を共有する、東アジアにおけるもっとも信頼に足るパートナーである。

さらに、マルチの面では両国は大量破壊兵器の拡散防止とか国連改革、人間の安全保障、平和の構築など共通の関心を多々持っているし、両国の協力のポテンシャルティを発掘して、相乗効果 (**synergy**) のある協力を進めていくべきであるということを言い続けて、日本が国際平和と安全のために応分の責任を果たしていくために、国連改革、日本の常任理事国入りが必要であるということをいろいろな場で言い続けました。

具体的には、広報・対外発信ということでは、オタワだけでやってもあまり意味ないんです。オタワというのはキャンベラみたいな人工的なキャピタルですから。カナダ各地の大学とか研究所、国際関係団体に行って政策講演をしましたけど、これは自分で売り込まないといけません。ただ待っていても招待は来ないから。いろいろなところに売り込んでカナダ各地で講演を 19 回やって、マスコミによるインタビュー 46 回、メディア関係者へのブリーフィング・懇談 14 回、大使名での反論投稿 2 回、これは原爆の話と気候変動かな。それと **Op-ed** (論評) の投稿 8 回というようなことをやりました。

あとは文化行事。オタワには日本企業がいませんから、オタワ以外での日本企業関係行事におけるスピーチ、文化行事と日本企業関係行事におけるスピーチは合計 46 回。文化行事としては、たとえ

ば生け花インターナショナルというのがあって、家内が生け花インターナショナルのオタワ支部の名誉顧問になっていました。これにクレティエン（Jean Chrétien）元首相夫人のアリーヌ（Aline Chrétien）さんが入っていました。それで家内が彼女と仲よくなった。それから、私の離任の数か月前に観世流の河村晴久さんという人が一座を連れて来て能の公演をやって、そこにジャン総督と彼女のフランス人の御主人（映画制作者）と、当時まだ小学生だったお嬢さんを連れてきました。そのときに中国大使夫妻も招いたら、大使は来ていなかったけれども、大使夫人が来ていて、総督が来ているのを見て彼女はショックを受けたらしくて、私の家内に「どうやって総督に来てもらったの」としつつ聞いていました。

以上です。

—— ありがとうございます。次の両陛下のカナダ訪問に行く前に、質問をお願いします。

—— この頃、日中関係はやっぱり非常に厳しい状況にあって、カナダには中国人コミュニティというのでしょうか、結構強いものがあると思うのですが、カナダ大使としていらっしゃるときに日中関係の厳しさ、もしくはそれがカナダ政府に反映して大使に、日本政府に対する見方が厳しくなるといったようなことはあったのでしょうか。

沼田 少しありましたね。オタワではあまり感じなかったけれども、バンクーバーでありました。直接には、日中関係というか、カナダでは旧日本軍の捕虜のことはあまり問題にならなかったけれども、たまに問題になることがあります。そうすると、中国系の団体につながるのある団体がちょっとした抗議みたいなのをやるというようなことではありました。それから、私がカナダ各地の大学に行って政策講演なんかをしていると、中国からの留学生がたくさんいますから、割合厳しい質問を受けるとか、そんな程度ですね。

—— 原爆に対して反論投稿されたというのはどういうことなのでしょうか。

沼田 細かく中身は覚えていないけれども、記事は、日本では原爆の被害者の側面が強調されるが、やはり戦争を終わらせるのに必要だったという趣旨だったと思います。それに対しての投稿でした。

—— 日加関係全般でカナダ側の反応がどんなものだったかということを伺えればと思います。いろいろ政策講演をされたときに、恐らく大使は日加関係の面で話されたと思うのですが、その際にカナダ側の学者とか学生はどういう反応を示したのかでしょうか。

沼田 1つ具体的な例を申し上げると、2006年の秋だったと思いますけれども、University of British Columbia で Asian Pacific Summit。Summit というのはどういうことかという、University of British Columbia だったかな、Asian Pacific Foundation だったかな、とにかくカナダ関係についてのビジネス界のリーダーとか学会の人たちをみんな集めてアジアについて議論するというのがありました。僕を招いたのは UBC のエヴァンズ（Paul Evans）教授でした。そこにオタワから大使が3人招かれました。実は僕が招かれて、ほかに誰かよくしゃべる人を連れてきてくれということで、G4 の Joint Démarche をしたインドの女性大使、もう1人はマレーシアの大使。彼はクリスチャンですが、なかなか面白い人がいて、3人で行ってそこで議論しました。

そこで何かプレゼンテーションするのかと思ったら、我々3人舞台に座らされて、いきなり Cross-

examination されました。エヴァンズ教授から質問がぼんぼん来ました。そのときに我々3人とも口をそろえて言ったのは、ハーパー政権はアジアに対する関心が足りないということです。本当にそう思っていたから。そうしたら、誰かが聞いていたのかな、カナダの外務省にそれが通じて、僕の発言なるもののメモを送ってきて、あなたの発言は不穏当であるということを言ってきたので、僕が発言したとされていることは非常に不正確である、僕はこういうことを発言したのだという、全部僕が自分で覚えている限りの発言記録を作って送り返した記憶があります。

—— 当時はカナダの大学で日本について研究している学生とか研究者は多かったのですか。

沼田 当時はそんなに多くないですね。

—— アジア太平洋への関心は大学でもそこまでは高くなかったということですか。

沼田 先程話したポール・エヴァンズ教授はいろいろなところで名前が出てくると思うけれども、それからほかにも……、でも、それほど多くはないですね。

—— これはちょうどブッシュ政権の終わりのほうですよ。ヨーロッパ人なんかはアメリカのユニラテラリズム批判をすごく強めていた頃だったのですけれども、当時カナダの中の空気というのはどんな感じでしたか。

沼田 アフガニスタンにどれだけ付き合うべきかという議論はもちろんありました。ただ、ハーパーはかなりアメリカと一緒にやろうという感じで出てきましたから。他方、カナダとアメリカの関係というのは、「softwood lumber」というのがあるけれども、日本語で軟材ですか、木材の問題なんかでいろいろ懸案はあったし、しょっちゅういろいろあるわけですよ。だから、そういう意味でアメリカに対する批判というのは当然あるけれども、僕がいたときの最後の方は、ハーパーはアメリカを大事にして、一緒にやっていくというのを非常に出したということですね。だから、気候変動なんかについてもアメリカと同じようなことを言っていました。

—— 別にそれでカナダのインテリに違和感があるとか、そういう感じはそんなになかったのですか。

沼田 いや、違和感はあったと思います。違和感を持つ人は持っていた。

—— 私、オバマ大統領に変わったときにヨーロッパにいて、(オバマがヨーロッパに) 行ったときの熱狂ぶりが度を過ぎていたのをとてもよく覚えていて。メルケルさんとかは本当にオバマファンで、頬ずりしちゃってみたいな感じで、ああいうふうには好き嫌いを前面に出すことに個人的には結構辟易していました。その辺、カナダ人ってやっぱり近い分どういう距離のとり方をするのかなと。

沼田 カナダとアメリカの関係というのは非常に屈折しています。今回僕はあえて書かなかったけれども、今カナダの駐日大使をしているイアン・バーニーのお父さんでデレック・バーニーという人が60年代に在京大使館にいましたけれども——彼はマルルーニ首相のときに駐米大使をしていました——彼が書いたメモワールの中で、「English-speaking Canadians のアイデンティティは Not being American ということだ」と言っています。French speaking Canadian はフランスを文化的祖国

(patrie) とするというアイデンティティがあるけれども、English-speaking Canadian のアイデンティティはアメリカ人でないことである。やっぱりアメリカと一緒にされては困るという意識が非常にあるわけです。

他方、カナダとアメリカと比べると力は大体 10 対 1 です、いろいろな意味で。国境を接しているアメリカとの関係はすごく深いわけですね。カナダとアメリカの関係を考えるときに横に切って考えないで、縦に見るといい。だから、西のほうは西でつながっている。ブリティッシュ・コロンビアとワシントン州、アルバータとモンタナ州、オンタリオと五大湖地域、ケベックのあたりに行けば、ケベックとニューヨーク州、ケベックとマサチューセッツ、あの辺は非常に親近感があります。その切っても切れない関係があるけれども、それなりにやっぱり love-hate relationship みたいなのが随分あるわけです。今を言えば、トランプ政権のときにカナダに逃げていった人がいるという話もあるけれども。だから、アメリカとの関係というのはいろいろ気を遣っているし、トランプと今のトルドーの関係もいろいろありましたよね。

—— 私が印象に残っているのは、マイケル・ムーア (Michael Moore) というアメリカのすごいマイノリティですけども、メインストリームに反する監督がいますよね。あれでアメリカの医療問題を扱ったドキュメンタリーがあって、カナダに入れば医療はタダなんだよみたいな感じで、カナダに行って病院に行こうみたいなシーンがあって。何かすごく不思議な感じがあって、逆にカナダ人はああいうのを見てどう思うのですかね。自分たちのほうが civilized だとか、そういう意識は。

沼田 それはあると思いますよ。civilized という優越感はあると思う。だから、僕は日本の国内で言っているのは、やっぱりカナダ人とアメリカ人と同じだということをやるとカナダ人は怒りますよということです。

—— それはそうですよね。

■ 両陛下のカナダ・ハワイ訪問

—— よろしければ、次の両陛下のカナダ訪問に。退官後の 2009 年ですけども、大使は両陛下のカナダ・ハワイ御訪問に随行されて、公式スポークスマンを務められました。この両陛下の御外遊についてご印象に残っていることをお聞かせください。

沼田 今の上皇、上皇后との関係を申し上げますと、実は外務報道官のときに月に 1 回御進講していました。天皇陛下と 1 時間、皇后陛下と 1 時間、別々にやっていました。なぜ別々にやっていたかというと、皇后陛下はよく質問される方です。陛下のおられる前で質問というよりは 1 対 1 で聞いた方がいいということだと思います。

というわけで両陛下は存じ上げていたのですけれども、公式スポークスマンをやれと言われて、実はこのときは 6 月に一旦事前の準備というか、予備の出張をして、その上で 7 月に行きました。公式スポークスマンとしての仕事というのは、具体的には、両陛下は実際に新聞記者なんかと会われるわけじゃないから、その代わりに会って話をするということです。実際には、オンレコ・ブリーフィングがカナダで 3 回、ハワイで 2 回、テレビのインタビューはカナダで 4 回、そのうち 1 回はフランス語でやりました。今はフランス語ではできませんけど、その当時は何とかできました。ラジオインタ

ビューはカナダで3回、フランス語で1回、新聞社のインタビューをカナダで9回やっています。

このときに公式スポークスマンとして何を言うべきかを当時の川島侍従長と打ち合わせましたが、まず天皇陛下というのはどういう存在なのかということについては、天皇は自ら権力を行使するのではなく、権力を権威づける (legitimize) 役割を果たしてきた。日本の歴史をずっと振り返ると、そういう役割を果たしてきた。むしろ明治天皇以来の戦前の天皇の役割というのはそんなに長い時期ではなかったということになります。このメッセージについてカナダの国民は、彼らは British Commonwealth の一員で、英国女王は Commonwealth の Head ですから、君主制 (monarchy) に対する親しみというのは感じていた。

もう一つは、両陛下の human face を強調する。要するに両陛下は国民の幸福と安寧のために尽くすことを自らの務めと考えられていると。これを英語では「Selfless devotion to the happiness and well-being of the people」という表現をしました。そして、両陛下の誠実さ、人間的温かみ、思いやりが国民の間に浸透して皇室と国民の距離を縮め、国民の大多数が皇室を支持している。「sincerity」「human warmth」「compassion」ですね。これはカナダのマスコミなんかと話していると、天皇陛下が国民から離れた存在 (cloistered existence) なんじゃないかという向きもあったので、それに対する説明としてこういう表現をしました。

実際に両陛下がほぼ2週間カナダを訪問された。天皇陛下は皇太子だった1959年にカナダを旅行されました。エリザベス女王の戴冠式に出席された後にカナダに旅行されているわけで、そういう意味でセンチメンタルジャーニーという側面もありました。両陛下がさっき写真をお見せしたようにジャン総督に会われて、ジャン総督の歓迎晩さん会で陛下は、「多くの民族と文化を受け入れ、今日の姿をつくり上げていったカナダの努力」に言及されています。

ジャン総督は、そのスピーチの中で、「前世紀に影を投げかけた紛争と不寛容」ということに言及しましたが、これは何かというと、カナダにいた日系人は戦時収容所に収容されたわけです。ほとんどがブリティッシュ・コロンビアにいましたが、収容所からブリティッシュ・コロンビアに戻ったのはたしか1948年です。そういう意味ではかなり苦労したのです。その苦労に対してカナダの政府が不正義を認めて戦時補償に合意したのはマルルーニ首相の時の1988年でした。そういう意味でカナダの日系人というのは戦後苦労してきたわけですが、この両陛下の訪問には、戦後に苦労した日系人と両陛下との出会いを通じて、カナダ国民自身が自分の歴史の一局面と向き合う機会を提供したという意味があったと思います。

最後に、まず写真の方から言いますと、左が2009年7月9日にトロントの小児病院を両陛下が訪問された時のもので、これはみんな重い病気にかかっている子供たちです、明るい顔をしているけれども。そのときに皇后陛下は、子供たちに対して「ゆりかごの歌」を歌われ、病院の院内放送でずっと流されて皆感動しました。

それから、右の方は、最後、ブリティッシュ・コロンビア州議会前。これはバンクーバー・アイランドのビクトリアの州議会の前で、階段を下りてこられたときに、ここに3000人集まっていました。日の丸の旗を振りながら。こうやって両陛下が今にも生け垣を踏み越えそうに近づかれて礼をしておられた。

こういうことを通じて、最後に僕が『バンクーバー・サン』の記者からインタビューを受けたときの言葉がここに書いてありますけれども、「Sadaaki Numata, former Japanese ambassador to Canada and a spokesman for the imperial family, summed it all up neatly. “It has been a trip of fond memories and close human ties and this mutual expression of goodwill, friendship, and affection will be something we can build on for the future”」という総括をしました。

カナダについては以上です。

—— ありがとうございます。両陛下のカナダ訪問に関して御質問をお願いします。

—— これはいわゆる狭い意味の外交ではなく国際親善ということですが、このカナダ訪問に関しては外務省の北米一課も関わっているのですか。

沼田 北米一課はすごく関わっていました。大体北米一課の仕事ですね。

実は僕にスポークスマンをやってくれと言ってきたのも北米一課長、今のニューヨーク総領事の山野内勘二君です。山野内君は、実は僕が安保課長のときに入省してきました。安保課で官補さんとして働いていた。

—— 大使は北米一課の課長ではなくて首席事務官の頃に昭和天皇の訪米にも関わっていますけれども、昭和の時代の天皇の外国訪問というのと平成の時代というのはどのような違いがありましたか。

沼田 すごく違いましたね。事務官としてやっていたのと大使としてやっていたのとの違いももちろんあります。昭和天皇の御訪米のときは藤井北米一課長がやっておられたけれども、大変緊張感がありました。ある意味では昭和天皇とは、さっきのカナダのメディアの表現を使えば「cloistered existence」だったと思います。それに対して平成天皇、今の上皇はまさに国民と触れようとするのを非常にやってこられて、それが目に見えている感じだから、その違いというのは大いに感じました。

—— 実務面での不安はこのときはなかったですか？

沼田 いや、ないわけじゃないですけどね。僕は心臓が強いようでも緊張はしますけれども、でも、さっき申し上げたようなメッセージというのは——僕自身、報道官のときに両陛下と接触する機会はあったので、ある程度感じていましたから——自然な形で伝えることができたということがあります。

—— ちなみに、最後に少し出た報道官が御進講するというのは、報道官の職務の一つとして大使の前後の方もやられていたのですか。

沼田 僕の代まで報道官がやっていました。僕の次からは総合外交政策局長になりました。

—— このときに両陛下はハワイにも行かれて、ハワイでは国立太平洋記念墓地というところで献花をされているということですが、戦争に対する両陛下の思いはどのようなものなのでしょうか。

沼田 戦争に対する両陛下の思いについては、カナダで私がメディアに対して言っていたメッセージの中で、当時の陛下にとって1年に4日重要な日があるということを言いました。1年に4日というのは、まず第1に6月23日、沖縄戦が終わった日ですね。2つ目が8月6日、広島原爆の日。それから、8月9日、長崎原爆。それから終戦記念日、8月15日。この4つは両陛下にとって非常に大事な日であって、特に陛下にとって大事な日。この4つの日には両陛下は犠牲者をしのんで平和を祈っておられる、そういう意味で両陛下は非常に平和にコミットしておられるというコンテキストで言いました。ハワイでも同じことを言いました。

■ 退官—外交官という仕事—

—— では次の質問で、退官後のことについてお伺いしたいと思います。2007年3月に大使はカナダ大使を終えられて外務省を退官されたわけですが、このときどのような感慨を抱かれましたか。

沼田 カナダの続きになるのですけれども、退官時の感慨。

まず、カナダ在勤2年間を終わって、さっきハーパーのピンポイント・アプローチ、それに対するフルキャンパス・アプローチということを申し上げましたけれども、2年間やって、少なくともカナダの要路の日本に対する関心を喚起することについてはある程度の役割を果たすことはできたと思います。

私は、オタワを離任するに当たって離任レセプションを2007年2月23日にナショナル・ギャラリーというところでやりました。そのときの挨拶の一部がここに書いてありますけれども、

“I can leave Canada reasonably satisfied that we have done the first sketch of what our partnership may be like in the coming years. We do face a big canvass on which to chart the future of our relationship, and there is much more work to be done. Thus I am also satisfied that I am leaving enough work for my successor to do.”

という挨拶をしました。もう全部やっちゃったというわけにはいきませんが、ちゃんと後任のお仕事も残しましたということを言いました。それがカナダを去るに当たっての感慨です。

42年間を振り返ってみて感じたのは、外交官という仕事の中でコミュニケーション能力というのは非常に大事であるということです。僕自身の特性は、在外における各国関係者とのコミュニケーション、社交などを通じる人脈の開拓などの面で発揮したかと思うので、そのためにはやっぱり語学。僕の場合には英語が圧倒的に主だった。カナダではある程度フランス語もやりましたし、ジャカルタではちょっぴりインドネシア語もやりましたけれども、英語が重要な武器だった。

そういう意味で、退官したときから既にそう思っているのですけれども、最近の外務省を見ると、事務官僚としての資質というのを重視して、いわゆる外交官として外国の人たちとコミュニケーションして人心を掌握していく語学力とか社交の心得等がもしかすると不足しているのではないかということ、離任の感想として書きました。

—— 事務官僚としての素質が重視されていて外交官としての能力があまり重視されていない傾向があるということだったのですけれども……。

沼田 かもしれない。

—— これは日本だけの傾向でしょうか。それとも、地域とか、あるいは世界的にその他の国の外交官を見ても感じられることですか。

沼田 国によりますね。たとえばわたしの現役の頃のオランダというのは、外交官も在外を一生懸命

やる人と本省で専ら事務をやる人に分けていたみたいですね。

—— 分けちゃうんですね。

沼田 分けていたみたいですね。アメリカの場合には、國務省の人の質が云々ということはあるけれども、イギリスの外交官は日本語をかなりきちっとやりますよね。他方、ロシアとか中国は日本語ばかりやりますよね、日本の専門家は。だから、それは国によっても随分違いますね。

僕はなぜこれを言っているかという、具体的な個人と結びつけられちゃうと困るのだけれども、在外の経験が非常に少ないが本省のトップになる人が何人も出ているでしょう。ものすごく優秀だからいいけれども、本当にそれでいいのかしらという感じもします。特に大使になっているいろいろ訓令を受けたりする立場になると、あるいは僕の家内なんかの立場から見ると、やっぱりトップに立つ人は在外での苦労、公邸で使用人などをマネージする苦労とか、そういうのをある程度分かった人にやってもらいたいという気持ちがあるし、そういう意味で、やっぱり事務処理だけじゃないんだという感じがしますね。

さらに言うと、事務官僚としての資質と書きましたが、政治家と付き合う資質が重視されるということがあられるかもしれないなど、いろいろ感じるところはあります。

—— 日本の政治家との付き合い方と外国の政治家との付き合い方では、どういうところに違いが現れてきますか。

沼田 それは共通している面もあるけれども、僕自身の経験からいうと日本の政治家とのお付き合いは難しいですね。

—— 日本の官僚全体に多様性がちょっとなくなっているなということは言えると思うのですが、たとえば外務官僚に受かる人の中で外国の大学を出ている人というのはどれくらいいるのですか。

沼田 外国の大学を既に出ている人は少ないと思います。いないわけではありませんが。

—— 東大、京大が圧倒的という感じですかね。

沼田 半分ぐらいじゃない。もっと少ないかもしれない。僕の場合は東大と京大を合わせて半分くらいでした。一橋、外語なども何人かいました。それから外交官試験をなくしたでしょう。最初の試験は国家公務員試験ですよ。それを受かった人の中から選ぶということになっているから。それで、語学の比重が試験の中で減っていることは確かです。それがやっぱり影響しているのではないかという感じはします。

他方、外国の大学を出ているけれども、国家公務員試験をちゃんと受けて入ってきている人もいますので、いろいろなケースがありますよね。それから、実際にはいろいろな人がいますね。物理の大学院まで行った人もいますし、梅本和義君なんて、東大の数学の修士までやってから外交官試験を受けて入ってきましたからね。そういう人も何人かいるから、そういう意味でのダイバーシティというのはあると思います。

ただ、僕の時代と違うのは、国家公務員試験を受けて外務省に入って、最近では本省で2年間勤務し

てから研修に出るわけです。そうすると、研修に出る頃は 24～25 歳ぐらいになっているでしょう。そうすると、語学力習得の観点からは若干問題が生じるかなという感じもします。

—— そうですね。以前は 20～21 歳の人にもいましたものね。3 年生で受かったりする。

沼田 外国の大学を卒業してからという人はそんなにいないけれども、高校に行っていた人はいますよね。僕もそうだし、四方敬之君もそうだったですね、AFS で。

—— 大使から御覧になられて、今の外務省の人はやっぱり少し大変だなというようなお感じを持ちますか。

沼田 大変でしょうね。何が大変なのかというと、今は少し変わりつつあるのかもしれないけれども、やっぱり聞くのは、みんな官邸のほうを向いて仕事しているというのがありますよね。これは役人の世界全体を通じて言えることだと思うけれども。

それから、対外発信というか、僕はスポークスマン機能というのを重視しているものだから、その観点からいうと、たとえば今この瞬間に僕がロンドンにいて大使をやっていて、BBC からインタビューしたいと難しい問題についてリクエストが来たときに、今はやっぱりすぐには受けられないでしょうね。僕がロンドンにいたときは大使じゃなくて公使だったけれども、どんどん受けちゃって、対処方針を打ち合わせる暇もないから自分の判断でやって、別に火傷せずに済みましたけれども、今だったら本当に火傷するかもしれませんね。

さらに言えば、たとえば尖閣とかいろいろな問題があるけれども、中国が盛んに発信しているのに対して反論しろとって次々に指令が来るでしょう。それをやっぱりこちらも堅い公式論だけを言って反論するのでは効果がないことがある。何の例がいいかな。例えば慰安婦の話について外国プレスに聞かれてどう反応するかというときに、今、訓令に従えば、そもそも本来韓国と合意をしたのを韓国が無視しているのはけしからんという話から始めるようになるけれども、ところが、外国の世論に対するアピールということからいったら、我々だってこういう人道的問題に非常に関心を持っているというところから始めるべきじゃないかと思います。そういう対国内のコミュニケーションと外に対するコミュニケーションの違いというのはあると思いますが、その辺もよく考えて行動する必要があると思います。

■ 退官後

—— では、次に退官後のお話を伺いたと思います。大使は退官後に国際交流基金の日米センター所長に着任されました。この国際交流基金のお仕事で強くご印象に残っていることはございますか。また、その後にお務めになられたフォーリン・プレスセンターの評議員などのことについてもお話しいただければ。

沼田 いくつかのポイントに絞ってお話しします。

日米センターのことは皆さん、何らかの形で御存知だし、お付き合いもあっただろうと思います。外務省の OB で日米センターの所長をやったのは今までのところ僕だけです。たまたまそうなったのですが。

それで、実際に 2007 年 4 月から 2009 年 6 月までやってみて、一言で言えばやりやすかったです。というのは、日米間の知的交流という仕事は、外交官としてやっていた時代の経験とかなり重なる部分があります。たとえば、ロンドンにいたときにもシンポジウムに行って議論したりしていましたから。さっきカナダの例で申し上げたけれども、大使としていろいろなところで講演したりインタビューを受けたりとかいうことをやっていたのとかなり共通している部分があったし、それからアメリカ、イギリス、カナダで学者とかジャーナリスト、いわゆる **public intellectuals** との付き合いをかなりやっていたので、その延長みたいな部分はやりやすかったと思います。

それから、日米センターの重要な仕事として、安倍フェローシップのことは御存知ですね。非常に重要なプログラムだと思います。日米の学者の人たちとの付き合いも大分ありましたが、印象に残っているのは、アメリカ人の **political scientists** に会うと、**political science** でもとにかくデータが大事だと言われて、「ええっ？」と思った。データ、データ、データという世界のようなですね。あと、学者の方と付き合って「**Publish, or Perish**」という言葉を感じました。

もう一つは、日本人の学者で、安倍フェローシップでアメリカへ行った人たちの話を聞くと、アメリカの大学でいろいろな人たちと接触して、**interdisciplinary experience** を持ったのが非常に有意義だったと言われます。要するに、1 つの学部なり学科に閉じ込められないでいろいろな人たちと接触できたというのが非常に重要だったという話をされていたのは印象に残っています。

それから安倍フェローには、「**Abe Fellowship Retreat**」というのがあります。少なくとも僕の時にはあって、2009 年 1 月にフロリダのココア・ビーチ (Cocoa Beach)、これはケープ・カナベラルのすぐ隣ですけれども、ここでちょうど私が行っていたときにロケットを発射していたので見に行きました。これは 2009 年 1 月 18 日～19 日ですから、まさにオバマ政権の発足のときですね。そのときにアメリカ人の学者が **political scientist** とか **sociologist** とか **economist** とかいろいろ集まっていたので、彼らにバラク・オバマを **describe** する **Ten words** は何かと聞きました。さっきの岩間さんのヨーロッパの人たちの話に共通しますけれど。そのとき一番出てきた言葉を 10 並べると、「**charismatic**」「**cool**」「**energizing**」「**visionary**」「**practical**」「**pragmatic (reaching out to adversaries)**」「**populist (in the positive sense of taking to people)**」「**intellectual**」。「**intellectual**」の中で「**It is O.K. to be smart and educated**」というコメントがありました。何となくトランプの批判ではないけれども。それから、「**bridge-building**」「**international**」「**respectful**」といって、やっぱりアメリカのインテリに聞くとこういうことだなという感じを受けました。安倍フェローに集まっている人って、がりがりの保守という人はいませんでした。

あとは、日米センターの所長であると同時に **CULCON** の日本側パネルの委員というのを務めました。それで印象に残っているのが、私の最後の仕事だったのですが、2009 年 6 月 12 日にフルブライト・カルコン合同シンポジウムというのをやりました。フルブライト委員会と **CULCON** とで「日米ソフトパワー：地球的課題への取り組み」というのをやりました。ちょうどソフトパワーとかハードパワーとかスマートパワーとかいう言葉が出る頃で、それについてのシンポジウムをやったのです。これは私がトピックを選んでパネリストを考えて、その土台となる紙を書いて、1 つのパネルの司会もしたのですが、面白かったですね。それに出てきたアメリカ側のパネリスト、リチャード・アーミテージ元 국무副長官、ジェラルド・カーティス (Gerald Curtis) コロンビア大学教授、マイケル・グリーン戦略国際問題研究所 (CSIS) 上級顧問・日本部長、スーザン・ファア (Susan Pharr) ハーバード大学教授、それから、あのときはジョセフ・ナイ (Joseph Nye) ハーバード大学教授がビデオで参加しましたね。日本側のパネリストは、三菱商事元会長の榎原稔さん、当時 **CULCON** の日本側の委員長だった。それから大蔵省元財務官の行天豊雄さん。黒川清東大名誉教授は **GRIPS** のアカデミック・フェローですね。日本国際交流センター理事長の山本正さん。それから、五百旗頭眞

前防衛大学校長。船橋洋一元朝日新聞社主筆。東大総長をやめられたばかりだったかな、小宮山宏三菱総研理事長。それから久保文明東大教授、阿川尚之慶應大学教授、渡辺靖慶慶應大学教授でした。

いろいろな議論がありましたけれども、私がモデレーターを務めたセッションで出てきたポイントとしては、たとえば、アメリカがユニバーサルに自分の価値を世界に広げようとするのに対して、日本では陰徳は美風と言われるけれども、黙っているだけではいけない。それから、パブリック・ディプロマシーだけ切り離して考えてもあまり意味がなくて、国の全体の国益、そしてそのための戦略があり、どういう手段を使うかということを考えて、アクターをどう動員していくかということを整理して考えていく必要がある。それから、日本がソフトパワーのアセットを実際に発揮するに当たり足かせとなるものとして歴史問題があるというようなポイントが出てきました。今でもこれはそのまま当てはまると思うのですが。

私は 2011 年から日本英語交流連盟（The English-Speaking Union of Japan）会長をしています。これはボランティア団体ですけれども、何をやろうとしているかというと、主にグローバルコミュニケーターの育成、パブリック・スピーキング及びパラメンタリー・ディベートの普及ということをやっています。日本英語交流連盟は 1998 年に創立して、大学対抗の英語パラメンタリー・ディベートの大会を 19 回、社会人の大会 15 回、それから 2017 年に大学と社会人の特別合同大会というのを 1 回やりました。2009 年からは、対象を高校生に移して、日本高校生パラメンタリー・ディベート連盟杯（HPDU 杯）というのを共同主催しています。

パラメンタリー・ディベートというのは、皆さんの中にディベートをやられた方はおられますか。僕も東大 ESS でディベートをやりましたが、それはアカデミック・ディベートで、与えられたモーションについて数ヶ月もかけて準備するものでした。このパラメンタリー・ディベートというのは、モーションが与えられるのが試合の直前です。その場で考えなきゃいけない。グローバルなビジネス、機関、組織などで活躍する人材には、明確な自己主張とともに、相手の立場、主張を十分理解した上で、柔軟な発想と論理性を持って自らの立場について説得する能力が求められる。パラメンタリー・ディベートは英国の議会を模した討論ゲームで、与党側・野党側に分かれたチーム 2～3 人がゲームの直前、たとえば 20 分前に与えられた議題について、限られた時間の中で自らの立場を主張し、審判を説得するものです。これをやっていくと、課題発見力とか問題解決、何よりも「Guts」「Speed」「Reflex」、それから「Empathy」が身につく。相手の言っていることを聞いてそれに反論しなきゃいけませんから、相手の立場を考えるという能力もつくということです。

今、日本英語交流連盟が何をやっているかというと、実は日本の高校の学習指導要領が一昨年変わって、その新しい指導要領の下で 2022 年から全国の高校の英語の中でディベートないしディスカッションが必修になるので、教員の人たちはどうやって教えたらいいのかわからないと言って今脅威を感じているわけですよ。それで、教員のためのワークショップを開いて、ディベートをどうやって教えたらいいかの研修をするというようなことをやっています。

それから、我々の連盟の中には役員の中にいろいろな人がいて、たとえばトヨタ自動車の OB とか興銀の OB とか、外交官は僕がいて、それからフォーリン・プレスセンターの理事長をやった赤阪清隆君もいます。彼は元国連事務次長ですよ。そういう人たちが長年の経験に基づいて実践的な英語のワークショップをやっています。

それから、日本語、英語両方で意見記事を掲載する対外発信コラムというのがあって、これは岩間さんにこの前お願いをして、「コロナ禍を乗り切るドイツの政治力」という論考を投稿していただきました。たとえば私は「英語ディベート 説得力を研ぐ」というのを出しました。あとは英語の俳句をつくるというのをウェブサイトの上でやっているし、いろいろな講演会などもやっています。今月はカナダ人の落語というのをオンラインでやりました。

活動としては以上です。

—— ありがとうございます。国際交流基金と日本英語交流連盟会長ですね。お話を聞いていると、大使の天職というか。相手とどういうふうにコミュニケーションするかというのは、大使が外交官のときから考えてこられたことで、今それを次の世代に伝えていかれようとしているのかなと思いました。

沼田 まさにそうですね。90年代ぐらいからそうになりましたね。スポークスマンを始めたあたりから、だんだんそっちの方に傾いてきました。今も何となくその延長をやっているという感じではあります。

—— 思うことはいろいろあるのですが、国際交流基金は私も随分お付き合いしてきて、でも、やっぱりこの30年ぐらい、お金の面ではどんどん減っているわけですよね。なので、何か全体的に皆さん元気がなくなって先細って、活力がなくなっている感じはすごくあって。かつ、安倍フェローシップとか名前に出ているように、こういうのには政治のコミットメントがやっぱり大事だと思うんですよね。でも、そういうのも何か薄くなっているなという感じで。ただ、80年代、90年代のような財力がある国はそんなに世界にないわけで、ないなりにみんな知恵を絞ってやっていくしかないもので、これからこういう国際交流とか日本のパブリック・ディプロマシーを考えていく上でどういうことを心がけるべきなんでしょうか。

沼田 お金をどうつけるかという話はもちろん一番大事ですが、僕が感じるのは、世界中を見るといろいろな知的議論の場があるわけですよね。そこに出ていく日本人が少ない、出て議論できる日本人が少ないという意識が非常にあります。いわゆる *public intellectuals* というのが非常に少ないと思います。だから、いつも *usual suspects* というか、同じような人たちが同じような場に出てくるということがずっと繰り返されている。皆さんがもう何年かたつとどんどん活躍されると期待していますが、やっぱりそういう活動をすることが大事だということをふだんから思って、どんどん出ていくという気風が育たないといけないと思います。

それから、政治家のコミットメントというのは確かに大事ですね。政治家のコミットメントは大事だけれども、さっきちょっと出たフォーリン・プレスセンターの予算、ものすごく削られているわけですよ。赤阪理事長が非常に苦労してやって来ましたがね。外務省からの援助も大分なくなって。だから、対外発信が大事だ、大事だと言いながら、そのための機関に対する財務当局なんかの目が非常に厳しくなっているというのが大変な矛盾じゃないかと思います。それは皆様からもぜひ言ってほしいテーマです。藤井宏昭元国際交流基金理事長なんかも非常にそれを感じられていると思いますけどね。

—— 私なんかも時々お金をいただいて行かせていただくのですが、さっきおっしゃられたこととちょっと重なるのですが、近年、何か振りつけの圧力を感じる時があるんです。やっぱりこういう方向で発信する人が欲しいと。

沼田 それはまさにそうだと思います。振りつけの圧力ね。たとえばジャパン・ハウスというのがちゃんと機能しているのか否かという議論があるでしょう。ジャパン・ハウスが始まる時に僕が思ったのは、こういう方向でこういうのを発信するためにジャパン・ハウスをつくるということでは限界があるだろう、かなりそれぞれの現場での裁量というのを活かさないとうまくいかないのではないかなという感じがするし、そういう意味では何となくレジメンテーションが強くなっているような気がし

ますけどね。

—— そうなんですよ。いろいろな側面があるとは思いますが、たとえば慰安婦問題一つにしてもこのラインで行ってほしいみたいなのがすごくあると、結局人選が難しくなるんですよね。私はもう嫌です、はっきり言って。これでやってくれと言われてしゃべるとするのは。学者って自由人であるということを基本としているので、政府のスポークスマンになるわけではない。そのところの使い方が難しいなという感じは受けますね。

沼田 このテーマとはちょっと変わるのだけれども、僕は4年間NHKの国際放送の番組審議委員をやっていました。これは面白くてね。結構、NHKの国際放送の番組というのはみんな自由奔放に議論します。前にも話しましたが、僕があつた場で言っていたのは、BBCの「arm's length policy」ということでした。BBCというのはイギリスの公共放送だけれども、政府とは腕一本の距離を保つと言っているわけです。だから、中国の国営放送CCTVとは違います。CCTVはプロパガンダばかりやるわけでしょう。BBCの場合にはそれをあえてしない、NHKにもそういう観点が必要だということを言っていました。でも、かなり圧力はあるようですからね。それはやっぱり、要するに反政府的なことを言えというわけじゃないけれども、ある程度幅の広い議論を発信していくということが大事だと思いますね。

そういう意味では、私の手前みそで恐縮ですけども、岩間さんにも寄稿していただいた我々の日本英語交流連盟のウェブサイトは結構いろいろな議論を出していますから。急進左翼の議論はあまりないけど、かなりいろいろな議論をしています。

—— そうですね。あと、英語ディベート・ディスカッションが必修化されたというのは私は知らなかったのですが、2022年ですか。

沼田 もうすぐですよ。

—— ただ、英語だけディベートするというのは多分無理で、国語でも社会でもディベート能力があつて初めて英語でディベートができるようになるはずなので、特に社会科のディベートって私は絶対必要だと思うんですけどね。

沼田 その通りですね。

—— 試験重視だと、やっぱりどうやって正解を書くかという技術ばかり磨くことになってしまうので。私なんか、高校はシドニーで出たので、やっぱり授業の中にディベートが当然自然に入っていて、自分の意見と全く関係なく役割を振られて、あなたは今日はこっちに来てチームでディスカッションしてねと、3対3とか5対5でやってというのは割と普通にやられたのです。やっぱりそれは日本の学校からいくと目からうろこ状態になります。先生方も今までの過去の積み重ねの上に教育をしていらっしゃるから、それを日本の風土に入れていくのはなかなかチャレンジングだと思います。

沼田 まさにそれが最大の問題で、だから、我々が今高校の先生たちにディベートというのはこういうふうに教えたらいいですよとやっているのです。

実は、高校の先生たちにディベートの教え方を今オンラインなんかでも教えている先生の一人は河

野周さんといって、今は横浜の有名な進学校の聖光学院で教えています。彼は浅野学園で教えていて、それから自分で University of Sydney の大学院に留学しました。University of Sydney というのはディベートにすごく強いのですけれども、そこでディベートの勉強をして帰ってきて、そのノウハウを今、広げているわけです。そういうことがもっと必要になるのかなという感じがします。

—— そうですね。なかなか大変だと思いますけれども。でも本当は、そういうものの積み重ねの上にたとえば国会討論もあるんですよ。

沼田 そう。

—— だから、揚げ足取りだけでなくてという。

沼田 僕はしばらく前に福田元総理にお会いして、福田元総理はカナダに天皇陛下が行かれたときの首席随員でしたけれども、「最近君は何している？」と聞かれたので、「ディベートの普及をやっています」と答えたら、「国会議員たちに教えてくれよ」と言われました。

—— 本当ですね。でも、他方でイギリスもちょっと瓦解している面がありますので、どこの国も安泰ということは決してないので、頑張らないといけません。

■ 日米関係の歴史的展開

—— では、いよいよ最後の質問ということで、日米関係の歴史的な展開について大使のお話をお伺いしたいと思います。

大使は、沖縄返還直後の 1972 年に最初に北米一課に着任されて、2004 年 12 月に沖縄担当大使を離任されるまで、30 年以上にわたって日米関係を内側から支えてこられました。この間「日米同盟」という呼び方が定着したように、日米関係というのは特に安全保障面において大きく変化したと思います。御在職中の日米関係の変容について、大使はどのように総括されますか。

沼田 これはなかなか難しい質問で、どう答えたらいいかなと思っていろいろ考えました。

これは大分前にお話ししたと思いますけれども、1979 年 5 月 2 日の大平総理とジミー・カーター大統領との会談、これは私が通訳をしていて、非常に和気あいあいとした会談だったということを申し上げました。そのときにも申し上げたと思いますが、会談の中でジミー・カーターから日米関係はもっと平等な関係になっていいんじゃないかということを言われたのに対して、大平総理の答えがここにあります。

日米関係は次第に上下の関係から水平な関係に移っているけれども、いまだ完全に平等であるとは言えなくて、日本の国民が自分の力につき十分に認識をしていないくらいはある、自分としても国民が自分自身の強みと責任を認識し、世界の様々な問題に影響を与えるべきであるということを正當に認識するよう努力しているが、必ずしも米国の期待に沿うに至っていない。

こう言われたことがいまだに印象に残っています。このような観点から見るとどうかなと考えてみ

ました。

この表ですが、要するに大平総理の言われた点で、日米関係を上下関係として見るとどうなのかということ、日本が広く世界に対して持っている力とか責任というものを日本人がどれだけ自覚しているかという、その2つの論点があると思いますが、それについて、これは非常に乱暴にまとめてみたのです。

	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s	2010s～
米国	強い 保護者	強い 保護者	強い？ 保護者？	それほど強くない？ ・冷戦終焉	制約された力 ・湾岸戦争 ・北朝鮮	制約された力 ・9・11 ・アフガニスタン ・イラク戦争	制約された力 ・テロ ・アフガン ・北朝鮮 ・中国 ・America First ・Global leadership 低下
日本	弱い 被保護者 ・甘え ・対米従属への反感 ・自主独立志向	弱い 被保護者 ・ Fear of Entrapment (ベトナム)	経済力 up 被保護者 ・ Fear of Abandonment	経済力強い 経済摩擦 ・「同盟」 ・ Burden-sharing	バブル崩壊 経済摩擦激化 ・ Too little, too late. ・ 防衛協力ガイドライン（北朝鮮等）	経済摩擦の比重 下がる ・ 沖縄 ・ 米抑止力？ ・ 北朝鮮 ・ 中国	同左プラス ・ Free and Open Indo-Pacific 及び ・ Global issues (Terrorism、Climate change、Protectionism 等) に関する日本のリーダーシップ

1950年代から2010年、2020年——トランプまでかな——で見ると、ごく大雑把に言えば、1950年代は上下関係ではアメリカが上ですね。アメリカが強くて保護者であった。日本は弱くて被保護者で、その関係から生じるものとして、日本のアメリカに対する甘え、対米従属への反感、他方、自主独立の志向というようなことがある。

1960年代は、1960年に安保改定があったわけですがけれども、アメリカが強くてまだ保護者で、上ですね。日本は下で弱い、日本は下である。それとともに、安保にともなってアメリカの戦争に巻き込まれるのではないかという **Fear of Entrapment** というのがあって、実際にベトナム戦争でそうした不安が強まった。

1970年代もアメリカは強いけれども、本当にまだ強いのか、ニクソン・ドクトリンなんかもあって正直言ってどうなのかな、まだ保護者だけれども、本当に強い保護者なのかどうか、ややクエスチョンマークがある。日本のほうは経済力がだんだん上がってきた、被保護者だけれども、経済力が上がってきた。他方、「ニクソン・ショック」とも言われますけれども、もしかしてアメリカに棄てられるのではないかという **Fear of Abandonment** というのもあった。

1980年代になると、アメリカもそれほど強くないという話が出てきて、冷戦の終焉。僕はちょうどワシントンに在勤していた頃ですがけれども、80年代の初めぐらいに、いわゆる **Persian Gulf** のことでアメリカは世界を全部見ていられないとか、イランでの人質事件とかいろいろありました。日本は経済力がだんだん強まって、それとともに経済摩擦というのも増えてきた。他方、日米関係はまさに1981年の鈴木総理訪米のときの同盟問題がありますけれども、「同盟」という概念がかなり出てきて、それから日米の安全保障関係では **Burden-sharing** というのが大きなテーマになってきて、私

がワシントンにいたときの課題としてもそれが非常にあった。最初はコストシェアリングの話でしたが、そのうちに防衛力、防衛協力の話になってきた。

それから 1990 年代は、湾岸戦争があって、アメリカの力もかなり制約されてきた。それから、北朝鮮の脅威も出てきた。日本はバブルが崩壊した。同時に、アメリカとの経済摩擦も相当激化した。湾岸戦争について、日本は「too little, too late」と言われた。他方、1995 年ですか、クリントン大統領と橋本総理の日米安保についての宣言があって、防衛協力のガイドラインというのも進んだし、北朝鮮の脅威というのが前面に出てきて、それにどう対処するかという問題が焦点になった。

2000 年代に入ると、9・11 事件をきっかけとしてアフガニスタン戦争があって、アメリカの力がますます制約されていって、イラク戦争もやったけれども、アメリカはそれで苦勞してきた。他方、日米関係について見ると、経済摩擦の比重は下がってきたけれども、沖縄の基地問題はまだ残っているし、アメリカの抑止力は本当に頼りになるのという議論もかなりあるし、北朝鮮の脅威というのはリアルなものとしてあり、それから中国の存在というのが大分出てきた。

2010 年代から今に至るまでアメリカの力はかなり制約されてきて、テロの脅威、アフガンもまだいろいろあるし、北朝鮮の脅威もまだあるし、中国の脅威がだんだん大きくなってきている。それに対してとにかくトランプ大統領は「America First」と言ったけれども、アメリカの Global leadership は低下してきている。日本としてみれば、2000 年代の経済摩擦の比重が下がってきたということはあるが、北朝鮮・中国の問題は続いているし、さらに今は Free and Open Indo-Pacific ということを進めるということとともに、グローバルな 이슈、テロリズムとか気候変動とか Protectionism に関して日本はリーダーシップをとっていけるのか、責任を自覚して力を発揮できるのか否かということが大きな問題になっている。

そういう意味では大平総理が 1979 年に言われたことはいまだに妥当していると思いますが、本当に平等か否か、日米関係の上下関係というのは大分変わってきている感じがします。

以上です。これをどうまとめたらいいか、四苦八苦しました。とりあえず考えたのはこういうことです。

—— ありがとうございます。70 年にわたる日米関係の展開を大使の実体験に基づきながら俯瞰的に御説明いただきました。

—— 日本の存在感の低下というのでしょうか、日米関係もアメリカにとっては one of them になっていっているということが 2000 年代によく言われていた気がします。最近は少し様子が変わっているのかなとも思いますが、冷戦後、日本がバブルの崩壊後に国際社会で少しずつ存在感を薄めていった。そうした中で、アメリカの中での日本の存在感も薄まってきたのかどうか、大使はどういうお考えをお持ちか伺えればと思います。

沼田 私は、現役のときはかなりそういう感じを持っていたのですけれども、その後、安倍総理のときにかなり回復したのではないかと思います。

—— やっぱそういう感覚ですか。

沼田 やっぱそう感じますね。安倍総理についてはいろいろ功罪もあると思いますが、この面ではかなり回復したという感じがしますね。オバマ、トランプとうまくやられたということもあるけれども、やっぱり戦後 70 年のとき議会で演説されたというのもあるし、それからオバマの広島訪

問と安倍総理のパールハーバー訪問が実現したとかね。そういう意味では、私は日米関係の本当に懸案だなと思っていたことがかなり、完全に解決しないまでも進んだということはあると思う。そういう意味では、私は 2000 年代の初め頃に心配していたよりは、今言われた観点からいえば状況はよくなったと思いますけれども、これからどうなるかというのはよく分からない。

—— そうですね。岐路の一つになるかもしれませんね。

沼田 しかし、トランプを相手にするのは大変ですよ。大変なのをよくやられたという感じがするけれども。

—— ざっくり分けて冷戦期とその後とで日米関係に関わっていらして、すごく変わったことってありましたか。

沼田 冷戦が終わってから後ですよ、日米防衛協力ガイドラインができたのは。

—— 1978 年ですね、ガイドラインは。

沼田 いや、元のガイドラインはあったけれども、97 年のガイドライン、中身のあるものができたのは冷戦が終わってからでしょう。

—— そうですね。

沼田 それが一つの大きな違いだと思います。それはテポドンのおかげもあるけれども、そういう意味での日本人の危機意識が高まったというのは。

もう一つは、日米同盟の位置づけというのが、冷戦のときに東西の陣営が分かれていて、その中での日米同盟というものだったのが、冷戦が終わってからの日米同盟の位置づけというのは、アジアについて言えばアジア太平洋における public good であるという意識が大分高まってきたということがあるし、それは Free and Open Indo-Pacific にも通じることだと思います。そういう意味では影響があるのかなという感じがします。変わってきているのかなという感じがします。

—— リチャード・サミュエルズ (Richard Samuels) なんかは、いわゆる戦後の日本の軽武装、吉田路線ですかね、ああいうのをある種日本のグランド・ストラテジーだったというような言い方もするかと思うのですが、その辺はどう思われますか、最前線におられて。

沼田 かなり長い間そうだったのでしょ。リチャード・サミュエルズの本は大分昔に読んだけど、あれは吉田さんのグランド・ストラテジーだったのかな。でも、大分変わってきていますよね。安倍さんのところで大分変わってきているでしょう。

—— やっぱそれをできるような国際関係だったのだろと思うんですよ。ソ連にしろ、中国にしろ、こちらは最前線ではなかったですし、領土問題もそれなりに眠っている状況だったので、それに比べると中国の在り方がこの 10 年、20 年でものすごく変わってきたのだと思うんですけれども。

ですから、そういう意味で冷戦期とは全然違って、米中対立はこれからどうなっていくのか全く分

からないですけれども、その中で日本のグランド・ストラテジーって何でしょうか。

沼田 今お話ししながらちょっと考えましたが、冷戦が続いている間と冷戦が終わった後で日本の国内でかなり大きな変化があったと思います。この前亡くなった劇作家の山崎正和さんがだいぶ前に「Internal Berlin Wall」、国内のベルリンの壁ということを言われていましたね。

僕は前に過去の問題との関係で、たとえば陛下の戦争責任とかそういうこととの関係で申し上げたことがあるかもしれないけれども、やっぱり国内の左右分裂、左右の対立というのはかなり大きな要素だったですね。だから、冷戦があって国内の左右の対立が非常に厳しい中で私は安保課長をやっていて、今日の防衛協力のようなものができるとは考えられなかったわけです。それができるようになったのは、国内の Berlin Wall がなくなって、いわゆる保守・革新、「革新」という言葉はもうほとんどなくなって、かなりみんなセンターに寄ってきたということがあるがゆえに、こういうことが可能になったという感じがします。直面する脅威というのは北朝鮮であるかもしれないし、テロの脅威もあるし、中国ということもあるかもしれないし、あと global warming とかいろいろな問題がありますけれども、もっと非常に多面的なものになってきていて、そうしたなかで、日本がリーダーシップをどうやってとっていけるかというのがこれから問われることだという感じがしますね。

—— 先ほどのお話に関してですけれども、先ほど挙げておられた大平総理の演説の中で……。

沼田 これは会談の中身です。

—— つまり、日本国内の認識がまだ十分ではないということは、これは非常に私も資料を読んでいて印象的だった部分ですけれども、この辺り、先ほどの大使のお話からすると、自分の力というか責任に対する国内の意識はある程度改善されたというふうにお考えですか。

沼田 79 年に比べれば改善したと思います。Global issues、Terrorism、Climate change、Protectionism と並べましたけれども、たとえば Protectionism については TPP、日本が相当イニシアティブをとって実現したというのはいいと思いますね。Climate change はまだとてもそう言えませんよね。Terrorism についてもどうかな。Terrorism について言えば、まさにファイブ・アイズじゃないけれども、インテリジェンスなんかの面ではまだまだやらなきゃいけないことがあるかもしれないしね。そういう意味では、79 年に比べれば進歩したけれども、まだまだ道のりはあると思いますね。

—— 先ほどの質問の中に、日本のプレゼンスというか存在感が一時縮小してというふうなことがあって、第 2 次安倍政権の下で多少回復してということでしたけれども、何となく 70 年代、80 年代の資料を読んでいますと、今に比べると大分日本はいい意味でも悪い意味でも注目されていたんだなというのを感じることがあります。そうすると、今の方が楽と言うと言い過ぎなんですから、日本の役割というのは当時と比べるとどうなのでしょう。多少期待値は減っているのでしょうか。

沼田 やっぱり 70 年代、80 年代は経済摩擦というのがすごく影響があったと思います。僕は経済摩擦を GATT 課長のときに扱いましたけれど、全体の雰囲気が非常に悪かったということはあるんじゃないですかね。それに比べると、最近は、いろいろ言われるけれども、みんなにぴんとくる経済の問題というのはそれほどぎすぎすしていないということの影響というのはあると思います。

—— 当時は、日本自身が問題であるという雰囲気でしたからね。日本が問題を解決するというよりは。

沼田 Japan problem ね。

—— 日本が問題なんだという扱いをされて、どうやって問題でなくなればいいのかという。日本をどうしようかという感じでしたよね。それに比べると、今のほうが意味やりやすいというか、普通の課題を出されて取り組むという感じでしたけれども、あの当時はやっぱり「おまえが変われ」と言われ続けたという感じでしたよね、本当に。

沼田 当時僕が言ったのは、アメリカの言っていることは、人の家の家具の並べ方まで全部入れ替えるというような話だと。構造協議とかね。「Structural Impediments Initiative」だったっけ、あのよな話というのはそういう感じがしました。

—— いろいろつらかったというか、あの結果として今のイオン・モールみたいなものがあるわけじゃないですか。あれで潰れちゃったその辺の小さいお店っていっぱいあるわけですよ。本当にあれでよかったのかなという気持ちはありますよね、どこかに。仕方がなかったのかなとは思いますが、日本はよきにつけあしきにつけ、あのときの規制改革で今の田舎のランドスケープがあり、また中間所得層も下のほうが結構崩されたのも、やっぱりあの頃やったことの影響はあると思うんですよ。なので、本当にあれでよかったのかなという感じはありますが、多分外から攻めていた人々にしたら「Japan problem solved」なのでしょうね、やっぱり。でも、日本のナショナル・インタレストが本当に守れたのかなという思いはちょっとありますよね。

沼田 ちなみに、これから取り組まなきゃいけないグローバル・イシューの中にコロナを忘れましたね。Pandemics がありますね。

—— 日米同盟を「負担分担」という観点から考えたときに、大使は今の日米間の負担の在り方というものに対してどういう認識を持たれているのかなというのを伺いたいです。

沼田 コストシェアリングがどこまでできるかというのも、相当ぎりぎりまで来ていると思います。今、日米の間でアメリカの抑止力の構造というのをどこまで突っ込んで議論しているのか分かりませんが、北朝鮮との関係で言えばイージスの議論があるでしょう。結局船を2隻造るのかな。それでどこまでいけるかという話とか、いわゆるこういう表現を使っちゃいけないけど「敵基地攻撃能力」をどうするかという話もあるしね。そういうのもある程度考えていかなきゃいけないという感じがするし、そういう観点からいけば、まだ取り組まなきゃいけない課題というのは残っていると思います。

それから、INF との関連で——ちょうど合六さんも書かれている本（『新たなミサイル軍拡競争と日本の防衛 INF 条約後の安全保障』並木書店、2020 年）の中で、INF を日本に配置するかどうかという話も出てくるでしょう、たしか。あの種の問題がありますよね。だから、それはまだこれから出てくる問題としていろいろあるでしょう。

—— 国民世論の脅威認識というのは、先ほどのテポドンもあって、冷戦時代に比べて大きく変化したと思うのですが、それに基づいて日米同盟の中で日本が積極的に、お金ということではなく

て軍事的な貢献を進めていかないといけないという認識の変化はあると思いますか。

沼田 まだ。

—— まだまだという感じですか。

沼田 まだまだでしょうね。ないとは言えないけれども、まだまだこれから議論していきなさいいけない話です。

—— 印象としては、アメリカに言われたから仕方なくみたいな感じだと、さっきおっしゃった大平・カーターの中での日本の役割というのを本質的には実現できないのかなという印象を受けたので、お聞きしました。

沼田 そうでしょうね。だからこそ、今この話をするのに何をきっかけとしたらいいかなと思って、結局 79 年のこの大平発言に戻るわけですよ。それはやっぱり、この発言がまだ今でも生きている部分がかなりあると思いました。

—— 大使がお作りになったこの表の中で、60 年代と 70 年代に **Fear of Entrapment** と **Fear of Abandonment** とあるのですが、この概念は大使が勤務されていて感じられたものなのか、それとも学術的な勉強の中で知った概念なのかということを伺えればと思います。それと、この 2 つの **Fear** は日本の中で薄まった、あるいは消えたのか、それともそのまま残っているのか、どのようにお考えですか。

沼田 いい質問ですね。**Fear of Entrapment** のほうは、60 年安保のとき僕は高校生で、安保改定反対というデモに行きましたが、その当時から感じていたわけです。**Fear of Abandonment** のほうは、これもニクソン・ショックの当時、北米一課にいていろいろ議論していて、そういう感じがあるなと思ったし、90 年代でもありましたよね。クリントンが中国に行って長くいたけど日本に来なかったとか、そういう議論がありましたでしょう。あの辺りでも出てくるし、時々出てきますね。

Fear of Entrapment、**Fear of Abandonment** が今でもあるのか否か。潜在的にはあるような気もするけれども、アメリカも今は外に出ていくことについて積極的な議論はそれほどないようですね。実は、昨日これを作りながら、今どうなのかなと僕も考えていました。

—— でも、安保法制のときは、やっぱり **Entrapment** でしたね、完全に。

沼田 **Entrapment** の **Fear** はあるね。世論としては。

—— 対中 **Abandonment** の **Fear** というのも常にありますよね。

沼田 あるね。もしかするとアメリカは乗り換えちゃうかもしれないという **Fear**。

—— 菅義偉総理がいきなり尖閣に安保を適用とか言わざるを得ないというのは、やっぱりこれがあるんでしょうね。

沼田 そうですね。それは少なくとも潜在的にはあるでしょうね。

—— 個人的な関心でお聞きしたいのですが、その国の国力をどうはかるのかはすごく難しい問題ですけれども、たとえば経済力について見ると、どうやら日本が世界の中で相対的にピークだったのは90年代の半ばぐらいで、これも為替の問題とかいろいろあるわけですが、今世紀に入る頃からは緩やかにだんだん下がってきて、GDPで見るとピーク時には世界の20%弱あったのが今は5%強ぐらいで、この数字を今後大きく回復することはまずないことは確実だと思うのです。他方で、冷戦が終結した後、日本はむしろ国際的な役割が増えている。相対的な経済力が下がっているにもかかわらずやることは増えているというのをどういうふうに説明できるのだろうか、考えられるのだろうかということを思っています。大使の外交官生活というのは、前半が冷戦期で、後半が冷戦後という形だと思うのですけれども、日本の国力と国際社会の中で果たす役割については今現在どのようにお考えでしょうか。

沼田 まだまだやることがあるような気はしますけどね。何で僕が、いわゆる対外発信能力向上のためにこんな老人になっても一生懸命やっているかということ、やっぱりもうちょっと影響力を行使できないかなという感じがあるからです。日本は日本の中にソフトパワーをいろいろ持っていますけれども、ソフトパワー・アセットというのをちゃんと使い切れるかどうかという問題があると思います。だから、経済力だけでははかれないものはいろいろあるし、もっともっとそれを使う道があるのではないかという感じがします。

そういう意味では、さっきお話ししたソフトパワーについてのシンポジウムをやったときに、国の全体の国益、そしてそのための戦略、どういう手段を使うかということを考えると、アクターをどう動員していくかということを考えなきゃいけない。その部分がまだ不足しているような気がします。その場合の戦略というのは、ジャパン・ハウスをつくって、慰安婦問題で騒ぐのはけしからんと叫べということではないんだろと思うんです。そういう観点から、もうちょっとつつこんだ議論があつていいという感じがします。

—— どうにも、外に向かっているんだけど、届いてほしいのは官邸の方みたいな話。

沼田 そうかもしれないけど。

—— 逆効果なんだけどな、なんていうことを機会があれば僕もよく言うんですけどね。大使としても、国力がどうこうは別として、やっぱり日本はまだまだやることもあるし、その余地は幾らでもあるというイメージなんですかね。

そう考えると、いろいろな事情があるわけですが、冷戦期とか80年代、90年代ぐらいまでの日本はすごく経済摩擦の解消に追われていたということもあると思いますし、警戒されていた分、積極的に出られなかったという部分があるのかもしれないですけども、今から考えると、経済面を除くと国際的な、世界の中での存在感が本当に今と比べてもなかったのかなんていうことを、ちょっと感想めいて思ったりもするのですけれども。

沼田 そうですね。

—— 2点お伺いしたいと思います。

1点目は、日米同盟の担い手ということをお伺いしたいと思うのです。大使がワシントンにおられた時代とか安保課長をやられていた時代、ジュネーブにおられた時代のことですけれども、日米同盟のグリップを握っているのはやっぱり外務省であったと思うのです。その中では、当時の防衛庁・自衛隊というのはまだまだ発言権が小さかったと思いますが、2007年に防衛省になって日米防衛協力課というのがつくられたり、最近ではNSCがつくられていくということになって、日米同盟の担い手が少しずつ変わってきたというところがあると思うのです。そのこと自体は恐らく批判されることではないと思うのですが、その中でこれから外務省が担っていく役割はどうあるべきだとお考えになりますか。

沼田 難しい質問ですね。今言われたこと全体はそのとおりだと思います。外務省だけで担えるわけじゃないので。自衛隊を持っているのは防衛省だから、防衛省の中でそういう国際的な意識が高まって、それを実際に政策にできるような、実践できるような人材が育つということも非常に重要だし、たとえば個人名を出せば西正典前次官なんかは適材だと思いますけどね。

さらにNSCもまさに首脳レベルの判断が必要な話だから、そういう観点からNSCという組織ができたということは非常にいいことだと思います。ただ、外務省の担ってきた外交的な判断はやっぱり非常に必要なので、仮に国家安全保障局がその一番の実務的な担い手であるとする、その国家安全保障局の事務方のトップに立つ人がいわゆる公安・警察の専門家だけでいいのかなという感じは実際にはします。非常に差し障りのある発言であることは百も承知の上で申し上げます。

—— 外交的な感覚というか、外交的な……。

沼田 経験になりますね。

—— 沖縄のことについて最後に伺いたいと思います。

大使が最初に米一に行かれたのは沖縄返還の直後で、2000年代には沖縄担当大使もされました。これから2020年代にかけて日米同盟の在り方がより問われていくと思いますが、その中で特に沖縄米軍基地の問題というのは今後どのようにしていくのがよいとお考えになりますか。

沼田 難しいですけどね。普天間の機能をどうするか。実際にはかなり動かすことになっているわけですね。海兵隊のかかなりの部分をグアムに持っていくことになっていて、それが普天間の話がこじれたままにいるから進まないということだと。嘉手納というのはそうはいかないと思います。嘉手納の機能というのはそう簡単に移せないことだと思うから、あそこは必要だとすれば、常識的な答えになりますけれども、ずっとやることになっている海兵隊のかかなりの機能をグアムに持っていく話を実現できるように当面やっていくほかないのではないかと思います。

ただ、その場合に、沖縄の問題というのは、前に申し上げたかもしれないけれども、これは日米だけの問題じゃなくて、日・米・沖縄の3者間の問題ですよ。この3者間というときに沖縄と本土の関係というのが非常に重要な要素になるので、そこに本当に気を配ってやっていくような配慮というのが中央政府に非常に必要になると思います。そういう意味では、まだまだ課題が残っていると思います。

—— ありがとうございます。

—— 沼田大使、最後におっしゃっておきたいことがありましたら。もう随分長い間お付き合いいただいていますので。

沼田 このオーラルヒストリーは僕にとっても非常に貴重な機会でした。というのは、これだけコンプリヘンシブに自分のやってきたことを振り返ったことはないし、家の中のボール箱も大分整理されましたから。一部見つからないものがあって苦労しましたが、そういう意味では非常に重要な機会を、価値ある機会を提供していただいてありがとうございました。

—— 我々もいろいろ伺うことができて本当に楽しかったです。

沼田 私も楽しかったです。皆さんに協力していただいてありがとうございます。

—— いろいろ考えさせられることが多くて、また外務省の中の動きに関しても、実際に直に伺う機会は我々なかなかありませんので、大変貴重な機会になったと思います。また今後とも折につけて御助言いただければと思っております。

沼田 どうも長時間というか、今日だけではなくて、長い間本当に皆さんありがとうございました。

—了—

あとがき

外務省を退官して丁度 12 年経った 2019 年春、岩間陽子教授からこのオーラルヒストリープロジェクトの話をうかがって、42 年間の外務省でのキャリアを振り返ってみる良い機会だと思いお引き受けした。記憶の糸をたどるべく、国内および外国での合計 22 回の引っ越しの間に溜まった書類を詰めた段ボール箱と格闘しながら、1970 年代後半のインドネシア時代からつけていた執務ノートを引っ張りだして解読するのにかなりの時間と労力をかけることとなった。11 回（後半 5 回はコロナ禍の下で Zoom 使用）にわたるインタビューに辛抱強くお付き合いいただいた岩間教授をはじめとする気鋭の学者チームの方々の忍耐と熱意に心から感謝する。

思えば 60 年前に氷川丸で AFS 留学生としてアメリカに行き、米国のエスタブリッシュメントの象徴のようなプレップスクール（全寮制男子私立学校）で受験中心の都立高校とのカルチュラル・ギャップを痛感してから今まで、私の関心は主として対外コミュニケーションに向けられてきた。オックスフォード大学への留学、在英大使館勤務を経て、1972 年からほぼ 10 年間歴代総理大臣の英語通訳を務め、首脳レベルでのコミュニケーションに直接に接することとなった。また、在米大使館一等書記官（安保防衛担当）、経済局国際機関第一課長、北米局北米第一課長、安全保障課長としての実務を通じて、主としてバイの場で利害の異なる相手を説得するという試練を経験した。この間、総理、外務大臣等要人の会談における発言要領の作成から通訳、記録に当たったり、公の場におけるスピーチを起案したりすることが多かった。ここまでは、他の人の発信を助ける役割を果たしていた。

自分自身が発信する経験を積み始めたのは、1980 年代末ジュネーブの軍縮代表部に赴任して、化学兵器禁止条約の起草交渉などマルチの場で発言したり議長を務めたりする時だった。そして、1990 年代は、外務副報道官、在英大使館次席公使、そして外務報道官として外国プレスを相手としてスポークスマンの役割を果たすことが多かった。BBC、CNN などのインタビューで厳しい質問を浴びて、日本の国会答弁風の「守り」に徹した答え方では、メッセージの発信に役立たないことを痛感した。そしてロンドンでの公使時代、パキスタンおよびカナダでの大使時代は、なるべく多くの機会を捉えて大学、シンクタンクでの講演、セミナーなどを通じて日本の立場を発信するように務めた。また、退官後の 2009 年 7 月に、天皇、皇后両陛下の公式スポークスマンとしてカナダご訪問に随行して、日本の政策の広報ではなく、両陛下の「人間としての顔」を伝えることに努めてカナダの人たちの共感を得ることができたことは貴重な経験であった。

数々の経験の中で、自分にとって厳しい試練だったと感じた事例は 3 つある。それはい

ずれも戦争と平和に関連するものだった。

その一つは、旧英軍捕虜をめぐる日英戦後和解の問題だった。1994 年春にロンドンに赴任する前に、慰安婦問題について外国プレスにブリーフをして厳しい質問を浴びるなどアジアでの歴史認識問題は経験していた。しかし、1995 年 8 月 15 日の VJ Day (対日戦勝 50 周年記念日)を控えて、年の初めから旧英軍捕虜の怨念が噴出し、これを如何に乗り切るかは困難な課題だった。藤井宏昭大使の下で、英国外務省とも緊密に連携しつつ、捕虜団体との折衝、メディア対策などに全館をあげて取り組み、8 月 15 日の村山総理談話で日本の過去の行為について「謝罪」するとの問題については一応区切りをつけることができた。その後、旧英軍捕虜の人たちとの心の「和解」という課題に、日英の民間のボランティアの協力も得つつ取り組むこととなった。

二つ目は、2001 年 9 月 11 日の米国における同時多発テロ事件が米国などによるアフガニスタンのタリバンへの軍事攻撃をもたらし、隣国パキスタンのイスラム勢力を刺激して治安状況が悪化する恐れが高まったことだった。この時、パキスタンのイナム・ウル・ハック外務次官は私に対し、『パキスタンが再び「前線国家」(frontline state) となったので、テロとの戦いについて米国と協力することとした。』と述べたが、大使としての私の課題は、パキスタンが置かれているこのような運命的状況について日本国内の理解を深めることにあったと感じた。その後 20 年を経て、今日、タリバンの復権に伴い、我が国は、米国等西側の一員としての立場を維持しつつ、アフガニスタン、パキスタンのような「前線国家」にどのように対処していくのかとの課題に再び直面している。

三つ目は、2004 年 8 月に米海兵隊のヘリコプター CH53D が普天間基地に隣接する沖縄国際大学のキャンパスに墜落したことである。沖縄での私の仕事は、それまでの積極的対外発信とは全く異なり、米軍幹部に対しては対米、対本土の複雑な沖縄県民感情を説明し、沖縄県、関係市町村および沖縄のメディアに対しては米軍の存在理由および事件・事故防止のための努力を説明して、舞台裏で黒子としていわば火消しに努めるというものだった。このヘリコプター墜落事故の時は当時の稲嶺知事が言われていた鬱積した県民感情のマグマの噴出に近い状況になった。この経験を通じて、日米同盟の総論について両国首脳レベルでいろいろ理解と認識の一致があると言われているが、実際に同盟関係の一番下支えとなる沖縄の基地問題の実態と首脳レベルの理解とか認識との間にはかなりギャップがあると感じた。

退官後、国際交流基金日米センター所長として、また、カルコン（日米教育文化委員会）の日本側パネルの一員として日米間の知的・文化交流に関わった。米国、英国、オーストラリア、カナダでそれぞれ学者とかジャーナリスト、いわゆる public intellectuals との付き合い

いをかなりやっていたのでその延長みたいな仕事はやり易く、現役時代の経験を活かすことができた。それと同時に、米英をはじめとして世界を見るといろいろな知的議論の場があるが、そこに出て議論できるような日本人の public intellectuals がまだ非常に少なく、いつも同じような人たちが同じような場に出てくることを痛感した。

私は、在外の勤務国が英国 2 回、米国、オーストラリア、カナダと英語圏が多く、ジュネーブの軍縮代表部もパキスタンも仕事で使ったのは英語だったので、英語を使っただけの対外コミュニケーションに強い関心を寄せてきた。そのこともあって、英国研修の大先輩であり、私が副報道官の時外務報道官だった英正道大使が創設された日本英語交流連盟(The English-Speaking Union of Japan)の会長を 2011 年から務めている。現役の時から、国際語である英語を使って外国の人と「対話」し、「交渉」し、「説得」できる人材を育成する必要性を痛感してきたが、主として高校生など若い人たちを対象とする同連盟の活動を通じて、このような技能を磨く最も効果的な手段である英語パラメンタリー（即興）ディベートの普及に務めている。

40 年を超える外務省生活を振り返って改めて感じるのは、如何に多くの人々に助けられてきたかである。私が 40 年を超えて働いた間の先輩、同僚、国内および国外の友人に心からの謝意を表したい。ロンドンでの駆け出し時代、そしてワシントンでの安保防衛問題をめぐる厳しい状況の下で指導いただいた有馬龍夫元駐独大使からは、仕事のみならず、知的な面でも多くのことを学ばせていただいた。また、私事にわたり恐縮であるが、数年ごとに日本国内と外国を行き来する生活の中で、常に明るく私の生活を支えてくれた妻恭子に深い謝意を捧げたい。

沼田 貞昭

*本冊子は文部科学省科学研究費助成事業・基盤研究(A)「核不拡散体制の成立と安全保障政策の再定義」プロジェクト〔課題番号 17H00972〕により作成した。

*許可なく公開、複製、転載を禁ず。

2022 年 2 月 28 日

政策研究大学院大学（政策研究院）

〒106 - 0032 東京都港区六本木 7-22-1
TEL: 03-6439-6000 FAX: 03-6439-6010